



Under the forest

ダイチの物語第二章

目次

現場の仕事	1
ゆびわ	9
アドバイス	15
ケンカ	22
愛里の部屋で	27
ハートに矢	33
菜っ葉	37
ニワトリ	43
指輪	49
仕事納め	57
ゴム長と鶏肉	65
予約完了	70
相談	77
指切りの約束	83
おんなしにおい	90
においの話	98
とうちゃんの話	106
ロールケーキ	112
動画撮影	120
アレンジメント	127
とうちゃんの寄せ植え	134
ガリガリ君	140
ガムテープ	147
作業ズボンの穴	154
とうとう開いた穴	161
パッチワーク	168
愛里の思惑	175
パピコ	183
ベッドサイド	192
靴下	201
日曜日の朝	207
指輪のお店と休みの現場	213

とうちゃんの作業服	221
参観日	228
下っ端仕事	234
親子遠足	240
日給	247
とうちゃんの夢	253
第二のプロポーズ	259
晩メシ	266
Days	272
ショーさん	278
優しくて温かい	286
明日の準備	293
愛里からの	300
緊急事態発生	305
愛里の相談	311
ビニールの財布	320
もしもの海の話	327
キャンセル	333
安全第一	339
牛乳拭いた雑巾	346
ディスプレイザブル	353
日曜日の午前中	361
ママとの電話	368
タコさんウィナー	374
無謀なこと	381
財布の歴史	390
初めての弁当	397
番号交換	404
愛里から炭	410
誘いの電話	417
バーベキュー	424
かあちゃんたち	431
あんときから	437
未知の世界	442
ゴールデンレトリバー	447
がんばって	453
辛子マヨネーズ	460
かあちゃんの嘘	467
進路の話	475
光合成	483

本音は	491
アメリカの大学事情	498
立ち返る場所	506
IQ ダダ下がり	513
香水	523
ファーストカット	530
シンシンおじちゃんところ	537
写真撮影と吸い殻	545
お祝いとお礼	554
ラッピングとカード	561
ロールケーキ作り	568
赤飯と名前	574
ベロンベロン	580
女という武器	588
プチ疑似体験	597
真夜中の電話	603
代打	611
ズボンのケツの穴	619
空港へ	627
愛里かからの手紙	632
ラーメン屋	639
かあちゃんからの電話	646
いぼ痔	654
ねこまんま	660
現場での事故	666
おかん	674
なんかパラダイス	683
瓶貯金	690
駐妻あるある	697
ちくわカレー	706
ただのシソ	713
Face Time	720
ねえちゃん	727
母性愛	733
生姜焼きの肉	740
ドーナツのクッション	747
フライト便決定	756
小遣い	763
シャトルバス	770
久しぶりだから	777

ラーメン食べたい	784
ラーメンデート	790
革のギョ・・ビーサン	796
好きが溢れたバージョン	802
ショーさんの子育て	808
電車の中で	815
愛里の部屋で	821
森下家の血	828
次の仕事	836
証明証	843
ショーさんの財布	849
それぞれの予約	857
最後の現場	864
シャベル	872
戻る場所	880

現場の仕事

今日から仕事だ

顔洗って 着替えた

とうちゃんがスーパーの裏で働いてたときの長袖の T シャツ

「土方んときは長袖だな」 って貸してくれた

ズボンもとうちゃんがスーパーの裏で働いてたときの作業ズボン

とうちゃんの仕事の汗が染みついた服を受け継いだ恐れ多さを感じんな

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

「おお、でっけえな」

「こんくれえ食ってかねえともたねえからよ」

「そっか、ありがとう」

「あとよ、これ」

スーパーの袋 ウワッ 重てえ

「握りメシ？ メチャでっけえなあ」

「俺が若けえときよ、金ねえから、給料日前なんつったら昼メシ食べなくて」

マジか

「でっけえ握りメシ食いてえなあって、それがこんくれえだよ」

そっか、こんくれえ食いたくなんのか

「塩多くしといたから」

「塩？」

「土方やってっと塩っ気欲しくなっからよ」

そっか、汗かくもんな塩分補充必要だな

「それと」

とうちゃんが冷凍庫からペットボトル出して

「水入れて凍らしてあっから」

「凍らせた？」

「すぐ溶けっから、冷てえもん飲みたくなっからよ」

とうちゃん 土木作業スペシャリストだよ

「とうちゃん、ありがとう、マジありがとう」

「俺はこんくれえっきゃできねえからよ」

とうちゃんのこんくれえバグってっから

握りメシと凍ったペットボトル入ったスーパーの袋持って玄関へ
このゴム長もとうちゃんがスーパーで働いてたとき履いてたやつ
「先んどこに芯入ってっから」って、何か足に落ちててもケガしねえためらしい
「そんでもなあ、この後ろんとこちっと裂けてんだよな」
「ガムテ貼ればいんじゃないかね？」
「そっか、だな、やっぱダイチは頭いいな」
かあちゃんからはさんざん捨てろって言われてたけど、
野っ原から土持ってきたりすんのに使ってたやつ
白だったのがすっかり薄茶になってっけど、
そこにとうちゃんの働いてきた汗と歴史を感じるつつうかさ
「そんじゃ、いっきます」
「ダイチ、ケガだけはな」
「おう、ぜってえ気をつけっから」
「がんばってな」
「うん、いってきます」
首には、焼きそばときも活躍したとうちゃんのタオル
ちょっと緊張してっけど、全身とうちゃんに守られてる気いするから
俺は大丈夫だ

土木作業は単純作業だと思われている 違うな
機械ではできないところを人がやるという、
機械より遥かに秀でた人間にしかねえ能力を使う仕事だ
そんで、単純だと思われることも頭使わねえと仕事が進まねえ
この一輪車、おっちゃんたちはネコネコ呼んでっけど、
これで石積んで運ぶのだって、石の積み方が悪いとバランス崩す
バランスに気を取られてっ少ししか運べなくて作業が進まねえ
それぞれの場所でやってる作業もいい加減にやらせたら混乱するだけだ
それを見て効率考えて采配すんのが現場監督
ここの現場監督は優秀だ・・と思う 他んどこ知んねえけど
今日初めて来た俺でも作業がスムーズに流れてるのがわかるもんな
「にいちゃん！ そこ終わったか」
「おいっす」
「そんじゃ、手前に積んである袋、向こうに運んでくれ」
「おいっす」
俺は調べた
このセメント袋 25kg、昔は 50kg あったそうだ
屈強な男でも数回運んでるうちにフラフラになったらしい
とうちゃんは 50kg のを運んでたってことになる
前に、仕事終わって部屋帰るとそのまんま倒れるように寝てたつった

だろうな、50kg 運び続けてたらさ すげえよ、とうちゃん

昼休憩だ

フーーッ冷てえ水で生き返る

腹ペッコペコだよ とうちゃん、握りメシこんくれえってわかるよ

美味っええええ

「にいちゃんみねがおだな」

ん？ え？ 外国語？

「なめは？」

「なめ？ え？」

「スギさんなまっでっがら、名前なんつうんだっでよ」

「大一っす」

「だいづ」

「や、だいちっす」

「だいづだべ」

まあいいか

「どったじいかぐの？」

フランス語にしか聞こえねえ

「どんな字い書くんだっでよ」

「あ、大根の大に一二の一」

「だいごんでよハハハ」

これはなんかわかった

「とうちゃんが漢字読めなくて、かあちゃんがとうちゃんが読める、
大根の大と、とうちゃんの名前の中から一とってつけたって」

「えっ」

おっちゃんたちが重病宣告されたみてえな顔してっけど 笑うとこなんだけとな

「なすてごごで」

「え、ん？」

「スギさん、俺が通訳すっがらよお」

「つうやぐっでおらもにほんごしゃべっでっらよ」

なんか和やかなおっちゃんたちだな

「にいちゃんなあ、なあってここで働いでんだ？」

「それは・・・好きな子と、将来、なんつうか」

「所帯持ちでえからがあ」

「まあ、まだまだ先なんすけど」

「はああ、ていしたもんだなあ」

まだまだっすよ

「にいちゃん、ゴム長になんかついてっぺした」

「ああ、ここ裂けてんでゴムテ貼って」

「えっ」
「どうちゃんが働いてたときの貸してもらって」
「ほんじゃ、親父さんは・・・」
「どうちゃんも昔こういう仕事してたんすけど、怪我してクビんなって」
「えっ」
「部屋追ん出されてホームレスになっちまって」
「えっ・・・」
「それでも、春まではまた働いてたんすけど、脚立から落っこちて」
「ええええっ」
「骨折して入院して、今は家で」
「あああ、そうなんだあ」
「この握りメシもどうちゃんが作ってくれたんす」
「そっかあ、そりゃ・・・ かあさんは？」
「働いてます」
「だなあ、そりゃ大変だなあ」
「まあ大変ちゃ大変みてえっすね、休みの日も働いたり」
「休みん日いも・・・そりゃはあ」
仕事一筋だもんな
「にいちゃんはいいづつ、あ、何歳だあ？」
「16で今年17っす」
「そっだに若けのにはあ、えれえもんだなあ」
「や、好きな子のためなんで」
「所帯持つためにがんばってんだなあ」
「あ、まあ、おいっす」
「昼メシは握りメシだけが」
「どうちゃんが働いてた頃、金なくて昼メシ食えなかったからつって、
こんくれえの握りメシ食いてえなって思ってたって作ってくれて」
「握りメシだけっきゃ・・・ そうかあ」
「美味えっすよ、食ってみますか？」
「え、まあ、そんじゃ」「んだな」
一口ずつ手で分けておっちゃんたちに渡した
「おっこれは！ 美味え！」「めえな」
「そうすっか？」
「にいちゃん、これ、おっかあ作った卵焼き食え」
「いいんすか？」
メッチャ甘めえのがありがてえ、糖分欲してたな
「つげもんけねが」
「ん？ え？」
「えんぶりがっご」
えんぶりがっご？ なんだ？

「スギさん秋田がら来てえ、秋田のいぶりがっこ食わねえかってよ」

「あ、いただきます」

おお、これは燻したたくわんみてえな？ 美味え

「美味えっす」

「んだが」「そっがあ」

おっちゃんたち、優しいなあ

そんなにとうちゃんの握りメシ美味かったんかな だな

次の日、俺は俺用のでっけえ握りメシ二個と小せえの二個作ってもらった

とうちゃんに頼んだ

「とうちゃんの握りメシ少しあげたらさ、卵焼きとかたくわんくれてさ」

「そりゃ、ありがてえなあ」

「とうちゃんの握りメシ美味えっつってたから、それでくれたんだと思う」

「そっか？」

「もらってばっかも悪りいからさ、とうちゃんの握りメシあげてえんだけど」

「おう、おう、現場で食う握りメシは美味えもんな、作っからよ」

そんで今日の昼休憩

「これ、とうちゃんの握りメシなんすけど、よかったら食ってください」

「あんれえ、なんではあ」

「昨日卵焼きやたくわんもらったからお礼っす」

「んなよお、にいちゃんとかだって大変なのによお」

「とうちゃん、ありがてえっつってましたから」

「んな」「なんぼ・・・」

え おっちゃんたち 涙ぐんでんだけど

そんなに握りメシ食いたかったんか

現場で食う握りメシは美味えって、とうちゃん言ってたもんな

「にいちゃん、ほれ、これ、おっかあ作ったの食え」

これは・・・ ごぼうとマグロ？ 甘辛く煮てて美味え

「これ、マグロっすか？」

「安っすいやつな、刺身にもなんねえのおこうやっではあ」

これはいいな もうちっと味薄くしたら愛里喜びそうだな

「美味えっす、マジ美味えっす」

「おらのぬすんも、ほれ」

ぬすん？ あ、ニシンじゃね？ みりん干しってやつか

「美味え」

ニシンのみりん干しはうちでは食ったことねえもんな

これはいけんじゃね？

これを竜田揚げにしたらどうだ？ しそと一緒に揚げたら・・・

「ニシン食ったことねえのお？」

「ねえっす」

「もごせなあ」「めじょけねな」

ん？ なんつった？ 隣れみの目で見てっけど？

東北の人にとってはニシンを食べないっつうのはありえねえってことか？

日本人なのに米食ったことねえみてえな？

「ありがとうございます」

貴重な体験させてもらいました

「いんだよお、んな・・・」「なもそっだ・・・」

おっちゃんたち、また涙ぐんでっけど

俺がニシン初めて食えて感動してくれてんのか？

東北の人にとってはそんだけ重要だっつうことか？

おんなし日本でもさ、知らねえこといっぱいあんだな

メッチャ勉強になる

仕事終わりにおっちゃん二人が寄って来た

「にいちゃん、スギさんともしゃべったんだけどお」

「はい？」

「明日っからあ、にいちゃんこの握りメシ、俺たちにも作ってくんねえが」

「え？」

そんなに とうちゃんの握りメシ気に入ってくれたんか

「にいちゃんとおんなしの二個ずつ」

「あ、はい、とうちゃんに頼んで持ってくるんで」

「そんで・・・ 一個 100 円でいっがなあ」

「や、金はいいっすよ」

「コンビニで買えばあ、こった小っこいのがそんくれえだっぺ」

「や、マジ金はいいっすよ」

「にいちゃん、俺だちにも、なんつっぺ、協力？ 協力させてくんちえ」

「協力？ なんのっすか？」

「ほんだから、その・・・ あ、にいちゃんが所帯持つ、なあ」

「んだ」

「えっ・・・」

「若げえのによお、所帯持つってがんばってっがらよお」

俺は・・・ 涙が・・・

おっちゃんたちが俺と愛里がいつか結婚すること応援してくれてるみてえで

メッチャリアルに思ってくれてるみてえで

「ありが・・・とう・・・ございます」

「こんくれえっきゃできねえけんちょ」

おっちゃんたちのこんくれえもバグってるよ

まだ高校生の俺が結婚とかさ、鼻で笑われるようなことをさ

こんなリアルに受け止めてくれてさ たまんねえよ

「にいちゃんごはあと5日だっぺ」

「はい」

「そんじゃ、あと5日頼むわ」

「ありがとうございます！」

俺 ここの現場で働いてよかったあ

心が温ったかさで満たされまくる

握りメシ1個100円で・・・ つことは、一回計400円 5日で2,000円

とうちゃん、2,000円の収入入るよ 握りメシ作ることでさ

とうちゃんもパートしてえつつってたもんな

帰って、とうちゃんに言った

「えっ？ や、金って、俺は握ってっだけで」

「手間賃てあんだろ、それだよ」

「それでもよ、米はかあちゃんの稼ぎで買ってっからよ」

「とうちゃん、最近はさ、握りメシ屋つつうのがあってさ、

そこで握ってる人たちは米は買わねえけどそれで給料もらってんだよ」

「それでも、ダイチにつってんだからダイチがもらわねえとよ」

「とうちゃん、俺はもうもらってんたよ」

「あ？」

「俺みてえな高校生が将来結婚とかさ、それを鼻で笑わねえでくれてさ、

応援してるって、んな・・・ そんだけでもう・・・」

「だなあ、よかったな」

「うん、だからさ、とうちゃん、1個100円で4個儲けてくれよ」

「いいんか？」

「いいに決まってんじゃない、とうちゃんが労力使うんだからよ」

「握るだけなんだけどよ」

「握りメシ屋の従業員をバカにしてんの？」

「や、んな、んなことひとつ欠片も思っねえよ」

「そんじゃ、とうちゃんは握りメシで、俺は現場で稼ぐつつうことで」

「ダイチはすげえな」

「なにが？」

「俺の仕事まで持ってきてくれんなんてよ」

「おっちゃんたちのおかげだよ」

「だなあ」

「俺、ああいうところが合ってるのかもしれないねえ」

「ダイチはどこ行っても好かれっからよ」

「将来現場で働こっかな」

「ダイチ」

とうちゃんの顔が 見たことねえような顔つきになって
「俺みてえにケガしたらよ、そんで、終わっちまうぞ」
終わっちまう んな言葉 今まで言ったことねえ
「とうちゃん」
「あ、や、なんつうか」
「とうちゃんに心配かけねえような仕事にすっからさ」
「俺が、なんか言えるような、んなこっちゃ、なあ」
「とうちゃんに心配かけたくねえし、それに」
それにさ
「とうちゃん終わってなかったじゃん」
「あ？」
「こうやってさ、明日っから握りメシ作って稼ぐんじゃん」
とうちゃんが俺の顔 優しい目で
「俺も、とうちゃんの経験のおかげで現場の仕事できてんじゃん」
「そっか」
「そうだよ」
「そんじゃ、とうちゃんもがんばって握りメシ作っからよ」
「頼みます！」
「おう」
やっぱ、とうちゃんはすげえよ
現場で働いてっとますますそう思う
こういう仕事、身体張ってやってきて、少ねえ給料でやりくりして
俺とおんなしような歳でさ 俺はバイトだけど とうちゃんはそれで暮らしてて
すげえよ とうちゃんは漢ん中の漢だよ

ゆびわ

愛里がいねえ間バイトしようって決めてから、
俺にはボヤッとした思いがあって
このバイト代で愛里に何かプレゼントしてえなって
稼ぎ全部は使えねえけど、稼ぎ全部貯蓄ってのも夢がねえっつか、
働くモチベーション上げてえっつかさ
それでも何がいいんだ？ 服はぜってえダメだな、俺のセンス全否定だもんな
それでもなんか身につけるものっつかさ 身につけてほしいっつかさ
ぜんぜんっ思いつかねえ

昼休憩

とうちゃんの握りメシ計 400 円
「ありがとうございます！」
「にいちゃんの握りメシ、んつとに美味えのよ」
「そっすか」
「塩っけがあ、これだっつう味だよお」
さすがとうちゃん！
「わもこれけばほがのけねぐなんなっで は」
んーっと？
「これ食えば他の食えなくなるってよ」
「ああ！ ありがとうございます、とうちゃんマジ喜びます」
「だいづ」
だいづ・・・ あ、俺のこと？
「わのかっちゃんがこんれだいづさもっでげっで」
えっと？
「ぬすんくっだごとねっつたらはあめじょげねっつて」
「スギさんのお、おっかあが、だいづ・・・んと、にいちゃんがあ、
ニシン食ったことねえのかわいそうだってはあ」
え？
「だいづのとっぢゃとかっぢゃさもけさしでやれっで は」
とっぢゃとかっぢゃは聞き取れた とうちゃんとかあちゃん？
「にいちゃんのとうちゃんとかあちゃんにも食わせてやれって」

「え・・・」
「ほんれ、もってげ」
タッパーにニシン
「俺・・・に？」
「んだよ」
なんか・・・ メッチャ・・・
「こっだごどでながねで」
「だいづは、じゃねえ、スギさんにつられてはあ」
「だいづで・・・いいっす」
「だいづは、俺らみてえなしょぼくれたおっさんにも優しくってよお」
「しよぼくれてねえっすよ、身体張って家族のために稼いでっじゃねえっすか」
「え・・・」
「漢っす、おっちゃんたちはメッチャ漢っす」
「そこまで言われっとお、照れっちまうなあ」
「俺マジッすから」
「やあ、な～んかなあ へへへ」
そうだ おっちゃんたち結婚してんだよな つことは経験あるってことで
「おっちゃん、相談があるんすけど」
「なんだ？ 金が？」 「なんぼ？」
「え？ や、金じゃなくて、あの、好きな人に、何プレゼントしたら」
「あやあ、所帯持ちてえ子にい、プレゼントオやんのかあ？」
「このバイトの金で、全部はムリっすけど」
「だなあ、だいづんとこはなあ大変だもんなあ」
「だばゆんびわでねが？」
ん？ ゆんびわ？ 指輪つつた？
「だなあ、指輪だなあ」
「指輪・・・っすか」
「俺なんてよお、結婚すっときい金なくてよお、指輪買ってやれねくて」
そうなんか
「そんで10年目にい、安っすもんだけんちよ買ってやったら涙流して喜んでよお」
涙流して・・・ 俺までメッチャ感動してんだけど
「女はやっぱ指輪でイチコロだっぺえ」
指輪でイチコロ 指輪か そっか あ？ ちょっと待て
パカッとしたとき・・・ ウワッダッサ！ になんねえか？
「おっちゃん、俺メッチャセンスねえんだけど」
「センスなんてえ、だいづの心だっぺ、なあ」
「んだ、だいづのこんごろ」
俺の心 心はあんだよ メッチャ溢れかえるほどあんだけどさ
「だいづが汗水たらして稼いだ金で指輪買ってくれたなんてはあ」
「すんぐよめっごさなりでっでなんでねが」

ん？ よめ？
「今すぐだいつの嫁になりてえわあつうんでねえのお？」
「よ、嫁って、おっちゃん、からかわねえでくれよお」
「や、からかってねえよ、なあ」「んだ」
顔がマジだ マジかあ
「おっちゃん、ありがとう！」
「だいつ、がんばれよお」「けっばれ」
「おう」
そっか やっぱド定番でいけてことか

もう少しで終わる
「森下！」
え？ 監督？ 手招きしてっけど
「は、はい！」
なんだ？ 俺なんかやらかしたか？
「この後、7時から9時まで入れないか」
「え？」
「急遽3人他の現場に回さなきゃならなくて、こっちが足りなくなるからさ」
「俺でいいんすか？」
「急な話だから、時給1,500円出す」
「えっ やります！」
「それじゃ、よろしく」
「はい」
ヤッタ 2時間で3,000円 9時までだったら終電も余裕だしな
とうちゃんに電話しとこう

途中ちこっと雨降ってちょい蒸したけど無事終わった
3,000円 ありがてえ
「ただいま」ってドア開けたら
あ、かあちゃん
「かあちゃん、ただいま」
ん？ かあちゃん？ 目え見開いたまんま固まってっけど
「かあちゃん？ どした？」
「あんた・・・ どうやって帰ってきたの」
「電車」
「その恰好で？」
「いつもだけど」
「ていうか、あんた・・・」

なんだそのチョー不快そうな顔？

「腐った雑巾の臭いがする！」

ハァアアアア？

「かあちゃん腐った雑巾の臭い嗅いだことあんのかよ」

「Stay！」

「ハ？」

「そこから動くな！」

なに？ かあちゃんキッチンに走ってって 戻ってきた

「そこで服全部脱いで！」

「ハ？ ここ？ たたきだけど？」

「その恰好で一步でも部屋に入ってこないで！」

「なんでだよ？ 風呂入るしさ」

「これに着てるもの全部入れて！」

でっけえビニール袋

「全部！ 下着も何もかも全部！」

「ハァアア？」

かまってらんねえ、ゴム長脱いで

「ウワアアアッ ゲホッゲホッ」

「な、なに？」

「あんたの足！ 腐臭がする！」

「腐臭？」

「腐ってる！」

「腐ってねえよ！」

「そのゴム長外に出して！」

「外に出したら盗られっだろ」

「そんな臭っさいゴム長誰も盗まないわよ！ むしろ危険物で通報されるかも」

俺は働いてきたのになんでこんな扱いされなきゃなんねえんだよ？

あ、とうちゃんがキッチンから顔半分出してこっち見てる

なんかジェスチャーしてんな

んっと？ 脱げ？ 袋に入れろ？ そんで？ バスルーム？

「お風呂に入って3回洗いなさい3回！」

「皮むけちまうよ」

「3回！」

とうちゃん 指三本立てて 3回？ そっか

「わかったよ、脱ぐからあっち行っててくれよ」

かあちゃんが俺をギロツと睨んで、とうちゃんサッとキッチンに隠れた

リビングに行ったから しゃあねえな、たたきで全裸って拷問かよ

ハァアア サッパリした

3回は洗わなかったけどいちおう2回洗った
一回じゃシャンプー泡だたねえからさ
あれ？ たたきに置いといたビニール袋がねえ
キッチン行って
「どうちゃん、たたきに置いた」
「洗濯してっから」
「あ、回ってたのって俺の？」
「泥は一回じゃ落ちねえから、あとで手で洗っとく」
「俺やっからさ」
「こんくれえやらしてくれよ」
「どうちゃん、ありがとう」
「俺も稼がせてもらってっからよ」
「400円、玄関の棚の上に置いといた」
「ありがとな」
「おっちゃんたち、どうちゃんの握りメシ食ったら他の食えねえってさ」
「んなこと言ってもらえんなんてよ」
「あ、それからこれ」
「ニシンか」
「おっちゃんが、どうちゃんとかあちゃんにも食わせてやれって」
「くれたんか」
「うん、俺がみりん干しは食ったことねえつつたらくれた」
「ありがてえなあ」
「んつとにさ、俺、涙出た」
「だよな」
どうちゃんがタッパーかかけてお辞儀して、そんで別のタッパーに入れ替えた
「こっちは洗っとくから明日返してな」
「おう」
「ダイチ、メシ食えや」
「腹減ったあ、夕方の分終わってからなんも食って・・・」
どうちゃんは・・・ 昼も食えねえで夜も食えねえこと何回もあったんだよな
考えらんねえ、んな・・・ それで仕事してたって どうちゃんすげえよ
「ダイチ？ どした？」
「なんか・・・ こうやって毎日メシ食えんのって、ありがてえなって」
「ありがてえな、かあちゃんのおかげだな」
「どうちゃんのおかげでもあんだよ」
「俺はかあちゃんの稼いだ金でメシ作ってっただけだよ」
「両方だよ、俺はどうちゃんとかあちゃんのおかげで・・・」
なんか・・・ ありがたさが身に沁みる
「ダイチ、なんで泣いてんだ？」
「ありがたくてさあ」

俺は 現場で働いてよかった まだ終わってねえけど
どんだけ自分が恵まれてっか どうちゃんとかあちゃんに守られてっか
やっと少しわかってきたよ
「どうちゃん、生姜焼き美味え」
「そっか、いっぺえあっからよ」
「うん、ありがとな」
メシの美味さもさ ありがたさもさ
こんなに感じられんなんて
どうちゃんが、ありがてえって言った意味 少しわかったよ

アドバイス

指輪か

おっちゃんたちは指輪つつたな

やっぱそうなんだろうな 経験から言ってんだよな

それでも いちおう いちおう なんとな〜くさりげな〜く

わからねえように かあちゃんにも聞いてみっかな

リビング入ってたら

「デジャブ」

ハ？

「デジャブみたいだった」

「なに？」

「なんかもう思い出しちゃったハハハハハハ」

かあちゃん 大丈夫か？

「カズオの方がもっと汚ったなくて臭かったわね」

ひとり言？

「カズオは？」

「俺がシャワー浴びたから、かあちゃん入る前に風呂掃除してお湯入れるって」

「そこまでしなくていいのに」

「かあちゃんが大騒ぎすっからだろ」

「だってえ」

かあちゃんがまたメッチャ不快そうな顔になった

いやいやいや、それじゃダメだ 穏やかになってもらわねえと

どうする？ かあちゃんを穏やかになって

「どうしたの？」

「え？ あ、や、なんつうか」

どうやって切り出せば・・・ あ、そっか

「現場のおっちゃんたちと話しててさ」

「仲良くなれたの？」

「うん、メッチャよくしてくれる」

「そう」

「結婚するとき、金ねえから指輪買えなかったっさ」

「そうなの」

「かあちゃんは、とうちゃんから指輪もらいたかった？」

「もらいたかったらホームレスと結婚しないわよ」
あ レベルが違いすぎた
「それでもさ、もし、もしとうちゃんが指輪買ってくれたら嬉しい？」
「私はイチゴで充分しあわせよ」
んーっと ダメだな これは ダメだ
「そっか」
部屋戻ろう
「そうねえ、たとえば」
え、なに？
「たとえばね、私が、そうねえ、あんたくらいの歳だったら」
俺くれえの歳？
「カレシに指輪をもらったら嬉しかったかも」
「マ、マジ？」
「ダサイのはイヤだけど」
そこだよ そこは 俺には突破できねえ壁だよ
「たとえばね、小さい誕生石がついたカジュアルリングなら嬉しいかもね」
「カ、カジュ？」
「そういうのがあるのよ、ちょっと待って」
かあちゃんがPC 開いて キーボード叩いてなんか探してる
「あった」
なにが？
「ちょっと」
指でクイクイって 来いってこと？
「ほら、こういうの」
青い小さな石が入ってるメッチャシンプルな指輪
「予算は？」
「予算？ え、予算？」
「たとえばよ、たとえばあんたが買うとしたら予算はいくらにするの？」
「え・・・ いくらならいいのかな」
「そうねえ・・・ ちょっとしたプレゼントなら数千円」
や、ちょっとしたじゃねえんだよ
「けっこう本気出すなら・・・ 一万円台かな」
一万円台
「このさ、三万いくらつつうのは？」
「高校生で三万円台は重たすぎるわね」
「そっか」
「これなんか、一万ちょいで、本物のサファイアで純銀よ」
「え、サ、サファイア？」
「私の誕生石」
「あ、そ、そっか」

愛里もなんだよ 愛里もサファイアだ
「このV字型なんか可愛いわね」
V字型つつうのかこれ
「値段も1万2千円だし」
そっか そんなくれえがいいんか
「こっちの流線形のもステキね」
「流線形？」
「ここが互い違いになってる真ん中に石がついてるでしょ」
ああそういうことか
「このお店は・・・ ああ、けっこう店舗があるのね」
銀座とかか ちょっとな
「あら、この店舗、今あんたが働いてる現場のすぐ近くじゃない？」
「え？ あ・・・」
ここ、見たことあんな 行き帰り通るとこだ
てことは・・・ 最終日の昼休憩るときに
「ただサイズがね」
「サイズ？」
「大きすぎても小さすぎてもね」
「小せえのはあれかもしんねえけど、大きかったら直してもらうとかできねえかな」
「サプライズでサイズが違うっていうのもね」
「え？ サ、サプライズ？」
「だいたいプレゼントってサプライズでしょ、一般的に」
「だ、だよな、一般的に、だよな」
「私もサプライズでブランド物の指輪もらったことあるけどね」
「マジ？」
「ちょっと大きくてね、一人で直しに行くのもね」
「ついてったらいんじゃない？」
「なんか興ざめじゃない、こっちも言いにくいし」
「そっか」
「よく外れて、急いでるときに転んで側溝に落としちゃって」
なんか聞いたことあんな
「指輪をくれた人とは別の人が見つけてくれて結ばれましたとさ」
あっ とうちゃんとのあれか
「せっかく指輪をあげたのに、そういうことになるかもよ」
それは・・・ イヤだな 別の人にとってさ
とうちゃんならいいけど や、そういうことじゃねえ
「女性の指輪のサイズをこっそり知る方法があるのよ」
「え、マジ？」
「ちょっと高等テクだけどね」
「え・・・」

「その子が持ってる指輪をこっそり借りて」

持ってる指輪

「それをお店に持って行ってサイズを測ってもらって同じサイズのを買う」

なるほど

愛里、指輪持ってっかな

ベッドルームのドレッサーの上にそれっぽい箱あったな

掃除機かけるときチラッと見てるだけだったけどさ

「話は変わるけど」

「あ、なに？」

「愛里さんて何月生まれ？」

え かあちゃんに前言ったよな かあちゃんとうちちゃんとおんなし日だって

忘れたんかな そんでも今言ったらサファイアってわかっちゃう

「カノジョが4月生まれの人は大変ね」

「なんで？」

「4月の誕生石、ダイヤモンド」

「えっ」

愛里 9月に生まれてくれてありがとう

「美里、風呂沸いた」

「それじゃ、私はお風呂に入ってくるわ」

「あ、おう」

メッチャ参考になったな やっぱ女の人に聞くのがいちばんだな

このサイトは・・・ 携帯で、おっし保存した

あとは・・・ 愛里の指輪だ

「とうちゃん、俺、ちっと愛里の部屋行ってくる」

「どした？」

「え、あの、愛里の部屋に置き忘れてたノート取りに」

「そっか」

とうちゃん、ウソついてごめんな

そんでもこれはこっそりやらねえとなんねえからさ

愛里の部屋の前

愛里がアメリカ行ってから入ってねえ

なんかさ なんか愛里がいねえって そういうの感じたなくてさ

そんでも今は 入らねえと

鍵開けて ドア開けたら

愛里の香りがする

優しくて柔らかい愛里の匂い

なんか なんか 今はまだダメだ

ドア閉めて鍵閉めた

明日 明日だ 明日仕事から帰ってきたら
家に戻って
「ダイチ、ノートあったんか」
「あ、うん」
「そっか」
どうちゃん、俺はメッチャ弱え 弱えよ
自分の部屋戻って
なんかメチャ愛里が恋しくて
それでも今日は遅くなっちゃったから
愛里はもう出かけてっかもしんねえな
向こうは昼近くだもんな
寝よう

目え覚めたら やっぱ愛里が恋しくて
『愛里』送信
ピコン
『おはようございます』
愛里がいる んっと向こうはまだ昨日の夜か
『今日は何してたの?』送信
ピコン
『パパが美術館に連れていってくれました』
愛里が話すモダンアート美術館の話は いかにも愛里で
それがまたメッチャ愛里を恋しくさせてさ
『愛里』送信
『愛里がいなくて淋しいんすけど』送信
本音書いちまった そんでも本当にそうだからさ
ピコン
『私は実感がわかなくて』
実感?
『何の実感?』送信
ピコン
『こっちにいると
あなたといたこととかそういうことが夢だったのかなって』
え?
ピコン
『もしかしたら、私はこのままこっちにいるのかなって』
このまま・・・
ピコン
『このままこっちにいる方が現実みたいな』

こっちにいる方が アメリカにいる方が 現実
なんだよそれ なんだよ
このままこっちにアメリカにいるのかなって なんだよ
顔洗ってこよう このままじゃ俺 顔洗おう
顔洗って 部屋に戻ってきたけど まだ なんか すげえ
『愛里、俺、ちっと、つか、メッチャ、つか』送信
うまく言えねえ なんか胸んどこ そんで
『バイト行ってくる』送信
既読つかねえ
なんだよ もう俺のことは夢で もうどうでもいいのかよ
キッチン行って
「ダイチ、おはよう」
「あ・・・ おはよう」
「どした？ 具合悪りいんか？」
「や、悪くねえよ」
「ダイチ」
「あ？」
「なんかあったんか？」
「なんもねえって」
「んな顔で現場行ったら」
俺 今 どんな顔してるんだ
「ケガしちゃうかもしんねえよ」
「どうちゃん、マジなんもねえって」
どうちゃんが黙って俺の顔見てる
「マジだって、ゆうべさ、爆睡し過ぎてボーッとしてんじゃね？」
「そっか？ 疲れてんじゃねえのか？」
「疲れてねえよ、心配しなくていいって」
「そっか、それでも、もし疲れてフラッとしたらよ」
どうちゃんにこんな心配させるなんてよ
「仕事切り上げてすぐ帰ってこいよ」
「そうする、ぜってえそうすっから」
「そっか」
どうちゃんが少しホッとした顔した
「これ、握りメシと」
どうちゃん、心配かけてごめん
「これはよ、昨日もらったニシンのタッパーによ」
あの現場ではみんな生活かけて仕事してんのにさ
「急だったから残りもんの野菜っきゃなかったけど」
こんなことくれえでさ
「ブロッコリーの茎とニンジンとセロリのサラダみてえの作ったからよ」

「え、マジ？」

「ニシンくれた人にな」

「おう、ありがとう」

とうちゃんもこんなにしてくれてさ

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

「これで今日もガンガン働いてくっからよ」

「あんまムリすんなよ」

「おう」

つか・・・

俺は なんでバイトしてるんだ？

愛里が・・・

「いってきます」

俺のことは夢みてえで

あっちにいる方が現実みてえっつってんのに

ケンカ

昼休憩

握りメシ代計 400 円

「毎度ありがとうございます」

「だいつのあめがら」

「俺のおっかあも朝からメシ炊かなくて助かるっつてはあ」

「それでもちゃんとおかず作ってくれてるじゃないっすか」

「これはぜ〜んぶゆんべの残り物だあハハハハ」

「あ、スギさん、ニシンありがとうございます」

タッパー渡した

「わいなんがはいっでらじゃ」

フタ開けて

「めそんだかまりごすべな」

フランス語に聞こえんのって俺だけかな

「だいつ、これはだいつが作ったのお？」

「とうちゃんがお礼につつて」

「わいめわぐだじゃ」

え、め、迷惑つつた？

「迷惑・っすか？」

「スギさん、ありがてえつつてんだよお」

「あ、よかったっす」

「ほれ、ヤッさんも」

こっちのおっちゃん、ヤッさんつうのか

「こりゃ・・・ うんめえなあ」「めなあ」

「美味えっすか」

「これは・・・ なんだあ？」

「ブロッコリーの茎の部分っす」

「茎・・・」

「あ、ちゃんと茹でてあるんで」

「茎までなあ」

「茎美味えっすよ、甘みがあるっつうか」

「茎食ったことねえけんちよ、こりゃうんめえなあ」

「んだ、め」

「このちょごっとピリッとすんのがあ」
「鷹の爪っす」
「これで酒飲んだらあ止まんなくなっちゃうっぺよ」「んだな」
「どうちゃん、おっちゃんたち喜んでくれてるよ さすがどうちゃんだよ」
「酒ってばよ、ゆんべおらのおっかあがああ、あんたは酒飲みすぎっからあ、
こ～んなんじゃ今月やっでげねって、うつつあしぐってよお」
「ん？ うつつあ？」
「うるせえのよお」
「ああ！」
「そ～んでケンカになってはあ、今朝なんて口もきいてくんねえ」
ケンカ・・・ 俺と愛里は・・・ ケンカにもなってねえ
俺一人で・・・
「ヤッさん、かにしでげってどんげさせねば」
「俺は土下座ば～っかしてっぺ ハハハハ」
「やっば土下座・・・ や、俺はまだなんにも言ってねえし」
「そんでも胸のどこつつうか腹んところが、なんか重たくて渦巻いてるつつうか」
「だいつ、どしたんだあ、腹おさえてえ、痛でえのお？」
「や、じゃなくて、なんつつうか」
「なんだ、なんかあったんかあ？」
「あ、まあ、ちょっと」
「な～にがあったんだよお」
「え、や、んなたいしたこっちゃねえつつうか」
「だいつ、今朝がらヘンだったよお」
「え？」
「な～んかボケ～ッとしてたりよお、だいつらしくねえなあって、なあ」
「んだよ、なんがあんだらしゃんべれ」
「なぜか今のはわかったな 何かあるならしゃべろか」
「そんじゃ、あの・・・」
「なんつったらいんかな」
「俺のカノジョ、今、お父さんとお母さんのところに行って」
「さどげえりが」
「スギさん、里帰りって、だいつまだ結婚してねっぺ」
「俺といたのが現実味ねえとか、お父さんとお母さんというのが現実みてえとか」
「さどごごろついでまったんでねが」
「俺は淋しいと思ってんのに実感ねえとか、なんなんだよつつうか」
「そんでケンカしたのお」
「や、してねえっす」
「だいつがなんなんだよつつってえ、その子はなんつったんだあ？」
「言ってねえから」
「な～んで言わねえのお？」

「なんつっていいかわかんなくて」
「そのま〜んま言えばいっぺ」
「言っても彼女が困るだけだろうなっつうか」
「言わなきゃわかんねっぺ」
「んだよしよでえもづでえんならなもかもしゃんべれねど」
ん？ え？
「だいづ、ケンカしてなんぼだぁ」
「え？」
「言いてえこと言い合ってえケンカしてえ仲直りしてえ、それが夫婦だよお」
「え、まだ夫婦じゃねえんすけど」
「所帯持ちてえんだっぺ？」
「あ、はい、将来は」
「ほんだらだいづの言いてえこと言わねえとお」
言いてえこと
「結婚したらな〜んも言えなくなつてはあ、そんで別れちまう」
「えっ」
別れるって んな
「別れんのはイヤっす、ぜってえイヤっす」
「ほんだら言いてえことスパッと」
「ズバッと」
「スパッとなあ」
「そんじゃ、あの、ちょっと言ってきます」
「どさ？」
「電話すんだっぺ」
「いってきます」
「言いてえことぜーんぶなあ」
「おいっす」
現場の外に出て
『愛里』送信
言いてえこと全部だよな
『俺とのが夢だったとか このままそっちにいるのかなとか』送信
『正直メッチャ腹立ってる』送信
『俺は愛里がいなくて淋しいのにさ』送信
『愛里にとって俺は何なんだよ』送信
スッキリした
スッキリして そんで なんか 落ち込んでる
こんなん愛里にぶつけてさ ぶつけてどうすんだよ
愛里は正直に言っただけで それが正直な気持ちだから腹立っただけ
それでもなんか情けねえっつうか
情けねえんだよ 俺は 情けねえ男だよ

既読つかねえ

向こうは夜中か 削除するか 削除したことはわかられちゃうな

それもなんかなあ

いいよもう 俺はこんな情けねえ男だって知ってくれ愛里

もうわかってっかな なんかもう

現場戻ろう

「だいづ、どうだった？」

「なんか寝てるみてえで」

「そっかあ、そんじゃまたかけりゃいっからよお」

「あ・・・ はい」

「なんだあ？ まだなんかあんのか？」

「なんか俺・・・ 情けねえ男だなあって」

「男なんてはあ、み～んな情けねえよお、なあ」

「んだ、わもかっちゃんにはんかくせはんかくせっでや」

はんかくせ・・・ 半可？ 臭せえ？ 臭せえって言われてんのか？

「スギさん、それ俺もかあちゃんに言われました」

「だべ、そっだもんだ」

そういうもんなんか だよな 汗かいて働いてんだからさ

「まあ、最後の手段つつうかよお」

「最後の手段？」

「その子ん家に行くっきゃねんじゃねえがあ？」

「それは・・・ ちょっと遠いつつうか」

「何時間？」

「時間すか？ 時間だと・・・ だいたい13時間」

「そ～んなかかんのけえ、そりゃてえへんだなあ」

「わんどごはやごバスではづづがんでそっがらでんしゃどバスで」

バス？ 今バスって聞こえた気いしたけど

「スギさんとも遠いもんなあ」

「ずうさんずがまんではががねな」

え や バスとかじゃ行けねえんだけど あ、体感時間の比較か？

「だいづ、心配すんなあ」

「あ、はい」

「もしもんときは、俺とスギさんでえ、なあ」

「んだ、ぜにっごだすでやはんで」

ん？ なに？

「もう行くっきゃねえってなったらはあ、交通費出してやっから」

「え？ いやいやいやいや、それはなんとか貯めてるんで」

「はああ、えれえなあ、てえへんなのによお、金貯めてるってはあ」

「心配かけてすいません、俺、大丈夫っすから」

「心配でなくてえ、仲間だっぺ」

仲間

「あたりめえだよ」

なんか・・・俺・・・

「だいつはなぎつづで は」

「そんだけだいつには心わかんだよお、なあ」

心・・・

「なだふいでほんれ」

スギさんが自分の首に巻いてるタオルで俺の顔・・・

「スギさん・・・こんなときになんすけど・・・」

「なんだ？」

「そのタオル、洗った方がいいかしんねえっす」

「だ！ わ、これめえの現場っがら洗っでね」

「スギさん、な～んか臭っせえなあと思ってたんだよお、それだよお」

「洗んねどな、わいはんかくせじゃ」

「はい、臭せえっす」

「ダンジャレしゃべっで！ ハハハ」

なんか おっちゃんたちに救われてる マジ救われてる

「そんじゃ、そろそろ戻っぺ」

「おいっす」

スギさんとヤッさんに出会ってよかった

なんのためにバイトしてんだとか、バカみてえなこと思ってさ

みんな生活のために働いてんだからさ

それなのに、俺のために金出すとか言ってきてさ

そんなさ、俺の甘えた泣き言にさ 優しいよ メッチャ優しいよ

すげえよ おっちゃんたち 器どんだけデケーんだよ

「だいつ！ ネコ持ってきてえ」

「おいっす」

きっちり働こう

どうちゃんみてえにさ おっちゃんたちみてえにさ

体力だけはあるからさ

愛里の部屋で

帰り道

携帯見ても 既読ついてねえ

まだ寝てんのかな

それとも

俺はもう愛里の夢ん中の存在で 愛里の現実からは消えちまったんかな

ダメだダメだネガになんか

それでもさ こんな感情丸出して それぶつけて

しゃあねえよ もう送っちまったんだから

玄関ドア開けて

「ただいま」

「ダイチ、おかえり」

「どうちゃん、あのサラダみてえの、おっちゃんたち美味えって喜んでた」

「そっか」

「酒のつまみ？　なんかそれにずっと止まんなくなりそうだったよ」

「現場のおっちゃんたちはああいうの好きだかな、ピリッとしたのがよ」

「あ！　だからどうちゃん鷹の爪入れたんか、いつもは入れねえのにさ」

「かあちゃんすげえ辛れえのは好きじゃねえから、いつもはラー油ちこっとな」

「すげえなどうちゃん、相手に合わせて味変えるなんてさ」

「俺は現場知ってっから」

「そっか」

「ダイチ」

「あ？」

「大丈夫か？」

「なにが？」

「や、なんか」

「大丈夫だよ、あ、俺シャワー浴びっから」

どうちゃん　なんか感じてんのかな

言ってみりゃ　俺の空元気

なんか腹んとこ落ち着かねえっつか　重てえのに浮いてるみてえで

シャワー終わって部屋に戻っても 既読はついてねえ
まだ寝てんのかな いつもの愛里ならもう起きてる時間だけど
向こうでどんなふうに過ごしてんのかわかんねえよ
なんかなあ なんか バタンとベッドに寝て
「ダイチ」
あ、ヤベ ベッドから起き上がって
「なに？」
「かあちゃんから電話あってよ、仕事遅くなっから先食ってろって」
「おう」
とうちゃんと二人きりの晩メシ
いつもなら、かあちゃんの前では言えねえこといっぱい話すんだけど
何からどう話していいんかわかんねえし 話していいんかわかんねえ
「ダイチ、食わねえんか」
「え、ああ、なんか腹減りすぎて逆に入んねえ」
「そっか」
なんだよ、んなへタな言い訳
それでもマジ食欲なくて
「ダイチ、なんかあったんか」
「え・・・ なんも・・・」
「とうちゃんに言えねえことか」
「とうちゃんに言えねえことなん・・・」
とうちゃんに言えねえことなんてねえんだよいつもさ
それでも今は・・・
「とうちゃん、何をどっから言えばいいんかわかんねえんだよ」
「口ん中の、なんつうか、ここに出てきたことから言えばいいんじゃねえか？」
口ん中の・・・
「落ち込んでる」
「そっか」
「メッチャ落ち込んでる」
「そっか」
「いつもの俺なら泣いてんのにさ、全然泣けねえ」
「そっか」
「涙も出ねえ」
「そっか」
「今朝・・・ 愛里に淋しいつつたらさ、愛里は実感ねえって」
とうちゃんは穏やかな顔で黙って聞いてて
「俺といたことが夢みてえで、あっちにいる方が現実みてえな気がするって」
とうちゃんが首かしげてなんか考えてっけど
「そんで昼に、腹立ってるとか、俺は愛里の何なんだよって送っちゃまって、
すんげえ情けねえこと送っちゃまって、なんか愛里に八つ当たりしたみてえで、

送ったときはスッキリしたんだけど、すぐに落ち込んでさ」
「アイリちゃんはなんつった？」
「読んでもくれてねえよ」
「あっちはあれだろ？ 時間ちげえんだろ？ 夜中とかじゃねえんか？」
「もう起きてる時間なんだけどさ」
「そっか」
「どうちゃんごめんな、んなことで心配かけちまってさ」
「んなことはいいんだよ、んなさ」
「それでも、どうちゃん、朝からなんか気いついて心配してくれてたからさ」
どうちゃんが なんか考えてて 言葉探してるときの顔で考えてて
「ダイチのその、腹立つとかよ、俺はアイリのなんなんだとかよ」
改めてどうちゃんの口から聞くと なんかますますイヤになる
「それはダイチの本当の気持ちなんだろ？」
「まあ、そうだけどさ」
「そんじゃ、いいんじゃねえか？」
「それでもさ、んなさ」
「俺は・・・ ねーちゃんに本当の気持ちとか言えねえっつうか」
え？
「んなクズがよ、好きとか、んな」
「そんなとき・・・ 辛かった？」
「辛れえとかじゃねえけど」
「マジで？」
「言えねえだろ、んな浮浪者がよ」
「それでも好きって言えねえって辛れえじゃん」
「そばにいれっただけでよかったから」
そばに 俺は今は・・・
「俺はねーちゃんに腹立つことは一回もねえけど」
ねえんだ マジか
「ねーちゃんは、俺に腹立つとすっぐ怒ってよ」
だよな
「それでも、俺に腹立てたり俺に怒ってくれんのが嬉しくてよ」
嬉しい？ マジで？
「ねーちゃんには俺が見えてんだなって」
「見えてっだろ、だから怒ったんじゃねえの？」
どうちゃんが情けねえ顔でちょっと笑って
「地下道座ってっつよ、その辺に落っこってるゴミッカスとおなしでよ、
みんな避けてくか見ねえようにするっつうか見えねえっつうかよ」
見えねえ？
「俺はいねえんだよ」
いねえ？ どういう意味だ？

「ずっとそうだったからなんも思わねえっつうか」
え、それでも
「とうちゃん、施設でまかないのばあちゃんにツバつけてもらったって」
「ばあちゃん、俺の名前知らねえんだよ」
「え？」
「ずっと、ちょっとあんたとかよ、ばあちゃんにとっちゃ施設ん子ってだけでよ」
ずっと？　　いっつもそばにいたんだよな
「そういうもんなんだと思ってたからよ、ねーちゃんが俺にお願いがあるって」
とうちゃんにとっては人生初だっつうたもんな
「それで、あんたの名前はとかよ」
ハンコ買うためだけど
「それで、拾ってきてもらって、それでメッチャ怖え顔で俺のこと怒ったりよ」
とうちゃんが思い出してるみてえに嬉しそうな顔で
「それってよ、ねーちゃんには俺が見えてんだって、だよな？」
「そりゃそうだろ」
「だから、なんつうんだ、ダイチがアイリちゃんに腹立つっつうのもよ、
俺はアイリのなんなんだよっつうのもよ、アイリちゃんを見てるっつうか」
愛里っきゃ見えねえんだよ、とうちゃん
「それがダイチなんだからよ」
「それが俺だから情けねえんだよ」
「アイリちゃんは嬉しいんじゃないか？」
「とうちゃん、それはぜってえねえよ、嬉しかねえよ」
「ダイチが本気で言ったんなら、なんつうんだ？　アイリちゃんも・・・
本気できてくれんじゃないかなあ」
「本気？」
「アイリちゃんはダイチのこと大好きだろ」
「それでも、俺といたのは夢みてえだって、実感ねえとか」
「そういうことなんじゃねえか？」
「そういうことって？」
「んーっつと、そういうことだなあ」
「どういうことだよ？」
「とうちゃんはうまく、なんつうか」
手でなんか一生懸命伝えようとしてっけど　わかんねえよ
「とうちゃんはダイチが大好きだよ」
「え？」
「大好きだよ」
とうちゃん
「俺にはそれっきゃ言えねえな、アッタマ悪りいからよ、ごめんな」
「俺も、とうちゃんが大好きだよ」
「んなこと言ってくれんなんてなあ」

「マジで言ってんだよ」
「嬉しいなあ」
「マジだって」
「そうやって怒ったみてえに言うところは、かあちゃんそっくりだな」
「えっ、なんだよそれ、やだよ」
「とうちゃんは好きだよ」
「や、それは、俺も・・・」
「ただいまー！」
かあちゃんだ

キッチンの片付け終わって 顔洗って 部屋戻って
既読はついてねえ
なんかあったのかな 既読スルーよか心配になってきた
俺がここで心配してもな
あっちには愛里のお父さんもお母さんもいんだしさ
寝よう

ピコン
え？ 電気つけて
愛里からだ
『私にとってあなたは何なんだよとか言われるなら』
『もう何も言うことはありません』
え・・・ もう何も言うことは・・・
これは・・・ なんだ？
もう何も・・・ ねえ・・・
ポーンと軽く突き放されたような そんなカンジで
なんか なんか俺
どうすればいい？ どう・・・
なんか 愛里が遠くに遠くに行っちゃった気がして
なんか そんなの
部屋を出て 玄関を出て 階段駆け下りて 愛里の部屋
ドア開けたら 愛里の香り 優しくて柔らかいあの匂い
消えないでくれよ こんな簡単に 消えないでくれよ
部屋のあちこちに愛里の 愛里がいた跡があるのに
それが なんかスッと消えていきそうで
涙も出ねえ あっけなさ過ぎて
愛里 本当に？ もう何もねえの？ 本当に？
愛里の中の俺は どこにもいねえの？

俺から 離れて どっか遠くに 愛里の心は 行っちゃったの？
ソファに座っても ここで愛里にキスしたはずなのに
そういうのが遠い遠いことで なかったみてえに
愛里の言葉で 一瞬でなかったことみてえに
なんかウソみてえに 涙も出ねえ
苦しいとか 悲しいとか 辛れえとか そんなんもなく
なんか スカスカで
ソファにもたれて 天井見上げて
俺の中に なんもなく
俺は いねえのかな もういねえのかな
とうちゃんが言った
“俺はいねえんだよ”
今それなんかな
目を閉じると 愛里の香りが するはずなのに もう消えてるみてえな
消えたのか？ 全部
クッションに顔うずめると 愛里の香り そんでもそれも感じなくなかって
呆気なさ過ぎて
なんも感じられねえよ
俺は 愛里の中から 完全に 消えた
消えた
いない 俺は もういない

ハートに矢

ん・・・ まぶ・・・ え・・・ 朝 あのまんま寝ちまっていた
何時だ 5時過ぎ まだ早えな

なんも感じねえ なんか もうちっと寝よう

ピコン

え・・・ 愛里・・・かな 最後の 言葉・・・かな
それ見たら もう 携帯手に取るのも 怖い
なんか 呼吸早くなってきて なんか胃のところが
それでも それでも愛里なら 愛里の言葉なら
どんなんだって 俺 愛里ん中にいねえよか 俺
携帯開けて

『今夜はステーキを食べました』

え

『すごく大きくて柔らかかったけど』

『私は食べながら』

『あなたの唐揚げが食べたくまりました』

え え 俺の 俺の 唐揚げ 愛里 食いてえって 俺の
涙が 声出て 止まなくて 拭っても 拭っても 止まなくて
愛里 愛里 愛里 愛里 愛里 俺は

『俺は愛里に俺の唐揚げ食べさせたい』送信

声出して泣きながら

『愛里、ごめんな』送信

ごめんな 愛里 ごめんな 愛里 ごめんな

『俺、淋しすぎて頭おかしくなった』送信

もうそのまんまでさ 俺のそのまんまでさ

ピコン

『私がこっちにいます』

『あなたとのことが夢だったのかなって思ったのは』

『きっと』

『あなたのお父さんが夢なんじゃないかって言うのと同じで』

とうちゃんのと 同じ？

『あなたから離れると、あれは夢だったんじゃないかって』

『あなたといると夢みたいにしあわせだから』

大声出て 抑えらんなくて 声出して 泣いて 泣いて
俺と 俺といると しあわせ 夢みたいにしあわせ
愛里 愛里 愛里
「愛里ー！」
聞こえねえけど 届かねえけど そんなでも
『俺 マジ泣いてるんすけど』送信
泣いてんだよ 愛里 俺
『とうちゃんの夢みてえだっつうの同じってさ』送信
とうちゃんの夢みてえっつうのはさ
『愛里にそう言ってもらえるなんてさ』送信
最上級にしあわせのときでさ
『ちょっと今言葉出ねえ w』送信
w なんてつけてっけど 泣いてんだよ そんなでも これは
ピコン
『今日ペアのキーホルダーが置いてあるショップに行って』
ピコン
『やっど←これの意味がわかりました』
ピコン
『これって傷つけるって意味じゃなくて』
ピコン
『胸キュンみたいなことだったんですね』
愛里 可愛すぎてさ 俺また泣いてんじゃん
『やっどわかってくれましたか www』送信
w はさ 愛里メチャ可愛って溢れちまって泣いてるってことで
ピコン
『でも矢の方が刺さると痛そうで買いませんでした』
痛てえよ 愛里の矢は メッチャ痛てえくれえしあわせでさ
『なんもいらねえよ』送信
マジで
『愛里がそばにいてるだけで』送信
マジで
『俺はしあわせなんすから』送信
ピコン
『あなたに会いたいです 今すぐ会いたいです』
愛里
「愛里ー！」
会いたい 俺に 今すぐ 愛里が 会いたって言ってくれた 俺に
『待ってっから』送信
『俺はずっと待ってっから』送信
ピコン

『待っててください』

待っててくださいって 待ってて

ピコン

『あなたがいないと 私は 息ができません w』

愛里は どんだけ 俺を泣かせりゃ気いすむんだよ

俺は今大津波にぶっ込まれて 息できねえよ

なんて送ればいいんか わかんねえよ いっぱい思いがあり過ぎてさ

『』送信

俺のハートは 愛里の矢を刺されて 大出血だよ 止まんねえよ

ピコン

『そうですか 今はわかります w』

『そうですかって www』送信

愛里だよ メッチャ愛里だよ 俺の愛里だよ

『そうですよ w』送信

愛里との いつものLINEに戻ったみてえで

いつもの愛里と俺に戻ったみてえで メッチャ

笑わせてえ 愛里のこと いつもみてえに どうする？

自撮りか 俺の自撮りいつも笑うもんな

涙と鼻水拭いて こうか？ パシャッ 送信

ピコン

『そこは、私の部屋じゃないですか？』

そうだよ 愛里の部屋だよ 愛里の

『そうだったっけかなあ』送信

ピコン

『私の部屋で寝てるんですか？』

寝ちまった 愛里の部屋で

『愛里のベッドでは寝てねえから』送信

ピコン

『勝手に私の部屋に入らないでください！ w』

私の部屋 愛里の部屋 ここが愛里の部屋だって愛里は思ってくれてて

愛里 俺は 俺は愛里とのこと マジでさ

これからも 将来ずっと いつか愛里と

だから

『高校卒業したら』送信

メッチャドキドキしてる

次に送るのは これは プロポーズみてえなことでき

それでも 俺の本気だから

『愛里と俺の部屋にしていいいですか』送信

どう思うかな どう思ってたかな

ダメでもいいよ それでも俺 いつかさ

ピコン 来た

『大家さんに要相談』

え これ これって かあちゃんがいいつつたら

愛里は 愛里はいいつつうこと？ 俺と

「愛里ーーーーー！」

メッチャ メッチャ

これってさ これってつまり、プロポーズして YES って言われたみてえなさ

だよな だよ なんか逆にドッキドキしてきた

愛里は俺と住んでもいいって思ってたよ！

「ヤッペーーーーー！」

あ、ちっと声デカ過ぎたな

かあちゃんに相談か まだ先だけどさ

『今度はマジで丸坊主になんなきゃいけねえかも w』送信

丸坊主になるよ俺 ぜーんぜんなる

愛里と一緒に暮らせるならスッパにだってなる たたきんどこでスッパ

あ、そろそろ仕事行くしたくしねえと

愛里 ずっと話しててえけど

んっと向こうは夜だよな

『愛里 おやすみ』送信

ピコン

『バイトいってらっしゃい』

いってらっしゃいって言ってもらえた

『稼いできやす！ w』送信

愛里のために 愛里と俺の将来のために

ピコン

『お願いします w』

お願いしますって おおおおお 稼ぐ 今日もがんばる

メッチャがんばれる！

菜っ葉

階段駆け上って 家のドア開けたら

「ダイチ！」

「どうちゃん、おはよう」

「あ、お、おはよう」

顔洗って 作業着に着替えて

おっし 今日も つうか、今日からまたバリバリ働くメッチャ働く

キッチン行ったら

「ダイチ、ほれ、握りメシ食ってけや」

「ありがとう、ハァァァ 美ん味めえ」

ゆうべは全然食欲なかったのにさ、今朝は握りメシが沁みるほど美味え

どうする、どうちゃんに、なんつったらいい？ んっと

「どうちゃん」

「ど、どした？」

「愛里がさ」

「アイリちゃん」

「でっけえステーキ食ったんだってさ」

「でっけえステーキ」

「メチャでっかくて柔らかかったけど」

ヤベ 口んとこニマニマしまう

「俺の唐揚げが食いたくなっただってさ」

「そっか、そっか」

「うん」

「ダイチ、よかったなあ」

どうちゃんが ホットした顔で俺を見てる

「どうちゃん、心配かけてごめんな」

「俺は、んな、なんもできねえからよ」

「どうちゃん、愛里がさ、俺といるときに夢みてえつつったのはさ」

どうちゃんが穏やかな目で俺を見てて

「どうちゃんが、夢みてえだなっつうときとおんなしだって」

「そっか」

「俺といると・・・」

ヤベ また泣きそうになってる

「夢みてえに・・・ しあわ・・・せだって」
「そっか」
どうちゃん 優しい顔で笑って
「そっか」
「どうちゃん・・・ んなこと言ってもらえたよ」
どうちゃんに抱きついて
「よかったな」
どうちゃんは俺の背中さすってくれて
「そんじゃ、ダイチはアイリちゃんのために稼がねえとな」
「お、おう」
涙と鼻水 手で
「ダイチ、ほれ、これで」
「どうちゃん、それ雑巾だろ」
「あ、そんじゃ、これだ」
どうちゃんが自分のシャツ、グイッと引っ張って俺の顔拭いてくれた
「俺の鼻水メッチャついちまっちゃよ」
「いんだよ、俺のシャツはダイチと美里のティッシュだからよ」
「俺、メッチャ愛用してるよ」
「これは洗えっからな」
「だな」
「ダイチ、これ、おっちゃんたちに持ってけ」
これは 菜っ葉の炒め物？
「ピリ辛で甘じょっぱくしてあっから」
「菜っ葉買ったんか」
「昨日ひっさしぶりに商店街行ったらよ、八百屋んどこにいっぺえ積んであって、
捨てるつつうからもらってきた」
「どうちゃん、すげえ」
「最近は大根っ葉あんま食わねえんだってな」
「美味えのに、俺大好きだよ」
「残りは茹でて冷凍してっけど、今日の晩メシにもな」
「何作んの？」
「何がっかなあ」
「菜っ葉メシ食いてえ」
「そっか、そんじゃそうすっか」
「おっしゃ、そんじゃ俺メッチャ働いて腹へらして帰ってくる」
「いっぺえ作っとくからよ」
「うん、そんじゃ、いってきます」
「いってらっしゃい」
おっちゃんたちの握りメシ持って 現場へGO！
軽い！ 身体も心も超軽量だ！

昼休憩

「こりゃ、菜っ葉け？」

「ピリ辛で甘じょっぱくしてるっつって」

「こりゃ美味えなあ」「めなあ」

とうちゃん、おっちゃんたち喜んでよ

「これは、わんざわざ俺たちのためにい？」

「おっちゃんたちにとって」

「そりゃあ、散財させてえ、な～んか申し訳ねえなあ」

「菜っ葉はタダなんで」

「タダ？ だいづん家で作ってのお？」

「作りたかったんすけどねえ、かあちゃんが・・・」

「ほんじゃ、もらったんけ？」

「とうちゃんが八百屋で捨てるつつうのをもらってきて」

「捨でんのを・・・」

「とうちゃん、キャベツとか、うわっかわの捨てるともらってきて」

「うわっかわを・・・」

「この前焼きそば作ったんすけど、それに使うキャベツと玉ねぎ全部」

「捨でんのをもらってきた？」

「そうなんすよ、あやうく麺だけになるとこで」

「麺だけ・・・ そりゃ」「なんぼはあ」

「肉は・・・ あったんだっぺ？」

「肉なんて買えねえっすよ、キャベツも買えねえのに」

「そりゃ・・・」「わもうなげでぎだあ」

え？ なんで涙ぐんでんだ？ 感動？ そこまで感動してくれてんの？

「とうちゃんいなきやどうもなんなかつたっす」

「だいづのとうちゃんはえれえなあ」

「俺、とうちゃん目指してんすよ」

「だいづならあ、なれっぺ」「んだよ」

「そうっすか？」

おっちゃんたち人生の先輩が言うんだから可能性あるつつうことだよな

「んでよめっごは？」

「スギさん、まだ嫁でねしたあ、結婚してねんだからあ」

「んだっだ」

「だいづ、所帯持ちてえ子とはあ仲直りできたんけ？」

「おいっす、おかげ様で」

「いがったなあ」

「俺が作った唐揚げ食いてえって」

「唐揚げ、そりゃ・・・ ていへんだなあ」

「んなことねえっすよ」
「好きな子にはあ、食わせでもんなあ」
「そうっすね、食わせてえっす」
「肉もお拾ってこれればいんだけんちょ」
「肉はムリっすよ」
おっちゃんのジョーク メッチャおもしれえな
「にんわどりけばいんでねが」
ん？ なに？
「そりゃ・・・東京じゃむずかしいっぺえ」
「なんすか？」
「スギさんがあ、ニワトリ飼えばいいんでねえかってはあ」
「それは」
飼いてえな どこで？ ベランダ？ かあちゃんに殺される 俺が
「ほれ、スギさん、だいづが黙っちまったっぺ」
「よげなごどしゃべっだべが」
「だ、だいつ、大丈夫だあ、だいづ働きもんだからあ、買えっからあ」
「や、それは・・・」
ニワトリはムリだ
「もしもんときはあ、俺とスギさんで、なあ」「んだ」
「いやいやいや、あの」
ニワトリくれようとしてんのかな
「ムリっす」
「だいづ、唐揚げ食わせてんだっぺ？」
「あ、はい、それでも」
ニワトリは
「だいづならあ鶏肉ぜってえ買えっからあ」
あ、鶏肉か
「おいっす」
「がんばれえ」「けっぼれ」
投げ売り買うのがんばれっつうことか
「俺、メッチャがんばります！」
「んだ」「できっからあ」
「おいっす」
おっちゃんたち、優しいなあ

あと一時間ちよいで今日の仕事は終わりだな
あれ？ ゴム長の・・・指んとこ裂けてんな
「ヤッさん、ガムテ持ってねえっすか？」
「ガムテは持ってねえなあ、なんでえ？」

「ゴム長の、ここ、裂けちまってて」
このまんまじゃ砂利入ってあぶねえもんな
「ガムテ・・・貼んのけ？」
「ガムテ貼ればなんとかなるんで」
「そんじゃ・・・監督持ってんじゃねえかなあ」
「あ、そっすね、ちょっと行ってきます」
プレハブの事務所の扉開けて
「失礼します」
「森下、どうした？」
「ガムテ少しもらっていいっすか」
「いいけど、何かあったか」
「ゴム長の、ここ、ちょっと裂けてるんで」
「また・・・貼るのか」
また？
「はい」
「そうか、これ」
「お借りします」
汚れを・・・シャツの袖で拭いて ガムテこんくれえか おっし
「ありがとうございます」
「ゴム長、新しいの買ったらどうだ？」
「もったいないんで、まだ履けますから」
「そう・・・か」
「失礼します」
現場戻ったら、ヤッさんとスギさんが何か話してる
「どうしたんすか？」
「や、なんも」「なも」
なんか深刻な顔してっけど
「なんかあったんすか？」
「なんもねえよ」「なもね」
「そう・・・すか」
俺みてえなバイトには関係ねえ話なんかな そうかもな
おっし、今日の仕事は終わった
なんかさあ、愛里のために働いてると思うとヤル気違うよな
もともとそうなんだけどさ、稼いでくるつつたら、お願いしますって
たまんねえよ
「だいづ」
「はい、なんすか？」
「だいづの足、でけえよなあ」
「そうっすね、27,5か8なんすよ」
「そりゃ・・・背え高けもんなあ」

「かあちゃんが、それ以上デカくなったら着る服売ってねえって」
「だなあ、そんであの、ゴム長はどんぐれえの大きさなんだあ？」
「これはとうちゃんので、Lサイズっす」
「だいつのとうちゃんもでけえのお？」
「おんなし身長と体重と足のサイズなんすよ」
「ハァァァ、そりゃ、すげなあ」
とうちゃんのこと聞いたかったんか
だよなあ 知りたくなるよなあ わかんなあ
もっと知って欲しいよ
「そんじゃ、お疲れ様っした！」
今日の晩メシは菜っ葉メシだ！

ニワトリ

「とうちゃん、ただいま」

「ダイチ、おかえり」

「おっちゃんたち、菜っ葉の炒め物美味えつつって喜んでた」

「そっか、あ？　ダイチ、ゴム長のそこんところ」

「裂けちまったからガムテもらって貼った」

「そっか、砂利とか入ってくっと危ねえかな」

「検索したらゴム長補修キットって売ってんだけどさ」

「そんなんあんのか」

「うん、ほれ、これなんだけどさ、それでも 635 円とかでさ」

「これ使えば、またしばらく履けんじゃねえか？」

「だよな、それでもバイトはあと 2 日だからなあ」

「ダイチのバイト終わったらよ、一回洗ってそんでその」

「あ、そしたらまだしばらく」

バンッ

「イデッ」

かあちゃん

「美里おかえり」「かあちゃん、おかえり」

どした？　なんで手で鼻押さえてんの？

「この玄関、納豆を敷き詰めて 3 日間密封したような臭いがする」

「なんだそれ？」

「息をしたくない」

「かあちゃん納豆好きじゃん」

「そういうことじゃない！　その汚物捨てなさい！　今すぐ！」

「汚物ってなに？」

「その汚ったなくて臭っさいゴム長！」

「明日も仕事あんだよ、あさってまであっから捨てらんねえよ」

かあちゃんが険しい顔で俺のこと見て、そんでとうちゃんを見て

メーッチャため息ついた　なんだよ？

そんで玄関の棚の上に置いてあるハッカスプレーメッチャシュッシュして

「かあちゃん、それ虫除け用だよ」

「あんたはシャワー！」

「ここでスッパ？」

「そのままバスルームに走って！」

「あ、はい！」

今日はたたきでスッパは免れたな

とうちゃんの菜っ葉メシは美味え

茹でた菜っ葉に白ゴマと塩昆布入れて白飯に混ぜてさ

いっくらでも食えるよ

この茄子の揚げびたしとピーマンの素揚げも美味え

そんでこの塩コショウとレモンだけで焼いた鶏肉たまんねえな

「美味しい」

かあちゃんも大満足だよ

「おっちゃんたちがさ、俺が愛里に唐揚げ作るっつたらさ」

とうちゃんがニコニコして聞いてくれてる

「ニワトリ飼えばいんじゃないかっつてさ」

「ニワトリか」

「たしかにさ、ニワトリ一羽なら全部使えるよな」

「使えんな、ガラスープも作れっからよ」

「そんでもさ、一羽じゃ足んねえよな」

「だなあ、一回食って終わっちゃうな」

「名前をつけたら？」

かあちゃん？ 乗り気なんか？

「たとえば、愛里ちゃん」

愛里ちゃん？

「愛里ちゃん愛里ちゃんて可愛がって 食べるのよ」

「なんで愛里って名前にしなきゃなんねえんだよ」

「だったらダイチ、首をキュッと」

「名前つけなきゃいいだろ」

「俺・・・鳩食ったことあんな」

「鳩？ 鳩は条例で捕ったり食ったりしちゃいけないじゃね？」

「仲間のおっちゃんが、あ、浮浪者の」

「あ、おう」

「死んだ鳩見つけてきてよ、羽むしって茹でて」

そっか・・・ニワトリもそれしなきゃなんねえよな

「みんなで食ったんだけどよ、臭せえんだよ」

「鳩って臭せえの？」

「腹減ってっからあんま気になんなかったけどよ」

そっか、鳩って臭せえのか

「ジビエ料理に鳩肉があるわよ」

かあちゃん？

「高級食材よ、野生の鳩だから異様な臭みはないけど、
それでもけっこうクセがあるわね、好きな人はそれがいいらしいけど」
すげえな、いろいろ知ってたな
「どうやって料理すんの？」
「私が知るわけないでしょ」
だよな 食う専門だもんな
「私はカズオがスーパーで買ってきたこの鶏肉の方が 100 倍好き」
とうちゃんメッチャ嬉しそうな顔してるよ
「ダイチ、ニワトリなんか飼ったら」
俺を指さした 首に両手あてて そんで今度は雑巾絞るみてえにキュッ
「飼わねえよ」
「ごちそうさま」
かあちゃんなら表情ひとつ変えねえでニワトリ絞めれそうだよ

あさってでバイトが終わる
しあさってに愛里が帰ってくる
やっと帰ってくる 長げえと思ってたけど 長かったけど
それでもさ、もう少しで帰ってくると思うとドキドキすんな
あっ 指輪
いつ買う？ 最終日？ 最終日はいちおう監督に挨拶とかしねえとさ
いらねえのかな？ やっぱした方がいいよな
高校生だっつたら、簡易履歴書出させてさ
ふつうは要らねえんだけど、何かあったときにつて
あの現場監督、すげえよな、気配りつつうかさ
なんかお礼持ってた方がいいんかな？
それでも監督にバイトの高校生が どうなんだ？
ヤッさんとスギさんには？ なにかお礼してえよな
あんまかしこまったやつは逆に、前言われたな迷惑だって
あれ？ 違う意味だったか？ そんでもんかさ
あ！ タオル、首に巻くタオル あれだったら何本あってもいいもんな
明日帰りにスーパー寄って買ってこよう
それよか、指輪だよ
明日買うか？ 仕事終わった後じゃ店閉まってっかもしんねえな
ああいうとこって何時まで開いてんだ？ そんでも閉まったらな
昼休憩るとき？ だな メシ食って、そのあとならさ
おおおお なんか緊張してきた
愛里の指輪 部屋から持ってきた 今朝
3個あってさ どれもおんなしサイズだったから この白い花がついたやつ
これ持ってけばいいんだよな そんでサイズ測ってもらって

金は余裕もって持ってった方がいいよな ギリで足りねえとかやべえもんな
いくら？ 二万はギリかもな 三万か かあちゃんは一万円台つってたから
三万持ってきゃ余裕だな
こんなでけえ買い物すんの初めてだな
それでも愛里のためならなんつうことねえけど
いくらでもいいよ また稼ぐしさ つかまだまだ余裕だけどさ
この指輪をティッシュに包んで小銭入れんところに入れて
寝よう

昼休憩

「だいづ、これえ」

ヤッさんがタッパーのフタ開けて さといも？

「うちのおっかあがぁ、だいづに食わせろってはぁ」

「俺に？」

「急だったからぁ、鶏ひきききゃねえつつうんだけんちょ」

「急だった？」

「や、あのお、急にい、だいづに作りたくなっただってえ」

「マジッすか、いただきます」

うおっ 美味え

「美味えっす」

「そっかぁ」

とうちゃんは煮ころがしか筑前煮で、さといもと鶏ひき肉つつうのは

「鶏ひき入ってんのは初めてっすよ」

「はじめで・・・か」

「はい、やっぱ鶏ひき入ると違うんすね」

鶏ひき肉がいい出汁出してんだな 今度作ってみっかな

「だいづ、わのかっちゃんもだいづさっで」

スギさんまで？

「ブダっきゃねぐでよ、にぐはにぐだはんでいんでねがっで」

ん？ え？

「豚肉入ってんだってえ」

「あ、はい」

これは豚肉と、しらたきと、この細いのは

「これはタケノコっすか？」

「んだ」

この細いのは食ったことねえなあ 細竹か？ 春先スーパーで見ると

「これは食ったことねえっす」

「たげのご食ったごねの？」

「これはねえっす」

え？ ヤッさんとスギさんが顔見合わせてっけど
あれか？ 東北の人にとっては、みそ汁食ったことねえ日本人的な？
「美味え」
シャキシャキして、しらたきと豚肉と細竹って組み合わせは初めてだな
これはふつうのタケノコでもできんじゃねえか？
なんかメッチャ料理の幅が広がんなあ 知らねえのいっぱいあんだな
「俺、ヤッさんとスギさんに会えてなかったら」
東北の家庭料理なんてふつうはぜってえ食べねえもんな
「こんな美味えの一生食べなかったす」
「一生っで・・・」
え 涙ぐんでっけど そっか これは東北人の誇りか
「いいがらあ、食べえ、いっぺえ食べえ」
ありがてえなあ
「そんでえ、唐揚げはあ、あのお大丈夫そうがあ？」
「あ、はい、唐揚げつつたら、ゆうベニワトリの話になって」
「飼うのお？」「たでの？」
「や、かあちゃんが、名前つけたら食べねえよって」
「名前はあ、つけねえ方がいいなあ」「んだな、そっだのは」
「そっから、とうちゃんが鳩食ったことあるつつって」
「ハ・・・ド？」
え？ ヤッさんとスギさんが口あけて 恐ろしいもの見てるみてえな
「や、生きてんのを取ったり食ったりしたらダメなんすけどね」
「ハトってえ、あの飛んでる鳩け？」
「浮浪者仲間のおっちゃんが死んだの見つけてきて」
「死んでる鳩を・・・」
「羽むしって茹でて食って、臭かったつつって」
「臭せえ・・・」
「とうちゃんは腹へってたから気になんなかったつつって」
「そう・・・かあ」
「かあちゃんも食ったことあるって」
「おかあちゃんまで？」
「高級だつつって」
「鳩が・・・高級」
「俺は食ったことねえけど」
「だいづ」
「はい？」
「だいづの好きな子にはあ、鳩は食わしちゃんねえよお」
「鳩は、俺は料理したことねえから」
「唐揚げ、鳩で作っちゃんねえよお」
「唐揚げは鶏肉っすよね」

「だいつならあ、ぜってえ買えっからあ」「んだ」
「俺、ギリ狙って手に入れますから」
「がんばれ」「けっばれ」
「おいっす」
すげえ応援してくれてんなあ 愛里とのこと
あ！ そろそろ行かねえと
「ヤッさん、スギさん、俺、あの、ちょっと」
「どしたのお？」「どすだ？」
「あの、ゆ、ゆ、指輪、買ってきます」
「おおおおお」「わああああ」
「彼女、あさって戻ってくるんで」
「そっかあ、がんばれ」「けっばれ」
「はい！ いってきます！」
通りの向こうの店に走った

指輪

メッチャきれいな店構えだな 愛里が好きそうだな
自動ドア開いて
ん？ みんなビックリした顔で俺のこと見てっけど
男一人でこういう店来るって あんまねえのかな？
んっと どこだ？
「お客様」
「あ、はい」
「何かお探しですか」
なんかメッチャキツイ感じすんだけど 俺が緊張してっからかな
「あの、ゆ、指輪」
「指輪」
「サ、サファイアの」
「サファイア」
なんで俺の言ったこと繰り返すんかな あ、確認？
こういう店は客の言ったこと間違えねえように確認すんのか
「サファイアのリングはあちらでございます」
「あ、そうすか」
あれ、これはダイヤモンド おおおお 0の数ハンパねえ
「こちらはダイヤモンドでございますが」
「あ、サファイアで」
それでも、いつかは ダイヤなんだろうな いつかは
ここか
んっと？ どれだ？
「どういったものをお探しですか」
「あの・・・」
あ、かあちゃんが見せてくれた画像 あった
「これかこれなんすけど」
画像と俺の顔チラチラ見てっけど
「こちらと こちらになります」
おおお ガラス越しでもやっぱ画像よかきれいだな
どっちだ？
「あの、見せてもらっていいすか？」

「見せてとは？」
「もっと近くで」
俺の顔ジーッと見てっけど 意味わかんねえのかな
「あの、手にとって見るっつうのはダメなんすか」
「手に取って」
「見たいんすけど」
「そうですか」
なんか考えてる なんだ？
「少々お待ちください」
なんかそばにいる人に耳打ちしてっけど なんだ？
そんな嚴重なんかここ？ これって1万2千円だよな 書いてる
一億二千万じゃねえよな
奥から男の人が出てきた
「お客様、私が担当させていただきます」
名札に 店長 すげえ 店長自ら接客するようにしてくれたんか
そこまでしてくんなくてもいいのにさ すげえな 扱いスペシャルじゃん
「こちらとこちらをご覧になりたいとのことでございますね」
「はい」
「それでは」
なんかすげえきれいなビロード貼ったのに載せてくれて
おお やっぱきれいだなあ どっちがいいんかなあ
「こちらは税込み一万二千円、こちらですと一万五千円でございます」
そんなきれえっつったよな かあちゃん んっと・・・ あれ？
ケースん中の この指輪 見たことあんな どこで・・・
「あ！」
「お客様、どうかなさいましたか」
「あ、や」
このケースん中の指輪、前に愛里がアクセサリーの店で見てた指輪そっくりだ
ずっと見ててさ、はめてみたり外してまたはめて
これじゃねえか？ 愛里が好きなのってこれじゃねえかな
「あの、この指輪は」
「こちらは今朝入ってまいりました新作でございます」
だからサイトの画像になかったんか
「これ見たいんすけど」
「こちらは税込み2万8千円でございます」
3万ある
「見せてください」
「かしこまりました」
ビロードの台に載った指輪 メッチャきれいだ 石の青もすげえきれいだ
これだよこれ これっちきゃねえよ

「あの、これください」
「こちらでございますか」
「ブ、プレゼントで」
「サイズはおわかりですか」
そうだ、そうだった ズボンのポケットからティッシュに包んだ愛里の指輪
「これでサイズお願いします」
「かしこまりました」
かあちゃん、アドバイスありがとう
え？ かあちゃん、俺が愛里に指輪買うってわかったってこと？
「こちら7号ですが、指輪によってはサイズが多少変わることも」
「3個持ってて、全部おんなしでした」
「それでは7号をご用意させていただきます」
大きいと外れて他の男が拾っちゃうからさ
「お願いします」
「只今お包みしておりまして先にお会計の方をさせていただきます」
「はい」
ズボンの後ろポケットから一万円札三枚
入れたまま作業してたからシワになっちゃってっけど あ、ちょっと泥ついて
それでも、俺がバイトして稼いだ三万円
「これでお願いします」
「お預かりいたします」
なんかメッチャ現実になって メッチャドキドキしてきた
「おかけになってお待ちください」
「あ、はい」
え 俺のズボン泥だらけだから
「あの、俺のズボン汚れてるんで立ってます」
店長さんが俺の顔見てニッコリして
「お気になさらず、お座りになってください」
マジっすか かあちゃんならメッチャ怒るけどな
「そんじゃ」
ちょっと端っこの方に座った
泥取るの大変なんだよな この椅子布製だからさ
愛里 なんつうかな ウワッダッサ！ つうかな
ウワッダッサっつってもいいよ 全然いいよ 笑うよ俺
それでもさ 受け取ってくればいいよ
俺は本気だから
「お待たせいたしました」
おおお メッチャきれいな袋
「こちらは保証書でございます」
「保証書？」

「修理などのときにお持ちいただければ三年間でしたら無料で承ります」

「ありがとうございます」

「こちら、このようにお包みしておりますので」

袋の中に袋入ってて持ち手んとこにリボンまでつけてくれる

「ありがとうございます」

俺的にはさ 俺的にはぜってえ愛里に似合うと思うんだけど

なんかちょっと どうなんだ？

「お客様、どうかなさいましたか」

これは プロに聞いてみた方がいいかしんねえな

今さらだけどさ なんか自信欲しいっつうか

「あの、この指輪」

「はい」

「この人に、似合うと思いますか？」

ロック画面見せた

「これは・・・」

え？ ビックリした顔してっけど？ なに？ なんだ？

「おきれいな方ですね」

「そうなんすよお」

「とてもお似合いになると思います」

「そうすか？ ありがとうございます！」

「こちらこそ、ありがとうございます」

「いや、マジありがとうございます」

90度のお辞儀して顔上げたら 店長さんニッコリしてくれた

店の外に出て

買った！ 愛里の指輪買った！

今脚震えてきた

マジで買ったんだよな

振り返ったら え？ スタッフの女の人がメッチャシュッシュュッて

かあちゃんみてえなことしてっけど なんだ？ 虫？

まあいい、早く戻んねえと休憩時間終わっちゃう

指輪入った袋持って

「ただいま」

「ダイチ、おかえり」

「どうちゃん、これ」

袋をどうちゃんの前に差し出して見せた

「なんだ？」

「愛里に 指輪買った」

「おっ おおおお」

「2万8千円っ」
「2万8千円・・・ え？ 2万8千円？」
「んな大金出すの生まれて初めてでさ」
「ダイチ」
「どうちゃんが なんか なんつうの 驚いたみてえな顔してっけど」
「え？ なに？」
「俺が・・・ 生まれて初めて、大金出したんが、2万8千円」
「えっ？ マジ？」
「ヒトミが生まれる前に、退院すつとき、きれいな服着せてえって美里が」
「なんかその話、ねえちゃんに聞いたことあんな」
「そんで、これがいいつって、そんで、俺、出した」
「それが、2万8千円？」
「生まれて初めてんな大金出したからよ、今でも憶えてんだよ」
「マジか」
「あんときから、んな大金出したことねえから今でも憶えてる」
「どうちゃん、なんか、これって運命じゃね？」
「俺、ビックリした」
「それってさ、俺も着たやつだよな」
「ダイチも着た、かあちゃん今でも取ってある」
「どうちゃん、ウソみてえだ」
「なあ、俺ビックリした」
「どうちゃん！」「ダイチ！」
「どうちゃんと抱き合っ」
「バンッって俺の後ろでドアが開く音がして」
「なにやってるの？」
「かあちゃん」
「美里、おかえり」
「かあちゃん、おかえり」
「サッと後ろに袋隠したけど」
「買ってきたの？」
「え、な、なに？」
「指輪」
「やっぱ・・・ かあちゃん わかってたんだ」
「おい・・・っす」
「あとで見せて」
「包んでくれてっから」
「いいから」
「愛里より先に見せらんねえよ」
「保証書見せればいいな」
「シャワー！」

「はい！」

メシ食って 片付けしようと思ったら

「俺がやっから、早くかあちゃんに見せてやれや」って

リビングのソファに座ってるかあちゃんの前に袋と保証書置いた

「いつ買ったの？ 今日？」

「昼休憩るとき」

「え？ まさか、あの恰好で？」

あの恰好？ あ、作業着？

「昼休憩るときだから、俺着替え持ってってねえし」

かあちゃんが目ん玉飛び出んじゃね？ くれえ目えむいた

「よく入れてくれたわね」

「どういう意味だよ」

「あんな恰好で」

「フツツーに入れたよ」

「私が店長だったら絶対入れない」

「なんでたよ、客じゃん」

「他のお客様もいるでしょ」

「それでも途中で店長さんが出てきて俺に接客してくれたよ」

「ああ！」

「ああってなんだよ」

「もしものときにはねえ」

「もしもってなんだよ」

「あんたが指輪持って逃げるとかね」

「んなことしねえよ！」

「世の中はね、見た目で判断するの」

「バッカみてえ」

「バッカみたいなのよ、でもそれが現実」

え・・・ だから最初の女のスタッフさんキツイ感じだったんか？

それで店長さん呼んだんか？ ハァアアアア？

「いい経験したわね」

そんじゃ・・・ ヤッさんやスギさんは いつもそんな

とうちゃんは 浮浪者だったとき 万札使おうとしたら盗んだんじゃねえかって

それか？ そういう

「かあちゃん、みんな一生懸命働いてんのにさ、家族たのめに働いてんのにさ」

「私に涙目で言われてもね」

「だってさ」

「それで？ 指輪見せて」

「ここに写真載ってる」

「あら、これって」
「こっちの方が愛里に似合うっつうか、愛里が好きなんじゃねえかなって」
「あんたが選んだの？」
「うん」
「へえ」
「あ、それでも、いちおう店長さんに愛里の写真見せて似合うか聞いたし」
「店長さんは、ちゃんと接客してくれたのね」
「うん、俺が泥だらけだから座らないで立ってるっつったら、
そんなん気にしねえで座っていいって」
「その人、出世するわ」
「マジ？」
「もしくはもっといいところにヘッドハンティングされるわね」
「なんでわかんの？」
「この指輪いくらしたの？」
「2万8千円」
「2万8千円？ それってカズオが
かあちゃんも憶えてんだ
「とにかく、汚ったくて臭っさいあんたが」
「なんだよそれ」
「2万8千円をちゃんと出して買ったわけでしょ」
「買った」
「あんたを追い出してたら2万8千円の売り上げはなかった」
「まあそうだけど」
「どういう恰好をしても、一人の人間として、お客様として扱う、
それができる人はどこに行っても仕事ができるのよ」
一人の人間として
「でもね、世の中は見た目だけで判断する人が多いのも事実」
「そっか」
「で？ これは袋ごと渡すつもり？」
「ちゃんと包んでくれてっから」
「袋から出して、ラッピング取って・・・ その間に耐えられない」
「その間ってなんだよ？」
「袋から出しながら、どういう反応すればいいんだろう、
ラッピングはがしながら、好みじゃなかったらどう反応すればいいの？」
「ハア？」
「だいたいそういうこと考えて開けてるのよ」
「いいよどんな反応したって」
「怖いからいらないって言われたら？」
「え？」
「私が愛里さんなら、そうねえ、キッチンの棚にでも隠しておいてもらって」

キッチンの棚？ 愛里見ねえな
「ケースごと気軽なカンジで渡してもらった方が気が楽ね」
「気軽なカンジ？」
「片膝立ててパカッと耐えられない」
「んなことしねえよ」
「まあ頑張ってる」
「なんだよそれ、ただ、なんつうか、バイトの、なんつうか」
「喜ぶわよ」
「え？」
「どんなにダサくても」
「え、これ、ダセえかな？」
「さあね、愛里さんじゃないからわからないわね」
「え、んじゃ見せっから、本物見てくれよ」
袋から出してラッピング取って箱のフタ開けて
「これ」
かあちゃんが手に取ってジッと見てる
「ダイチが初めて買った愛里さんへの指輪」
「おう」
「私なら・・・ステキだと思うけど」
「マジ？ マジっすか？ マジ？」
「知らない、愛里さんじゃないから」
「なんだよおお、かあちゃん」
「よかったわね、買えて」
「あ、うん、あの、サイズも、かあちゃんが教えてくれたみてえにした」
「そう」
かあちゃんが立ち上がって
「お風呂入ってくるわ」
俺も ケースの中の指輪見て
俺がバイトした金で買った 愛里への指輪
ウワッダッサって言われてもいいよ
受け取ってください

仕事納め

今日は現場のバイト最終日
昨日ヤッさんとスギさんへのお礼のタオル買った
三枚で 285 円 バイト代で買った
洗濯して乾燥機かけたからすぐに使える
顔洗って 作業着に着替えて
この作業着姿やっとさまになってきたのにな
これも毎日とうちゃんが洗ってくれてさ
キッチンに行くと
「ダイチ、おはよう」
「とうちゃん、おはよう、あのさ、これ」
「タオル？」
「なんつうか、お礼です」
「お礼？」
「とうちゃんがいてくれたから、俺はこの 7 日間無事に」
「ダ、ダイチ、朝から俺に土下座なんかすんなよ」
「仕事できました、ありがとうございます」
「ダイチ、俺はよ、ダイチと一緒に現場で働いてるみてえなよ」
「とうちゃんは土下座すんなよ」
「すげえ楽しい思いさせてもらってよ、ありがとな」
「とうちゃんのこのタオルもらっていいかな」
「んな擦り切れてんのよか、この、ダイチがくれた新品使いや」
「それは俺のバイト代で買ったとうちゃんへの感謝の気持ちだからさ」
「んな、俺はなんもしてねえよ、ダイチががんばったんじゃねえかよ」
「とうちゃんのこのタオルは俺のお守りみてえなもんだからさ」
「え・・・」
「焼きそばるときも現場でも、とうちゃんと一緒にいるみてえなさ」
とうちゃんが横向いちまって そんで
「そんじゃ、この、ダイチが買ってくれたタオルは俺のお守りだ」
「とうちゃん」
「ダイチ、握りメシ食ってけや」
「おう」
二人で立ち上がって とうちゃんがでけえ握りメシくれて

「これで今日もがんばれっから」

「がんばれよ」

そんで、おっちゃんたち用と俺の握りメシ持って
最後のバイトに向かった

昼休憩

「だいづ、おっかあの卵焼き食え」

「ヤッさんの奥さんの卵焼きは現場仕事には欠かせねえっすね」

「これにい大根おろし乗っけてしょうゆかけっとお、酒が進むんだあ」

「おめはなもなぐでも酒かっくらってらべや」

「ゆんべもよお、あともう一本ったら、稼いできてから言えっはあ」

ヤッさんとスギさんがいつもとおんなしような会話して笑ってて

なんかこういうのがずっと続く気いして

「だいづ、好きな子お、明日帰ってくんだっぺ？」

「おいっす」

「そんじゃ明日唐揚げ作んのお？」

明日帰ってきてすぐに唐揚げつつうのは どうなんだ？

「明日作れるかどうかはまだわかねえっすね」

「そっかあ」

ヤッさんとスギさんが顔見合わせてっけど？

「だいづならあできっからあ心配すんな」

「おいっす」

もしかして、俺が唐揚げ作れねえと思ってんのかな

だからやたらと心配してくれてたんかな

「俺、作れるんで、大丈夫っす」

「だいづならできっからあ」「んだ」

「おいっす」

いつもとおんなしに昼休憩終わって いつもとおんなしに仕事に入った

これで 俺の7日間のバイトが終わった

ヤッさんとスギさんにタオル渡さねえと

荷物置いてるところからタオル持ってきて

「ヤッさん、スギさん、これ、なんつうか、お礼っす」

「お礼なんてえ、そんなのいいんだよお」

「こんなことしかできねえけど、洗ってあるんで、すぐ使えますから」

「そっかあ？ そんじゃ、なんつうか」

「あの・・・ ヤッさん、スギさん」

「だいづ、監督にい挨拶した方がいんでねえかあ」「んだよ」

「あ、そうなんすか？」
「俺たちはあもう帰っからあ」
「え、あ、そうすか」
「そんじゃな」「んだらな」
「あ、はい」
あっさりしてんな メッチャあっさりしてんな
こういうもんなんかな かもしんねえな
言ってみれば、俺はチョコッと来てチョコッとバイトしただけの高校生だもんな
監督に挨拶しねえと

「失礼します」
プレハブの監督室の扉開けて
「森下か、今日で最後だったな」
「はい、お世話になりました」
「これ、今日の日給」
「ありがとうございます」
んっと・・・
「7日間本当にありがとうございます」
「ご苦労さん」
「それじゃ失礼します」
「あ、ちょっと」
「はい？」
「だいつの物語知ってる？」
「だいつの物語？」
「森下大一の物語」
「なんすかそれ？」
「コーヒー飲む？」
「あ、はい、いただきます」
監督の部屋のパイプ椅子に座って
「ヤッさんとシゲさん知ってるよね」
「シゲさん？ スギさんですか？」
「シゲなんだよ、茂るに田んぼの田でしげただからシゲ」
「エー——ッ？ 俺、ずっとスギさんて呼んでました」
「本人がなまってるからさ、すんぎだって言ってたからみんなスギさんて」
初めて聞かされる衝撃の事実だよ
「どっちで呼べばいいんすかね？」
「スギさんでいいんじゃない？」
「そう・・・すか」
「あの二人はうちのベテランで社員になってて家族寮に住んでるんだけどさ」

「そうなんすか」
「家族寮に住んでるみんなに、だいつの物語を涙ながら語って」
涙ながら？　なんで？
「俺んどこまで聞こえてきたほどだから相当広まってる」
「俺、物語になるようなこと、なんもねえっすけど」
「だいつのお父さんは昔土木作業員で怪我をして首になってホームレスになった」
それは・・・ 事実だけど
「だいつのお母さんが働いてて、休みの日も働いてるほどだ」
それも・・・ 事実だな
「だいつの昼メシは握りメシだけで」
それも事実だけど、でけっえから足りてるし、おかずもらってるし
「ニシンも食ったことがない」
それも事実だな
「タケノコも食ったことがない」
それは、たしかに細竹は食ったことなかったな
「だいつは若いのに所帯持つために必死に働いてる」
それも・・・ まあ事実だな
「その話を聞いた人はみんな涙流すんだってさ」
「え？　ハ？　あの、どこが泣きポイントなんすか？」
「全部だな」
「全部って、たしかに全部事実ですけど泣く話はどっこもねえっすよね」
「森下の恰好」
「俺の恰好？」
「その黄ばんで首元や脇に薄茶の汗じみがついてる古びたシャツ」
「これは、とうちゃんがスーパーで働いてたときに着てて、
現場では長袖のシャツだっつうんで」
「うん、長袖のシャツは正解」
「ですよね」
「それと、その着古して膝のところやケツのところが薄くなってるズボン」
「これもとうちゃんがスーパーで着てて、現場にはジーパンやスエットじゃなく、
やっぱ作業ズボンだろうっつうこで」
「うん、作業ズボンっていうのは正解、まあジーパンでもいいけど」
だったら　なんで・・・
「極めつけは、そのゴム長」
「これもとうちゃんがスーパーで履いてて、先んどこに芯が入ってっから」
「うん、芯が入ってるゴム長は正解」
「そんじゃ、何がいけなかったんすか？」
「いけないわけじゃないよ」
「そんじゃなんで泣くんすか？」
「言葉選ばないで言っている？」

「言ってください」

「パッと見、浮浪者」

「へ？」

「こういう現場って、そういう人たちもよく来るんだよ、日払いだしね、

経歴とかそういうのうさくないからさ」

とうちゃんも浮浪者だったとき 日雇いの仕事で そんでも脚ではねられて

「だから珍しくはないんだけど、若い森下が、そういう浮浪者ギリの恰好で」

浮浪者ギリ

「しかも一生懸命働くからさ」

「一生懸命働いちゃダメってことすか？」

「そうじゃないよ、ヤッさんやシゲさんにとっては」

シゲ・・・ あ、スギさん

「お父さんが元は自分たちと同じ作業員で、怪我をしてホームレスにまでなって、

その分お母さんが休みなく働いて家計支えて」

んっと・・・ 全部事実ではあるけど

「だいつは、若いのに汚い恰好で、裂けたところにガムテ貼ってるゴム長で」

そんな汚ねえかな 泣くほどじゃなくね？

「将来結婚したい子がいて、そのために人一倍働いてる」

ふつうだよな そうだしな

「どん底のど貧乏の子」

「へ？」

「そういう物語になってる」

「や、それは、最後んところは違うつつうか」

「ヤッさんとシゲさんの中ではそういう物語になってる」

「カンペキ誤解っすよ」

「俺は森下の履歴書見てたから知ってたけどさ」

未成年の高校生だからいちおう送ったんだけど

「俺は逆にさ、履歴書見たとき、お母さんが会社の重役、しかもあの会社の、

森下自身も公立トップの進学校在学で、金持ちの坊ちゃんが、

社会見学気分で、もしくは気まぐれな面白半分で来るんだらうなって」

え？

「半日もたないだろうな、いや、1時間もしないうちに根を上げて逃げるなって」

そんなふうにしてたんか

「おもしろいからやらせてみようって受け入れたらさ、その恰好だろ、

しかも働く働く、すぐに要領覚えてずっと現場やってたんじゃないかくらいにさ、

若い作業員たちは若い者同士でいることが多いのに、

森下はヤッさんやシゲさんとすぐに仲良くなってさ、ビックリだったよ」

「俺は・・・ 生活のためじゃねえけど、そんでも、遊び半分じゃねえっす」

「わかるよ、働きぶり見てたから、できれば正社員で欲しいくらいだよ」

「え？」

「森下はこんな会社には入らないだろうけどね」

え、こんな会社？

「あの、この会社って、ブラックなんすか？」

「ブラックって？」

「俺のとうちゃんが就職した土建屋は、労働時間もひどくて、中抜きされて、
とうちゃん、月三万で暮らしてたって」

「それは相当なブラックだねえ、うちはそういう意味ではクリーンだよ」

「そうすか」

「森下のお父さん、その会社の仕事中に怪我をしたってこと？」

「はい、かあちゃんが調べたら、社員になるとみんな保険に入れられて、
とうちゃんの事故は完璧な労災で、それでも、まあ入院費だけは払って、
右脚が曲がらなくなって、退院したらクビになってたって」

「そうなんだ、それは・・・」

「ここはそういうことないっすよね」

「ないよ」

よかった ヤッさんやスギさん、そんな目に遭わなくてすむ

「俺が言いたかったのは、森下は国立か私立の名門大学出て、
医者とか官僚とか、一流の企業に勤めるとかさ、だろ？」

「俺は、どこの大学とか何になるとか、まだ決めてないっす」

「まだ二年生だしね、どっちにしろ社会のトップクラスだよね」

「俺は、将来結婚する人が、金の心配や生活の心配なんかしねえで、
安心して暮らしてけるような、そういう男になりたいくて、
今回ここで働かせてもらったのも、将来のためつつうか、
少しずつでも金貯めていけたらいいなって」

「それじゃ、所帯を持ちたい子のためってというのは本当だったの？」

「はい、俺はそれっきゃないっす」

「へえ、本当だったんだ」

「ただ、ここには務めらんなくて」

「だろうね」

「とうちゃんに、俺は現場向いてっかもしんねえから現場仕事してえつつたら」

「えっ？」

「俺みてえに怪我したら終わっちまうって」

終わってねえけど

「そこんところが不安みてえで、とうちゃんに心配かけさせたくねえんで、
就職は現場じゃねえのにすっからって言ってあるんで」

「あのさ、聞いていいかな」

「はい」

「それじゃさ、もし、お父さんのことがなかったら、森下の中では、
こういう現場で土木作業もありってこと？」

「はい」

「わっかんないなあ」

「な、なにがっすか？」

「俺なんかさ、ハンパな進学校出てハンパな大学出て、この会社に入って、
いちおう一級建築士の資格取ったけど、現場にまわされて、
おそらく一生現場監督で終わるかもなあ」

「監督には現場にいて欲しいっす」

「いたくなくてもいるんじゃない？」

「俺、この現場来た初日に感動したんです」

「感動？」

「各パートの仕事の進み具合がちゃんと把握されてて、
メッチャ効率的に動いてて、だから安全で事故も起きにくくて、
ここの監督はすげえって、なんの経験もねえ高校生の俺でもそう思いました」

監督がジッと俺の顔見てる

「あっ すいません、生意気言って、それでも」

「そんなこと言われたの初めてだな」

「や、誰でもわかりますよ、ここはすげえっす」

「俺のところに来るのは、誰と誰がどうしたとか、どこの機械が調子悪いとか、
近隣からは苦情、まあそういうのが仕事みたいなもんだけどね」

「監督と仕事してる人たちは、あたりめえだと思ってんじゃないねえっすか」

「あたりまえ？」

「この効率的な現場があたりめえで、それがあたりめえだって思ってんのが、
実はメチャしあわせっつうか、だって俺、ここでずっと働いてえって、
あ、それでも、とうちゃんはあれだからムリっすけど」

「ムリか」

「ムリっすねえ」

「夏休み中だけでもムリ？」

「え？」

「ここの工期、9月までなんだけどさ、8月ってなんか人が集まらなくてさ、
森下にやってもらおうと助かるんだけどな」

「マ・・・ジっすか」

「どうかな？」

夏休みいっぱい働いたら・・・授業始まったらバイトしても週に2日か3日、
夏休み中働けたら・・・金貯められる　それでも　愛里は

「あの、正直、俺はやりたっすけど、相談してからでもいいっすか？」

「いいよ、親御さんに相談してみてよ」

「はい」

愛里にだけど

「それで、もし了解取れたら、明日は日曜日だから、月曜日から」

「はい」

「お盆は休みだから」

お盆

「あの、お盆て、いつですか？」

「そこは若者だな、8月13日から16日までだよ」

「そんじゃ、あの、できるとなったら」

「直に来て」

「もし・・・ダメだったら」

「来なかったらダメだったんだと思うから」

「あ、はい」

「それじゃ、まあできれば月曜日、ダメなら、ご苦労さん」

「はい、それじゃ失礼します」

外出て

夏休み中バイト してえ！

それでも、それでも愛里が明日帰ってきて

愛里と一緒にいてえし

それでも稼げるとしたら夏休み中だし

どうすりゃいいんだああああ

ゴム長と鶏肉

この現場 見納めにいいのか それとも月曜日に来るのか

わかんねえな

俺は働きてえし そんでも愛里とでっきるだけ一緒にいてえし

どうなんだ？

「だいづ！」

え？

「あ、ヤッさん、スギ・・・さん」

シゲさん？ スギさんでいって監督言ってたな

「まだ仕事残ってたんすか？」

「おっかあによえ、持ってこさせねえとなんねえもんがあってえ」

「そとでかっちゃだづばまっでらった」

ん？ え？

「だいづにい渡してえもんがあってよお」

俺に渡してえもん？

「これ」

なんかスーパーの袋みてえなホームセンターの？

「なんすか？」

「開けてみればいいっぺ」

これ・・・は ゴム長

「安っすいやつだけんちょ、先に芯入っでっからあ」

え・・・

「スギさんと二人でえ、だいづさプレゼントォあげてなあってはあ」

「俺・・・に」

「これならばあ、またどっかで働くときにいガムテ貼らなくていいっぺ」

「え・・・」

「もうそのゴム長はあ、限界超えてっぺ」

「もダメだよ、よぐがんばった」

「俺に・・・ ゴム長？」

「スギさんとしゃべってなあ、これだっべって」

「俺・・・ 俺・・・」

「そっだに泣くほどのもんでねんだよお、安っすいやつなんだあ」

「ヤッさ・・・」

「泣んがねでほれ」

「ス・・・ギ・・・」

「だいつ、それとなあ、俺のおっかあとおスギさんのおっかあがよお」

「だいつさけでって」

「これ、明日の唐揚げにっちはあ」

鶏肉 え・・・

「だいつの好きな子にい食わせてえって、おっかあたちがはあ」

俺もう 立ってらんなくて しゃがみ込んで 声出して

「だいつ、そ～ったら泣いたらあ、俺たちまで泣いてまっぺ」

「わい、なだ止まんねじゃ」

俺 俺 こんなに

「なんでだよ・・・ なんでこんなに・・・ こんなに優しいんだよ」

「俺たちい、だいつが可愛いんだよお」

「んだよ」

「な～んかあ、息子みでえではあ可愛くってよお」

「めごぐでな」

俺・・・ 俺・・・

「俺・・・ とうちゃん二人増えたんかよおお」

「だいつのおっとうにしてくれんのけえ？」

「俺の・・・こと・・・ 息子みてえだって」

「息子だしたあ、だいつは俺だちの息子、なあ」「んだあ」

「俺・・・ とうちゃん・・・ 三人いんのかよお」

「だいつにゃあ俺たちもいっからはあ」

「んだ、大丈夫だすけ」

俺もう 子どもみてえに声あげて わんわん泣いて

「泣ぐなあ」

「だってよおお、こんなさ」

「ほれ、立ってえ」

「あのさ、俺さ」

「なんだあ？」「なした？」

「どん底のど貧乏の子じゃねえんだよお」

「だいつは違えよお、だいつは一億円の心持ってっからあ」

「や、そういう・・・」

「だいつはだいつだべ」

「だっぺ、だいつはだいつだあ、そんでいい」

「そんでいい？」

「いいんだよお、だいつはだいつだっぺ」

「そんな、あの、そんな、もし俺がアラブの大富豪の息子だったら」

なんかバカみてえなこと聞こうとしてっけど

「それでもゴム長買ってくれんの？」

「あたりめだよお、王様でも王子様でもお、だいづなら買ってやっから」
「マジで？」
「あたりめでしたあ」
「ヤッさん、スギさん」
「だいづ、土下座すんなよお」
「本当にありがとうございます」
「こんくれえのことでえ、もう頭あげてえ」
「俺、この鶏肉で・・・」
ヤベ また泣きそうだ
「愛里に唐揚げ作ります」
「おう、作ってやっれやあ」
「それで、このゴム長、一生大切にします」
「一生は・・・もたねんでねえかなあ」「もだねなあ」
「一生大切にします！」
「またガムテ貼んねばなんねえよ？」
「ガムテ貼ってでも大切に使います！」
「そっかあ」「んだが」
ヤッさんとスギさんに肩抱かれて立ち上がって
俺は 二人の腕の中でまた泣いた

電車の中

ヤッさんとスギさんにもらったゴム長と鶏肉入った袋抱えて座ってる俺
おっちゃんたちの大きくて深くて温ったけえ心に圧倒されて
それで、なんかよくわかんねえ罪悪感に押し潰されそうになってる
監督が言った、パッと見浮浪者、どん底のど貧乏な子
だからおっちゃんたちはこんなに優しくしてくれたんかな
ゴム長買う金も好きな人に作る唐揚げ用の鶏肉も買えねえと思って
おっちゃんたちの暮らしだって楽じゃねえのにさ
俺 騙したことになんのかな 騙したつもりねえんだけど
顔上げたら 向かいの席に座ってる人たちがサッと目えそらした
隣り見たら 俺との間空けて座ってて 気づかれねえようなカンジで
鼻に手えあてて そっか 俺そういうの全然気いつかなかった
つか、そういうのなんも気にもしてなかった
人は見た目で判断するって、かあちゃん言ってたけど
今 俺のまわりの人たちには、俺は浮浪者か汚ったねえど貧乏に見えてて
ヤッさんやスギさんにもそう見えてて そんなで同情してくれたんかな
つか、俺が同情させちまったんか んなつもりじゃねえんだけど
乗り換えの駅に着いて、次の電車に乗って
席空いてたけど 出口近くに立って なんかなあ なんなんだ俺

家のドア開けたら
とうちゃんがキッチンから走ってきて
「ダイチ、おかえり」
とうちゃん
「ん？ ダイチ、どした？ 疲れたんか」
「あのさ」
どういえばいいのかな んっと
「とうちゃんから見て、俺はどう見える？」
「ダイチに見えっけど」
じゃねえんだよ、そうじゃなくてさ、なんて言えば あ！
「とうちゃんと俺がさ、今まで会ったことねえ他人だったとして」
「他人」
「俺が目の前に現れたら、どう思う？」
「スラーーッとして、今は日に焼けてよ、かっけえなあって」
ニッコニコしてっけど じゃねえんだよ
「明日、アイリちゃんもかっけえなあって思うんじゃねえか？」
「じゃなくてさあ」
「ダイチのこと見たら誰でもかっけえと思うだろ」
「じゃねえんだよ、これ見てくれよ」
「ゴム長買ったんか、んで、鶏肉だけ買ってきたんか？」
「それがさあ」
俺とうちゃんは玄関ここに座って
俺はとうちゃんにヤッさんとスギさんのことを話した
「だからさ、おっちゃんたちは俺をどん底のど貧乏だと思っててさ、
ゴム長も鶏肉も買えねえと思って、こんなんしてくれてさ」
「ありがてえな」
「そうだけど、それでも俺、なんかおっちゃんたちを騙してる気いして」
「ダイチは騙してねえよ」
「そうだけどさ、それでもさ」
「もしも俺がよ、現場で働いててよ、そこにダイチが来て、
若けえのに一生懸命土方仕事してよ、おっちゃんおっちゃんて慕ってくれてよ、
そしたら可愛くて可愛くて、なんかしてやりてえって思うだろうなあ」
「それは、とうちゃんが俺のとうちゃんだからだろ」
「じゃなくてよ、ん・・・っと、あ！ 俺が若けえ頃によ、土方やってたときによ」
「そんなときって、俺とだいたいおんなし歳だろ」
「や、もうちょい上だな、おんなし歳んときは院にいたからよ」
「それでもさ」
「あんとき、ダイチみてえな子がよ、小せえ子でもよ」

「小せえ子？」

「なんか一生懸命石ころどかそうとしたり、俺のそばにきて、

にいちゃんにいちゃんて懐いてくれたらよ、俺もあんとき金なかったけど、

10円でも5円でも、なんか菓子買ってよ、喜ぶ顔見てえなあって思うな」

10円でも5円でも それは ほんとうのとうちゃんには大切な金で

「その、小せえ俺がさ、今みてえに何の不自由もねえ家の子でも？」

「んなこと関係ねえよ、俺みてえな汚ったねえ泥だらけで働いてる土方のそばだよ、

一生懸命土ほじくったり小石どかしたりしてよ、にいちゃんにいちゃんてよ、

そんなん可愛くて可愛くてよ、たまんねえよ」

とうちゃんは まるでほんとうのときに戻って小せえ俺を見てるみてえな顔して

「そしたら俺、もっと働いて10円でも20円でも多く稼いで菓子買ってやりてえなって

あんときの俺は、1円や2円も、んな余裕なくてよ、菓子買ってやるなんてなあ」

「とうちゃん」

俺 なんか とうちゃんに抱きついちまって

「おっちゃんたちもダイチが可愛くてしゃあねえんだよ」

とうちゃんは俺の背中さすって

「ありがてえよなあ」

「うん」

「ありがてえよ」

バンッ

ドアが開く音 かあちゃん

「こんなところで何やってるの？」

「あ、や、なんも」

立ち上がって あっ

「い、今、シャワー」

「今日で仕事納めよね」

「え？ あ、うん」

「ご苦労様」

かあちゃんが 俺に 軽くだけど 頭下げて くれた

なんか また涙出てきて

「泣いてないで、さっさとシャワー！」

「あ、はい」

かあちゃん、俺はかあちゃんのおかげで、なんの不自由もなく育ててくれたよ

かあちゃん、ありがとう

「頭下げてるヒマがあったらさっさとシャワー！」

ぜってえ後ろに目えあるよな

予約完了

空港の到着口で愛里を待ってる
マジか なんか信じらんねえ 愛里帰ってくるよ
7日が何年も前みてえに感じる
今朝、愛里の部屋メッチャ掃除した
指輪はキッチンの食器棚の上の段に入れておいた
いちおうシャワーも浴びてきた
作業着じゃねえ服着て出かけんのって久しぶりだな
なんかドッキドキしてきた
マジで帰ってくるんだよな マジだよな
あ、出てきた
きれいだ
髪が なんかおとなっぽくなって すげえきれいで
白い服がおとなっぽくて ますますきれいで
きれいだ
こっち見た
「愛里！」
愛里んとこに駆けてって
「愛里」
抱きしめた
「おかえり」
愛里 待ってた 愛里
「ただいま」
愛里の声だ 愛里の
「ハワイに行ってたんですか？」
ハワイ？ なに？
「日焼けしてるから」
なんだよそれ
「肉体労働者っスから 俺」
愛里っぽくて可愛くて笑っちゃったよ

愛里の部屋の前

愛里が鍵開けて

俺 見惚れっぱなしだよ すげえきれいでさ

リビングに入るまでは我慢した なんとか我慢したけど

「愛里」

もう我慢できねえよ 抱きしめて 思いっきり抱きしめて

「ちょ ちょっと くっ 苦しいいっ」

「あ ごめん」

「あなたの腕！」

怒ったみてえな顔も

「前よりもっとたくましくなってるんだから 加減して！」

言い方もさ

「愛里だなあ」

加減します だから ちょっとこのまま抱かせてください

愛里に卵サンド作れるなんてさ しあわせだ

「美味しい！ これ食べたかったあ」

「マジ？」

んなこと言ってくれるなんてさ

「私、ニューヨークであなたの料理シックでした」

「料理シック？」

「ホームシックみたいな」

俺の料理が恋しかったってさ

「俺は？」

「あなた？ なんですか？」

「俺シックは？」

ぜってえ言わねえよな 愛里はさ

「ああ、やっぱりこの卵サンド最高！」

ほらな

「なんだよお」

そういうところが可愛くてたまんねえよ

愛里は とうちゃんとかあちゃんにまでみやげ買ってきてくれた

俺に一生懸命説明してさ

メチャ考えて選んでくれたんだな

俺には地下鉄のマップの図が描いてある T シャツ

かけえ

「これは作業用です、いいですか？ 作業用」

「もったいねえじゃん、せっかく愛里が買ってきてくれたのにさ」

「作業用です！」

そんでもさ

「あの赤いTシャツが擦り切れてなくなっちゃったら着てください」

擦り切れて なくなるって あの赤T 着てていいっつうことっすか

「おう」

愛里が俺に買ってくれたTシャツ メッチャ特別感

「メインはそれではありません」

あ？

「これです」

キーホルダー

指切りしている絵が掘られた銀の小さなメダルとイニシャルがついてる

「あなたのはダイチのDで、私のは愛里のA」

俺と愛里のイニシャル 俺と愛里の

「指切り」

「向こうではPinky promise っていうそうです」

Promise

「約束」

愛里と俺の 約束

ペアの 俺と愛里の 約束

「LINEでケンカしたときに買ったんですよ」

えっ

「あれは、俺が、マジごめん！」

あんなさ、ガキみてえに愛里に 淋しいからって愛里に

「もういいです、仲直りしたし」

俺が一人でウジウジして泣き言言って落ち込んでたとき

愛里は このキーホルダー買っててくれた

たまんねえよ 愛里は たまんねえ

「愛里、俺、ぜってえ愛里のこと守っから、一生守っから」

この俺の腕ん中でさ 一生

「だから、愛里、俺のそばにいてくれよ」

これから先も

「ずっと・・・ですか？」

「ずっと」

だからさ

「俺からも、あんだけど」

いよいよだ

「ちょっと待ってて」

立ち上がったクラツとする 緊張してんな してるメッチャ

キッチンの食器棚の上の段から あの箱を 手え震えて

落ち着け 落ち着け 渡すだけだ

「これ」
愛里がジーーーーッと箱を見てる
「ほれ」
なーんともねえカンジでさ さりげなーくさ
愛里が 受け取った 受け取ったあああ
「あの」
あ？ なに？ いらねえとか言わねえでくれよ
「私に、ふつうの反応は期待してないですよ？」
ふつうの反応？ ふつうの反応ってなんだ？
「なんも期待してねえけど」
とにかく 受け取ってくださいっ
開けた！
見てる ジッと見てる
「きれい」
「マジ？」
マジっすか？
「はい、モロ私好みなんですけど」
「マジ？」
マジでーっ？ モロ好み？ マジかあああ
「あなたのお母さんが選んだんですか？」
「俺！ 俺が選んだ！」
俺が必死こいて選びました
「ウソ」
ウソじゃねえよ
「マジ俺だって！」
あんときの店長さん連れてきて証言してもらってもいいけど？
「へえ」
へえ？
「なんだよ、そのへえってよ」
「ちょっと、意外だったので」
俺は愛里のこと見てっからさ いつも
「愛里が好きなんはこういうんかなって」
「はい、そのとおりです」
マジっすかあああ
「そっか」
ヤッタ ヤッタヤッタヤッタ
「これは・・・ 何ですか？」
何ですか？ 何に見えんの？ これはどう見ても
「指輪」じゃん
「それはわかりますけど」

そんじゃなに？ 石のこと？ サファイアですっ
「私の誕生日は9月ですけど」
あ、そういうことか
「誕生プレゼントじゃねえよ」
そんなんじゃねえんだよ そういう軽いノリじゃねえんだよ
「だったら何？」
だったら何
それはさ
「なんつうか、だから、なんつうか」
婚約 とは言えねえよ まだ高校生だからさ 気持ちは婚約だけどさ
つかもう結婚でもいいんだけどさ だから なんつうんだ？
結婚する？ ための？ 婚約をする？ ための？
「予約」
これっきゃ浮かばねえ
「予約？ 何の？」
何のって だから 端的に言えば
「愛里」
「私の予約って何ですか？」
言いてえよ 俺だってさ ハッキリ言いてえけどさ
けどそれじゃ だから なんつうか
「愛里は俺が予約したっつうか」
「よくわからないんですけど」
わかんねえかもしんねえけど メッチャぼやかしてっから
「愛里は俺が予約したから」
だから なんつうか
「もう他のヤツは予約できねえっつうことだよ！」
他のヤツになんか予約させねえよ！
「私はあなたに予約された・・・と」
「おう」
お願いします！ 予約させてください！
「わかりました」
「マジ？」
マジで？ マジ？ 予約させてくれるってこと？
「はい」
はいつつた いいってことだ 予約できたああ
「あの」
ん？ なに？
「もしも、私がこれを排水溝の中に」
んなことはどーでもいい！
失くしてもなんでもそれはどーでもいいんだよ！

「指輪なんかどうでもいい！」

そこじゃねえんだよ 大切なのはさ 物じゃねえんだよ

なんか、なんつうか、これを確かなものにしてえからさ

「儀式みてえな、そういうの、したかったっつうか」

「わかりました」

わかった？ マジ？ マジっすかあああ

「そっか」

「だったら はめてください」

あ？ なに？

「儀式やりたいんですよね？」

「え、あ、はい」

やりたかったっす

「だったら、指輪、はめてください」

「おっ 俺が？」

ゆ、指輪を 愛里の指に 俺が？

「はい」

愛里が左手差し出した 左手

これは なんつうか マジの なんつうか

ヤベ 手え震えてる 止まんねえ そんなでも

愛里の 細くて白くてきれいな 薬指に

サイズピッタリ！

「きれい！」

愛里はその指輪の一兆倍きれいで その愛里がはめてっと

「100万くれえに見えんなあ」

や、あそこにあったダイヤモンドよりずっとさ

「これ、100万円じゃないですよ？」

え？ あ 俺はまだ

「んな金はまだねえっつうか」

ごめんな

「100万円じゃなくてよかったです」

マジ？

「100万円だったら私ぜったい受け取りません」

愛里は 愛里だなあ

「100万じゃねえから」

100万じゃねえけど おれの気持ちは そんなん遥かに超えててさ

「いくらですか？」

2万8千円 俺史上メッチャだけど

「それは言えねえよ」

「イヤですよ、なんか高いのとかそういうの」

「俺が高けえの買えるわけねえじゃん」

まだ高校生だからさ まだだけどさ
「よかったです ホッとしました」
ガッカリじゃなくて ホットするって 愛里はさ
「愛里がそんなだからさ、俺の金、全然減らねえよ」
愛里はメッチャ大切に金使うからさ
「減ってるでしょ！」
そういうところさ たまんなくてさ
「俺、夢叶ったから」
ただの夢だったことがさ 叶ったんだよ
「いつか上原愛里のために使いてえって稼いでたから」
ずっと 愛里を見つけたときから ずっとさ
そんでさ 俺は
「これからもガンガン稼いで」
愛里がなんも心配しねえで安心してられるようにすっから
そんで そんで
「いつかは愛里のこと」
「私のこと？」
俺のお嫁さんにしてえんだよ
「なんつうか、そういうことだから」
「はい」
愛里が 指にはめたまま指輪見てる
上原愛里さん
俺は予約したよ
将来 愛里と結婚するために
愛里にプロポーズする権利 たったひとつの権利
予約した

相談

俺は愛里に相談しなきゃなんねえことがある

バイト

せっかく愛里が帰ってきたばっかで明日からバイト

日中ずっといねえってさ

ゆうべかあちゃんにも相談したら

「それは私じゃなくて愛里さんに聞くことでしょ」って言われて

たしかにそうだなって

愛里のことが恋しくて愛里がいねえのが淋しくて

LINEでアタマおかしいこと送っちゃって愛里を怒らせちゃったくれえなのに

愛里が帰ってきたばっかで、帰ってきた翌日からまたバイトに行くってさ

「愛里、相談があんだけど」

「なんですか？」

俺は監督に言われたことを愛里に話した

愛里は黙って聞いてた

「どうかな」

「なぜ私に聞くんですか？」

「それはやっぱ愛里帰ってきたばっかなのに明日から俺がバイトってさ」

「あなたの夏休みなんだから、あなたの好きなようにすればいいと思います」

「え、なんか冷てえんだけど」

「冷たいですか？ 冷たいつもりはないんですけど」

「俺の好きなようにって、そんなさ」

「だってあなたの夏休みですよ？」

「そうだけどさ、俺は、俺と愛里の夏休みって思ってたからさ」

「あなたはどうしたいんですか？ バイトしたい？ したくない？」

「してえけどさ、それでも愛里と過ごす最初の夏休みでさ」

「私、前にも言いましたよね、あなたがしたいことの妨げにはなりたくないって」

「妨げになんかなってねえよ、永遠にならねえよ」

「だったら、やればいいんじゃないんですか？ やりたいんだから」

「そうだけどさ」

「なに？ 他になんて言えばいいの？ あなたがバイトしたいって言うから」

「や、だから、そうなんだけどさ」

愛里がなんか考えてる　なんだ？　どの方向からくるんだ？

「もし私が・・・」
もし愛里が？
「バイトしないでずっと一緒にいてって言ったら、どうしますか？」
「一緒にいる」
なに？　なんでジッと見てんだよ？
「マジだって、愛里と一緒にいてえつつたら一緒にいる」
「あなたは私と一緒にいたいのか？」
「一緒にいてえに決まってるだろ」
「でもバイトはしたいんですよね」
なんだこの詰められ方　かあちゃんとは違うテイストつつうか
「それでも、愛里がバイトしねえで一緒にいてえつつたら」
愛里メッチャ無表情　聞いてっかな
「俺は愛里と一緒にいる、一緒にいてえし」
「ウソ」
「ウソじゃねえよ！」
「あなたはそういう、なんていうか、言葉が・・・」
愛里が一生懸命考えてる　言葉って　なに？
「あ！　あなたはそんな刹那的な人ではないです」
「刹那的？」
「ちょっと待ってください」
携帯でなんかしてっけど
「刹那的、時間が極めて短いさま、これは違う、後先を・・・　こっち、
あと先を考えず、今この瞬間だけを充実させて生きようとするさま
特に、一時的な享楽にふけるさま、以上が刹那的の意味です」
「意味はわかってっけど、愛里がその言葉使って何言いてえのかわかんねえ」
「私、なんとなくわかってきたんです」
なに？　俺全然わかんねえけど
「あなたは、一年のときから好きな人のためにバイトしてお金を貯めて」
「愛里、だからさ、その好きな人つつうのは」
「わかっています、そこはもうわかっていますから」
「そうっすか」
俺はそこんとこの勘違いでビンタ食らったんすけど
「私があなただのことを、あなたがこの世に存在しているってことを、
1ミクロンも知らなかったのに、あなたは私のためにバイトしてたって」
1ミクロンは　キツいな　そうだけどさ
「あれ？　考えてみると怖いですよ」
「怖い？」
「自分の存在を全然知らない相手のためにバイトしてお金を貯めるって」
愛里が愛里の世界に入ってくのがわかる・・・ようになった俺
「それって、角度を変えてみたら・・・　ホラー！」

「ホラー？」
「角度を変えてみたらってだけです」
「どんな角度だよ、ホラーってさあ」
「私が言いたいのはそこじゃなくて」
「愛里が言ったんじゃない、ホラーってさ」
「だったらもういい、何も言わない」
「あ、ウソ、ごめん、俺が悪い、ごめん」
「ほら、すぐ謝る」
「俺が悪りいから」
「そうやって、私に甘ま甘まで過保護で、なんかもうすぐ抱きついてきて」
俺は 今 どういう状況にいんのかな 文句言われてる？ なんだ？
「だけど、あなたがバイトしてお金を稼ぐっていうときって、
　　なんか、なんていうか、たとえば、来週デートするとして」
デート？ デートしたかったんか？
「愛里、デートしてえならさ、しょうよ、俺も」
「ちがうの、最後まで聞いて」
「あ、はい」
「そのデート代を稼ぐとか、そういう短期的なイメージがなくて、
　　なんか、長期的に考えてるようなカンジがして」
「長期的に考えてっけど」
「やっぱり？」
「おう」
「それは、どれくらいの長さですか？」
どれくらいって
「ずっと」
「ずっと・・・とは？」
「ずーっと」
「ずーっとって？」
「ずー————と」
愛里が俺の顔見て なんか考えてて なんか、あ！ って目になって
視線外して またなんか考えてて
「そうですか」
それは 愛里ん中で何がどうなったの そうですかなんだ？
「バイトしてください」
「マジで言ってる？」
「はい」
「俺、日中いねえよ？ 朝から夕方、帰りは6時過ぎるしさ」
「日曜日は休みなんですよね？」
「うん、あとお盆も」
「お盆ていつ？ 夏休みの中に紛れてるからわかんない」

だよな 俺も

「8月13日から16日」

「だったらいいじゃないですか」

「それでも愛里、日中一人にさせちまうからさ」

「私も行きたいところがあるから」

「え、どこ？」

「夏休み前に、あの、ほら、花問屋の、名前」

「志田？」

「シダ？ シダくんが、パンフレットくれたんです、いっぱい」

愛里がベッドルームに入って そんでパンフ？ 持ってきた

「フラワーアレンジメントの教室、1週間コースとかそういうの」

そんなんあるのか

「ふたつ行きたいのがあったんですけど」

「言えよ、行ってえのあったんならもっと前に言ってくれよ」

「あなたは行きたくないだろうなと思ったから」

「俺は・・・付き添いで」

「それがイヤだったの」

「え・・・」

「でも、あなたがバイトしてる間、私は教室に通えます」

「愛里、なんか・・・ごめんな」

「なにがですか？」

「や、なんか」

「あなたはマグロですから」

「あ？ え？ マグロ？」

「水族館に行ったとき教えてくれたでしょ」

なんの話だ？

「マグロはずーっと泳いでないと死ぬって」

「言ったけど」

「あなたは仕事してないと死ぬんです、死なないけど」

「ん・・・っと？」

「私の家に家政夫で来てたときも、私は同じ高校生で、土曜日なのにして、

でもあなたはそういうの全然気にしないっていうか、それって・・・」

愛里がまた言葉探してる顔になって

「なんていうか・・・あなたのずっとは、かなり長期的だから」

愛里 そうだよ 俺のずっとは 一生ってことでさ

「その長期的な目標？ 目的？」

結婚っす

「なんかそれに向かってないと死んじゃう、死なないけど」

死にます つか考えらんねえ

「マグロみたいだなんて」

そういうことか
「だから、バイトしてください」
「愛里、マジでいいの？」
「だって」
愛里が下向いて　それで
「予約されちゃったから」
指輪つけた左手を俺に見せてさ
「愛里」
抱きしめて
「ありがとう」
「ひとつだけ約束してください」
「うん、なに？」
「怪我はしないでください」
それかよ　俺の心配かよ
「気をつける、ぜってえ気をつける」
「はい」
「愛里、俺・・・」
「稼いでください」
「おう」
「私、いっぱいお金使わせるみたいだから」
「んなことねえよ、全然じゃん」
「1週間で、こんな指輪買わせちゃうんですよ」
「それがしてえから稼ぐんじゃん」
愛里が俺の顔見上げて
「あーっもーっ」
「え、なに？　なんかした？」
「そういうこと平気でサラッと言うから」
「え？　俺マジだけど」
愛里がツンとした顔になって
「そうですか」
「マジだって」
「あなたのおとうさんとおかあさんにおみやげ持って行きたいです」
「あ、そっか、そんじゃ行こう」
「あ、ちょっと待って、このキーホルダーつけるから」
「そんじゃ俺も」
指切りのキーホルダー
愛里のはイカのキーホルダーと一緒に揺れてて
俺のはタコのキーホルダーと一緒に揺れててさ
「このキーホルダーが売ってたショップに、ふたつ並べると LOVE って、
　　そういうペアのグラスがあって」

「そっか」
「ステキなデザインだったから一瞬買おうかなって思ったけど、
あなたとケンカしてたから買いませんでした」
「ごめん、マジごめん、あんときは、んっにごめん」
「でも、考えてみたら、買ってきても私割っちゃうと思う」
「そのときは」
「あなたにまかせればいいんですよね」
「おう」
「買ってませんけど」
「ごめんって」
「フッ」
「なんで笑ってんだよ？」
「なんかおもしろいから」
「なんだよそれ」
愛里 愛里の あ・・ すげえ柔らかく 俺・・もう
ヤベ ヤベヤベヤベ
「い、行くか」
「はい」
「唐揚げの下味つけっから」
「唐揚げ！ 嬉しい！」
「その唐揚げ用の肉、一緒に働いてるおっちゃんたちがくれたんだ」
「鶏肉を？」
「愛里に食わせてやれって」
「私に？ 私のこと知ってるんですか？」
「あとでゆっくりその話すっからさ、聞いてくれよ」
「はい」
ヤッさん、スギさん、ありがとうございます！
それで 俺は明日からまた現場行きます！
愛里がいいって言ってくれました！

指切りの約束

愛里が唐揚げ食ってる写真撮って

「やだあ、食べてるときに撮らないで」

「おっちゃんたちに見せてえからさ」

「そう・・・ですね、お礼を言ってたって伝えてください」

「おう」

俺がバイトすんの愛里がゆるしてくれたって、かあちゃんに言ったら

「私がゆるしたとか、そんな重たいことにしないでください」

「かあちゃんが愛里に聞けつつあったんだよ」

「え？」

愛里がかあちゃんの顔見た

「まあ、いいんじゃない？ あんたはこの一週間も夜は勉強してたし」

「おう」

「えええっ？ 肉体労働して夜も勉強って、私なら死んじゃう」

「愛里さん、ダイチは体力だけは有り余ってるから」

体力だけってさあ

「パパが、私の期末の成績が上がって喜んで」

愛里ががんばったもんな

「も、森下くんのおかげだねって」

えっ マジっすか、お父さん

「森下さんに預かっていただいてよかったって感謝してました」

「まあ、そう、よかったわ」

お父さん、俺、これからも愛里さんのこと守りますから！

「それじゃ、明日から日中の愛里さんのことは、カズオ、お願いね」

「え？ あ、うん」

とうちゃんは、かあちゃんからお願いって言われっと

ちょっと鼻の穴膨らんで嬉しいの必死にこらえる顔してさ

「よろしくお願いします」

「アイリちゃん、んな、なんともねえからよ」

俺は、やっぱまだまだとうちゃんとかあちゃんに支えられてんな

バイトひとつすんのも、愛里のことやってもらってさ

いつか 全部俺ができるようにしねえとな そうなりてえしさ

愛里がかあちゃんに指輪見せてる
そんで小せえ声でかあちゃんに
「これ、本当におかあさんが選んだんじゃないんですか」
おいおい、俺だっつったじゃん や、聞こえてねえふりしねえと
「違うの、本当に違うの、ビックリね」
「そうなんですか」
やっと納得してくれたか
「ダイチがこんなステキな指輪選ぶってねえ」
「はい」
俺だってさ やればできるっつかさ
「一生分のセンス使い果たしちゃったかもね」
ハァアアア？
内緒話ならさ、もう少し小せえ声で言ってくれよ
つか、かあちゃんぜってえ俺が聞き耳立ててんの気づいてんな
「サイズも奇跡的にピッタリなんです」
それは
「あら、そうなの」
かあちゃん知らねえふりしてっけど
「愛里、それさ」
かあちゃんが目でやめろっつってっけど
「サイズさ」
目え閉じて開けて閉じて開けてしてやめろっつってっけど
「愛里の指輪、一個、無断で借りた」
かあちゃんが天井向いてっけど
「私の指輪？」
「かあちゃんが、女の人の指輪のサイズ知るには」
かあちゃんが目えむいて俺のこと見てっけど
「その人の指輪、店に持ってってサイズ測ってもらおうと聞いて」
「おかあさんが？」
かあちゃんが愛里のこと見て微笑んで 俺の方見て睨んでっけど
「大きいと外れて側溝に落っこって、指輪贈ってくれた人じゃなくて」
かあちゃんがくちびる囁んでっけど
「それ拾ってくれた人と結ばれるって」
「拾ってくれた人と・・・ですか」
「えっ あっ えっ？」
とうちゃんが俺の横で声出して
「あ、とうちゃんは拾ってくれてよかったけどさ」
「え、あ、んっと」
愛里が とうちゃんのこと見て かあちゃんのこと見て
「ああ！ そういうこと？」

「俺は他の人に拾って欲しくねえからさ」
それはぜってえイヤだからさ
「無断で指輪借りたのはごめん、それでもサイズピッタリのにしたくて」
愛里が下向いちまった
「愛里？」「愛里さん」
「そこまで・・・」
ん？ なんつった？
「たまたま、偶然、サイズピッタリなのかなって」
「愛里さん、あのね、私がしゃしゃり出て申し訳なかったけど」
愛里が首振って
「そこまでしてくれてたって・・・ なんか・・・」
「愛里？」「愛里さん」
「感動しちゃってええ」
感動？ マジ？
「愛里さん、ダイチはこういうの疎くて、女の子にプレゼントしたことなくて」
「は・・・ああ・・・」
え、声出して泣いてっけど
かあちゃんも戸惑った顔して愛里の肩抱いてっけど
「は・・・はじめての・・・女の子の・・・プレゼント・・・私にとってええ」
「嬉しかったの？」
愛里がコクンて
ヤベ 俺も泣きそうになってんだけど
「もらったときは・・・ なんかよくわからなかったんですけど」
わからなかった？
「何の指輪なのか」
あ それか
「予約の指輪って」
「予約？ 予約って言ったの？」
かあちゃんっ いちいち聞かなくていいからっ
「はい」
「そう」
あ、俺の方見た
「予約ねえ」
俺を見たまま言うのが怖えよ
「ずーっと予約だそうです」
愛里もかあちゃんに言うなよお
「ずーっと予約ねえ」
かあちゃんもいちいち言葉繰り返すなよ つか、俺の方見たままってさ
「愛里さんは、予約を受け付けたの？」
俺見ながら言ってっけど 俺に聞いてんの？

「はい」

やっと愛里の方見た

「愛里さん、ありがとう」

え？

「ダイチの予約、受け付けてくれて」

かあちゃん 俺 マジ泣きそうっす かなりやべえっす

「まあ予約はいつでもキャンセルできるけどね」

かあちゃん 涙引っ込んだよ

「愛里さんからキャンセルしてもいいわけだしね」

「はい」

はいって 愛里もさ

「でも、約束しましたから」

「約束？」

「指切りの」

指切り キーホルダー

愛里は あのキーホルダー そこまでの思いで

「指切りしたのなら、守らなきゃね」

とうちゃん 今 背中さするのはやめてくれ 爆泣きしそうになっから

「そうよね、カズオ」

「えっ あ、は、針を千本マジで飲ますって」

「憶えてるのね」

「俺、ぜってえ守っから」

なんだ？ この 突然のラブのシフトチェンジは？

とうちゃんとかあちゃん 見つめ合ってっけど？

愛里もキョトって二人を見て 俺を見た

愛里 好きだよ 俺さ 愛里のことずーっと

「それじゃ、ごちそうさま」

かあちゃんっ

愛里のこと 部屋まで送って

「それじゃ、明日から、あの、がんばってください」

「おう」

「あの」

「ん？ なに？」

「いえ、あの、あとでLINE」

「シャワー終わったらLINE すっから」

「はい」

「愛里」

愛里のくちびる 柔らかくて 俺は なんかもう このまますげえ ヤベッ

「ハァハァそんじゃハァハァあとで」
「あなたって」
「ハァハァなに」
「キスするとき息止めてますよね」
「え、や、意識してねえけど」
「止めてますよ」
「そっかな」
「だってキスした後、いっつもそうやって苦しそうにハァハァして」
「や、これ・・・は、あの」
「キスって・・・ 息止めてするものなんですか？」
「俺に聞かれても、わかんねえよ」
「私も、息してるかな、え、あれ？」
「愛里、それはあんま考えなくていんしゃねえかな」
「だって、あなたが苦しそうにするから」
「や、だから、これは、そんなんじゃねえから」
「もう一回してみます？」
「へ？」
「息してるかどうか確かめてみます？」
それは・・・
「息してっから、俺」
「本当に？」
「でもさ・・・」
愛里の 柔らかい これが
くちびる離すと 愛里が俺のこと見てて ゆっくりまばたきして見てて
「愛里、好きだ」
「私も、すごく好きです」
すごくがついた すごく好きって
「俺はその一億倍、や、無限大で好きだ」
「そうですか」
この スツて冷めるカンジが また好きだ
「そんじゃ」
「はい」
ドアが閉まって速攻鍵閉まった
愛里 おかえりってカンジだな

シャワー終わって 部屋入って
『愛里』送信
ピコン
『はい』

『俺は愛里のためにバイトできてメッチャしあわせ』送信

ピコン

『はい』

愛里の はいにはいろんな思いが詰まっててさ

ピコン

『ケガはしないでね』

『ぜってえ気をつける』送信

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

俺は この LINE で 明日から働くパワーメッチャもらった！

愛里 俺は稼ぐ 愛里のために 愛里と俺の将来のために

いつか 予約を本契約にするために！

約束だかん 約束

おっしゃ！ おっしゃじゃねえよ、寝ねえとさ

おんなしにおい

顔洗って 作業着に着替えて

キッチン行って

「ダイチ、おはよう」

「どうちゃん、おはよう」

冷蔵庫から、ゆうべ作っておいた鶏肉団子出して

ゆうべはどうちゃんもいろいろ作ってくれたから、

唐揚げは愛里の分だけで、残りの肉をミンチにした

これとネギに焼き色つけて甘辛ダレ絡めて串に刺して

愛里の弁当箱に、あとピーマンも、そんで卵焼きも

愛里の握りメシには梅干とおかか混ぜて できた

別のタッパーにも鶏肉団子の串入れて、これはおっちゃんたちに

「どうちゃん、これ」

「昼にアイリちゃんに食わせっからよ」

「お願いします」

どうちゃんには言っている

愛里の昼メシは、俺が弁当作るって

今の俺が愛里にできんのはそんくれえっきゃねえからさ

「ダイチ、こっちはおっちゃんたちの握りメシ」

「え？ あ、おっちゃんたち今日俺が来るって知らねえからさ」

「またお願いしますっつう握りメシだよ」

「そっか、ありがとう」

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

「おう、どうちゃん、俺、今日からまたがんばっから」

「がんばれよ」

玄関に新しいゴム長

「ダイチ、かけえよ」

「マジ？」

あれ？

「どうちゃん、前のゴム長は？」

「洗って干してんだよ、まだ使えっからよ」

「だよな、もったいねえと思ってたんだよ」

「また俺が使うから」

「そっか、そんじゃいってきます」

おっちゃんたちへの握りメシと肉団子と俺用の握りメシぶら下げて現場へ GO!

まだヤッサたちは来てねえな

監督に挨拶しねえとな

扉開けて

「失礼します」

「森下、来たのか」

「はい、今日からまたよろしくお願いします」

「よろしく」

「それじゃ失礼します」

「ねえ、それってさ、ヤッサさんとシゲさんに売ってるおにぎり？」

「えっ、あ、う、売ってるつつっても」

「話は聞いてるから」

「あ、そうすか」

「いいなあ」

「え、あ？」

「俺にも作ってきてくれないかな」

「か、監督に？」

「うちの奥さん里帰り中で、子ども生まれるからなんだけどさ」

「マジッすか！ おめでとうございます」

「まだ生まれてないよ、お盆辺りかなあ」

「そうだったんすか」

「この現場入ってからずっとコンビニ弁当か外食だからさ」

「そうなんすか」

「一個いくら？」

「100円っすけど」

「その大きいのが？ そうだなあ、それじゃ俺は2個で300円払うよ」

「や、いいっすよ100円で、具も入ってねえし塩だけっすから」

「塩むすび？ いいねえ、俺そういうの大好きだよ」

「1個100円で」

「俺は収入はある方だからさ」

「そういうんじゃないくて、監督に2個300円で売ってるってヤッサさんたちが知ったら、

自分たちが100円でよかったんかなっていう遠慮が生まれると思うんすよ」

「へえ、そういうことまで考えるんだ」

「だから、1個100円で2個、明日から、とうちゃんに作ってもらいます」

「よろしく」

「はい」

とうちゃん、また収入できるよ やったな、とうちゃん

「ゴム長、新しいね」
「これは、ヤッさんとスギさんが買ってくれました」
「そうだってね」
「え、知ってるんすか？」
「土曜日に森下と話した後に帰ろうとしたら、出口のところで3人が」
え？
「俺はどん底の貧乏人の子じゃないって泣きながら叫んでたの見たらさ」
見た？
「ドラマの撮影みたいだなって」
あれを・・・見られた
「その後、ヤッさんたちにつかまって、焼き鳥奢らされたよ」
「あ、そ、そうすか」
「だいつの魅力を延々と聞かされて奢られるってさ」
「え、あ、んっと」
「あの二人とはたまに呑むからさ、いいんだけどね」
すげえな、現場の作業員と呑む監督って いいな
「二人ともベテランだから勉強になるっていうか参考になるっていうか」
この監督、やっぱすげえな
「ただねえ、メチャクチャ呑兵衛だから、こっちの財布が悲鳴あげるけどさ」
ヤッさんとスギさん・・・俺のこと
「あの、ヤッさんとスギさんは俺のこと、誤解してて」
「誤解はしてないよね、森下が言ったことは全部本当だろ？」
「そうなんすけど、なんかどっかで誤解したつつうか」
「いいんじゃない？ そのままで」
「よくないっすよ」
「焼き鳥屋でヤッさんが熱弁してたよ、だいつの、なんだっけ？」
あ、そうだそうだ、スプライトが俺たちの仲間だって」
「スプライトってなんすか」
「おそらくスピリットって言いたかったんだろ」
スピリットが ヤッさんたちの仲間
「ここはさ、いろいろな背景持ったいろいろな過去を背負った人たちが来る、
だから、そういう表面的なことはどうでもいいんだよ」
「いいん・・・すかね」
「森下がヤッさんたちと一緒に働いてるってことだけが重要でさ」
「は・・・い」
「あの二人ベテランだから、森下が本当に貧乏だとしても、
テキト〜にダラダラやって時間潰して賃金もらおうとしてたら」
「んなことしないっすよ！」
「うん、だから、そうだったとしたら、そばにも寄らなかったと思うよ」
「そう・・・なんすか」

「そういうのもいるからね」
「俺はちゃんと働きますっ」
「わかってるよ、だから夏休み中働かないかって言ったんだから」
「あ、はい」
「それじゃ、よろしく」
「はい、失礼します」
扉閉めて 用具置き場に行って
「だいづ！」
あ、ヤッさんとスギさん
「や～っぱり来たんけえ」
やっぱり？
「監督があ、もしかすっとお、だいづ月曜からまた来っがもしんねえよおって」
監督は 俺が来るって確信してたんか
「わだづだいづねどどじゃねぐで」
ん？ え？
「俺たちはあ、だいづがいねえとお、な～んか淋しくってよお」
「マジっすか！」
「シュ～んとしてだらあ、監督があ、だいづ来っかもしんねえってえ」
「まんずまんずまんずおもしえ」
「スギさんのしゃべってること全然わかんねえっすけど嬉しいっす」
「俺たちもお、あれ、だいづ、ゴム長！」
「ヤッさんとスギさんからもらったゴム長っす」
「わいっかっげな」
ん？ え？
「だなあ、かっけえなあ」
「え、そうっすか？」
「だいづが履ぐとお、あれ、ほれ、若げえもんが」
「ぶんづ」
「そんだあ、ブーツウ、皮のブーツウに見えっぺした」
「んな、からかわねえでくださいよお」
「ほんどだよお、なあ」「んだ」
「やっさん、スギさん、本当にありがとうございます」
「んな、いいがらあ、俺たちはあだいづが可愛くてはあ」
「めごぐで」
「これ履いて今日からまた頑張りますっ」
「だいづはいっつもがんばってっぺ」「えれもんだよ」
ヤッさんとスギさんの首に白いタオル
「俺たちもお、だいづからもらったあ手ぬぐい使わせてもらうからあ」
「も、くせぐねや」
なんか 俺の居場所はここじゃねえかなっつうフィット感だな

昼休憩

「あの、これ、俺のとうちゃんから、またお願いしますの握りメシっす」

「あんれえ、だいつの握りメシ、また食えるなんではあ」

「わいめわぐだ」

「え？ 迷惑？」

「ありがてえってなあ」

「とうちゃんも、俺のこと可愛がってもらってありがてえって」

「だいつにはあ、3人お父ちゃんいっがらなあ」

「おいっす、俺には3人とうちゃんいてくれます」

「ほんじゃ、今日の分200円、ほれ」「わも」

「あ、や、これはとうちゃんからのお礼つつうか」

「ダメだっぺえ、だいつのとうちゃんも朝っから握りメシ作っではあ」

「んだぜにはらわんねば」

ん？ なに？

「明日っからもお、また頼みてえからあ」

「えっ マジっすか？」

「ほんだからあ受け取ってくんちえ」「んだ」

ヤッさん・・・ スギさん・・・

「だいつはなぎっづでは」

ん？ え？

「だいつは心わかっからあ、すんぐ泣くんだよお」

「なだふげ」

スギさんがタオルで俺の顔

「スギさん、今日は臭くねえっす」

「たべ、だいつがらもらった手ぬぐいだすけ」

あ、そうだ

「あと、これ、俺が作ったんすけど」

「だいつが作ったあ？」

「唐揚げ作って」

「だいつの好きな人、唐揚げ喜んだかあ？」

「はい、美味えつつってくれました」

「いがっだあ」「よがっだなあ」

「これ、ヤッさんとスギさんからもらった肉で作ったんすけど」

「つぐね？」「だべ」

「俺の、なんつつうか、感謝の気持ちつつうか」

「んなごといいいけんちょお、食っでいいのお？」

「はい」

「わっ」「こりゃ、美味えなあ！」

「マジっすか？」
「このコリコリつつすんのは軟骨け？」
「レンコン刻んで入れました」
「レンコン！　こりゃたまげだあ、だいつは料理もうめえっぺ」
「俺、恩返しっつうか、なんか、こんくれえっきゃ思い浮かばなくて」
「こんくれえってはあ、てえしたもんだよお」「んだ」
「あ、これ、俺のカノジョが、ヤッさんとスギさんからもらった肉で作った」
携帯の写真
「唐揚げ食ってるとこっす」
「わいわいわいわい」「いんやいんやいんや」
なんだ？　ラップみてえだけど
「こっだに美人！」
そうっすよね　そうなんすよお
「だいつがあ色男だからあ、ど〜んな子好きなんだっぺってはあ」
「こいだばぶなんぶぞ」
ぶなん？　無難？
「美男美女だしたあ、運命だなあ」
「う、運命っすか」
「結婚式が楽しみだっぺえ」
「んなあ、気い早えっすよお」
「こった美人が帰ってきたんならあ、やっばすゴム長新しくしてよがったあ」
ゴム長？　あ、かけえってこと？
「なっどあめだんだかまりすでは」
ん？　なんて？　ヤッさんの顔見たら　困ったような顔してんだけど
「なんつったんすか？」
「だいつ、これはあ、スギさんが言ったんだからなあ」
「おめもんだっつったべさ」
なんだ？　この気まずいカンジ？
「スギさんが言うにはあ、だいつのゴム長あ、前のなあ」
「あ、はい」
「納豆があ腐っだみてえな臭いすてはあ」
納豆が・・・腐った・・・臭い
「だ、だいつ、だいつだけでねえからあ、俺もはあ、うちい帰ってえ、
　　ゴム長脱ぐとお、おっかあがあ、あんたの足臭っせえからあ」
足が臭せえ　納豆・・・腐った・・・
「雑巾で足拭いてから入れってはあ、亭主が働いて帰ってきでんのはあ」
かあちゃんが　納豆敷き詰めて　三日間密封したみてえな臭いって
マジだったんか　大げさじゃなくてマジ
「あの・・・　すいません！　俺、自分じゃ全然わかんなくて」
「そったもんだよお、俺もはあ自分じゃわかんねした」

「わもさ」
「ヤッさんもスギさんも、俺の足がメッチャ臭せえの我慢してくれてたんすよね」
「だいづ、俺たちはあ、おんなし臭いすんだよお」「んだよ」
おんなし臭い
「我慢とかじゃねえんだよお、ああ、足蒸れでんだっぺえってのはあ」
「それでも納豆が腐ったつうのは相当つうことっすよね」
ヤッさんとスギさんが黙っちまった 相当だったんだ
「そ、それでもおあれだっぺ？ あのゴム長はあなげたんだっぺ？」
「投げる？ どこに？」
「あ、そんだ、これはいつも通じねんだした、捨てたんだっぺ？」
「あれはどうちゃんが洗って干してて、どうちゃんが履くつつってます」
「あれは・・・ 洗ってもお、どんだっぺえ」
「まだ全然履けるんで」
「履けるつつてもはあ、あれは洗ってもお臭いとれねっぺえ」
それでも ともももさ
「あの、俺のどうちゃん、浮浪者だったとき、履くものがなくて」
「履くもんがねえ？」
「裸足だったときがあって」
「はんだす？」
「ゴミ漁ってたら、ゴム長見つけて、ちょっと小せえけど履けなくねえって、
ありがたかったつうって、なんつうか、どうちゃんにとっては、
履けるものがあるつうのはありがてえつうか」
なんでこんな話してんのか 自分でもわかんねえけど
「俺はそういうどうちゃんに育ててもらったんで、履けるものがあるのは、
すげえありがたくて、こうやって、新しいゴム長買ってもらえんなんで、
それは・・・ メッチャ・・・ ありがたくて・・・」
「だいづ！」「だいづ！」
ヤッさんとスギさんが俺のこと抱きしめて
「だいづのお父ちゃんはすんげえ人だあ」
「わ、なだでてまっだ」
「そういうお父ちゃんに育てられたからあ、だいづはなんでも大事にすっぺ」
「あ、はい、かあちゃんが稼いできた金だから大切に使わねえとなって」
「はああ、えれえもんだあ」「わのかつちやさも聞かせでじゃ」
「だいづは、握りメシのホイルについた米粒ひとつひとつ食ってっぺ」
え？ そんなん見てたの？
「この子はあ若けえのにい、米一粒無駄にしねえってのはあ」「んだ」
「え、うちではあたりめえつうか」
「だから、だいづは俺たちとおんなしなんだっぺ」
「おんなし？」
「仲間だっぺ」

「マジっすか？ 仲間って言ってくれるんすか？」
俺がどん底のど貧乏人の子じやなくても？
「そうだよお、足が臭せえのもおんなしだけんちょ」
笑ってっけどさ 俺 全然気いつかなかったって
鼻おかしいんかな

にょいの話

家のドア開けて

「ただいま」

リビングから

「おかえりなさい」

愛里が走ってきて

愛里の顔見たら もうたまんなくて

俺は抱きしめて

「愛里、ただいま」

「すごい」

俺の腕の中で

「汗の匂い」

「あっ ご、ごめん」

「あなたがこんなに汗をかいて泥だらけになって汚くなって」

ん？ え？

「そうやって働いて」

愛里が顔あげて

「私のこの指輪買ってくれたんだなって」

愛里 俺はその言葉で一生愛里のために働けるよお

「なんか、ライオンの狩りの場面が浮かびました」

「ライオン？」

獣の匂いっつうこと？

「ライオンで数匹で獲物を囲んで狩りをするんですけど」

ん・っど？

「アメリカの自然博物館のおみやげコーナーで流れてた動画です」

「あ、そ、そっか」

「何日も食べてなくて必死に獲物を、狙われた動物も必死で」

「そっか」

「逃がしちゃうこともあるし、やっと捕まえることができて」

「うん」

俺は 腕の中で一生懸命しゃべってる愛里が可愛くて

「食べてるところは、ちょっと・っ 見れなかったんですけど」

「うん」

「生きるって、こういうことなのかなって」
「そっか」
「そういうカンジです」
「そっ、え、なにが？」
「あなたが」
「俺は狩りしてきたんじゃないけど？」
「今のあなたの、こう、全体から滲み出るものが、生きる原点ていうか」
「原点？」
「食べ物を得る原点みたいな」
「俺？」
「はい、頼もしいです」
マジかよおお 愛里いい とろけちまうんすけどおお
「あれ？ なんだろ？ なんか・・・ 臭い」
「臭せえ？ あっ」
ゴム長 足 納豆腐った・・・
「あ、愛里、ちょい離れて」
「なんで？」
「ゴム長脱ぐからさ」
「ああ」
一歩だけじゃ足んねえと思うんだよお
「もうちょっと、つか、もっと」
「え、なんで？」
「あの、俺の足」
この言葉を愛里に言うって、ちょっと勇気いるけど
「臭せえから」
俺は自覚ねえんだけど
「そうですか」
「あ、うん」
「何か持ってきた方がいいですか？」
「何か？」
「タオル、あ、濡れたタオル？ 足を拭くのに」
おいおいおい なんだよお、この優しさはさあ
「や、すぐシャワー入っから」
「わかりました」
愛里がリビングに戻ってった
たまんねえなあ
バンッ
あ、かあちゃん
「かあちゃん、おかえり」
「ウワッ 汗臭い！」

「今シャワー浴びっから」
「やったあ、あんたのゴム長、ゴムと足の蒸れた臭いが混じって」
「しゃあねえじゃん、働いてきたんだからさ」
「高いディフューザーが全然効かない」
かあちゃんに聞くっきゃねえかな
「かあちゃん」
リビングの愛里に聞こえねえように小せえ声で
「俺の前履いてたゴム長ってさ」
かあちゃんが鼻に手えあてたけど
「あれが、なによ？」
「あれって、納豆腐らせたみてえな臭い、した？」
「うまい諭え！　自分でわかってたんじゃない」
やっぱそうだったんか
「だけどね」
かあちゃんがキッチンの方見てから
「カズオが」
かあちゃんにしてはメッチャ小せえ声
「カズオが履いてるときは、なぜか気にならないのよ」
「へ？」
「あんただとストレートに臭い」
ストレートって
「そうすか」
やっぱこういうのはあれじゃね？　愛　だよな

晩メシはアジの南蛮漬け　玉ねぎ抜き
愛里が生の玉ねぎは食べねえってとうちゃんに伝えてたから
茄子やピーマン入ってて美味え
「愛里さんは今日はどうやって過ごしたの？」
「夏休みの課題をやってました」
「勉強、えらいわね」
「アメリカに持って行ったんですけど、ほとんどできなかったから」
「お父様とお母様との時間ですものね」
「なんかスケジュールいっぱい」
「愛里さんが来るのを楽しみにしていらしたのよ」
「そう・・・みたいです」
「あとは部屋にいたの？」
「いえ、フラワーアレンジメント教室の申し込みをしました」
「あら、そう」
「ひとつは一日だけで、ちょっと高かったんですけど興味があったので」

花とか なんかメッチャ可愛い話してんな
「もうひとつは、個人でやってる教室で、三日間なんですけど、
午前二時から午後二時間のどちらか選べて、午前にしてきました」
「NET では予約できないの？」
「できますけど、雰囲気を見たかったので」
「そうね、そういうのも大事ね」
「あとは、おとうさんとおしゃべりしてました」
「カズオと？」
「はい、楽しかったです」
とうちゃんと愛里の会話って、俺メッチャ聞いてえ
「どんな話をしてたの？」
それ！ マジそれ
「空がすごくきれいだったから、空がすごく青いですねって」
なんだそのメルヘンみてえな可愛い話
「そこから、ベランダの発泡スチロールの箱の話になって」
やっぱ愛里もベランダに植えて欲しいのかな
「なんで発泡スチロールの箱なんですかって聞いたら」
なんで？
「おとうさん、おもしろくて」
笑ってっけど とうちゃんジョーク言えたんか
「入れ物がなかったら土が入れられないから植えられないって」
え それのどこがおもしろポイントだ？
「そうじゃなくて、別の物に入れたらどうですかって言ったら」
別のもの？
「セメントの袋は、おかあさんがダメって言ったって ハハハハ」
愛里 ごめん それのどこが笑えるポイントかわかんねえ
「なんか、おかあさんの気持ちがわかりました」
急に真顔になったけど
「わかってくれた？」
「はい」
「やっとわかってくれる人に出会えたってカンジよ」
なんの話だ？
「でも、なんか・・・ こういうのもいいのかなって」
「愛里さん、ダメ、危険、私みたいになっちゃダメ」
「ダメですか」
「そっちは危険」
「そうですか」
いったい 愛里とかあちゃんは何の話をしてんだ？
とうちゃんと顔見合わせたら、とうちゃんもポカンとしてっけどさ

晩メシ終わって

愛里とかあちゃんはリビングでなんか話してて

俺とどうちゃんはキッチンで片付けしながら

「つうことで、どうちゃん、明日っから俺の分入れて8個お願いします」

「さっき、アイリちゃんの部屋に置いといた炊飯器も持ってきたからよ」

「どうちゃん、ありがとう」

「それは、明日のアイリちゃんの弁当のか」

「アジのハンバーグみてえなやつ」

「今日アジが安くってよ、いっぺえ買ってきちまってよ」

「俺は買い出し一緒に行けねえからさ、ありがてえよ」

「アイリちゃんのイチゴは、ちゃんと買って帰ってきてよ、えれえなあ」

「これだけはさ、やっぱさ」

「だな、イチゴだけはなあ」

「どうちゃん、来年はイチゴ育てような」

「アイリちゃんも喜ぶだろうな」

「どうちゃんとベランダの花とか野菜の話するくれえだもんな」

「俺のあとついて歩いてよ、ダイチの小せえ頃みてえでよ」

「どうちゃんといっと、楽しくてしゃあねえんだよ」

「そっか？ 俺はなんも楽しいことなんてできねえけどな」

「楽しいよ、俺、今でも楽しいもん」

あ そうだ どうちゃんにも聞いてみっか

「どうちゃん、俺さ、現場から帰ってきてさ、臭せえかな」

「俺はなんも感じねえけどな」

そっか、どうちゃんは感じねえ 違いはなんだ？

「なんつうかよ、若け頃思い出すつうかよ」

若けえ頃？

「懐かしいつうかよ」

懐かしい？

「なんか、そんなカンジっきゃねえけどな」

「俺さ、前のゴム長履いてたとき」

「もう乾いたよ」

「うん、あれ履いてたとき、納豆が腐ったみてえな臭いしてたって」

「納豆が腐った？ 納豆って腐ってんだろ？」

「あれは発酵した匂いでさ、その納豆が腐った臭いってさ」

どうちゃんが上向いてなんか考えてる

「あっ」

「え、なに？」

「俺、言われたことあんな」

「え、いつ、だれに？」

「若けえ頃」

若けえ頃？

「浮浪者んときよ」

浮浪者んとき？

「どこだっけなあ、ベンチで寝てたらよ、酔っぱらったおっちゃんがよ、
おめえ納豆が腐ったみてえに臭せえからあっち行けっつってよ」

「なんだよそれ、ひでえな」

「俺は酔っぱらったおっちゃんが怖くてよ、脚動かねえけど必死で逃げた」

「逃げたんかよ」

「なんか夢みてえだな」

「ん？」

「あんな汚ったねえ浮浪者がよ、こうやって、こんな立派な息子いんなんてよ」

「とうちゃん、おっちゃんたちがさ」

俺がメッチャ嬉しかった話

「俺のスピリットはおっちゃんたちとおんなしだっつってくれたって」

「スピ、なんだ？」

「魂っつうか精神っつうか、ここんどこに持ってるもんっつかさ」

「おんなしだっつってくれたんか」

「それってさ、とうちゃんに似てるってことなんじゃねえかな」

「俺に・・・」

「なんっつか、あ！ だからおんなし臭いすんじゃね？」

「納豆腐った臭いか」

「遺伝だよ、とうちゃんの遺伝」

「そっか、納豆腐った臭いも遺伝したんか」

「だから、とうちゃんなんも感じねえんだよ、おんなしだからさ」

「違うわよ！」

かあちゃん

「ゴム長の中で足が蒸れて菌が繁殖した臭いよ」

「菌って納豆菌？」

「雑菌！」

雑菌てさ

えっ 愛里も聞いてた

「愛里さんを送ってあげなさい」

「おう」

どこから どこまで 聞いてたんかな

愛里の部屋の玄関

「そんじゃ、またあとで LINE すっから」

「あの、お弁当ありがとうございました」

「今、俺、愛里にあれっきゃできねえからさ」
「すごく美味しかったです」
「マジ？」
「本当は、美味しいってLINEしたかったんですけど、工作中だから」
「ぜーんぜんいいから、仕事してるときは見れねえけど」
「そうですか？ それじゃ、たまに」
「たまじゃなくてもぜーんぜんいいから」
「はい」
「愛里」
俺はもう このくちびるにずっと ダメだ
「私は」
俺の腕の中で
「あなたの匂いが臭いと思わないです」
え？ ま、また臭いの話？
「たとえ、納豆が腐ったような臭いだとしても」
「えっ、やっぱ、んな臭いすんの？」
「いえ、そこまでは」
そこまでは・・・って、どこまでは臭せえんかな？
「私、あなたと出会うまでは男子の匂いとか汗臭い匂いとか耐えられなくて」
えっ
「でも、なぜかあなたの汗臭い匂いは気にならなくて」
これは・・・ 臭せえのか臭くねえのかどっちだ？
「慣れたのもあるかもしれないけど」
慣れた・・・
「あの匂いを香水にしてつけろって言われたら絶対イヤですけど」
「イヤ・・・なんか」
「香水にしてつけろって言われたらですよ？」
「あ、言わねえし、香水にしねえから」
「私には絶対にできないから」
「なにを？」
「あなたみたいに、立派に、おとなみたいに働くとか」
「愛里はなんもしなくていいつつたろ」
「でも・・・こんなに何もできなくて将来どうなるのかなって」
「俺がいるつつたじゃん」
「でも」
「俺、がんばっからさ」
「はい、明日もがんばってください」
明日だけじゃなくてさ
「おう」
「それじゃ」

トアが閉まって鍵 あれ？ え？ またドア開いた
愛里が飛び出してきた 俺の腕の中に
「ケガだけは しないで」
たまんねえっ
「ぜってえしねえから」
「はい、それじゃ」
ボタンと閉めた途端カチャッ
うおおおおおっ たまんねえ！

とうちゃんの話

帰ってきてシャワー浴びたけど、いちおうもう一回浴びた
愛里 さっきのはヤラレた マジのハートに矢だ

『愛里』送信

『さっき 怪我だけはすんなって』送信

『嬉しかった』送信

ピコン

『長くなってもいいですか』

『いいよ』送信

ピコン

『あなたのおとうさんに聞いたんです』

聞いた？ なにを？

ピコン

『おとうさんが若い頃怪我したときのこと』

ピコン

『私が聞いたんですけど』

ピコン

『おとうさんは お天気の話でもするみたいに』

ピコン

『空が青かったみたいなカンジで』

とうちゃんはいつもそうだもんな

ピコン

『私は骨折したことがないので 痛いんですかって聞いたら』

ピコン

『怪我はなんでも痛いもんだから我慢しないって笑って』

ピコン

『痛み止めとかもらえないんですかって聞いたら』

ピコン

『若い頃怪我をして入院したとき』

ピコン

『会社の人に言われたそうです』

なに？ 俺が聞いたことある話か？

ピコン

『痛み止めは頼むなって』

え？

ピコン

『お金がかかるから我慢しろって』

んな話・・・聞いたことねえ

ピコン

『おとうさんはお金がなかったから我慢したそうです』

なんか メッチャ腹立ってきて

ピコン

『この前入院したときは痛み止めもらったんですかって聞いたら』

ピコン

『入院するだけでもお金がかかるから そんなのもらえないよって』

だから我慢したのか 看護師さんやお医者さんが戸惑うくれえ

ピコン

『私は入院費のこととかよくわからないくて』

ピコン

『痛み止めってそんなに高いのかわからなくて』

そんなの払えんかあちゃんは払えんだよ 全然払えんだよ

若けときのだって 会社はどうちゃんに保険かけてたんだよ

払えたんだよ 入院費払えたんだし痛み止めくれえさ

なのにさ 入院費できるだけ安くしようってことか

ピコン

『余計なことを言っちゃって』

余計なこと？

『なんて言ったの？』送信

ピコン

『もしまた骨折したら痛み止めもらってくださいって』

言うよ そりゃ言うよ 余計なことじゃねえよ

ピコン

『もしまたなんて またとか もうあっちゃいけないのに』

『愛里は心配してくれたんだから つか言ってくれてありがとう』送信

ピコン

『おとうさん笑いながら言うんです』

ピコン

『脚が曲がらなくなったときは困ったって』

とうちゃんは いっつもそうだ

ピコン

『私は』

ピコン

『なんでもないです』

『なに?』送信

ピコン

『また余計なこと言いそうになっちゃって』

『余計なことじゃねえから』送信

『思ったことや言いてえこと言ってほしい』送信

ピコン

『もしあなたが骨折して入院して脚が曲がらなくなったら』

ピコン

『私は笑えない 私は泣いちゃうすごく泣いちゃう』

ピコン

『そしたらあなたは私を心配させないように』

ピコン

『笑う』

え・・・

『あなたはおとうさんにそっくりだから』

愛里・・・んなこと考えて

ピコン

『あなたが痛くて辛いのに あなたが笑ったら

痛いか辛いか言えないようにしたのは私だって思っちゃう』

愛里は・・・んっとに

ピコン

『だから 絶対にケガしないで』

『ぜってえしねえよ w』送信

ピコン

『笑ってないくせに w つけないで』

これつけねえとさ 愛里ぜってえ泣いてっからさ

『ヤベ見抜かれた w』送信

ピコン

『わかりますよ! 今の w は本当?』

『本当です』送信

ちがうけど そんなもさ

ピコン

『ごはんのときに言えなくてごめんなさい』

言えねえよな

ピコン

『おとうさんはなんとも思っていないみたいで』

ピコン

『でも おとうさんの言葉にしない感覚っていうか』

言葉にしねえ感覚?

ピコン

『なんかすごく深くて』

深い？

『おとうさんも気がついてないくらい深いっていうか』

とうちゃんも気いつかねえ？

ピコン

『なんかそんなカンジでした』

なんかよくわかんねえけど そっか

『もし俺が骨折して入院したら』送信

『俺は痛てえ痛てえって泣きわめいて痛み止め打ちまくって』送信

『愛里に泣きつくからよろしく』送信

ピコン

『放っておきます』

愛里だな

『そばにいてくだせえ』送信

ピコン

『その前に』

ピコン

『ケガしないで！』

だよな

『はい、ぜってえケガにだけは気をつけます』送信

ピコン

『それじゃ おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

だから さっき愛里は「ケガしないで」って抱きついてきたんか

そんなことがあって そんなこと考えてくれてたから

たまんねえよ

にしても とうちゃん

俺 聞いたことなかったよ、若けえ頃のブラック会社の仕打ち

そこまでだったんかよ

とうちゃんその話は俺にはしたことねえよ

ねえちゃんからも聞いたことねえな かあちゃんは知ってんのかな

愛里に感謝だよ

愛里が聞いてくんなかったら、俺、一生知らなかったかもしんねえ

朝のキッチン

とうちゃんのかあちゃんの弁当と握りメシ作って

俺は愛里の弁当作って

とうちゃん いつもとおんなし顔でフツツに握りメシ作ってっけど

「とうちゃん、あの・・・さ」

「ん？ どした？」
「愛里に・・・骨折したときの話、したんだって？」
「アイリちゃんは骨折したことねえから、痛えのかって聞かれてよ」
「痛み止めの話」
「痛み止め？」
「若け頃の、会社の人に我慢しろって言われたって」
「ああ！ やっぱなあ、金かかるとよ」
「そんなん、我慢しねえで、もらえよ」
「もう骨折しねえようにすっから」
「じゃなくてさ、この前んときもさ」
「我慢できねえもんでもねえからよ」
「我慢すんなっつってんの」
「アイリちゃんに叱られた」
「愛里に・・・叱られた？」
「おとうさんが我慢してっと、おかあさんは心配すっだろって」
「そうだよ」
「金かかるとか、ダイチさんがぜってえ稼いでくっから」
え・・・
「んな心配すんなってよ、なんかホントの娘に叱られてるみてえだよ」
とうちゃんが嬉しそうにしてて
俺が 絶対稼いでくるから心配すんなって 愛里
余計なこと言ったって すげえこと言ってくれてたよ
「アイリちゃんとしゃべってっと、や、ダイチが現場行くようになってからか」
とうちゃんが握りメシにぎりながら
「な～んか昔のこと思い出してよ、そういやあこんなことあったなあっつうかよ」
「そういうの、俺も聞いてえよ」
「んなていしたことじゃねえよ」
「聞いてえよ」
「そっか？ ん・・・っと」
とうちゃんがなんか考えてて そんで
「あ！ 土方やってるとき、便所入ってたら呼ばれてよ、
あわててズボンの、あげようとしたら挟んじまってよ」
「えっ、おっおっお」
「死ぬかと思った」
「だよなあ」
「あんとき痛み止めあったらよかったな」
「そういうときに使うかな」
「わかんねえけどよ、あれは、死ぬかと思った」
「そんで、どうしたの？」
「ゆーっくりチャック下した、まあなんとかな」

「よかったな」

「あれは、ダイチも気いつけろよ」

「お、おう、それはぜってえ気いつける」

「俺の話なんて、こんなんばっかだぞ」

「メチャ聞きてえ」

「これはなあ、アイリちゃんには言えねえもんな」

「言えねえな」

俺は どっちのとうちゃんも好きだな

金かかるからって痛み止め我慢してたつうとうちゃんも

とうちゃんらしいつうか 我慢はしねえで欲しいけど

チンコの皮チャックに挟んで死ぬかと思ったつうとうちゃんも

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

「ありがとう」

スーパーの袋に入った握りメシ どっしりすんな

この袋もなんとかした方がいいんかな

こんだけ多いと潰れそうだよな

まあいいや

「いってきます」

ゴム長履いて

愛里は俺の臭いは気になんねえつってくれた

そんだけ働いてっからって

だから俺は今日もメッチャがんばる

ロールケーキ

玄関のドア開けて

「ただいま」

あれ？ 愛里出てこねえ

「ダイチ、おかえり」

「ただいま、愛里は？」

「なんか作るつつって自分の部屋にいるみてえだよ」

「なに作んの？」

「わかんねえ、俺が美里に買ったイチゴ1パックくれつつって持ってった」

イチゴ？ かあちゃん用の？ かあちゃんにパフェ作るのかな

なんでかあちゃんだけ？ 俺は？ や、まあそれは

「シャワー浴びてくる」

握りメシ潰れてたな 潰れたのは俺が食ったからいいけど

明日っから袋ふたつに分けた方がいいな

それでも、凍ったペットボトル入れてっからいいけどさ

でねえと腐っちまうからさ ペットボトル2本？ メッチャ重てえな

しゃあねえか

シャワー終わってバスルーム出たら

キッチンから愛里ととうちゃんの話声がする

「愛里」

こっち見た顔が メッチャ真顔 どした？

「ダイチ、アイリちゃんがよ、ケーキ作ってくれた」

「ケーキ？」

「ロールケーキです、去年の文化祭で作った、あのなんのへんてつもない」

「愛里が作ったロールケーキ！」

「だから、去年の文化祭のレシピだから、メッチャ地味な」

「食いてえ」

「今日はダメです」

「なんで？」

「ロールケーキは一晩寝かせるそうです」

「なんで？」

「家庭科の先生に聞いて！」
なんかピリピリしてね？
「あの、おとうさんにも、あなたにも言うておきますけど」
とうちゃんと顔見合わせて
「お、おう」「な、なんだ？」
「これは、渡されたレシピどおり作っただけなので」
え、愛里　なんで俺のこと睨む？
「何のオリジナリティもありません」
「それでも愛里が作ったんだろ？」
「レシピどーりの分量を混ぜてレシピどーりに焼いただけです」
「それでも愛里が」
「私は責任持てないからっ」
責任？
「前に、おかあさんが食べたって」
「言ってた」
「それと、あの、唐揚げ用の鶏肉のお礼をどうしたらって」
「おっちゃんたちにも？」
「ダイチ、二本も作ったってよ」
「でも、どうなるかわからない、あのときは家庭科の先生がそばにいて、
今日は、私一人だから・・・ あ、こっちは森下家用です」
「おんなしじゃねえの？」
「イチゴ！　おかあさんはおとうさんのイチゴしか食べないでしょ」
「あれ？　あのロールケーキってジャム」
「そこなんです、そこ！」
「どこ？」
「市販のジャムを買おうと思って気がついたんです、
おかあさんはおとうさんが買ってきたイチゴしか食べないって」
「そんなじゃ、ジャムも作ったっつうこと？」
「小さい頃ママが作ってるの見た記憶はあるけどどうろ覚えて、
検索して材料と手順を見て動画も見て、でも、正しいかどうかわからない」
「そんなんどうでもいいよ」
「どうでもいい？　私があんなに時間かけて検索して動画見て」
「そ、そこじゃねえよ」
「それじゃ、どこ？」
なんでこんなケンカみてえになってんのかな
「愛里が作ってくれたっつうことが最高じゃん」
「あなたは」
え、メッチャ怖え顔してっけど　俺なんか悪りいこと言った？
「そうやって私に甘過ぎるから、私は自分に対して正しい判断ができないっ」
「愛里は自己評価低すぎんだよ」

「ハ？ 私は冷静に自分を見てますけどっ」
「愛里、ちょっと落ち着いて、な、落ち着いて」
「落ち着いてないですかっ」
「な、なんかちょっとピリピリしてるっうか」
「ピリピリっ？」
「愛里」
「抱っこしたら落ち着くとかそういう」
「ちげえよ、ちげえから、ちげえ」
そうなんだけど
「ただいまー！」
かあちゃん
とうちゃんが走ってった
「おかあさん・・・ 帰ってきましたね」
俺の腕の中で小さな声で
「うん、帰ってきた」
「えええ」
ええっつうのは、どういうええなんかな
「愛里さん」
パッと腕放して 愛里もパッと離れて
「ロールケーキ作ってくれたんですって？」
「は・・・い」
「食べてみたい」
「あの、一晩寝かせた方がいいって、家庭科の先生が」
「それじゃ端の方だけちょっと」
「え、あの、えっと」
俺ととうちゃんの顔交互に見てっけど？
「私、切れないんです、文化祭のときは切るのがうまい人たちが」
「わ、わかった、俺切るから」
「それじゃ・・・ こっちです」
愛里が上にかけてたホイール取った
おおおお ロールケーキ
「あらあ、きれいに焼けてる」
「愛里、これは何等分すりゃいいの？」
「一本6から8等分、文化祭のときは8等分でした」
「この端っこのを先に切ってからだよな」
「はい」
端っこ切ったら おおお メチャロールケーキ
「きれいに巻けてるわね」
「そう・・・ですか」
「それ、ちょうだい」

なんかあちゃんがいちばん先なんだよ
「美味しい！」
「ほ、本当に？」
「なんていうの、しつこくなくて、家庭の味、こういうの大好き」
「は・・・」
えっ 愛里がしゃがみ込んだ
「愛里、どした？」
「いえ、あの、よかった」
「あら？ このジャム、どこの？」
愛里がしゃがんだまま 俺のシャツギュッてつかんだ
かあちゃん、今は辛らつな批評はやめてくれ
「すっごく美味しい、クセがなくてイチゴの味と香りがそのまま」
愛里がヘナッと俺の胸んところに
俺は片腕で愛里のこと支えて
「かあちゃん、そのジャムも愛里が作ったんだってさ」
「愛里さんが？」
「しかも、とうちゃんが買ってきたイチゴで」
「え？」
「かあちゃんはどうちゃんが買ったイチゴしか食わねえからって」
「そんなことまで？」
かあちゃんがしゃがんで
「もう愛里さんたら」
俺の腕どけて愛里のこと背中から抱きしめた
「ありがとう」
「いえ、お、おかあさんが前に食べたいって」
「ちゃんと作ってくれたのね、しかもカズオのイチゴで」
「私は・・・こういうの、あまりっていうか全然得意じゃなくて」
あれ？ 俺のシャツつかんでる愛里の指にバンドエイド
火傷したんか そんなになってまで 焼いてくれたなんてさ
「お世辞じゃなくて、私にとっては最高のロールケーキ」
「切れ端ですけど」
「明日、会社に持っていってもいい？」
「あ、はい、あの、はい」
「それじゃ、一切れホイルに包んでね」
誰に言ってる？ あ、とうちゃんか

晩メシんとき、愛里が
「おとうさん、それと、あと」
俺の方見たから俺か？

「さっきは取り乱して、ごめんなさい」
「いいよ、んな謝らなくてさ」
「慣れないことをしたので、すっごく緊張しちゃって」
そっか、そんでか
「なんか、すごーく不安になって、これでよかったかなとか」
「美味しかったわよ」
かあちゃんだけだよ、食ったの 俺まだ食ってねえよ
「文化祭のときも二本ずつ焼かされたので、まあそれはあれなんですけど」
俺が食ったのは愛里のかな どうなんだ？
「ジャムが・・・ 初挑戦で」
「本当に美味しかったわよ」
かあちゃんだけなんだよ食ったのはっ
「おかあさんが、美味しいって言ってくれて、ホッとしました」
プレゼンのときのかあちゃんの部下みてえだな 見たことねえけど想像つく
「おっちゃんたちの分までさ、ありがとな」
「それは、何かお礼をって思ったけど、私は何も作れなくて」
「パフェ作れんじゃん」
「溶けますよね」
このスツと冷てえカンジになるとこ けっこう好きなんだよ
「溶ける、うん、溶ける」
「おかあさんも前に食べたいって言ってくれたし」
「最高のロールケーキよ」
かあちゃんだけが食ったんだよっ
「これは、もうこれしかないって、それで・・・ はい」
「明日持ってくからさ」
「はい」
「森下家のじゃねえ方だよな？」
「はい、あっちは、あなたのイチゴで作りましたから」
えっ どっちのジャムも手作り？
「あっ！ 明日の朝のヨーグルトがけのイチゴ、使っちゃった」
「買ってきたから」
「そうですか、ありがとうございます」
「あれ？ 俺はどっち食べばいいの？」
「どっちでも」
「どっちでもってさ」
「どっちもでも、いいですけど」
俺は 二切れ食えるっつうこと？
「そっか」
「愛里さんはダイチのイチゴの方ね」
「私は・・・ いいです」

「なんでだよ？」

「自分で作ったのって・・・ なんか」

「愛里は俺のイチゴの食べよ」

「え？」

「愛里のために買ったイチゴなんだからさ」

愛里が俺の顔見て

「はい」

さっきのピリッピリからウソみてえに素直おお

愛里の緩急 メッチャ急速緩急 好きすぎる

晩メシ終わって

愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってて

俺とどうちゃんはキッチンで片付けして

「どうちゃん、監督もどうちゃんの握りメシ美味えつつってたよ」

「そっか、ありがてえな」

「それでもさ、握りメシ多くなったから、潰れんのもあってさ」

「そんじゃ、袋ふたっつにすっか」

「そうすっとさ、凍らせたペットボトル二個ねえとさ」

「この暑さだしなあ」

「ペットボトル二個でもいいけどさ」

「重くねえか」

「1リットル2個はちょっと、それでも」

「あっ、向こうのホームセンターでせ保冷シート売ってっぞ」

「ああ！ それにくるめばいっか」

「それでもなあ、1枚500円くれえすんだよな」

「500円は高けえな」

「バカじゃない」

かあちゃん いつから？

「保冷バッグ買えばいいでしょ」

「保冷バッグってけっこう高けえじゃん」

「私がお金を出すから」

「え？ や、それでもさ、この現場でっきゃ」

「あんたのバイトが終わったらカズオが使えばいいでしょ」

「あ、そっか」「だな」

「問題は」

問題？

「あんたに買わせたら、またとんでもなくダサイのを買ってくる」

「なんで決めつけんだよ」

「安かったからって」

「安い方がいいじゃん、オシャレとか関係ねえじゃん保冷が目的なんだから」

「ほら！　そういうとこ！」

「そんじゃ・・・　どうちゃん？」

どうちゃんが怯えた目えして俺を見た

だよな　どうちゃんも

「あの、私を買ってきましようか」

愛里！　愛里だ、そうだ愛里がいた

「愛里さん、お願いできる？」

「はい、明日、1日だけの教室があるので、その帰りに買ってきます」

「よろしくね」

「はい」

解決！

「あの」

俺？

「なに？」

「どういう形のがいいですか？」

どういう形？

「保冷できんならどんなんでもいいよ」

「Uberの人のリュックみたいなのがいいですか？」

Uber　たしかに　なんかUber化してっけど

「そこまで本格的じゃなくて」

「手提げ？」

「あ、はい」

「わかりました」

「愛里さんがいてくれてよかったわ」

マジよかった

愛里の部屋の玄関

メッチャ甘い匂いがする

「あの、キッチンの掃除は、おとうさんにまかせていいんですよね」

「キッチン？　だよな、最近どうちゃんに任せっぱなしでごめんな」

「私はいいですし、最近キッチンほぼ使ってなかったから」

あ、そっか

「でも、今日は・・・　すごいことになってて」

すごいこと？

「入っていい？」

愛里の部屋のキッチン

愛里の格闘ぶりがメチャわかる

「今すぐ掃除すっから、愛里は好きなことしてていいよ」

「あ、はい」
オープンは そんな汚れてねえけど 油拭いて
調理器具洗ってしまって 流しとカウンター
え 背中・・・から
「なんか、あなたがキッチン掃除してるの見てたら」
愛里 背中が 反則つつうか
「ホッとして、ドット・・・ なんか疲れが」
「そ、そっか」
「あなたにあたっちゃってごめんなさい」
俺の背中には・・・ 当たってんだけど
「や、いいよ、全然」
全然よくねえ 俺がよくねえ
「あ、愛里、俺、流し、ザーッと流すから、水飛ぶからさ」
「あ、はい」
離れた や くっついてて欲しかったけど あれ以上は
集中 流しに集中
おっし なんとか 終わった
「そんじゃ、またあとでLINE すっから」
「はい、あの、本当にごめんなさい」
「可愛いから」
「え？」
「愛里が緊張してっとも」
「そうですか」
このスッと冷てえカンジになんのが また可愛いつつうか
「そんじゃ」
今は キスは ちょっと やべえから
ドア閉めたら 速攻で鍵閉まった
なんか淋しいな ゆうべは
いやいやいや、ゆうべみてえに来られたら 俺の煩惱ダム崩壊
帰ろう

動画撮影

朝のキッチン

愛里のロールケーキ、まずは端っこ切って
ちょっと食べてみてえな 食っちまおう
端っこ食った・・・ら 美味え マジ美味え
スポンジ？ フワッフワでしっとりしてて
俺が文化祭で食ったのは愛里のじゃねえな
あれはボソボソしてた 混ぜが足りなかったんじゃないかね
愛里はやっぱすげえ
レシピどおりでもさ違いは出るんだよ
そんでこのジャム ジャムってあんま好きじゃなかったけど
愛里のジャムはジャムじゃねえ ジャムなんだけどさ
かあちゃんの大絶賛はウソじゃなかった
かあちゃんはウソは言わねえけど
ぶちのめされるくれえ本当のことっきゃ言わねえ
これを均等に切った どうやって持ってく？
一個ずつホイルには包んだけど このまんまだと潰れちまうよな
「とうちゃん、ロールケーキ、どうやって持ってきゃいいのかな」
「ん・・・え・・・ あ！ 箱に入れりゃいいんじゃないか？」
「箱？ んなもんねえな」
「ヒトミの部屋にあんだよ」
ねえちゃんの部屋？
とうちゃんがねえちゃんの部屋に入ってって
「これ」
あ！ 岡部さんにもらった梅干の箱 忘れてた
「掃除してたらよ、本棚の脇んところにあってよ」
「あ、そ、そうなんだ」
「なんでこんなところに箱あんのかなって」
「か、かあちゃんが捨てようと思ってそのまんま忘れたんじゃないね」
俺だけどさ 忘れてたんだけどさ
「そんなら使ってもいいのかな」
「いいんじゃないね、大切ならかあちゃんもっとと使うじゃん」
「そっか、だな」

「そうだよ」
「そんじゃ、これに平たく並べてフタすりゃいんじゃないか？」
んっと、ヤッさんとスギさんと奥さんたちにもか 4個
「おおお！ とうちゃん、ピッタリ」
「まだ残ってっけど持ってかねえんか」
「4個っきゃ入んねえんだよ」
「フタんどこにも4個入れりゃいんじゃないか？」
「そしたら閉まんねえじゃん」
「こうやって重ねてよ、上んどこホイルでガッツリやってよ」
「あ、そっか」
そしたら俺も食える あと3個 現場でヤッさんとスギさんに
あと1個 監督にもあげるか
そんで、フタして奥さんにもつつって二人に渡せばいっか
「とうちゃん、こっちの森下家の分も切っとくから食ってくれよ」
「俺はその端っこのでいいよ」
「せっかく愛里が作ったんだからさ」
「そんでも、美里もダイチももっと食いてえだろ」
「いっぱいあるから、せっかくなんだからさ」
「そっか？ そんじゃあとで食わせてもらうからよ」
「端っこの、とうちゃんちょっと食ってみてよ」
とうちゃんが口ん中入れて
「美味えなあ、アイリちゃんはすげえな」
「だよな」
「ケーキ作れんなんてよ、俺は、んなシャレたもんは作れねえよ」
「俺も苦手だよ、こんくれえでやっちまうからさ」
「アイリちゃんがいると楽しいな」
「うん」
マジでさ 俺はメッチャしあわせだ！
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「おう、ありがとう」
握りメシとペットボトル入った袋がふたつとその上にロールケーキの箱
なんかすげえ大荷物になったな
マジ Uber のリュック欲しいな 今だけな

現場着いて真っ直ぐ監督室へ
「失礼します」
「森下おはよう」
「これ、今日の握りメシっす」
「ありがとう、はい、200円」

「監督は甘いもの好きっすか」
「嫌いじゃないよ」
「よかったら、これ、手作りロールケーキっす」
「手作り？」
「はい」
「森下ってそういう系？」
「そういう系？」
「なんだっけ、最近いるだろ、俺ケーキ作りますみたいな」
「俺が作ったんじゃないすよ、俺の、カノ、カノジョが」
「ああ、お菓子作りが趣味みたいな？」
「趣味じゃねえんすよ、つか、昨日も神経限界まで張り詰めてて」
「なんで？」
「ヤッさんたちに自分が食べる唐揚げ用の肉もらったお礼で」
「それで神経限界になって作ったの？」
「去年の文化祭で1年の女子全員作らされたレシピで」
「ということは、森下と同じ高校？」
「おいっす、おんなしクラスで」
「そうだよ、あそこの女子はお菓子作りが趣味ってイメージないよな」
「他の女子は知らねえっすけど、彼女は趣味じゃないっす」
「他の女子は知らない？」
「交流ないんで」
「ウソだろ」
「え、本当っすけど」
「森下絶対モテるだろ」
「モテますけど」
「そこは否定しないんだ」
「よくコクられてたんで」
「殴っていい？」
「な、なんで殴るんすか？」
「森下ってさ、見た目すごくモテそうなんだけど、あ、モテるのか」
「見た目？」
「中身がさ、見た目とのギャップがすごいよな」
「な、中身ダメなんすか」
「そうじゃなくて、おおよそヤッさんたちと気が合う見た目じゃないよな」
「ん・っど？」
「ロールケーキ今食べていいかな」
「え、いいっすけど」
「朝食べてこなかったからさ」
「そうすか」
「えっ これ・・・ 美味しいな」

「マジっすか？」
「ビックリした」
愛里に聞かせてあげてえ あ！
「監督、動画撮っていいっすか？」
「動画？ 何の？」
「俺のカノジョ、俺がいくら美味えとか言っても信じねえんすよ」
「なんで？」
「俺が甘やかすから正しい自己評価ができないっつって」
「おもしろい子だね」
「監督から美味えっつうの伝えて欲しいんすよ、第三者的意見っつか」
「いいけど、俺でいいの？ もっとスイーツに詳しい人とかさ」
「俺よかは信じてくれますから」
「なんだよそれ ハハハ」
「そんな、撮りますよ」
「森下のカノジョの名前は？」
「愛里っす、撮ります」
「えっと？ あいりさん、ロールケーキ美味しくいただいています・・・
まだ撮ってるの？ あと何を言えばいいの？」
「ディテールとか」
「ディテール？ 俺が？ そうだな、スポンジがしっとりして、
このジャムがしつこくなくて、本当にこのジャム美味しいよね？」
「俺に言わないでカメラに」
「ありがとう、もうこれで勘弁してくれよ」
「はい、ありがとうございます」
「森下っておもしろいなあ」
「へ？」
「それじゃ、今日もよろしく」
「はい、よろしくお願いします」
おっしゃ これで愛里も信じてくれて自信持ってくれる
送っとくか 動画送信
『うちの現場監督だよ』送信
おっし、仕事だ

昼休憩るとき 俺の携帯にピコン 愛里だ
『監督さんが喜んでくれてよかったです』
ピコン
『あなたのお弁当、今日も美味しかった！』
マジっすかあ
ピコン

『私は今からフラワーアレンジメント教室にいきます』

そっか、今日だっつってたもんな

『愛里 いってらっしゃい』送信

「だいづ、カノジョからかあ」

「そうっす」

「鼻の下あべろ～ンてえ伸びてはあ」

「え、そ、そうっすか？」

「まんずながいぐでは」

あ、そうだ おっちゃんたちにも

「ヤッさん、スギさん、頼みがあるんすけど」

「なんだ金が？」「なんぼ？」

「や、金じゃなくて、三時休憩んときに渡してえもんがあって」

「わだすでもん？」「なにい？」

「そんで、そのとき、ちょっとやって欲しいことがあって」

「だいづ、俺はあ保証人だけはなれねえんだよお」

「ハ？」

「うちのおっかあがあ、借金の保証人だけはあぜってえなんなってはあ」

「や、そんなんじゃねえっすから」

「そんじゃなにい？」「なんだべ？」

「三時のお楽しみってことで」

「楽しみにしてでいんだなあ？」「わいなんだべ」

おっちゃんたちがワクワクしてくれてる

よっしゃ、また仕事だ

三時休憩

いつもなら俺は残りの水飲んでポーッとしてんだけど

たまにヤッさんやスギさんが饅頭くれたりすっけど

今日は これだよ

「これは・・・なんだあ？」「なんだべ」

「俺のカノジョが、唐揚げ用の鶏肉もらったお礼にって作ったロールケーキっす」

「わいわいわいわい」「いんやいんやいんやいんや」

おっちゃんずラップが始まった

「こっちは今食う分で、こっちは奥さんたちにもつつうことで」

「あんやあ、おっかあにまでけ？」「かっちゃんにも？」

「こっちは今どうぞ」

「ほんだらあ」「めそんだじゃ」

おっちゃんたちが一口

「こりゃうめっぺ」「めな」

「そうっすよね、じゃねえ、マジっすか」

「これを作っだってはぁ」「わい、めわぐだ」
「そんでですね、あの、できれば、彼女にメッセージを」
「めっせえじい?」「なんだべ?」
「ヤッさんとスギさんから、彼女に、美味しいって思いを伝えて欲しくて」
「いっくらでもお、なあ」「んだ、なぼでもしゃんべら」
「そんじゃ動画撮るんで、あ、俺のカノジョ、愛里なんで愛里つつって」
「あいりちゃん」「あえるちゃん」
あえるになってっけど、まあ伝わるか ギリ
「そんじゃ撮りますよ、はい」
「あ、あいりちゃん」
「ヤッさん硬いっす、いつもどおりで」
「だいつは映画監督みてえだしたぁ ハハハハ」
「そんなカンジで」
「あいりちゃん、ケーキ、うめえっぺ、ありがとなぁ」
「あえるちゃん、たいすだめわぐだ」
いちおう俺も映るか
「現場からは以上でした」
「現場ってはぁ、まさに現場だっぺ」「んだ現場だべ」
「あ、そうっすよね、つうことで」
ピッ
「ありがとうございます」
「こっだごどでいいのお?」
「はい」
「あっ だいつ、だいつのお父ちゃんにもあいさつしてんだけんちょ」
「とうちゃんに?」
「撮ってくんちえ」
「おいっす、撮ります、はい」
「だいつのお父ちゃん、いっつもおうめえ握りメシあんがとない」
「だいつのおどちゃ、めわぐだぁ」
「今度お一杯これ」「いっぺやっぺ」
「とうちゃん酒呑めねえんすよ」
「あ、そんだのお? そんじゃ、なんかあうめえもんでもはぁ」
「んだ、めえもんくべ」
「俺たちもお、だいつのお父ちゃんとしてえ、とうちゃん会すっぺ」
とうちゃん会 いいなあ ピッ
「ヤッさん、スギさん、とうちゃんにまでありがとうございます」
「俺たちもお、お礼しゃべりてえと思ってたっぺした」
「だのさ」
「とうちゃん喜びます」
「だいつといると楽しいなあ、ビデオ撮るなんてはぁ」

「わ、しゃすんもとっでね」
ん？　しゃしんつつった？
「写真すか？」
「撮ってねえなあ、こんなおっちゃんが写真撮ってえ誰が見るした」
「かっちゃんも見だくねつつや」
そっか　現場の写真、仕事中は撮れねえけど　撮っておくか
そうだな　これから少しずつ撮っていこう

仕事終わって携帯見たけど　愛里　まだ既読になってねえな
あ、そっか　教室行ってんだ
愛里のおかげで楽しい現場になったよ

電車乗ってたら　ピコンで
『動画ありがとうございます』
ピコン
『やっぱり迷惑だったんですね』
へ？　迷惑？　あ！　スギさんの
『あれは秋田弁でありがたい優しいねって意味だっさ』送信
ピコン
『よかった』
ピコン
『ほとんど聞き取れなかったですけど』
『俺も最初フランス語かと思ったw』送信
ピコン
『私は買い物して帰るのでちょっと遅くなります』
『何買うの？』送信
ピコン
『保冷バッグ！w』
あ、そっか
『よろしくお願いします』送信
ピコン
『はい、それじゃまたあとで』
『愛里　またあとでな』送信
電車の中でも愛里とLINE　しあわせだ

アレンジメント

マンション着いて
エレベーター半分ドア閉まりかけてたから
「乗ります！」
「え？」
ドアがまた開いて
「愛里！」
抱きしめて ドア閉まって
「今日もいっぱい汗を流したんですね」
「おう」
「お疲れ様」
たっまんねえ 俺の腕ん中でお疲れ様とか
「愛里」
キス しようと思ったら ドア開いちまった
「荷物持つよ」
「え、えっ？　なんで降りちゃったの？」
「愛里の部屋まで送るから」
「すぐそこでしょ」
「いいじゃん、愛里と二人きりになれる時間あんまねえから」
「もう着きましたけど」
「愛里」
愛里の 柔らかい ずっとこうしてたくて
愛里がくちびる離して フツて笑った
「ジャムの匂いがする」
「三時休憩に食った、メッチャ美味かった」
「動画ありがとうございます」
「な？　みんな美味えつつってただろ？」
「まずいとは言えないでしょ」
「愛里、みんなマジで美味いだったんだって」
「どっちでもいいです」
「へ？」
「あなたが一生懸命」
愛里が部屋の鍵開けて

「みんなに頼んで動画撮ってくれたのが」

ドア開けて

「嬉しかったから」

「え？」

「着替えたら上に行きます」

ドア閉まって速攻鍵閉まった

なんか俺 またズキューーンされたんすけど

愛里はさあ なんつうかさあ 俺の心をいっつも

ドアの前に立っててもしゃあないな 家戻ろう

シャワー終わってバスルームから出たら

キッチンから愛里ととうちゃんの話声がするから行くと

「ダイチ、アイリちゃんがこんすげえの買ってきてくれた」

おお！ 保冷バッグ 紺に黒の取っ手 かけえ

「私はこれの赤がステキだなと思ったんですけど」

愛里が好きなんでいいよ全然いいよ 赤でもピンクでもさ

「あなたやおとうさんが持つならこの色かなって」

そういう配慮がたまねえ

「愛里、ありがとう」

「どっちかという、あなたのおかあさんに頼まれたので」

まあそうだな 俺やとうちゃんじゃな

俺の頭にあったのはスーパーの冷凍食品売り場に売ってる銀色の袋だったもんな

「ダイチ、これで明日から握りメシ潰れねえよ」

「うん、さっすがにペットボトル二本で袋ふたっつはかさばったからさ」

「気に入ってもらえてよかったです」

「愛里の花の教室はどうだった？」

「なんか・・・ちがうんです」

「ちがう？ なにが？」

なにがって俺聞いてわかんのかな 聞き直したけど

「すごく高いお花を使って、すごくステキな花器で、花器代込みですけど、

でも、なんか私の感覚に合わなくて」

「そんなんがあんのか」

「あると思わなかったんです、お花だし、でも、あ、言葉強くなりますけど」

「いいよ、聞いてっから、なあ、とうちゃん」

「おう、聞いてっからよ」

「あれは・・・お花への冒瀆」

「ぼ、冒瀆」

花への冒瀆ってどういうことだ？ どういう状況だ？

とうちゃんと顔見合わせたけど とうちゃんもわかってねえな

多分俺もとうちゃんとおんなし顔してんだな

晩メシはカレー

豚肉が安かったから豚肉にしたっつってたけど

これはこれで美味えんだよ 俺けっこう豚肉のカレー好きなんだよ

三杯食べそうだ

「今日ね、午後にトラブルがあって」

かあちゃんが晩メシんときに仕事の話するなんて珍しいな

「もうキーーッてなってたの、これはコーヒープレイクしないって、

愛里さんのロールケーキ持ってラウンジに行っってね」

愛里のロールケーキの話してくれたかったんか

「一口食べたらホッとしちゃって」

だよな メッチャ優しいカンジだよな

「スーッて軽くなったのよ、愛里さんありがとう」

「え、私はなにも」

「私が会社でスイーツ食べるなんて珍しいから、直属の部下がね、

何を食べてるんですかって聞くから、私のもう一人の娘が作ってくれた」

もう一人の娘！

「ロールケーキよって言ったら」

言ったら？

「養女迎えたんですかですって、バカねえハハハ」

なんだよそれ 養女じゃねえよ 将来のさ なんつうかさ

「あれを食べたらわかるわね」

なにが？

「愛里さんがすごく正確に物事を行ってかつ繊細、そして素材の持ち味を、

しっかり把握していてそれを活かすことができる人だなって」

かあちゃん さすがだ さすがだよ

「私は、ただ、レシピどーりに」

「同じレシピでもね、違いは出てくるものなのよ」

マジそのおり！ かあちゃんすげえ

「愛里さんのアレンジメント教室はどうだったの？」

冒流らしいよ かあちゃん わけわかんねえけどさ

「それが・・・ レッスン料も高くて、まあ有名な先生なので、

使っている花器もブランドのもので、お花も新鮮でそれぞれ高価なもので」

それでも冒流なんだろ？

「バラは一本だけだったんですけど、おそらくお店で買ったら一本千円？

でも、こーんなに短くカットしちゃうんです」

「バラを？」

「はい、他の花もです、そして、こんなカンジのかき氷みたいな」

かき氷？

「かき氷じゃない、半円？ みたいなのを作らされて」

「ああ！ あそこね、あの奥の」

「はい」

なんだよその、二人だけがわかる的な会話？

「こんなのだったらお花じゃなくてもよくない？ って思っちゃって」

「わかるわ、私もあそこのは好きじゃないの」

「ですよ、私の、感覚がすごく抵抗してそれでも言われたとおり・・

でも、こんなのだったら、バラ一本をステキな一輪挿しに挿した方が、
ずっとずっとバラがきれいに見えるんじゃないかって」

愛里が珍しく熱弁してっけど 俺はなんのことかサッパリわかんねえ

「花それぞれの良さを活かしてないっていうか、全部一緒にしちゃって、

こんな言い方、申し訳ないですけど、お花への冒瀆って思っちゃいました」

ここでまた冒瀆 んっと、どれがどうなって冒瀆なんだ？

かあちゃん 手え叩いてっけど？ 俺はなんのことかわかんねえよ

「でも、いい経験をしました、私には合わないってわかりましたから」

「そうね、そういうことも大事よ」

「ですよ」

え、とうちゃんが俺の肩つついて

「とうちゃん、どした？」

「もう一杯食うか？」

「あ、おう食いてえ」

とうちゃんが俺の皿持って出てった

とうちゃんもわけわかんなくなったんだな

「来週もあるんでしょ？」

「はい、もうひとつ申し込んでよかったです」

そっか なんかわかんねえけど よかった

とうちゃんとキッチンで片付けしてたら 愛里が来て

「あの、生物の夏休みの課題のノート、見せてもらっていいですか」

ったりめえじゃん

「自分でやってみたんですけど、どうしてもどうやっても頭に入らなくて」

「そんじゃ、ここ終わったら愛里の部屋で教えっから」

「ダイチ、あとはいいいからよ」

「あ、いえ、終わってからでいいです」

「もう終わっからよ」

「とうちゃん、ありがとう」

「ありがとうございます」

愛里と一緒に部屋を出た

愛里の部屋のリビングのローテーブルの上に花

「これって、今日作ってきたやつ？」

愛里がちょっとイヤそうな顔して

「はい、そうです」

きれいだけどな

それでも・・・

頭ん中に、愛里がとうちゃんにとって選んだ花や家に持ってきてくれた花が浮かんで

なんかあれとは違うな 俺はよくわかんねえけど なんか

「どう思います？」

「ヘッ お、俺に聞いてる？」

「はい」

「んっと・・・ 花が・・・狭っ苦しくねえかなって」

しか浮かばねえ

愛里が俺をジッと見た

「や、お、俺はあんまよく」

え 俺の手を両手でにぎった

「そうなんです」

「え？ あ、そ、そっか」

「もうこれはいいです、生物、お願いします」

「お、おう」

それでもさ 愛里が作ったんだと思うとこれはこれで

「そんなに見ないで」

「あ、おう」

愛里には愛里のこだわりがあって それが俺は好きだ 全部好きなんだけどさ

生物の勉強終わった

「終わったあ」

愛里の嬉しそうな声が可愛い

「夏休みに課題出すとかやめてほしい、生物の課題って地獄」

「愛里さん、俺がいるんで」

「あなたがいなかったら、私絶対実力テストで落としてます」

「ぜってえ落とさせねえから」

「なんとか、がんばります」

愛里が立ち上がって

「ちょっと空気入れ替えます」

ベランダの窓開けた

「この部屋、あなたの家もですけど、夜もいい風が通るからエアコン要らない」

そう言いながら夜風を味わってるみてえな顔が　すごくきれいで

俺は愛里のこと　後ろから抱きしめて

「このベランダ」

俺の腕ん中にいながら

「いつかステキなベランダガーデンにしたいなあ」

「俺がすっからさ」

「お願いします」

「おう、まかせろ」

「あ、でもあれはやめてくださいね」

「あれ？　あれってなに？」

「発泡スチロールの箱」

「なんで？」

あれがなかったらなんも植えられねえじゃん

「私にはあなたのおかあさんから与えられた使命があるんです」

「使命??？」

「このベランダを発泡スチロールの箱で埋め尽くさせないでって」

「なんで？」

愛里が上向いてメッチャ困った顔して、そんでなんか考えて　あ！　って顔して

「私、前に私の理想のベランダガーデンの画像送りましたよね」

「送ってきた、ちゃんと見た」

「あの中に発泡スチロールの箱はありましたか？」

俺の写真ファイル開いて・・・

「ねえけど」

「そういうことです」

「それでもさ、白いのに植えりゃいんだろ？」

「え？」

「発泡スチロールの箱、白じゃん、まあロゴ書いてっとこ見えねえようにすりゃ」

「ああもうなんかもうどうすればいいの？」

「え、なに？」

「あなたのおかあさんがあなたの家のベランダを表した言葉を言います」

「おう、なに？」

「魚屋の裏口かゴミ箱か魚河岸の、なんだっけ、ゴミ捨て場？」

「あ？　え？　なんで？」

「オシャレじゃない」

「オ・・・シャレ、それは俺には、なんつうかセンスねえっつうか」

「だったら、とにかく発泡スチロールの箱はやめてください」

「あ、おう、わかった」

「あと、なんだっけ、あ、ペットボトルもダメです」

「そんじゃ何に植えればいいんだよ？」

「ポット、鉢、この画像のこういうの」

「金かかんじゃん」
「あああ出た」
「なにが？」
「安い、タダ、いいけど、いいけど、それだけじゃないこともあるう」
「へ？ あ、んっと？」
「どうしよう、私じゃムリ」
「なにが？ 愛里、なに？」
「あなたの美的概念を変えるとかムリ」
「び、美的概念？」
「私、あなたのおかあさんに顔向けできない」
「へ？」
「もうあなたの家に行けない」
「えっ、あ、愛里、わかった、ポット、ポットに植える」
「え？ 本当に？」
「マジ、ポット、発泡スチロールの箱は、あとペットボトルはNG っつうことで」
「あ・・・ はああ・・・ よかつ・・・た」
「あ、うん、俺も、よかった」
もう俺ん家来れねえとか ありえねえ
「だったら・・・ そういうことで」
「お、おう」
かあちゃん 愛里になにしてくれてんだよっ
俺に直接言えばいいじゃんっ

とうちゃんの寄せ植え

やっぱ保冷バッグ最高だな

握りメシも潰れねえしペットボトルの水も最後まで冷たくてさ

つか、凍ったのがなかなか溶けなくて午前中はちょっと大変だったけど

おっし、帰るか あれ？ 愛里から LINE 入ってた

『仕事が終わったら私の部屋に来てもらえますか』

なんだ？ どした？ なんかあったか？

『気づかなくてごめんな 今仕事終わった 速攻で帰って行く』送信

ピコン

『待ってます』

待ってますって たまんねえな

「ヤッさん、スギさん、そんじゃお先！」

「だいづ、まだ明日なあ」「んじゃな」

電車乗って乗り継いでバス乗って

愛里の部屋に直行

ドアホン押したらドアが開いて

「おかえりなさい」

たまんねえっ

「愛里、ただいま」

抱きしめようとしたら

「ちょっと見てもらいたいものがあるんです」

え？ なに？

リビングに行く愛里の後ろついてって

「ベランダを・・・ 見てください」

「ベランダ？」

あれ？ 小せえ・・・ 発泡スチロールの箱 そんでいろいろ植えてある

「あなたのおとうさんが・・・ 私にとって」

「えっ あ、んっと、あのさ、植え替えっから、んっと、これ持ってって」

愛里が泣きそうな顔で首振った

「あ、愛里、俺、とうちゃんに話してなかったからさ、とうちゃん知らな」

「ちがうの」

「ん？ え？ ちがう？ これじゃねえやつだろ？」

「そうじゃなくて」

「とうちゃんさ、悪気はねえんだよ、たださ」
「ちがうの」
愛里の目からポロポロ涙
「あ、愛里、んっとさ、日曜日に買いに行こう、ポ、ポット」
愛里の涙が止まんねえ どうすりゃいい？
「これ上に置いとくから、ポット買うまで」
「ちがうの」
愛里が口に手えあてて一生懸命泣き止もうとしてて
俺は 抱きしめることっきゃできなくて
「あなたの・・・ おとうさんが・・・」
「とうちゃんが、うん」
「アイリちゃん、ゆうべ・・・ 花・・・ 気に入らなかったって」
「あ、うん」
「花が好きなのに・・・ 悲しかったろうなって」
「え・・・」
「アイリちゃんが前に・・・ きれいって言ってたから」
「うん」
「ちょっとでも・・・」
愛里がまた泣き出して
「元気になるいかなって」
とうちゃん んなこと思ってたんか そんで・・・
「私・・・ 泣いちゃって・・・ そしたら・・・ あなたのおとうさん」
「うん」
「頭を撫でてくれて・・・ かわいそうだったなって」
「そっか」
「私の・・・ あんな・・・ あんなことで・・・ こんなにして・・・ くれて」
「うん」
「私が泣いたのは・・・ 悲しかったからじゃなくて」
愛里が泣きながら俺の顔見上げて
「おとうさんの・・・ きも・・・ ちが・・・ 温かすぎて・・・ 感動しちゃって」
「んなこと言われたら、とうちゃん喜ぶよ」
「私・・・ こんなにしてもらって・・・ いいんでしょうか」
「いいんだよ」
「でも」
「愛里は、俺たち、森下家にとって、大切な愛里なんだから」
愛里がまた身体震わせて泣いて 俺の胸に顔つけて 泣いて
俺は 愛里の頭撫でながら
とうちゃんの気持ち こんなにわかって受け止めて感動してくれる愛里が
たまんねえよ やっぱ愛里だよ 愛里っきゃねえよ
愛里が少し泣き止んで 俺の胸から顔離して

「私、おとうさんにありがとうございますしか言えなくて・・・

でも、あなたには話しておいた方がいいかなってええ」

また泣きべそかいてさ

「ありがとな」

愛里　とうちゃんの気持ちをさ

「話してくれて」

「あ、はい」

「それで、とうちゃんのこと、そんなに、なんつうか、わかってくれて」

「誰でもわかるでしょおおお　こんな・・・　温かすぎてええ」

「愛里は」

俺は愛里のことまた抱きしめて

「泣いてばっかだな」

「昨日の分です」

「昨日の？」

「おとうさんに言われて、私、悲しかったんだって、

昨日はちょっと怒ってたけど、本当は悲しかったんだってわかって」

「そっか」

「好きなことをしているはずなのに、楽しくないし、なんかイライラしながら、

そういうのが悲しかったんだって、わかって」

「そっか」

「でも、今泣いてスッキリしました」

愛里が顔上げてニッコリした

「愛里、とうちゃんの寄せ植え、日曜日にポット買って、俺が植え替えっから」

「いいの」

「あ？　んっと、いいのつつうのは？」

「やっぱり、森下家のベランダには発泡スチロールの箱かなって」

「マジでいいの？　遠慮しなくていいんだかな、とうちゃんも気にしねえしさ」

「あなたのおかあさんが言ってたんです」

かあちゃん？

「最初はミントだったって」

「ん？　なんの最初？」

「デパ地下でミントを買ってきて、炭酸ミネラルウォーターにレモンと一緒に入れて、

そしたらすごくスッキリして、ただ、なんとなく言ったんだそうです、

ベランダにミントがあれば楽なのって」

そんな細けえこと聞いてねえな

「そしたら、あなたのおとうさんが残りのミントを小さいペットボトルで水栽培して」

三つ葉や小口ネギもそうだな

「それから、どこかから土を持ってきてペットボトルに入れて植えて」

あの野っ原からだろうな

「そのうちすごく育ってきて、そしたら、どこかから発泡スチロールの箱」

魚屋だな

「そこに土を入れてって、気がついたらいろいろなものが植えられてたって」

植えられてんな

「おかあさんは本当はオシャレなポットに植え替えて欲しかったって」

マジ？ そんなこと言ったことねえよ 言ったことあんのかな？

「でも、あなたのおねえさんもまだ小さかったし、おかあさんの仕事も忙しくて、

それどころじゃなくて、いつの間にかベランダが発泡スチロールの箱だらけ」

「俺、んなこと聞いたことねえけど」

「おかあさんは、それはそれでおとうさんの世界っていうかおとうさんらしい」

とうちゃんらしい？

「その世界を壊したくないという気持ちと美的感覚が耐えられない気持ち」

なんかすげえことになってっけど

「いつも葛藤が起こるって、言っていました」

「言えればいいじゃん、とうちゃん、んなこと気にしねえよ」

「それはおかあさんに言ってください」

「あ、ごめん」

「私はおかあさんの気持ちが少しわかるっていうか」

かあちゃんの気持ちがわかる？

「あなたがダサイ T シャツを着ていても」

あ・・・

「今みたいに汗臭くて汚れた格好でも」

「あっ ご、ごめん」

「それはそれであなたらしいかなって」

「え？ ちょ、俺・・・らしい？」

愛里の中の俺のイメージってさ

「そういうことです」

「え、ちょ、愛里の中の俺のイメージってさ」

「はい？」

「ダサッとか汗臭せえとか汚ねえっつうこと？」

「それも含めてあなたかなって」

「何に含めて俺？」

「あなたの全部」

「俺の全部？」

「はい」

「そっ・・・か」

「あ！ どうしよう」

「え、なに、どした？」

「あなたのおかあさんに、発泡スチロールの箱は阻止するようになって言われてたのに」

愛里がなんか考えだした んな考えなくてもいいんじゃね？

「ああ！ なんだ」

「え、なに？」
「あなたのおかあさんが阻止できなかったことを私なんかができるわけがない」
「あ、えっと、そういう・・・結論？」
「はい」
「そんじゃ、俺ん家に来れねえとか」
「行けます、おかあさんさえ許してくれれば」
「んなさあ、発泡スチロールの箱くれえで愛里のこと許すも許さないも」
「あなたは気楽ですよ」
「へ？」
「阻止される側ですから」
「んと？」
「あれ？　ちがう、あなたじゃなくて、おとうさん」
「とうちゃん？」
「阻止する気になれない、むしろ嬉しい」
「ちょ、なに？　俺は阻止する気になって、とうちゃんは嬉しいってさ」
「くだらないからこんな言い合いはやめましょう」
「愛里が言い出したんじゃん」
「そうですね、私が悪いです」
「や、そ、そんな、愛里は悪くねえよ、俺が悪い、悪かった、ごめん」
「ほらまたあ！　どうしてすぐ謝るの？」
「だってさ」
「ひとつだけお願いがあります」
「いいよ」
「まだ言ってない！」
「あ、なに？」
「あなたのおとうさんが、来年はあなたと一緒にイチゴを作るって」
「ああ、うん、ちょっとまだどうなるんかわかんねえんだけどさ」
「そんなにむずかしいの？」
「種からやろうと思ってっからさ」
「種？　苗じゃなくて？」
「愛里の、かあちゃんのもだけど、イチゴ、最後の方の萎びたの、俺ととうちゃんて食ってんだけどさ」
「え？　そうだったの？」
「愛里に萎びたの食わすわけにいかねえよ」
「そこまでしなくても・・・」
「それでもさ、その萎びたやつから種採って、発芽させて土に植えて」
「え・・・」
「今年の秋か冬くれえに始めっからさ」
「理科の実験みたい・・・」
「楽しいじゃん」

「そう・・・ですか」
「んで、お願いってなに？」
「なんか・・・言っているのかどうかわかんなくなっちゃった」
「言えよ、全然言えよ」
「え・・・イチゴだけは・・・白いポットに・・・植えてほしいって」
「わかった、イチゴは白いポットな」
「でも、なんか・・・いいです、発泡スチロールの箱でもなんでも」
「なんでもって、白いポットに入れっから」
「そう・・・ですか」
「おう、まかせろ」
「はい」
「あ、そんでもさ、イチゴってランナー出てメッチャ増えるらしいからさ、
ポット、メッチャいっぱい必要になっかもしんねえ」
「いいです、もう、白いポットは忘れて」
「忘れねえよ」
「え、それじゃ、なんていうの、一株？ 一株だけで」
「イチゴは全部白いポットに植えっから」
「一株だけでいいです、このベランダがポットだらけになっちゃう」
「あ、そっか、そんじゃ、マジで一株でいいの？」
「一株だけで、お願いします」
「そっか、わかった」
「はい」
「愛里」
「はい？」
愛里の 柔らかい そんな
「ただいま」
「おかえりなさい」
たまんねえ
「シャワー浴びてください」
「あ、す、すぐ、んっと、先行ってっから」
「はい」
愛里の部屋から出て エレベーターに乗って
あれ？ ウッドデッキはどうすりゃいいんだ？
買うんだよ、何のためのバイトだよ だな

ガリガリ君

昼休憩終わり

今日は暑っちな

ピコン え？ 愛里

画像？ 自販機の前 この手は愛里で 小さなアイスティのボトル

ピコン

『ご馳走してもらいました』

ご馳走してもらった？ つか愛里どこにいるんだ？ つか

『誰に？』送信

「だいづ、そろそろ行かねえとお」

「あ、おいっす」

今日出かけるとか言ってなかったよな

誰にご馳走してもらったんだ？ つか、誰と出かけたんだ？

「だいづ、どしたあ？」

「あ、なんもないっす」

あとでおしえてくれるよな

仕事だ！

マジ暑っちな

もうすぐ三時休憩だ がんばる

「なんだべえ、な～んかヒョロッとしたにいちちゃんが覗いてっけどお」

「通りがかった人じゃないっすか」

「ほんでもお、だいづのことお見てっけどお」

俺のこと？

「どこっすか？」

「ほれ、あすこさいっぺ」

なんだ？ え あれ？ あれは・・・

「川口？」

「知ってる人けえ？」

「同級生・・・だと思ふんすけど」

「同級生い？」

「だと思ふんすけど」

やっぱ川口だよな？ 違いか？ こんなところに川口来ねえよな
「だいづ、もうすぐ休憩だからあ、行ってやればいっぺ」
「そうすか、そんじゃ、すいません、ちょっと見てきます」
出入口とこに走っていくと やっぱ川口だ
「川口」
「あ、森下？ やっぱり森下？」
「やっぱりって、森下だけど」
「よかったあ」
「なんでここにいんの？」
「森下と話がしたいって上原さんに」
愛里？
「聞いたら、この工事現場にいるっておしえてくれて」
愛里に聞いた？ 愛里と一緒にいたってことか？
ご馳走してもらったって 川口になのか？
「これ、差し入れ」
差し入れ？
「上原さんがね、行くなら、今日は暑いからアイス持って行ってって」
愛里が？
「指示が細かくてさ」
川口と会うなんて言ってなかったけどな
「チョコはダメ、おそらくスプーンはないからカップのはダメ」
なんで川口と？
「もうどうしていいかわからなくて」
友だちだからか？
「ガリガリ君しか考えつかなくてさ」
「あ、んっと、愛里とは」
「おじさんたちの分もあるから」
「おじさん？」
「上原さんが、森下と仲のいいおじさんが二人いるからその人たちの分もって」
愛里、この状況はどういうことなんかな
「森下？」
「え？ あ、おう、ありがと」
「早く持っていかないと溶けちゃうけど」
「あ、おう、渡してくる」
コンビニの袋持って、おっちゃんたちのところに走ってって
「ヤッさん、スギさん、これ、んと、と、友だちが差し入れつつって」
「わい、めわぐだじゃ」「こりゃまああんがとなあ」
「そんじゃ、俺、あの、なんか話あるつつうから」
「だいづ、4個入っでっがらあ、だいづとお友だちの分でねえのお？」
「え？ あ、そっすか」

「だいづ、なんかあったんかあ？」
「や、なんもねえっす、暑くて頭ちょっとクラクラしてるっつうか」
暑いからじゃなくて
「気いつけねえどお、日射病になっちまうっぺ」
日射病？ あ、熱中症
「大丈夫っすよ、ちっとだけっすから」
「んだが？」
「そんじゃ、ちっと行ってくるんで」
二本持って川口んところに走った

道路っばたに座りながら 男二人でアイス食ってるってさ
ガリガリ君 メッチャ美味え この暑さにはありがてえ けどさ
「森下、ちょっと見ない間にすごたくましくなったよね」
「んな変わってねえだろ」
「僕なんて、夏休み入ってからもずっと屋内でさ」
「塾の夏期講習だっけ？」
「土曜日に全国模試があるから、今日は模擬テストがあって」
「そっか、え？ 今日模擬テスト？」
「うん」
「何時から？」
「午前からついさっきまで」
「え？ あれ？ 愛里と一緒にいたんじゃねえの？」
「いないよ、なんで？」
「あ、や、んと、あ、ほれ、アイスの話」
「LINE で聞いたんだけど」
あ そうなんか そうか
「上原さん、森下に LINE したけど既読がつかないから忙しいかもって」
既読がつかねえ？ や、見たよ
「ちょ、待って」
あ 電源 OFF ってたよ
『あなたのおとうさん』
とうちゃん？ なんだ、とうちゃんかあ
ご馳走してもらったっつうのは、とうちゃんにか
とうちゃん、漢だなあ さりげねえっつうかさ
「森下？」
「あ、ちょい待って」
『今、川口がきてるよ アイスありがとう』送信
川口が買ってきたんか そんでもさ
ピコン

『話を聞いてあげてください』

『わかった』送信

「悪りい、電源 OFF ってた」

「仕事してたもんね」

「おう」

「森下は今度の全国模試は受けるの？」

「受けねえよ」

「夏休み明けのを受けるってこと？」

「そういうのは受けねえよ」

「えっ それは、全国模試は受けないってこと？」

「金もったいねえじゃん」

「そういう発想？」

「学校で受けさせられるやつだけで充分じゃん」

「森下と話していると、自分の小ささを思い知らされるよ」

「小ささ？ どした、なんか、川口らしくねえつつうかさ」

「僕らしくないって、森下は僕にどういうイメージを持ってたの？」

べつに特になんも持ってねえけど

「や、なんか、ブルー入ってるつつうか」

「うん、確かに入ってるね、入りっぱなしだよ」

「なんだよ、どした？」

「僕が受けてるコースは医学部受験コースなんだけどね」

医者になるんだったよな 肛門科 じゃねえか、小児科だったか？

「みんなすごくてね、高三くらいの意気込みっていうかさ」

「へえ」

あ、いけねえ、愛里が話聞いてあげてつつってたんだ

「どうすげえんだよ？」

「まわりはみんなライバルみたいな空気っていうの？」

どんな空気だ？ わかんねえな

「僕はそうはなれないからさ」

「いんじゃね？」

「よくはないよね、医学部目指してるのにさ」

「医学部入りゃいんだろ？」

「簡単に言うよね、森下らしいけどね」

「まわり関係ねえよ、川口が合格できるレベルになればいいんだからさ」

「僕が？」

「極端言えばさ、全員 100 点取れば全員合格じゃん」

「理論的にはね」

「川口がいかにかに 100 点取れるかに焦点あてればいいだけでさ、

まわりの空気？ そんなんに巻き込まれる必要ねえよ」

川口が黙ってなんか考えてっけど それっきゃなくね？

「やっぱり森下と話してよかったよ」
川口の中でどういう結論が出てその言葉になったんだ？ いいけど
「僕は父親の跡を継ぎたいからじゃなくて、本当に医者になりたくてさ」
「そっか」
「競争じゃないんだよね」
「ちげえだろ」
「森下はすごいよね、軸がぶれないよね」
なんかよくわかんねえけど
「俺は川口はすごいと思うよ」
「いいよ、慰めとか森下らしくないよ」
俺らしくねえって
「川口ん中の俺のイメージってどんなだよ？」
「語ると長くなるよ？ いいの？」
「語らなくていい」
なんで、んな長くなるような俺のイメージ抱えてんだよ？
「まあ語りつくせないけどね」
つくせねえほどって、どんなだよ？
「俺はさ、将来どんな職業につきてえとかねえんだよ」
「そこがすごいよね、ある意味何にでもなれるってことでしょ」
「じゃねえよ、俺は・・・」
いや、川口に愛里との将来のことを語ってもしゃあねえな
「川口は医者になりてえつつう具体的な目標持ってんだからさ」
「当たった！」
「へ？ ど、どした？」
「ガリガリ君」
川口がガリガリ君の棒を俺の目の前に
「ウッフ、当たってんじゃない」
「僕、当たり引くなんて生まれて初めてだよ」
「そ、そっか、おめでとう」
「なんかイケそうな気がしてきたよ」
ガリガリ君パワーかよ
「森下ありがとう」
「や、俺は・・・」
なんもしてねえよ ガリガリ君だよ
「森下のおかげだよ」
ガリガリ君の当りは俺のおかげじゃねえよ
「上原さんにね」
愛里？
「LINEでチラッとね、迷走してるって言ったらさ」
愛里はなんつったんだ？ ぜってえおもしれえこと言ったよな

「だったら森下くんって」
「え？」
「森下くんなら迷子になった川口くんを一瞬で見つけてくれるって」
愛里が？ マジ？
「本当にそうだったよ」
俺はなんもしてねえけどな ガリガリ君だけどな
「森下、ありがとう」
「あ、や、俺はなんも」
「仕事にごめんね」
ガリガリ君の ガリガリ君？ どうちゃんが・・・
ガリガリ君もらって それが美味かったって 友だちだって
「川口、友だちだろ」
「本気でそう思ってくれてる？ 僕はそう願ってはいるけどさ」
「友だちだよ、ガリガリ君くれたから」
「森下って、本当におもしろいよね」
「川口の方がいろいろおもしろいけどな」
「僕はいたって普通のつまらない人間だけどね」
ここか ここが愛里と似てっから愛里と気い合うんか
「自分のこと、いたって普通のつまんねえ人間って言う人は」
えっ 俺のも当たってる ヤベ これは 川口には言えねえ
「んと、なんつうか、おもしろえんだよ」
「なんだかよくはわからないけど、ありがとう」
「差し入れありがとな」
「上原さんの指示だから」
愛里の 愛里は、んつとにたまんねえよ
「僕、パシリみたいなものだから」
「パシリじゃねえよ、友だちだよ」
「ありがとう、また何かあったら話聞いてもらっていい？」
「おう」
「それじゃ」
「そんじゃな」
川口が通りの向こうに歩いていって
俺はおっちゃんたちのところに戻って
「だいつ！」「だいつ！」
なんか興奮してっけど
「どしたんすか？」
「わいわいわいわい」「いんやいんやいんやいんや」
おっちゃんずラップ
「なんすか？」
「当たったんだあ！」「あだり」

「何がすっか？」

ヤッさんとスギさんが、ガリガリ君の棒を えっ 二人とも当たり？

「ビックリしてはぁ」「どでしたあ」

つことは 川口が買って来たガリガリ君 4本とも当たり？

逆にすごくね？

川口 逆にすげえよ

医学部合格すんじゃね？ わかんねえけど

ガムテープ

仕事帰りの電車の中

『愛里』送信

ピコン

『はい』

ピコン

『川口くんから LINE がありました』

そっか

ピコン

『あなたと話してよかったって』

『俺はたいしたこと言っただけよ』送信

つかさ 聞いてえんだけどさ

『川口は』愛里によく LINE してくんのかな

いやいやいや んなこと聞いたら、なんか俺が嫉妬してるみてえなさ

ピコン

『ビックリしちゃって』

ピコン

『突然川口くんから LINE がきて』

ピコン

『誰にも話せないから私にちょっと吐き出したって』

ピコン

『なんで私？ って思っちゃった w』

そっか そういうことか 俺から聞かないでよかった

ピコン

『迷走してますって』

ピコン

『それだけじゃわけがわからない w』

『塾のことだったよ』送信

ピコン

『塾のことを私に言われてもわかりません w』

『愛里が俺と話するようになってたんだって？』送信

ピコン

『あなたなら絶対なんとかしてくれるって』

ピコン

『いつも私に言ってくれてるから』

ピコン

『絶対俺がなんとかするって』

ピコン

『そして必ずなんとかしてくれるから』

愛里 そんなに俺の言葉を大切にしてくれてたんかよおお 感動だよ

ピコン

『川口くんもなんとかしてもらえましたね w』

『俺はマジなんもしてねえんだよ』送信

『川口は最初から自分の中に答えあったんじゃないね』送信

ピコン

『それを見つけれられるようにあなたがしたんだと思う』

どんだけ俺のこと信頼してくれてんだよ たまんねえな

ピコン

『あなたのおとうさんとお出かけしました』

『とうちゃんとデートっすか w』送信

ピコン

『デートしました w』

とうちゃんと愛里が一緒にとか想像するだけで可愛いよ

ピコン

『暑かったから飲み物を買おうとしたら』

ピコン

『あなたのおとうさんが買ってくれて』

ピコン

『感激しちゃって写真撮って送りました』

そっか それでか

ピコン

『感激し過ぎて誰にご馳走してもらったか書くの忘れたけど w』

自販機のアイスティーってさ、とうちゃんらしくてさ 俺も感動だよ

『どこに行ったの?』送信

ピコン

『ホームセンターです』

ホームセンター?

ピコン

『ガムテープが欲しかったので』

ガムテ? ガムテなら

『俺んどこにあるけど?』送信

ピコン

『あの色じゃダメなので』

色？ ガムテに色？ ふつうのと黒あんだけどな

ピコン

『そしたら あなたのおとうさんが』

ピコン

『ホームセンターにあるよって』

ピコン

『バスに乗らないとだから連れてってあげるって』

とうちゃん、ありがとう

ピコン

『なんかいろいろ楽しかったです』

そっか だよな とうちゃんとならどこ行っても楽しいよな

ピコン

『帰ってきたらベランダ見てください』

『どっちの？』送信

ピコン

『どっちも』

ピコン

『あなたのおとうさんと私の合作 w』

合作？ なに作ったんだ？

あ、そろそろ駅に着くな

『愛里そろそろ駅に着いてバス乗る』送信

『帰ったら速攻愛里の部屋行くから』送信

ピコン

『待ってます』

待ってますって 可愛い可愛すぎる

『待っててください』送信

マンション着いて愛里の部屋に走ってって

ドアが開いて

「おかえりなさい」

「愛里」

顔見ると

「ただいま」

抱きしめたくなる

「今日はいっぱい汗をかいたんですね」

「汗臭せえか」

「はい」

それでも 俺はこの腕を離さねえし 愛里も俺から離れようとはしねえ

「見ますか？」

「ん？」

「あなたのおとうさんと私の合作」

「見てえ」

愛里が俺から身体離してリビングに 俺もゴム長脱いでリビングに

「こっち」

ベランダの窓開けて

あれ？ なんかメチャシャレてんだけど 新し・・・くはねえな

発泡スチロールの箱だよな それでも違いえものみてえに見える

「白のガムテープを貼って、この薄いピンクのは細くしたくて」

薄いピンクの細い線つつうの？ 三本入ってて

「そしたら、おとうさんが重ねるといってこんなにきれいに貼ってくれて」

すげえ ちょっと黄ばんでた発泡スチロールの箱がメッチャオシャレになってる

「あのままでもよかったんです、よかったんですけど」

愛里が一生懸命説明してて

「パッと見たとき、ワクワクしない？ どうすればいいかなって」

そんであの発泡スチロールの箱にガムテ貼ったんか

「検索してみたら色を塗るとかいろいろあったけど、こっちかなって」

「愛里、メッチャいい、すげえよ」

「本当？」

「こんなん思いつかねえよ、すげえ」

「あなたの家のベランダのもやったんですよ」

「マジ？ あれ全部？」

「おとうさんと二人で・・・っていうか、私がこの色をこれくらいって言って、

おとうさんがきれいに貼ってくれたんですけど」

「愛里、すげえよ」

「見てきて」

「おう、そんじゃ、俺その後シャワー浴びっから」

「はい、私もあとで行きます」

「愛里」

なんだこの可愛い発想は とうちゃんのを活かしつつってかさ

たまんねえよ 愛里 帰ってくるたびいつももっと好きにさせられる

「早く見て」

「ん・・・ ちょい・・・」

愛里の 柔らかい

「なにしてるの」

愛里が笑って

「早く」

「おう、そんじゃあとで」

愛里の部屋出て 俺ん家に帰った

家のドア開けて

「ただいま」

「ダイチ、おかえり」

「とうちゃん、愛里とデートしたんだって？」

「デート？」

ポカンとした顔 あ、とうちゃんには冗談通じねえんだった

「一緒にホームセンター行ったんだろ」

「ああ！ ガムテ欲しいっつうからよ、あるよっつたら色が違うってよ、

ガムテの色なんて考えたこともねえもんな」

「そんでホームセンター連れてってあげたんだろ」

「ちっと遠いかな、一人で行かせちゃ心配だからよ」

ありがとな、とうちゃん

「アイリちゃんは、美里に似てんな」

「ハ？」

「ポケットとしてっどこあっからよ、歩道から落ちそうになったりよ」

かあちゃんをポケットとしてるって言えんのはとうちゃんだけだよ

「心配になっちまって手えつないだ」

「なんだよそれ、子どもみてえじゃん」

「ヒトミと散歩してたとき思い出した」

「やっば子どもじゃん」

「それでもよ、アイリちゃんはすげえな」

「なんか発泡スチロールの箱きれいにしてたよな、愛里の部屋で見た」

「こっちのもよ」

「見てえ」

ゴム長腕いでリビングに入ってベランダの窓開けたら

「すげえ」

なんつうの？ ベランダガーデンみてえじゃん

発泡スチロールの箱全部に白と・・・ こんなガムテあんの？

薄いグレーに葉っぱ模様？ 花模様？ なんつうんだ？ 唐草模様？

下の方に二列ずつ メッチャきれいになってんじゃん

「ダイチ、すげえだろ？」

「うん、すげえ」

「こうやったらよ、発泡スチロールの箱割れにくくなるなあってよ」

「あ？」

「たまにヒビ入ってガムテで抑えて、新しいのもらってくっだろ」

「ああ、だよな」

「こうやってぐるぐる巻きにしたらよ、割れにくくなんだろ」

「あ、たしかに、マジでそうだ」

「アイリちゃんはやっばすげえな」

愛里は耐久性のことまでは考えなかったとは思うけど

「それと、ペットボトルも全部よ」

「おお、ペットボトルと思えねえ」

白にあの模様のやつ

「このへりんとか、たまに手え切っちゃうけどよ、これならよ」

「あ、だな、これなら危なくねえな」

「んなこと考えたことねえもんな、すげえよな」

「これで発泡スチロールの箱もペットボトルもメチャ長持ちすんじゃない」

「なあ、すげえなあ」

愛里はそういうこと考えてたんかな 違う気するけど

それでもさ バランダがメチャきれいになったし

発泡スチロールの箱もペットボトルも丈夫になって両得つつうやつだな

帰ってきたかあちゃんに見せたら

「愛里さん、カズオの世界と私の世界を融合させてくれたのね」

「え、いえ、そんなすごいことじゃないですけど」

「すごくステキよ、私も思いつかなかったわ」

メチャ感激して そんで あれ？ って顔になった

「カズオ、ガムテープ代はどうしたの？」

「あの、私が思いついてやりたかっただけなので」

「愛里さんが出したの？」

「私が勝手にやろうと思っただけなので」

「ダメよ、ここの方がたくさん使ってるじゃない」

「あの、でも、あ、おとうさんにアイスティーをご馳走になったので」

「カズオが？ あら、カズオ、やるじゃない」

「アイリちゃんが暑っちいからなんか飲むつつうからよ、自販機の」

「おとうさんにご馳走になってすごく嬉しかったです」

かあちゃんはニッコリして愛里の肩抱いた

「愛里さん、ありがとう」

「いえ、私はヒマだったので、ヒマじゃないですけど勉強しなきゃですけど」

「夏休みなんだから好きなことした方がいいわよ」

「そうですか？ いいですか？」

「そうよ、おとなになったら夏休みなんてないのよ、せいぜいお盆休み」

「ちょっとまだ想像できないですけど」

「想像しなくていい、今は楽しんで」

「はい」

俺は・・・

生まれてからずっとしあわせでさ

チコッとイヤなことはあってもずっとしあわせでさ

そんで愛里が来て 俺はチョーーしあわせで
かあちゃんとうちゃんもすげえニコニコしてて
愛里 ありがとな
愛里 ずっと 森下家にいてくれませんか
いつか 俺 ちゃんと頼むからさ
その前に ウッドデッキだよ
こんなにきれいにしてくれたんだからさ
俺もがんばんねえとさ
がんばっから 愛里

作業ズボンの穴

シャワー終わって

洗濯して乾燥させた作業着も乾いてる これで明日も あれ？

ヒザんとこ穴開いてんじゃん 危ねえよな 現場でヒザついたりするもんな
繕っとくか

リビング行ったらかあちゃんがソファに座ってる

「なんでそれをここに持ってきたの？」

「それ？ それってなんだよ？」

「その擦り切れたズボン」

「穴開いてっから繕うんだよ」

「まだ着る気？」

「着るじゃん、明日も仕事なんだからさ」

「そういう意味じゃない」

「どういう意味だよ？」

「捨てたら？」

「なんで？ 明日も仕事あるつつったじゃん」

「新しいの買ったら？」

「もったいねえじゃん」

かあちゃんが目え開いて俺のことジューッと見てっけど

まばたきくれえしてくれよ 怖えからさ

「あんたが一週間だけ現場でバイトするって言ったときは」

なんだ？ なに？ 俺、説教されてんの？

「まあその？」

アゴでクイッて 俺が持ってる作業ズボンさしてんだよな

「私がカズオに何度も何度も、もう捨ててって言ったのに捨てなかった」

捨てねえでくれたから今役に立ってんじゃん

「その着倒した作業ズボンと私にはボロ雑巾にしか見えないシャツ」

ボロ雑巾は言い過ぎじゃねえの？ そこまでじゃねえよ

「捨ててって言ったのに取ってあったその元作業着一式」

かあちゃん、それはどうちゃんに言ってくれよ

そんでもさ、俺はメチャ助かってんだよ

「一週間だけなら？ まあ、まあ、でもあんた、夏休みいっぱいバイトするのよね」

「するよ」

「だったら一式新しいのを買いなさい」
「金稼ぐためにバイトしてんのに、そのバイトのために金使うって無駄じゃん」
かあちゃんが 両手で両方のこめかみ押さえた けど
俺は間違っただこと言ってねえよ
「理論は正しい理論だけはね」
「あのさ、今、理論とかじゃなくてさ、穴繕わねえとさ」
「穴が開いたのなら買い替えどきでしょ」
「繕ったら履けんだろ」
「そんな擦り切れたヒザの布を繕ったら、繕った部分だけが強くなって、
まわりの擦り切れた部分が耐えられなくてもっと穴が開くのよ！」
「そんなときは継ぎするから」
「継ぎ！ そう、継ぎ」
「ヒザんどこガッパリ継ぎすりゃ大丈夫じゃん」
「どんな生地で？」
「どんなって」
とうちゃんのパンツか 雑巾にするやつまだあっから
「カズオのパンツじゃないでしょうね」
「え・・・」
そんじゃ俺のパンツか
「あんたたちのパンツはそのズボンと素材が違うでしょ」
「素材とか、んなもん、穴ふさぐだけじゃん」
「ヒザにパンツの布つけて仕事！ アッハハハハ」
顔 全然笑ってねえじゃん
そんじゃ、んっと んっと あ！
「家庭科のパジャマの端切れがあったからさ」
「その薄茶、元ベージュのズボンのヒザにグレーの継ぎあて！」
「色なんてどーでもいいじゃん」
「どーぞご自由に、どーぞお好きにしてください」
なんだよその言い方、なんつうか、まあいい、とにかくこの穴だ
裁縫箱出して 糸は・・・ これか
「白!？」
「え？ んじゃ、これ？」
「黄色!？」
「これに近けえ色ねえもん」
かあちゃんが立ち上がってベッドルームに入ってデッカイ箱持ってきた
「せめてこれじゃないの」
あ、近けえな
「ありがと」
これは・・・ この辺から繕わねえと塞がんねえな
「ねえ、ひとつ聞いていい？」

「なに？」
「あんたとカズオの、もう着れないっていうラインはどこ？」
「ライン？」
「あんたたちの、まだ着れるともう着れないの境目」
「とうちゃんはわかんねえけど、俺は・・・」
境目って んっと
「小さくなって着れなくなったときじゃね？」
「あんたまだ身長伸ばすつもり」
「俺の意志関係ねえだろ、そろそろ止まると思うけどさ」
「止まったら、ズーッと着るの？ ボロッボロになっても着るの？」
「あ！　とうちゃんは、かあちゃんが捨てろっつったときだ」
「そのズボン捨てなかったけど？　あの雑巾みたいなシャツも！」
「まだ着れっからじゃね？」
「ああああもーっ」
「な、なんだよ？」
「愛里さんはなんて思うかしら」
「愛里？　愛里がなに？」
「あんたがこーんな継ぎがあたったズボン履いてたら」
愛里は　愛里？　んなこと考えたことなかったな
「愛里さんもねえ、発泡スチロールの箱を阻止できなかったからねえ」
「愛里はとうちゃんの気持ちが温ったけえって」
「あ！　愛里さん、融合させてくれたわね」
「愛里すげえよな、ガムテでさ」
「そのズボンも融合させてくれるかしら」
「ハ？」
「ムリね」
ズボンを融合ってなんだよ？
「私は寝る、もう知らない」
「知らないってなんだよ？」
「おやすみ」
「あ、うん、おやすみなさい」
わっけわかんねえな　まあいいや、おっし、これで明日は大丈夫だな
「ダイチ、なにやってんだ？」
とうちゃんがタオルで髪拭きながら入ってきた
「ここんとこ穴開いてたから繕ってた」
「ダイチはすげえな、裁縫できんだもんな」
「まあ、それは・・・　かあちゃんに仕込まれたっつうか」
「俺もさっき美里にパンツ繕ってもらった」
とうちゃんがスエットズボンちょっと下げて見せた
「やっばどうしても左っ側がすり減っちゃうんだよな」

「クセになっちまってっからしゃあねえよ」
「穴繕ってもらえんなんてよ、しあわせだなあ」
俺はやってもらったことねえけど
小せえ頃は俺の服はかあちゃん管轄で、穴開いたら・・・ どうしてたんだ？
捨てたな かあちゃんは捨てた
「俺は施設にいたからよ、上のにいちんたちが着てたの着せられてたからよ」
とうちゃんが俺の横に座った
「穴開いてんなんてあたりめえつつうか」
とうちゃんの小せえ頃の話聞くの好きだ
「小学校入って、穴開いたボロ着て汚ねえって箒の棒で叩かれてよ」
なんだよそれ
「なんでなんか全然わかんなくてよ」
そんな話もうちゃんは笑いながら話すんだよ
「それでもよ、ねーちゃんが俺のヒザに開いてた穴繕ってくれたときはよ、
俺こんなしあわせでいいんかなって、んなことしてもらったことねえからよ」
とうちゃんにとっては かあちゃんに繕ってもらうことがしあわせなんだな
「今もな、こうやって繕ってくれてよ」
しあわせそうな顔しながらスエットの上から繕ってもらったとこ撫でてさ
「それでも、これはもう限界だから次穴開いたら雑巾って言われた」
「そんなか？ もっかい見せてよ」
ああ・・・ たしかにこれはもうダメか ゴムんとこ伸び切ってるもんな
「とうちゃん、これは次は雑巾かな」
「そっか？ まだ履けんだけどな」
「履いてっとずり落ちてこねえ？」
「ズボン履いてっから気になんねえけど」
「だよな、人に見せるわけじゃねえしな」
パンッ ベッドルームのドアが開いた
「ずり落ちてくるパンツは限界です！」
かあちゃん 聞いてたんかよ

夜になると また愛里が恋しくなる

すぐ下にいるんだけどさ

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『愛里がいなくて淋しい』送信

ピコン

『同じマンションの下の階にいますけどw』

『そばにいたい』送信

ピコン
『乙女で笑う』
乙女ってなんだよ
ピコン
『もうシャワーは終わったんですか？』
『終わって作業ズボンの穴繕ってた』送信
ピコン
『中学の家庭科のとき修繕の仕方を教わりました』
マジ？
『愛里できるの？』送信
ピコン
『かぎ裂き・ほつれ・継ぎあてをやらされて』
ピコン
『手縫いは弱いから最終的にはミシンでって言われて』
ピコン
『ミシンって聞いた段階で先生の話が頭に入ってこなかった』
『今はできんじゃない』送信
ピコン
『そういうことに遭遇してないのでやったことはないです』
ピコン
『習ったことでやれるのはボタン付けだけ』
『俺ん家ならかなり遭遇するけど w』送信
ピコン
『やれってこと？』
『ちげえよ w』送信
ピコン
『手縫いはできるけどミシンののは』
ピコン
『先生のを見てただけでできませんから』
『やらせようとしてねえから安心して w』送信
ピコン
『安心しました』
かあちゃんが 愛里はどう思うかっつってたな
『愛里はさ』送信
『俺がヒザんところに継ぎあててたら』送信
『どう思う？』送信
ピコン
『どう思う・・・とは？』
『ヘンとか思う？』送信
ピコン

『ヒザに継ぎをあてたのを見たことないからわからないけど』

ピコン

『やり方次第かも』

やり方次第？

『どういうやり方ならいい？』送信

ピコン

『中学のときの家庭科の先生が』

ピコン

『ミシンでガーッとジグザグにして糸の色を変えて』

ピコン

『どうせやらないと思って見てたからよく覚えてない』

ミシンがガーッとジグザグ？ 糸の色を変える？

ピコン

『やるんですか？』

『まだ大丈夫だけど次はやらねえとかも』送信

ピコン

『がんばってください』

『メッチャ他人事じゃん w』送信

ピコン

『私のじゃないもん w』

なんだよお もんて 可愛すぎんだろ

『愛里可愛い』送信

ピコン

『そうですか』

どういう顔してっか想像つく

ピコン

『あと、スカートのほつれも直せません』

ピコン

『表側に見えないようにとかムリ』

『それは俺がやるんで w』送信

ピコン

『そうですねあなたはできますねやってくれました』

『まかせてくだせえ』送信

ピコン

『はい』

ピコン

『それじゃ明日もお仕事がんばってください』

『がんばる』送信

愛里たのめががんばる

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

愛里はかあちゃんと違って冷静に受け止めてくれるっつうかさ

俺だってさ、出かけるときとか？ ちゃんとしたの着るしさ

愛里とのデートんときはかあちゃんが買ってきたの着てるしさ

学校にも体育あるから擦り切れたパンツ履いてかねえしさ

なんつうの？ 使い分け？

作業するときには汚れてもいい服だろ

かあちゃんが買ってくる高けえ服着たら逆に怒んだろ

そういうことは・・・って、かあちゃんに言っても通じねえな

寝よう

明日は金曜で、土・・・日 日曜日は愛里とずっと一緒にいられる

愛里どっか行きてえところあるかな 俺はどこでもいいよ

愛里 俺、明日もがんばっからな

寝よう寝ねえと 眠む・・・

とうとう開いた穴

「だいつ！ そのセメント袋お、あっちに運んでくんちえ」

「おいっす」

しゃがんだ途端 音したな ビリッて音

あっ やっちまった 繕ったところから破けちまった

なるとは思ってたけどさ こんな早くかあ

どうする？ もうすぐ三時休憩だけど まだ仕事しねえとだしさ

ガムテ それだ 応急処置 監督室だ

「失礼します」

監督が製図見ながら

「森下？ どうした？」

「ガムテもらっていいですか？」

「もうゴム長破れたの？」

笑いながら言ってっけどさ 笑える状況じゃねえんだよ

「作業ズボンが破れちまって」

こっち見た

「ああ、破れてるね」

「はい」

「そこにもガムテなの？」

「応急処置っす、帰ったら繕うんで」

「まだ履くの？」

「はい」

監督が俺のヒザ、ジーッと見てっけど？

「監督？ ガムテを・・・」

「うちの会社の作業ズボン持ってきてやろうか」

「ハ？」

「森下脚が長いからサイズあるかどうかだけど」

「いいっすよ、これ繕えばまだ履けるんで」

「あ、そう」

「そんじゃお借りします」

これは・・・ くつつく あ、それでもすく剥がれんな

「いっそグルグル巻きにすれば？」

「そしたらヒザ曲がなくなりませんか？」

「曲がりづらいだろうな」
「そしたら仕事できねえじゃないすか」
「穴をふさがが仕事できるようにするかどっちかだよね」
「どっちもしてえんすけど」
「グルグル巻きにしても、すぐ取れると思うよ」
「そうすか、それでもいちおうゆとり持って巻いてみます」
「聞いていいかな」
「はい」
「なんで新しいの買わないの？」
「金稼ぐためにバイトしてんのに、そのバイトのために金使うって」
ゆうべもかあちゃんに言ったな
「無駄っすよね、その分稼ぎ減りますよね」
「そういう考え？」
「はい」
「やっぱりうちの会社にあるズボン持ってきてやろうか」
「や、大丈夫っす、まだ履けるんで」
「森下の中での、まだ履けるともう履けないの境界線はどこ？」
ゆうべかあちゃんにも聞かれたな
「境界線・・・んと・・・」
これはかあちゃんには言えねえんだけど
「スッパじゃなきゃいっかなって」
「スッパ、すっ裸ってこと？」
「俺のとうちゃんは、浮浪者だったとき」
「森下のお父さんは浮浪者だったわけだよね」
「はい、俺が生まれる前っすけど」
「ごめん、ちょっと好奇心で聞くけど、どうやってお母さんと知り合ったの？」
「かあちゃんが地下道で拾ってきたそうっす」
「拾ってきた ハハハハハ スごいな ダイナミックだな」
「そうすか？」
「それで？ お父さんが浮浪者だったとき、どうしたって？」
「履いてたズボン、ポロポロで、ヒザにもケツんところにも穴開いてて、
股のここも破けてて、それでもスッパじゃねえだけありがてえっつって」
「なるほど」
「それに、この作業ズボンは、とうちゃんがパートしてたときに履いてたやつで、
なんつうか、俺にとってはとうちゃんの、スプライトっす」
「ああ！ スプライトね ハハハ」
「そんじゃ、あの、また借りにくるかもしんねえんすけど」
「最低5~6回は必要だろうな」
「すいません、ガムテ代・・・ かかっちゃいますよね」
「いいよ、会社のだから ハハハ」

「ありがとうございます」

おっし、仕事に戻るか

三時休憩

諦めた もうガムテはいい 家帰ったら繕うっきゃねえな

「だいづのお、そのヒザあ、危ねえなあ」

「ヒザつかねえようにしてるんで大丈夫っす」

「俺のお使ってねえ古いズボンあげてえけんちょ、だいづは脚長げえからあ、

俺の履いたらあ、スネ出ちまうっぺ」

「半ズボンだべ」

「スギさん、俺はあそこまでえ脚短くねっぺした」

「大丈夫っすよ、帰ったら繕うんで」

「繕うたってはあ、また破けちまうんでねえのお？」

「そうっすねえ、継ぎするっきゃねえかなあ」

「ツギ」「わい、ツギっでは」

「俺、縫えるんで」

「だいづは裁縫できんのけ？ そりゃ嫁さんしあわせだしたあ」

「嫁さんて、ヤッさん、んな、まだ早えっすよお」

「めぐせがって」

寝ぐせ？

「照れてえはあ」

「やあ、んな」

あれ？ 愛里から LINE 入ってた

「ちょっとすいません」

「嫁さんがらが？」

「だから、まだ早えっすよお」

嫁さんてさあ まあいつかはさあ

『あなたは工作中だと思うので』

『今日私がしたことを日記風にお届けします』

なんだよ、日記風にお届けって 可愛すぎんだろ

『来週から行くお花の教室のサイトに』

『これくらいのショッピングバッグを持ってくると』

『できあがったアレンジメントを持って帰るのに便利ですよ』

画像だ よくかあちゃんがデパートとかショップ行ってもらうやつか

『引っ越したはがりを持ってないし』

かあちゃんのがあんじゃね？

『おとうさんに見せてもらったら』

とうちゃんに聞いたんか よしよし

『大きすぎるか小さかったので』

マジか

『他にも使えるから買ってこようと出かけました』

俺がいるときにさ 日曜日とかさ

『そういうのがなくて』

なかったんか 日曜日にさ 俺と一緒に別んどこでさ

『そしたらメッチャ可愛いバッグがあって』

買うなよ 俺が買うからまだ買うなよ

『下がカゴで上が白い皮のフタがついてるので』

俺買うから！

『でもショルダーバッグだから小さくて使えないなって』

それでもメッチャ可愛いと思ったんだろ？

『これはいっそ作る？ って思っちゃって』

作る！ おお、愛里すげえ

『生地のお店に行って生地を買って』

『今までやったことのない作り方だったので検索して』

『動画見たりいろいろして』

『作りました できました』

おおおおお 愛里 すげえよ

『これです』

画像 下 2/3 が、なんつうの薄茶？ そんで上 1/3 が白で取っ手も白のバッグ

取っ手の両方のつけ根んとこに白いボタン ボタンつけてる糸は薄茶

すげえな よくこんなん思いつくな

メッチャ可愛い 愛里が持ったらぜってえ可愛い

これは切り替えて縫ったんだな すげえな愛里の進歩はさ

しかも上の生地が下にチコッとかぶさるみてえにしてんじゃん

『可愛いと思ったショルダーバッグ風にした・・・つもり』

メッチャ可愛いよ ショルダーバッグよか可愛いんじゃね？

それでもショルダーバッグも欲しいんなら俺買うからさ

『生地をアイロンしないと縫えないので』

アイロン だよな それでも愛里はアイロンしたことあんのかな

パジャマンときは俺が両方アイロンかけたんだけど

『おとうさんにアイロンしてもらいました』

とうちゃん、ありがとう

『以上です』

『自分的に達成感がハンパなかったから』

『あなたに伝えたかった』

愛里 伝えてくれて嬉しいよ

『愛里』送信

『すげえ可愛い』送信

『バッグも愛里も』送信

あ、既読ついた
ピコン
『帰ってきたら見てください』
ピコン
『縫い目はあまり自信ないから遠目で』
『近くで見る』送信
『バッグも愛里も』送信
ピコン
『そうですか』
『そうですよ』送信
ピコン
『それじゃ お仕事がんばってください』
『がんばります！』送信
おっしゃーー がんばる

マンション着いて 真っ直ぐ愛里の部屋
ドアが開いて
「おかえりなさい」
「愛里」
帰ってきたよ
「ただいま」
え？ なんで後ろ下がった？ 俺に抱きしめられんのイヤっつうこと？
「あなたのヒザ」
「え？ ああ、繕うから」
「もう繕うくらいのレベルじゃないですよね」
「継ぎすっから」
「どれくらいの大きさ？」
「どれくらい？ まあ、これが隠れるくれえだから、こんくれえ？」
「私が生理のとき、あなたがくれるミニホカロンサイズ？」
「まあそんなくれえかな」
愛里がメチャ真剣な顔で俺のヒザ見てっけど
「俺がやっから、愛里は心配しねえでいいよ」
「心配とかじゃなくて」
「え、なに？」
「中学の家庭科のときに習ったんですけど」
「うん？」
「継ぎをするときは摩耗した部分に継ぎをしたら負荷がかかって」
「あ、そんなじゃ、こんくれえにすっから」
「それでもまだ、ていうか・・・」

アゴに指あてて俺のヒザ見てまたなんか考えてんだけど
「いっそ、ひざ上 10cm ひざ下 10cm までやっちゃった方がいいかも」
「そんなデカく？」
「中途半端だといかにも継ぎってカンジで」
継ぎなんだけど
「いっそこれくらいまでやればデザインみたいな？」
デ、デザイン???
「破れたから継ぎしてますじゃなくて」
破れたから継ぎすんだけど
「これはこういうデザインですみたいな」
そのデザインつつうのがわかんねえ
「どんな生地を使うつもりですか？」
「んっと・・・」
パンツはダメだなぜってえダメだな
「パ、パジャマの生地、まだ少しだけ残ってっから」
「エーーッ 色は抜けちゃってるとはいえベージュにグレー？」
「ダ、ダメ？」
「ダメっていうか、でも、私に関わる問題じゃないと思うし」
「関わってくれよ」
「縫えませんよ、ミシンで継ぎなんてやったことないしやりたくない」
「俺、俺が縫うから、だから、なんつつうの？ アイデア？」
「アイデア・・・なら、まあ、はい」
「そんじゃ、えっと、どんな生地にすればいい？」
愛里が俺の顔ジッと見て なに？ どした？
「私が今日買ってきた生地は？」
「白？」
「下の方！ ベージュ！」
「あ、それだ」
「でも、あなたのズボン、かなり色が抜けてるから、同じような色には・・・」
「全然いい、なんもねえより全然いい」
「私が習った方法だと、継ぎ用の生地も洗わないとだから」
「そこまでしねえでいいよ」
「ちぢんじゃうの、そのズボンを洗ったとき、継ぎ用の生地が縮んで」
「あ、はい、わかった、うん」
「あなたは速攻でそのズボンを洗って乾かしてください」
「おう、わかった」
「それじゃ」
「愛里が作ったバッグ見てえよ」
「今はバッグどころじゃない！」
「あ、はい」

「私も生地を洗ってあなたの家に持っていきます」

「俺洗うよ」

「あなたは自分を洗って！」

「あ、はい」

なんだよお俺のヒザの穴のことでこんな真剣にさあ可愛すぎんだろお

「玄関に立ってないで早く！」

「ちょっとだけ」

「なんですか」

愛里の手え引っ張って 抱きしめた

「ちょっとだけですよ」

「おう」

愛里

「今はダメ、早く」

「あ、はい」

愛里の部屋出てダッシュで家に帰った

自分を洗えってさあ 可愛すぎんだろお

パッチワーク

愛里が洗って持ってきた生地は半乾きで

「これだけを乾燥機にかけたら時間かかるだけだなと思って、

ドライヤーで乾かしてみたんですけど、なかなか乾かなくて」

「アイロンかけりゃいいじゃねえか」って、とうちゃんが言ったから

「そんじゃ俺かけるよ」

「そっか、そんじゃ俺はメシのしたくすっからよ」

つってるうちに、かあちゃん帰ってきて

晩メシ食いながら

「愛里さん、このバッグ、本当にステキ！」

「よかった、嬉しいです」

「色の組み合わせも絶妙だし」

「可愛いと思ったショルダーバッグの真似しただけなんです」

「ショルダーはカゴと皮だったんでしょ」

「はい」

「この薄手のキャンバス生地がいいわね」

「厚手だと丈夫だと思ったんですけど、厚手の生地を縫う自信がなくて」

「このくらいの方がいいわよ、見た目も重たく感じないし」

「よかったです、私、まだまだ初心者だから」

「初心者の域を超えてるわよ」

「おかあさんにそんなこと言ってもらえるなんて嬉しいです」

愛里、俺はいつも褒めてんじゃん 本気で言ってんじゃん

なんで俺のはスルーでかあちゃんだと嬉しいんだよ

にしてもさ、愛里がミシン始めたのこの春なのにさ すげえよ

メシ食い終わった頃に、俺の作業着も乾いた

片付けはとうちゃんがやってくれるっつって

ミシン出して・・・かあちゃんがソファに座って観てる

「愛里、愛里の部屋でやっか」

「どうしてですか？」

「や、ここじゃ、なんつうか」

「ここでやれば？ 私も見たいわよ」

かあちゃんの視線が怖えからここでやりたくねえんだよ
しゃあねえな
愛里が布を俺の作業ズボンにあてて
「そうですね、やっぱりこれくらいの長さにしてください」
「おう」
「継ぎのやり方はわかるんですよね」
「わかってるよ」
「そうですね、私よりずっとわかってますよね」
「うん、やってっから」
布を縫い代分含めて切って、縫い代んとこアイロンで折って
まち針でひざんところに
「こんくれえ？」
「上と下が同じになるようにです」
「おう」
止めて、筒縫い用のアームにして・・・と 糸はどれだ？
「どの色？」
「これ、私が買ってきたベージュの糸で」
「ありがと」
そんで？
「ジグザグ？ 直線？」
「わかんない、そこのところは聞いてなかったって言ったじゃない」
「目の細かいジグザグよ」
かあちゃん、俺はわかってんだよ、でも愛里の好みつつうかさ いいけど
「そんじゃ縫うかな」
「はい・・・ がんばってください」
「おう」
ダッダッダッダッダッと いいカンジじゃん できた
「もう片方もです」
「え？ あっちは破れてねえけど」
「二枚切ってくださいっていいましたよね、切りましたよね」
「切ったけど」
言われるまんま切っただけで、こっちも破けたとき用かなって
「片方だけだと、いかにも破れたから継ぎをしましたに見えちゃう」
破れたから継ぎしてんだけど
「両方やればデザインみたいに見えると思う」
デザインつつうのがよくわかんねえけど
「どうせそっちもすぐに破れるわよ」
かあちゃんっ だっからここでやりたくなかったんだよ
まあな、こっちも危ねえもんな そんじゃこっちも できた
「おっし、できたよ」

「まだです」

「ハ？」

「この布をあてた上をミシンで、こうギザギザ模様みたいに」

「んっと？」

「だから、えっと、なにか書くものありますか？」

「愛里さん、チャコペンでその上に書きちゃえば？」

「え・・・でも、イメージだけで」

「いいわよ、どうせ穴が開いてる汚いズボンなんだから」

なんだよその言い方はよおっ そうだけどさあっ

「それじゃ、こういうカンジで」

かなりやるんだな そっか補強ってことか

俺だったら雑巾縫うときの直線か放射線状しか思い浮かばねえな

今度は直線で愛里が描いたとおりの線をいっぱい縫って

「おっし、両方できたよ」

「まだです」

「へ？ ギザギザやったじゃん」

「それじゃステキじゃない」

「ス、ステキ??？」

「この糸より薄い色のってありますか？」

「あるわよ」

かあちゃん・・・俺の作業着の修繕なんすけど

かあちゃんが持ってきた糸の中から愛里が選んで

「これで・・・ こういうふうに」

「もっとやんの？」

「イヤならいいですけど」

「やる、やります、やらせてください」

その糸が終わったら、今度はもっと濃い色の糸って

ヒザの穴の修繕だけのはずが、なんかすげえ大作作ってる気になんだけど

両方できた

お？ おお なんかかけえ

「愛里さん、お見事」

かあちゃん拍手してっけど たしかにこんななるとは思わなかったな

「お尻のところも薄くなってるのよね」

「それも考えたんですけど」

愛里、そこまで考えてくれてたんか

「なんか・・・ おサルさんのお尻みたいになっちゃうかなって」

サルのケツ・・・

「アッハハハ、たしかに」

サルのケツでもなんでもいいんだけどな

「どうしたらいいんでしょう」

「どうしようもないと思うわよ」
どうしようもねえってさあ
愛里が下向いてる
「愛里？ マジで助かったから、ありがとな」
「あ！」
ど、どした？
「布を細めに、これくらいにして、長いのと短いのを重ねていけば」
「パッチワークみたいなことかしら」
「えっと、もっと、重なる部分もあって、何か書くものありますか」
「あ、おう、持ってくる」
部屋からノートとペン持ってきて愛里の前に置いた
「こういうカンジで重ねればおサルさんのお尻みたいにはなりませんよね」
「あら、それならステキね」
んっと？
「今やればいい？」
「これはまた今度で」
「やるならやっけど」
「今思いついたばかりで具体的なイメージがまだできてないので」
「そ、そっか」
なんか、俺の作業着の修繕ごときでイメージとか 愛里ごめんな
つか、マジありがとう
やっぱメッチャかっけえじゃん
「愛里さん、すごいわよ」
「中学の家庭科で習った、しかもうろ覚えのことを言っただけで」
それでもさ こんなかっけえカンジに考えてくれてさ
「縫ったのはダイチさんですから」
俺はただ愛里の指示どおりやっただけで
「私の頭の中の漠然としたイメージを形にしてもらえて嬉しいです」
愛里 かあちゃんの前ではやめてくれ 泣きそうなのに泣けねえ
「ダイチ、履いてみたら？」
「あ、おう」
部屋に入ってズボン履いて おお、ヒザも曲げられるし
ヒザついたとき床に当たるカンジがワンクッションあっていいな
部屋から出てリビングに
「履いた」
「あら！」「わあ」
え、そんな？ かっけえ？
「あの煤けてみすばらしくて汚い作業ズボンがこうなるとはね」
前の部分いらねえと思うけど かあちゃんが感心するってすげえな
「まあ限界はあるけどね、土台が土台だから」

俺はヒザの穴が修繕できて補強されただけで嬉しいっすよっ

「これでヒザをケガしなくてすみますね」

え？

「おとうさん、心配してたから」

そうなんか？

「カズオ！」

とうちゃんがキッチンから走ってきた

「ほら」

とうちゃんがビックリした顔になって

「新品みてえだな」

そこまで・・・ではねえよ、とうちゃん

「とうちゃん、これでヒザ、怪我しねえよ」

とうちゃんがホッとした顔で

「よかったなあ、アイリちゃんのおかげだな」

「うん」

「縫ったのはダイチさんです」

「それでもよ、んなかけえズボンになってよ」

「マジ愛里のおかげだよ」

愛里がなんか困ったみてえな顔してっけど

「あの、縫ったのはダイチさんなんです」

「そうだけど、愛里が」

「私の漠然としたイメージを形にしてくれたのはダイチさんなんです」

愛里

「ありがとうございます」

「え、俺？」

「はい」

「や、俺には、んなシャレたこと考えらんねえから」

「私はあんな複雑な、しかも筒縫いできませんから」

「パジャマンときやったじゃん」

「あれはあなたがいて教えてくれたから」

「それでもさ」

「どっちもよ！」

かあちゃん

「二人ともよくやったわよ、本当に、二人の合作」

俺は・・・俺のこと立ててくれる愛里に感動してて

とうちゃんが俺がヒザ怪我しねえか心配してくれてたって

かあちゃんもなんやかんや言いながら真剣に愛里をサポートしてくれて

この作業ズボンは一生捨てねえ 一生履く

「ダイチ、股のここんとこなんだけどよ」

え、股？

「前に美里に繕ってもらったんだけどよ」
かあちゃん やったんかよ
「ここも破れやすいからよ」
マジだ、補強した跡がある
ここ破れたら・・・ あ！
「どうちゃん、破れたら布バイヤスに切って補強すっから」
「ばいや・・・？」
「布をさ、斜めに切ると伸びんだよ、股んとこだから、その方が」
「そうねっ」
かあちゃん
「そうやって、あちこち継ぎだらけにして全部継ぎはぎにしたら、
逆に？ ポップになるでしょうよ、いつ捨てるのっ？」
「捨てねえよ」
「愛里さん」
なんで突然愛里なんだよ？
「こういう子」
「はい」
「いいの？」
いいのって
「はい」
愛里いいい
「そう、それじゃ、これからもよろしくね」
かあちゃん・・・
「全面パッチワークは・・・ できるかどうかわかりませんが」
んなことマジで考えてくれてんのかよ
「私と二人で考えましょう、縫うのはダイチで」
「はい」
なんかわかんねえけど なんか感動してる

愛里を部屋まで送ってきて
「愛里」
「はい」
「ありがとな」
「私、なんか少しわかったんです」
「ん？」
「おかあさんのお弁当を入れるトートバッグのときも」
かあちゃんのトートバッグ？ あの白黒の縞のか
「私のまで作ってもらいましたけど」
「いつでも作るよ、愛里が作ってくれつつたらさ」

「そういうことがわかったんです」
「え？　そういう？　なに？」
「私がこういうカンジにしたいって思うものを」
愛里がちょっと考えて
「なんていうか、あなたは・・・　あ、そのまんま形にしてくれる」
「それは愛里がちゃんと説明してくれっからだろ」
「私の言ってることをわかってくれる」
「そりゃわかんだろ」
「ありがとう」
「え？　や、俺こそありがとう」
「それじゃ」
「愛里」
抱きよせて　それで
「もうっ　いっつも急にするんだから」
「そんじゃ、愛里、キスしていい？」
「イヤです」
「ほらな」
「だっ・・・」
俺は　好きが溢れて　爆発しそうです
くちびる離して
「そんじゃ、あの、ありがとう」
「いえ、それじゃ」
「またあとで」
「はい」
ドアが閉まって鍵が閉まる
愛里　俺は・・・
愛里の思ったことをそのまんま形にするとか
んなかっけえヤツじゃなくて
メッチャ　煩惱まみれでさ
そんでもさ　繕って補強して出てこねえようになんばっから
帰ろう　階段で帰ろう　走ってこ　ヤベえ

愛里の思惑

家に戻ったら、かあちゃんは風呂からあがってた

「愛里さん、おそらく見越してたわね」

見越してた？

「なにを？」

「あんたのあのズボンのヒザに穴が開くこと」

「愛里は毎日見てっし、ゆうべ LINE でその話したからさ」

「LINE で？ どんな話？」

「繕ったつう話、そんで・・・ まあそんなこと」

「継ぎの話はしたの？」

「愛里が中学の家庭科で習ったとか、やり方次第じゃねえかって」

「やっぱり」

「やっぱりってなんだよ？」

「厚手のキャンバス地は針を換えれば家庭用ミシンで縫えるって教えた？」

「キャンバス地とかじゃねえけど、布の厚さで針換えれば縫えるよって」

「やっぱり」

「だから、やっぱりってなに？」

「愛里さんが作ったバッグ、厚手のキャンバス地の方が丈夫よね」

「そこは愛里の好みじゃねえの」

「あんたはホントに鈍感」

「ハ？ 鈍感てなんだよ？」

「愛里さんはカゴと皮のショルダーバッグを見て真似したのよね」

「だからなに言いてえの？」

「その真似をするなら厚手のキャンバス地よね」

「だからあ、それは愛里の好みだったんだろ」

「愛里さんが選んだ生地は、あんたの作業ズボンに近い厚さと生地」

「まあそうだけど」

「あんたの性分をよくわかってる」

「かあちゃんは何言ってるのかわかんねえよ」

「もしも愛里さんが、あんたの継ぎ用の生地を買ってきたらどうする？」

「金払うよ、ったりめえじゃん」

「ほら」

「ほらってなんだよ？」

「あんた、愛里さんがバッグ作る生地の端切れもらったけど」
「うん、メチャピツタリで・・・ え？」
「そういうことよ」
「え、そんじゃ、愛里は俺の継ぎ用の布ってこと考えて、あの生地・・・」
「やーっとわかった」
えっ んなこと なんて愛里は俺には
「なんて愛里は俺に言わなかったんだ？」
「言ったらあんたがお金払うから」
「ったりめえじゃん、俺の継ぎ用の布なんだからさ」
「お金を稼ぐためにバイトしてるのに、そのバイトのためにお金使うのは無駄」
「え・・・」
「愛里さんはあんたのそういうところを知ってるから」
「それでも愛里には払うよ、んなさ、わざわざ俺のためにさ」
「わざわざあんたのためにとって思わせたくないからバッグ作ったんでしょ」
「あれは、来週の花の教室で使うって」
「そういうことをつなぎ合わせたら、バッグを自分で作ればいいってね」
「え・・・ んな・・・」
「あんたがあのズボンを捨てないって言ったとき、私が愛里さんに聞いたでしょ」
「え、なに？」
「こんな子だけど、いいの？ って」
「あ、うん」
「愛里さんは、いいって」
歯ぁ食いしばって 泣かねえように 必死に
「あのヒザの継ぎはあの場で考えたものじゃないわよ」
「そ・・・れは・・・ 中学の家庭科で・・・」
「ヒントにはなったんでしょね、でもね、ジグザグの糸の配置や色の重ね方、
あれは頭の中でずっと考えてたのよ、チャコペンでスッと描いたでしょ」
俺は・・・ んなこと全然・・・ 思いもしねえで・・・
「お尻部分をどうするかも考えてたじゃない」
サルのケツ・・・
「パッと思いついたのを描いたけど、あんたが今やるかって聞いたら」
俺は・・・ なんか・・・
「今思いついたばかりだから具体的なイメージがまだできてないって」
あ・・・
「きっと考えるんでしょね、もう考えてるかもね」
「俺・・・ かあちゃん、俺・・・」
「ステキな子ね、本当にステキ」
「俺、ちょっと」
「お風呂入ってるんじゃない？」
「もうちょっと後」

「愛里さんのタイムスケジュール把握してるの？ やだあ」
家飛び出して
エレベーター 一階 階段だ 駆け下りて
愛里 俺 買う 作業ズボン買う
今度穴開いたら ケツんどこに穴開いたら
愛里に気い使わせて 愛里に金使わせてさ
そんな本末転倒つつうかさ 愛里のために稼いでんのにさ
愛里の気持ちに全然気いつかねえでさ なにやってんだよ俺

愛里の部屋のドアホン鳴らした
ドア開けた愛里はビックリした顔で
「どうしたんですか？」
「愛里」
抱きしめて 言葉出ねえから ただ 抱きしめて
「なに？ どうしたの？」
俺の腕の中で そんなも なんつったらいいんかわかんねえよ
「ごめん」
これっきゃ
「え、なに？」
「愛里、ごめんな」
「なにがですか？」
「俺が、なんか、愛里の」
「ああああ、ちょっと待って、今」
キッチンに走ってっちまった
なんだ？
あれ？ メッチャコーヒーの匂いすんだけど
愛里コーヒー飲まねえよな
「愛里？」
「入って！」
「え、おう」
キッチン入ったら
愛里がコンロの上の鍋の中にトング入れて、なんだ？ なんか茶色い・・・
「愛里、何作ってんの？」
「染めてるんです」
染めてる？ コーヒーの匂いなんだけどな
「中学の家庭科で染め物やりましたよね？」
「俺の中学ではやってねえよ」
「え？ 中学で違うの？」
「愛里は染め物できんの？」

「おばちゃん先生だったから、絞り染め作らされて」
絞り染め？　　すげえな
「二度とやりたくないけど、絞り染めのクッション、縫ったのはママで」
「そんで、んっと、染めてるって」
「あなたのズボンのお尻用の生地」
えっ
「あ、えっと、私のバッグの残った生地ですから」
愛里・・・　俺さ　もうわかってんだよ
「私がパフェ作るときのインスタントコーヒーで」
真剣な顔で鍋の中見ながら
「なーんの役にも立たないし、二度とやらないと思ってたけど」
それでも　今　染めてんだよな　俺のケツ用の布
「ベージュのと白のを染めると、茶系のいろいろな色ができるかなって」
いろいろな色
「細長い生地を重ねても一色だと継ぎしてますってカンジかなあって」
愛里がトングでこげ茶色のお湯ん中から茶色に染まった生地持ち上げて
「ほら、これは濃いでしょ、こっちは白を染めてるから」
愛里・・・
「これをいいカンジに重ねたら、えっ　なんで泣いてるの？」
「なんで・・・お・・・れ・・・の」
「えええ、なんで？　なんで泣いてるの？　やだ、なに？」
言いてえこといっぱいあって思いがいっぱい溢れて
「愛里」
「え、ちょ、抱きしめるとか、トング持ってるから危ない」
俺は片手で愛里抱いたまま、愛里が持ってるトング鍋に戻して
「なにかあったんですか？　やだ、わけわかんない」
俺・・・　知ってんだよ　愛里が俺のためにさ
「どうしたんですか？」
心配そうに俺の顔見上げてさ
なんて言えばいいんだ　何を言えばいいんだ
「愛里・・・　なんで」
何を聞けばいいんだ　何を聞いてえんだ
「なんで、なに？」
「んと、なんで、愛里は・・・　あのズボン捨てろって言わねえの？」
「私が捨てろって言ったら捨てるの？」
「愛里が言ったら・・・」
「捨てないでしょ、おかあさんが言っても捨てないって言うんだから」
「かあちゃんはさ」
「あれは、あなたのおとうさんがスーパーで働いてたときに履いてたんですよ」
「え？　なんで」

愛里が知ってんだ？

「おとうさんから聞いたんです」

「あ、そっか、うん」

「おとうさんがいろいろ話をしてくれて」

「そっか」

「あなたが小学生のときに作文を書いてくれたって」

え？

「スーパーの裏で働いてるおとうさんがかっこいいって書いてくれたって」

ヤベ また涙・・・

「おとうさんは照れて、あんなのをかっこいいなんてなって笑ってたけど」

愛里に顔見られねえように抱きしめたままで

「だからかなあって」

だから？

「なんていうのかな、なんていうか、あの作業着は、ん・・・っと」

俺の腕の中で愛里がなんか考えてて

「あ！ 父から息子に受け継がれる的な？」

愛里・・・ なんだよ・・・ 受け継がれるとか・・・

「おとうさんから受け継いだ、あなたの戦闘服」

え？

「あ、ちょっと離して」

愛里が俺の腕の中からスルッと抜けて鍋ん中見て

「こっちは・・・ もう出した方がいいかなあ」

トングで薄く茶色に染まった布切れ出して

「それを」

出した布切れをザルに置いて

「私が捨てるなんて言えないです」

愛里・・・ 俺もう 下向いて泣き顔隠すきゃできねえよ

「それに・・・ あ、いいカンジ、乾けばもっと薄くなるから」

染め物しながらふつうのカンジでしゃべってる愛里が

愛しくて愛しくて愛しくて愛しくて

「あなたは、私のために？ なんか長期的なカンジで稼ぐって」

え・・・

「だったら私はあなたの援護射撃？ 撃たないけど」

愛里 俺もう

「なんていうか、あなたの戦闘服の修理？ 縫わないけど」

ダメ・・・だ

「えっ、やだ、号泣？ ウソ！ なんで？」

「あ・・・い・・・り・・・が」

「泣きながらしゃべろうとしなくていいです、なんか、なんで？」

「愛里・・・が」

「なんではひとり言だから」
「そ・・・っか」
「ちょっと待ってて」
愛里がリビング行って 戻ってきた
「ティッシュ使います？ 使いますよね」
頷くことっきゃできねえ
涙拭いて鼻かんでる俺のこと 不思議そうな顔して見てっけど
「ここに置いておきますから」
「あ、うん、ありがと」
「あの、どうしたの？」
どうしたのって なんつったらいいんだよ なんつうか
「しあわせ・・・過ぎて」
「えええっ しあわせ過ぎて泣くとか、乙女過ぎる」
「男でも泣くんだよっ」
「そんな怒ったみたいに言わなくてもいいでしょ」
「あ、ごめん」
「あれ？ なんで、ここに来たんでしたっけ？」
なんでって
ごめんで言おうと思ってた
あのズボンに穴開いたら買うからって言おうと思ってた
けど 愛里はもうケツ用の布を染めてくれてて
考えてくれてて
「愛里」
抱きよせて
「ありがとう」
「縫うのはあなたですけど」
「縫う、愛里が思ったとおりに・・・なるように」
「なんか楽しみになってきちゃって」
明るい声でさ
「あのズボンをどこまでステキにできるかなとか」
作業ズボン・・・ステキにって
「いっそ全部に継ぎをしたらどうなるのかなとか」
んなこと考えてさ
「差し色にちょっとだけ抑え気味の黄色を入れたらどうかなとか」
無邪気にしゃべってる愛里の声聞いてっと また涙出てきて
「よかったです」
よかった？
「私にもちょっとはできることがあって」
ちよっとして 愛里
「なんかいつもあなたにやってもらおうばかりで」

ちげえよ 愛里

「私はなんにもできないなあって思ってたけど」

愛里がいるから俺はさ

「まあアイデアだけですけど」

俺は・・・ 愛里抱きしめたまま 声出して泣いちゃって

「えええ、また泣いてるの？ なに？ どうしちゃったの？」

「どう・・・しちゃったんだ・・・ろう・・・な」

「男にも PMS ってあるんですか？」

泣きながら 笑っちゃって

「ねえよ」

「そうですか、それじゃ」

愛里が 俺の背中に腕まわした

「泣いてください」

「え・・・」

「いつもあなたの腕の中で泣かせてもらってるから」

愛里

「たまには、どうぞ」

「どうぞって」

「頼りないですけど」

愛里は

「頼りあるよ」

「頼りあるって日本語ないでしょ」

笑ってっけどさ

「まあそうですね、頼もしいまではいかないから、頼りあるでいいです」

「頼りあります」

「そうですか」

愛里のくちびる

愛里と ひとつになりてえ 今 すげえ なりてえ そんなでも

くちびる離して

「愛里・・・ 俺・・・ 俺さ」

今 すげえ 愛里と 理性と本能が闘ってて

ピピピッピピピッ

「20分経った」

愛里が俺の腕ん中からスルッと抜け出て

「もうちょっと置いて」

鍋の中覗いて

「これで、お尻用の布は用意できました」

タイマー 鳴って よかった

「縫うのはあなたですからね」

「あ？ おう」

「それじゃ、私はそろそろシャワーします」

「あ、そっか、そんじゃ、またあとで」

「はい」

愛里の部屋の玄関飛び出して 鍵が閉まる音背中で聞いて

ヤッベエ

ギリだった

最低じゃん んな 愛里が俺のために んなときに

そんでも

俺の うまい棒 こんななってっけど

深呼吸だ深呼吸 フーーーーーッ

愛里 ありがとう

俺もシャワー浴びっから

冷てえやつ

ドアの前でおっ立たせてねえで 帰ろう

パピコ

玄関でゴム長履いてたら

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

そうだよ、これ食わねえと力出ねえよ

「とうちゃん、ありがとう」

たたきに立ったまま握りメシ食ってると

とうちゃんが俺のズボン見て

「メッチャかっけえな」

「愛里が、これはとうちゃんから俺に受け継がれた戦闘服だっさ」

「スーパーで働いてっときもらったやつだけだよ」

「これは俺が小学生んとき見に行ったときのだよな」

「だな、働き始めてから・・・ 2着目だったな」

「やっぱ戦闘服だよ」

とうちゃんが ちょっと照れたみてえな顔して

「そっか、そんじゃ、いってらっしゃい」

「いってきます」

ドア閉めて とうちゃんの握りメシ食ったからエネルギー満タンだ
握りメシ入れた保冷バッグ持って 出撃だ！ 現場だけど

昼休憩

「朝も言ったけんちょ、だいつのそのツギ、シャレてっぺ」

「そうすか？ そうすよね」

「だいつの嫁さんが縫てけたんだべ」

「スギさ～ん、まだ嫁さんじゃねえすっよお」

「も嫁っこさすてまったらいんでねが」

ん？ え？

「スギさん、だいつはまだ16だしたあ」

「まんだできねが」

「スギさんとヤッさんはいつ結婚したんすか？」

「わ、ずうはんづ」

んと？

「スギさん18で結婚したんだよお」

18で！ おおお、すげえなあ
「かっちゃんずうろぐんときこれになっでは」
んと？ これって手でやってんのは 妊娠てことか
「いくつで妊娠したんすか？」
「ずうろぐ」
「え・・・っと、じゅう・・・ろく？」
「んだ」
すげえ、16と18で結婚したんか
「おなごのわらすでぎで」
え、んと？
「スギさんとこはあ、女の子が生まれたんだってハア」
「いぎてらったら、もうさんずうになっでらな」
ん？ ヤッさんいつもの通訳お願いします え？ 気まずそうな顔してっけど
「スギさん、だいづにはしゃべってもいいかなあ？」
「なぼでも、だいづにはなぼでも」
なんだ？ なんかあんのか？
「スギさんのお子なあ、スギさん、3歳だったっげえ？」
「んだ、わ、便所」
スギさんが立ち上がって便所に行っちゃった
「スギさん、もともとは百姓だったんだした、そんで娘が3歳んときにい、
な～んか重てえ病気んなっちゃってえ、田舎だからあ病院ねっぺ、
近くの町の病院入れたけんちょ、治療費かかっぺ」
「そう・・・すね」
「そんでスギさん、東京さ出稼ぎしでえ」
「ああ、それでここに」
「1年経ったくれいにい・・・ 死んだってハア」
「えっ？ し、死んだって・・・ スギさんの子ども？」
スギさん戻ってきた
俺の前にあぐらかいて座った
「だいづ」
「あ、はい」
「わらすあんずがるにはやぜにかがる」
んと？
「子ども育てんのはあ金かかるってハア」
「あ、はい」
「今がらけっばればなもけね」
んと？
「今からあ頑張ればあ大丈夫だっぺ」
「スギさん、俺、がんばります」
「だいづならなあ」「だいづはけね」

「俺のバガ息子もなあ、だいつみてえだったらいがったんだけんちよ」
「ヤッさんは息子さんいるんすか」
「高校まで行かせたんだあ」
「すげもんだ」
「今はどこにいるんすか」
「どっこにいんだっぺなあ」
ん？
「高校入ってえグレてはあ、髪の毛まっ黄黄でえ眉毛剃っちまってはあ」
おおお、本格的だ
「ほいでえ、あんまり人には言えねんだけんちよ」
ヤッさんが声小さくして
「少年院入っつまったんだした」
少年院？
「俺のとうちゃんも院に入ってたことあったらしいっす」
「だいつのとうちゃんが？ いんやいんやいんや」
「主犯じゃねえけど主犯にされちまったみてえで」
「なんでえ？」「なすて？」
「とうちゃん施設育ちで小学校も行ってねえから字も読めなくて」
「すせづ」「小学校も行けねかったんけえ」
「それで、なんかわけわかんねえまま入れられちまったっつうか」
「わい、むげごどされで」「そりゃかわいそうだっぺえ」
「ヤッさんの息子さんと仲間っすね」
「仲間でねえよお、うちのバガ息子はありっぱな主犯だっぺ」
院の話して笑ってるってさ やっぱヤッさんスギさんはいいなあ
「ほんで出でえ、地元の左官屋に勤めたんだけんちよ、やっぱなあ、
少年院出っつうんでいづらくなっちまってはあ」
そっか だよな やっぱそういうのあんだよな
「ほんで、プイって辞めでえ、家の金ごっそり持って出てっちまってはあ」
「いなくなっちまった・・・んすか」
「それがあ、東京でホストやってるってはあ」
ホスト？
「俺とそっくりの顔でえ、ホストってえ ムリだっぺ」
スギさんが大笑いして 俺もつい ヤッさんの言い方がさ
「そっからはどっこにいんだかわかんねした」
「大阪さいだっでらべ？」
「どこでもいいけんちよ、まあ生きてんだっぺな」
ヤッさんもスギさんも いろんなこと経験してんだな
俺なんてまだまだペラッペラだ
「俺もおっかあもお、どっかで生きてりゃいっぺっては」
それでも

「わどかっちゃんもこりゃこれでいんでねがっでよ」
「ほんでもなあ、たま〜に淋しくなってはあ」
「んだな」
だよな 俺はまだよくわかんねえけど
「そごに、だいつが現れたっぺした」
「え、お、俺っすか？」
「だいつといっとお、楽しぐってはあ」
「まんずめごくでや」
「俺もヤッさんとスギさんといると楽しいっす」
「こ〜んなおっさんといで楽しいっではあ」
「マジっすよ、いろいろ教えてもらってるし、おかずも毎日もらって」
「おっかあがぁ、だいつさ食わせろってえ張り切ってはあ」
え？
「わのかっちゃんもで」
「俺・・・に？」
「おかげでえ、俺の弁当も豪華になっではあ」
「わのもつげものだけでねぐなっでよ」
そう・・・だったんか 俺は毎日おかずもらって それって
「ヤッさん、スギさん」
「だ、だいつ、土下座っては」
「なもそっだごとさねで」
「あり・・・がとう・・・ございます」
「だいつ、また泣いてはあ」
「だいつはなぎつつで」
「俺、この現場来て、ヤッさんとスギさんに会えてマジよかったっす」
「俺たちもお、だいつといっとお楽しくてはあ、なあ」「んだ」
「俺のおっかあもお、だいつを息子みてえに思っでっからあ」
「わのかっちゃんもだ」
「俺、メッチャ強え味方いっばいいるじゃねえすか」
「俺のおっかあは強えなあ」「わのかっちゃんもきがねがら」
「メッチャ心強いっす」
愛里 俺はどうちゃんから受け継いだ戦闘服着て 愛里が修理してくれて
そんで こんな強い味方と一緒に働いてっから 愛里のためにさ
愛里と俺の将来のためにさ

もうちょっとで三時休憩だな
「だいつ」
「おいっす」
「あれは・・・ だいつの友だちでねえかあ？」

「え？」
えっ 川口？ また？ 今度は何の相談だよ？
「行ってやればいっべ」
「すいません、そんじゃ」
「ああ、この前のおアイスウ、当たったよってはあ伝えてくんちえ」
それは・・・
「あ、おいっす」
言わねえ方がいいな
出入口んところ走ってたら
「森下」
「川口、どした？」
「これ差し入れ、今日はパピコの、なんだっけ」
袋ん中覗いてっけど自分で買ったんだろ
「大人の華やか苺」
なんだその凝った名前は
「おじさんたちの分もあるよ」
「ありがと、んっと、これってさ、二人で分けるんだよな」
「うん、そうだね、パピコだから」
「そっか、ちょっと渡してくる」
おっちゃんたちが二人でパキッて割って分け合うって いいけど
「ヤッさん、スギさん、差し入れっす」
「わいめわぐだ」「あんがとなあ」
「二人で割って分けて食うやつなんで」
「ぱびごは知っちゅね」「パピコはあ昔食ったことあっからあ」
「そんじゃ、俺、ちょっと話してくるんで」
「友だちにいあんがとってなあ」
「おいっす」
また川口んところに走ってって
川口がパキッて割って
「はい、森下の分」
なんで川口と まあいいけど
「これ、上原さんが選んだんだよ」
「えっ 愛里？」
「僕が、今日森下に会いに行くから何か差し入れ買いますかって LINE して」
え、ちょ
「なんで俺んところに来んのに愛里に LINE すんだよ？ 俺にでよくね？」
「上原さんに黙って森下に会ったら悪いかなって」
「なんで？」
「森下は上原さんのカレシだからさ」
「おう、愛里のカレシだけど」

だからなんなんだ???

「そしたら、上原さんも一緒に行くって」

「えっ 愛里も来てんの？」

「うん、来たんだけどね、さっき帰った」

「なんで？」

「森下に会いたくないって」

「な、なんで俺に会いたくねえの？」

「恥ずかしいからって」

「なんで？」

「さあ、人見知り？」

「なんで俺に人見知りすんだよ、毎日会ってんのにさ」

「上原さんに聞いてよ、僕はわからないよ」

愛里、なんで帰っちまったんだよ

恥ずかしいってどういうことだよ

「上原さん、森下が働いてるところ見てたよ」

「えっ マジ？」

「僕に動画撮ってって」

「動画？ なんの？」

「森下が働いてるとこの」

「なんで？」

「僕に聞かないで上原さんに聞いてよ」

「あ、まあ、そっか」

「動画、森下にも送っておくね」

ピコン ピコン ピコン

「こんなに撮ってたんかよ？」

「上原さんが撮れって言うからさ」

どうちゃんに見せてえんかな

「愛里はマジで帰っちまったの？」

「うん、さっき、僕が森下のところに行こうよって言ったら帰るって」

川口と一緒にいたら俺がヤキモチ焼くとか思ったんかな 妬かないねえよ

「早く食べないと溶けちゃうよ」

「え？ ああ」

イチゴ味 愛里らしいよ そんでメチャ美味えよ

「今日ね、全国模試だったんだよ」

「この前言ってたやつか」

「森下のおかげで吹っ切れたから、自分でもけっこういけたと思う」

「よかったな」

川口には悪りいけど

「森下ありがとう」

「勉強したのは川口じゃん」

川口としゃべってても

「あのとき森下に話聞いてもらってよかったよ」

「そっか」

愛里がここまで来たのに帰っちまったっつう淋しさっつうかさ

「その作業ズボン、変わってるね」

「愛里デザインだよ、ヒザんところに穴開いて継ぎすっときデザインしてくれた」

「そこだけが妙にオシャレだよ」

そこだけってさ まあそうだけどさ

「あれ？ 上原さん？」

「え？」

「向こうの角からこっち覗いてるのって上原さんじゃない？」

えっ？ あ、なんかヒョイって頭引っ込めたけど

「川口、ちょいこれ持ってて」

走った 愛里 なんでさ わざわざ来てくれたのにさ

角曲がったら 走って逃げてる

「愛里！」

腕つかんだ

「なんで逃げたんだよ」

こっち向かねえ

「せっかく来てくれたのにさ」

なんでこっち向いてくんねえんだよ

「も・・もう、帰らないと」

「なんで？」

「え、なんか、なんとなく」

「愛里」

両肩つかんでこっち向かせた 目え合わせねえ

「愛里、なんか怒ってんの？」

「お、怒ってません」

「そんじゃ、なんで俺に会いたくねえとかさ」

「だって・・ なんか・・ べつの人みたいで」

「べつの人？ や、俺だよ俺」

「そう・・ですけど」

「愛里、わざわざ来てくれんなんてさ」

「か、川口くんが行くっていうから、なんとなく」

「パピコありがとな」

「あれは川口くんが買いました」

「愛里が選んでくれたんだろ」

「あの、私、もう帰ります」

「俺もこの休憩終わったら二時間仕事してすぐ帰っから」

「あ、はい」

「愛里」
「ああああ！ ダメ！」
「え？ な、どした？」
「白のトップス！」
「え？ あ！ ごめん、俺、泥だらけだった」
「いいですけど、いつも帰ってきたときはそこまでは」
「帰る前に顔と手え洗って作業着の泥、え？ 汚ねえから？」
「え？ なにが？」
「俺が汚ねえから会いたくなかったの？」
「違います！」
「そんじゃなんで？」
愛里が俺の顔見て口動かしてなんか言おうとしてて
「愛里？」
「えっと、LINE で言います！」
「なんで？ 今言えばいいじゃん」
「恥ずかしいから」
「なんで？」
「なんか、すごく、かっこいいから」
「え？」
「なんか、働いてるカンジがすごくかっこよくて、なんか」
「愛里！」
「ダメ！ 白のトップス！」
「あ、ごめん、そんでも、すげえきれい」
「そうですか」
愛里がいつもみてえにツンてカンジで言ってさ
「それじゃ、また、あとで」
「おう、ありがとな」
「いえ、おじさんたちによろしく・・・言わなくていいです」
「言っとく」
「言わないで！ 仕事見に来たとか恥ずかしいから」
「また来てくれよ」
「川口くんが来るときには・・・ はい」
「なんで川口なんだよ？」
「一人じゃムリ！ 人見知り！」
「そっか」
「それじゃ」
「愛里、好きだよ」
愛里が目だけキョロキョロ動かして
ほとんど聞こえねえ声で
「こんなところで言わないで！」

俺も口だけ動かして

「好きだよ」

「そうですか、はい、それじゃ」

通りの向こうに走っていった

しあわせだああ たまんねえええ

「森下」

あ？ 振り向いたら あ、川口のこと忘れてた

「はい、これ、かなり溶けちゃったけど」

パピコ

「おう、ありがと」

「それじゃ僕も帰るね」

「川口ありがとな」

「なにが？」

「川口が来てくれたから愛里も来れたからさ」

「ああ、やっぱり人見知り？」

「だってさ」

「それじゃまた来るよ、上原さんに連絡して」

「おう」

川口も帰ってった

おーっしゃ！ あと二時間がんばる！

ベッドサイド

マンション着いて愛里の部屋に直行する
手も顔も今日は仮設水道でメッチャ洗った
作業着の泥もメッチャ叩き落とした
現場来てくれてさ 逃げたけど つかまえたけど
抱きしめらんなかったからさ
ドアホン鳴らして
ドアが開いて
「愛里」
「おかえりなさい・・・」
え あれ？ なんか暗くね？
「愛里」
抱きしめたら
「ハァァァ・・・」
ため息？ なんだ？
「愛里、どした？」
愛里の顔 覗き込んだら
「なんか顔、蒼くね？」
「そうですか」
そうですかって
「具合悪りいの？」
「え・・・あの・・・なんていうか」
「なんだよ、言ってくれよ」
「月に・・・一度の」
「生理か」
愛里がジッと俺の顔見てっけど
「生理じゃねえの？」
「ですけど」
「生理痛ひでえんか」
また黙って俺の顔見てっけど
「ん？ どした？」
「まだ慣れないんです」
「なにに？」

「だから、なんていうか、同級生の男子に、しかもそれがカレシで」
ハ？ え？
「その人に目の前でそのワードを口にされることに」
「そんなんいいよ、慣れても慣れなくてもさ」
「ハ？」
「愛里が辛れえってことは事実なんだからさ」
「え・・・はあああ・・・ふえ・・・」
あ、泣いて
「そんな辛れえの？」
「なんか・・・ 様々な感情が交錯して」
「交錯」
フツターの会話であんま聞かぬえ言葉だけど
「午前中、現国の課題をやったので書き言葉になっちゃいました」
「そっか、いいよ、うん」
「なんか・・・ 疲れちゃった」
「俺の現場にまで来てくれたんだもんな、疲れるよな」
「それは疲れませんでしたけど、頭の中が疲れちゃって」
「今はあんま考えねえで、んっと、寝ろよ」
「はい」
「そんじゃ」
愛里の手えにぎったら
「愛里、手え冷てえよ、貧血起こしてねえか」
「いえ、めまいとかはないです」
「晩メシまでさ、なんだったらもっとさ、寝てていいからさ」
「はい」
「腹減ったら、俺に言ってくれたら持ってくるからさ」
「はい」
「そんじゃ」
愛里の手え放そうとしたら 愛里が俺の指つかんだ
「どした？」
俺は愛里の手えギュッとにぎりなおした
「なんか・・・ あなたが・・・ 遠く感じて」
「や、俺ここにいっから、ほら、ここ」
「そういう意味じゃなくて」
愛里の目がボーッと床見えて
「愛里、寝よう、な？」
「はい」
「俺、用意すっから」
玄関あがってバスルーム入ってバスタオル持って
「行こ」

愛里の手引っ張ってベッドルームに入って

ベッドにバスタオル敷いて

「ほれ」

「はい」

愛里が俺の手えにぎったままベッドに横になったから

俺は愛里の上に布団かけて 愛里が俺の手えにぎったままだから

そのままベッドのすぐ横の床に座った

「なんか・・・」

愛里が俺の顔見て

「ホッとする」

「そっか」

「まだ行かないで」

た まんねえ

「いるよ、愛里が寝るまでいっから」

「あなたの靴下」

靴下？ あっ 汚ねえのそのまんま

「指先に穴が開いてる」

「マジ？ あ、開いてた」

「フッ」

愛里が笑った よかった

「なんでそんな擦り切れた靴下履いてるの？」

「現場用だからさ、汚れても、あっ 臭せえ？ 臭せえよな」

「臭いけど」

「マジ？ え、んっと」

「いいです、慣れましたから」

「慣れんなよ、んなさ」

「一生懸命働いた匂いだから」

「え？」

「私、仕事って、ネクタイ締めてスーツ着て出かけることだと思ってて」

愛里が天井見ながら

「パパがそうだったから、パパが仕事してるの見たことなかったし」

「そっか」

「あなたが私の家に家政夫として来たときは、ただもうビックリで」

だよな 俺も最初はビックリだった

「あなたが仕事してるとか思えなくて、私の世話をしてくれてるとしか」

「俺は仕事つう名目で愛里のそばにいたくていたからさ」

「なにそれ」

愛里は俺の手えにぎったまま また笑ってさ

「今日、工事現場で、あなたが重たそうな袋をかついでたり」

そんなん見てたんか

「土とか石？ 運んでたり、そういうの見てたら」
愛里の目が眠そうになってきてる
「働くってこういうことなんだなって」
愛里がゆっくりまばたきして
「なんか、すごくおとなっていうか、頼もしいっていうか」
頼もしい マジ？
「ゆうべ私の部屋で号泣してた人と別人みたいって」
「なんだよそれよお」
「号泣してるあなたも好きだけど」
え？
「働いてるあなたは・・・ かっこよくて」
愛里 かっこいいとか愛里に言われっと メッチャドキドキすんだけど
愛里が目え閉じて そんで 俺の手えにぎってた手から力抜けて
寝たんか 愛里 俺 今 最高にしあわせな時間もらった
愛里にはいつも最高にしあわせな時間ばっかもらってるよ
「愛里」
愛里のおでこにそっとキスして
「おやすみ」
部屋から出て そっとドア閉めた

家に帰って
「ただいま」
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、愛里さ、生理になっちゃったから」
「やっぱそっか」
「やっぱ？」
「アイリちゃんがよ、俺にダイチが働いてっところを見せてくれてよ」
やっぱとうちゃんに見せたかったんか
「そんで、腰さすったりよ、なんか辛れえみてえな顔になってよ」
「愛里、ねえちゃんくれえ重てえんだよ」
「そりゃ辛れえだろうな、ヒトミはいつも辛がってたもんな」
「今寝てる、きっと痛み止め飲んだんだと思う」
「アイリちゃんの晩メシどうすっかな」
「もう用意してたんじゃねえの？」
「そうめんのジャージャー麺作ったんだけどよ」
「愛里とうちゃんのそうめんのジャージャー麺好きだよ」
「俺はアイリちゃんにまだ作ったことねえよ」
「とうちゃんから受け継いだ味だよ」
「俺のつつうより、スーパーの壁に貼ってあったの見てこんなんかなって」

「まだ字い読めねえ頃だろ」
「写真あったしよ、材料んどこもボヤッとはわかったからよ」
「愛里もふつうのそうめん嫌いなんだってさ」
「美里とおんなしだな」
「俺は逆にふつうのそうめん食ったことねえけど」
「ふつうのそうめん食いてえか？ 安売りしてていっぺえ買ったからよ」
「いいよ、とうちゃんのそうめんが好きだからさ」
「そっか」
「とうちゃん、愛里がさ、俺が働いてっところ、かっこいいってさ」
「かけえよ、セメント袋ひょいっつってかついでよ」
「とうちゃんの頃の半分の重さだよ」
「そうなんか？」
「とうちゃんすげえよ、40kg 運んでたんだからさ」
「俺は下っ端だったからなあ、それっきゃできなくてよ」
「現場で働いてっど、とうちゃんすげえなって思う」
「すごかねえよ、ゲカしちまうってよ、ヌケてんなあ」
「それは」
とうちゃんが悪いんじゃないよ
「俺、シャワー浴びてくる」
とうちゃん、俺、現場で働いてえんだよ これからもずっと
そんでもさ、とうちゃんと約束したからさ
それに 現場で働いてたら、愛里のことなんもできねえもんな
俺は将来何になればいいのかな
究極なんでもいいんだけどな
愛里がなんも心配しねえで安心して暮らせんならさ
それは いったい何なんだ？
とにかく勉強だな 選択肢広げねえとな
現場行ってんだけどなあ ムリだな
ヤッサさんともスギさんとも、奥さんパートしねえと暮らしてけねえって
愛里には好きなことだけしてもらいてえもんな

シャワー終わってキッチン行くと、とうちゃんが握りメシ作ってる
「そうめん握りメシ？」
「これは美里が作っといってくれっつってたからよ」
「あれ？ かあちゃん今日は休みだよな、どこ行ったの？」
「会社の人結婚式だつてよ」
「そうなんか」
「アイリちゃん分も握っとくか？」
「愛里のは俺がやるよ」

愛里は梅干とおかかとシソ入れたのが好きだかな

かあちゃんが帰ってきて　とうちゃんの握りメシ食ってる

「愛里さん来ないわね」

「まだ寝てんのかもしんねえ」

「これ」

かあちゃんが引き出物の袋から箱出して

「愛里さんにあげて」

「チョコ、そっか、ありがと」

「おむすびだけでも持って行ってあげたら？　だるいのかもしれないわよ」

「そっか、持ってくる」

握りメシとチョコの箱持って二階に下りた

いちおうドアホン鳴らした

出ねえな

鍵開けて玄関の棚んところに置いとくか

黙ってつつうのも　LINE 入れとくか

あ　ドア開いた

「ごめんなさい、ドライヤーやって気づかなかった」

「風呂入ったんか」

「はい、あ、ごめんなさい、連絡しなくて」

「いいよ、んなこと」

「さっきまで・・・っていうか、お風呂入る前まで寝てて」

「そっか、これ、握りメシとかあちゃんが引き出物でもらったチョコ」

「わあ！　これ、いちばん好きなところの」

「マジ？　これ、かあちゃんがいつも、あ・・・」

「いつも、なんですか？」

「なんでもねえ」

「なに？　言って」

「怒んねえ？」

「内容によりますけど、多分怒らないと思います」

「マジ？」

「なに？　言って」

「ホワイトデーってあんじゃん」

「はい」

「あんとき、かあちゃんがいつもこの三個入りのガバッと用意して持たされた」

「エーーーーーッ」

「や、あの、だから、今年の二月までの話でさ」

「ここのをお返しでもらえるなら、あなたにチョコ贈ります」
「えっ マジ？ そんなにも愛里くれなかったじゃん」
「あなたの存在も知らなかったのにどうやってあげるの？」
「存在も知らねえとか言うなよ」
「だって本当だから」
「そんじゃ、来年はくれる？」
「あなた、チョコ苦手ですよ」
「そういうの関係ねえじゃん」
「玄関に立ったまま話してるなら中に入ってください」
「いいの？」
「はい」
リビングのソファに座って、愛里がチョコの箱のフタ開けた
「六個入り、真っ赤なハートが二個入ってる」
なんか少し元気になったみてえでよかった
「握りメシ持ってきたんだけどさ、他にもなんか作ろっか？」
「あんまり食欲ないから、おむすびだけで、ありがとうございます」
「そっか、んと、風呂入ったんだよな、風呂掃除してくる」
「寝る前にまた入るからいいです」
「そっか、そんじゃ、なんかして欲しいことねえか？」
「特にはないです」
「そっか、そんじゃ、んっと・・・ 横、座っていっかな」
「え？ はい」
愛里がズリッと横に移動して 俺は愛里のすぐ横に座って
「手えにぎっていい？」
「もうにぎってますよね？」
「あ、うん、それでもさ、いちおう」
「なに？ なんか、どうしたの？」
愛里が寝るとき 俺の手えにぎったまま 俺のこたさ
「夕方、あなたが来たとき」
「ん？」
「私、何か言ってました？」
「へ？」
「あなたが来て、ベッドルームに連れていってくれたことは憶えてるんだけど、
痛いとか薬飲んだのとかポーッととしてて憶えてない」
憶えて ねえんか
「そういうときって、私、本音ぶちまけちゃうみたいで」
「本音？」
「前にママに、ママってチョー鈍感だよねって言っちゃったらしくて」
「マジ？」
「ママちょっとスネちゃって、でも私は憶えてなくて」

笑いそうになったからくちびる囁んだけどさ
「その顔は・・・私、何か言ったんですよね？」
「え、や、べつに」
「なに？ 言って！ 私、なんて言ったの？」
「え・・・あ、俺の靴下に穴開いてるって」
「あ、そうですか、なんでそんなの見てたんだろう」
ポケ〜ツとした顔がメッチャ可愛い
「あ！ だから？」
「え、なに？ どした？」
「起きたら、なんか臭くて」
えっ
「あなたの靴下の臭い？」
「愛里ごめん、マジごめん、俺、自分じゃあんまわかんなくてさ」
「いいです、慣れてますから」
「だからさあ、慣れんなよ」
「でも、あの靴下は限界だと思う」
「穴繕えば履けっからさ、洗ったし」
「穴だけじゃなくて足の裏のところも擦り切れてて」
「それでも裏んところはまだ穴開いてねえし」
「靴下の役割を果たしてませんよね」
「靴下の役割？」
「足の保護と保温」
「保温は今はいらなくね？」
「保護は？ あんなのじゃ長靴の中に砂とか入ったらケガしちゃう」
「あんま気になんねえけど」
「そうですか」
えっ 愛里が俺の手から手えスッと抜いた
「愛里、怒ってんの？」
「怒ってません」
「怒ってんじゃない、こっち見てくんねえじゃん」
「私は今日、あなたが働いてる工事現場に行きました」
「うん、来てくれた、とうちゃんにも動画見せてくれた」
「動画のことじゃないの！」
「あ、はい」
「砂利とか小石とかなんかいっぱい危ないなって」
「や、それは・・・」
やめところ 黙るところ
「長靴の中にあの尖った破片みたいなのが入ったらケガしちゃうって」
「あ、はい」
「そう思っただけです」

「そ、そっか、うん、わかった、穴開いてねえ靴下にすっから」
「あの靴下は？」
「あの靴下？」
「穴が開いて足の裏のところが擦り切れてもはや変色して白に見えない靴下」
「す・・・捨てます」
「本当？」
「捨てます」
「よかった」
愛里がやっと俺の顔見て
「あなたがケガしたらどうしようってええ」
えっ 泣いた
「あ、愛里」
抱きしめて
「ケガしねえようにすっから」
「はいいい」
「泣くほど心配させてごめんな」
「これは多分生理で感情ガッタガタなんです」
「あ、なんだ、そっか」
「約束してくれる？」
「なに？」
「あの靴下は絶対捨てるって」
「する、約束する、ぜってえ捨てる」
愛里がやっとニッコリした
さよなら 俺の靴下
あんくれえになると逆に馴染んでいいんだけどさ
それでも 愛里と約束したからさ 成仏してくれ

靴下

家戻ったら、作業着も乾いてて

靴下 捨てねえと

キッチンのゴミ箱に・・・ 捨てねえと

「ダイチ、どした？」

「とうちゃん・・・ 靴下捨てねえとなんだよ」

「なんで？」

「愛里と・・・ 約束したから」

「約束？」

「愛里が、この靴下はもう限界だから捨てろって」

「そっか？ まだ履けんじゃねえか？」

「それでも愛里と約束したからさ」

「そんじゃ俺が履くからよ」

「マジ？」

「まだ全然履けんだろ」

「そんじゃさ、指んとか穴開いてっから、俺縫うからさ」

「捨てなさい！」

かあちゃん

「そんなもの捨てなさい」

「かあちゃん、それでも、これまだ」

「それはもう靴下ではない」

「靴下だろ」

「汚物」

「おぶ・・・」

「だいたいそれは、3足でいくらだっけ？」

「5足で680円」

「私はそれくらいは稼いでいると思うけど？」

「だから、かあちゃんの金を大切に」

「私のお金で買ったのなら私が捨てる捨てないを決める権利があるわよね」

「え・・・ まあ」

「捨て・て・な・さ・い」

とうちゃんと そ〜っと顔見合わせて

「聞こえなかった？」

「聞こえた、聞こえてます、捨てます」
とうちゃん 捨てるよ？ って目で言ったら うんうんて目で
「ほら、早く」
さようなら 俺の靴下 今までありがとう
恨むならかあちゃんを恨んでくれ
ゴミ箱にそっと入れたら かあちゃんがゴミ入った袋ゴソツとつかんで
「あんたたちにまかせてたらまた拾う」
ドキッとしてとうちゃんの顔みたら とうちゃんも、あって顔してて
「捨てて来る」
すげえ早さで玄関ドア開けて 行っちゃった
「とうちゃん」
「俺の服も昔あんなカンジで捨てたからよ」
「そっか」
「だれか拾ってくれたらいいな」
「だよな、昔のとうちゃんみてえにさ」
「あの頃、あれ見つけたら嬉しかったな」
「そっか、そういうことだよ、とうちゃん」
「あ？ なんだ？」
「きっとあれは、昔のとうちゃんみてえな人のためになんじゃねえかな」
「そっか、そんじゃありがてえな」
「ありがてえ？」
「あ、見つけた気持ちになっちゃった」
とうちゃん、おもしれえ
「やっぱよ、俺みてえなんにとっちゃありがてえよ」
「そっか」
「ゴム長見つけたときもよ、嬉しかったな」
俺は 世間ではゴミとされるものを大切に思うとうちゃんが好きだ
ゴミなんてねえんかもしんねえって思えてくる
「俺なんかだよ、こんなリッパな服着せてもらってよ」
とうちゃんが今着てるのは一枚 355 円の白 T とひざんとこかあちゃんが繕ったスエット
とうちゃんが 355 円の T シャツ見つけてきたときにはさすがだって思ったな
俺はまだまだだなっつかさ
「美里のおかげだな」
「まあ、うん、だな」
とうちゃんの結論はいつもかあちゃんのおかげになるけど
たしかにそうだな かあちゃんが稼いできてくれるからでさ
だから俺やとうちゃんは大切にさ まあしゃあねえけど

シャワー終わって

愛里 寝てっかな
『愛里』送信
『寝てたらごめんな おやすみ言いたかっただけだから』送信
あ 既読ついた
ピコン
『起きてます』
ピコン
『さっきまたお風呂に入りました』
そっか よかった
『靴下捨てた』送信
ピコン
『本当に?』
『かあちゃんに聞いてもいいよ』送信
ピコン
『私あなたに悪いことしたかなって』
悪いこと?
『なに?』送信
ピコン
『あなたの信念を無理やり曲げさせちゃったかなって』
信念?
ピコン
『なんか ごめんなさい』
いやいやいや 愛里
『信念なんてねえから』送信
『捨てどきがわかんねえだけだから』送信
ピコン
『捨てどき?』
『着ればいっつうか そんだけで』送信
『いっつもかあちゃんに捨てられてっから w』送信
『あの靴下 かあちゃんに汚物って言われた w』送信
ピコン
『ごめんなさい 声出して笑ってしまいました』
いいよ、笑ってくれよ
『愛里に笑ってもらったら嬉しいからさ』送信
ピコン
『でもあの靴下は危ないから』
『愛里が俺のこと心配してくれて嬉しかった』送信
『これからも捨てどきは愛里がおしえて』送信
ピコン
『そんな重責は負えません』

重責？ んなたいそうなもんじゃねえよ
『愛里が捨てろつつたら捨てるだけだから』送信
ピコン
『あの赤いTシャツも？』
『愛里が捨てろつつうなら捨てる』送信
ピコン
『あれはもうあなたのトレードマークみたいな気がするから』
トレードマーク？ や、あれが俺のトレードマークつつうのは
ピコン
『気のすむまで着てください』
気のすむまでって 愛里はおもしれえな
『一生着ててもいいの？ w』送信
ピコン
『Tシャツという原型をとどめているかどうか私は責任取れません』
『責任取らせねえから www』送信
ピコン
『安心しました』
『靴下捨てる時 とうちゃんが誰かが拾ってくればいくなって』送信
『昔のとうちゃんがあれ見つけたら嬉しいだろうなって』送信
あれ？ 既読ついてっけど 返信がねえな 寝ちまったかな
ピコン あ、来た
『ちょっと感動しちゃった』
感動？
ピコン
『あなたのおとうさんにとってゴミなんて存在しないのかもしれないって』
ピコン
『いらなくなった発泡スチロールの箱とかペットボトルとか』
ピコン
『あなたのおとうさんの手にかかったらゴミじゃなくなる』
愛里も 俺とおなしこと感じてくれてる
ピコン
『それを捨ててなんて言ってごめんなさい』
『かあちゃんは汚物つつったんだから w』送信
ピコン
『汚物とは思わないけど w』
ピコン
『あの靴下はやっぱ危ないから』
『うん、ケガしねえように気をつけるよ ありがとう』送信
ピコン
『明日はあなたはお休みですよ』

『休みっす』送信

愛里と一日中一緒にいれるよ

ピコン

『明日は 私のことは気にしないで』

ピコン

『あなたは好きなことしてください』

好きなこと？

ピコン

『私は使いものにならないと思うので』

ピコン

『せっかくのお休みですから』

『俺は愛里といればしあわせっすから』送信

ピコン

『おそらく寝て起きてまた寝てばかりだから』

『それでいいよ』送信

『俺のことは気にしなくていいからさ』送信

ピコン

『あなたも私と同じ高二で明日はバイトの休みなんですから』

ピコン

『私に縛られないであなたがやりたいことをしてほしい』

縛られるってなんだよ

『俺は愛里に縛られてねえし』送信

『俺が愛里のそばにいてえだけだよ』送信

ピコン

『あなたはいつもそうですね』

いつもそうって？ え、もしかして

『うぜえ？』送信

ピコン

『ウザイ』

えっ マジ？

ピコン

『ウソ w』

なんだよおお 愛里いい ビックリすんじゃーん

『俺泣きそうになった w』送信

ピコン

『笑う www』

ピコン

『そろそろ寝ます』

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

明日は 休みだああああ

愛里のそばにずーっといられる

俺も寝よう

日曜日の朝

今日も天気いいな これならゴム長洗えるな
浴室で洗って、古タオルで中拭いて、ゆうべゴム収集場から持ってきた新聞紙
これ詰めて ベランダで日陰干し
「ダイチ」
「どうちゃん、おはよう」
「ゴム長洗ったんか」
「天気いいからさ、これなら明日までに乾くんじゃねえかな」
「詰めた新聞紙取り換えんだろ？」
「うん」
「そしたらよ、詰めたのもらっていっか？ 窓拭きてえからよ」
「全然いいよ、つか、俺も窓拭き手伝うよ」
「ダイチはアイリちゃんとのやった方がいんじゃねえか？」
「あ、だな、やる」
愛里んとは・・・俺のゴム長に詰めたやつじゃなくてこっちの新しいのだな
愛里起きてっかな 寝てる間にバスルーム掃除しとくか
それと洗濯とリビングの掃除、掃除機は愛里が起きてからにして
「どうちゃん、卵とパンと牛乳もらっていっかな」
「アイリちゃんの昼メシ用なら、昨日アイリちゃんとの冷蔵庫に入れといた」
「どうちゃん、さすがだよ、ありがと」
「ダイチ、休みの日くれえゆっくりしろよ、買い物は俺行くからよ」
「大丈夫だよ、愛里は多分今日はほとんど寝てると思うからさ」
「そっか、少しは楽になってるといいけどな」
「二日目だかんな、辛れえんじゃねえかな」
「んっつとによ、女の人はずげえよな、大変な思いしてよ」
「だよな、生理痛ってさ、男は耐えらんねえんだってさ」
「陣痛と出産もだってよ、昔両親学級で教わった」
「俺たちなんもできねえな」
「だよな」
「そんじゃ、愛里んどこ行ってくる」
新聞紙持って愛里の部屋に向かった

どうする？ ドアホン鳴らす？ 寝てっかもしんねえよな

愛里、入るよ 鍵開けて そーーっと

「不法侵入者」

あっ

「おはようございます」

「ごめん、愛里寝てると思ったからさ」

「いいです、大家の息子の特権ですから」

「ごめんって」

「本当にいいです、起きたらあなたがいるってことには慣れてますから」

「え、あ、そっか」

愛里、昨日よか顔色いいな

「愛里、具合は？」

「昨日より楽になりました」

「そっか、よかった、そっか」

「一日目があんなにキツイの初めてだった」

「顔色メチャ悪くてさ、手も冷たかったしさ」

「今日は出かけたいです」

「そっか、え、大丈夫か？」

「はい、部屋の中にばかりいると息が詰まりそうだから」

「そっか、そんじゃ気をつけてな」

「あなたも一緒に来てくれませんか？」

「俺？ いいの？」

「いいのって、はい」

「んっと、そんじゃ風呂掃除して、そんで出かけっか」

「その恰好で？」

「え？」

あっ 赤いTシャツに緑のジャージ

「あ、そ、そんじゃ、風呂掃除して、シャワー浴びて着替えてくっから」

「はい、私も着替えますから」

「んっと、その前にサンドイッチ作っから」

「外で食べませんか？」

「え？」

「軽く、たまには」

デートじゃん

「おう、外、おう」

「それじゃ、私は着替えます」

「そんじゃ俺は風呂掃除すっから」

愛里とデートできるなんて思わなかったあ！

おっし、風呂も洗面台もカンペキきれいになった

シャワー浴びて着替えてくっか

どれを着ればいいんだ？

あ、かあちゃん

「かあちゃん、ちょっと来てくんねえかな」

「なによ？」

「愛里と出かけただけだよ」

「愛里さん、もう大丈夫なの？」

「うん、愛里が出かけてえつつって」

「そう、いってらっしゃい」

「や、あのさ、どれ着ればいっかな」

「好きなのを着たら？」

「助けてください」

俺の顔ジロッと見てため息ついて

「愛里さんは何を着ていくの？」

「わかんねえ」

「出かけるって愛里さんが言ったということは・・・ 多分ワンピね」

かあちゃんが俺のクローゼットから

「ジーパンはこれ、Tシャツはこの白、靴下は、安い方じゃなくてこっちの白」

「あ、はい」

「スニーカーは前にシンシンのところに行ったときのね」

「はい、ありがとうございます」

「ほら、髪やるわよ」

「かあちゃん、愛里はジェル嫌れえなんだよ」

「嫌いじゃないわよ」

「前にシンシンおじちゃんどこでジェルつけられたときもさ」

「いいから来なさい」

バスルームの洗面台とこでひざまずかされて

「かあちゃん、愛里、俺がジェルつけてっと逃げっからさ」

「照れたのよ」

「なんで照れんだよ？」

「あんたがかっこいいから」

「かあちゃんさ、なんでそう俺のことイジってばっかいんだよ」

「イジってるつもりはないけどね、はいできた」

「そんじゃ、いってきます」

「いってらっしゃい」

愛里用の財布持って 愛里の部屋へ走った

ドアが開いて

愛里 メッチャきれい 薄い水色? ワンピ メッチャ似合ってる

「愛里、きれい」

「これは、ニューヨークで買ってもらって」

なんか 愛里、また後ろ下がってね?

「夏用だから今着ないと来年まで着れないかなって」

「あっ、俺がバイトしてばっかで出かけらんねえから、ごめんな」

「そういう意味じゃないです、いいんですバイトしてください」

「愛里、マジきれい」

「行きましょう」

なんか目え合わせてくんねえんだけど

「愛里」

ドア開けようとする愛里に くちびる離したら

「なんか・・・ 見慣れない」

「へ? なに?」

「最近のあなたは作業着かデロンとした服で」

デロン?

「そのコーデ、おかあさんですよ」

「え、ああ、うん」

「さすがです」

「そっか」

「行きましょう」

「おう」

愛里の手えにぎって

「具合悪くなったらさ、ぜってえすぐに言えよ」

「はい」

「そんで、どこ行きてえの?」

「えっと、まずは駅に」

「おう」

駅に向かうバスに乗って デートだ!

駅前のカフェ

「ここで軽く食べますか?」

「おう」

中に入ると

「お二人様ですか」

「はい」

「窓際のお席どうぞ」

いいじゃん窓際

「あの、私、ちょっと、トイレに」

「おう、そんじゃ俺、先に座ってっから」
「はい」
久しぶりだあ 愛里とカフェ
愛里大丈夫かな ダメですぐ戻るとしてもさ俺は全然いいかな
「あのお、森下先輩ですよ」
え？ 誰？
「私、同じ高校の一年の」
なんだ突然？ 知らねえんだけど
「よかったらあ、ご一緒してもいいですかあ」
「俺、デート中だから」
「えっ もしかして上原先輩と？」
「そうだけど」
「えええ、噂本当だったんですね」
なんの噂か知んねえけど
「すごいショックなんですけど」
なんなんだ？ 愛里まだかな あ、いた なんで立って見てんだ？
「愛里！」
愛里がちょっと戸惑ってるみてえなカンジで
「愛里！」
「それじゃあ、私は失礼します」
「あ、おう」
愛里来た来た
「初めて見ました」
「なにを？」
「あなたがモテてる現場」
「ハ？」
「あなたがモテるのは知ってるしあなたもモテる自覚はあるけど」
愛里は俺のカノジョだろ
「やっぱりあなたってモテるんですね」
「俺は愛里っきゃねえから」
「そういうことじゃなくて」
「どういうことだよ？」
「あなたと一緒にいると、あなたがモテるってこと忘れるっていうか」
「んなことどうでもいいだろ」
「外見と中身のギャップがすご過ぎて忘れちゃうっていうか」
「俺の中身ってどんなだよ？」
「なんか、おもしろいです」
「おもしろえ？」
「モテるとかそういうのを超越しちゃって、ええっ泣くう？ とか」
そこ・・・

「あなたのおかあさんの言葉を借りれば、汚物と化した靴下を」

「愛里、捨てた、ちゃんと捨てたから」

「そういうところが・・・ いいです」

「いい？」

「はい、注文しましょう」

「愛里だってさ、外見と中身メッチャ違えつつうかさ、どっちも好きだけどさ」

「私はいたってふつうのありふれた人間です、注文しましょう」

「ありふれてねえから」

「何食べるっ？」

「あ、はい、ミックスサンドで」

愛里がスタッフさんにちこっと手で合図した

たまんねえよ いちいち最高っすよ

指輪のお店と休みの現場

俺と愛里は今 俺が働いてる現場近くの通りを歩いてる
カフェで「どこ行きてえ？」って聞いたら
「あなたがバイトしてる工事現場」
「ハ？ 昨日来てくれたよな」
「昨日はチラッとしか見れなかったし」
現場にそんな興味あんの？
「確かめたいことがあって」
「確かめてえってなにを？」
「行ってから話します」
俺はいいんだけどさ、現場なんか行って楽しいか？
それでも愛里が行きてえつつあったから来てんだけど
愛里が立ち止まった
「ここ」
「え？」
あっ 愛里の指輪買った店
「私の指輪のブランドショップですよ」
「なななんでわかんのか？」
「ボックスのロゴで」
すげえな なんかここでわかったまうんだ
「ここって若い女性に人気のブランドなんです」
「へえ」
「高過ぎず、でも安過ぎず、デザインが品があって」
「そっか」
「あなたのおかあさんが選んだんですか」
「店はな、店は、その指輪は俺が選んだから、マジだから」
「はい、それは信じてます、おかあさんもそう言ってたから」
「おう」
「あ・・・」
愛里の顔がちょっと歪んで
「あの、私、ちょっと、トイレに」
「そ、そっか、んと」
現場の仮設トイレは ダメだな汚ったねえもんな

「このお店って、トイレ貸してくれるでしょうか」
「あ、ちょ、ちょっと聞いてみっか」
愛里と一緒に中に入った 途端
「いらっしゃいませ」
ニコニコしてっけど この人 前来たときメッチャ冷てえカンジだったよな
「あの、すみません、トイレをお借りしてもいいですか」
「はい、そちらの突き当りにございますので」
「ありがとうございます」
愛里が小走りで向かってった
「何かお探しですか」
「え、前にここで指輪買って」
「それはありがとうございます」
俺のこと忘れてんのかな お客いっぱい来るからな 憶えてらんねえよな
「お客様」
あ、店長さん
「その節はお買い上げありがとうございます」
憶えててくれた
「あんときはありがとうございます」
「お相手の方にはお気に召していただけましたか」
「はい、すげえきれいだった」
「そうですか、それはよかったです」
愛里が戻ってきた
「愛里、こっちこっち」
愛里がキョトンとして傍にきた
「この店長さんが、指輪買うとき親切にしてくれてさ」
「あ、これを、あの、とてもステキで気に入ってます」
愛里が指輪つけてる手を見せた
「お客様の指が細くてきれいでいらっしゃいますから映えますね」
「え、あ、ありがとうございます」
「本当によくお似合いです」
「そうっすよね、店長さんのおかげっす」
「お客様がお選びになって、私はほんの少しお手伝いさせていただいただけです」
「俺のこと、まともに相手してくれたじゃないすか」
店長さんが穏やかな顔のまま、ちょっと小首傾げた
「俺、仕事の合間で汚ったねえ恰好だったのに、まともに相手してくれて」
「大切なお客様ですから」
かあちゃんは店長さんが出世するかヘッドハンティングされるっつってました
「今日は何かお探しですか」
「あ、すみません、トイレ借りにきただけで」
「お役に立ててよかったです」

愛里の方見て微笑んでくれた

「ありがとうございます、助かりました」

「いつでもお寄りになってください」

「店長さんにお礼言えてよかったっす」

「こちらこそ、素敵につけてくださっているのを拝見できて嬉しいです」

「そんじゃ・・・」

愛里を見たら、なんか目えキラキラさせてショーケースの中見てる

「私、ここのデザイン好きなんです」

「それは、嬉しいお言葉ありがとうございます」

そっか、ここのが好きだったんか よかったあ

「よろしければ、あちらのコーナーもご覧になりませんか」

「え、いえ、あの、買うつもりはなくて」

欲しいのあったら買うよ 愛里 俺、金持ってきてっから

「ご覧になるだけでいいんです、デザインがお好きと言っていたので」

「それじゃ、見せていただきます」

「こちらです」

奥の真ん中のショーケースとここに案内された

「こちらは婚約指輪と結婚指輪のコーナーです」

「えっ、こっ、けっ、や、そ、それはまだ早えっつうか」

「将来の参考のひとつとしてご覧いただければ」

「そ、そうっすか」

愛里の方見たら もうショーケース覗いてた

やっば女の子だな 一生懸命見てんのがメッチャ可愛い

「これ・・・ステキ」

え？ どれ？

「こちらは Moon Light というデザインで」

男性用 11 万 8 千円で女性用が 11 万 千円 正直、俺、貯金おろせば今買える

「なにげない一時もほんの小さな出来事も二人だと世界の全てが輝き始める」

え？ メッチャピッタリじゃん

「そのようなコンセプトを元にデザインされております」

「とってもステキなコンセプトですね」

「ありがとうございます」

「私、結婚指輪にそんなコンセプトがあるって知りませんでした」

「それぞれのカップルに合ったコンセプトをご用意させていただいております」

「そういうのいいですね」

「つけてみませんか」

「え、いえ、あの」

「ご自由にお試しください」

店長さんがニッコリしてそう言った

「え、あの」

愛里が俺の顔見たから 俺は目でつけてくれって
「それじゃ、ちょっとだけ・・・」
「こちらは7.5なのでお客様には少し大きいですけど」
愛里のサイズ憶えてんだ すげえな
愛里がおそろおそろってカンジで指輪を手にとって右の薬指に
おおおお メッチャきれい
「お客様の指がおきれいなので指輪がより美しく見えますね」
そうっすよね そうっす
「ありがとうございました」
愛里が指輪外して元に戻した
「これからも気軽に遊びにいらしてください」
「あ、遊びに？」
「こういった店ですと、ご購入のときだけというイメージがありますが、
私どもはいろいろと見ていただくだけでも嬉しいですから」
「そ、そうすか、そんじゃ、また来ます」
いつか 将来 なんつうか その結婚指輪
「お待ちしております」
店を出て 愛里と手えつないで
「ステキな店長さんですね」
「だろ？ 俺が行ったときもすげえ親切にしてくれてさ」
「汚い恰好って言っちゃいましたけど、作業服ってこと？」
「うん、昼休憩んときに行った」
愛里が俺の顔見て フツて笑った
「え、ちょ、なんで笑うの？」
「工作中なのに買ってくれたんですね」
「愛里が帰ってくるまで休みの日なかったからさ、そんで」
「なんか・・・余計に嬉しい」
「え、マジ？」
「仕事でも私のこと考えてくれてたんだなって」
「俺、いつも愛里のことっきゃ考えてねえから、頭ん中全部愛里だから」
「そうですか」
「マジだから」
「行きましょう」
「おう」

休みの日の現場は 静かで誰もいなくて 俺も初めて見る
愛里は出入口から中を覗き込んでる
なんでここに来たかったんかな
「あの」

「ん？」
「あなたのおとうさんが」
「どうちゃん？」
「森下？」
え？ あっ
「監督」
「誰かと思ったよ、全然違うからさ」
「監督何してるんすか？」
「森下こそ何してるんだよ」
「俺は、あ、んと、監督、俺のカノジョの上原愛里さんす」
「は・・・はじめまして」
愛里が下向いてお辞儀して そっか、人見知りだもんな
「あっ ロールケーキのカノジョ？」
「そうっす」
「あれ美味しかったよ」
「え、あ、あの、ありがとうございます」
「デートにこんなとこ連れてくるなんてさ」
「や、彼女が見てえっつって」
「あ、あの」
愛里？
「か、か、監督さんに見ていただきたいものがあるんです」
へ？
「なにかな？」
愛里が携帯出してっけど
「も、森下・・・くんのおとうさんが」
どうちゃん？
「ここの袋の」
「セメント袋だね」
「この近くのこの、砂利？ 小石？ これがあると、疲れてるとこれでよろけて」
「ああ、そうだな、昨日の午前中だっけ？ 誰かがぶちまけたんだよな」
「え、あ、そっすね、俺らで片付けたんすけど時間なくて」
「ありがとう、明日ちゃんと片付けるよ」
「私じゃなくておとうさん、あ、それと、この・・・」
愛里がまた監督に動画見せて、どうちゃんが言ったつつうこと伝えてる
どうちゃん、あんな短けえ動画でよく気づいたな すげえよ
「すごいね、森下のお父さん、よくこんなところまで」
そうすよね、俺もすげえと思ってる
「森下のお父さんは、今は専業主夫だったよね」
「はい」
「そうか」

監督がなんか考えてっけど

「あの、そんじゃ俺たちは」

「ちょっと待って」

「え、はい」

「明日さ二人抜けるだろ、yunboとクレーンの実技と筆記で」

「そうすね、ヤッさんが月曜はギリで大変だっつってました」

「森下のお父さん、明日だけでも働いてくれないかな」

「へ？」

「できれば丸一日がいいんだけど、午前か午後の4時間でもいいからさ」

「と、どうちゃんすか？」

「現場経験あるんだよね」

「若けえ頃っすけど」

「どうかな」

「え、あ、んと」

愛里が俺の袖引っ張って

「電話してみたらどうですか？」

「電話？ あ、今、ちょい電話してみます」

「頼むよ」

どうちゃん なんかわけわかんねえことになってっけど どうする？

「ダイチ、どした？ なんかあったんか？」

「どうちゃん、あのさ、明日、現場でさ」

「どした？ なんかあったんか？」

「あの、なんつうかさ」

「森下、俺と代わってくれる？」

「あ、はい、どうちゃん、今さ、俺の現場の監督と代わっから」

携帯を監督に渡した

監督が説明してっけど どうちゃんやるかな どうなんかな

愛里の顔見たら ニッコニコしてっけど

ちょっと俺の頭がまだ状況把握できてねえっつうか

「はい、それではよろしくお願いします」

監督？

「決まったよ」

「えっ」

「途中で森下のお母さんと話をしてさ」

かあちゃんが出たか

「森下のお母さんは切れ者だね」

「そ、そうすか」

「すぐに状況把握してくれて、スパンと決めてくれたよ」

かあちゃんが決めたんか その方がいいっちゃいっか

「明日、丸一日いいってさ」

「マジっすか？」
「助かるよ、募集かけてるんだけど、再来週から盆休みだからなかなかさ」
「んっと」
「もちろん日給は払うよ」
「あ、はい」
「急をお願いしたから3万」
「さ、3万？」
「森下のお母さんにもそれは伝えておいたから」
とうちゃん よかったな 若けえ頃の月給分じゃん
「監督、ありがとうございます」
「こっちこそだよ」
ヤベ 泣きそうだ
「そんじゃ、明日とうちゃん連れてきます」
「頼むよ」
「はい」
「それじゃ明日」
監督が手えあげて通りの向こうに歩いていった
「よかったですね」
愛里
「愛里のおかげだよ」
「私はおとうさんがあなたに伝えてほしいって言ったことを」
「愛里」
抱きしめて
なんか なんかとうちゃんのリベンジみてえな そんな気いして
「私のこと抱きしめながら泣いてますよね」
「泣いてねえよ」
「鼻をすする音がしますけど」
「埃で鼻水出ただけだよ」
「泣いてる場合じゃないです」
「泣いてねえって」
「おとうさんの作業服買わないと」
「ハ？」
「お父さんの唯一の作業服は今あなたが着てるんですよ」
「それでもさ、一日だけだから、なんでもいっつうかさ」
「ケガしたらどうするの？」
「え？」
「長袖のTシャツ、おとうさん持ってますか？」
「かあちゃんが買ったブランドの」
「そんなの現場で着るの？」
「着ねえか」

「行きましょう」
「どこに？」
「作業服売ってる店」
「や、愛里はさ、生理なんだから、んなムリすんなよ」
「あなたが買うの？」
「愛里のこと送って、そんで行ってくっから」
「あなたに任せたら、安いからって上は赤で下が緑とか」
「赤と緑は買わねえ、約束する」
「それじゃ、たとえば白が千円で赤が 500 円だったら？」
「え・・・」
「やっぱり行きましょう、私は大丈夫です」
「そんでもさ」
「おとうさんが着終わったら、あなたが着ればいいでしょ」
「え？」
「作業服の着替え、持ってなかったんがら」
「そっか」
「行きましょう」
「愛里、ありがとな」
「お礼はいいです、さっさと行きましょう」
「おう」
電車乗ってバス乗って ホームセンターに向かった

とうちゃんの作業服

「ここが・・・あなたとあなたのおとうさんの聖地なんですね」

聖地？

「どこに何があるんですか？ 私にはわかりません」

「んっと、作業ズボンは右の奥で、Tシャツはもうちっこっち側」

「ホームセンターを把握してるんですね」

「あんま場所変わんねえからさ」

「どっちからにしますか？ズボン？Tシャツ？」

「どっちでも」

「私が決めるの？」

「あ、や、んじゃ、ズボン」

「行きましょう」

作業ズボンのコーナーで愛里がどンドン奥に入ってく

手前の方がセールで安いんだけどな

「これは？」

愛里が手にしてんのはジーンズ？

「驚くほど水を防ぐって書いてますよ」

いくらだ？ 3,900円？

「高っか」

「そうですか、ジーンズ素材でかっこいいと思ったんですけど」

「明日一日だけだからさ」

「その後あなたが着ますよね」

「そんでもさ」

「わかりました、そうですよね」

「そうですよねつつうのは？」

「どこに安いのがあるの？」

「え、あの、こっち」

手前の方っす

「セール、そうですよね」

愛里がメッチャ手早くシャッシャッシャッて見ていく

「これは？」

「紺は暑っちいんだよな」

「ああ、夏だから、そうですよね、濃い色は暑いですね」

「うん、あの、ごめん」
「なんで謝るの？」
「や、せっかく愛里が」
「私は作業服に関してはシロウトなのでいいんです」
俺もプロではねえけど
「あ！ だからおとうさんベージュを買ってたのかな」
「だと思う」
「それじゃベージュ・・・ ありました」
1,890 円か 微妙な線だな
こっちは 980 円なんだけどな
「ド派手な水色？ 絵具みたいな水色？」
「や、その、ベージュで、お願いします」
「そうですか、取ってください」
「はい」
「次は長袖の T シャツですね」
「はい、そうっす」
長袖の T シャツコーナーで 愛里、腰さすってっけど
「愛里、辛れえんじゃね？」
「大丈夫です」
「あんまムリすんなよ」
「辛かったら言います」
「ぜってえだぞ」
「はい」
愛里がまたシャツシャツシャツて
「このカーキの胸のところにジップ付きポケットが付いてるのは」
「あ、え、なに？ これ？ これがいいんか？」
「ベージュのズボンに合わせるとオシャレだとは思いますがけど」
オシャレ
「2,750 円だからダメですよ、色も濃いし」
「ダメっつうか・・・」
「そうしたら、こっちの 980 円の紺か黒か白しかないのになりますけど白ですね」
980 円 こっちは 398 円か
「オレンジ？ メッチャなオレンジ？」
「や、その、白で」
「あなたのその」
愛里が顔歪ませてしゃがみ込んだ
「愛里、帰ろう」
「大丈夫です」
「大丈夫じゃねえだろ、しゃがみ込んでんのにさ」
「おとうさんの作業服買うまでは私はここから動きません」

「どうちゃんのは俺がまたここに買って買うから」
「あとはレジに持っていけばいいだけでしょ！」
「そんじゃ、んっと、あそこの椅子に座ろう」
愛里のこと壁際のベンチに座らせて
「痛み止め持ってきたか？」
「はい」
「水買ってくっから」
「ごめんなさい」
「謝んなよ、愛里は・・・とにかく水買ってくる」
自販機で水買って、愛里んところに走って持ってった
痛み止め飲んでまでさ んなさ
「愛里」
「大丈夫、本当に、昨日よりは大丈夫」
「ムリすんなったつたじゃん」
「あなたに任せられないからっ」
「え・・・」
「ド派手な水色とかオレンジとか」
「これ、ちゃんと、ベージュと白、買う」
「早く買ってきて！」
「おう」
レジで、2,870円会計して愛里んところに走った
「買って来た、帰ろう」
「靴下は？」
んなこと心配してさ
「どうちゃん持ってっから」
「そうですか、それじゃ、はい」
バスに乗る頃には、痛み止め効いてきたつつたけど
「愛里ごめんな」
「なにが？」
「愛里生理中なのにさ、ムリさせちまってさ」
「今日のスケジュールのすべては私が行きたいって言ったんです」
「そんでもさ」
「負けたくないの」
負けたくねえ？
「生理に負けたくない、だいたい負けちゃうけど」
「そっか」
愛里の肩抱いて
「愛里はすげえな」
女の人はずげえよ、すげえよな、どうちゃん

愛里は少し休むつつって
俺は買った作業服持って家に帰った
ドア開けたら どうちゃんが立ってた
「どうちゃん、ただいま」
「ダイチ、俺でいいんかな、あ、おかえり」
「監督がiiiつつってんだからさ」
「それでも、俺の脚」
「足場に上るわけじゃねえしさ、大丈夫だよ、監督知ってるし」
「そっか？」
どうちゃん不安そうな顔してっけど
「どうちゃんの作業服買ってきたよ」
「作業服？」
「愛里が買おうつつってさ、選んてくれた」
「一日っきゃ働かねえのによ」
「どうちゃん着たら、あとは俺が着っからさ」
「俺はなんでもいいからよ、ダイチが着ろよ」
「せっかくどうちゃんに買ったんだから着てくれよ」
「んなポツと行くだけでよ、んなリツパなの着れねえよ」
「ホームセンターで買った安いやつだよ」
「んじゃ、ダイチがこれ着ろよ、俺は今までダイチが着てんのにすっからよ」
「どうちゃん、せっかく買ったんだからさ」
「俺は、んな、新しいの、怖くて着れねえ」
「怖え？」
「ムリだ」
エーーーーッ ムリって
「そうね、ダイチが着なさい」
「かあちゃん、それでもこれはどうちゃんのために買ったんだよ」
「いくら？」
「んな高くねえよ」
「レシート出して」
「なんで？」
「いいから出して」
ったくよ、なんなんだよ
「ちょっと待ってて」
かあちゃんがベッドルーム入って、そんで出てきた
「3,000円、おつりはいらぬい」
「ハ？ いらねえよ」
「これは私が買った」
「ハァアアア？ 愛里が辛れえの我慢して選んてくれてさ」

「お金は誰が出したの？」
「俺に決まってんじゃない」
「だったら買い取る」
「買い取るって、んな問題じゃねえよ」
「ちょっとこっち来なさい」
俺の部屋？　なんだよ？
ドア閉めて　なんなんだよ
「カズオが怖いって言ったら、そこまでのよ」
「そこまで？」
「明日現場で働くっていうだけでもけっこうかなり激しく緊張してるの」
「マジ？」
「私にいちばん高いイチゴ買ってきてって言ったら、なんとか納得したけど」
「三万もするイチゴなくね？」
「カズオは明日の日給がいくらかは知らないの」
「え？」
「言ったら・・・怖がる」
「マジ・・・か」
「だから、作業服は、明日だけでもあんたが新しいのを着て」
「あ、わかった」
「ダイチ、ありがとう」
「え、や、俺はべつにどっち着てもいいけどさ」
「そうじゃなくて、現場の仕事、カズオが働けるようにしてくれて」
「それは監督だよ、とうちゃんが指摘したのがすげえって」
「現場の仕事は、カズオにとってトラウマでもあるけど、懐かしいのよ」
「懐かしい？」
「もう自分には絶対にできないと思ってたからね」
「やる必要は・・・ねえよな」
「ないけどね、なんていうの？　自信？」
「とうちゃん今でもすげえじゃん、いろいろすげえじゃん」
「そうは思っていないから、自分はクズだってずーっと言ってるから」
「だよな」
「それじゃ、作業服はそういうことでいいわね」
「わかった」
かあちゃんがドア開けて
「カズオ！　明日は古いの着てくれる？」
「おう、あれなら、おう」
俺は・・・　ちっと泣きそうになってる
かあちゃん、とうちゃんのことメッチャ思ってるじゃん
メッチャわかっててさ　あたりめえだけどさ
「とうちゃん！　俺、愛里が選んでくれた新しいの着るからさ」

「アイリちゃん喜ぶんじゃないか」

「おう」

とうちゃんの顔がやっとふつうに戻ってる よかった

とうちゃんと買い出しに行って

晩メシはカレーとポテサラ

愛里も食欲出てよかった

「明日の愛里さんが行く教室はどういうところなの？」

「龍生派の師範でふだんはお弟子さんたちに教えてるそうです」

「本格的なのを習いに行くの？」

「いえ、その先生は週に一度主婦向けのアレンジメント教室を開いてて、

この夏休み、若い人にも気軽にお花を楽しんで欲しいって、

なんかお試し？ そういうカンジでやるって書いてました」

「そう、気軽に楽しむっていいわね」

「あんまり期待しないことにしました」

「あら、どうして？」

「この前みたいになったら立ち直れないかも」

「あそこはどう見ても愛里さんに合わないところだっただけよ」

なんの話してんのか全然わかんねえけど

とうちゃんが俺の肩ポンポンて

「ダイチ、もう一杯食うか」

「あ、うん、俺やっからさ」

「俺やっからよ」

とうちゃん、なんか元気ねえっつうか

かあちゃん言ったみてえに現場はトラウマなんかな

「愛里さん、その教室って、私の会社まで電車で一本よね」

「はい」

「教室が終わったら、私の会社の近くでランチしない？」

「え？ あ、はい」

「たまにガレット食べたくなるの」

「私もガレット好きです」

「そうよね、前に一緒に食べたわよね」

「はい」

「ということで、私と愛里さんの明日のお弁当はいらないから」

とうちゃんと顔見合わせた

「明日の朝は、モッサイ男たちのおむすびだけ作りなさいよ」

「モッサイってさ」

「私と愛里さんは優雅にガレット」

「わかったよ」

愛里の花の教室の後は、俺の弁当でホッとしてもらいたかったけどな
そんでも、かあちゃんと二人で楽しくやってくれんのも嬉しいけどさ

参観日

晩メシ終わって

愛里とかあちゃんはリビングで楽しそうにしゃべってる

俺ととうちゃんはキッチンで え？

「とうちゃん、それさっき洗ったやつだよ」

「え？ あ、そっか、ボケ〜ッとしてんなあ」

とうちゃん、なんかずっと元気ねえ

やっぱかあちゃんが言ったみてえに現場はトラウマなんかな

「とうちゃん、現場の仕事、やりたくねえの？」

「あ？ 仕事もらえんなんてよ、ありがてえよ」

「なんか元気ねえからさ、買い出しんときもあんましゃべんねえし」

「んなことねえよ」

んなことあるよ、とうちゃん 今もまたさっきとおんなし鍋洗ってるよ

「そんでもよ」

とうちゃんが手を止めて

「俺なんかでいいんかな」

「だからさ、監督がとうちゃんを目配りがすげえって」

「俺がケガしたとき」

そこか？ とうちゃんはケガすのが怖えのか？

「大騒ぎになっちまってよ」

なるだろそりゃ、脚曲がなくなるほどの大ケガでさ

「みんなに迷惑かけちまってよ」

「とうちゃん、とうちゃんは脚曲がなくなるほどの大ケガさせられたんだよ」

「それは俺がヌケてっから」

「ちげえよ、ケチッていいかげんな足場組んでさ」

かあちゃんには言うなって言われてっけど

「とうちゃんのケガはとうちゃんのせいじゃなくて労災なんだよ」

「ろうさい？」

あ 労災わかんねえのか 労災の方向からはダメか

とうちゃんがやる気出してくれるには・・・

あ！

「とうちゃん、俺の幼稚園の参観日憶えてっか？」

「憶えてんにきまってるだろ、ダイチはいっつも元気だよ」

とうちゃんの顔がにこやかになった これか
「あんときさ、芋掘りあったじゃん」
「あったな、ダイチすげえ勢いで後ろにひっくり返っちまってよ」
「俺メッチャ泣いたよな、とうちゃんっつって泥だらけで抱きついてさ」
「可愛かったなあ」
「それで、あんとき、とうちゃん芋掘り手伝ってくれたじゃん」
「手伝うつつうか、一緒に芋掘りやっただけだよ」
「とうちゃんと芋掘りできて、俺メッチャ楽しかった」
「俺もダイチと一緒に芋掘りして楽しかったな」
「それだよ」
「それ？」
「明日は俺の参観日だよ」
「え？ あ？ なに？」
「俺が現場で働いてんのを見に来る参観日」
「や、それは、ちげえだろ」
「そんでさ、俺がヘマやったら、とうちゃん助けてくれよ」
とうちゃんが驚いた顔して俺を見てっけど
「そんでさ、俺と一緒にやってくれよ」
「ダイチと一緒に」
「俺、とうちゃんがいたらメッチャ心強えよ」
マジでさ
「とうちゃんとまた一緒におんなしことできるって楽しいよ」
「一緒に・・・」
「とうちゃん、俺のこと助けてくれよ」
「ダイチを」
「うん、俺ヘマばっかやってっからさ、助けてくれよ」
「そ・・・ そっか」
「とうちゃん、俺のこと、助けてくんねえかな」
「そっか、そうだな、そっか、ダイチのこと、そっか」
「とうちゃん頼むよ」
「ダイチのこと・・・ 助けりゃいいんか、そっか」
「俺がケガしねえようにさ、見ててくれよ」
「あ、だな、ケガ、そりゃ、わかった、とうちゃん見てっから」
「ケガしそうになったら助けてくれよ」
「助ける、ぜってえ助けっからよ、心配すんな」
「とうちゃんありがとう」
「そんくれえならな、とうちゃんもできっからよ」
「メッチャ心強えよ、とうちゃんいてくれたら安心だよ」
「そっか、ダイチのことは俺が守っからよ、心配すんな」
「ありがとう、とうちゃん」

俺は 泣きそうになってて
俺のことだとかんなに自分のこと忘れてかんなに
「それ・・・にさ、とうちゃん、かあちゃんのイチゴ買うんだろ？」
「美里がよ、高けえイチゴ買ってくれつつつてよ」
「そんじゃぜってえ買わねえとな」
「一パック千円のがあってよ、あれは俺にはムリだと思ってたんだけどよ」
とうちゃんの貯金なら、かあちゃんが一生食っても食い切れねえほど買えっけど
「それに俺、ずっと働いてねえからよ、一パック 500 円がギリだよ」
「そんじゃ明日の稼ぎで一パック千円の買えんじゃん」
「だな」
「かあちゃんメッチャ喜ぶよ」
「そっか？」
とうちゃん メッチャ嬉しそうな顔になった
「そんじゃ、明日は俺と一緒に現場行って俺のこと助けて」
「おう」
「そんで、帰りにかあちゃんのイチゴ買って帰ろうよ」
「だな、そうすっか」
「とうちゃんと一日中一緒にいれんなんてさ」
ヤベ また泣きそうになってる
「俺、すげえ嬉しい、嬉しいよ、とうちゃん」
「そっか」
とうちゃんが俺のこと抱きしめてくれて 俺、泣いてるしさ
「だな、ダイチと一日中一緒にいれんなんてよ、ここんとこなかったもんな」
「うん」
「とうちゃんも嬉しいよ」
「マジ？」
「ダイチといると楽しいからよ」
「とうちゃん」
俺の涙腺はぶっ壊れてんのかな
「そんじゃ、ダイチ、米研ぐか」
「だよな、明日はモッサイ男たちの握りメシだもんな」
「だな、多めに炊かねえとな」
とうちゃんと二人で米研いで もはや握りメシ屋レベルだな

愛里の部屋の玄関
「愛里、今日はありがとな」
「私、感動しました」
「なにに？」
「参観日」

「へ？」
「あなたのおかあさんと二人でこっそり聞いてて」
聞いてた？
「えっと、き、聞いてただけ？」
「聞いてただけです」
そっか 泣いてるところは見られてねえか
「あなたが鼻をすする音も」
泣いてたのバレてんじゃーん
「あなたのおかあさんが言うには、あなたがおとうさんの母性本能を刺激したって」
「母性本能？ 父性本能じゃね？」
「おかあさんは母性本能って言ってました」
「かあちゃんが？」
「赤ちゃんのときからおとうさんが育ててるから、もはや母性本能って」
「ああ、言われてみりゃ、まあ、そっかなあ」
「現場で働くってことより、あなたを守るってことに視点をずらしたから」
かあちゃん、どんだけ分析してんだよ
「おとうさんのやる気が出たって、あなたのこと褒めてました」
「褒めてるつつうかさ」
「あなたのおかあさんもすごいです」
「かあちゃんはどうちゃんのことよくわかってっからさ」
「明日のおかあさんと私のお弁当」
「え、ハ？ 弁当？ いらねえんだろ？」
「おかあさんは、おとうさんが明日の朝も緊張するだろうから、
あなたやおじさんたちのおむすびだけに集中させてあげたいって」
「え？」
「だからガレットなんです」
「だからガレット？」
「おかあさんのお弁当の心配しなくていいように」
そうだったんか
「だから私もガレット」
「愛里のは俺が作るんだからさ」
「あなたも明日はおとうさんに集中してください」
「や、そんでもさ」
「私はそうして欲しい」
愛里・・・
「それに、おかあさんと一緒にランチするのは本当に楽しみなんです」
「愛里、俺・・・」
愛里にまで気い使わせてさ
「あなたのおかあさんと話をするとすごく楽になるから」
「楽？ かあちゃんと話して楽？」

「私の感覚をすごくよくわかってくれるから」
愛里の感覚？ 俺は・・・ わかってあげてねえんかな
「ママは違うから」
「愛里のお母さん？」
「ママは私のことすごく可愛がってくれるし私もママは好きだけど」
愛里がなんか言葉探してる顔になって
「ん・・・ あ、やってみたら？ って言わないの」
「ん？」
「愛里ちゃんやらなくていいのよばっかり」
「それは、愛里のこと心配してんだろ」
「そうやってこの何もできない無能な私が出来上がりました」
「愛里は無能じゃねえよ！」
「あなたやあなたのおとうさんやおかあさんに会うまでは」
愛里がチラッと俺の顔見て
「そう思ってたけど、今は、少しはできることがあるかなって」
「メッチャあるよ、愛里はすげえよ」
「あなたも別の意味で私のこと甘やかしすぎるけど」
「甘やかしてんじゃねえよ、本当のこと言ってるだけだよ」
「そうですか」
「マジだって」
愛里のこと抱きよせて
「マジだから」
「私は・・・」
俺の腕の中で
「あなたや、あなたのおとうさんやおかあさんといると」
「うん」
「すごく、なんか、すごく自由で、ホッとします」
「マジ？」
「はい」
「愛里」
愛里が手で俺のくびるふさいだ
「だから、明日はおとうさんの番です」
「とうちゃんの番？」
「あなたといると、おとうさんは、なんていうか、お父さんというより、
えっと・・・ 男の子みたい」
「とうちゃん男だけど」
「そうじゃなくて、なんていうのかな、あなたと同級生の男子みたいな？」
「同級生？」
「キッチンで二人でくっだらしないことしゃべってたり」
「くっだらねえってさ」

「文化祭で焼きそば作ったときも、いつもそんなカンジ」

「そっか」

「明日はおとうさんとの時間楽しんでください」

「おう」

「それじゃ」

「ちょ、愛里」

「なに？」

「え、だから、あの、これ」

「やだ、なにそのタコの口？」

「タコの口じゃねえよ、キスしてえんすけど」

「え・・・」

俺は する そんで した

くちびる離したら

「あの、えっと、明日の参観日ががんばってください」

「あ、おう、がんばる」

「それじゃ」

「おう」

ドアが閉まって速攻で鍵閉まった

とうちゃん、明日二人で一緒に土掘りしような

下っ端仕事

顔洗って 昨日愛里が選んでくれた作業服着た

どう見てもペーパーの新人だな ペーパーの新人だけどさ

靴下も新しいのにした 新しいつつうか、そろそろ作業用かなって思ってたやつ

キッチン行ったら どうちゃん 作業服着てるどうちゃん

「どうちゃん、メッチャかっけえ」

ベテランつつうかさ、仕事できます的な？ 風格が違げえよな

「なにが？」

ポカンとしてっけど かっけえよ あれ？

「どうちゃん、靴下の指んところ穴開いてる」

「作業用だかな」

「そっか、だよな」

え？ いいんかな、愛里は足の保護って

「どうちゃん、俺のこれ、履けよ」

「んな新しいのいいよ」

「新しくねえよ、ほれ、指んところ薄くなってんだよ」

「靴下よかよ、握りメシ作んねえとよ」

「あ、だよな」

どうちゃんが次から次へとにぎってって

俺は冷ましてホイルにくるんで

「どうちゃん、幼稚園んときの遠足みてえだな」

「幼稚園の遠足、行ったなあ」

「家族で行けるようになって土曜日だったのにさ、かあちゃん出張でいなくて、

ねえちゃんは友だちん家に遊びに行くつつって、どうちゃんと二人でさ」

「だったなあ、それでも楽しかったな」

「俺も嬉しかった、どうちゃん一人占めできたみてえでさ」

「ひとりじめ？」

「いっつもかあちゃんやねえちゃんいたからさ、今日は俺だけってさ」

「二人で弁当食って遊んだな」

「そんでさ、他の子たちが寄ってきてさ、その子たちのお父さん弁当食って寝ててさ、

俺とどうちゃんが遊んでたら、僕も僕もってさ」

「ああ、だったなあ」

「俺、どうちゃん盗られるみてえな気いして泣いちまってさ」

「あ！ あんとき泣いてたのはそれなんか」
「うん」
「急に泣き出してよ、ケガしたんかと思ってよ、俺に抱きついてきて、
とられるとられるつつってっから、なに取られたんかなって」
「俺のヤキモチだよ」
「そっか、ヤキモチか」
「今日も俺がとうちゃんのこと一人占めだよ」
「そっか、ダイチが俺を一人占めか」
「メッチャ嬉しい」
「ダイチと二人で一日中いれんだもんな」
「おう」
保冷バッグ中、とうちゃんと俺のペットボトルと山ほどの握りメシ
スーパーの袋だったら三つは必要だったな
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「おう、とうちゃんもな」
「俺は大丈夫だよ」
「俺が握るから、ほれ、とうちゃん食えよ」
「そっか、ありがとな」
握りメシ食って、玄関でゴム長履いて
「とうちゃん、そのゴム長洗っというてよかったな」
「まさかよ、現場に履いてくとは思わなかったけどよ」
二人で現場に向かった

とうちゃんが現場見渡してる
「とうちゃん、監督に挨拶しよう」
「あ、おう」
監督室の扉開いて
「失礼します」
「森下？」
監督がこっち見て
「えええええ」
ええってなんだ？
「そっくりだね」
あ、それ？
「しかも」
とうちゃんを手で指して
「お父さん？」
俺に聞いたから
「そうっす」

「いつも森下が着てる作業服着てるからさ、頭が混乱したよ」
とうちゃんはオドオドして下向いてて
「とうちゃん、挨拶」
「あ、んっと、も、森下一男ですっ」
小学一年生みてえな自己紹介でおもしれえ
「カズオさん、今日はよろしく」
「あのお、んっと、俺・・・俺はよお」
とうちゃん、どした？
「下っ端仕事っきゃやったことねえからよ、下っ端仕事っきゃできねえんだけど」
「いいね」
監督？
「助かるよ、下っ端仕事、お願いしますよ」
「え、あ、お、おう、そんじゃ、はいっ」
とうちゃんがホッとした顔になった よかったあ
「あのお」
とうちゃん、まだあんのか？
「俺の脚、こんなんだけどよ」
「それは息子さんや奥さんから聞ってるよ、思ってたより動くじゃない」
「曲がんだけどよ、ここまでっきゃ、そんで正座はできねえ」
「正座はさせないよ、ハハハ」
「あ、そ、そっか、そんじゃ」
「でもムリしないでね、辛くなったら休んでいいから」
とうちゃんがペコッペコッて頭下げた
「にしてもさ」
「なんすか？」
「声までそっくりだね」
「よく言われます」
「今日はおもしろくなりそうだな」
なにがだ？
「それじゃ、森下親子、今日一日よろしく」
「よろしくお願いします」
監督室出て
「とうちゃん、よかったな」
「下っ端仕事ならよ、できっからよ」
「俺も下っ端だけどさ」
「二人で下っ端か」
「だな」
「ダイチ、便所はどこだ？」
「便所？ あっちの角んところにあるよ」
「そっか、そんじゃ」

とうちゃん緊張してションベンしたくなつたのかな
待ってんだけど とうちゃん遅えな ウンコか？
「あれ？ だいづかぁ？」
「ヤッさん、おはようっす」
「今ぁ、便所んどこにいたんでねえのお？」
「や、俺は行ってねえす」
「ほんでもお、だいづがいでよお」
とうちゃんかな
「わい！」
「あ、スギさん、おはようっす」
「今便所んどこさいだべ」
「多分とうちゃんす」
「だいづのお父ちゃん？ なんでえ？」
ヤッさんとスギさんに昨日のことを説明した
「そりゃあ助かっぺ」「んだ」
「今日は はぁ二人も抜けっがらぁ、大変だっつってはぁ」
「そうすよね」
あ、とうちゃんが来た
「とうちゃん！ こっち！」
ひょこひょこ走ってきた
「わいわいわいわい」「いんやいんやいんやいんや」
おっさんずラップ始まった
「どっちがどっちだかぁ」「どすべ、わがねな」
「俺のとうちゃんす」
「も、森下一男ですっ」
「カズオォ、ほんじゃカズさんかぁ」「カンズさん」
「ヤッさん、スギさん、今日一日とうちゃんのことよろしくお願いします」
「それはいいったっては、いっつもだいづが着てる服着てっからぁ」
「どいがどいだが、こりゃうだでな」
ん？ え？
「スギさん、とにかく名前呼べばいっぺ」
「んだな」
「だいづ、カズさん、間違えてもおゆるしてくんちえ」
そんなかなあ
「そんじゃ始めっぺ」
「おいっす」
とうちゃん、ガレキ置き場に行っちゃったけど ま、いっか
「だいづ、その袋お横っちょにかたしてくんちえ」
「おいっす」
そう言えば、とうちゃんがここのガレキの破片が危ねえつつってたな

「ダイチ」
とうちゃん
「ここは俺がやっからよ、ダイチはトン袋運べや」
「トン袋？」
「セメント袋」
「あ、おう」
とうちゃん、業界用語知ってんだな　すげえな

午前の10時休憩

「ダイチ、俺、便所行ってくっから」
「おう」
とうちゃんがいると、やっぱ心強えな
とうちゃんあちこち走り回ってさ、誰かが指示しなくてもやっててさ
すげえよな　即戦力だな
「だいづ！」「だいづ！」
ヤッサんとスギさん
「どうしたんすか？」
「今あ便所に行ったらはあ、なあ」「んだ」
便所でなんかあったんか？
「カズさんがあ」
とうちゃん　まさか倒れた？
「便所掃除しててはあ」
「え？」
「あったやばついのが」
え？　ん？
「あ～んな汚ったねえ便所があ、きれいになってはあ」
とうちゃん　なんで便所掃除してんだ？
「なもそっだごどさねぐでもつっでだら」
「え？　んっと？」
「そんなことおしなくていいんだよおっつったらはあ、下っ端だからって」
えっ
「カズさんはてえした人だっぺ」「んだ」
俺は・・・　そこまで気いまわらなかった
下っ端なのに　つか、そのとき言われたことやるのが精一杯で
そんじゃ朝もか　あれもそうだったんか
「あ、カズさん戻ってきたっぺ」
とうちゃん
「カズさん、あんがとなあ」「めわぐだ」
「あ？　め、めいわく？」

「カズさん、スギさんは秋田出身ではあ、めわぐはありがてえってことでえ」
とうちゃんがポーッとして
「あっ！」
「え、とうちゃん？ どした？」「カズさん？」「カンズさん？」
「めいわくは・・・ ありがてえっつうことだったんか」
「うん」「んだ」「そんだよ」
「俺、若けえ頃によ、入ったばっかんとき、半年先輩の人がいてよ、
俺は下っ端だから、休憩るときみんなにヤカンの水ついで歩いててよ、
そんで、その人んところに行ったら、湯呑出すんだけどよ、めいわくだって」
もしかして・・・ 秋田の人だったんか？
「俺、あわてて謝ってよ、なんか言ってんだけど何言ってっかわかんなくて」
秋田の人だな
「顔は日本人みてえだけど外国の人かなあって」
秋田だよ
「先輩たちが、あいつは秋田だから何言ってっかわかんねえって」
それが秋田の人だよ 全員かは知んねえけどさ
「そりゃ怒るよなあ、湯呑出してんのによ、水入れねえなんてよ」
「カズさんは・・・ ワハハハハ」「おもしろいな、ワハハハハ」
「とうちゃん、その先輩のしゃべってること、わかるようになったの？」
「それがよ、突然現場に来なくなってよ、アパート見て来いって言われて、
そしたらよ、布団と鍋とかはあんだけど、服や靴がなくなってよ、
その先輩の部屋は一階で、窓開いててよ、泥棒につれてかれたんかなって」
逃げたんだな
「夜逃げでねえのお」「ねがだな」
「そっかあ、めいわくはありがてえか」
「んだ」「そうだっぺ」
「とうちゃん、わかってよかったな」
「ちっと遅せえけどな」
「遅すぎっぺ、ワハハハハ」「んだな、ワハハハ」
とうちゃん、俺はとうちゃんから教わることがいっぱいあるよ
下っ端なのに下っ端の仕事すらできてなかった
とうちゃんはあたりめえみてえにやっててさ
俺は 今日一日とうちゃんを見て 明日っからとうちゃんみてえに下っ端仕事する
俺の下っ端仕事はまだ始まってなかったよ
とうちゃん、とうちゃんが来てくれて 一緒に仕事してくれて
俺はやっとわかったよ
やっぱ、とうちゃんはすげえよ

親子遠足

午前中は ちょっとした混乱が起きてた
ヤッさんが「だいづ」って呼んでっから走ってくと
「ありゃ、カズさんだ」って、とうちゃんを俺と間違えて話しかけてたり、
スギさんが「だい、カンズ、どっつだ？」って
「スギさん、どっちでもいいっすよ」「んだが、かんにんな」
とうちゃんが、いつも俺が着てる作業服着てっからだな

昼休憩

ヤッさんスギさんが、とうちゃんにもおかずくれて
「うめえ、こんなん食ったことねえ」
「だいづとおんなしこと言っでえ」って笑ってて
なんか、マジで遠足みてえだな
「いんやいんやいんや、カズさんはすげえなあ」
とうちゃんがキョトンとした顔して
「ガレキ運ぶんでネコ持ってくっぺ、そしたら、はあ、ネコ着いた途端にい、
パッパッてガレキ積んでくれてえ、そんでまた積み方うまいがらあ、
いっつもよか多くてもお運びやすくて仕事はかどって は」
とうちゃが不思議そうな顔して俺の顔見た
とうちゃんには、あたりめえのことなんか
ピコン 愛里
かあちゃんとのツーショットだ
『女子会中 w』
愛里ニッコニコしてるよ 可愛いなあ
「とうちゃん、愛里とかあちゃん」
とうちゃんが俺の携帯見て
「楽しそうでよかったなあ」
とうちゃんとのツーショット撮るか
「とうちゃん、もっとこっち寄って」カシャッ 送信
『親子遠足 w』送信
そうだ
「ヤッさん、スギさん、4人で写真」

「えっ、俺もお?」「わもが?」
カシャッ 送信
『モッサイ男たちが握りメシ食ってるよ w』送信
ピコン
『笑う w』
ピコン
『あなたのおかあさんも笑ってます w』
「とうちゃん、かあちゃんも笑ってるってよ」
「そっか」
とうちゃんが嬉しそうな顔してさ
「だいづんところはみんな仲いいんだなあ」
「そうっすね」
「うらやましっぺ」「んだな」
そっか ヤッさんとスギさんは 子どもが・・・
「ヤッさんとスギさんは俺のとうちゃんになってくれるつつったじゃないすか」
「あ?」「へ?」
「俺は今、3人のとうちゃんと親子遠足してんすよ」
「親子遠足か、そりゃいいなあ」「わい、そりゃ・・・」
スギさんが首のタオルで涙拭いてる
「スギさん、俺たちはあだいづと会ってえ息子できたっぺ」
「ん・・・だ・・・」
「カズさん、たまにだいづ借りっからあ、いっぺ?」
「あ? んと、ダイチのこと」
とうちゃん 座りなおして
「おねげえします」
「カズさん、土下座すんのはこっちだっぺ」「んだよ」
とうちゃんとおっちゃんたちが土下座し合ってるよ
「とうちゃんたち」
俺、なんかウルッとしちまって
「俺は最高にしあわせな息子だよ」
「だいづ、また泣いてえは」「だいづはなぎっづだ」
とうちゃんが俺の肩抱いてくれて、ヤッさんとスギさんが涙拭いてくれて
マジ俺子どもみてえじゃん 子どもだけどさ

昼休憩の終わり頃

「そんじゃ、俺、便所」
掃除すんのか
「とうちゃん、便所掃除、俺がやるよ」
「ダイチはまかされてっところあんだろ」

「明日っから俺やっからさ、やり方教えてくれよ」
「おしえるほどのことじゃねえけどよ」
「ふつうん家の便所と違うからさ」
「そっか、そんじゃ」
この隅っこに洗剤あってスポンジもあったのに
俺は全然気いまわなくてさ
「あとは床拭いてよ」
「うん」
「たまに壁んとも拭くといいんだけどよ」
「そっか」
「俺は朝か最後に拭いてたな」
「昔？」
「便所掃除ばっかやってた」
笑いながらそう言って
「なにやってるの？」
あ、監督
「便所掃除っす」
「ああ！ だから今日はきれいなんだ」
「明日っからは俺がやるんで」
「いいよ、トイレ掃除で雇ったんじゃないんだから」
「俺は下っ端なんで」
監督が、とうちゃんの顔見て、俺の顔見て
「そうか、そういうことか」
そういうこと？
「それじゃ、朝一回だけでいいよ、現場の人手が足りないからさ」
「休憩んときやるんで」
「休憩は休憩してくれよ」
「すぐ終わるんで」
「それじゃ、あれ？ カズオさんは？」
え？ あ、とうちゃん ゴミ置き場にいる
「あ、そんじゃ、明日からやります」
監督に言いながらとうちゃんどこ走ってって
「とうちゃん、何やってんの？」
「あ？ 分別」
分別？
「仕事終わりにやんのがいいんだけどよ、今少しやるときゃ楽だからよ」
俺は ここはあんま見てなかった
握りメシのホイルは持って帰ってて、また洗って使ってるし
ペットボトルも持って帰ってっから
「ダイチはそろそろ戻んねえとよ」

「それでもさ」
「俺は下っ端仕事っきゃできねえから、これは俺の仕事だよ」
とうちゃん笑ってっけど
俺 なにやってたんかな 現場に通って仕事してる気になっててさ
「ダイチ、始まんぞ」
「あ、うん」
なんか俺は 基本から見直さねえといけねえな
仕事ってのはさ この現場の中全部のことなんだな
とうちゃんはそうやって見て自分でやってんだよ
「ダイチ」
「あ、今」
「これよ、ゴミ箱ん中であつただけだよ」
なんだ？ メッチャ汚れて・・・ 軍手？
「落っこしたんかな、両方あんだけだよ」
「両方あるつつうことは捨てたんじゃねえかな」
「捨てた？ まだ使えんだろ？」
「人差し指んところ穴開いてっからかもしんねえ」
「こんくれえで？ 俺のもダイチのも指んところ穴だらけなのによ」
「薄くなってから繕えねえんだよな」
「そんじゃ、これ、もらってもいいんかな」
「捨てたと思うからいいとは思っけど、現場のは・・・ どうなんだ？」
「今度はなに？」
かっ 監督
「あ、んと、ゴミ箱に軍手捨ててあつて」
「穴が開いてるから捨てたんだろね」
「これ、もらっていいすか？」
「もらってどうするの？」
「使うんすけど」
監督が黙っちゃまった やっぱマズイんかな
「軍手あげようか？」
「や、いいす、ただこれを」
「ちょっとこっち来て」
とうちゃんと二人、監督室におそるおそる
「これ、うちの会社のロゴ入りだけど、二人分」
「えええええ？」
「そこまで驚くほど高くないよ、滑り止めついてるからどう？」
「い、いいんすか？」
「いいよ、これ、森下とカズオさんの分」
マジか
「ありがとうございます！」

「森下の全部指が出てるしさ、カズオさんのも」
「ねえよりいっかなって」
「ほぼ軍手の意味をなさないよね」
「ねえよりは」
「スッパよりマシってことか」
「まあ、はい」
とうちゃんが俺に、これってさっき拾った軍手見せて
「あの、この軍手ももらっていいですか？」
「えっ？ 今新しいのあげたよね？」
「こっちも洗えば全然使えるんで」
「わかったわかった、いいよ好きにして」
「ありがとうございます！」
とうちゃんと二人で顔見合わせて やったな、とうちゃん！
「おもしろいなあ」
「へ？」
「午後もよろしく」
「おいっす」
とうちゃんも頭下げて
監督室出た
「とうちゃん」
「ダイチ」
「軍手、三足」
「すげえな」
「とうちゃんのおかげだよ」
「俺はゴミ分別してただけだよ」
「宝見つけたじゃん」
「あったな」
「だいづー！」
ヤッさん呼んでる
「そんじゃ俺行ってくる」
「おう、そんじゃな」
とうちゃんはすげえ やることすべてに無駄がねえよ

午後はずっととうちゃんの後ついてまわった
とうちゃんは通路になってるとこの小石やガレキ片付けたり
空になったセメント袋を専用の廃棄場所に持ってったり
現場で働くってこういうことなんかって、俺は今日知った
俺はまだまだ軽いバイト感覚だったな バイトだけどさ
それでも、ヤッさんやスギさんや他の人たちはそれで生活してて

とうちゃんも若けえ頃はこうやって働いてたんだなって
スーパーのパートやってたときもかけえと思ったけど
今日のとうちゃんはメガかけえ
俺はマジでとうちゃんみてえな男になりてえ

三時休憩

とうちゃんと二人で並んで座って水飲んで
え、とうちゃんがヒザさすってる

「とうちゃん、脚痛てえんじゃねえの？」

「痛くねえよ」

「さすってたじゃん」

「クセでよ、つい」

「マジで？」

「おう、心配すんなよ」

とうちゃん我慢すっからな

あれ？ LINE 入ってた 川口？

すげえいっぱい動画、俺ととうちゃんの動画

いつ撮ったんだよ？ 一時間前？

『上原さんから指令がきました』

愛里から指令？

『森下のお父さんが森下と一緒に働いているから』

『動画を撮ってきてって』

愛里 んなこと川口に頼んだんか？

『僕は森下のお父さんと会ったことがないと言うと』

『森下にそっくりだからすぐにわかるというザックリな説明でした』

『確かにそのとおりで』

『後ろ姿はときどきどっちがどっちかわからなくてとにかく撮りました』

『上原さんには送りましたが』

『森下にも送っておかないと盗撮のようなので』

盗撮だよな、ある意味さ

『森下に送ります』

それでも、とうちゃんが働いてっところ撮ってくれてありがてえな

『僕は今から夜間特別講習なので会わずに帰ります』

川口 ありがとな

そんで なんか ごめん

『ありがとう』送信

あっ とうちゃん、便所掃除に行っちゃった

俺も行かねえと

なんか今日はメッチャ動いてる気がする 動いてるよな

とうちゃんがすげえからさ

日給

就業時間が終わって

とうちゃんと俺は便所掃除とゴミの分別した

「この現場の人たちはてえしたもんだなあ」

「なにが？」

「便所、朝は汚れてたけどよ、掃除したらきれいに使ってよ」

「そりゃそうだろ、やっぱきれいな方が気持ちいいしさ」

「俺が若けときの便所は掃除してもすぐ汚くなっててよ、

　　そういうもんなんかなと思ってたけどよ、違げえんだなあ」

「逆にやらなきゃよかったんじゃない？」

「そしたら誰も使えなくなんだろ、ウンコあちこにあってよ」

「えっ あちこち？」

「ケツの穴曲がついてんかなってマジで思ってた」

「んなわけねえじゃん、ハハハ」

「ゴミだってよ、昼に分別したら、ほれ、だいたい分別して捨ててくれてよ」

「ああ、たしかに」

「俺が若けえときは、やっても変わんなくてよ、そんでも言えねえしなあ」

　　どういうヤツらだったんだよ

「そんなんだから、俺、便所掃除とゴミの分別ばっかやっててよ」

　　とうちゃん笑ってっけど、とうちゃんはそれだけじゃねえよな

　　現場を仕事しやすいように、なんつうの、ほぼ無意識で動いてさ

「だいづー！　カズさーん！」

ヤッさんとスギさん

「まだ仕事してんのけ？」

「便所掃除とゴミの仕分けだけっすよ」

「俺たちもはあ、ここまでは気いつかなくてえ」

「たいすだあんずますくなっでよ」

「カズさんにゃ教わることば〜っかだっぺ」

「や、んな、俺は下っ端仕事っきゃできねえからよ」

「こりゃ下っ端仕事でねっぺ、俺やスギさんみてえな古いのが教えねえとお」

「んだ、わだづが気いつがねど」

「明日っからは俺がやるんで」

「だいづにばっかやらせられねっぺ」「まいねや」

「俺は下っ端っすから」
「だいづは下っ端でねっぺ」「なもさ」
「ヤッさんやスギさんには現場の中心にいてもらわねえと」
「中心ってえ、俺たちはユンボもクレーンも動かせねえがらあ」
「たんだの雑用っきゃできね」
資格取ればいいのにな、その分給与所得上がるはずなんだけどな
「カズさんは今日で終わっちゃうのお？」
「二人には世話になっちまってよ」
「ずーっといってもらいと助かるんだけんちょ」
「んだ、だいづとカンズさんいっとあんずましくでよ」
俺は・・ できればずっとここで現場で働いてえけど
そんで、できればとうちゃんと一緒に働ければ最高なんだけど
「ほんじゃ俺たち帰っがらあ」
「おいっす」
「カズさん、また会いてえなあ」「んだなあ」
「ダイチのこと、たのんます」
「まがせてくんちえ」
とうちゃんがホッとした顔で頭下げて
ヤッさんとスギさんは帰っていった
「とうちゃん、監督んとこ行って挨拶して日給もらわねえと」
「あ、だな、軍手までもらっちまってよ」
「もらったな」
「いい監督だな」
「うん」
「ダイチ、よかったな」
「うん」
俺は とうちゃんと一緒に働けた今日がいちばんよかったよ

監督室の扉開けて
「失礼します」
「森下、カズオさん」
「あのお、今日は俺みてえの雇ってもらって、んつとに、あの」
とうちゃんが頭下げた
「助かったのはこっちだからさ、頭下げるなら俺の方だよ」
「んな、監督が、んな、俺なんかに」
「カズオさんは専業主夫なんだよね」
「春にケガしちまって、そっから、なんもやってねえ」
「働く気はないの？」
「そのうちスーパーのパートやりてえと思ってっけど、雇ってもらえっかは」

「うちで働かない？ 正社員として」

「えっ」「えっ」

「試用期間三ヶ月はあるけど」

とうちゃん ヘッドハンティングされたよ しかも正社員だよ

「俺が・・・」

とうちゃん働きてえんだろ？ 本当はすげえ働きてえって思ってるよな

「俺が若けえ頃働いてた現場は・・・ 怒鳴り声ばっか聞こえて」

え？

「足場も悪くてネコしょっちゅう傾いて倒れて、俺は下っ端だから、

必死になってガレキや石どかすんだけど、それでもまた誰かぶちまけて、

転んだりケガする人ばっかで、そういうもんだと思ってたけど」

こんな話するととうちゃん・・・ 初めてだ

「ここは怒鳴り声なんてひとつも聞こえねえで、足場がよくて、

通路も通りやすくて、みんなが、なんつうか、助けて、一緒につうか、

ダイチはこんないい現場で働かせてもらってたんだあって」

俺？

「みんなダイチのこと可愛がってくれて、いろいろおしえてくれてよ、

ポツときた俺にまですげえよくしてくれてよ、ありがてえなって、

監督さん、今日は俺、ダイチの参観日に来たみてえだよ」

参観日・・・

「監督さん、ダイチのこと、よろしくお願いします」

とうちゃん、今は俺のことじゃなくて、とうちゃんに働かないかって話で

「そうか、そういうことか、わかったよ」

監督？ どういうことっすか？

「俺が若けえ頃、浮浪者るとき、日雇いで雇ってもらいたくてもハネられてよ、

わかってんだよ、脚悪りいのがいたらケガしたり事故起きっからよ」

監督は 穏やかな顔でとうちゃんの話聞いている

「それでもよ、俺、今日ここで仕事させてもらいながらよ、

もし、あんときの俺がここに来て働かせてくれつつたら、

下っ端仕事ならやらせてもらえたかもしんねえって、

そしたら、俺、ちっとはまともになってたかもしんねえなって」

とうちゃん んなこと考えてたの？

「んなことなあ、それでも、んなバカみてえなこと考えるくれえ、

ここは、んつとに、天国みてえな現場だよ」

天国・・・ 俺はあたりめえなんだと思ってたことは、あたりめえじゃなくて

「カズオさん、ありがとう」

「や、んな、俺は」

「俺は今日いろいろ考えさせられたよ」

監督が？

「工期だ効率だ、もちろん作業員の安全にも気をつけてたけどさ、

作業環境のことまで目を向けていなかったなってさ」
作業環境？
「仮設トイレや現場のゴミのことで近隣から苦情や文句がくるのはしょっちゅうでさ、
それなりには気をつけてたけどね、それは近隣からの苦情対策であって、
カズオさんがトイレ掃除したりゴミの分別してくれただろ」
「俺は・・・ それっきゃ」
「作業員たちがさ、快適にトイレを使えて、スッキリしたゴミ箱だから、
気持ちいいじゃない、そういうこと考えてなかったなって
でもそういうの大事だよ、働いてくれてる人たちの作業環境」
とうちゃんがやったことで、んなことまで考えてたんだ
「カズオさんに来てもらって本当によかったよ」
「や、俺も今日は楽し、あ、楽しいつつちゃ」
「俺も森下親子見てると楽しかったよ」
「へ？」「へ？」
「ゴミ箱に捨ててあった軍手拾って使うとかさ、ハハハ」
あ・・・
「それじゃ、これ、カズオさんの今日の日給」
監督が会社の名前がプリントされてる封筒をとうちゃんに渡した
「森下は今週から週払いにしたんだよな」
「おいっす」
「中に明細が入ってるから確認して、ここにサインして」
「あ、はい」
とうちゃんが封筒の中見て
「監督さん・・・ 札間違えてっけど」
「サツマチガ？ なに？」
「万札入ってっけど」
「3万だよ」
「あ、や、3て」
「さん？」
「美里が」
「みさと？」
「俺のかあちゃんす」
「ああ、奥さんには言ったよ」
「美里が日給は、3て、指で3て」
かあちゃん ウソじゃねえけど 額言わなかったんだな 怖がるから
「3万だよ」
とうちゃんが 固まった
「うちの会社は1.5万から3万、カズオさんは経験者だし急遽頼んだから三万」
「・・・え・・・ えーーーーーっ」
「足りない？ うちの会社の決まりは日給三万までだからさ」

「俺、んな、んな、大金、も、もらえねえ」
「もらえないって言われても困るよ、もう計上済みだから」
「へ・・・」
あっ　とうちゃんが後ろによろけた
「とうちゃん」
あわてて支えたけど
「あ・・・あの、そんじゃ・・・　これ・・・　お、俺の・・・　稼ぎ・・・」
「明細に書いてあるよね、封筒の中に入れたけど」
とうちゃんが封筒の中の明細取り出して
指で　いち・じゅう・ひゃく・せん　止まった
いち・じゅう・ひゃく・せん　また止まった
とうちゃん、もう1個桁あんだろ
「これ・・・　若けえときの・・・　俺の月給と・・・」
「ブラックだよな」
「ぶ、ぶら？」
「うちは正当な金額だと思うよ」
「そ、そんじゃ、これは」
「カズオさんの今日の日給」
「俺の・・・　にっ・・・　俺の・・・　稼ぎ？」
「そうだよ」
とうちゃんが監督の顔ジッと見て　それで
「こんな、下っ端仕事っきゃできねえ俺に」
「カズオさん、土下座はやめて、本当にそういうのじゃないから」
「こんなん、こんなしてもらって、ありがとうございますっ」
「カズオさん」
ええっ　監督も土下座？　俺はどうすりゃいいの？
「こちらこそありがとうございます」
「か、監督さん、頭上げてくれよ」
「カズオさんが立ったら俺も立つ」
「え、あ、そ、そんじゃ」
とうちゃんがやっと立ち上がって、監督も立ち上がった
「土下座って森下家のお家芸なの？」
お家芸？
「や、最上級の礼法つつうか」
「おもしろいよね」
「とうちゃん、ここにサインしねえと」
「さいん？」
「名前書かねえと」
「あ、そ、そんじゃ」
受取にとうちゃんが　森下一男　メッチャ震えた字になっちまってっけど

「監督、今日はとうちゃんのこと、ありがとうございます」
「こちらこそだよ、二人抜けてどうなるかと思ったら大丈夫だったよね」
「おいっす」
「それじゃ、森下はまた明日」
「おいっす」
「カズオさん、また」
「あ、あ」
とうちゃんは90度のお辞儀して
二人で監督室を出た
「ダイチ」
「とうちゃん、よかったな」
「これは・・・俺の・・・稼ぎか」
「そうだよ、とうちゃんが働いて稼いだ金だよ」
「俺が働いて・・・稼いだ金」
とうちゃんが金が入った封筒をジーッと見てる
「ダイチ、俺よ」
「ん？」
「や、なんでもねえ」
「なんだよ、言ってくれよ」
「んな、バカみてえなことだからよ」
「それでも言ってくれよ」
「バカみてえだからよ」
「俺には言えねえこと？」
「ダイチに言えねえことなん・・・」
とうちゃんが俺の顔見て
「バカみてえなことなんだよ」
「うん、バカみてえなこと聞きてえよ」
「そっか？ そんじゃ」
とうちゃんと二人、現場の出入り口の前に座った

とうちゃんの夢

とうちゃんは前っかわの地面見ながら

「さっき、これ見たとき」

日給の袋？

「これは俺が稼いだ金だって言われたときによ」

とうちゃんが俺の顔見て

「やっぱ、いいよ、んつとにバカみてえなことだからよ」

きっとそれは ぜってえにバカみてえなことじゃねえよな

「とうちゃん、俺ととうちゃんはいつもバカみてえなこと言ってんじゃん」

とうちゃんが言い出しにくそうにしてるってことは それは

「バカみてえなこと言ってさ、二人で笑ってんじゃん」

すげえ大切なことだよな

「言ってくれよ、そんで笑おうよ」

「そっか？」

とうちゃんがちょっとだけホッとした顔になって

「そんじゃ」

ちょっと気が楽になったみてえな顔になって

「美里に指輪買ってえなって」

えっ

「俺と美里が結婚すつとき、俺は稼ぎもねえし金なんてねえから、

指輪なんて買えねえし、美里も、指輪なんか欲しかったら、

ホームレスなんかと結婚しねえつって」

とうちゃんがそう言って笑った

「俺もよ、わかってんだよ、指輪買うなんて、俺がんなこと、

できるわけねえつよ、そんでもよ、そんでも・・・」

とうちゃんが自分の頭、指でつついて

「ここん中のどっかで、美里に指輪買ってえなって、ずっとどっかで思ってた」

ずっと

「そんなんさ、夢の夢の、ぜってえ手が届かねえ、なんつうんだ」

とうちゃんは手を空に向けてあげて

「星つかみてえつうくれえ、叶うわけねえ、バカなことだよ」

そんで 何もねえものをつかんだ手をまた下におろした

「そんでもよ、一個だけな、叶ってよ」

「なに？」

「美里の好きなイチゴくれえは俺が稼いだ金で買ってえって」

叶ったって言うけど

「そんだけで、ありがてえよ」

そんだけでありがてえって言うけど

「自分がメシ食う金もねえクズがよ」

とうちゃんの夢は 今はもう 空の星つかむみてえなことじゃなくて

「そんだけだよ」

とうちゃんが立ちあがって

「ダイチ、帰えっか」

叶うんだよ 今 その手の中の とうちゃんの稼ぎで

ぜってえ届かねえって叶わねえって 思い込んでるだけでさ

「とうちゃん」

「どした？」

「かあちゃんの指輪買おう」

「え？」

「とうちゃんが稼いだ金で買おうよ」

「ダイチ、俺は、ただ、バカな話しただけだよ」

「そんじゃ、バカなことしよう」

「え・・・」

「バカなことしようよ、とうちゃんの稼いだ金でさ、

かあちゃんの指輪買って、ウワッダッサって言われてさ、笑おうよ」

とうちゃんが 俺の顔見て なんか言おうとして

「とうちゃんと俺はバカなこと言ってバカなことして笑ってんじゃん」

「バカなこと・・・ ダイチと・・・」

「おう、俺とやろうよ」

「バカなこと・・・ やっていいんかな」

「やろうよ、そんで、かあちゃんに、あんたたちはバカなんたからって」

「叱られっかな」

「叱られる、そんで、二人でバカなことやっちまったなって笑おうよ」

「そっか、そっか、だな」

「今、やろう」

「今？ 今って、今か？」

「あそこの通りの店、7時まで開いてんだよ」

「えっ」

「行こうよ」

「い、い、行くか」

「おう」

とうちゃんの手え引っ張って、あの店に向かった

入口のドアが開いて
「何かご用ですか？」
昨日の女の人 メッチャ無表情なんだけど
「指輪買ってえんす」
「指輪」
とうちゃんと俺のことジロジロ見てっけど
この人昨日はあんなに愛想よかったのにな
日によって性格変わるんかな もしかして PMS? 生理?
「お客様」
「あ、店長さん！」
「昨日はご来店ありがとうございます」
「あの、俺のとうちゃんです」
「お父様ですか、いらっしゃいませ」
「あ、あ、あ、あ」
とうちゃん ガッチガチになってる
「とうちゃんが、かあちゃんに指輪買いたって」
「奥様に」
店長さんがニッコリした
「どのようなものをお探いでいらっしゃいますか」
とうちゃん、下向いて固まってる
「とうちゃんとかあちゃんは、結婚するとき指輪買えなくて」
「それでは結婚指輪、それとも婚約指輪のようなものでしょうか」
「とうちゃん、どっちにする？」
「俺は」
メッチャ小せえ声
「わかんねえ」
だよな わかんねえよな
「店長さん、どうしたらいいですか」
「それでは、あちらのコーナーどうぞ」
え、そっちは昨日見た結婚指輪とか置いてあるとこで高けえよな
昨日愛里がつけた指輪がある
愛里がつけるときれいだったな
「この奥になります」
「奥？」
あれ、なんか、なんつうんだ、シンプル?
「こちらのコーナーは結婚指輪と婚約指輪どちらにもお使いいただけます」
「どっちにも？」
「最近、結婚指輪や婚約指輪をあきらめるお若い方が増えていらっしゃいます」
マジか

「当社のブランドでは、一生の記念となる指輪をあきらめないでいただきたい、
お求めやすい価格で、このシリーズを作っております」

すげえな それはいいな

「奥様はどのようなデザインをお好みでいらっしゃいますか」

とうちゃんが俺の方向いて首振った

「んっと、とうちゃんは三万っきゃ持ってないんです」

「ご予算は三万円ですね」

え、あれ、とうちゃんがケースん中 覗き込んでる

指さした 俺を見た

「とうちゃん、なに？」

「美里は・・・ こういうのが好きなんだよ」

ツルツとした銀の中に小せえ・・・ ダイヤ？

「ポッコリ出てっとよ、ジャマでしゃあねえってよ」

「ああ、だよな、ポッコリしたのつけてんの見たことねえもんな」

「こちら、ご覧になりますか」

「お願いします」

おおおお ケースから出すと きれいだな

「こちらは Days というデザインになります」

Days 日々つつうことか

「こちらのコンセプトは」

やっぱコンセプトがあんのか

「大丈夫私がいる、いつでもここにいる」

沁みるなあ

「あなたがそばにいる、だから私も大丈夫」

とうちゃんが顔あげて 店長さんを見た

「あなたが・・・ そばにいる」

「はい、それがふたりでいる理由、それがコンセプトとなっております」

とうちゃんがまたジーッと指輪見てる

「こちらは真ん中の石がダイヤモンドですので3万8千円となります」

「3万8千円・・・」

ムリだな

「ただ、誕生石をというお客様もいらっしゃいますので」

マジ？

「ルビーですと3万4千円」

「あの、サファイアはありますか？」

「はい、サファイアですと・・・ 3万2千円となります」

2千円オーバーか

とうちゃんの顔 あきらめてる どうする、俺が2千円出すか？

それじゃ意味ねえよな

「お客様には、先日指輪をお求めいただきましたので」

「え、俺？」

「税込み3万円まででしたらお値引きさせていただきます」

3万円 ピッタリ そんな、いっちゃん高けえイチゴも買うっつって

「こ、こ、こ」

ん？ どうちゃん？

「これくださいっ」

メッチャでっけえ声

「かしこまりました」

マジ・・・か

「サイズはおわかりですか」

あっ そこだ ヤベ 肝心なとこ

「ななてんごっ」

へ？

「どうちゃん、かあちゃんのサイズ知ってんの？」

どうちゃんが俺のこと見てうなずいて

「ななてんご」

「それでは7.5をご用意させていただきます」

マジで？ 違ってたら・・・俺が持ってきて直してもらえばいっか

「プレゼント用にお包みさせていただいてよろしいですか」

「はいっっ」

どうちゃん、んなでっけえ声出さなくても聞こえっから

「それでは、お会計の方を先に」

「これ！」

どうちゃん袋のまま出してっけど

「どうちゃん、袋から出さねえと」

「あ、そ、そっか」

どうちゃんが震える手で袋から3万 出してるよ

俺、どうちゃんが万札使ってるの見たことねえからドッキドキする

「それでは、3万円ちょうどお預かりいたします」

「はいっ」

どうちゃん、んなでっけえ声出さなくていいって

なんか・・・笑えてきた 笑っちゃいけねえ どうちゃんは真剣だ

「おかけになってお待ちください」

「俺たち汚れてるんで」

「お気になさらずお座りになってください」

「どうちゃん」

あれ？ どうちゃんが 夢見てるみてえな顔になってる

「ねーちゃん」

え？

「俺・・・万札使えたよ・・・三万」

とうちゃんが嬉しそうな顔で なんのことかわかんねえけど
それでも よかった
帰りに店長さんが
「これは私の名刺でございます」って名刺くれて
「お直しや修理などありましたら、私に直接ご連絡いただければ」
サイズがあやふやなの察してくれたんだな
「ありがとうございます」
マジでありがとうございます

電車の中

とうちゃんは指輪が入った袋を両手てつかんでひざの上に置いて座ってる
メッチャ背筋伸びてっけど
「ダイチ」
とうちゃんは前向いたままで
「ん？ なに？」
「俺はよ、ねーちゃんに三万もらったんだよ」
「いつ？」
「浮浪者るとき、指輪探して、届けたとき」
「あっ、マジ？」
「そんときの三万は使えなくてよ」
「なんで？」
「俺みてえのが万札持ってっと、盗んだって思われてよ」
「なんだよそれ、ひでえな」
「今日は・・・使えた」
「使えたよ、とうちゃん、使えたな」
「俺が稼いだ金」
「うん、とうちゃんが稼いだ金」
「夢みてえだな」
「夢じゃねえよ、とうちゃん、指輪持ってんじゃん」
とうちゃんがひざの上の袋見て
「夢みてえだな」
夢 叶ったな とうちゃん
俺は ちょっと 泣きそうだよ

第二のプロポーズ

玄関ドアの前

とうちゃんの顔 死刑執行台に向かう囚人みてえなさ 見たことねえけど

「とうちゃん、開けるよ」

「え、あ、おう」

俺がドア開けて

「ただいま」

「おかえり」

リビングからかあちゃんの声

とうちゃんがサッと指輪入ってる袋隠した

「遅かったわね」

かあちゃんがリビングからこっちに来て

後ろから愛里 来てたんか

「ウッフ！」

なに？

「なんかもう汗臭さと汚さとゴム長の納豆が腐った臭いがダブル」

そこかよ

「しかも、なんか公衆トイレの臭いがする」

便所掃除してたからかな

「早くお風呂に入って！」

「入るよ、入るけど・・・さ」

とうちゃん とうちゃん？ 固まっちまってる

「とうちゃん、ほら」

「え、あ、あ、あ」

「とうちゃん」

とうちゃんが下向いたまま 俺のこと見て そんで

かあちゃんを上目遣いで見て

「なによ、なんなの？ さっさとお風呂入ってきなさいよ」

「かあちゃん、その前に、とうちゃんから、ほら、とうちゃん」

とうちゃん、メッチャ息荒くなっちまってるよ

「なによ？ 言いたいことがあるなら言いなさいよ」

とうちゃんが大きく息吸って

「けっ けっ けっ」

け？
「なに？」
「けっこんしてくださいっ」
とうちゃん違えよ いろいろ違えよ 指輪の袋後ろに持ったままだしさ
「どうしちゃったの？ 仕事で何かあった？」
「じゃねえんだよ、とうちゃん、あれ、出さねえと」
「あれってなあに？」
「かあちゃんちょっと黙っててくんねえかな」
「ハァアアア？ まあいいわ、とにかく早くお風呂に入ってね」
ああああ かあちゃんがリビングに戻っちゃう
「み・・・ 美里！」
かあちゃんが振り向いた
「なに？」
とうちゃんが指輪入った袋、かあちゃんの前に突き出した
「なにこれ？」
とうちゃん ほら、とうちゃん、かあちゃんに指輪買ったって ほら
「なに？」
とうちゃん 固まってねえでさ
「なんなの？」
かあちゃんが俺を見た え？ 俺が言うの？ 違ええよな
「ダイチ」
とうちゃんのことアゴで指して
「どうしたの？」
「お、俺？」
「言いなさいよ」
「え、あ、とうちゃん、俺から言うよ？ いい？」
コクッコクン 俺か
「とうちゃんがさ、かあちゃんに指輪買った」
「指輪？ なぜ？」
俺が詰問されてるみてえな形になっちまってんだけど
あれ？ 愛里、どんどん後ろに下がって リビングに
「なぜ？」
「あ、んっと」
とうちゃん、腕疲れねえんかな ずーっと真っ直ぐ突き出してっけど
「ダイチ、早く言いなさい」
かあちゃんもさ、とうちゃんに聞けばいいじゃん 俺に
「ダイチ！」
「はい、とうちゃんとかあちゃんが結婚すつとき、
とうちゃんがかあちゃんに指輪買えなくて」
「買えるわけないでしょ、ホームレスだったんだから」

「かあちゃん、最後まで聞いてくれよ」
「なに？」
「本当はかあちゃんに指輪買いたかったんだって」
かあちゃん黙って俺の顔見てっけど、とうちゃんの顔見てくれよ
「いっつも頭のどっかに指輪買ってえなあつつうのがあって」
かあちゃん頼むから、んな怖い目で俺を見ねえでくれよ
「そんで、今日、日給もらって、それで買ってきた」
あ かあちゃんの視線がやっとうちゃんの方に フウウウ
「いくら？」
え？
「その指輪はいくら？」
値段聞くかなあ そういうのはさ
「カズオ、いくら？」
「さ・・・さん・・・まん」
とうちゃんも素直に言っちゃまうかなあ
「今日の日給全部？」
とうちゃんがコクンて
「バカなの？」
んな言い方ねえだろ
「そんな汗臭くなって泥だらけになって一日中働いたお金全部？」
あ、とうちゃんが顔あげた
「全部」
「バカじゃない、バカ・・・」
えっ かあちゃん目えウルウルしてっけど 俺ここにいていいんかな
あれ？ 愛里がリビングからこっち覗いてる 俺もそっち行きてえよ
それでも、とうちゃんとかあちゃんが玄関の真ん中に立ってっから動けねえ
「俺、バカだからよ」
とうちゃんが情けねえ顔で笑ってっけど
俺はできるだけ端っこに寄ってみたけど 気配消すしかねえな どうやって？
「開けてよ」
「あ？」
「見せてよ、指輪」
「あ、うん」
とうちゃんがガサガサって袋から指輪入った箱出して
「全部取って、指輪見せて」
「あ、うん」
とうちゃんが必死にリボン取って包装紙取って
指輪入った箱をかあちゃんの方に突き出した
「開けてよ」
「あ？」

「あんたが開けて、中見せて」

「あ、うん」

とうちゃんが慣れねえ手つきで箱のフタ

どっちから開けていいんかわかんねえんだな あ、やっと開いた

そんで、かあちゃんに見せてる

かあちゃんがジーッと見てる

俺は横眼でチラチラ見てっけど できればこっちから愛里んところに行きてえんだけど

「はめて」

「あ？」

「私のために買ってきたんでしょ？」

「あ、うん、ねーちゃんに買ってきた」

「だったら、あんたがはめてよ」

「あ、うん」

とうちゃんが箱から指輪出して 指でつかんでかあちゃんの前に

なんか・・・ シンシンおじちゃんとかこのウエディングの写真みてえな

違いえな なんだ？ なんか 見たことねえのに

浮浪者のとうちゃんが かあちゃんが落とした指輪見つけたときの

かあちゃんに持ってきたときみてえな 見たことねえのに

なんか 時間が戻って 今 俺の目の前で起きてるみてえな

けど 今とうちゃんが持っているのは とうちゃんが買った指輪で

そんでも俺には 20歳のとうちゃんと若けえときのかあちゃんに見えて

なんだこれは？

かあちゃんが とうちゃんの前に左手出して

とうちゃんが泥だけの指で 震える指で かあちゃんの指にはめてる

「サイズ、ぴったり」

マジでピッタリだ

「ななてんご」

「憶えてるのね」

「俺、憶えてっから」

「私がいつも言ってたから？」

「うん、ねーちゃんが、私のサイズはななてんごって」

「やっと・・・」

やっと？

「あんたから指輪買ってもらった」

「ねーちゃんに、指輪、買えた」

「あんたから・・・ 指輪」

かあちゃんが とうちゃんに抱きついて

今だ！ ゴム長脱いで二人の脇をササッと通り抜けてリビングに

ハアハアハア

「愛里」

え？ 愛里がくちびるに指あてて シーってこと？ 黙れってこと？
愛里が携帯出して LINE 開いて
『送信しないで』って打って俺に見せて
おうって頷いて、俺も携帯出して
『感動ですね』
『俺はどうしていいんかわかんなかった』
『私 動画撮りました』
「えっ？」
「シーッ」
あ・・・ うん
『おとうさんとおかあさんの人生の大切な場面だなと思ったから』
そっか
『第二のプロポーズみたい』
『どうちゃんかあちゃんにプロポーズしてねえんだよ』
え？ って顔で俺を見たけど
『どうちゃんの住民票取ったついでに結婚どうする？ って
かあちゃんが聞いたってねえちゃん経由で聞いた』
愛里が驚いた顔して俺を見て、そんで玄関の方チラッと覗いて
『それじゃこれが本格的なプロポーズですね』
『もう結婚して俺やねえちゃんいるけどさ』
愛里が俺の顔見て 口だけ動かして ん？ ま さ？ ま た かな
「また？」
フーって息吐いて
『バカ』
ああ！ バカ ハ？
『なんでバカなんだよ？』
『おかあさんはおとうさんに言って欲しかったんだと思う』
マジ？
『さっき指輪をはめてもらったとき、やっとして言ったでしょ』
あ、言った なんなんだ、やっとして？
『指輪のサイズをおとうさんが憶えるくらい言ってたのは』
だよな、私がいつも言ってたつってたよな
『おとうさんから指輪をもらいたかったんじゃないかなって』
どうちゃんから？
『それでもどうちゃん金ねえからさ
つか、かあちゃんが持ってる指輪はすげえブランドのばっかでさ』
『縁日の指輪だって嬉しい』
えっ？
『縁日って？？？』
『気持ちでいいの』

気持ちでいい？

『指輪をもらわなくてもいいけど もらったら嬉しい』

マジ？

『愛里も？』

愛里が俺の携帯から目えそらして玄関の方見て

自分の携帯に打ってる なに、なんて書いてくれてんの？

『私の部屋でシャワーしますか？』

あ？

『それがここから脱出できる唯一の方法で』

あ、そっか

『おとうさんとおかあさんを二人きりにしてあげる方法』

だな

『そんじゃ借りる』

『それじゃ行きましょう』

愛里がチラチラ玄関見て

「わ、わ、私の部屋でシャワー、使いますか？」

「あ、おう、そ、そうだな、とうちゃんも入っから」

愛里が携帯で

『ヘタクソ！』

俺も携帯で

『愛里だってヘタクソ』

愛里が俺のこと睨んで

「それじゃ、着替えを持って、行きましょう」

「着替えは愛里んここに置いてある」

「あ、GAPの？」

「愛里の部屋用だからさ」

「ほっとんど着ませんよね」

「もったいねえから」

「バカみたい」

「バカッすよ」

「行きましょう」

まだ抱き合ってるとうちゃんとかあちゃんの横すり抜けて

やーーっと家から脱出した

あっ ヤベ パンツ

「愛里、ちょっと待ってて」

引き返して そーーっとドア開けたら

いねえ とうちゃんもかあちゃんも いねえ

「ダイチ？ なにやってるの？」

リビングからかあちゃんの声

「あ、んと、愛里んここでシャワー借りっから」

「あら、そう」

部屋に入ってパンツつかんで ドア閉めた

あっ 晩メシどうすんだ？

とにかく シャワーだ

晩メシ

愛里のシャンプーとボディソープ 愛里の匂い
メッチャ愛里・・・って、浸ってる場合じゃねえ
今日はどうちゃんも来れなかったから掃除しねえと
全身洗って 浴室掃除して
タオルで身体拭いて 着替えて 使ったタオルと溜まってるのを洗濯
このネットに入ってるのは・・・ やっちゃいけないだよな
これってさ もし、もし将来結婚してもやっちゃいけないかな
今はんなこと考えてる場合じゃねえよ
んっと、俺の作業服一式はビニール袋に入れてたたきに置いて
洗面台掃除してバスルームの床拭いてたら
「今日はいいですから」
愛里がバスルームの入り口から顔覗かせて
「遅くまで仕事してたんですから」
「どうちゃんの指輪買って遅くなっただけだからさ」
「あなたは私の家政夫じゃないんだから、そんなに」
「そんじゃ、俺は愛里のなに？」
「え・・・」
カレシっつってくれよ 言わねえよな 愛里照れ屋だからさ
「私を予約した人」
「えっ」
俺は 今 バズーカ砲で 心臓射抜かれた
「愛里」
立ち上がって 愛里を抱きしめようと
「あの」
「なに？」
「お腹空いちゃって」
「あ？ あ、そ、そっか、だよな、そっか」
どうちゃん、もうシャワー終わったよな 戻って大丈夫かな
まだかあちゃんと まさか かあちゃんと
「どうしたんですか？」
「あ、や、戻って大丈夫かなって」
「なんで？」

どうちゃんが、もし・・・でも、俺が作ればいっか
「や、とにかく、上戻っから」
「私も行きます」
「そっか」
作業服入れたビニール袋持ってエレベーター乗って
私を予約した人って たまんねえよ カレシつつうより、もっとさ
「着きましたよ」
「え？ あ、おう」
そーーーーっとドア開けたら
「ダイチ」
「どうちゃん」
「買い出し行ってくっからよ」
「俺も行こうと思ってたんだよ」
「そんじゃ行くか」
「おう」
「私はおかあさんと留守番してます」
「愛里、なんか食いてえもんある？」
愛里が俺とどうちゃんの顔見て
「なんならコンビニのお弁当でも」
「ハ？」
「働いてきて今から作ってもらうのは申し訳ないっていうか」
「俺とどうちゃんいてコンビニ弁当はねえだろ」
「それなら・・・ おまかせします」
「おう」
どうちゃんとスーパーに向かった

さすがこの時間
半額シールだらけだよ
「どうちゃん、晩メシ何にする？」
どうちゃんがポーッと肉売り場の棚見てっけど
ステーキ肉？ 半額になってっけど、それでも高けえよ
「どうちゃん、ステーキにすんの？」
「あ？ なにが？」
「晩メシ」
「晩メシ、あ、晩メシは・・・」
またポーッとしまったんだけど
「どうちゃん、豚肉、メッチャ安くなってるよ、この薄切りなんて 70パー OFF」
「そっか・・・」
「どうちゃん」

「あ？ どした？」
「なんかポーッとしてっからさ」
「そっか」
またポーッとしちまったよ
「とうちゃん、大丈夫かよ」
「ダイチ」
「ん？ なに？」
「俺・・・ 夢見てたんかな」
「夢？」
「美里に・・・ 指輪って」
「夢じゃねえよ、俺も見てたよ、一緒に買いに行ったじゃん」
「そっか、そっか、夢じゃ」
またポーッとしちまってさあ
「とうちゃん、浸ってっどこ悪りいんだけどさ」
「あ？ ひたって？」
「早く買わねえとスーパーも閉まっちゃうし、愛里とかあちゃん腹空かせてっから」
「あっ、だな、買わねえとな」
「豚肉安いからさ、生姜焼き？」
「ああ、生姜焼きならすぐできっからな」
「キャベツはあったよな」
「ある」
多めに買って、明日の愛里の弁当は豚肉の野菜巻きにすっか
「あと、どうする？」
「あと・・・」
ダメだ とうちゃん燃え尽き症候群だ
俺が選んで買うっきゃねえ
必要なものカゴに入れて
「とうちゃん、イチゴ買わねえと」
「イチゴ、だな、イチゴ」
イチゴ売り場に行って
イチゴも安くなってんじゃん
「とうちゃん、イチゴも」
とうちゃんがポーとした顔で一バック 1,000 円のイチゴ取ろうとしてる
「とうちゃん、1,000 円のイチゴ買うの？」
「え？ あっ や、ムリだ、金全部使っちゃった」
全部ではねえんだけど
とうちゃんの財布にいつもの金が入ってっけど
「とうちゃん、この 500 円のが 385 円に」
とうちゃん？ また 1,000 円のイチゴに手え伸ばして
とうちゃん、かあちゃんに 1,000 円のイチゴ買ってえんだな

買えんだけどな　それでも、とうちゃんの中で使う金の額が決まってて
どうする？　買わせてあげてえけど、それでも
「ダイチ、この385円にすっからよ」
え？
「今日はしゃあねえよな、金全部使っちゃったからよ」
「とうちゃん、1,000円の買おうよ」
「ムリだ、んな金」
「俺と二人で買おうよ、半分こしてさ、俺も愛里に1,000円の食わせてえしさ」
「そっか？　半分こなら、500円か」
「そうしようよ」
「そっか、だな」
とうちゃんがやっとニッコリした
とうちゃんにとっては衝撃的なことばっかだったもんな
現場ではあんなに生き活きしてたけど
指輪からは未知の世界つつうかさ　よっぽどエネルギー使ったんだな
燃えカスみてえになっちゃってるよ　燃えカスはひでえか
それでも魂抜けたみてえになっちゃってさ

生姜焼き作って　とうちゃんの千切りがメッチャ太くなってっけど
俺がポテサラ作ったから混ぜればなんとか食えるよな
かあちゃんの指には　あの指輪　メッチャ似合ってる
かあちゃんが生姜焼き食って
「美味しい、ホッとする」
とうちゃんは口半開きにして、かあちゃんのこと見てる
「え？　このキャベツ・・・」
かあちゃん、キャベツには触れねえであげてくれ
「かあちゃん、それさ、俺のポテサラと混ぜて食うと、うん」
「え？　ああ！　そうね、歯ごたえがあって、いいかもね」
かあちゃん察してくれた
とうちゃん一口も食ってねえ　それで、かあちゃんのことばっか見てる
「とうちゃん、食わねえの？」
「あ？　あ、く、食う、食う」
生姜焼きつかんで　それで　そのまま　またかあちゃんのこと見てる
かあちゃんぜってえ視線感じてんのに、とうちゃんのこと見ねえ
なんなんだ？　照れてんのか？
どうでもいいけどさ、俺の身にもなってくれよ
「あ、あの」
愛里？
「きよ、今日私が行った教室が、すごくよかったです」

俺？ 俺に言ってる？

「あ、おう、よかったな」

「はい」

愛里もこの異様な空気を感じてんだな

「そうね、ランチのとき見せてもらったけど、愛里さんらしくてステキね」

かあちゃん、それよかとうちゃんに話しかけてやってくれよ

「花器も、100均のグラスで円筒形で」

かき、円筒形 なんだ？

「使うお花も夜の教室で使う残りど、なんていうか」

「見てえよ」

「そこに」

ローテーブルの上に

「あれってさ・・・ブルーベリー？」

「そうです、まだ実が赤いからダイジーの白と合ってる」

「メッチャ可愛い」

マジ可愛い

「先生が、今日のテーマは、ふつうの日々の雰囲気って」

日々 Days とうちゃんが買ったかあちゃんの指輪のコンセプト

かあちゃんも黙っちゃった 説明書読んだんだな

んで、とうちゃんはまだかあちゃんのことポーッと見てるしさ

「え？ あの・・・ なにか？」

「や、メッチャ可愛い、愛里っぽくて俺は好きだ」

「そうですか」

愛里がニッコリして、とうちゃんの方見て 顔固まった

愛里、とうちゃんのことを見逃してやってくれ

今のとうちゃんは燃え尽きてっから

つか、ここにいねえと思う 夢の世界にいつちまってると思う

なんでさ なんでせっかく指輪渡したのに こんな気まずい雰囲気なんだ？

しゃあねえけどさ しゃあねえけど

誰かなんかしゃべってくれよ 俺がなんかしゃべればいいんか？ んっと

「み、美里」

とうちゃん？

「え？ なに？」

「しょ、生姜焼き、作った」

作ったよ、かあちゃん食って美味えつつったじゃん

「そうね、美味しい」

「マジ？」

「カズオの生姜焼き、大好きよ」

「え、あ・・・」

とうちゃん照れて下向いちまったよ

「キャベツの千切りが太いわよ」

かあちゃんっ

「えっ？ あっ、ご、ごめん」

「ポーッとしてるからでしょ」

かあちゃ〜ん

「へへ」

え どうちゃん 笑う？

「うん、ポーッとしてた」

「バカみたい」

「うん」

嬉しそうにさ うんて

「あの」

愛里？

「ごちそうさま・・・でした」

それな マジそれ

なーんか 胃が痛てえよ

Days

メチャ疲れた晩メシ終わって
愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってる
よくしゃべることあんなくれえ毎晩しゃべってんな
仲良くて俺は嬉しいけどさ
とうちゃんは少し平常運転に戻ってきたっつうか
フツターにコンロ掃除してる
キャベツの千切り・・・っうか荒千切りけっこう残っちゃったな
どうすっかな　とうちゃんどうすんのかな
「とうちゃん、このキャベツ、なにかに使う？」
「これなあ、油揚げ冷凍してっから、それと炒めて・・・かなあ」
そっか、それも美味いけど　あ！
「とうちゃん、俺、愛里の弁当用に少しもらってっかな」
「こんなアイリちゃんの弁当に入れちゃなんねえよ」
「このまんまじゃねえよ、お好み焼き風卵焼き作んだよ」
「ああ！　あれか、あれならいいかもしんねえな」
「とうちゃんよく作ってくれたよな」
「俺はお好み焼き食ったことねえからよ」
「俺と縁日行ったときに初めて食ったんだよな」
「ダイチがあれ食いてえっつって、美里から金もらってきたからな」
「そんで俺が全部食い切れなくて、とうちゃんが残り全部食ってくれて」
「美味かったなあ」
「それから、俺の弁当にお好み焼き風卵焼き作ってくれるようになってさ」
「俺よ、お好み焼きに小麦粉入ってんの知らなくてよ、卵焼きだと思ってよ、
　　そんで、キャベツと紅ショウガ刻んだのと干しエビ入れて焼いてよ」
「俺、あれ大好きだよ」
「アイリちゃんはお好み焼き好きなんか？」
「あ、ちょっと聞いてくる」
リビングに行って
「愛里、お好み焼き好き？」
「好きです・・・けど」
「やだ、なに？　明日の夕食お好み焼きとかイヤよ」
「作んねえよ、だいたいうちにホットプレートねえじゃん」

「おかあさんはお好み焼き嫌いなんですか？」
「自分で焼くっていうのがイヤなの、めんどくさい」
「それじゃ、もんじゃもですか？」
「全部焼いて小さいヘラダダダーッ並べてよって言いたくなるのよ」
「ハハハハ、おもしろい」
「あと、あれ、鉄板焼き、さっさと厨房で焼いて出してって思っちゃう」
「前にパパとママと三人で行ったことがあって」
愛里はそういうところ行きてえんかな
「すごいオシャレなところだったんですけど」
オシャレな鉄板焼きの店 知らねえな
「そのときのシェフが、塩コショウが入ったミルは落とすし」
「あれは落としちゃダメよね」
なんの話だ？
「卵をこういうヘラ？ にポンてやって割るじゃないですか」
「見せ場のひとつね」
「何回も失敗しちゃって」
「こっちがハラハラしちゃうわね」
「そしたらママが、本気でママが、あなた大丈夫？ 具合悪いんじゃない？ って」
「そんなこと言われたらハハハハ」
「すぐに別の人が出てきました」
「そうなるわね」
愛里の話は聞いてて飽きねえ けど お好み焼きはどこ行った？
「なにボーッと突っ立ってるのよ？」
「え？ あ、行くよ」
キッチン戻って
「愛里、お好み焼き好きだっさ」
「そんじゃ喜ぶな」
んっと、干しエビはある、紅ショウガも、青のりもあるから、できるな
「ダイチとヒトミは縁日好きだったよなあ」
「うん、でも俺、ねえちゃんで行ったことねえな」
「ダイチが赤ん坊んとき、俺がおんぶして連れてったんだけどな」
「憶えてるわけねえじゃん」
「ヒトミはよ、わたあめとか、なんだ？ あの風船の、あ、ヨーヨーすくいとこよ、
あと、なんかキラキラした指輪とか髪留めとか売ってっだろ？
ただなあ、金魚すくいやりてえって言われたときはなあ」
「かあちゃんが絶対ダメだったんだよな」
「金魚はぜってえに持ってくんってよ」
「ねえちゃんぶきっちゃよなんだからどうせ取れねえよ」
「そしたらよ、ヒトミは俺にとらせっだろ、取るまでやらせっだろ」
「あ・・・ だよな」

ねえちゃんはそういう人だよ あれ？ そんなもさ
「どうちゃん俺にやらせてくれたことあんじゃん」
「あんときはよ、終わり間際に行ってよ、一回 100 円になってよ」
「そうだよ、どうちゃんのパート長引いちまってさ、行けねえかもって、
　　それで俺が泣いてさ、どうちゃん帰ってきてすぐ連れてって来て、
　　俺、なんか知んねえけど、金魚すくいやりてえって泣いてさ」
「美里にはダメって言われてっからよ、それでも俺のせいで泣かせちまって、
　　それで俺の金で一回だけっつってよ」
「そんでさ、取れたんだよな」
「もうかなり弱ってたもんな」
「取れたけど、持って帰れねえっつって返したんだよな」
「ごめんな」
「俺はやれたことに満足したからさ」
「へえ、金魚すくいしたの」
あっ かあちゃん
「毎年毎年ダメって言ってたんだけどねえ」
「持って帰ってきてねえし、小学生んときの話じゃん」
「愛里さんを送ってあげなさい」
「あ、おう」
「愛里さん、今日は遅くなっちゃってごめんなさいね」
「いいえ、ステキな日でした」
「愛里さんの明日のお花も楽しみね」
「はい」
愛里と一緒に愛里の部屋に行った

愛里の部屋の玄関

「今日はしあわせな時間でしたね」
俺はいろいろメチャ疲れたけど
「うん」
「あなたのおかあさん、指輪のコンセプトを何度も読み返してて、
　　すごく嬉しそうな顔してました」
「そっか」
「おかあさんはきとおとうさんから指輪を贈って欲しかったんだと思う」
「え？」
「自分の指輪のサイズをおとうさんに言ってたって」
「ああ、うん、どうちゃん憶えてた」
「おかあさんが言ってたんですけど、指輪はただの物質で」
物質 かもしんねえけど どうちゃんがどんな思いであれ買ったと思ってんだよ
「それ自体には何の意味もないけど」

何の意味もねえってさあ

「それを贈りたいって思ってくれた気持ちが嬉しいって」

あ、そういうことか

「気持ちが離れたらただの物質だけどねって笑ってました」

え、愛里

「俺の気持ちはぜってえ離れねえから」

「え、あの」

「俺の予約はぜってえキャンセル無しだから」

愛里が俺のことジッと見てっけど

「俺は愛里を予約した」

「はい」

俺が贈った指輪触ってんのが可愛い

「愛里」

これはさ 愛里だからでさ 愛里っきゃねえから 愛里だから 俺は
くちびる離すと 愛里はまだ目えつぶってて その顔がすげえきれいで
俺はまた もっと もっと愛里を もっと あっ ヤベエ

「ハアハアハアそんじゃハアハアハアまた」

「また息止めてたの？」

「止めてねえ、それじゃねえ」

「それじゃない？ なに？」

「え、あの、う、うまい棒 あっ」

「うまい棒って、お菓子？」

「や、あの、う、うまく言えねえって、そういう、うん」

愛里が首かしげてっけど

「そ、そんじゃ、またあとで」

「今日はもう寝てください」

「イヤだ、愛里と LINE してから寝る」

「子どもみたい」

「愛里」

俺はさ

「好きだ、マジ、好きだ」

あ、ヤベ 上着引っ張って

「そ、そんじゃ、またあとで」

「はい、それじゃ」

ドアが閉まって速攻で鍵

なんか俺 おっ立ってばっかだよ

こんなん愛里に知られたら怖がって逃げちまうだろうな

愛里、ぜってえ怖がるようなことはしねえから

ぜってえ守っから 俺、メッチャがんばってっから

家に戻ったら とうちゃんが乾いた洗濯物抱えて
「ダイチ、作業服も乾いたからよ」
「俺もたたむよ」
「そっか？ そんなじゃ一緒にたたむか」
リビングのカーペットの上で二人で洗濯物たたんで
「かあちゃんは風呂？」
「うん」
「とうちゃん、これ」
「捨ててあった軍手か」
「メッチャしっかりしてんじゃん、人差し指んところきゃ穴開いてねえしさ」
「ダイチ、使えや」
「とうちゃんが見つけたんだからさ、とうちゃんのだろ」
「俺はベランダの土やるくれえだからよ」
「マジ？ そんなじゃもらおっかな」
「見つけてよかったな」
「とうちゃんすげえよ」
「監督さんからもらった軍手もダイチ使えや」
「俺ももらったしさ」
「それでも、いくらあってもいいんじゃないか」
「あれはさ、とうちゃんと俺と一緒に働いた記念つつうかさ」
「ダイチと俺が・・・ そっか、そんなじゃもらっとくかな」
「おう」
「なんかもったいなくて使えねえな」
「俺も、とうちゃんとの記念だと思うとさ」
「使えねえな、ダイチと俺と一緒に働いてもらったやつなんてよ」
「やっぱ、当分はこっちでいっか」
指先全部穴開いてっけど、これはこれでさ
「だな、こっちでいいな」
「まだいけるもんな」
「捨てなさい！」
かあちゃん
「指先が全部穴が開いてたら軍手の意味がないでしょ」
「細けえ作業すつときにけっこう便利だからさ」
「土木作業の細かい作業ってなにっ？」
「小石拾ったり？ 古い釘とか」
「余計に指先が必要でしょ！」
「それでもねえんだよなあ」
「どうでもいいけど、その元軍手」
「元じゃねえよ、ちゃんとした軍手だよ」

「いったいどうなったら捨てるの？」
「まあ、手のひらんとこにでっけえ穴開いて？」
「今でさえ、ただのボロきれ！」
かあちゃんが俺ととうちゃんの手から軍手奪い取ってキッチンに行っちゃった
「とうちゃん・・・」
「あとで俺がこそっと拾っとくからよ」
「マジ？」
あ、かあちゃん戻ってきた
「キッチンばさみで切り刻んだから」
「えええええっ」
「あのままにしたら、あんたたちはまた拾うっ」
そう・・・だけど
「おやすみっ」
「あ、おやすみなさい」「美里、おやすみ」
とうちゃんと顔見合わせた
「ダイチ、やっぱ、その軍手拾っというてよかったな」
「切り刻むとかさ」
「美里なりに心配してんだよ、ダイチがケガしねえようによ」
心配の仕方が過激なんだよ
「ダイチ、こっちの新しい作業服もダイチが着ろよ」
「それはとうちゃんに買ったんだからさ」
「俺は使わねえからよ」
「スーパーのパートやれるようになったら使うだろ」
「まだ申し込んでもねえからよ」
「俺は、とうちゃんから受け継いだこの作業服着て働きてえんだよ、
愛里デザインの継ぎもあるしさ」
「そっか、アイリちゃんが考えてくれたんだもんな」
「その新しいのはさ、とうちゃんがまたパートしたとき、
俺と一緒に働くとって着てくれよ」
「ダイチと一緒にか」
「うん、愛里が生理痛ひでえのに選んでくれたんだしさ」
「そっか、だよな、そんじゃ俺が着ねえとな、アイリちゃんに悪りいもんな」
とうちゃんが、たたんだ新しい作業服、大切なもんみてえに撫でて
「今日ダイチがこれ着て働いてんの見れて、嬉しかったな」
「俺もとうちゃんと一緒に働けてメッチャ嬉しかった」
できればずっと これからもずっと 一緒に働きてえけど
それでも 今日っつう日があっただけでも Days 日々の中のさ
なんつうか 思いつかねえけど うん よかった

ショーさん

作業服着て

今日はとうちゃん一緒に来ねえんだよな　なんか淋しいな
キッチン行って

「ダイチ、おはよう」

「とうちゃん、おはよう」

とうちゃんはいつもみてえにかあちゃんの弁当作ってて
俺も愛里の弁当作って

「お好み焼き風のは卵焼きのフライパンで作んのか」

「四角いからさ、切って弁当に入れやすくなんじゃん」

「やっぱダイチは頭いいなあ」

「端っこ残るともったいねえなっつうだけだよ」

「アイリちゃんのオムライスもそれで作ってるもんなあ」

「ねえちゃんに作らされたときにフツターの作ったらさ、隙間が空くってさ、
だったらこれで卵焼いてライス巻いて二本作ったら食いやすいかなって」

「ヒトミのおかげだな」

「おかげっつうか、文句言うなら自分で作ってくれよって思った、言えねえけど」

「ヒトミもダイチが作るメシ好きだもんなあ」

「俺だと言いやすいだけだよ」

「ヒトミ元気にやってっかなあ」

「あれ？　夏に帰ってくるかもって言ってた気いするけど」

「夏の、なんだ？　学校？　あって帰れねえってよ」

「そっか」

サマースクールでガンガン単位取ってんだな

「ダイチ、その卵焼き、少しもらっていっか？」

「いいよ、いっぺえ作っちまったからさ」

荒千切りキャベツがメッチャあったからなんだけど

「おっちゃんたちにも持ってったらいんじゃねえか？」

「そうだな、いっつもおかずもらってばっかだもんな」

何に入れっかな　この、愛里が汚ったねえっつったタッパーでいっか

「ダイチ、握りメシ食ってけや」

「おう、ありがとう」

とうちゃんは、なんか、昨日のことがなかったみてえにフツターでさ

「どうちゃん、俺、なんか淋しいよ」
「どした？ ヒトミに会いてえのか？」
「ちげえよ」
ねえちゃんに会いてえのはどうちゃんだろ
「今日はどうちゃんと一緒に働けねえんだなってさ」
「昨日は楽しかったな」
「俺、どうちゃんから教わりてえこと、まだまだいっぺえあるよ」
「ダイチに教えることなんてねえよ、ダイチはリッパにやってんじゃねえか」
「そっかな、まだまだなんもわかってねえなって」
昨日どうちゃんの働く姿見て思った
「俺なんて、ずっとなんもわかんねえよ」
怖えよ、どうちゃん あれでなんもわかってねえとかさ
「握りメシと水入れたかな」
「ありがとう」
「軍手も新しくなってよ」
「指先の穴、繕ったからカンベキだよ」
「よかったな」
「どうちゃんのおかげだよ」
「そんじゃ、ケガだけは気をつけてな」
「おう、気いつける、いってきます」
「いってらっしゃい」
メソメソしてる場合じゃねえ
今日から俺はどうちゃんがやってた下っ端仕事を受け継ぐっ

現場着いて すぐに便所掃除
おっし きれいになった ここなりにだけどさ
「森下」
「あ、監督、おはよっす」
「おはよう、トイレ掃除？」
「もう終わりました」
「それじゃ、入ってもいいかな」
「ションベンすか、ウンコっすか？」
「いちいち言わないとダメ？」
「ションベンならハネるんで、終わった後まわり拭かねえと」
「うちの奥さんみたいなこと言うなよ」
「俺がやるんで」
「終わるまで待ってるってこと？」
「ゴミ箱んとこ掃除してますから」
「いいよ、終わったら俺が拭くよ」

「そっすか」
「森下ん家は立ってやれるの？」
「何がっすか？」
「オシッコ」
「立ってやりますね」
「うらやましいな」
「何がすっか？」
「うちは、ハネるからって座ってだよ」
「けっこう飛び散るんすよ、壁とかにも」
「うちの奥さんもそう言ってるよ」
「そんじゃここでは思いっきり立って飛び散らせていいっすよ、俺、掃除するんで」
「そこまで飛び散らせないよ、入るよ」
「おいっす」
とうちゃん、俺、受け継いでっから

「ヤッさん、俺、ちょっと便所行ってきます」
「掃除すんのけえ？」
「仕事中はしねえすよ、シオンベンす」
「ゆっくりなあ」
「シオンベンどうやってゆっくりやるんすか」
「俺の歳では、はあ、チョロチョロとっきゃ出ねえからあ時間かかんだした」
「そうなんすか」
「だいづなら、放水機みてえにドーッと出んだっぺなあ」
「ヤッさん、俺、漏れっから」
「あ、早く、早く行け」
「おいっす」
便所、みんなきれいに使ってくれるようになったな
やっばとうちゃんのおかげだな
床だけ拭いて 便所から出て あれ？ ゴミ箱に頭突っ込んでる人が 誰だ？
現場の人じゃねえな 何やってんのかな？
「なんか探してんすか？」
「わあああっ」
やっば見たことねえ人だ
「な、な、なにも盗んでない・・・よ」
「盗む？ なんも盗むものなんて入ってねえ・・・」
あれ？ もしかして・・・
「おっちゃん、腹へってんじゃね？」
「えっ、あ・・・」
「俺さ、握りメシ持ってっから食わねえ？」

「え？」
「でっけえ握りメシ、美味えよ」
「え、あの・・・」
「食う？」
コクンか
「今持ってくっから、ちょっと待ってて」
監督室の横の手荷物置き場に置いてある保冷バッグから 一個？ 二個だな
卵焼きも持ってくか 走ってたら いた
「んっとさ、ここだと、こっち、人あんま来ねえからさ」
監督室の裏の端っこに連れてった
「これ食って、あと、こっちはお好み焼き風卵焼き、俺作ったんだよ」
俺の顔 不思議そうに見てっけど
「食ってよ」
おっちゃんが すげえ勢いで握りメシにかぶりついてる
「おっちゃん、どんくれえ食ってねえの？」
「どんくらい・・・ さあな」
「俺のとうちゃん、浮浪者だったとき」
「えっ？ あんたの父さん、浮浪者？」
「若けえ頃な、そんなとき、腹へり過ぎてぶっ倒れたってさ」
「えっ」
「それで、他の浮浪者のおっちゃんがジュース買ってくれたって」
「そうか」
「おっちゃん倒れたことねえ？」
「倒れそうになったときは・・・ 何回かあるけどな」
「そっか、気いつけねえとさ、頭打ったりしたらさ」
「あんた・・・ 俺の心配してんのか？」
「するだろ、そりゃ、危ねえもん」
「俺なんかの・・・」
「おっちゃん、名前なんつうの？」
「名前？」
「うん、俺は大一」
「だい・・・ち」
「大根の大に、一二三の一で大一」
「大根て」
おっちゃんがちょっと笑った 笑うといい顔してんじゃん
「おっちゃんの名前は？」
「ただし、正月の正で正」
「すげえわかりやすいな」
「だからショーって呼ばれてたな、昔はな」
「ショーさんか」

「久しぶりだな」
「何が？」
「そう呼ばれんのがさ」
「とうちゃんも名前呼ばれたことねえって」
「だろうな」
「俺みてえなゴミッカスの名前なんて誰もどうでもいいつつてさ」
「そうだな」
「ゴミッカスじゃねえのにさ」
「世間から見たらゴミみたいなもんだよ」
「ショーさん、んなこと言うなよ、俺は一回もんなこと思ったことねえよ」
「あんたは・・・ おもしろいな」
「おもしろえ？」
「俺は・・・ おととしくらいからこんなでさ」
「そんなに？」
「小さい工場やってたんだけどな、契約切られて、負債抱えて」
「下請けだったっつうこと？」
「下請けの下請けの下請けだよ、吹けば飛ぶような小さなところだったからな」
「それで、工場は？」
「失くなっちゃった、女房とも離婚して、家もなんもかも失くして、
最初はなんとかなると思ってたんだけどさ、甘かったな、この歳だし、
働こうにも住民票がないと雇ってもらえなくて」
「とうちゃんも住民票ねえから雇ってもらえなかったって」
「そうか」
「とうちゃんは読み書きできねえし、右脚もケガで曲がなくなってさ」
「そんな、俺より・・・」
「それで浮浪者やってたって」
「あんたも苦労してんだなあ」
「俺は苦労してねえよ」
「それでもさ、そんな擦り切れた服着てさ」
「へ？ や、これは作業用だからさ」
「いいよいいよ、わかってるから」
わかってる？
「ここに日雇いで雇ってもらったのか」
「うん」
「よかったなあ」
「マジよかったよ、すんげえいい人たちばっかだしさ」
「俺は腰やっちまってるから」
「腰？ どしたの？」
「職業病だよ、工場ですっと中腰で仕事してたからな」
「そんな動けねえの？」

「ふつうのことはできるんだけどな、重たいもの運んだりするとな」
「重てえもの運ばなきゃいんじゃないか？」
「こういうとこじゃ、そうもいかないだろ」
「それでも働きてえよな」
「もう・・・ あきらめてるよ」
「あきらめんなよ、俺はなんもできねえけど」
なんもできねえか？　なんかできねえか？　あ！
「ショーさん、俺さ、ここの現場8月いっぱいいきゃいらんねえけどさ」
「そりゃ大変だなあ、次ははないのか」
「次は探すけどさ」
「見つかるといいな」
「俺の心配してくれてんの？」
「そりゃするだろ、なんか、仲間みたいな気がしてさ」
マジか　なんか嬉しいな
「あのさ、明日っから握りメシ、ショーさんに持ってくるからさ」
「えっ？　いや、それは、そこまでは」
「それくれえきゃできねえからさ」
「それくらいって・・・」
「あと、盆休みもいねえけど、毎日握りメシ持ってくるからさ、ここに来てよ」
「そんなこと・・・」
「マジでそんなくれえきゃできなくて、ごめんな」
「なんで・・・ 謝るんだよ・・・ 俺は・・・」
「ショーさん、泣くほどのこっちゃねえよ」
「そんなこと言ってくれるなんて・・・」
他に何ができる？　他に・・・ あ、財布
「ショーさん、俺、今3千円きゃ持ってねえけどさ」
「いいよ、そんな、あんただって困るだろ」
「大丈夫だよ」
suica あるから帰れるし
「これで、何ができかわかんねえけど、ねえよりマジだろ？」
「あんただって、そんなボロボロの財布に」
へ？　ボ、ボロボロ？
「3千円しかないのに」
「俺、もっと金あっから、大丈夫だから」
涙流しながら俺の顔見てっけど　マジ持ってっからさ
「それじゃ・・・ 千円もらうよ」
「3千円持ってってよ」
「千円で充分ありがたいから」
「そんでもさ」
「俺は・・・ あんたどうやって・・・ ありがとう」

「ショーさん、明日待ってっから」
「え？」
「握りメシ持ってくるつつったじゃん」
「ほ・・・本気で？」
「マジだよ、そんでさ、昼に来てくれたらさ、一緒にメシ食おうよ」
「一緒・・・」
え、しゃがみ込んで泣いちゃってんだけど
「ショーさん？ ショーさん」
肩さすったら 俺の手えにぎって
「ありがとう」
「俺は、俺のとうちゃんにやってあげたかったことやってるだけだよ」
「そうか、あんたの父さん、そうだなあ、そうだ」
「だから、ショーさん、明日も俺に会いに来てよ」
「そうか、あんたの父さん」
「うん、俺がショーさんの息子だったら、明日も会いに来てくれるだろ？」
「あんたが・・・俺の・・・」
「待ってっから」
ショーさんが袖で涙拭いて立ち上がった
「これ」
もう一個の握りメシと卵焼き？
「もらってっていいかな」
「いいよ、食ってよ」
「ありがとう」
「そんじゃ、ショーさん、また明日」
ショーさんが少しだけ微笑んで そんで 現場から出ていった
俺は・・・こんなことっきゃできねえんだな
もしとうちゃんが、昔のとうちゃんが 今 俺の目の前に現れても
俺がでるのはこんぐれえで メッチャ無力だ・・・って、ヤッペ！ 仕事！
走って戻った
「ヤッサーーん、スギサーーん、すいません！ マジすいま・・・え？」
泣いてる どした？ 何があった？
「なんかあったんすか？」
「なも、なんもね」「な～んもねえからあ」
「泣いてんじゃねえすか」
「泣いてねっぺ」
「なんすか？ 何があったんすか？」
えっ
俺は 今 おっちゃん二人に抱きしめられてんだけど
何があったんだ？

優しくて温かい

昼休憩になった

どうすっかな コンビニで握りメシでも買うか

「だいつ」「だいつ」

「あ、俺、ちょっとコンビニに」

「いいがらあ、こっちゃん来い」「来へ」

え、昼メシ買わねえとなんだどな

「俺とスギさんよお、ゆんべ呑み過ぎちまってはあ」

「大丈夫っすか？」

「な〜んか腹の調子よくねえんだした」

「薬、監督からもらってきますか」

「そこまでじゃねえんだけんちょ、なあ」「んだ」

「俺の握りメシ一個食ってけっせ」「わのも食ってけ」

「え、そんじゃ、100円ずつ返しますから」

「いらねした」「いらね」

「それでも1個100円でもらってっから」

「牛丼屋でえ半分残してもお半分金返してくんねっぺ」

「ヤッさん、うめごど言った」

「牛丼屋って・・・」

「だいつは牛丼屋行ったことねえのお？」

「ねえっす」

牛丼はどうちゃんが作ってくれっからさ メッチャ美味えんだよ

「いんやいんやいんや」「わいわいわい」

牛丼屋がどうしたんだ？

「だいつ、頼むがらあ食ってけっせ」「食いへ」

「え、あ、そんじゃ、いただきます」

「あとお、ほれ、いつものおおっかあのおかず」「わのかっちゃんのも」

「美味そうっすね、いっつも美味いっすよね」

「わの、いがめんち、けへ」

「いがめんち？」

あ、イカをミンチにして揚げたんか

「うっめえ！」

これはイケんじゃね？ 愛里の弁当にさ 愛里好きそうじゃん

「俺のおみそかんぷら」

みそかんぷら？ あ、小せえじゃがいもの味噌の甘辛煮？

「美味え！」

小せえじゃがいもなら弁当にもいいよな

「だいつが食ってくれっとはあ、おっかあも喜んでよお」「わのかっちゃんもだ」

「俺、ヤッさんとスギさんのおかげで世界広がってます」

「世界ってのはあ、ただのお田舎料理だしだ」

「食ったことねえもんばっかっすよ」

「そっかあ」「んだが」

え、なんで涙ぐんでんだ？ やっぱなんかあったんかな

俺が聞いちゃいけないことなんかな かもしんねえな

あ、愛里から LINE 入ってた

『あなたに言ってもわからないと思いますけど』

俺に言ってもわかんねえこと？

『あまりに感動したので わからないと思うけど書きます』

なんだ？

『今日のアレンジメントは仏壇用のお花を使いました』

仏壇用 あれだろ？ スーパーの入り口とかに置いてある わかるよ

『私はあれだけはどうにもならないと思ってたけど』

『こうなりました』

画像 おお！ なんかすげえ、プロみてえ！

『白い菊を真ん中に短めに置いて』

『ガマの葉を巻いて菊を包むようにした和モダンな作品と』

『小菊は小菊だけでまとめて残りの葉の中に立体的に挿すと自然で可愛い』

ん・・・っと、説明んところはよくわかんねえけど

『あなたにはほぼわからないと思います』

なんでそうやってバツツと切り捨てっかなあ わかんねえけど

『今はあなたのおとうさんに』

とうちゃん？

『明日のアレンジメントの花器を作ってもらっています』

とうちゃんがアレンジメントの 花器ってかきは花器なんか

なんでとうちゃん？

『私一人で感動してたんだけど』

『なんかあなたにも伝えたくて』

そっかそっか 俺にも伝えてえって思ってくれたんか

『俺にはよくわかんねえけど』送信

『メッチャきれいで愛里っばいってことはわかるよ』送信

『優しくて温っけえ』送信

既読ついた

ピコン

『優しくて温かいって』

ピコン

『嬉しい』

ピコン

『私が今いる空気だから』

今いる空気？

『とうちゃんは何作ってんの？』送信

ピコン

『帰ってきたら見せます』

『楽しみにしてる』送信

ピコン

『それじゃまた』

『俺は花はわかんねえけど』送信

『俺にも伝えてくれて嬉しい ありがとう』送信

ピコン

『私が目指している花は』

ピコン

『あなたのお弁当で』

ピコン

『森下家の空気だから』

愛里 俺また心臓ドッキューーンとヤラれた

「あえるじゃん？」「あいりちゃんからのおラブレターかあ？」

「ラブレターって、んなあ」

「だいつとあいりちゃんはラブラブでした」

「ヤッサ〜ん、からかわねえでくださいよお」

メッチャラブっすけどお

「これ、愛里が作った花っす」

ヤッサんとスギさんに画像見せた

「こりゃきれいだなあ」「まんずうめな」

「優しくて温ったけえを目指してんだそうっす」

「優しくてえ」「ぬぐいっでが」

「俺ん家の空気だっつって」

「優しくてえ温ったけってのはあ・・・ そんだあ、だいつはなあ・・・」

「だいつだべ」

えっ なんでまた泣いてんだ？

「あの・・・ なんかあったんすか？」

「なんもお、なあ、なんもねえっぺ」「なんもねがら」

腹痛てえのかな 飲み過ぎで腹痛になったことねえからわかんねえな

飲んだことねえしな

「カズさんはどしてんだあ？」

「なんか愛里の手伝いしてるみてえで」
「カズさん、花もやんのけ？」
「や、なんかよくわかんねえんすけど」
「カズさんはすげえなあ」「んだ、すげや」
「なにがっすか？」
「昨日の仕事っぷりはよお、あっちゃこちゃよ〜く見ててはあ」
そうなんだよな 俺はまだまだだ
「あのまんま働いてたらあ、現場監督になれっぺした」
「わもそう思った」
「そうしたら俺はクビになっちゃうな」
か、監督
「なんもなんもお、そった意味でねしたあ、なあ」「なもさ」
「いいよ、カズオさんは確かにすごいからさ」
「んだっぺ？」「だべ？」
「正社員にならないかって言ったんだけどさ」
「正社員、そりゃいっぺ」「んだ、なればいね」
「断られた」
「な〜んでえ？」「なすて？」
「もっと大切な仕事があるんだろうね」
「なんだっぺ？」「なんだ？」
俺の顔見られても スーパーのパート？
「森下、ちょっと俺の部屋まで来て」
「え、あ、はい」
監督について監督室まで行った

「午前中、この裏で誰かと話してたよね」
「あっ す、すみません、工作中に」
「それはいいんだどさ、知り合い？」
「今日知り合いになりました」
「今日知り合いに、なった？」
「ゴミ箱に頭突っ込んで、腹へってんのかなと思って、
俺の握りメシと卵焼き食う？ つったら食うって、そんでいろんな話して」
「浮浪者ってこと？」
「小せえ工場やってたけど潰れて、工場も家も失くしてって」
「そうか」
「とうちゃんの話したら、なんか意気投合しちゃって」
「意気投合？」
「俺がこの現場で働かせてもらって、よかったなっつって来て」
「そうか、仲間だと思ったんだな ハハハ」

仲間 そう言ってくれたな
「ショーさんは」
「誰？」
「あ、そのおっちゃんっす」
「名前知ってるの？」
「聞いたんで」
「すごいな」
「なにがっすか？」
「浮浪者の名前、聞かないよね、ふつうは」
「そうなんすか？」
「向こうも言わないよね、ふつうは」
「なんでですか？」
「身元知られたら困る場合もあるだろ」
困る？　なんでだ？
「その、なんだっけ？　ショーさん？　どうしたって？」
「働きたくても住民票がねえと仕事見っかんねえって」
「まあそうだよね」
「俺のとうちゃんもそうだったから」
「カズオさんが、そうか」
「それで、ショーさん、職業病で腰やっちまってっから」
「うちの作業員たちもけっこういるんだよ、ギックリだろ」
「そうなんすか？」
「カズオさんはすごいよね、腰に負担のかからない持ち方知ってるよね」
「腰に負担かかんねえ持ち方？」
「お尻と膝を落として腰を曲げない、持ち上げるものはできるだけ体に近づける」
そういえば、とうちゃん、家でもいつもそんなカンジでやってんな
「腰じゃなくて脚や膝の力を使って持ち上げるとかね」
脚曲がんねえときも、でっきるだけそんなカンジでやってたな
あたりめえみてえに見てたから、俺もそういうもんだと思ってやってたけど
「それで、その、なんだっけ、名前」
「ショーさんすか？」
「腰そんなにひどいの？」
「ふつうのことはできるけど、重たいものはムリだっつって」
「森下、あの短時間でよくそこまで聞き出したな」
「聞き出したっつうより、なんか、他人事じゃねえっつうか」
「他人事じゃない？」
「俺のとうちゃんも脚曲がんなくて日雇いハネられて」
「そう言ってたよね」
「あの、監督、お願いがあるんすけど」
「えっ」

なんで身体後ろに引いてんだ？

「なに」

「俺、ショーさんに明日から毎日握りメシ持ってくるって約束して」

「そんな約束したの？」

「はい、まあ俺がここにいるのは8月いっぱいだけっすけど」

「9月には高校始まるからね」

「それまでは毎日持ってくるからって、そんで、昼メシ一緒に食おうって」

「一緒に？」

「そんで、あの、昼休憩るときだけ、ショーさんここに」

監督が口開けて俺のこと見てる ダメなんかな

「あっ ダメなら俺が現場の外出て」

「いいけどさ」

「いいっすか？」

「一人だけにしてくれる？」

「え？」

「その、ショーさん？ だけで勘弁して」

「勘弁？」

「森下が知り合った浮浪者全員連れてくるのだけは勘弁してくれ」

「俺まだショーさんとしか知り合っただけでねえんで」

「まだってさ」

監督が情けねえ顔で力なく笑ってる

「森下はまったく」

「え？」

「思いもつかないことばかりするよな」

「え？ え？」

「ヤッさんとスギさん、こっそり話聞いてたの知ってる？」

「えっ マジっすか」

「それで俺のところに来てさ、なにかできることはないかってさ」

「え・・・」

「今のところないよねって言ったら、だいづに弁当食わせないとって」

それで・・・ 握りメシ・・・ 俺に1個ずつ

「事情はわかったよ」

「あ、はい」

「でも、ショーさんだけだから、それは頼むよ」

「あ、はい、ありがとうございます」

「俺は、森下親子に宿題いっぱい出されてる気分だよ」

「え？」

「もう戻っていいよ」

「おいっす」

ショーさん、明日っから一緒に昼メシ食べるよ

そんで・・

「だいづ、監督さんなんてえ?」「どすた?」

「ヤッさん、スギさん」

「わい、土下座せねで」「土下座なんてはあ、どしたんだあ?」

「腹痛てえなんてウソっすよね」

「ウ、ウソでねっぺ、なあ」「ウソでねや」

「俺に昼メシ食わせてくれるために・・」

「だいづ、泣きてえのはあ俺たちではあ」「んだよ」

「ウソついてまで俺に・・」

「俺らができんのはあそんくれえっだっぺ」「わんつかだ」

「ありがとうございます!」

「俺たちは仲間だったべ」「仲間だべ」

「あの・・ もひとつお願いが」

「なんだ、金か?」「なんぼ?」

「や、金じゃなくて、明日っから、ショーさんも一緒に昼メシ食っても」

「ショ、だれ?」

「俺と話してたおっちゃんす、ショーさんす」

「ショーさんつつうのけ」

「明日っからショーさんに握りメシ持ってくるって約束して」

「そりゃよかったっぺ」「んだ、いがっだ」

「ショーさんも一緒に昼メシ食ってもいいっすか?」

「一緒に?」

「あ、監督には話してあるんで」

「いいに決まってっぺ、なあ」「んだ、おもすれべ」

「ありがとうございます!」

「だいづはあ、優しぐでえ」「ぬぐいな」

「それは・・ ヤッさんとスギさんす・・」

「だいづがいつからあ、俺たちは・・」

なんか三人で泣いてっけど

マジみんな優しくて温ったけえよ

ショーさん、明日、みんなで待ってっから

明日の準備

仕事終わって 真っ直ぐ愛里の部屋

愛里の花見てえじゃん つか 愛里に会いてえじゃん

ドアが開いて

「おかえりなさい」

「愛里」

抱きしめて ああメッチャ好きだ

「ただいま」

「今日は、なんだかずっと、あなたのこと考えてました」

「えっ マジ？」

「なんか、いろいろ」

「愛里！」

「イタイタイタイ！」

「あ、ごめん」

「もう！ あなたの力はハンパなく強くなってんだから！」

「ごめん、愛里、マジごめん」

「いいですけど」

愛里が俺の顔見上げてフツて笑った

そのちょっとイジワルそうな笑い方がさあ メッチャ好きだ

「明日の準備をされていて」

「どうちゃんに手伝ってもらったって、なに？」

「どこから言えばいいのか」

「好きなとっから、愛里の頭に浮かんだのからでいいからさ」

「そうですか」

愛里がフーッて大きく息吐いて

「明日は三日間のレッスンの最終日なんです」

「そっか」

「そして、明日の課題は過酷なんです」

「過酷？」

花に過酷ってどんなだ？ セメントかなんか使うんかな？ だからどうちゃん？

「花材は千円まで」

「かざい？」

「お花は千円以内ってこと」

「へえ」
「そうですね、あなたにとってお花の千円は高いですね」
「や、んな、俺は、わかんねえからさ」
「一本千円のバラを買ったらそれで終わり」
「あ、そっか、それは、うん」
「やめようかな」
「なにを？」
「あなたに説明するの」
「説明してくれよ、俺は知りてえよ、愛里がやってることだからさ」
「本当に？ 全然興味ないでしょ？」
「あるよ、愛里のやってることつうのに興味あっから、マジで」
「まあ・・・ いちおう説明します」
「おう」
「花器は自由」
「かき、あ、花器、あれだろ？ 花瓶とかそういう」
「まあ、そうです」
「そっか、花器は自由か、そっか」
「興味ないなら別にいいですけど」
「あるって、なんでそう決めつけんだよ」
「だって、あなたのやってることにくらべたら私のなんて」
「俺がやってること？」
「イメージですけど、あなたは地球を掘ってるのに、私は」
「俺は地球掘ってねえよ」
「イメージ的に現場の仕事ってそういうカンジがするから」
「俺は現場の便所掃除したりガレキ片付けてるだけだよ」
「それをすることによって、大きな建物が建つんですよ」
「まあ、土木作業は、そうだけどさ」
「私がやってることなんて」
愛里が指先見つめて
「こんな、こーんな小さくて」
「きれいじゃん、送ってくれた写真、メッチャきれいでさ」
「あんなものなくても地球はまわる」
地球？
「あんなものがあってもなくても地球にとっては」
「あ、愛里」
こういうときの愛里は ぜってえテンパってるときだ
「抱っこですか」
「ちげえよ、ちげえから」
抱っこです
愛里が俺の腕ん中でフウウッて息吐いた

「ちょっと、神経がピリピリしちゃって」

「そっか」

「神経ピリピリさせることじゃないのに」

「そんだけ愛里にとっては大切なことなんだろう」

「え・・・」

あ 泣き出した

「愛里」

すげえ一生懸命でさ いっつも一生懸命でさ

「現場のおっちゃんたちもさ、愛里の花見て、きれいで優しくて温ったけえってさ」

「本当？」

「マジで、モッサイ男たちの昼メシんときにさ、あんなきれいな花見せてもらってさ」

「やめてええ、もっと泣いちゃううう」

「あ、んっと」

俺ができることは

「いいよ、泣きてえだけ泣いて、そんで、明日の準備のことおしえてくれよ」

「なんか」

愛里が俺の胸に頭つけて

「ホッとする」

「そっか」

愛里が顔あげた あっ 顔に泥ついちゃった

「愛里、ちょ、顔に」

「やだ、その汚いタオルで」

「泥ついちゃったからさ」

「え？」

愛里がバスルームに走ってった

顔バシャバシャ洗ってる音がする 出てきた

「あなたのおとうさんが作ってくれた花器、見ますか？」

「見てえ」

愛里がリビングの方に行くから俺も後ろついてった

「これです」

ペットボトル 水耕栽培で使うやつ

上1/3を切って、キャップ取って逆さにするやつ・・・だけど

「花器って、これ？」

「これを二本作ってもらいました、ほら」

「作ったっつうか切ったっつうこと？」

「私がやろうとしたら、危ないって」

とうちゃん、ありがとう マジ危ねえよ カッターで手え切るよ

「見て、下の方に小石が入ってるでしょ」

「なんで？」

「重石みたいな？」

「重石」

「こうすれば、オアシスが少なくて済むなって」

「おあしす」

「ほら、文化祭のときも使った緑の」

「ああ、レンガみてえなやつ」

「はい、先生が一人一本用意してくれるんですけど」

愛里がペットボトル手に取って

「この中全部には要らないし、オアシスが足りなくなるし」

ん・っ と 俺は今必死に理解しようとしてっから 愛里

「ここの切った方の部分だけなら型押しみたいにすればいいし」

ああ、そうか、上んところだけ・っ え？

「上んところだけでいいの？ 水いらねえの？」

「そこ！」

ど、どこ？

「あなたの家のベランダのを見て思いついたんです」

「水耕栽培の？」

「この中に水を入れれば、オアシスにも水が補給されて長持ちするって」

「おお！ 愛里、すげえ！」

「私のアイデアではないです、あなたの家のベランダを見て真似しただけ」

「それでもさ、それを花活ける容器にするとかさ、俺じゃ考えつかねえ」

「あなたのところにはいっぱい触発されるものがあるって」

触発？

「私の部屋のベランダの発泡スチロールの箱のミントに花が咲いてて」

「毎年今くれえに咲くな」

「ラベンダーもあるし、ローズマリーも」

「そっか、花はそれ使うんか」

「家にあるお花を使ってもいいって」

「それだと花代タダだよな」

「でも、主役はちがうの」

主役？

「明日の朝、あなたとあなたのおとうさんの秘密基地からもらってきていいですか？」

「なにを？」

「ドクダミ」

「ドクダミ？ メッチャいっぺえあっから、いっくらでもいんじゃね？」

俺ん家の土地じゃねえけどさ

「あれが主役です」

「それでもあれ、臭くね？」

「前に私みたいって言いましたよね」

「や、それは、だから、あの花が白くてきれいで可愛ってことでき」
「だからあれを使いたいの」
「そっか、うん」
「あと、おとうさんに出してもらって、おかあさんが買い物してきたときの」
小せえ袋 黒いやつ かあちゃんがよく買ってくるとこのだな
「これ、持ち手の部分は取って中に折り込んだの」
愛里が白い長い布？ 幅の広いリボン？ 出して
「このロゴを隠したいからこれをグルッとくっつけて」
おお、なんか別なものみてえになった
「この右端のつなぎ目を、このリボンにしたもので隠そうと思って」
なんかメッチャ高げえ箱に見えんな
「この生地、あなたのお尻用の生地を、じゃなくて、私のバッグ作った生地で」
あれか、コーヒで染めたやつか
「これはほんの少しだけ染めたから、ほぼ白だけど、ちょっとくすんでいいカンジ」
すげえな よくそんなこと考えられんな
「この中にこのペットボトルを入れたら、ほら」
おお！ ピッタリ！
「あ、そうだ、おとうさんがイチゴを取っておいてくれてて」
「イチゴ？」
「私がお見舞いに持って行った花に入れた造花のイチゴ、ほら」
「ああ、あれか」
とうちゃん、よく取っといってくれたな とうちゃんなら取っとくけどな
「これをどこかに使うかも」
俺が聞いても 愛里のイメージはすごくて 次から次って すげえよ
「私が、今の先生を好きなのは、好きっていうか尊敬ですけど、
スーパーの花をそのまま活けるより、ちょっと手を加えたらステキになるって、
今日作った仏壇用のお花を使ったものも、思い込みをスッと取り除いてくれて」
花のことをしゃべってる愛里の顔は すげえきれいで
「どんなに汚れないと思うお花でも、みんなが捨てちゃうようなお花でも」
愛里の世界は すげえきれいで
「ちょっと手を加えれば、誰かにきれって思ってもらえるって」
愛里が俺の顔見た 不意打ちみてえに見た
「話聞いてます？」
「聞ってる、メッチャ聞ってる」
「いいです、あなたには興味ないことだから」
「あるって、花のことは、よくわかんねえけど」
「ほら」
「それでもさ、愛里の世界は俺はメッチャ好きだ」
「私の世界？」
「愛里の、なんつうか、頭ん中の、想像の・・・ 底知れねえ想像力」

「なんの役にも立ちませんが」
「そこに戻るなよ」
「だって」
「愛里は、俺の弁当みてえな花目指してるっつってくれたじゃん」
「え・・・ はい」
「俺は、花のことはよくわかんねえけど、それでも愛里が作る花」
俺は本気で言ってんだよ 愛里
「すげえ好きだ、優しくて温ったかくてさ、メッチャ好きだ」
愛里が俺の顔見てて そんで下向いて
「あなたが・・・ 好きって言ってくれるなら、よかったです」
「好きだよ、マジで」
「そうですか」
「これからもさ、愛里の世界、俺に話してくれよ」
「なんの役にも立ちませんが」
「俺の役に立ってるじゃん」
「あなたの」
「俺、すげえしあわせだから、愛里といるとき」
「あなたって、どうしてそう」
「え、なに？」
「シャワーしなくていいんですか？ 買い物しなくていいんですか？」
「あ、そうだった」
「私はまだ明日の準備をするので、あとであなたの家に行きます」
「おう、待ってっから」
「はい」
「愛里」
「ダメ！」
「へ？ なんで？ 一回だけ」
「あなたに・・・されると、なんか、全身の力が抜けちゃって」
「あ？」
「そのあと、しばらくポーッとしちゃって何もできなくなるから」
「なんで？」
「わかんないけど」
「一回だけ」
「ダメ」
抱きよせて 愛里 好きだ メッチャ好き
「もう！」
愛里が俺の胸んとこバンバン叩いて おもしろえ
「さっさとシャワー浴びて！」
もう一回だけ
「もう！」

愛里がバタンて床に

「愛里？」

「大ッキライ！」

「ウソ・・・」

「ウソだけど」

「なんだよお、愛里い」

「いいから、早く行って！」

「おいっす」

なんかわかんねえけど メッチャ可愛い たまんねえ！

愛里からの

かあちゃんも帰ってきて

愛里が仏壇用の花を使って作ったのを褒めてた

「これは先生がデザインを決めたの？」

「大まかにこんなカンジって、あとは自分です」

愛里が携帯出して、何か探して

「先生の SNS なんですけど、これが今日の作品で真ん中が先生のです」

「この先生もステキなセンスを持ってるわね」

「そうなんです、斬新なのにとっても自然で」

「愛里さんのは先生の真似じゃなくて愛里さん色が出ていてとってもステキ」

「そう・・・ですか？」

俺には愛里の以外全部おんなしに見える・・・なんてこと言ったら、

また愛里が、興味ねえとか言うから言えねえけど、愛里のには興味あんだよ

「愛里さんはお花の世界で仕事していきたいと思わないの？」

「思わないです」

「どうして？」

「趣味だから楽しいって思えるけど、仕事にしたら・・・ 辞めちゃうと思う」

「そうね、好きなことを仕事にって案外大変なのよね」

「私は、誰かのために作る方が合ってる気がして」

「愛里さんのセンスとイメージ力をお花の世界限定にするのはもったいないわね」

「私は、入れそうな会社で入れてくれるところがあれば」

「入りたい会社があるの？」

「いえ、特には」

「何がやりたいの？」

「何がやれるのか・・・ 経理だけは絶対にダメです」

「私が会社の人事なら、愛里さんを経理にはしないわよ ハハハ」

「ですよね」

「まだ時間はあるから、そのうち見つかるわよ」

「そうでしょうか、お茶くらいはできますけど、コピーはやったことないし、

人見知りなので受付もどうなのか・・・」

「どうして事務職限定なの？」

「事務職って、何ですか？」

かあちゃん、仕事モードに入んねえでくれよ

俺は、愛里には好きなことして暮らさせてあげてえんだよ
じっくりゆっくり時間かけてさ
「愛里さんが言ったような」
「かあちゃんっ」
「なによ？」
「晩メシできましたっ」
「あ、そう」
愛里が俺をボーッとした顔で見て　そんで　目えそらした
え？　なんで？　どした？
「ダイチ、なにボーッと突っ立ってるの？　夕食！」
「あ、おう」
あれじゃね？　かあちゃんが仕事モードに入ってガンガン聞くからさ
愛里は疲れちまってさ　そうかな？　愛里の部屋でキス何回も拒否られて
やったけど　それか？
「ダイチ！」
「あ、はい」

晩メシ食い終わって
愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってる
俺ととうちゃんはキッチンで　かあちゃん、また仕事モードに入んねえでくれよ
「ダイチ、どした？」
「や、なんか、かあちゃんが愛里にいろいろさ」
「美里はアイリちゃんが可愛くてしゃあねえんだよ」
「うん、可愛いからさ」
「可愛いなあ、今日もよ、こんくれえのペットボトルあるかって来てよ」
「ペットボトル、とうちゃんが探してきたんか」
「あんくれえのはけっこう捨ててあっからよ」
「そんでとうちゃんが切ってくれたんだよな」
「危なっかしくてよ、俺がやっからって、ついな」
「とうちゃんがやってくれてよかったよ、あれけっこうコツ要るからさ」
「切ったらよ、すげえ喜んでくれてよ、可愛いなあ」
「可愛いよな」
「ヒトミとはちがった可愛さつつうかよ」
「ねえちゃんは・・・」
ねえちゃんのどこを可愛いと思うのか俺にはわかんねえけど
「卵焼き、おっちゃんたち喜んでくれたんか？」
「あ！」
そうだよ、とうちゃんに頼まねえと
「とうちゃん、明日っから握りメシ、もう二個作ってくんねえかな」

「足んねえんか」
「じゃなくてよ、知り合いっつうか友だちっつうか、できてよ」
「新しく入った人か」
「じゃねえんだよ、ゴミ箱に頭突っ込んでよ」
「ゴミ箱に頭？ あ！ 俺とおんなし？」
「とうちゃんと同業者」
「同業者って、仕事ねえから浮浪者なんだけどよ」
「ハハハ、そっか」
「ダイチはおもしれえなあ」
「そんでさ、俺の握りメシと卵焼きあげてさ、一緒にしゃべってさ」
「そりゃ、嬉しいな」
「なんかさ、なんつうの、親しみっつうか、そういうの感じてさ」
「ダイチと同年くれか」
「とうちゃんよか上、やっさんとスギさんとおんなしくれえか上かな」
「ダイチは誰とでも仲良くなれんだもんな」
「俺、同級生よかおっちゃんたちの方が一緒にいて楽しくてさ」
「おっちゃんたちもダイチといて楽しそうだったもんな」
「そんで、その人ショーさんっつうんだけどさ」
「ショーさんか」
「明日っから握りメシ持ってくるから一緒に昼食おうって約束してさ」
「そりゃ、ありがてえな」
「とうちゃんだったら嬉しい？ とうちゃんが浮浪者だったとき、俺が現れて、
握りメシ一緒に食おうっつって、一緒にしゃべってさ」
「ダイチが来てくれたら嬉しいな」
「マジ？」
「握りメシもらわなくてもよ、ダイチといたら楽しかったらうな」
「俺、浮浪者のとうちゃん見つけたら、ぜってえ連れて帰っから」
「俺を？」
「ぜってえ連れて帰る、俺は未来の息子だっつってさ」
「連れてこないでよ！」
かあちゃんっ
「そのホームレス、連れてきたりしないでよ」
「ショーさんは連れてこねえよ」
とうちゃんのこと話してたんだよ つか、聞いてるってさ
「ここはホームレス支援センターじゃないんだからね」
「わかってるよ」
「あんたは連れてきそうで怖いのよ！」
ハァァァ？
「かあちゃんは連れてきちまったじゃん、とうちゃんのこと」
あ、かあちゃんが黙った 言い返せねえかあちゃん初めて見た

よくやった 俺！
「ホームレスは一家に一人！」
なんだよそれ？

愛里の部屋の玄関

「愛里、明日の花、俺、楽しみにしてっからさ」
「え？」
「写真送ってくれよ、ヤッさんとスギさんにも見せてえから」
「はい」
「俺ととうちゃんの秘密基地のドクダミ使ってくれんだからさ、
なんつうか、俺は花のことわかんねえけど、それでも、愛里の花は好きだ」

愛里が下向いて

「明日のアレンジメントのイメージは・・・」

イメージ

「あなたと」

俺？

「あなたのおとうさんとおかあさんの中にいる」

とうちゃんとかあちゃんの中？

「私なんです」

「え？」

「だから」

愛里がやっ顔あげた

「あなたには見て欲しい」

「愛・・・」

あ キスしたら それでも や けど

「愛里、キスしていい？」

「なんで今さら聞くの？」

「夕方はダメって」

愛里が俺の好きな、ちょっと睨みみてえな目えして

「だったらダメ」

「え？ い、いつまで？」

「一生」

「えっ や、愛里、んな、俺、なんかした？ したならごめん」

「あなたって」

フッて笑うカンジも好きだけどさ 今はさ

「おやすみなさい」

「え・・・」

えっ 今 俺の くちびるに 軽く 愛里・・・から

「それじゃまた」

「愛里」

抱きよせて 俺から

「ダメつつつても、俺はする」

「そうですよね」

「そうですよ」

「そうですか」

「おう」

正直 俺は今メッチャ顔赤くなってる自覚ある

愛里からって んなさ ドッキドキすんだろ

「それじゃ、また」

「おう」

ドアが閉まって速攻で鍵閉まった

シャワー浴びっか

緊急事態発生

今日は朝から暑っちな つか、蒸し暑いな
そろそろ昼休憩 ショーさん来てくれっかな
「だいづ」
ヤッさん
「なんすか？」
「あそこっからチョロッチョロ顔出してんのお、昨日のお、あれ、ほれ」
え？ あれ？ なんかちょっと、でも、だよな
「ショーさん？」
「あ、それだあ、ショーさん、遠慮してんだっぺ」
「俺、ちょっと行ってきます」
「行ってやれ」
出入口んところに走ってたら
「ショーさん！ ヒゲねえから誰かと思った」
ショーさんがちょっと照れたみてえに頭掻いて
「昨日もらった千円で、贅沢させてもらった」
「贅沢？」
「銭湯」
「風呂入ったんか、だからヒゲ剃ってさ」
「おかげで、ちょっと人間に戻った気がしたよ」
「とうちゃんもよく言うんだよ、人間になったみてえな気がするってさ」
「わかるなあ、わかる」
ショーさんの笑った顔は味があって、俺、好きだな
「ショーさん、もう昼休憩になっからさ、こっち来なよ」
「今日は大一さんにお礼言いに来ただけだよ」
「俺、ショーさんの分の握りメシ、とうちゃんに作ってもらったからさ」
「え？」
「とうちゃんに、友だちできたっつってさ」
「え、いや、これを返しに来たんだ」
スーパーの袋ん中から タッパーか
「いちおう公園の水飲み場で洗ったけど」
「そんなんしないでいいのに、それでも、ありがとう」
「大一さん、ありがとうな」

「大一でいいよ、さん要らねえよ」
「そ、れじゃ・・・ ダイちゃん？」
「そんじゃダイちゃんです」
「あ、それじゃ、ダイちゃん昨日はありがとうな」
「卵焼き美味かった？」
「美味かった、あれは美味かったな、お好み焼きみたいでさ」
「そっか、よかった」
「それじゃ、俺は」
「ちょちょちょ、どこ行くんだよ、握りメシ食おうよ」
「それでも、やっぱり俺が・・・」
「仲間のおっちゃんたちには言ってるし、監督にも言ってるから」
「えっ？」
「ほら、昼休憩終わっちゃうからさ、行こう」
ショーさんの手え引っ張って、ヤッさんとスギさんのところに行った
「ヤッさん、スギさん、俺の友だちのショーさんです」
「だいつの友だちってあ、俺の方が年近けえっべ」「わのけやぐだんだ」
「あの・・・ お邪魔・・・します」
「な～んもおジャマでねした」「ほれ、こさ、ねまれ」
「え？ ねま・・・」
ショーさんがスギさんの顔見てっけど 言葉わかんねえよな
「ほれ、ここに座ってくんちえ」「んだ」
ショーさんにも握りメシ渡して
「俺のおっかあが作ったおかず食うけえ？」「わのかっちゃんのもけへ」
ショーさんは、スギさんが何か言うといちいち顔見て 最初の俺みてえだな
「ほれ、いっくらでもお」「たんげ作っでらんだ」
ヤッさんとスギさんのおかず入れてるタッパー また大きいのになってる
ショーさんのため？ だよな、この二人は、そんで奥さんたちもさあ
「だいつも、ほれ」「だいつ、けへ」
「ヤッさん、スギさん、ありがとうございます」
「な～にお辞儀してんだした？」「わい、どってんすじゃ」
ショーさんがジューッとスギさんを見てる 日本人だよ、スギさんは
「スギさん、これえ、スギさんの好きないかにんじんだあ」
「わい、めわぐだ」
「めいわく！」
ショ、ショーさん？
「ショーさん、あのさ、めいわくって言うのは」
「もしかして・・・ 秋田？」
え？ わかんの？
「わ、あぎだ」
「やっぱりそうか、なんか聞いたことあるなと思ってた」

「ショーさんはあ、秋田なんけ？」
「いや、俺はこっちだけど、俺がやってた工場、従業員 5~6 人の小さいとこで、
秋田から来た子がいたんだよ、最初は何言ってるのかわからなくてさ」
「だっぺえ」「わがねがな」
「三時に菓子パンとか饅頭とか出してやると」
いい工場だな 三時のおやつ出してくれるなんてさ
「めいわくだめいわくだって」
「そこお、俺もはあ、最初、な~に迷惑ってってケンカになったんだした」
「んだな」
「ニコニコしながらめいわくだって言うからさ」
「わがったが？」
「わかるようになった、ありがたいて意味だって」
スギさんとヤッさんが拍手してるよ
「だば、わしゃべってっごど、なあしゃべってっがわがんのが」
「わかるよ」
おおおお ショーさんすげえ 俺はまだまだわかんねえよ
「その秋田の子お、今どうしてんだあ？」
「10 年くらい前に秋田に帰って結婚したってハガキが来たな」
「そりゃめでてしたあ」「いがったな」
「よかった、本当に・・・俺みたいには・・・」
小さな工場で、三時のおやつ出してくれるような工場で、
従業員の方言を理解して、そんで・・・すげえいい社長だよ、ショーさん
「おめもたんだでねがったな」
「俺が甲斐性無しだからさ」
「なごとねや」
会話が成立してるよ すげえよ
おっちゃんたち、なんかメッチャ盛り上がってるよ
あ、LINE 来てた
『先生がちゃんとした撮影機材で撮ってくれました』
愛里だ！
『あなたにいちばんに見せたかったから速攻で送ります』
花の写真
すげえ メッチャすげえ
ドクタミが溢れるみてえにさ ミントの花やラベンダーが、なんつうんだ
どっかの野原？ 森？ 自然に咲いてるみてえにさ
リボンの真ん中？ あのイチゴが二個長さ変えてついてメッチャ可愛い
『タイトルは Under the forest』
森の下で？
『英語でかっこつけたけど w』
『森下』

愛里 俺は 泣きそうになってる ヤベエ 泣く つか泣いてる
「だいづ? 泣いてんのけ?」「どすた?」
「これ・・ 見てください」
おっちゃんたちに愛里の花の写真見せた
「いんやいんやいんや」「わいわいわい」「はああああ」
「愛里が活けたんす」
「あいりって?」「だいづの嫁っこ」「スギさん、嫁でねしたあ、カノジョ」
「タイトルは森下だっつって」
「森下ってえ、だいづの名字?」
「そうっす」
「これは・・ ドクダミでねえのけ?」
「俺ん家の近くの空き地に咲いてんのを使って」
「いんやいんや、こんなにきれいだったべか」「まんずきれいだ」
「これ、全部タダなんす」
「タダ?」「金かがってねの?」
「花は発泡スチロールの箱でとうちゃんが植えてるやつで、
ペットボトル切って、それに活けてて、この黒いのは買い物袋で」
「いんやいんやいんや」「わいわいわい」「すごいなあ」
「このリボンみてえなのは、俺の、この継ぎあてた布使ってて」
「さすがだいづの嫁っこだ」「嫁でねえけんちょ、さすがだいづのカノジョだっぺ」
「この、ダイちゃんの、お嫁、カノジョ? お花の先生?」
「や、習いに行っただけっす」
「きれいだなあ」
「なんだっぺ、すんげえきれいだけんちょ、ホッとすっぺ」「んだな」
「そうっすよね、そうなんすよ、愛里の花はそうなんすよ」
「ダイちゃんは森下って、父さんが愛知とか神奈川出身か?」
「とうちゃんは森下駅の便所に捨てられてたんで」
「えっ」「えっ」「えっ」
「そんで森下で、一男は役所の人がテキト~につけた名前だって」
「そ・・」「そ・・」「そ・・」
「ちょうど見つかった日の新聞紙に包まれてたんで、その日に生まれたんじゃ」
えっ? おっちゃんたち、なんで泣いてんの?
「なんで泣いてるんすか?」
「や・・ カズオさんはあ、すげえ人だあ」「んだ」
ショーさんまで泣きながら顔いてっけど?
ショーさんはまだとうちゃんに会ったことねえよな
ピコン あっ 愛里から LINE
『あなたに相談したいことがあります』
相談? なんだ?
ピコン

『4時までに返事をしないと』

ピコン

『どうしよう』

何があった？

ピコン

『やっぱりいいです』

ピコン

『断ります』

断る？ 何があった？

『愛里 何があった？』送信

ピコン

『いいんです断ります』

なんだ？ どした？ 何があったんだ？

『今から帰る』送信

『俺が帰るまで断るな』送信

ピコン

『いいから 仕事 ごめんなさい 大丈夫』

『帰る 待ってて』送信

「ヤッさん、スギさん、俺、ちょっと、監督んところに」

ダッシュで監督室行って

「監督！」

「なに、どうした？」

「今からあがらせてくださいっ」

「具合でも悪くなった？」

「じゃねえっす」

「家で何かあったの？」

「はいっ 緊急事態発生しましたっ」

「わかった、いいよ」

「ありがとうございますっ」

「あわてて森下が事故に遭わないようにな」

「はいっ」

そんで、おっちゃんたちんところに戻って

「ヤッさん、スギさん、俺、今から帰りますっ」

「なんだ？ なんかあったんけ？」「どすた？」

「愛里に緊急事態発生で」

「じ、陣痛？」「ややご？」

「あ、や、じゃなくて、なんか、とにかく緊急事態発生で」

「そんじゃ、早く！」「行げ！」

「ショーさんのこと、お願いしますっ」

「俺のことはいいからさ、早く」

「ショーさん、これ、冷てえ水、まだ少し凍ってっから飲んで」

「あ、うん、ありがとう、早く！」

「だいつ、便所とゴミ箱はあ、俺だちがやっからあ」

「ありがとうございますっ、そんじゃ」

空の保冷バッグ抱えて走った

愛里！ 何があったんかわかんねえけど、俺行くから！ 今行くから！

何を断るんかわかんねえけどさ、俺が行くまで断るなよ！

行くからさ！ 愛里、待っててくれよ！

愛里の相談

電車の中でも愛里に LINE した
『もう電車に乗ってる』送信
ピコン
『どうして 戻って 仕事』
『俺は愛里の相談に乗りたい』送信
ピコン
『本当に大したことじゃないんです』
ピコン
『今からでも戻って仕事してください』
『イヤだ』送信
既読ついたけど返信がねえ
なにをを考えてんのかな そんなもさ
『俺が帰るまでは断らないでほしい』送信
『正直何の話なのかわかんねえけど』送信
『愛里のどこ戻ったら聞くから待ってて』送信
ピコン
『はい』
おっしゃ！

電車下りてバス乗って
もう少しで俺ん家の近くのバス停に着くってときに どしゃ降りだな
蒸し暑かったもんな
バス停着いた 走る どしゃ降りの雨の中走って
『今マンションの前』送信
『今からエレベーターに乗る』送信
エレベーターのドアが開いて 二階に着いて
愛里の部屋の前
ドアホン鳴らしたら ドアが開いて
愛里が俺のこと見て泣きそうな顔で
「え・・・えええええ」
「愛里、何があった？」

「どうしよう、えっと、あ、タオル持ってきます」
「タオル？」
「びしょ濡れだから」
あ、そっか
愛里がバスルームからバスタオル持ってきて
「ごめんなさい」
つって差し出した
「何があった？」
「だから・・・あなたがわざわざ帰ってくるようなことじゃなくて」
「俺にとって愛里は最優先なんだよ」
「優先されるほどのことじゃないんです」
「愛里が俺に相談してえっつうならさ」
「ごめんなさい、あのときは気が、気が、なんだっけ？ 気が」
「気が 動転？」
「それです、ああもう言葉まで浮かばなくなっちゃってる」
「どした？ 何があった？」
「えっと・・・ あ・・・」
え？ 愛里がしゃがみ込んだ
「愛里、どした？」
「ちょっと・・・ 貧血」
そんななるくれえのことが起きたんか？
「生理後半は・・・ いつもこうだから」
あ、それか
「愛里、寝た方がいんじゃない？」
「そこまでじゃ、ていうか、そんな時間ない」
「そんじゃ、ソファに横になってさ」
愛里の手えにぎって リビングに入って
愛里のことソファに寝かせて 俺は愛里の横の床に座った
「水かなんか持ってきてやっか？」
愛里がゆっくり首を振った
「愛里、俺に相談してえことって、なに？」
「すごくすごくすっごおおくバカみたいに小さいことで」
「うん、なに？」
愛里がソファに横になったまま俺の顔見て
「何から言えばいいんだろう」
「何からでもいいよ」
今度は天井見て
「今日が・・・ 教室の最終日で」
「うん」
「先生が私のをすごく気に入ったって言ってくれて」

「きれいだったよ」
「そうですか」
「なんつうかな、暗い森中に入ってったら、ポッとあの花があるみてえなさ」
「え？」
「すげえきれいで、ドクダミの花があんなきれいなんでさ」
「きれいに見えましたか？」
「うん、そんでミントの花やラベンダーが、森中に咲いてるみてえで」
「森の中に」
「おっちゃんたちも、きれいで、そんでなんかホッとするつつつた」
「よかった」
「うん、俺、感動したもん」
「伝わった」
「ん？」
「私が作りたかった空気、あなたに伝わって、よかった」
「愛里の花、俺はマジで好きだ」
「よかったです」
愛里がホットしたみてえに目え閉じた
「愛里、話ってそれだけ？」
「あっ ちがう」
愛里が起き上がってソファに座った
「それじゃない、それじゃなくて」
「そんじゃ、なに？」
「えっと、私、じゃなくて、先生は、ていうか」
俺は愛里の隣りに座って 愛里の肩抱いて
「レッスンが終わった後、いつも先生が一人で片付けてて」
「うん」
「私、手伝ってたんです」
そうなんか
「片付けてるって言っても、テーブルの上にはシートが敷いてあるので、
その上のオアシスの細かい、そういうのとかをザッとゴミ袋に入れたり」
愛里が 掃除 すげえ
「切った枝とかお花を入れるゴミ箱があって、その中身をゴミ袋に入れるとか、
それくらいなんですけど、なんとなく手伝って・・・
たまたま切り捨てた枝についてる葉っぱとかお花を拾って、
これってどうにかアレンジできないかなって思っていると、
先生がオアシスの欠片っていうか、それに挿して見せてくれて、
そういうのが楽しくてやってただけなんですけど」
「そっか」
「今日も手伝って、終わって帰ろうとしたら、先生が・・・」
愛里が両頬に手えあてて下向いちまった

「先生が？ どした？」
「明日からまた三日間のレッスンが始まるんですけど・・・」
「その三日間、午前と午後、手伝ってくれないかって」
「そっか」
「手伝うのはいいんですけど・・・」
「けど？」
「バイトでって」
「バイト？」
「午前 1000 円午後 1000 円、1 日 2000 円で」
「すげえじゃん」
愛里がメッチャ首振りながら
「お金をもらおうとか」
「先生がそう言ったんだろ？」
「そうだけど、1 日 2000 円もなんて」
「相場はバイトの時給 1000 円だから安いんじゃない？」
「先生も最初は時給 1000 円で 1 日 4000 円で」
「んっと？」
「私がそんなにももらえないですって言ったら、ていうか、お金もらうって」
「バイトだからじゃね？」
「やっぱり断ります」
「なんで？」
「だって、お金を支払ってもら理由が何もないんですよ？」
「片付け手伝うんだろ？」
「あんなこと、お金をもらうほどの片付けじゃないんです」
「そんでもさ」
「やっぱり断ります」
「ちょ、ちょ、ちょっとだけ、聞きてえんだけどさ」
「なんですか」
「お金もらわなかったら」
「でも先生が」
「うん、だからさ、たとえば、お金もらわなかったとして」
「お金をもらわなかったとして・・・」
「愛里は、手伝いてえの？ 手伝いたくねえの？」
「手伝いたいです」
「それは、なんで？」
「先生のアイデアとか技術とかもっと見れるし」
「んで？」
「明日からのレッスンは今日までのと違うっていうから見てみたいし」
愛里は何を怖がってんだ？
「レッスンの時間は私も後ろで受けていいって」

「すげえじゃん、ただで受けられんなんてさ」
愛里が俺の方向いた
「私言ったんです、お金をもらわなくても手伝いますって」
「それでも先生はバイトでつつったんだよな」
「バイトだったら遠慮なくいろいろ頼めるからって」
だよな 金も払わねえで手伝わせるのは気い引けるよな
「お金もらわなくてもいろいろ頼んでくれていいのに」
「金もらうのことの何がいけねえの？」
「いけないんじゃないくて、その金額に見合ったことができる自信がない」
それか 金額に見合った反応する自信 金額に見合った・・・
「あのさ、今まで手伝ってたんだろ？」
「はい」
「それで、バイトになったら、何かやること変わるの？」
「先生の説明ではそんなに、午後のレッスンが終わったら、
翌日に使うオアシスを水につけることくらいは違いますけど」
「その、オアシス？ 水につけるって、むずかしいの？」
「大きな容器にお水入れてそこに投入するだけ」
「そんなことができるじゃん」
「でも、そこに金銭のやり取りが発生すると」
「そっか、愛里はバイトしたことねえんだもんな」
「ないです、バイトをするという発想もありませんでした」
「そんな、これからもバイトする気はねえの？」
「私を雇ってくれるところなんて・・・あると思えない」
あるじゃん、今、雇いてえって言われてんじゃん
かなりテンパってんな 状況把握できてねえもんな
「そんな、やんなくていいよ」
「え？」
「愛里がイヤならさ、やらなくていいよ」
「そう・・・ですよ」
愛里は 本当はさ
「私がバイトなんて・・・ムリですよ」
やりてえんだろ
「俺としてはちょ～っと残念だけどさ」
「残念？ 何がですか？」
「愛里が稼いだ金でなんか買ってもらいたかったなあ」
「なんか？ なんか・・・とは？」
「んっとさ」
ヤベ そこまで考えなかった んっと あ！
ズボンの後ろポケットから
「これ」

「え、なにそれ？」
「財布」
「それって・・・ 小学校の雑誌のおまけに付いてきたのですか？」
「ちげえよ買ったんだよ、小学生んとき」
「え、ちょっと待って、あなたのお財布って、もっとちゃんとしたので」
「あれは高校入ったときかあちゃんが買ってくれた」
「ふたつ持ってますよね？」
「もうひとつは中学んとき使ってたやつ」
「なのに、なぜ・・・ これ？」
「これビニール製だからさ、現場で落としても汚れねえじゃん」
「これ以上汚れようがあるんですか？」
え、そんなか？
「これと同じものを買ってこと？」
「まあ、こんくれえの？」
「いくらだったんですか？」
「これ買ったときは・・・ シンシンおじちゃんからお年玉もらって」
「Shin からお年玉？」
「そんなから・・・ 500円とちょいくれえだったかな」
「これって・・・ 何かのキャラが・・・ 薄くなっちゃってわかんない」
「ケロロ軍曹」
「えええっ？ ケロロ軍曹？ ふつう男の子ってスパイダーマンとか」
「安かったから」
「ああ、そうですか」
「この前さ、浮浪者のおっちゃんと仲良くなったんだけとさ」
「あなたのおかあさんがホームレスは一家に一人って言ってた人ですか」
「え？ あ、うん、そのおっちゃんにボロボロの財布って言われちまってさ」
「言うでしょうね言いますよこれを見たら誰でもそう言うと思う」
んな一気にたたみ込むみてえに言わなくてもさ
「自信がないです」
ヤベ 財布買うつつうことが負担になっちゃったか
「や、もし愛里がバイトしたらつつうだけの？ もしっただけで」
「ケロロ軍曹のお財布を見つける自信がない」
そこ？
「や、ケロロ軍曹にはこだわってねえから」
「どこにこだわってるんですか？」
「どこ、んっと、安くて？ ビニール製つつうとこ？」
愛里がジーッと俺の財布見て
「それじゃ・・・ 私は・・・」
俺の財布見たまま
「あなたの現場用のお財布を買うために稼ぐという・・・ ことですか？」

え？

「あ、や、もし愛里がバイトしたら買って欲しかったなあっつうだけでさ」

「予算は？」

え？

「んっと・・・ 1000 円以内？」

「それだと初日の午前中だけで買えますけど？」

「それでいいよ」

「え？」

「初日の午前中だけやってさ、それでイヤになったら辞めていいよ」

愛里が驚いた顔になって俺のこと見て そんで目から涙が・・・

「それで・・・ いいの？」

「いいよ、俺の財布買う分だけ稼いだらさ」

「え・・・」

愛里が俺の胸んところに頭つけて泣いて

「なんか・・・なんか、ホッとして・・・」

「そっか」

俺は愛里のこと抱きしめて

「あなたのお財布を買う分だけなら・・・ できるかも・・・」

そんで声出して泣いてさ

「愛里、俺の財布、買ってくれる？」

俺の腕ん中でコクンでうなずいて

「あなたは・・・ 私のために・・・ 仕事の途中で・・・」

「ったりめえだろ、愛里のことがいっちゃん大切なんだからさ」

「帰ってくると思わなかった」

「帰ってくるよ、愛里のためなら、ぜってえ帰ってくる」

愛里が 子どもみてえに声あげて泣いて 俺に抱きついて 声あげて

俺は 愛里の頭の上にそっと顎のせて

「必ず帰ってくるから」

愛里がコクンでうなずいて 顔あげた

涙で濡れた顔がきれいで 泣いて赤くなってる鼻がメッチャ可愛くて

「私、バイトする」

「マジで？」

「あなたのお財布分だけ」

「メッチャ嬉しい」

マジ嬉しい 財布のことだけじゃなくてさ

愛里が急に真顔になって

「ケロロ軍曹じゃなくていいんですよね」

「ケロロ軍曹じゃなくていい」

「だったら、なんとか探します、1000 円以内」

「おう」

愛里がまた俺の胸に顔つけて

「私、絶対、絶対言っちゃいけないと思ってて」

「ん？ なに？」

「淋しいって」

えっ

「あなたはすごく一生懸命働いてて、私のためになって働いてくれてて」

愛里 俺は・・・

「だから、淋しいって言っちゃいけないって」

「愛里、ごめん、俺、愛里の気持ち、なんも考えてなかったよな」

「私は働いてるあなたも好きだから」

「それでもさ、愛里に淋しい思いさせてんなんてさ」

「私が困ってるときには帰ってきてくれるから」

俺を見上げた目から また涙がホロホロこぼれて

「絶対帰ってくるって言うてくれるから」

「愛里、俺、バイトやめる」

「え？」

「愛里のこと淋しい思いさせてバイトなんてさ」

「私がバイトするって言ったのに、なんであなたがバイトやめるの？」

「愛里が淋しいのに俺がバイトしていねえって」

「だから絶対言っちゃいけないと思ってたの、あなた絶対そうなるから」

「え？」

「私は、あなたが働いて帰ってきて、泥だらけの作業服のまま玄関に立ってて」

「愛里」

「今日もいっぱい働いてきてくれたんだなって」

愛里・・・

「それがしあわせだから、言いたくなかった、淋しいよりしあわせだから」

俺はくちびる嚙んで必死に

「だから、明日もこれからも働いてきてほしい」

「愛里・・・ 本気で？」

「本当にそう思ってるから」

「それでもさ」

「お花」

「え？」

「見ますか？」

「え、うん、見てえ」

「キッチンに」

「キッチン？」

「持って帰ったらちょっと形が崩れたから直してて」

「そっか」

キッチンに入ったら カウンターの上に愛里が作った花

写真で見るよりもっと、なんつうか 愛里だ

「このラベンダーがちょっと曲がっちゃっ、えっ？　なんで泣いてるの？」

「え、や、なんつうか、か、感動？」

「そこまで？」

「感動すっだろ、こんなきれいで、そんで、タイトルが・・・」

Under the forest

「森下・・・ってさ」

「優しくて温かいですか？」

「優しくて・・・温ったけえ」

「私にとって、森下家は優しくて温かいから」

俺はもう

「愛里」

抱きしめて 愛里に泣いてる顔見られねえように

「モリシタダイチ」

え？

「ありがとう」

声出さねえようにすんのが 精一杯になっちまってて

「そばにいてくれて」

俺はもう

「や・・・めろ」

俺はもう たまんなくなって

「愛里・・・大好き・・・だよ マジで」

「はい」

「マジで」

愛里を抱きしめたまま 泣いてた

ビニールの財布

家に帰ったら

とうちゃんが玄関のたたき掃除してた

「ダイチ！ 雨で現場終わっちゃったんか」

「愛里が相談があるっつうから帰ってきた」

「そっか、アイリちゃんのことならな」

「うん、帰ってきてよかった」

マジよかった

シャワー浴びて部屋に戻ったら

愛里から LINE 来てた

『先生に電話しました』

そっかそっか

『正直に 初めてバイトをするので不安だから』

『明日午前中だけやってみますって言いました』

だな、そのまんま正直に言った方がいいな

『先生はわかってくれました』

よかったな

『ちょっとまだ不安はあるけど』

『あなたのお財布のためだと思うとがんばれそう』

愛里 俺は 本当は財布なんてどうでもいいんだよ

愛里は本当はやりてえっつうのがわかったからさ

ちっとでもさ マジで午前中だけでもさ

『俺の財布のために稼いでくだせえ』 送信

ピコン

『1000円以内のもので』

ピコン

『今のところ見つけられたのがこういうのだけで』

ピコン

ピコン

俺は今 メッチャ感動してる

愛里はもう俺の財布を探し始めてる 本気で

つまりは本気でバイトする気になってるってことで
ピコン
『これは 1000 円の無駄遣い』
『んなことねえよ 可愛いじゃん』送信
ピコン
『あなたが 5 歳ならこれを買いますけど』
ピコン
『こんなの持ってる高校生男子はキモい』
マジか そんなじゃダメだな 愛里にキモいって思われたくねえよ
ピコン
『でも』
ピコン
『今あなたが持っているのよりはマシですけど』
マジで? そんなか?
ピコン
『いっそあなたが作ったらいんじゃないですか?』
え 俺?
ピコン
『ビニール製で 1000 円以内とか全然ないどこにもない』
ピコン
『どこにあるの? 存在してる?』
愛里が俺の財布のことでテンパリ始めてる
いやいやいや、俺の財布はどうでもいいんだよ
愛里がバイトするっうことが重要でさ
『俺の財布はいいから
いや、それじゃ愛里のモチベーションなくすことになんねえか?
削除
『ケロップピでお願いします』送信
ピコン
『ケロップピ? ケロロ軍曹の次はケロップピ?』
んっと なんて送れば・・・ そのまんまか
『俺は愛里が稼いだ金でなんか買って欲しいだけ』送信
『愛里が稼いだ金で買ってくれんなら』送信
『消しゴムでもいいんだよ』送信
ピコン
『1000 円の消しゴム?』
ピコン
『1000 円の消しゴム探す方が大変だと思う』
や、じゃなくてさ なんか俺 笑っちまってっけど
『ケロップピの財布でも』送信

『愛里が稼いだ金で買ってもらえたらしあわせです』送信

返信ねえな　なんか考えてんのかな

『愛里?』送信

ピコン

『わかりました』

ピコン

『こういうのもいい?』

ピコン

メッチャヤケになってて笑う

ヤベ　笑いが止まんねえ

『メッチャ可愛い』送信

愛里がさ

ピコン

『笑う www』

ピコン

『もう少し探しますから』

ピコン

『プリンセスにだけはしらないです w』

『プリンセスじゃなくて残念っす w』送信

ピコン

『それじゃまたあとで』

『俺もとうちゃんと買い出し行ってくる』送信

ピコン

『いってらっしゃい』

『いってきます』送信

晩メシのとき

愛里はかあちゃんに明日バイトするって話をした

「そうなの、明日の午前中だけ」

「本当は、断ろうと思ったんですけど」

愛里がチラッと俺を見て

「だ、大一さんが、私が稼いだお金でお財布を買って欲しいって」

「お財布?　ダイチ、あんたが高校に入ったとき買ってあげたけど」

「え?　あ、おう」

「もうダメになったの?」

「え、あ、や」

かあちゃん、そこじゃねえんだよ

「あの、現場用だそうです」

「現場用?」

かあちゃん、俺から視線外してくれよ 怖えよ
「落としても汚れないようにビニール製のがいいって」
「今はあのお財布を使ってるの？」
「え、や、今は・・・」
「どんなお財布を使ってるの？」
「んっと」
「見せて」
「かあちゃんが見るようなもんでも」
「見せて」
「え？ あの、私」
「愛里さんは気にしなくていいのよ、ダイチと私の問題だから」
問題ってさあ
「ダイチ、見せなさい」
俺の部屋から、現場で使ってる財布持ってきて かあちゃんに見せた
「これは・・・なに？」
「財布」
「こんなもの、どこから拾ってきたの？」
「拾ってきたんじゃねえよ、小学生んとき使ってたやつだよ」
「ああ！ 遙か遙か大昔に捨てなさいって言った、あのお財布？」
ヤベ
「捨てないで取っておいたのねえ、物持ちがいいわねえ」
メーーッチャ怖えんだけど
「あの、あの」
愛里？
「だから、私がバイトして新しいお財布を買うんです」
俺 なんか ちっと
「愛里さん、よろしくね」
「はい」
泣きそうになってんだけど
「愛里さんがお財布を買ってきたら、そのポロポロのはどうするの？」
「そのときは」
「私が捨てます」
愛里？
「愛里さんが捨ててくれるの？」
「はい」
まだ使えんだけど・・・ それでも・・・
「愛里さんが捨てるってよ」
「お、おう」
愛里が捨てんなら、俺は 潔く うん なんつうか うん

晩メシ終わって
愛里とかあちゃんは 愛里が作った花の話で盛り上がってる
かあちゃんが盛り上がってんだけど
俺ととうちゃんはキッチンで片付けやってて
「ダイチ、カップ持ってっか」
「カップ？ 持ってねえな」
「今日みてえに雨降ったらよ」
「朝っから雨だと日雇いは中止だからさ」
「それでも今日みてえにパッと降って止んだらなあ」
「だよなあ、前も夜やったとき降られてさ、しゃあねえよな」
とうちゃんが俺に顔近づけて
「あのよ」
すげえ小せえ声で
「俺の古いカップあんだけどよ」
「マジ？」
「背中んとこと、ズボンのモモンとこ破けてっから美里に捨てろって」
「捨てちまったの？」
「もったいねえからよ、こそっと取っておいてよ」
「マジか」
とうちゃんが流し台の下の戸棚の奥に顔突っ込むようにして
「これ」
「んなどこに隠しといたんか」
「クローゼットの奥に入れといたんだけどよ、さっきここにな」
「そっか、かあちゃん帰ってきてからじゃ見つかっちゃうもんな」
とうちゃんが申し訳なさそうな顔してコクンて
「スーパーのパートやってたときのだからかなり古りいんだけどよ」
「ちょっと黄ばんでっけど、全然いけんじゃん」
「ここんとこと、あと、ここか、破けてんだけどよ」
「とうちゃん破けたまま着てたの？」
「俺はまあ濡れなきゃいっかくれえだったから」
そっか 昔 とうちゃん、俺は雨なんか平気なんだっつってたもんな
「それでもダイチはなあ」
「あ！ ガムテ貼ればいんじゃないね？」
「愛里ちゃんが使った白がまだあっからよ」
「そんじゃ色ピツタリじゃん」
「今度はカップ！」
かあちゃんっ
「ポロポロのお財布の次は破けたカップ！」
「や、これはさあ、今日みてえに急に」

「どうぞどーぞ好きにして」

え・・

「ああもー、この家、ゴミ屋敷！」

「ゴミってさあ」

「私はけっこう頑張って稼いできていると思うけどっ」

「か、稼いでるよ、かあちゃんのおかげで」

「だったらなんで捨てないの？ どうなったら捨てるの？」

愛里が かあちゃんの後ろから ジーッとカッパ見てる

愛里、なんか、なんかアイデアないかな？ かあちゃんが納得するガムテの貼り方と

かさ

「あの、私」

うん、なに？

「そろそろ部屋に戻ります」

見捨てられた 愛里に カッパ 見捨てられた

「ほら、なにしてるの、愛里さんを送ってあげなさい」

「あ、おう」

とうちゃんのこと見たら

とうちゃんの目が ごめんなつつてる

とうちゃんは悪くねえよ むしろ ありがとうだよ、とうちゃん

愛里の部屋の玄関

「あの、ごめんなさい」

「え？ なにが？」

「あのカッパ」

カッパ？

「どうやったら、ステキになるのか、全然思い浮かばなくて」

「んな、愛里が気にすることじゃねえよ、ピッてガムテ貼るだけだからさ」

「そうですか」

んなこと気にしてくれんなんてさあ

まあチビッと期待したけど ムリなのはわかってっからさ

「明日・・ 私・・ バイトするんですね」

「午前中、二時間だけ」

「そう・・ですね」

「俺が財布買って欲しいって頼んだからだよ」

「え？」

「俺が愛里にバイトさせちまうんだよ」

愛里が俺の顔見て そんで 目に涙が浮かんで

「愛里」

抱きしめたら

「私が働いたお金で、あなたに何か買えるのは、これが最初で最後だと思うから」
「うん」
「バイトしてきます」
「うん」
「できます・・・よね」
愛里 俺はさ
「できなかつたらさ」
それでもいいんだよ
「俺と、海、行こう」
「海？」
「なんか、夏休みらしいこと、俺とやろう」
「夏休みらしいこと」
「できなかつたら、すぐに俺に電話しろよ、そしたら、俺」
愛里の顔 覗き込んで
「速攻で愛里んどこ帰ってくっから」
「速攻で？」
「うん、そんで二人で海行こう」
「海・・・」
「な？ 二人でさ」
愛里が涙ポロポロ流したながら
「はい」
「だからさ、俺はどっちにしても、しあわせだから」
愛里がコクンてうなずいて 俺に抱きついてきて
「私も・・・ しあわせ」
「そっか」
「はい」
愛里が俺の T シャツ引っ張って涙拭いた
「鼻もかんでもいいぞ」
「ありがとう」
「愛里」
そっとだけ ちょっとだけ
「そんじゃな、約束な」
「はい」
俺がドア閉めて 愛里はすぐには鍵かけねえで
「愛里、鍵かけねえと危ねえぞ」
カチャッて鍵閉まった

もしもの海の話

家に戻ったら

とうちゃんがキッチンから

「ダイチ、おかえり」

「ただいま」

「美里がカップの破れたところにガムテ貼ってくれた」

「え、マジ？」

捨てられたかと思った

「ほれ」

とうちゃんが両手に持って ん？

「とうちゃん、なんでエックス？」

ピンクのガムテで ピンク？

背中んとことズボンのももんとくに☒って なんだ？

「美里がやったから、きっとこれがかっけえんだろうな」

「マジ？」

よくわかんねえけど、ビツと貼っつけるよか・・・ かっけえんかな？

それでも・・・ ピンク？

「これ持ってきゃ大丈夫だよ」

「え、あ、うん、ありがとう」

明日の愛里の弁当の下ごしらえして

勉強して そんで

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『かあちゃんがカップにガムテ貼ってくれてた』送信

んっと ベッドに広げて写真撮って 送信

ピコン

『wwwwww』

なんで笑ってんの？

ピコン

『ある意味オシャレかも w』

ある意味？ そんでもやっぱオシャレなんか

ピコン

『そのカップがダメになったら』

ピコン

『それでお財布作ったら？』

これで？

ピコン

『ピンクのガムテープで貼りつけて wwwww』

『んなこと言わないで買ってくださいえ w』 送信

ピコン

『はい がんばります』

愛里 俺はさ 本当はさ 愛里がバイトしなくてもいいと思ってんだよ

愛里が好きなことすればいいと思っててさ

『愛里』 送信

『海に行ったらさ 何したい？』 送信

ピコン

『もう海に行くこと前提？ w』

『もして話 w』 送信

ピコン

『きれいな貝殻を見つけたりきれいな石を見つけたいかな』

それを探してる愛里はぜってえきれいだろうな

ピコン

『でも人が多いところだと採り尽くされちゃってると思うけど』

『人があんま来ねえとこならあんのかな』 送信

ピコン

「あるかも」

『そんじゃあんま人が来ねえとこに行こう』 送信

ピコン

『どこ？』

ん・・・っと

『鬼界島？』 送信

ピコン

『それって一年のときに観た歌舞伎鑑賞教室の俊寛の？』

『あすこならあんま来ねえんじゃね？』 送信

ピコン

『流刑される場所ですから』

『よく憶えてんなあ w』 送信

ピコン

『何があって流刑されて、誰がどうなって俊寛が残ったのか』

ピコン

『まったくわからないまま見てたら終わっちゃいましたけど』

ピコン

『あそこは九州だからちっと遠いなあ』送信
ピコン
『鬼界島には行きたくないから真剣に考えなくていいです』
『俺は小せえ頃 逗子に連れてってもらってさ』送信
ピコン
『私も逗子は好きです』
『そんじゃ逗子にしよう』送信
ピコン
『それじゃ逗子でw』
『電車で1時間くれえで行けるな』送信
ピコン
『はい』
『逗子の海岸はきれいだから』送信
『きっと貝殻やきれいな石見つかるよ』送信
ピコン
『シーグラスって知ってますか』
あれだろ？ 瓶とかガラス容器が波や砂で研磨されたやつ
『知ってる』送信
『見たことはねえけど』送信
ピコン
『私も見つけたことはなくて』
ピコン
『いっぱい見つけられる人もいるけど』
ピコン
『一個だけでも見つけられたらなって』
『見つけよう』送信
『二人で』送信
ピコン
『見つけましょう』
ピコン
『二人で』
俺 愛里と マジで海行きたくなくなってる
今こうやって二人で海の話してるのが楽しくてしあわせでさ
ピコン
『あなたは何をしたいですか』
俺？ 俺は・・・ 愛里といられればさ
『海の家あんじゃん 掘っ立て小屋みてえな』送信
『あそこでかき氷食いてえかな』送信
『海見ながらさ暑い中で食うと美味しいじゃん』送信
ピコン

『何味?』
そうだなあ
『メロン味』送信
ピコン
『舌が緑になるやつ w』
『愛里は何味?』送信
ピコン
『イチゴ味』
だよな
『舌が赤くなるやつ w』
ピコン
『見せあっこする? w』
メッチャ可愛い
『する ベロ〜んてさ』送信
ピコン
『ベロ〜んて www』
『あとは何してえ?』送信
ピコン
『海を見ながら』
ピコン
『あたなのお弁当を食べたい』
俺の 弁当
ピコン
『結局私はどこに行っても』
ピコン
『食べたいのはあなたのお弁当になっちゃう w』
想像だけの話なのにさ 俺はメッチャ感動してて
『愛里が好きなもんいーっばい作る w』送信
ピコン
『なんか楽しい』
ピコン
『今 もう楽しい w』
俺もだよ 愛里
ピコン
『そろそろ寝ないですよね』
俺は ずっとこうしてたくて そんなでも
『そんじゃ明日』送信
『海楽しみにしてっから w』送信
ピコン
『そうですか www』

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

愛里 俺はいつも愛里にしあわせにしてもらってる

こんな もしもの話の LINE でもさ メッチャしあわせでさ

俺は愛里に何ができんのかな

明日 俺が愛里にしてあげられんのは

弁当作ることだ

寝よう

朝起きて 顔洗って 作業服に着替えて

キッチン行くと

「ダイチ、おはよう」

「どうちゃん、おはよう」

今日の愛里の弁当はオムライス

俺のは、なんつうの？ 太巻きみてえに切ってるから食いやすいつて

そんで、今日の肉団子は小人さんの肉団子

爪楊枝に刺して焼いたピーマンも刺して バーベキューのみてえじゃん

タコさんウィンナーも これはなんつうか、俺がいるよみてえな？

そんで愛里の好きなブロッコリーとミニトマトとツナのサラダ

あとはこっちのフルーツ入れにイチゴ

久しぶりに弁当袋に入れるな

「どうちゃん、愛里が来たらこれ」

「アイリちゃん、今日バイトか」

「あのさ、もしも、もしも途中で帰ってきちまっても」

「そんなんいいよ」

「うん」

「ほれ、おっちゃんたちの握りメシ、ショーさんの分もあっからよ」

「ありがと」

ショーさん、今日も来てくれよな 昨日放っぽったまま帰ってきちまったからなあ

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

「おう、ありがとう」

カップ入れた保冷バッグ持って ゴム長履いて

「そんじゃ」

あ そうだ

「どうちゃん、愛里が帰ってきちまったら、俺も帰ってくっから」

どうちゃんは優しい顔で

「そっか」

「うん、そんじゃ、いってきます」

「いってらっしゃい」

愛里 どっちでもいいから

辛かったら帰ってこいよ 俺もすぐ帰ってくっからな

そんでもさ そんでも 俺 どっかで思ってたんだよ 愛里は

早く行かねえと

キャンセル

現場着いて

便所掃除だ

あれ きれいなまんまだ

ヤッさんとスギさんがやってくれたんだな ありがてえよ

ゴミ箱んとも掃除されててさあ

「だいづ！」

「ヤッさん、スギさん！」

「無事だったんけえ？」

無事？

「な～んか知んねけんちょ、緊急事態ってはあ」

「ヤッさん、スギさん、昨日は急に抜けてすみませんでした」

「な～んもお、俺たちはいいけんちょ」

「だいづどすてらべって、な」

「心配かけました、もう大丈夫っす」

「だったらあよかったしたあ」

「おいっす、あの、便所」

「きれいっだっぺ？」

「ありがとうございます」

「俺たちでねえんだあ、なあ」「わだづでねんだ」

ん？ え？

「ショーさん」

「え？ ショーさん？」

「だいづ帰ってえ、便所掃除すっぺかっつってたらあ」

「ショーさん、わがやるっでや」

「ん？ え？」

「だいづと俺たちにメシ食わせてもらったお礼だっではあ」

ショーさんが・・・ 便所掃除してくれたっつうこと？

「ゴミ箱んともお、きれいに掃除してくれてえ」

ショーさんが 掃除してくれたんか

「夕方もはあ、こそっと来てえ、便所掃除とゴミ箱んとの掃除してたっぺ」

「え？」

「だいづに世話になったからあっではあ」

俺は、世話とか、そんなんじゃなくて
「だいつさよろすぐってけえってごどすでや」
「ん？ え？ なんすか？」
「だいつにいろいろ伝えてくんちえって帰ろうとしてよお」
「えっ？ ショーさん来ますよね？ 今日も握りメシ持ってきたんすよ」
「来ねづもりだったんだべ」
「え？ こ、来ねえづもり？」
来ねえって 約束したじゃん 俺がここにいる間は
「だいつ、俺があ、ワナかけた」
「ワナ？」
「昼過ぎにい雨降ったっぺ？」
「あ、はい」
「あんときい、ショーさん便所掃除しててはあ」
あのどしゃ降りの中でか
「俺よお、カップふたつ持ってっがらあ、安っすい方を貸したっぺ」
「ヤッさん、ありがとうございます」
「安っすいペラッペラのだからあ、あげてもいんだけんちょ」
「めぐせぐれえペラッペラ」
「ねえよりマシだっぺ」
「ヤッさん、そんで、ワナって、なんすか？」
「わい、んだんだそれだ」
「ショーさんにい、明日返してくんちえつつたんだあ」
「明日って、今日っすか？」
「昼休憩んときにい来てくんちえってはあ」
「ショーさん真面目だべ、来ねわけねべ」
「ショーさんカップ返しに来るっぺした」
「ヤッさん！ すげえっすよ」
「ショーさんもお、だいつに会いてえんでねえがあ？」
「俺は会いてえっすよ」
「ほんでもはあ、ここさ来る理由ねえと来にくいっぺ」
「そんでカップっすか」
「俺もなかなかやっぺ？」
「メッチャかけえっす」
「でもや、あったペラッペラの返せっで、笑っでまった」
「ショーさんならあ返しに来っぺ」
「んだな」
ヤッさん、スギさん、俺、いつも助けられて
「だいつ、なんで泣いてんだあ？」「わい、だいつはなきつつでや」
「ヤッさん、スギさん・・・ ありがとうございます」
「俺たちはあ仲間だっぺ」「んだ仲間だ」

「おい・っす」

「ほんじゃ、仕事すっぺ」

「おいっす」

俺がいねえ間に ヤッさんとスギさんが、ショーさんのこと・・
泣いてらんねえ、仕事だ

俺は仕事中は携帯の電源 OFF ってる

愛里から連絡来ても出れねえし、何かあったらとうちゃんいるし

それでも今日は ON にしてる

いつ愛里から連絡あってもいいように

愛里から連絡あったらすぐに帰れるように

それでもさ それでも

「だいつ！ その新しい土い、ネコであっちゃ運んでくんちえ」

「おいっす」

この土は昨日入ったんだな 俺がいねえときに

昨日の雨でちっと重くなってっけど シャベルで

カツツ

ん？ なんだ？ 小石か

この小石 白くて丸くて平べったくて

小せえ頃とうちゃんとよくこういうの拾って遊んでたな

なんか懐かしくなって ケツポケットに入れて 土運んで

あと 30 分くれえで昼休憩か

ピコン

えっ 愛里？ 愛里だよな

工作中だけど こそっとポケットから携帯出して

『ごめんなさい』

ごめんなさい？ やっぱダメだったんか いいよ それでもいいよ

ピコン

『あなたと海に行けなくなりました』

え？

ピコン

『午後も先生のお手伝いをします』

愛里・・ そっか そっか よかったな 愛里

ヤベ、涙が・・

『ええええ なんだよおおお』送信

『俺もう海パン履いて待ってたのにさ』送信

愛里 よくやったな がんばったな

ピコン
『海パンて wwwww』
ピコン
『あなたのお財布分は稼いだので』
ピコン
『他にも欲しいものがあったら』
ピコン
『考えておいてください w』
愛里 俺が欲しいものってさ 愛里
『ヤッタ！ いろんなもの買ってもらう w』 送信
ピコン
『まかせてください w』
まかせてって・・・ 愛里
ピコン
『どうせあなたの欲しいものは 1000 円くらいだから』
ピコン
『私でも買える w』
俺・・・ 今メッチャやべえよ 涙止まんねえよ
どうする？ なんも言葉出てこねえ
嬉しいとかよかったとか そんなんじゃ もっと 俺は もっと
あ そうだ
ケツポケットから小石出して写真撮って
『俺はシーグラス見つけた w』 送信
画像も送信
『なんつって 現場の土ん中にあった小石 wwwww』 送信
ピコン
『ありがとう』
え？
ピコン
『ゆうべあなたと海に行けたから』
ピコン
『私』
ピコン
『怖くなくなって がんばれた』
愛里・・・ ヤベエ しゃがみ込んでしまって
ピコン
『その白い石 あなたのシーグラス』
ピコン
『帰ってきたら 私にください』
『おう wwwww』 送信

ピコン

『それじゃまた』

『そんじゃな』送信

愛里・・・ 俺・・・ 愛里・・・

「だいづ!」「だいづ!」

「どしたあ? なんかあったんけ?」「どっか痛でんだが?」

ヤッさん・・・ スギさん・・・

袖で涙と鼻水拭いて 立ち上がって

「デート、キャンセル食らっちゃいました」

「デートお?」「あんれえ」

「愛里、仕事すっから行けねえって」

「あいりちゃん仕事してんのお?」「あえるちゃんが?」

「愛里、バイトしてんすよ、今日から」

「そっかあ、そんじゃなあ」「すがだねな」

「メッチャ・・・ がんばってんすよ」

「そっかあ」「んだが」

「すげえんすよ、俺の愛里は」

「俺のあいりって、は」「わい、だいづ」

ヤッさんとスギさんが笑ってる

「しゃがみ込んでえ泣いでっからあ、な～んかあったのかと思ったらあ」

「ノロケ聞かされたじゃ」

「へへ、ノロケっす」

ヤッさんスギさんが笑って俺の肩ポンて叩いた

愛里 俺も ゆうべ 愛里と海に行けたよ

一緒にかき氷食ってさ 緑と赤に染まったベロ見せあってさ

だから しあわせだ メッチャしあわせだ

「しあわせだーっ!」

「わがっただわがっだ」「だっぺ、だいづはしあわせもんだっぺ」

「おいっす!」

愛里 俺はすんげえしあわせだよ

愛里 俺もがんばる 愛里のために 俺と愛里の将来のために

「スギさん、土運ぶんで、ちょっとそこジャマっす」

「わい、ジャマだざ ワハハハ」

「俺、がんばるんで」

「だいづはあ誰よりもがんばってっぺ」

「もっとがんばるんで」

「わだづの仕事なくなんでねが」

「ヤッさんとスギさんと一緒ががんばるんで」

「そんだなあ、がんばんねえとなあ」

「がんばんべ」

「おいっす」

俺は 昼休憩前にはかなりの土運んで

「森下、少し待って、あっちが詰まっちゃうよ」

監督が焦って止めに来た

愛里は俺の原動力だ！

安全第一

おっし！ これ終わったら昼休憩だ

「だいづ」

スギさん？

「あすこさいんの、ショーさんでねが？」

ショーさん？ 出入口ところでチラッチラッと顔覗かせてる
来た！

「ショーさーーん！」

俺は走ってって ショーさんに抱きついた

「おっ、おっ、ダ、ダイちゃん」

俺の勢いでショーさんが倒れそうになって

「あ、ごめんな」

「いや」

「ショーさん待ってたよ」

「俺は、これを返しに」

手に持ってんの白いほぼ新品のカップ

ヤッさん、カップ効果だよ

「ショーさん、昼メシの時間だからさ」

「や、もうこれ以上は」

「握りメシ持ってきたから」

俺はショーさんの手えつかんで中に引っ張ってった

「ヤッさん、スギさん、ショーさん来たっすよ」

「ショーさん、待ってたっぺ」「早くごごさ」

「これも昨日貸してもらったカップ」

ショーさんがカップをヤッさんの前に差し出した

「それはあショーさんにあげたんだっぺ」

「え？ いや、返してくれって」

「聞き間違いでねえのけ？ 返してくんちえでねっぺ、帰ってきてくんちえ」

「え？」

「ショーさん、おめ、黙って消えたら、だいづ悲しむべ」

ショーさんが下向いちまった やっぱ黙って消えるつもりだったんだ

「ショーさん、約束破らないでくれよ」

「約束？」

「俺がこの現場にいる間は一緒に昼メシ食うって約束したじゃん」
「でも・・・俺みたいなの、こんな浮浪者が毎日・・・」
「こんなって言うなよ、俺のとうちゃんは浮浪者だったんだよ」
「あ・・・そうか、そうだ、そうだな」
「俺は浮浪者の息子だよ」
「そうか、立派な浮浪者の息子だな」
「だろ？ ほら、握りメシ食ってよ」
「俺のおっかあのおかずもお」「わのかっちゃんのもけへ」
「それじゃ・・・ありがたく、いただきます」
「ショーさん、昨日便所掃除してくれたんだって？」
「俺ができるのは、それくらいだからさ」
「たいしたまでえにや」
「そんなじゃないけどさ」
スギさんと会話成立してんのがすげえよ
「俺なんかあ、家の便所も掃除したことねえっからあ」
「俺は、工場やってたとき、工場のトイレ掃除やってたんだよ」
「いんやいんやいんや」「わいわいわい」
「小さな工場でも足りないからやってただけだよ」
すげえな、社長がトイレ掃除するなんてさ いい社長だったんだな
「ヤッさん、このカップ返すよ」
「それはショーさんにあげたんだあ、俺はもっとリッチなの持ってんだした」
「本当にいいのか？」
「そっだペラッペラの、もらっても迷惑、今の迷惑はめわぐでねや」
ん？ めいわくがいつまでわかんねえな
「それじゃ遠慮なく、正直助かります」
「今日もお夕方あたり降るんでねえかなあ」
「そうっすね、なんか降りそうっすよね」
「だいつはカップ持ってんだっべ？」
「とうちゃんからもらったやつが」
保冷バッグの底に あったあった
「これっす」
「え・・・」「え・・・」「え？」
「なんすか？」
え？ おっちゃんたち三人で顔見合わせてっけど なんだ？
「ダイちゃん、俺がそれをもらうからダイちゃんがこっちのを」
「なんで？」
「なんでって・・・」
また三人で顔見合わせてんだけど
「だいつ、そのピンクのバッチンは・・・ なんだあ？」
バッチン？

「こことここ、破けてたんすよ」
「また、ガムテでえ・・・」
「かあちゃんは捨てろつつたんすけど」
「お母ちゃんが捨てろってえ、うん、まあ、なあ」
おっちゃんたち顔き合ってっけど
「それでも、このガムテ、かあちゃんが貼ったんす」
「お母ちゃんが、ピンクの・・・ ブワッハハハ」「ワハハハ」「アハハハ」
え？　なんで笑うんだ？
「オシャレらしいんすけど」
「おしゃれ！　ブワッハハハ」「ワハハハ」「アハハハ」
え？　なに？
「だいつのお母ちゃんもおもしれえことすっぺ」「んだ」「うん」
おもしれえ？　これはオシャレじゃねえの？
「それでもまあ、だいつがこれ着てたらあ、すぐにだいつだってわかっぺ」
「んだな、ピンクのバツテンはだも付けてねはんでや」「確かにそうだ」
なんだ？　なんかおっちゃんたちで盛り上がりっけど
「それが森下のカップ？」
監督
「あ、はい、とうちゃんが使ってたやつで」
「ピンクのバツテンがいいね」
監督までバツテンって　エックスじゃね？
「いんやいんや監督うブワッハハハ」「ワハハハ」
「俺も何かつけてもいいかな」
何かつける？　これはつけてんじゃないなくて破れてっところふさいでんだけど
「ちょっと貸して」
監督が俺のカップ持って監督室入ってっただけど??
あ、戻ってきた
「はい、これ」
ん？　エーーーーーッ？
背中に・・・
「監督・・・　なんすかこれ？」
「安全第一」
「や、それは読めますけど」
「森下のことを見たら、みんな安全第一だと思うだろ」
「そう・・・　かもしんねえっすけど」
「雨の日はさ、特に安全第一だよ」
「はあ」
おっちゃんたちが腹抱えて笑ってんのはなぜだ？
「ショーさん・・・　だよね」
え？

「あ、はい、あの」
「話があるから、ちょっと監督室に来てくれる？」
えっ どういう
「監督、俺、ショーさんのこと監督に言いましたよね」
「監督として、この会社の人間として話があるんだよ」
え？
ショーさん立ち上がって
「俺はもう帰るんで」
「ショーさん！」
「すみませんでした」
「そういうことじゃなくてさ、ちょっと話をしたいから」
ショーさんが俺やヤッさんとスギさんの顔見て
「はい、わかりました」
「監督、俺もいきます」「俺もお」「わも」
「二人だけで話したいから」
ショーさんが うつむいたまま 監督の後ろを歩いて 監督室に入っていった
監督、なんでですか？ ショーさんなんも悪りいことしてねえよ
「だいづ」
ヤッさんが監督室指さして
「こそっと」
「あ、はい」
ヤッさんとスギさんと俺は、そ〜っと監督室の入り口に行って
声は聞こえんだけど 何しゃべってんのかわかんねえ
もし悪いんだとしたら、俺だよ 俺がショーさんをさ
「ヤッサーーん！ いるんだろ？」
監督がヤッさんを？
「はいはいはい」
ヤッさんじゃねえよ、俺だよ、責任は俺にあるんだよ
「ヤッさん、俺」
「いいがらあ、まがせとけえ」
「ショーさんを守ってあげてください」
「わがってっからあ」
「ヤッサーーん！」
「はいはいはい」
ヤッさんが扉開いたら
ショーさんがうずくまって泣いてる
監督、ショーさんに何言ったんだよ？ なんでショーさん泣かすんだよ？
扉閉まって・・・
「だいづ」
「スギさん、俺・・・」

「ヤッさんがなんとかすべ」
「はい・・・」
俺が・・・ なんも考えねえでやっちゃったから・・・ みんなのこと・・・
「スギさん・・・ 俺が悪いんすよ」
「だいづはなも悪ぐね、だれも悪ぐねはんで」
「それでも・・・」
「シゲさーーん！ 森下！」
えっ 俺たちも？
スギさんが俺の肩ポンポンて叩いて 扉開けた
えっ ヤッさんも泣いてる
まさか・・・ クビ？ え・・・ 俺のせいで
「決まったから」
決まった？ なにがだ？ 処分？
「監督、全部俺が悪いんす！」
「何が悪いの？」
「ヤッさんとスギさんをクビにしねえでください！」
「何の話？」
「だから、俺が」
「だいづ」
ヤッさん
「そうでねえのよお」
え？

まだ頭ゴチャゴチャしてっけど
結論から言うと 監督はショーさんを正社員として雇った
「試用期間三ヵ月はあるけどね」つつって
ヤッさんと呼んだのは、ヤッさんは家族寮と向かいの独身寮のまとめ役で、
独身寮に空きはあるかって話で、二室空いてるって
そこの一室にショーさんを住ませることになって そんで・・・
「俺は慈善事業でこんなこと考えたわけじゃないよ」って監督が
「カズオさんが来て、トイレ掃除やゴミ箱の掃除してくれて、
他にも、カズオさんの言葉を借りれば下っ端仕事？ やってくれてさ」
とうちゃんの下っ端仕事
「そのときから現場の作業環境をどうするか考えるようになってさ」
言ってた 作業環境
「今は森下がやってくれてるけどね、次の現場は？ その次は？
今の正社員で働いてる人たちはメインの仕事で忙しいだろ
だからといって、日雇いの作業員にその都度頼めるかどうかもわからない」
そんなことを考えてたんだ

「昨日ショーさんがトイレ掃除してくれてるのを見て思いついたんだよ、
作業環境全般をやる作業員が常駐していたら問題解決だなんて」
それでショーさんに、ショーさんの身の上聞いて、それで、打診した
「それにさ、独身寮の管理人、今いないんだよ、だからヤッさんに頼んでたけど、
ショーさんにやってもらえたら一石二鳥だなと思ってさ、
工場で若い連中扱ってたっていうから、得意だろうなと思ったんだ」
俺は・・・
「会社にそのこと言ったらさ、褒められちゃったよ、
無駄のない合理的な考えで会社も助かるってさ、俺のオリジナルじゃないのにね」
俺は・・・
「そういうことで、今日からショーさんには独身寮に住んでもらって、
日曜日から盆休みに入るけど、その間は寮の管理してもらってことで、
賃金も発生するから、そこは心配ないよね」
俺は・・・ もう
「監督！　ありがとうございます！」
「森下、頼むから土下座はやめてくれ」
「俺・・・ どうやって監督に恩返しすれば」
「だからさ、俺は会社のため現場のことを考えただけ、本当にそれ」
「それでも・・・ ショーさんを」
「飛んで火にいるだよね、あ、ちょっと違うか」
「監督・・・」
「森下、鼻水すごいことになってるよ」
「あい・・・」
「俺としてはさ、俺の理想にピッタリの人材が向こうから来てくれたって、
やっぱり飛んで火にいる夏の虫か」
監督笑ってっけど　俺は・・・
「そういう意味では森下とカズオさんのおかげかな」
「とうちゃんの？」
「目からウロコっていうか、惰性になってた俺に喝を入れてくれたっていうか」
「監督」
「だからさ」
「ショーさんの握りメシ、明日からも持ってきていいっすか」
「そこ？」
「約束したんで」
「その前にさ、涙と鼻水拭いてよ、イケメンだからまだあれだけどさ、ひどい顔だよ」
「あ、おいっす」
首のタオルで顔拭いて
「あの、握りメシ」
「それは俺の管轄じゃないよ、ショーさんに聞いてよ」
「あ、はい！」

「ショーさんは、今日は午後からの賃金でことだから」
「おいっす」
「そういうことで」
「監督、ありがとうございます！」
「だからさあ、そこ勘違いされると俺もイヤなんだけどさ」
「んっと？」
「人助けとか慈善事業で考えたわけじゃないから」
「はい！」
「俺は合理的なだけだから」
「はい！　ありがとうございます！」
「ほら、扉の向こうでおじさんたちが待ってるよ」
「あ、はい」
「午後も安全第一でね」
「はい！」
「雨降ってくれないかな」
「降ったら困るじゃないっすか」
「森下があのカッパ着てるとこ見たいんだけどな」
「へ？」
「ほら、もう行って」
「はい！　ありがとうございます！」
俺は90度のお辞儀して、監督室を出た
扉の外には目と鼻真っ赤にしてるおっちゃんたちが待ってた
「だいづ！」「だいづ！」「ダイちゃん・・・」
おっちゃん三人に抱きつかれて
みんなでまた泣いた

牛乳拭いた雑巾

もう少しで作業が終わる頃に雨降ってきちまって
それでも今日はカッパあるからなんつうことねえ
とうちゃん、マジありがとう
「だいつ見てたらあ、安全第一だなあって思うっぺ」
ん？ あ、背中 of シール 監督うう いいっすよ全然いいっす
なんならカッパ全部に張り付けたっていいっす
作業終わってもまだ雨降ってる
「だいつ、ほんじゃ俺たち帰っからあ」
「おいっす」
「ダイちゃん」
ショーさんが涙でウルウル of 目で俺を見てる
「ショーさん、便所掃除した？」
「したよ」
「ショーさんの仕事だもんな」
「仕事・・・だな」
泣きそうな顔で必死に笑顔作ってっけど 俺も泣きそうになるから笑ってよ
「ほんじゃ、ショーさん、帰っぺか」
「帰る・・・」
「一緒によお」
そう言うヤッさんの声も涙声で
「そんじゃ、俺も帰ります」
「ほんじゃまた明日なあ」「まだな」「ダイちゃん」
このままいたら、またおっちゃんたちと一緒に泣きそうになっから、
保冷バッグ持って駅に急いだ

電車のホーム

なんか蒸し暑っちな 上だけ脱ぐか
あっ ヤベ いちばん上のボタン 丸ごと取れちまった
どうする？ 明日も降るかもしんねえのに
「ちょっと、あんた」
安全ピンで留めればよくね？ かあちゃんの裁縫箱んに入ってたよな

「ちょっと、あんた」
え 腕つかまれた 駅員さん？
「こんなところ入ってきちゃダメだよ」
え？？？
「電車に乗るんすけど」
「切符持ってるの？」
切符？ 財布から suica 出して見せたけど？
「どこかに落ちてた？」
「これ俺のっすよ」
「身分証明書は？」
身分証明書？ なんか事件でもあったんかな
んっと・・・ 生徒手帳は持ってきてねえしな あ、現場の通行証
「これ」
不機嫌そうな顔で見て、俺のこともジロジロ見て
なんも言わねえで行っちゃった
やっぱなんか事件でもあったんかな
え？ なんかまわりの人たちも俺のこと遠巻きにしてっけど
俺はやってねえ 何があったんか知んねえけどさ

電車の中

席は空いてっけど、カッパのズボンが濡れてっから入口付近で立って
なんか なんだ？ なんかみんなこっち見てっけど
マジでなんかあったんかな
携帯でニュース 別にそういうカンジのは載ってねえな
ま、いっか 俺は潔白だ 俺のアリバイはヤッさんたちが証明してくれる
駅に着いたら まだ雨降ってて またカッパ着てバスに乗って
バス停から走って帰った

愛里の部屋の前

ドアが開いて
「おかえりな プッ」
プッ？
「鼻のここに泥がついてる」
「マジ？」
手でこすって
「取れた？」
「まあ、でもあとで顔を洗った方がいいかも」
「シャワー浴びっから」

「はい」
「愛里」
「ちょ、ちょっと待って、濡れてる」
「え？ あ、表でカップ脱いでくる」
玄関ドアの前でカップ脱いで
「愛里」
抱きしめて
「バイト・・・」
俺の腕の中で
「してきました」
「うん」
「なんか・・・」
「うん」
「小学校の給食のときに」
小学校の給食？？
「牛乳をこぼしちゃう子がいて、一学年に一人は必ずいて」
「ああ、いたな、俺んときもいた」
「その牛乳を拭いた雑巾が・・・次の日すごく」
「あれは低級脂肪酸臭と低級アルデヒド臭の混合臭」
「え？ そんなことまで知ってるの？」
「家政夫やってたとき、ラグに牛乳こぼしてた家があったさ、
どうすりゃ取れるんかいいろいろ調べて、そんなとき知った」
「そうですか」
「そんで？ 牛乳こぼしたんか？ 愛里牛乳飲まねくね？」
「ちょっと・・・ そういう匂いがして」
「どこ？ あれメッチャ臭せえじゃん、放っとくと取れなくなんだよ」
「え・・・」
「どこ？ 俺取るからさ」
「あの・・・ ここ」
「ここ？」
「えっと・・・ 私がいる・・・」
「愛里がいる？ えっ？ 俺っ？」
あわてて腕放した
「あそこまでは・・・」
「言えよお」
「でも、牛乳を拭いた雑巾みたいだけど、あそこまでは」
「臭せえんだろ？」
「あなたが働いてきたっていう」
「いやいやいや、そこはハッキリ言ってくれよ」
「だから、言いました」

「ショッパナにさあ、俺、自分じゃあんまわかんねえからさ」
「いいんです、多分・・・ ビニールで蒸れた・・・のかも」
「そんな俺、牛乳拭いた雑巾みてえな臭いで歩いてたっつうことじゃん」
「カップを脱がなければ密封されて」
「あ・・・ 脱いだ」
「えっ？ どこで？」
「電車人中」
「あ・・・」
「だから、まわりのみんな、俺のことジロジロ見てたんか」
「でも！」
え？
「あなたは働いてきたんですからっなら恥じることはありませんっ」
愛里 沁みる 沁みるけど
「それでも臭せえのは臭せえよな」
黙っちゃまった
「愛里？」
「あなたに見せたいものがあります」
話題変えた
そんで奥に走ってった 戻ってきた
「これ」
白いメッチャきれいな和紙？ の封筒にメッチャ達筆な上原愛里様の筆文字
「私の初めてのバイト料」
「そっかあ、そっか、これが、そっかあ」
愛里 俺はマジで感動してる
「写真を撮って、パパとママに送りました」
「お父さんとお母さんに、だよな、メッチャ喜ぶよ」
「まだ寝てる時間なので返信はないですけど」
「起きたら喜ぶよ」
喜ばねえわけねえよ 俺だってこんな感動してんだからさ
「午前中やってたら、なんか、なんであんなに怖がってたのかなって」
愛里がそう言って笑ってさ
「先生に、午後も明日からもやらせてくださいって言いました」
「そっか、明日からも、そっか」
「先生が喜んでくれてよかったです」
「そっかあ、うん、そっか」
「ダメならあなたと海に行けるし、それに、もう海に行った気分になって」
愛里 抱きしめてえけど、今は我慢しねえとな 牛乳拭いた雑巾だからさ
あ、そうだ
カップのズボンの中に手え突っ込んで これは脱げねえ 臭さが二倍になる
作業ズボンのケツポケットから小石取り出して

「俺のシーグラス」
小石見つめてる愛里の笑顔がメッチャきれいで
「もらっていい？」
「おう」
小石を手のひらに置いて見てる顔がたまんねえよ
「なんか・・・ しあわせ」
「愛・・・」ダメだ
んっと
「弁当は教室で食ったの？」
「二階が先生の自宅スペースで、そこの あっ！」
ど、どした？
「あの、えっと、お願いが・・・ あるんですけど」
「いいよ、なに？」
「いいよって安請け合いして」
「愛里のお願いならなんでもする」
「なん・・・でも？」
「ったりめえじゃん」
「どこから・・・ えっと・・・ 先生の部屋のダイニングでお弁当食べてて」
「そっか」
「先生が私のお弁当を見て、美味しそうって」
「そっか」
「食べますか？ って、一口ずつあげたら、先生、感激しちゃって」
「マジ？」
「先生は春からこれから秋までもずっと忙しくて」
「すげえんだなあ」
「ずーっとコンビニかUber だそうです」
「マジ？ 身体壊しちゃうじゃん」
「今日もコンビニのサンドイッチで、私があげたお弁当を美味しい美味しいって」
「よかったな」
「それで・・・ それで、私が余計なことを」
「なに？」
「だって、あんまり先生の部屋がゴツチャゴチャしてて忙しいを絵に描いたような」
「愛里？」
「それで・・・ 私、つい」
俺の顔 困ったような顔でジューッと見てっけど
「あ！ 掃除すりゃいいの？」
首横に振った 違うんか
「よかったら・・・ 頼んで・・・ 先生の分も・・・ 作ってもらいましょうかって」
「いいよ」
「だってなんかもう え？」

「先生の分も作ればいいんだろ？」
「でも、あなたも働いて朝から二人分の」
「手間は一緒だったじゃん」
「先生はお弁当を支払うそうです」
「金はいらねえよ、愛里が世話になってんだからさ」
「そうでなければ申し訳なくて食べられないって」
「いいって、んな金かかった弁当じゃねえしさ」
「先生は1000円で言いました」
「んなもらえねえよ！」
「そう言うと思って、コンビニのお弁当がだいたい500円台なので500円ということで」
「へ？ き、決まったっつうこと？」
「私としては、あなたのお弁当に値段なんかつけられないんですけど、
先生とあなたとの妥協点は500円くらいかなって」
「愛里が決めたっつうこと？」
「はい、あなたのお弁当を500円とかありえないけど」
「俺は・・・ いいけどさ」
「ちょっと待っててください」
愛里がまたリビングに走ってって なんか持って戻ってきた
「先生のお弁当箱です」
「あ、おう」
すげえ メッチャ立派な弁当箱だ
「春慶塗だそうです」
「んっと、飛騨高山の？」
「何かの記念でもらったそうですけど、お弁当箱なんて一生使わないと思って、
それでも春慶塗のだからもったいないって取っておいて」
愛里が無表情で頭の中の記憶をアウトプットしてるみてえで おもしれえ
「やっと使えるときがきたって、喜んでました」
「そっか、よかった」
「はい」
「あっ、私はべつに無理やりあなたに作らせようと思ったわけじゃなくて」
「わかってるよ」
「もし、もしあなたが作ってくれるとなったら、先生の分のお弁当は、
あの汚いタッパーになっちゃうのかなって」
「へ？」
「それでいちおう先生に、お弁当箱はありますかって聞いたら」
「そっか」
「これを取り出すときも棚からドドーッていろいろ落ちてきてすごかったです」
マジでメッチャ忙しいんだな
「そんじゃ明日っから作るよ」
「はい、あの・・・ ごめんなさーーい」

「いいよ、愛里の先生に喜んでもらえんならさ、俺も嬉しいから」
「ありがとう」
愛里が 抱きついた 大丈夫か？ 牛乳拭いた雑巾・・・
「やっぱり、ちょっと・・・」
「臭えんだろ？」
「え、ちょっとだけ」
「シャワー浴びて、とうちゃんと買い出し行ってくっから」
「はい、あの、本当に、あの」
「500円儲けた」
「え？」
「ラッキー」
「あ、はい」
「明日とあさってで1000円じゃん」
「はい・・・ そうなります」
「愛里、ありがとな」
「え？」
「俺の儲けまで作ってくれてさ」
愛里が また俺に
「愛里、ムリすんな、マジ」
「いい！ 臭くてもいい！」
やっぱ臭せえんだな
「ありがとう」
「愛里」
俺 ちょっとだけ ちょっと・・・だけ
「そんじゃ、あとで」
ドア閉めて
愛里、シャワー浴びてくれ
俺も浴びる つか 俺が浴びねえと 牛乳拭いた雑巾でどんだけ臭せえんだよ俺

ディスポーザブル

「とうちゃん、ただいま」

「ダイチ、おかえり、雨やられなかったか」

「もう少しで終わるっつうときに降ったけど、とうちゃんのカップで助かった」

「そっか、よかったな」

「カップさ、濡れてっから、たたきんとこ置いといていいよな」

「ベランダも濡れてっから、そこ置いときゃ乾くんじゃねえか」

たたきの端っこに置いて

「シャワー浴びてくる」

3回洗った 牛乳拭いた雑巾の臭いだから 牛乳こぼしたわけじゃねえんだけどな

買い出し終わって帰ってきたら

家の玄関のドアが廊下側に大きく開いてる

とうちゃんと顔見合わせた

「とうちゃん、鍵閉めてったよな」「閉めたけどな」

そーーっと覗き込んだら

かあちゃんがゴム手はめて大きなゴミ袋に何か入ってる

「かあちゃん、何やってんの？」

えっ メッチャ怖い目で睨んでっけど

「ドアを開けた瞬間、死ぬかと思った」

え???

「この汚物！」

あっ 俺のカップ

「魚と獣の臓物が腐敗した臭いが充満しているっ」

「そ・・・ そこまでじゃねえたろ」

「これでも描写しきれないほど臭いっ」

「愛里は牛乳拭いた雑巾の臭いっつったよ」

「愛里さんは遠慮して、かなり控えめに言ってくれただけよ！」

「かあちゃんはちょっとオーバーなんじゃね？」

「あんた、よくこんな臭いさせて公の場を歩いてきたわね」

「公ってさ」

「職質されなかった？」

「職質なんかされねえよ」
あ、かあちゃんなら知ってっかな
「あのさ、全然関係ねえんだけどさ、どっかの駅で事件とかあった？」
「駅で事件？ 聞いてないわよ」
「そっか、おっかしいなあ」
「なんなのよ？」
「駅のホームでさ、駅員に腕つかまれて、こんなところ入ってきちゃダメって」
「駅員に腕をつかまれた」
「切符は？ とかさ、身分証明書はとか聞かれてさ、俺、犯人扱いっつうかさ」
「ハハハハハハハ」
「え、なに？ なんで笑ってんの？」
「構内に紛れ込んだホームレスだと思われたのよ」
「なんで？」
「あのボロボロで汚ったない作業服とこのほぼ危険物的異臭を放っている男！
誰がどう見てもホームレスにしか見えません」
「ハァアアア？」
「あんたが知ってる誰かさんもホームレスのとき駅員に止められたわよ」
「俺が知ってる誰か・・・ あ、とうちゃん？」
とうちゃんが頭ボリボリかいて
「とうちゃんも？」
「俺は駅ん中に入ったこともなくてよ、あんときな」
「そっかあ、とうちゃんもか」
「仲間意識を持つところではない！」
「そういうんじゃないでさ」
「これは捨てますっ」
「えっ、それ明日も使うんだよ」
「こんなものを着られたら他の人たちの迷惑！」
「みんなおんなしような臭いしてっからわかんねえよ」
「OMG!」
なんで英語なんだよ
「洗うから、俺、洗うからさ」
「洗う価値はない！」
「かあちゃん、カップねえと作業できねえんだよ、頼むよ」
かあちゃんがテツカイ目で 俺の顔ジーーーーッと睨んだまま
玄関脇に置いてるでっけえ仕事用のバッグから何か取り出して
「ほら！」
ポンと俺に放り投げた
「なにこれ？」
「うちの部に、ニューヨーク出身の社員がいるの、アメリカ人よ」
それがなに？

「彼は自転車出勤してるの、雨の日もね」
だからあ、それがなんなんだよ
「聞いたのよ、そういうカッパって、この会社の近くに売ってる？ って、
そしたらスベアを持ってるって、しかも中古のサイトで買ったから
Very Very Cheeeeeeeep！ そしてね、disporsable よ 使い捨て」
使い捨て？ 紙できてんのかな
「あげますって言われたわ」
「えっ マジ？」
「どうせ古いし予備用に机に入れておいたまま使ってないからって」
「開けていい？」
「いいわよ」
グルグルに包んである袋の中から おおおお 真っ赤なカップ上下
「上下真っ赤を買う彼の神経もわからなかったけどね」
メッチャしっかりしてて
「かあちゃん、ありがとう」
「今の現場が終わったら捨てなさいよ」
「なんで？」
「diposable、使い捨て」
「もったいねえよ」
「ペラッペラで、見なさい裾、色落ちして擦り切れてるわよ」
「こんくれえなんともねえって」
「そうねえっ、あんたのこの汚物にくらべたらねえっ」
しゃあねえじゃん、雨降ってさ、汗かいててさ
「この安全第一は何？」
「それは監督がおもしろがって貼っ付けた」
「そう、監督が」
「みんな笑ってさ」
「せっかく監督が貼ってくれたのなら、こっちの真っ赤にも貼らないと」
「や、それはべつに貼らなくてもいいんじゃないね」
「せっかく監督が貼ってくださったんだから」
かあちゃんが背中中のシールを無理やり あっ ああああああ 背中一面が
「あら、破れちゃった」
ぜってえわざとだろ かあちゃん
「私が捨ててくる！」
かあちゃんがカップ入ったゴミ袋持って出てった
過激過ぎるよ
「美里は優しいなあ」
「へ？」
「ダイチの新しいカップもらってきてくれんなんてよ」
「まあ・・・ そうだけど」

伝わりづれえよ、かあちゃんの優しさ

家に来た愛里は着替えてた

シャワー浴びたんだな だよな

「愛里さんたら、お弁当の注文取ってきちゃうなんてやるわね」

「いえ、あの、つい」

「ありかたいと思うわよ、私も一人暮らしで忙しかったときは、

デパ地下のお弁当や外食で、まだ20代だったけど肌にきちゃって」

「先生は、アラフォーって言ってたんですけど、やっぱり肌がって言ってて」

「そうなのよ、だから家庭の味？ そういうのが あっ！」

「どうしたんですか？」

「忘れてた」

「どうしたんですか？」

「カズオ」

「え？ あ？ なに？」

「お願いがあるんだけど」

「いいよ、なにすりゃいい？」

「ダイチのカップくれた子、アメリカ人の社員」

「あ、うん」

「代金を支払うって言ったら、This is for you って、私が使うんじゃないんだけど」

とうちゃんがポカンとしてる

あげますって意味だよ、とうちゃん あとで説明しよう

「その代わりに、私が持ってくるお弁当が食べてみたいって」

「弁当？」

「料理はできるんですって、でも日本の？ 家庭の？ お弁当が食べてみたいって」

「そんじゃ明日その人の分も作ればいいんか」

「お願いできる？」

「おう、うん、おう」

「おかあさんがカップをもらってきたんですか？」

「そうなのよ、だって、あの汚物着てるなんて、考えただけでゾットする」

汚物じゃねえつつうの

「新しいのですか？」

「中古なんだけどね、今までのよりは100倍マシだから」

「そう・・・ですか」

「ダイチ、着てみて」

「ハ？」

「彼は180cmだからあんたより背が低いのよ、サイズ見たいから」

「大丈夫だよ」

「着てみなさいっ」

今かよ メシ食ってるときかよ なんでだよ シャあねえけど
自分の部屋で着てみたら お、サイズいんじゃない？
ああ！ だからアメリカ人か 俺やとうちゃんのサイズってなかなかねえもんな
「ダイチ！ 見せて！」
べつに見なくてもさ 行くけど
「サイズ合ってるよ」
「え？ 真っ赤？」
「そうなのよ、上下真っ赤を選ぶってどういう神経かと思っちゃった」
「何かに・・・似てる」
愛里 なに？ 誰に似てる？
「あら、なに？」
「あの、ちょっとその帽子部分を被ってキュッと絞めてみてくださいか？」
「これ？ いいよ」
フード被って紐絞めて
「これでいい？」
「あっ！」
なに？ どした？
愛里が口押さえて下向いちまった 肩震えてる
なんだ？ なんか悲しい思い出？
「愛里さん、どうしたの？」
「こんなこと・・・言っているのか・・・」
声も震えてるよ
「なあに？ なんでも言って」
なんでも言ってくれよ、愛里
「あれに・・・似てます」
「あれ？」あれ？
「タコさんウィンナー」
ええええええっ？
「ああ！ 似てる！ ハハハハハ」
タコさんウィンナーってさ・・・
「脱いでくる」
背中をかあちゃんの笑い声聞きながら部屋に入った
タコさんウィンナーって、愛里いいい

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってる
俺はちょっとタコさんウィンナー引きずってとうちゃんと片付けて
「ダイチ、メシどうする？」
「メシ？」

「このふたつの釜じゃ足んねえんじゃねえか？」

「あ、だよな」

おっちゃんたちと監督と、愛里と愛里の先生とかあちゃんとアメリカ人
どうする？ ん・・・っと あ！

「おっちゃんたちの握りメシ、今作って冷蔵しときゃいんじゃね？」

「そっか」

「そんで、明日の朝チンか・・・ 炙る、トースターで炙れば日持ちすっからさ」

「だな、それっきゃねえな」

愛里の弁当は・・・ 梅干とおかか混ぜた握りメシと唐揚げ、
それとアスパラのベーコン巻きと、あとは・・・

「ダイチ、外人さんに何作ればいいんだ？」

「いつものとうちゃんのが食いてえつつったじゃん」

「いつものでいいんか」

「それが食いてえんだよ」

「そっか、そんならな」

なんか 弁当作りの比重がメッチャ大きくなってんな

「とうちゃん、明日の弁当作り、がんばろうな」

「俺は給食センターや仕出し屋用の訓練してきたからよ」

「そっか、すげえなとうちゃん」

「そんでも、あんなでっけえ釜、ここにはねえもんな」

「いっそかあちゃんに買ってもらうか」

「買わないわよ！」

かあちゃん

「愛里さんがカズオに頼みがあるんですって」

「アイリちゃん、いいよ、なんだ？」

「あの、先生がペットボトルを切ったあの花器を気に入って」

「かき？」

「切り方を教えて欲しいって、私じゃなくておとうさんがって言ったら、

よかったら明日来て教えて欲しいって言うんですけど」

「あんなんでよけりゃいいよ」

「それじゃ、明日の朝、私と一緒に」

「そっか、ペットボトルは拾ってきた方がいいんか？」

「先生が用意するそうです」

とうちゃん、すげえ 大活躍だな

愛里の部屋の玄関

「愛里、明日もバイトだな」

「ウソみたいですね、あんなに怖がってたのに」

「愛里はすげえよ、やればなんでもすぐに覚えてさ、ミシンだつてさ」

「ミシン・・・ そう・・・ですね」

「愛里」

抱きしめて そんなで

「あの」

え？

「ひとつ教えて欲しいんですけど」

「うん、なに？」

「トイレの輪になった黒ずみって、どうやって取ればいいんですか？」

「え？ 愛里んとこ、とうちゃんがやってるはずだけど」

「私のところじゃなくて、先生のところ」

「愛里の花の先生？」

「生徒さん用のを掃除したんですけど」

「愛里が？」

「いちおうそういうのもやろうかなって」

「すげえよ、愛里、俺マジ感動だよ」

「感動してないで、教えて」

「あれは、重曹とクエン酸使えば取れんだけど、かなりしつこかったら」

「やっぱりいいです」

「いいって？」

「私にはそこまではできません、聞いてもわけわかんない」

「俺行こっか？」

「いいです、ダメです、それはやめて」

そっか・・・ どうすっかな あ！

「明日とうちゃん行くんだろ？」

「はい」

「とうちゃんにやってもらえばいいよ」

「そんなことお願いしていいんでしょうか」

「いいよ、とうちゃんすげえ上手だからさ」

「それじゃ、いちおうお願いしてみます」

「俺からも言っとくから」

「なんか・・・ お願いばかりで」

「嬉しいから」

「え？」

「愛里にお願いされんの、嬉しい」

「そう・・・ですか」

「愛里」

愛里の 柔らげえ そんなで

「プッ」

えっ

「なんで？ なんで笑うの？」

「ごめんなさい、あの、思い出しちゃって」

「なにを？」

「タコ・・・さん」

「愛里いっつ」

「ごめんなさい」

「ゆるさねえ」

もう一度 もっと もっと もっと あ ああああ ヤベ

「んっと、そんじゃあの、また」

「はい、それじゃ」

ドア閉まって速攻で鍵閉まった

俺のタコさん 暴れそうでした

帰ろう

日曜日の午前中

いつもよりはゆっくりめに起きて 顔洗って
洗濯機の中の あれ？ ゆうべつけ置き洗いコースかけといた俺の作業服は？
とうちゃんかな
キッチン・・・は、いねえ あ、ベランダにいた
「とうちゃん、おはよう」
「ダイチ、おはよう」
「俺の作業服干してんの？」
「触ったらまだ乾いてなくてよ、天気もいいからな」
「とうちゃんありがとう」
あれ？
「とうちゃん、俺のゴム長も洗ってくれたんか」
「俺のズックも洗った」
とうちゃんはスニーカーは全部ズックつつうんだよな
「アイリちゃんから、あの、なんだ、臭せえの取るやつもらったからよ」
「だよな、汚ったねえまものに入れたらもったいねえもんな」
「焼け石に水」
えっ かあちゃん
「美里、おはよう」「か、かあちゃんおはよう」
「おはよう」
「美里、コーヒー？」
「自分で入れるから」
「そっか」
「かあちゃん、焼け石に水ってなんだよ？」
「あんたのそのゴム長、どうせすぐ臭っさくなるわよ」
「だから愛里があれ買ってくれたんだろ」
「愛里さんも頑張ってくれてるけど、あの臭さはねえ」
「しゃあねえじゃん、汗かくしさ、仕事したらさあ」
「私は独身時代、まさか私の玄関があんな臭くなるとは想像もしてなかった」
「んなこと言ったってさ」
「人生ってわからない」
なんだよ首振ってキッチン行っちゃったけどさ
「そんじゃ俺は風呂、掃除してくっからよ」

「俺も愛里んとこ掃除してくるよ」
「シーツは昨日帰ってきてから換えた、キッチンも掃除してっから」
「そんじゃ、バスルームと掃除機くれえかな」
「だなあ、たたきも掃除したから、そんくれえじゃねえかな」
「そっか、ありがとう」
「そんじゃ掃除終わったら買い出し行くか、焼きそばの」
「おう」
愛里の世話は俺がするつつって、愛里をこっちに残してもらったのに、
結局とうちゃんがしてくれてんじゃん
「とうちゃん」
「ん？」
「ありがとう」
「なにが？」
「愛里の世話してくれて」
「俺はヒマだからよ」
笑ってっけど、とうちゃん 24 時間働いてるみてえなさ
とうちゃんがソファ座ってコーヒー飲んでみてえなの、見たことねえよ
ソファ座ってんのも見たことねえよ 座ってるとしたら床だよ
あそこはかあちゃんの席みてえなカンジだもんな
愛里の部屋行こう

愛里の部屋のドアホン鳴らして
あれ？ ドア開かねえ
「どちら様ですか？」
ドアホンから声 愛里おもしれえな
「ポピンズ紹介所から来た森下です」
「頼んでません」
「入れてくませえ」
ドアホン越しに愛里の笑い声
ドアが開いて
「おはようございます」
「掃除しに来ました」
「お願いします」
ツンとしてさ
「愛里」
抱き寄せて
「おはよう」
キス した おはようのキス した———
「ゆうべはごめんなさい」

「なにが？」

「LINE くれたのに寝ちゃってて、さっき見ました」

「いいよ、バイト終わってホッとして寝ちまったんだなって思ったから」

「でも、せっかく LINE してくれたのに」

「んなこと気にすんなよ」

「あなたとの LINE は楽しいから損した気分」

可愛いっ メッチャ可愛い

「あの」

「なに？」

「けっこう強い力でギュッてされてちょっと苦しい」

「あ、ごめん」

パッて腕放したら 俺の腕つかんで

「この腕の筋肉！ 殺傷能力あるから！」

「ごめんなさい」

「笑ってるけど」

「殺傷能力なんつうからさ」

「一回自分で自分をギュウッてやってみたらわかると思う」

「ごめん、加減する加減すっからさ」

愛里がパッと後ろに身体引いて

「お掃除、お願いします」

「おいっす」

愛里としゃべってっ楽しくてしゃあねえ

掃除機かけて

「愛里、ベッドルーム入っていい？」

「はい」

ベッドルームにも掃除機かけて、窓のサッシ拭いて

机の上も あ・・・机の上に小皿みてえなの置いてて そん中に俺があげた小石

なんか メッチャ感動なんだけど マジで大切にしてくれててさ

あんま見たら悪りいな あとは・・・大丈夫か

次はバスルームだな

とうちゃんがきれいにしてくれてっからさ ほとんどやることねえな

とうちゃん、ありがとう

あとは・・・キッチンの流しか

おれ？ 洗い物がなんもねえ

「愛里、イチゴのヨーグルトがけ食ってねえの？」

「食べました」

「器ねえけど」

「おとうさんが掃除してくれるので、なんか申し訳なくて自分で洗って」

え？

「しまうようになって、それがクセになっちゃったっていうか」

「愛里、俺がやるときはんなことしなくていいよ」

「それくらいはできます、子どもじゃないんだから」

「そっか、すげえな」

「あんな小さな器を洗って食器棚に入れるくらいですごいとか言わないで」

「なんか知らねえうちに愛里が成長してるつつうかさ」

「ママみたいなこと言わないで」

「ママも感動すっと思う」

「プッ」

「なんで笑うんだよ？」

「ママって言うから」

「愛里がママつつうからさ、つい」

「いいです、ママで、わかりやすいから」

「そんじゃ、愛里のママはママつつうことで」

「やだあ、可愛い ハハハハ」

「愛里がママでいいつつったんじゃん」

「言いました、私も最近、あなたのってつけるの忘れちゃって」

「ん？」

「おとうさんおかあさんて言っちゃってて」

「いいよ、それでいいよ、おとうさんおかあさんでいいよ」

マジいいよ そうなって欲しいからさ

「いいんでしょうか」

「いいつつってんじゃん」

「本当なら森下のおじさまとかおばさまって」

「んな、似合わねえから、とうちゃんかあちゃんでもいいくれえだから」

「さすがに、とうちゃんかあちゃんは・・・」

「そんじゃ、おとうさんおかあさんでいいよ」

「そうですか」

「おう」

たまんねえ たまんねえっすよ この距離感ギュッと縮んでる感がさあ

掃除終わって

愛里と一緒にソファ座って 愛里は座らせてくれんだよ、かあちゃんと違ってさ

「愛里、明日っから4日間、俺休みじゃん」

「そうですね」

「どっか行きてえとこある？」

「行きたいところ？ え・・・ん・・・っと」

「海？」

「海は・・・お盆？ あっ、ママが言ってたことがある」
「なに？」
「お盆に海に入ったら、お盆に帰ってきたあの世の人たちに連れていかれるって」
「あの世？」
「でも本当はクラゲが大量発生するらしくて、クラゲは・・・」
「そっか、だよな・・・つうか、泳がねえけど」
「どっちにしても混んでると思う」
「そっか」
「それに、海は・・・あなたとの LINE でもう行った気分になってて」
え マジっすか
「あれで満足しちゃって」
俺も 愛里と海行ってみてえな気分だった 楽しかった マジで
「んっと、そんじゃ、どっか、なんつうか、テーマパークみてえな？」
「あなた興味ありますか？」
「俺は・・・愛里が行きてえなら」
「私は興味ないです、メッチャ混むし、お盆じゃなくても混むし」
「そっか、そんじゃ、んっと・・・なにしてえ？」
「べつに」
「べつに？ 俺ずっと休みだからさ、どこでも連れてけるけど」
「ふつうでいいです」
「ふつう？」
「ふつうに家で、ふつうにしゃべったり？」
「マジ？」
「はい」
こんな 無欲なカノジョっているんすか？
俺は初めてのカノジョだから比較できねえけど
「ごめんなさい」
「え、なにが？」
「せっかくのあなたの休みなのに、ふつうがいいとか」
むしろ感動してんだけど
「私って・・・つまらない女ですね」
ウソだろ！
「なんで笑うんですか？」
「おもしろえから」
「なにが？」
「愛里」
「私？ どこ？ おもしろポイントゼロですけど」
「俺のツボ」
「あなたのツボってどこにあるの？ 全然わかんない」
「ここだよ」

愛里に

「ブッ」

「え、なんで笑うんだよ？」

キスしようとしたんじゃん

「だって、今の、少女マンガみたいで」

「ちげえから、これはねえちゃんのマンガとかじゃねえから」

愛里が上目遣いで俺を見てっけど

「マジちげえから」

「はい、そうですか」

「愛里、マジでちげえから」

愛里が口押さえて笑ってんだけど

「愛里、俺はさあ」

「あなたといると・・・ おもしろい ハハハハ」

おもしろえことしようとしたわけじゃねえんだけどな

「それじゃ、私はそろそろ着替えます」

「あ、そっか、かあちゃんと出かけんのか」

「おかあさんとショッピングって最高過ぎ」

え・・・

「おかあさんのセンス？ チョイス？ そぼで見れるなんて」

「俺とは？」

「なにがですか？」

「俺とのショッピングは？」

「あなたとの・・・は、なんていうか、戦場？」

「戦場？」

「チャレンジ？ 不可能への挑戦みたいな」

「え、なに、なんで？」

「それはそれでおもしろいですけど」

おもしろえんなら・・・ まあいいけど

「そんじゃ、俺はどうちゃんと焼きそばの買い出しに行くよ」

「焼きそば作るんですか」

「うん」

「おじさんたち絶対喜ぶ、美味しいから」

「どうちゃんが作るんだけどさ」

「あなたとおとうさんの焼きそばは私の中では不動の NO.1 だから」

「マジ？」

「はい、もう他のは食べられなくなります」

「他のは食わせねえよ、ぜってえ食わせねえ」

「最高なんですけど」

「愛里」

抱きしめて あ・・・

「苦しくねえ？」
「はい」
「そんじゃ、また夜」
「私はお寿司を食べてきます」
「俺はおちゃんたちと焼肉食ってくる」
「なんかしあわせな日曜日ですね」
「俺は・・・」
これ言ったらまた笑われんな
「おう」
愛里といると毎日がしあわせなんてさ

愛里の部屋の玄関

「愛里、なんかあったら連絡しろよ」
「はい、でも、おかあさんも一緒だから」
「かあちゃんと二人でなんかあったら速攻連絡してくれよ」
「あ、そうですね、します」
「そんじゃ」
えっ あ、愛里が抱きついてきて 俺 ビックリして尻餅ついた
「ごめんなさい！」
「や、全然」
立ち上がって
「嬉しい、愛里から抱きついてくれて」
「なんかワクワクしちゃって、つい」
つい・・・
「そっか」
「それじゃ、楽しんできてください」
「愛里もな」
「はい」
ドア閉めたら 鍵が閉まって
たったこんだけの時間でもさ 俺メッチャしあわせだった
最高だよ 愛里 俺は・・・って、早く買い出し行かねえと

ママとの電話

とうちゃんと二人で白飯炊いて握りメシ作って
俺は愛里と愛里の先生の明日の弁当の下ごしらえして
とうちゃんのかあちゃんとアメリカ人の弁当の下ごしらえ
「とうちゃん、アメリカ人の弁当、何に入れんの？」
「これじゃダメなんか？」
愛里の言う汚ったねえタッパーか　しゃあねえよな
他のもおんなしカンジだもんな
かあちゃんが風呂から上がってきた
「かあちゃん、アメリカ人の弁当、これに入れていっかな？」
「なんでもいいんじゃない？」
そうだった　かあちゃんはこれ系に関しては興味ねえんだよ
若けえ頃とうちゃんの握りメシ、スーパーの袋に入ったの持ってったって
なのに俺の着るもんにはあんな鬼みてえにさ
「Mark」
「マーク？　なに？」
「あんたにカップをくれたアメリカ人の社員の名前」
そんなん今どうでもいいよ
「仕事はできるのよ、ちょっと変わってるけど」
「そうっすか」
ピンポーン
え？　今頃なんだ？　誰だ？
「あら、愛里さん」
愛里？
急いで玄関ドア開けて
「愛里、どした？　なんかあったんか？」
「あの、気になっちゃって」
「なに？　どした？」
「あなたにカップをくれたアメリカ人の」
「え？　マーク？」
「マーク？」
「や、何が気になった？」
「お弁当箱」

「え？」
「あなたのところにはあの汚いタッパーしかないんじゃないかなって」
「あ、ああ、まあ、かあちゃんもあれで」
「よかったら、これ」
愛里が差し出したのは スヌーピーの模様がついてるタッパー
「ママが持たせたの知ってますよね」
「え？ ああ！ 俺、愛里のキッチン戸棚のいちばん上に入れた」
「保存容器とか私は使わないからどうでもいいと思ってたんですけど、
これならまだいいかなって、スヌーピーっていうのがあれなんですけど」
愛里 んなこと気にしてくれて わざわざ
「あなたのおとうさんのお弁当を味わうのに、あの汚いタッパーはないなって」
んなこと考えてくれて
「愛里さん」
「かあちゃん、愛里がマークの弁当入れるの持ってきてくれたんだよ」
「え？ 愛里さん、わざわざありがとう」
「いえ、あの、それじゃ」
「愛里、送ってく」
「大丈夫です」
「送ってく」
愛里が俺の顔チラッと上目遣いで見て
「はい」
玄関出て エレベーター乗って
「ママとケンカしました」
「えっ？」
「電話がかかってきて、私の初めてのバイト代の写真とバイトしたっていうの見て」
愛里がちょっとイラついた顔して
「お小遣いが足りないならもっと送ってあげるからって」
「え？」
愛里のお母さんはそう思っちゃったんか
「そういうことじゃないって言っても、着きました」
エレベーター出て愛里の部屋に向かって
「愛里ちゃんはお金のことなんか心配しなくていいのって」
愛里の部屋の前
「そうじゃないって言っても」
愛里が鍵開けて
「愛里ちゃんが人様のところで働くななんてママ心配よって」
ドア開けて
「それだけです、おやすみなさい」
「ちょ、愛里、待って」
「ごめんなさい、愚痴っちゃって」

「それで電話切っちゃまったの？」
「なんて説明していいのかわからなかったから」
「そんじゃお母さん心配すんだろ」
「私が何をやっても心配ばかりして、何も・・・もういいです」
「よくねえよ」
「だって、だったら、なんて言えばいいの？ 何を言ったって心配心配って」
「俺が愛里のお母さんに話す」
「え？」
「今、つなげてくれっかな」
「つなげる？」
「ズームか FaceTime」
「電話でよくない？」
「やっぱこういうことは顔見て話さねえとさ」
「ええええ、いいですよお」
「頼むから、俺が愛里にバイトしてくれつつあったんだからさ」
「でも」
「このまんま愛里とお母さんがってさ、離れてんのにさ、余計心配するじゃん」
愛里がなんか考えてて
「わかりました、それじゃリビングで」
「おう」
愛里が携帯のズームつけて
「愛里ちゃん！」
愛里のお母さんがすぐに出た
「あの、森下大一さんが、説明してくれるから」
「説明？ 何を？」
「私のバイトのこと」
「だから、愛里ちゃん、バイトなんかしなくてもね」
愛里に 俺が代わるって合図して
ん・・・っと かあちゃんにふつうにしゃべろって言われたよな ふつうって
「お久しぶりです、森下大一です」
「ああ、大一さん、愛里がお世話になってます」
「突然ですみません、愛里さんはお母さんにきちんとわかって欲しくて、
ただ、どういえばいいのかって相談を受けたので」
「まあ、大一さん、ごめんなさいねえ」
「俺もお母さんと話がしたかったので」
「まあ！ 私と？」
「愛里さんはお金のためにバイトしてるんじゃないんです」
俺ちゃんとふつうにしゃべれてんのかな？
「少しずついろいろなことを経験していきたいって思うようになって、
最初は怖がってました、自分にできるのかどうかって」

「だったら余計にやらなくてもねえ」
「でも愛里は、愛里さんは、しっかり仕事してきました」
「え？」
「パパとママに見せるためにバイト代の写真を撮ったって言ってました」
「それは見ましたけどねえ」
「きっと褒めて欲しかったんだと思います」
「え？」
「お母さん、愛里さんはちゃんと成長してます」
「成長・・・」
「お母さんとお父さんが大切に育ててくれたからすげ、すごく成長してます」
「まあ・・・」
愛里のお母さんが画面越しに涙拭いてて
「愛里さんは大丈夫です」
「そう言ってもらうと・・・ 嬉しいわ」
「俺は、俺のとう、父や母も愛里さんにいろいろ助けられてます」
「愛里ちゃんに？」
「ついさっきも、俺たちが気いつかなかったことに気づいてくれて、
俺たち感動して、愛里は愛里さんはすげすごく・・・ ステキな人です」
「ステキ・・・」
「お母さん、お母さんの娘さんは、すげえパワー発揮してますよ」
「大一・・・さん」
画面の向こうの愛里のお母さんは涙流しながら微笑んで
「それじゃまた、突然すみませんでした」
「大一さんとお話できて嬉しいわ」
「俺もお母さんと話せてよかったです」
「愛里ちゃんのこと、よろしくね」
「はい、命賭けて守りますっ」
「まあ！ ステキ！」
「それじゃ、愛里に、愛里さんに代わります」
愛里を見たら 涙流して俺のこと見てて
「愛里、お母さんと」
コクンでうなずいて
俺は立ち上が え？ 愛里が俺の T シャツつかんで座らせた
いいんかな 俺がいて
「ママ、さっきはごめんね」
俺は横向いて 聞いているだけで
「ママこそごめんなさいねえ、愛里ちゃんの気持ちわかってあげなくて」
「ママ、私、楽しくやってるから心配しないで」
「そうね、あんなステキなお花も活けられるようになってねえ」
「うん、先生もとってもいい人だから」

「そう、よかったわねえ」
「うん」
よかった 愛里よかったな
「それじゃ、パパにもよろしくね」
「パパにも話しておくわ」
「うん、またね」
愛里が OFF にして
俺の胸んところに飛び込んできて
「ありがとう」
「よかったな、お母さんわかってくれて」
「あなたがママに言ってくれてることに・・・ 感動しちゃって」
「本当のことっきゃ言ってねえじゃん」
「こんなふうにしててくれてるんだって」
「思ってるよ」
愛里が顔あげて
「嬉しい」
「愛里」
俺は 愛里の 愛里の腕が俺の身体を
ヤベエって 頭のどっかで思ってっけど そんなでも
愛里の柔らけえくちびるを離したくなくて そんな もっと もっと
チャラチャンチャンチャンチャン
反射的に くちびる離して
えっ かあちゃん？
「も、もしもし」
「帰ってきなさい」
「あ、おう」
「こんな時間にこれ以上いたら」
「わかってるよ」
「あんたが危険物になる」
ギクッ て 言葉がピッタリ of 感覚
「な、愛里のお母さんと話してたから」
「愛里さんのお母様？」
「もう終わったから」
「あ、そう、帰ってきなさいよ」
「わかってるよ」
ピッ
「かあちゃんから」
「はい」
「そんじゃ、俺、帰るから」
「はい」

玄関まで愛里も来て

「そんじゃ」

「はい、おやすみなさい」

「愛里」

俺は もう一度だけ そっと

「おやすみ」

そんでドア閉めた

おやすみの キス したーーーーー！

あれ？ 鍵

「愛里！ 鍵！」

カチャッて

まあ なんかたんで よかった うん よかった

かあちゃん、さっきの電話は マジ感謝 タイミング良すぎて怖えけど

タコさんウィンナー

朝起きて 顔洗って 作業服に着替えて
キッチン行くと どうちゃんはもう握りメシ炙ってた
「おっちゃんたちのによ、ネギ味噌つけて焼いてっから」
「メッチャ美味いやつじゃん、おっちゃんたち喜ぶよ」
味噌の焼ける香ばしい匂いがしてきた
どうちゃんは炊き立てのメシでかあちゃんとアメリカ人に握りメシ作って
つくね団子と卵焼きと焼いたピーマンとゆうべ俺が作ったポテサラ入れて
俺は梅干とおかか混ぜた握りメシ作って、唐揚げとアスパラのベーコン巻きと
「どうちゃん、卵焼きもらっていい？」
「いっぺえ作ったからよ」
卵焼き入れて、あとはポテサラと・・・
「どうちゃん、日本の弁当つったらさ、やっばタコさんウィンナーじゃね？」
「そっか、だよな」
タコさんウィンナー、愛里、俺が入ってるよ
つか、このすげえ塗りの弁当箱にタコさんウィンナー入れていいんかな
入れたけどさ
「これはダイチの分だかな」
「俺の分はゆうべ俺が握ったじゃん」
「ダイチのは俺が握りてえからよ」
どうちゃん ウルウルしちまうよ ありがとう
「ダイチ、これ、食ってけ」
「うん、ありがとう」
焼きあがった味噌握りメシの荒熱とってホイルに包んで
凍ったペットボトルも入れて
「そんじゃ、いってきます」
「カップ入れたか？」
「入れた」
「そっか、そんじゃ、いってらっしゃい」
「どうちゃん、今日愛里と一緒に行くんだよな」
「ペットボトル切りにな」
「愛里のことよろしく」
「危ねえことはさせねえからよ」

「うん、そんじゃいってきます」

家を出て バス停に走った

現場着いて 便所掃除・・・はショーさんの役目か

「だいづ！」

「ヤッさん、スギさん・・・と え？」

誰だ？

「ダイちゃんおはよう」

「ショーさん！」

真新しい作業服とゴム長、そんでボッサボサに伸びてた髪もスツキリして

「ショーさん、メッチャかっけえ！」

照れて頭掻いてっけどマジでさ

「寮の近くに床屋があってえ、俺とスギさんで連れてったんだした」

「しえんいえん」

ん？ え？

「洗髪なしだとお 1000 円で散髪できんだしたあ」

「1000 円？」

いいなあ 1000 円でってさ

「だいづはどこで散髪してんだあ？」

「俺はかあちゃんの友だちのオカマのおっちゃんが切ってくれてて」

「お母ちゃんの友だちい・・・」「オガマ・・・」

「近くに床屋があって、そこ行きてえっつうと、かあちゃん怒るんすよ」

「だなあ」「金いだわしんだべ」

ん？ いたわ？

「でも、その人上手だよ、ダイちゃんの髪かっこいいよ」

「んだ」「そんだよ」

「俺のことはいいんすよ、ショーさんすよ」

「監督さんが、会社の支給品だっってこの一式持ってきてくれたんだよ」

「そっか」

「就職祝いだっって、新品の下着や靴下までくれて・・・」

監督、すげえよ 漢だよ

「俺は服なんて持ってないだろ、それでヤッさんとスギさんが・・・」

「俺とおショーさんは背格好おんなしくれえだからあ、

おっかあがでっきるだけ新しいのってもはあ、俺のお古だけんちよ」

「ありがたいよ、本当にありがたくて」

「家族寮の他の連中にも声かけたらはあ、サンダルやタオルや、なあ」

聞ってる俺が・・・ 涙・・・

「ダイちゃん、ダイちゃんのおかげだよ」

「俺はなんもしてねえよ、監督やヤッさんスギさんがさ」

「ダイちゃんのおにぎりは幸運のおにぎりだよ」
とうちゃんの握りメシが・・・ 幸運の・・・
「んなこと・・・言ってもらったら・・・ とうちゃん・・・ 喜ぶ」
「だいつが泣いてえどうすんだっぺえ」「だいつはなぎっつで」
おっちゃんたちが笑ってっけど 俺はマジすげえ感動して嬉しくてさ
「ほんじゃ、仕事すっぺ」「んだな」「はい」
「おいっす」
俺 ずっとおっちゃんたちとここで働きてえな
本音言えば学校やめてずっと働きてえ
それでもさ それでも・・・ 俺が愛里のこと一生守れるようになるのは
どうすりゃいいんだろう 何をすれば どこに進めば
「だいつ！」
「あ、おいっす！」
今は目の前のことだ

昼休憩

「こりゃまだ美味えなあ」「まんずめな」
「とうちゃん特製のネギ味噌っす」
「この味噌だけでえ一杯やったらたまねっぺ」「おめはまんだ酒が」
「ダイちゃん、今日から俺もお金払うよ」
「ショーさん、いいよ」
「昨日の午後からの賃金もらったからさ」
「そんじゃ、これは俺ととうちゃんからの就職祝いっつうことでさ」
「そうか？ それじゃありがたく、いただきます」
「だいつ、それはあなんだあ？」
「それ？」
「その赤けえビニールのお」
「ああ、これ、カップっす」
「新しいカップ買ったんかあ？」
「かあちゃんがもらってきたんすよ」
「お母ちゃんがもらってえ・・・」「んだのが」
「中古だっつうんすけど、すっげえ新品みてえで」
「新品・・・ まあ、そうだあ」「前のよがはな」
「前のはあ捨てだのお？」
「かあちゃんが臭っせえって捨てちまったんす」
「あれはなあ、蒸れでえ臭かったもんなあ」
「えっ 臭かったっすか？」
「や、あの、俺たちもお、なあ」「かっちゃんさ臭せっでしゃんべられる」
ほらあ、かあちゃん、みんなおんなしなんだって

「それでもはあ、真っ赤でえ派手でしたあ」「わだば着れねな」
「これ着てみたんすよ、そしたら愛里が」
「あいりちゃんが?」「あえるちゃん?」
「ちょっと着てみるんで」
上下着て
「いんやいんや、だいつが着るとおかけっぺ」「んだな」
「ダイちゃん、着こなしてるよ」
「それでも、このフード被ってここ絞ったら」
おっちゃんたちがジーッと見てる
「愛里が、タコさんウィンナーに似てるって」
「タコさんウィンナー! ワハハハ」「ワハハハハ」「ハハハハ」
「タコさんウィンナーに見えるんすか?」
「そう言われっちゃうとお、そうにしか見えねっぺ」「んだな」
ピコン
愛里だ
『あなたのおとうさん大活躍です』
とうちゃんが活躍? 花の教室で?
ピコン
『詳細は後ほど』
なんだよ 現場の記者みてえにさ こういうところが可愛くてさ
『現場のおっちゃんたちに』送信
『赤いカッパ着てみせて』送信
『愛里にタコさんウィンナーって言われたっつたら』送信
『笑われたw』送信
ピコン
『wwwwwww』
マジで笑ってんな
ピコン
『先生が あなたの弁当美味しいって感動しました』
マジか よかった
ピコン
『タコさんウィンナー懐かしいって wwwww』
『よかったっすよw』送信
ピコン
『それじゃあとで』
『愛里』送信
『好きだよ』送信
ピコン
『私も好きです』
えっ ええええええ 愛里いいいっ

『泣きそうっす』送信

ピコン

『現場からは以上です』

へ？ なに？ 現場からって 愛里 俺

「しあわせだー！」

「だいづ、どすた？」「あいらちゃんかあ？」

「え、まあ、俺が好きだって送ったらあ、愛里も好きだってえ」

「はあああ、ノロケ！」「よげ暑づくなる」

「俺、午後からもがんばるんで」

「だいづががんばるとお、俺たちが追っつかねんだあ」「やめでげ」

「がんばるんでっ」

「わがっだわがっだ」「だ～れも止められねした」

愛里 愛里の好きで俺は 一生食わなくても生きていけるっ！

三時休憩

今日はもう雨降らなそうだな

「ダイちゃん」

「ショーさん」

ショーさんが俺の隣りに座った

「ダイちゃんは俺の人生を救ってくれたよ」

「俺じゃねえよ、監督だよ」

「このゴミ箱のところで声かけてくれただろ」

「あれは何やってんだろうなって」

「腹減ってるんじゃないかって聞いてくれただろ」

「腹減ってんじゃないかなって思ったからさ」

「俺は追っ払われるのかと思ったのにさ」

「なんで追っ払うの？」

「ずっと追っ払われてきたからさ」

「とうちゃんも言ってたな、だからこそっとこそっとって」

「そうなんだよ、人目を盗んでこそこそ生きてさ」

ショーさんはフーッて大きく息吐いて

「俺は何もかも失って・・・よく目の前が真っ暗っていうだろ？」

「うん」

「真っ暗っていうのは、どこかに光があるような・・・ そういうんじゃないんだ、

灰色、どこまでもずーっと灰色で光も闇もなく灰色のまま、

俺は世の中を恨んですべてを恨んで自分を恨んで、恨んで恨んで恨み疲れて、

何も感じられなくなって・・・ 死のうとしたことも何度もある」

えっ

「それでも死ねなくてさ」

俺は なんか なんとなく ショーさんの手を握った
「それでも腹は減るんだよ、死のうと思ってたヤツがさ」
ショーさんは鼻で笑って
「何も考えられなくて、ただ残飯漁ってさ、腹が減ったことしか感じられなくて」
「どうちゃんもそう言ってた、腹減ったな、なんか食いてえなばっかだったって」
「そうだよな、そうなんだよ」
「冬になると炊き出しがあって、温ったけえ汁がもらえてありがたかったって」
「ダイちゃんと話していると仲間と話してるみたいな気分になるな」
「どうちゃんの話でさ、俺はなんも不自由なく育ててもらってさ」
「それでもダイちゃんは俺におにぎりをくれただろ」
「腹へってんじゃねえかと思ったから」
「汚い浮浪者の俺の隣りに座って、友だちみたいに話をしてくれてさ」
「ショーさんメッチャ話しやすかったよ、俺、楽しかったもん」
「そうか」
ショーさんは笑って
「ダイちゃんと話していると、自分が人間にちょっとは戻れた気になって・・・
俺が次の日もここに来たのは、タッパー返さなきゃと思ったのもあるけど、
ダイちゃんの顔が見たかったからなんだよ」
「え、マジ？」
「こんな言い方ごめんな、ごめん、でもさ、ダイちゃんといると、
自分の子どもみたいな、可愛くて、俺は子どもいないけどさ」
「え・・・」
「ダイちゃんといると、俺はいてもいいような気になって、
ショーさんショーさんて懐いてくれて・・・ 俺は・・・」
ショーさんが涙拭いて 俺は涙止まんなくて
「ダイちゃん、俺はダイちゃんと出会って救われた」
「俺は救おうとか、そんなん全然考えてなくて」
「だからだよ」
「だから？」
「ダイちゃんは、哀れな浮浪者を救ってやろうとか助けてやろうとか、
そういうのが全然なくて、だから、なんか心がほぐれるっていうか」
心がほぐれる？
「ダイちゃんみたいに接してくれる人はいなかったから、救われた、
まさかこんなふうに仕事をもらえて住むところまでもらえるとは思わなかったけど」
「それは監督のおかげだよ」
「ゆうべ、久しぶりに布団で寝たよ」
「そっか」
「泣いた」
「そっか」
「ダイちゃん」

ショーさんが俺の手を握り返して

「俺はダイちゃんに救われたんだよ、俺のすさんだ心がさ」

俺は なんつっていいかわかんなくて だって俺はそんなつもりなくて

「ダイちゃん、こんなこと言うのも、それでも、生きててよかったよ」

俺はショーさんの顔見て うんうんてうなずくことっきゃできなくて

「ダイちゃんの父さんのおにぎり食いたいしな」

「そうだよ、とうちゃんの握りメシ食わねえとさ」

「明日からは代金払うよ、俺はもう仕事してるんだから」

「わかった」

ショーさんはニッコリ笑って立ち上がった

監督、ヤッさん、スギさん、ありがとう

無謀なこと

愛里の部屋の玄関ドアの前

ドアが開いて

「おかえりなさい」

「愛里」

抱きよせて そんで

「ただいま」

ただいまの キス した ただいまのキス した——

「あの、えっと、それじゃ、あとで」

え、愛里、なんでドア閉めようとするの？

「ちょ、どうちゃん大活躍ってなに？」

「あ、そうでした、えっと・・・」

愛里がポーッと斜め下見て

「愛里？ どした？」

「え、いえ、あの」

「なんかあったんか？」

「なんか・・・ むずかしくて」

「むずかしい？ なに？ 俺ができることあったらやっからさ」

「あなたは・・・ 簡単にできるでしょうね」

「そんじゃやるよ、なに？」

「あなたがやったら・・・ 意味がない」

「意味がねえ？ なに？」

「私がやらないと」

なんのことだ？ あっ

「便所掃除？ 黒ずみの輪っか？」

「それは、おとうさんがきれいにしてくれました」

「そっか、よかったな」

「先生にペットボトルの切り方を教えてくれた後に、トイレを見せたら、
おとうさんがやるって言うてくれて、すごくきれいにしてくれました」

「そっか」

「それで、私たちがレッスン受けている間に、おとうさんが、

玄関の外と中も掃除してくれて、先生が大感激して」

どうちゃんならやるな

「先生は前からホームクリーニングの人を頼もうと思ってたけど、
どこがいいのか、本当に大丈夫なのかとかわからなくて言うから、
私もお願いしたことがありますって言ったら、どこ？ って聞かれて」
愛里が携帯出して
「ここですって見せて」
丸山のおぼちゃんのサイトだ
「それで私・・・余計なことを」
「余計なこと？」
「おとうさんは、ここの伝説の家政夫って言われてて、予約困難のすごい人ですって」
んなこと言ってくれたんか
「そうしたら、おとうさんにぜひお願いしたいって」
「え？」
「それで、私、時給三千円で二時間以上からですって」
「愛里の先生なんだからさ、とうちゃんも金もらおうと思わねえよ」
「私だってバイト代もらっているのに」
え・・・
「おとうさんのあの仕事でお金もらわないっておかしくないですか？」
「あ、はい」
「先生は、明日レッスン中？ 午前と午後、4時間をお願いしますって」
「決まり？」
「おとうさんにはもうお願いしました」
「愛里、すげえ」
「なにが？」
「とうちゃんの仕事取ってきた」
「私は私の知っている事実を言っただけで」
「愛里はすげえよ、俺ととうちゃんの稼ぎ口持ってきてくれてさ」
「よかったんでしょうか」
「マジありがてえよ」
「だったら、よかったです」
なんか元気ねえな
「愛里、なんかあったんか？」
「なにもないです、あっ、ちょっと待っててください」
リビングに走ってって あれ？ ミシン？
「これ、先生のお弁当箱と、今日と明日のお弁当代です」
「おう、毎度あり！」
「毎度ありって」
あ、ちょっと笑った
「愛里、ミシンやってたんか」
「えっ いえ、あの、はい」
「なんか縫ってたの？」

「え、まあ、はい」
「花の？ 教室の？」
「まあ・・・ 遠回りすればそうだと言えなくもないんですけど」
遠回り？
「なんでそんなこと考えちゃったかなって自分の技量も考えないでこんな」
「俺が手伝えることならやるよ」
「それじゃ意味がないんです」
「意味がねえ？」
「これは、私が決めたことですから」
なんかわかんねえけど
「そっか」
「あの、それじゃ、あとで、今ちょっと難航しているの」
「やっぱ手伝おっか」
「それじゃ意味がないの！」
え・・・
「あ、ごめんなさい、あなたは悪くないです、ただ、ちょっと」
愛里が俺の顔見て
「ちょっと・・・ いいですか？」
「ん？」
おっ 愛里が俺に抱きついて いいよ ちょっとじゃなくてさあずっとでさあ
「欲しい」
えっ っっっっっっ
「あなたの、テクニック？ 経験？」
えっ お、俺の？
「や、お、俺は、んな、んな、やったことねえから」
「あるでしょ！」
「ねえよ！ マジねえよ！」
「あなたで無いっていうなら私はなんなの？」
「え？ あ、愛里は、んっと、しょ・・・」
「初心者？ ですよ」
初心者っつうなら俺だってさ
「それなのに私、こんなことやろうとするなんて」
や、やろうと？
「や、あ、愛里、俺も、それでも、やっぱ、卒業まで待った方が」
「卒業？ 何の卒業？」
「え、や、だから、高校卒業するまではっつうか」
「高校？ それじゃ間に合わないですよ」
「ま、間に合わ、な、なにに？」
「あ・・・ いえ、なんでもないです」
ヤベ ヤベエ 俺の

「あ、愛里、ちょっと座っていっかな」
「なんで？」
「や、ちょっとだけ」
たたきに座って 落ち着け 俺のタコさん
「立ちくらみ？」
「や、あ、まあ、うん」
「大丈夫ですか？」
「おう、すぐ、うん、すぐ」
「ごめんなさい、私、ちょっとピリピリしちゃって」
「や、んな、やっぱ、そりゃ、うん」
「ベストは尽くします」
「べ、や、うん、お、俺もそのときは、なんつうか」
「でも私のベストが世の中のベストかどうかはわかりません」
「俺もわかんねえから、うん、わかんねえ」
「あなたが教えてくれたから」
「えっ？ 俺？」
や、俺は まだ なんも
「きっと大丈夫ですね」
「え、や、んっと」
愛里が両頬を両手で抑えて
「どうしよう」
「あ、愛里、あんま考えねえ方が」
「ミシン」
「へ？ ミ、ミシン？」
「ちょっと無謀なことをやろうとしてて」
「ミシン？」
「やったことないんですけど」
「ミシン？」
「今まで使ったことのない、なんていうか」
「ミシン？」
「できるかなあ」
ミシンか そっか ミシン
落ち着いた 俺の
「え？ もう立ち上がって大丈夫？」
「ああもう、うん、もう」
「なんか、あなたにしゃべったら、ちょっと落ち着きました」
「そっか、よかった、うん、俺も、なんか、落ち着いた」
「ありがとう」
「や、俺はなんも」
メッチャ違うこと想像してました

「それじゃ、またあとで」

「おう」

今は キスは ちょっとまだヤベえな

「そんじゃ」

ドア閉めて

俺は そればっか考えてるわけじゃなくてさ そんでも なんつうか

頬っぺたピシッって フーーー

帰ろう

とうちゃんと買い出しして

晩メシ作ってて

「とうちゃん、とうちゃんが浮浪者だったとき、灰色だった？」

「灰色？ そりゃ曇ってたり雨降ってりゃ青くはねえよなあ」

「空の色じゃなくてさ、なんつうか、気持ち？」

「気持ちに色なんてあんのか？」

「ショーさんがさ、なんもかも失くしたとき、真っ暗じゃなくて灰色で、

光も闇もねえ灰色で、恨んで恨み疲れてなんも感じなくなったっつてさ」

「そっか、そりゃ、よくわかんねえけど、苦労したんだなあ」

「とうちゃんはどんな気持ちだった？」

「どんな？ なにが？」

「だから浮浪者だったとき」

「俺は・・・ なーんも考えてねえな」

「マジ？ 不幸だとか辛れえとかは？」

「なんか食いてえなとか寒みいなくれえかなあ」

「恨むとかも？」

「恨む？ なにを？」

「ん・・・ 親・・・とかさ」

「親いねえのによ、どうやって恨むんだよ？」

とうちゃん あっけらかんと

「そっか」

こういうとこだよ 俺がとうちゃんすげえなって思うのは

「そんでもよ、ショーさん、よかったなあ」

「うん、監督のおかげだよ、あとヤッさんやスギさんもさ」

「ありがてえなあ」

なんですげえなって思うのかは 俺もよくわかんねえんだけどさ

かあちゃんが帰ってきて

明日のとうちゃんの仕事の話して

「カズオ、よかったわね」
とうちゃんがちょっと照れたみてえにコクッて
「美味しいイチゴ買ってね」
「おう、そりゃ、おう」
とうちゃんどろけちまうんじゃねえか？
「愛里さんは？」
「まだ」
「どうしたの？ 大丈夫？」
「なんか、ミシンやってるみてえでさ」
「お花の教室の？」
「わかんねえ、遠回りすればそうだとかなんか」
「大丈夫かしら」
「愛里はできるよ、自分じゃできねえと思ってけど、すげえ上手えからさ」
「そういうことじゃなくて、夢中になって食事するの忘れてたりして」
「え？」
「知ってるでしょ、私が若い頃、仕事に夢中になって食事するの忘れて」
「知ってっけど」
「それでフラッとなって」
「えっ」
「愛里さんもちょっとそういうところあるから」
「愛里に連絡する」
『愛里 晩メシの時間だよ』送信
 返信がねえ 既読もつかねえ
「俺ちょっと行ってくる」
家飛び出して 愛里の部屋に走った

ピンポーン
愛里 出てくれ 愛里
カチャッ 開いた
ドア開いて
「愛里！」
「ごめんなさい、私」
「大丈夫か？」
「夢中になっちゃって」
かあちゃんが言ったとおりであった
「そっか、メシ食おう」
「あの、その前に、ちょっと」
愛里がリビングに走ってって そんで戻ってきた
「私のベストは尽くしました」

「あ、おう」
なんだ？
「タイトルは」
タイトル？？？
「Better than ケロッパ」
な？ ん？ だ？？
「あなたと約束した現場用のビニールのお財布」
「えっ」
「探しました、メッチャクチャ探しました、でも、ない！」
「愛里、んなこと」
「1000円以内のビニールのお財布なんてない！」
「うん、いいよそれはさ」
「ケロッパはあるけど、ケロッパはイヤ、私がイヤ！」
「あ、はい」
「だったら？ だったらつまりは1000円以内の予算ということならいいわけ？」
「や、だからさ、それは」
「1000円以内の予算ならいいいでしょ！」
俺に言ってっかな 言ってねえな
「ということで、これです」
え 愛里が俺の前に
紺色のビニール素材で黄色のジッパーついて黄色の飾りミシン
「これ・・・は？」
「あなたの現場用のお財布です」
「え・・・ 愛里が・・・」
「死ぬかと思った、死なないけど、まずこの中の仕切り」
愛里がジッパー開けて
「仕切りとか、やめちゃおうかなと思ったけど、小銭とお札、もしくはsuica？
やっぱり必要だなって、動画何回も見て、真っ直ぐ縫えばいいと思ってたら、
両端をちょっと斜めにカットして縫うとか？ そうしないと中でたるむって、
ふつうの布でやってみたら、確かにそうで、そこはなんとかできました」
愛里がジッパーの端っこ見せて
「問題はここ！」
指さして
「ここだけじゃなくてジッパー！ ジッパー押さえとか使ったことないのに、
それでも使わないときれいに縫えないって、使いました、使って正解だったけど、
この端をどうすればいいのか、動画20回は見た、止めて縫って見て止めてみたいな」
愛里がジッパー閉めて
「材料費1000円以内です、なんと995円！ 5円はここに入ってます、
ママが前に、お財布を贈るときはお金にご縁がありますよによって5円入れるって」
一気にそこまで言ってフーッと息吐いて

「あの、まあ、よければ、使ってください」
俺は・・・ もう・・・
愛里のこと抱きしめて
「なんで・・・縫うとか・・・さ」
「私も無謀だって思ったけど、でも本当になくて」
俺が・・・ 財布が欲しいつつたのは・・・ 本当は・・・
愛里にバイトするきっかけみてえな・・・ そういうのにならばって
「愛里・・・」
なのに愛里は真剣にメシ食うのも忘れて 俺の財布縫ってくれて
「ありがとう」
「私こそ、ありがとう・・・です」
え？
「あなたが、私が稼いだお金でお財布買って欲しいって言ったから」
愛里が顔上げて
「言ってくれたから、私、バイトやろうと思えた」
愛里・・・
「本当はお財布なんてどうでもよくても、それでも」
わかってて・・・
「やっぱり約束したから、あなたと約束したからバイトできて」
た まんねえ 愛里 俺
「だから、あの、使ってください」
「使う」
愛里 俺は
「使って使って何年も使って、愛里に汚ったねえ財布って言われるくれえ」
離せねえよ 愛里
「ずっと」
ぜってえ離さねえよ
「はい」
「ずっとだかんな」
「はい」
グゴッギョルルルルル
あ、ヤベ 俺の腹
「すごい音、こんな音初めて聞いた」
「あ、まあ、うん」
「私のせいですよ」
「愛里のせいじゃねえよ」
「早くごはん食べに行きましょう」
「おう」
メッチャいい雰囲気だったのになあ
「お腹が鳴る音って、あんなマンガみみたいに」

「いいから、ほれ」

愛里の手えにぎって

愛里 俺 ぜってえ離さねえ 愛里のこと一生離せねえ 離さねえから

財布の歴史

晩メシ終わって

愛里とかあちゃんはリビングで楽しそうにしゃべってる

俺ととうちゃんはキッチンで あ、そうだ

「とうちゃん、愛里に渡すもんがあんだよ」

「こっちはやっつくから」

「すぐ戻っから」

「いいよ、アイリちゃんとゆっくりしてえだろ」

してえけど、かあちゃんいるからな・・・って、それじゃねえよ

部屋に入って、現場用の古い財布から三千円と suica 出して

リビングにいる愛里んとこに持ってって

「愛里、これ」

「これ？ なんですか？」

「現場用の財布・・・だったやつ」

「それは知ってますけど」

「愛里が捨てるつつったじゃん」

「え・・・」

「お願いします」

愛里の前に差し出すと

「荷が重いです」

「え？ ん？」

「これはあなたが小学生のときに、あの Shin からもらったお年玉で買って」

よく憶えてんな

「ずっと使っていて、今も使っていた、なんていうか、あなたの歴史の一部で」

え？

「それを、私が捨てていいものでしょうか」

愛里・・・ そんなふうにしててくれたなんてさ

「愛里さん」

かあちゃん？

「愛里さん。目を覚まして」

どういう意味だよ？

「それは、古くい汚くてボロボロの、ただのゴミ」

ゴミ ってさ

「でも、ゴミでも」

愛里までゴミつってっけど そんでも愛里は俺の歴史の一部つってっけてっから

「その人にとっては大切なものってあると思うんです」

「ないないない、ダイチにはない」

なんでかあちゃんが決めつけんだよ

「ダイチはね、使えればいい、着れればいい、食べられればいいだから」

だ だからそこはさ

「その汚ったないお財布にだって愛着があるわけじゃないのよ」

だっからさあ なんでかあちゃんが俺のこと語るかなあっ

「でも、現場のバイトを始めてからずっと使ってて」

愛里、やっぱ愛里は温ったけえつつうかさあ

「愛里さん、私みたいになっちゃダメ」

「え？ おかあさんみたいに？」

愛里はかあちゃんみてえになんねえよ

「カズオはね、ずっとお財布使ってなかったの、なんでだと思う？

お財布使うほどお金持ってたことがないんですって」

それは、とうちゃんのせいじゃねえじゃん

「私のところに来てからずーっとスーパーの薄い袋に入れてたの」

俺が知ってるとうちゃんはジップロックに入れてたよ

「今はジップロックに進化したけどね」

あ、進化系？

「私も？ 結婚して数年？ そこまで考える余裕はなかったんだけどね」

俺と愛里は何を聞かされてるんだ？

「スーパーでパート始めて、最初はそんなにはもらってなかったから私も放置、

そのうち収入が増えてきて振込みにしてもらって、そこからお金渡すのね」

愛里、真面目に聞かねえでいいよ

「それから、いつだった？」

知らねえよ

「ズボンのポケットにお金入れてるのを見てね、そこで気がついたので、

あ！ カズオにお財布買ってなかったって、やーっと気がついたので」

「おかあさんおもしろい」

愛里、おもしれえ？ どこ？

「それで、買ったのよ、そしたらね、使わないの、相変わらずズボンのポケット、

なんで使わないの？ って聞いたら、もったいないからって」

とうちゃんはさあ かあちゃんからもらって嬉しくてさあ

「バカなの？ 使いなさいよ！ ってキレたら使うようになったけど」

かあちゃんキレたら使うよな

「今カズオが持ってるお財布はそのときの」

メッチャ大切にしてんじゃん

「いい加減買い換えるからって言っても、まだ使えるまだ使えるって、

私もね、ジップロックにお金入れてスーパー行くのはどうなの？ って思うわけ」
これは・・・ 愚痴？ 愛里に愚痴聞いてもらってんの？
「お財布もね、革なんだけど擦り切れてちゃってボロボロ」
いい味出してんじゃん
「それを、まあいいか、と思うようになったら・・・ 終わりなのよ」
「お、終わり？」
「発泡スチロールの箱と同じ」
「ああ！」
愛里、なんでかあちゃんと通じ合ってるの？
「愛里さん、ここは心を鬼にして」
なんか大ごとになってる気がするけど
「ビシッと捨てないと」
「ビシッと・・・」
「そうよ、ビシッと」
「あの・・・ できないです」
愛里、いいよ全然、俺は愛里が捨てんならなんとも思わねえから
「あ・・・あああ そうなっちゃった？」
そうなっちゃった？ って？
「はい」
「それじゃ・・・ もう、ダメね」
「はい」
ダメ？ なにがダメ？
「ダイチ」
「え？ あ？」
「あんたの歴史の一部、持ってなさい」
「えっ や、あの」
愛里 ほれ いいよ 捨てていいんだよ
あ 顔背けた
どうすりゃいいんだ？ そっか
「そんじゃ俺が捨てる」
「ムリしないでください」
「や、ムリとかじゃねえから」
「ダイチ、捨てるってどこに捨てるの？」
「どこ？ ゴミ箱」
「カズオが拾う！」
「へ？」
「拾ってジップロックの代わりに使う」
「え・・・」
「あのボロボロの革のお財布だけでも・・・ これ以上は勘弁して」
「え・・・」

勘弁て・・・

「そ、そんじゃ、机の引き出しに入れてくる」

「そうして」

部屋に戻る途中キッチンの中チラッと見たら

なーんも知らねえとうちゃんが米研いでる

部屋に入って

俺の歴史の一部

俺は正直んなこと思ってなかったけど、愛里がそう言ってくれて

なんかそんな気してきて

いつか いつか 俺と愛里の子どもができれば 見せてえな

これはかあちゃんが・・・ 愛里はかあちゃんは似合わねえな ママ？

つことは、俺がパパ？ いや、俺はパパは似合わねえな、とうちゃん？

俺がとうちゃんになったら、とうちゃんはなんだ？ あ、じいちゃん？

とうちゃんにじいちゃんは似合わねえよ、メッチャ若けえのにさ

「ダイチ！ 何やってるの？ 愛里さんを送ってあげなさい！」

「あ、わかった、今行く」

頭ぶっ飛んでた

愛里の玄関

「愛里」

「おかあさんのノロケを聞きましたね」

「えっ？ あれ、ノロケ？」

「おとうさんの、そのまんまが好きだって」

「えっ、マジ？」

「え？ 逆にあなたはなんだと思って聞いてたんですか？」

「なんか文句言ってんなあって」

「ああそうだったそうだあなたは女心がわからないんだって」

「え？ なんて怒ってんの？」

「べつに」

「怒ってんじゃない」

「怒ってないけど」

「愛里」

愛里のこと 抱き寄せて

「ごめんな」

「なんで謝るの？」

「俺がなんか怒らせるようなこと言ったから」

「怒ってない、ちょっと・・・ 鈍感だなって」

「鈍感？ 俺、鈍感？ なんか気いついてなくて、それで愛里怒らせちゃった？」

「フッ」

「なんで笑うの？」
「おもしろいから」
「愛里いい」
「怒ってないです」
「いいよ、怒っても笑っても、俺は・・・」
愛里の くちびるに
好きだ好きだ好きだ好きだ好きだ
くちびる離すと 愛里が俺のこと見て
「私も」
え？ 心の声 聞こえた？
「おかあさんと同じです」
「かあちゃんと？」
いやいやいやいや
「それじゃ」
「え、あ、うん、あとで」
ドアが閉まって 鍵が閉まった
かあちゃんと同じって どういうことだ？
ノロケ？ いや、そんなん言ってねえよな
え？ あれ？ とうちゃんのそのまんまが・・・好きって
えっ えええええっ 俺のそのまんまが好きってことっすか？
そうなんすか？ 愛里 マジ？ マジで？
ドアホン押して聞くか？ いやいやいや、それは・・・
帰ろう

とうちゃんと一緒に、おっちゃんたちの握りメシ作って
明日の愛里と愛里の先生の弁当の下ごしらえして
「とうちゃん、明日かあちゃん休みだよな、かあちゃんの昼メシどうすんの？」
「美里は出かけるから外で食ってくるっつってた」
「そっか」
「ありがてえな、俺が明日仕事あつから気い使ってよ」
「そっか」
かあちゃん とうちゃんが入院して俺が愛里んとこで家政夫してたときは、
ホテルに泊まってくれてさ そういうとこ？ 仕事に関しては優しいんだよな
終わって 部屋戻って 勉強して そんで
『愛里』送信
ピコン
『はい』
『明日はバイトの最終日だな』送信
ピコン

『ウソみたい』

ピコン

『私が三日もバイトできるなんて』

『俺はできるって思ってたよ』 送信

ピコン

『あなたには』

ピコン

『いっばいのありがとう』

『俺こそ財布ありがとう』 送信

ピコン

『私がバイトしようって決意できたのはあなたのお財布のおかげです』

愛里 んなこと言ってくれんなんてさ

ピコン

『明日はあなたのおとうさんと一緒に出かけます』

ピコン

『ある意味デート w』

いいよ とうちゃんとならさ 全然いいよ

『エーーーーッ 俺以外の男とデート!?!w』 送信

ピコン

『笑う wwwww』

『愛里』 送信

『好きだよ』 送信

ピコン

『鈍感で泣き虫で頭いいのに私のことだとバカになって』

え？

ピコン

『牛乳拭いた雑巾の匂いがしたり泥だらけになって』

ピコン

『そういうあなたが』

ピコン

『いてくれて嬉しい』

いてくれて嬉しい？ マジ？ 途中までディスられてんのかなと思ったけど

『いるよ ずっと 愛里のそばに いさせてください』 送信

ピコン

『いてください』

『とろけそうっす』 送信

ピコン

『とろけたらいなくなっちゃう wwwww』

『固形でいるよう努力します w』 送信

ピコン

『wwwww』

『俺の汚ったねえ財布を俺の歴史の一部って言ってくれてありがとう』送信

ピコン

『将来ヴィンテージ物ってことで一億円になるかも wwwwww』

『なったら逆にビックリっすよ wwwwww』送信

ピコン

『それじゃ私は寝ます』

ピコン

『おやすみなさい』

ピコン

『愛里 おやすみ』送信

明日は土曜日か

あれ？ 日曜日から、つか、月曜からお盆休みだ

5日間休み

愛里なんかしてえことあるかな 行きてえとことかさ

おっし！ 明日も稼ごう

初めての弁当

起きて顔洗って 作業服に着替えて
愛里が作ってくれた財布 中に5円玉
これ 発行年が去年じゃん 去年で俺が愛里のこと見つけた年
ご縁あったよメッチャあったよ
これは失くしたくねえから んっと 愛里が俺の歴史の一部つった財布に入れよう
三千円と suica 愛里、仕切りありがとう ケツポケットに入れた

キッチンに行ったら どうちゃんがおっちゃんたちの握りメシ焼いてた
「どうちゃん、おはよう」
「ダイチ、おはよう」
俺は 愛里と愛里の花の先生の弁当作って
「どうちゃん、今日、愛里の先生んとこ、午前と午後仕事すんだよな」
「やってくっからよ」
「昼メシどうすんの？」
「俺は昼食わなくてもなんともねえよ」
どうちゃんは1日一食なんだよな、そんでもさ、今日は仕事すんだからさ
おっちゃんたちのよか小ぶりの握りメシにぎって
「どうちゃん、これ、どうちゃんの分」
「俺の？」
「うん、昼に食ってよ」
「そっか、ダイチが作ってくれたんならな、美味えだろうな」
「ただの握りメシだよ」
「そんでもよ、弁当作ってもらうなんて生まれて初めてだからよ」
え？ あっ そっか
スーパーのパートしてるときも家政夫やってるときも
どうちゃんが昼メシどうしてんのか 考えたことなかった
俺たちの弁当の、卵焼きの端っこ食いながらフライパン洗ってたり
そういうのあたりまえの光景になってて
どうちゃんの弁当作ろう 俺の弁当箱・・・ あった
卵焼き焼いて、タコさんウィンナーも焼いて、愛里たちに作ったサラダ入れて
「どうちゃん、ここにその握りメシ入れて」

「あ？ これ？」

とうちゃんがキョトンとした顔で握りメシを空いてるスペースに置いた

「これは、今日のとうちゃんの弁当」

「俺の、弁当？」

「今日は久しぶりの、なんつうか、仕事復帰つつうか、お祝いだよ」

とうちゃんが俺の作った弁当手にとって

「ありがてえな」

んな しみじみ言われたら 俺 朝から

「ダイチ、ありがとな」

あ・・・ ヤベ

「んと、あの、これ、愛里のと先生のだから」

「持ってくよ」

「お願いします」

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

「ありがとう」

おっちゃんたちの握りメシと凍ったペットボトル入れた保冷バッグ持って

「そんじゃ、いってきます」

「いってらっしゃい」

とうちゃん、仕事がんばってな ネコだけは助けようとしねえでくれよ

愛里の先生んとこネコいんのかな・・・って 早く行かねえと

10 時休憩

今日は暑っちいな

「ダイちゃん」

「ショーさん、水飲まねえ？ まだ凍ってっから振って飲んでよ」

「飲んでいいのか？」

「うん、今日暑っちいもんな」

「それじゃ、ありがとう」

ショーさんがペットボトル振って一口飲んだ

「ああ！ 気持ちいいな」

「俺のとうちゃんの知恵、いちいち自販機で買ってたらもったいねえからさ」

「そうなんだよ、110 円はなあ、高くてさ」

ショーさんとはメッチャ話合うなあ

「俺の部屋に小さい冷蔵庫があるんだよ」

「冷凍室もあんの？」

「あるんだよ、まだ何も入ってないけどさ、ありがたいよ」

「そんじゃショーさんもこれ作ればいいよ」

「そうだな、いいこと聞いたよ、ダイちゃんには助けられてばかりだな」

「俺じゃなくてとうちゃんだよ」

「ヤッさんとスギさんもさ、いろいろ持ってきてくれてありがたいよ」

「ヤッさんとスギさんはメッチャ温ったけえよな」

「寮の若い人たちもさ、よくしてくれるんだよ」

「よかったなあ、ショーさん」

「まだ夢みたいな気がしてさ」

夢？

「朝起きたら、布団の中じゃなくて公園のベンチなんじゃないかってさ」

ショーさんはちょっと情けない顔で笑って見せて

「夢でもいいよ、今こんなにいい夢の中にいるからさ」

「とうちゃんみてえなこと言ってるよ」

「そうか、ダイちゃんの父さんも」

「うん、しあわせだとさ、夢みてえだなあって」

「わかるなあ」

ショーさんが立ち上がって

「それじゃ、昼までまたがんばるよ」

「腰やんねえように気をつけてね」

「ありがとう」

ショーさんの優しい笑顔は 見ててホッとするんだよな

おっし！ 俺もがんばろう

昼休憩

ヤッさんとスギさんのおかず入ったタッパーはデカくなってて

なんつうか、もはや遠足みてえなカンジで

「ヤッさん、スギさん、これ、俺とショーさんのためにこんなに」

「ゆんべの残りもんだした」「んだ、余ったやづ」

ぜってえ違げえよな そんなも今日は

「俺もおかず持ってきたんすよ」

とうちゃんに作った卵焼きとタコさんウィンナー

あんとき多めに焼いてタッパーに入れてきた

「だいづ、そっだ気使わねんで」「気い使わねえでいいんだしたあ」

「今日とうちゃんに仕事入ったんで」

「カズさんに？」「わい、いがったなあ」

「とうちゃんに弁当作ったんすよ」

「お父ちゃんにい」「泣げでくる」

え、おっちゃんたち なんで涙ぐんでんの？ ショーさんまで？

「やっぱなあ、日本人はタコさんウィンナーだっぺ」「んだ」「懐かしいよ」

「そうすか？ 食ってください」

「ほんじゃ、なあ」「んだな」「いただきます」

そうだ おっちゃんたちに なんつうか ちょっと自慢？

「これ」

ケツポケットから愛里が作ってくれた財布出して

「愛里が作ってくれたんすよ」

「あいりちゃんが作ったあ?」「作ったんだか」「手作りの財布」

「前のがボロボロで汚ったねえっつうんで作ってくれたんす」

「あれはなあ」「あれはうだで」「俺でもあれはボロボロだと思っさ」

え? そんな?

「んと、小学生んときにお年玉で買って」

「小学生っ」「そっだに長げごと」「そんなに・・・」

「俺の歴史の一部だっつってくれて」

「ん、んだんだ」「そうだあ、なあ」「そうだな」

「あと、5円玉入れてくれて」

「5円?」「5円・・・」「5円でもありがたいなあ」

ん? いやいやいや

「予算が1000円以内だったんすよ」

「1000円で財布は・・・」「わい、そりゃうだでな」

「探したけどねえから、1000円以内で材料買って作ってくれて」

「あいりちゃんもえれえなあ」「いい嫁っごだ」「あれ? 嫁さんなの?」

「や、ショーさん、まだ、まだっす」

「ほんでもお、いつか、嫁さんにすんだっぺ?」

「ヤッさ～ん、からかわねえでくださいよお」

「あいりちゃんの話になっとお、だいづはデレデレになっぺ」「んだな」

「なんつうかあ、愛里があ、財布に5円入れっとお、お金にご縁があるって」

「種銭だっぺ!」

たねぜに?

「5円玉にい稲の穂おついてっぺ」

「え? ああ、そうっすね」

「稲の穂はあ一粒万倍って言われてんだした、そんで一粒の粃があ万倍にも実るってえ」

「そうなんすか」

「あいりちゃんは若けえのにい、そったこと知ってんなんてはあ」

すげえな愛里 あ、ママか?

「だいづ、ぜってえ金え実っがらあ」「んだ」

「おいっす」

「俺は・・・もうずっと財布持ってないなあ」

「ショーさん、とうちゃんも、財布に入れるほどの金がねえって」

「そうなんだよ」

ショーさんが頭かいて笑ってて やっば、こういうとこわかってくれんだよなあ

「ほんじゃ、カズさんは何に金入れてんだあ?」

「買い出しに行くときはジップロックに」

「ジッ・・・プ」「わい・・・んだが」「そうなるよな」

「それでも、俺はそれがとうちゃんだと思ってたから」
「んだ」「そんだあ、物でねした、心だっぺ」
心？
「ほんでもはあ、だいづ、あいりちゃんにい作ってもらってえ、いがったな」
「おいっす」
「うめもんだ」
「そうっすよね、メツチャうめえんすよ」
「すごいねえ、財布まで作ってくれる恋人ってさ」
「恋人って、ショーさ〜ん、そうなんすけどねえ」
「ほれ、またあデレデレだした」
「そうだ、ダイちゃん、今日のおにぎり代」
「ショーさん」
「もう払えるようになったよ、みんなのおかげでさ」
「そんじゃ、毎度あり！」
「毎度ありってはあ、だいづはおもしれっぺ」「んだな、ハハハ」
この200円は とんだけすげえ価値があるか とうちゃんにはわかるよな
あ、そうだ 携帯の電源
愛里からLINE入ってた
『おとうさんが伝説の家政夫と呼ばれる理由がわかりました』
『午前中レッスンが終わって二階に行ったら』
『すっごくきれいになってて』
『先生はリビングの床を久しぶりに見たってw』
『午後は換気扇やお風呂やトイレをやるそうです』
とうちゃん さすがだな
『先生が あなたに二日間お弁当ありがとうございましたって』
『久しぶりに美味しい手作りのものを食べることができましたって』
『伝えてくださいって』
そっか よかった
『愛里 俺は愛里が作ってくれた財布おっちゃんたちに見せた』送信
『みんなすげえって感動してくれたよ』送信
ピコン
『見せなくても』
『自慢したかった』送信
ピコン
『なんか嬉しいけど』
『俺も嬉しい』送信
ピコン
『おとうさんが』
とうちゃん？
ピコン

『あなたがお弁当作ってくれたって喜んでました』

マジ？

ピコン

『私たちと一緒に食べなかったですけど』

『家政夫は基本的に雇い主とは一緒に食わないんすよ』 送信

ピコン

『そうでした w』

ピコン

『それじゃ、そろそろ次の準備をするので』

そっか

『おう、最後のバイト楽しんでな』 送信

ピコン

『ありがとう』

あっ そうだ

『愛里 先生んところにネコいる？』 送信

ピコン

『ネコはいません』

そっか よかった

ピコン

『そうですよね 絶対脚立には乗らないように言います』

『ありがとな』 送信

ピコン

『それじゃまた』

『愛里 好きだよ』 送信

ピコン

『私もです』

マジかー ー メッチャ嬉しい 一億回言われても毎回嬉しい

「ヤッさん、スギさん、ショーさん」

「なんだあ？」 「なすた？」 「なに？ どうしたの？」

「俺、午後もがんばるんで」

おっちゃんたちが顔見合わせて

「あいりちゃんとおラブラブなんだっぺ」「それが！」「だからか」

「や、そういうの関係なくがんばるんで」

「関係あっぺ、だいづが張り切るつつたらはあ、あいりちゃんだっぺ」

「まあ、そうっすね」

「はあああ、午後はますます暑くなっぺ」「んだな」「ハハハハ」

愛里 俺、愛里のために稼ぐから 愛里と俺のこの先のためにさ

そんで、とうちゃん かあちゃんのイチゴのためにがんばってんなあ

つか、マジでネコと脚立だけはやめてくれよ 頼むよ

番号交換

三時休憩

今日はずっと暑っちな

「だいづ」

ヤッさんとスギさん

「盆休みは墓参りに行くのお？」

「うちは墓ねえから」

「墓ねえのお？　じっちゃんばっちゃんの墓あつべ」

「とうちゃんの方は最初っからいねえし」

「ああ・・・　そんだったなあ」「んだった」

「かあちゃんの方は、なんか親戚に頼んで寺に預かってもらってるつつって」

「墓建てんのはあ高っけえがらあ」「んだなあ」

「つうか、そんなときかあちゃん独身で、子ども生むつもりもなかったから、

墓買ってもしなあって思ったつつって」

「んだのよ、俺んともどうすっぺとと思ってんだあ」「わのどごはねっちゃんがな」

墓の話しに来たんかな、俺ほっとんどわかんねえんだけど

「だいづ、電話番号教えてくんちえ」「わさも」

「もちろんっすよ、送ればいっすか？」

「どさ？」「送るって郵便でえ？」

「え、や、LINEとか」

「らいん？」

あ、やってねえのか

「そんじゃ、ヤッさんとスギさんの先に教えてください、俺、鳴らすんで」

「ほんじゃ言うがらあ」

「や、んっと、ちょっと携帯見ていいすか」

「見てくんちえ、俺は、はあ、ちょ〜っと老眼入ってきてはあ」「わもや」

ここか　手打ちして　鳴った　スギさんのも

「だいづ、これ、どうやって保存すんだあ？」「わのもやってけ」

「やります」

森下大一・・・と

「わい、めわぐだ」「ありがとなあ、いっつもおっかあにやってもらってっからあ」

「とうちゃんのも、俺かかあちゃんがやってるんすよ」

「なんかなあ、わけわかんねえのよ」「かちゃくちゃんねのさ」

カチャ？ なに？
「ヤッさん、スギさん、写真撮っていいすか、これに載せてえから」
「お、どんなあ顔すっぺ？」「めぐせなあ」
「そのまんまでいいすよ、いい顔してるんで」
「だいづはおだててはあ」
笑った ここだ
「たいづのもお、俺たちのにいのつけてくんちえ」
「俺？ そんなじゃ一緒に撮って三人おんなし写真にするつつうのは？」
「それにすっぺ」「んだ」
「だったらショーさんも一緒は？」
「そうだあ、ショーさーん！」
ショーさんが角からひょっこり顔出して
「なに？ どうした？」
「こっちゃ！」「こいへ」
「何があった？」
「一緒に写真撮っぺ」「だいづが撮ってけるっで」
「俺みたいなおじさん撮っても」
「そっだごと言っだらわもだべ」「俺もおおじさんでした」
ヤッさんとスギさんがショーさんの肩抱いて 俺はその下に中腰になって
「そんなじゃ撮りますよ、もっと笑って」
「笑ってってもはあ」「慣れでねがら」「ダイちゃん、何かおもしろいこと言ってくれよ」
おもしろえこと？ ん・・・っと おもしろえかな？
「おもしろくはねえんすけど、ちっと愛里に悪りいことしたなつつうか」
「なんだあ？」「なんだ？」「悪いこと・・・」
「古い方のカッパ着て帰ったら、愛里が、俺が牛乳拭いた雑巾の臭いするつつって」
「ブワッハハハ」「ガハハハハ」「そうなんだよなあ、自分じゃわからないけどさ」
笑ってる ここか カシャッ 俺は笑えねえけどな
これをショートメールに添付して・・・ ヤッさんスギさんの携帯に送って
そんで・・・ よっしゃ
「こりゃ、いい写真でしたあ」「んだなあ」「俺は・・・」
「え、ショーさん？ どうしたの？」
「こんな写真撮れる日が来るなんてさ・・・」
「来たよ、ショーさん」「来た来たあ」「仲間だべ」
「あ、ショーさんにはどうやって連絡取ればいい？」
「俺は携帯持ってないよ」
「寮の電話があっぺ、あれにかければあ、なあ」「んだ、あれ」
「玄関にあるあれか？」
「んだ」「だいづ、これがあ寮の電話」
「おいっす」
手打ちして・・・

そうだ、そうだよ
「ヤッさん、スギさん、ショーさん、フルネーム教えてよ」
「ふるね・・・？」
「本名」
「わはすぎだひんずぎ」
え？ ん？ ひじき？
「スギさんはあ、茂田秀樹」
「え、メッチャかっけえ名前っすね」
「わのかちゃがひんずぎのファンで」
秀樹のファン？ 秀樹って・・・ だれだ？
「俺はあ、矢沢三郎、次男なのにい三郎」
「なんでなんすか？」
「届け出すときにい、おっとうが祝い酒で酔っぱらってはあ。三郎って書いてえ」
「酒さ弱えのはとっちゃ譲りだな」
メッチャおもしろえ
「ショーさんは？」
「俺は・・・ ショーさんでいいよ」
前に監督が・・・ 名前を知られたくねえ人もいるって それか？
「ショーさんはおんがだたんだす」
「え？ ん？ おん？」
「俺は、おがたたし」
「おがたのおは？」
「糸偏の」
緒方か
「なんか、名前名乗るのも恥ずかしくてな」
「なんでたよ？ 俺なんて大根の大だよ」
「森下の名前はいい名前だよな」
「かっ 監督」
「アドレス交換？」
「まあそんなカンジっす」
「女子高生みたいだね」
「わい、じょすこうせいだど」「俺たちみてえなあおっさんつかまえてえ」
「森下といると、みんな高校生みたいな顔になるよ」
「そうなんだあ、だいづといっとお若返んだした」「んだな」
「それじゃ、若返って、そろそろ仕事に戻ってくれる？」
「あっ、そうだあ」「んだった」「おいっす」「はい」
明日から おっちゃんたちとしばらく会えねえんだな
なんか淋しいな
それでもさ、明日っから愛里とずっと一緒にいられんだよ
愛里、淋しい思いさせてごめんな 明日っからずっとさ

どっか行きてえかな 海？ あれか？ テーマパーク？
なんか買ってえものあるかな 愛里、俺にまかせろ 稼いでっからさ
カツッ また小石か あれ？ これって・・・ なんか・・・ ハートみてえじゃね？
三角つつうか、ここんどこだけへこんで ハートじゃん
愛里、ハートのシーグラス見つけたよ 愛里にあげよう

終わった

現場ともしばらくはお別れだな

「だいづ、ほんじゃまたなあ」「まだ」

「おいっす」

「ダイちゃん」

「ショーさん、また休み明けに会おうね」

「ダイちゃん、本当にありがとう」

「なに？」

「お盆休みなんて、俺の人生からはなくなってたよ」

「俺も初めてだよ」

「初めて？」

「こんな長げえバイトしたことねえからさ」

「そうなのか」

「去年は単発のバイト入れててさ」

「何やってたんだ？」

「家政夫」

「家政婦？」

「掃除したり洗濯したりメシ作ったり、たまに子守り？」

「そうか・・・ そういう」

「それでもさ、今年の5月に家政夫して愛里と初めて口聞けたからさ」

「恋人だよな」

恋人って なんかかけえな カノジョとかよりおとなみてえなさ

「愛里っていうんだよ、愛するの愛にさとの里」

「可愛い名前だなあ」

「だろ？ だろ？」

「それじゃお盆休みは愛里ちゃんと過ごすんだな」

「うん、どっか行きてえなら連れてってあげてえなって」

ショーさんが すげえ優しい顔で俺のこと見て そんで えっ？

「ショーさん、なんで泣いてんの？」

「なんか・・・ 可愛くてさ」

「へ？」

ショーさんが腕を伸ばして 俺の頭撫でて

「ダイちゃん背が高いから俺が見上げてるな」

そう言って笑った
「それじゃ、またな」
「うん、また」
誰もいなくなった現場 監督がまだ監督室にいるけど
また5日後 よろしくお願ひします
頭下げて 駅に走った

電車の中
愛里から LINE 入ってて
『おとうさん 神!』
神?
『先生泣いてました』
泣いてた? とうちゃんなにやったんかな
『詳細はあとで』
『愛里』送信
『俺は今電車の中』送信
あ そうだ ケツポケットからハートの小石出して 写真撮って送信
『変わった形のシーグラス見つけた w』送信
『現場の小石だけど www』送信
既読着いた
ピコン
『おむすび?』
おむすびじゃねえよ
『ハート』送信
ピコン
『持ち方と撮り方! www』
あ、そっか 逆か こっちか 写真撮って 送信
ピコン
『やっぱりおむすびにしか見えない www』
えええええ
『チコッとへこんでるじゃんハートじゃん』送信
ピコン
『乙女で笑う www』
乙女ってさあ
ピコン
『それももらっていいですか?』
『愛里にあげてえと思って持ってきた』送信
ピコン
『いただきます おむすび w』

おむすびじゃねえって

『ハートっすよ』送信

ピコン

『はい』

愛里のはいはメッチャ可愛いんだよなあ

ピコン

『電車が来たのでまたあとで』

電車？

『まだ先生んどこにいたの？』送信

ピコン

『ショッピング w』

そっか バイト終わってそういうことする余裕できたってことか

『愛里 好きだよ』送信

ピコン

『』

「プッ ハハ」

ヤベ 電車の中なのに 声あげて笑っちゃった

ピコン

『それじゃあとで』

『またあとでな』送信

愛里 俺の・・・ 恋人

いやあああ たまんねえ

愛里から炭

電車から下りて あ、バスの扉閉まりそうだ

「乗ります！」

ギリセーフ あっ

「愛里！」

「え？ あ・・・」

愛里の隣のつり革につかまって

「愛里、バス途中で会えるなんてさ」

愛里が俺の顔ジッと見て そんでバッグの中から ティッシュ？

「鼻のここに泥が」

つって自分の鼻指して

「拭いてくれよ」

つったら、愛里が俺の手にティッシュをグイッてさ

受け取るとき ちょっと愛里の指つかんだら 上目遣いで睨んだ 可愛い

「取れた？」

「取れました」

あ、そうだ ケツポケットから

「ほれ、ハート」

「どう見てもおむすび」

笑ってる いいよ おむすびでも 愛里が笑ってくれんならさ

「いいですね、こういうの」

「こういうの？」

「小石を拾って、あげたりもらったり」

マジっすかあ？

「小さい頃、友だちがやってて、私も拾ってくると、ママが」

ちょっと揺れたから愛里の腰に腕まわして

「愛里ちゃん、ばい菌ついてるかもしれないから捨ててって」

愛里の、愛里のママの真似って、絶妙に似てておもしれえんだよ

「それにもばい菌ついてっかもしんねえよ」

「いいです、ついてても、あなたが拾ってきてくれたから」

愛里 今 俺 ドッキューーーンて なったんすけど

「え、なに？ どうしたんですか？」

「や、なんも、しねえよ」

「そうだ、おとうさん、すごかったんです」
「神ってなに？」
「午前中のことは LINE しましたよね」
「うん、もらった」
好きだって送ったら 私もですって送ってくれた
「私と先生があなたのお弁当食べて、あ、今日も美味しかった」
「そっか、愛里、荷物持つよ」
「これはいいです、お花も入ってるし」
「マジ？」
「はい、えっと、あ、そろそろ次のレッスンの準備って下に行ったら」
愛里がビックリ顔して見せて メッチャ可愛い
「教室がきれいになってたんです、教室の掃除は頼んでないのに」
俺が腰に腕まわしててもさ
「先生が、教室のお掃除は頼んでないですけどって言ったら」
もうそれがあたりめえみてえにさ
「ヒマだったから勝手にやっただけだって」
一生懸命しゃべってる愛里
「先生、それに感激しちゃって、でもそれだけじゃないの」
愛里のいちいちのビックリ顔が可愛くてたまんねえ
「最後のレッスンが終わって、後片付けして二階に行ったら」
俺の顔見上げたままさ
「おむすびと豚汁が作ってあって、先生が調理は依頼してないんですけどって言ったら、
冷蔵庫の中を掃除したら、冷凍してた豚肉と野菜を見つけて、
このままじゃ食べられなくなると思って作っただけだからって」
「そっか」
しか言えなくてさ
「先生、感激して泣いちゃって」
またちょっと揺れて 愛里がとっさに俺のシャツつかんで
「先生が言うには、豚肉を冷凍したのもだいぶ前で、野菜もだいぶ前に買って、
豚肉なんて忘れてたのになって、おとうさんすごいです」
愛里が俺のシャツつかんだまま夢中でしゃべってて
「それで、先生が・・・ あ、着きます」
俺は 愛里の手えにぎって一緒に下りた
「先生が、もしよかったら、一ヵ月に一度おとうさんに来てほしいって」
「マジ？」
「それで私、先生におかあさんの電話番号を教えたんですけど」
「かあちゃんの？」
「そういう仕事の話はおかあさんかなって」
「愛里、正解」
「あ、やっぱり？ よかった」

「愛里、すげえな、とうちゃんの仕事また取ってきてくれてさ」
「私じゃなくておとうさんです、あの仕事ぶりを見たらお願いしたくなります」
「俺は？」
「あなた？ なに？」
「俺は家政夫としてはまだまだだったすか」
「あなたは・・・ 私には・・・ よかったです」
「マジ？」
「でも、正直、私はあなたを家政夫して見てなかったっていうか」
「俺も家政夫失格だったじゃん」
「失格ではないです、すごいです」
「家政夫として愛里のことやってなかったからさ」
「あ・・・ そうです・・・ よね」
「愛里」
「着きましたよ」
愛里としゃべってっとメッチャ距離短く感じる
エレベーター乗って 愛里が二階のボタン押して
「五階押さないんですか？」
「押さねえ」
「そうですか」
ドアが閉まった
愛里のこと 抱きしめて
「今日も汗をいっぱいかいたんですね」
「おう」
「暑かったですよね」
「おう」
「あなたが働いてきた匂い」
「臭せえよな」
「もうそういうのはどうでもいいです」
どうでもいいって 愛里 俺 メッチャ感動してんだけど
「あ、着きました」
俺のこと見て
「部屋まで送るんですよ」
「送る」
「そうですか」
愛里の部屋の前 愛里が鍵開けて
「それじゃ」
「え、ちょ、愛里ともっと話してえよ」
「私はちょっと準備があるので」
「準備？ なんの準備？」
「言わない」

ツンとしてさ なんだよそれ 可愛いなあもうっ

「そんじゃ、俺ん家で待ってっから」

「はい」

ドア閉めて 鍵が閉まった

シャワー浴びよう

ドア開けて

「ただいま」

「ダイチ、おかえり」

「とうちゃん、大活躍だったんだって？」

「あ？ なにが？」

「愛里の先生んところでさ」

「俺は掃除しただけだよ」

「教室の掃除もしたって」

「ヒマだったからよ」

休憩時間なんだけどな

「ダイチが作ってくれた弁当、美味かったなあ」

「タコさんウィンナーと卵焼きと握りメシだけじゃん」

「世界一美味え弁当だった、ありがとな」

ニコニコして言ってくれると なんかジーンときて

「先生の晩メシも作ったんだろ」

泣きそうになっから 話題変えた

「風呂掃除して換気扇とかやってよ、冷蔵庫ん中も掃除してたらよ、

ちっと冷凍焼けしかかった豚肉があってよ、もったいねえなって、

そんで野菜室見たら、キャベツの外側はもう萎びてたんだけど、

中はまだ使えるしよ、じゃがいもとニンジンもあって、ちょっと萎びてたけど、

玉ねぎも芽が出始めてて、長ネギも中側ならなんとか食べんじゃねえかって、

豚汁っきゃ思いつかなかったな、糸こんにゃくはなかったけどな」

「握りメシも作ったんだろ」

「豚汁だけじゃなあ、米はあったから握りメシなら食うんじゃねえかなあって」

「愛里の先生感激してたって」

「俺、余計なことしちまったんかなって思ったら、

手作りの晩メシ食うのは久しぶりだっつってよ」

「そっかあ」

「忙しかったんだろなあ、女の人一人でよ、あんなリッパに教室やってよ」

「愛里、すげえ感激してたよ、とうちゃんすげえって」

「アイリちゃんと会ったんか」

「ちょうどバス一緒になった」

「俺とは駅まで一緒に、なんか買ってえもんがあるっつってよ、

ついてくかって聞いたら、一人で行きてえって、よかったんかな」
とうちゃんは愛里のこと、小さい子みてえに思ってたんだな
「無事だったよ」
「そっか、よかった」
愛里のこと、メッチャ大事にしてくれてありがとう、とうちゃん

シャワー浴びて とうちゃんと一緒に買い出しして
晩メシ作ってたら 愛里が来た
「あの、渡したいものが・・・」
渡してえもの？
「これなんですけど」
なんだ？ 長げえ筒みてえな布の？
「あなたの長靴用の、なんていうのかな、炭です」
「す、すみ？」
「先生のスニーカーに入ってた、これはなんですかって聞いたら、
炭って、炭が一本入ってるんじゃないんですけど」
「あ、お、おう」
「脱臭と除湿と除菌効果があるって」
あれか？ 冷蔵庫に入れるやつみてえな？
「あと、こっちはスニーカー用でこっちはおとうさんのスニーカー用で」
「え、ちょ、これ、愛里が買ったの？」
「はい、バイト代で」
「えっ？」
「あと、こっちはおかあさんのパンプスとかまあ、よかったら使ってください」
「愛里、バイト代でこれ・・・全部？」
「あなたやおとうさんやおかあさんに何か贈りたいって思ったんですけど」
「え、俺は財布作ってもらったじゃん」
「あれは約束したから」
「え、や、ん？」
「森下家の人たちに何を贈ったらいいの？ って、みんな物欲ないから」
「へ？」
「先生のを見てこれだって、ネットでも買えるんですけど、
先生が安く買えるショップを教えてください」
「これ買いに・・・」
「この炭が・・・勝てるかどうかはわからないんですけど」
「勝てる？ 何に？」
「この炭の脱臭力に賭けるしかないんじゃないかなって」
「脱臭力・・・ あっ そ、そっか」
「今入れますか？」

「あ、や、洗うから、明日っから休みだからさ、洗う」
「わかりました」
「愛里、バイト代で俺やとうちゃんに、かあちゃんにまで、んな」
「私がバイトできたのは森下家のおかげなので」
愛里の言葉に いつも急襲される くちびる噛んで こらえてっけど
「パパとママには、最後のレッスンのバイト代を袋ごと送ってきました」
「愛里・・・ こんなん買って、愛里のバイト代なくなっちゃったんじゃないね？」
「あと 1000 円あります」
え、ちょ、俺の財布の材料費 1000 円、愛里のパパとママに 1000 円・・・
残り 1000 円あるってことは・・・
「これ、全部で 3000 円すんの？」
「はい、本当はもっと高いのもあるんですけど」
「愛里、んな、そんじゃ、愛里のバイト代ほとんど俺やとうちゃんたちに」
「そういう目的がないと、漠然としちゃって私はできないなって思ったから」
目的って・・・
「あなたのおかげで、生まれて初めてバイトができました」
俺は・・・ なんつっていいんかわかんなくて
愛里のこと抱きしめて
「愛里・・・ よくやったな」
声 ちょっと 涙声になっちゃってっけど
「楽しかった」
「そっか」
「あなたのおかげ」
「俺はなんも」
「ありがとう」
愛里は・・・ 俺が必死にコップ一杯の・・・
すぐに大津波に・・・ 無邪気にぶっ込んで・・・
「ただいま」
あっ かあちゃん
「玄関でラブシーン？」
「や、え、お、おかえり」
「おかえりなさい」
「愛里さん、バイトお疲れ様」
「おかげでなんとか無事にできました」
「愛里さんならできると思ってたわよ」
「あの、これ」
「あら、なあに？」
なんか なんつうか かあちゃんに愛里取られたっつうか
もうちょい余韻に浸らせてくれてもさ
晩メシのしたくだ

誘いの電話

かあちゃんが愛里からの、あの炭のやつ、すげえ喜んでる

「こういうのがいちばんありがたいのよ」

「よかったです」

「昔ね、若い頃、誕生日プレゼントってクロムハーツのね」

「おかあさんにクロムハーツ？」

「わかってくれる？」

「わかります、絶対違う」

「でしょ」

かあちゃんと愛里のわかり合いポイントが、ときどき俺にはわかんねえんだけど

「愛里さん、バイト代で私たちにプレゼントなんて、本当にありがとう」

「支えてもらったからできました」

「愛里さんがバイトしたお金でってところにグッとくるわ」

「多分これが最初で最後になると思うので」

「あら、そう？」

「あの先生のところだからできましたけど、他では・・・」

「たとえば、私が頼んだら？」

「おかあさんが？ 私に何をですか？」

「そうねえ、コーディネートとか」

「服ですか？」

「あら、それいいわね、一緒にショッピングなんてどう？」

おいおいおい、かあちゃん 俺との時間取らねえでくれよ

「行きたい！」

あれ？ ケツポケットの携帯が 電話？ ヤッさんだ

「かあちゃん、ちょっとヤッさんから電話きてっから」

「ヤッさん？」

「現場の仲間のおっちゃん」

「あ、そう」

席立って キッチンに行って

「ヤッさん？」

「だいづ！ スギさん、だいづと繋がったあ」

「どしたんすか？」

「だいづ、明日あ夕方くれえから時間あっかあ？」

「夕方？ まだ今とこなんもねえっすけど」
「俺とヤッさん住んでる家族寮の前に庭つつうかあ広場つつうかあんだわ」
「あ、はい」
「ほんでえ、あれ、あれよ、名前出てこねえ、スギさん、なんだっけえ？」
え、なに？ なんだ？
「あ、それだした、バービーキュ？」
バービーキュ？
「あ、バーベキュー？」
「それぞれ、それやっぺって」
「すげえ、俺、バーベキューなんてやったことねえっすよ」
「肉焼くだけなんだけんちょ」
「バーベキューするんすか」
「俺んとことおスギさんとことお、ショーさんも一緒にやっぺって、は」
「いいっすね」
「ほんでえ、だいづとカズさんとお」
「俺ととうちゃん？」
「あとお、だいづのお母ちゃんとおあいりちゃんも来ねえがなあってえ」
「かあちゃんと愛里も？」
「肉、いっぺえ食わせっからあ」
「ちょっと待っててください、かあちゃんに聞くんで」
「聞いてくんちえ」
ダイニングに走ってって
「かあちゃん、明日の夕方さ、ヤッさんたちがバーベキューすんだって」
「あら、そう」
「それで、かあちゃんと愛里も一緒にどうかって」
愛里が固まった そうだ人見知りだった
「んっと、ムリになってわけじゃねえみてえで」
「私と愛里さんは贅沢させてもらいます」
「贅沢？」
「愛里さん、お寿司好き？」
「はい」
「ということで、私と愛里さんはお寿司を食べに行きます」
「そっか、わかった」
またキッチン戻って
「ヤッさん、かあちゃんと愛里は寿司食いにいくつつって」
「そっかあ」
「なんか贅沢させてもらうつつって」
「んだなあ、たまには寿司食いてっぺ」
「俺ととうちゃんだけでいいっすか？」
「大歓迎だあ」

「俺は何持っていけばいいっすか？」
「だいづはな〜んも心配なくていいからあ」
「それでもなあ あ！」
「ヤッさん、焼きそば好きっすか？」
「大好きだあ」
「そんじゃ焼きそば作ります」
「ん・・・とお、それはあ、麺だけの？」
「麺だけじゃねえっすよ、野菜入れますよ」
「そっかあ、なんか気い使わせちまってはあ」
「せっかくのバーベキューだから、なんかやりてえじゃねえっすか」
「ほんじゃ、焼きそば作ってもらうかなあ」
「おいっす」
「住所は知ってっぺ？」
「おいっす」
「聞いてよよかったよ」
「ほんじゃ明日、4時くれえかなあ」
「そんくれえに着くように行くんで」
「待ってっからなあ」
「おいっす」
「すげえ バーベキューに誘われちったよ やったことねえよ
そうだった、かあちゃんそういうの嫌れえなんだよ
鉄板焼きの店も嫌れえなんだからさ
だから寿司か 愛里の人見知りも知ってるしな
え？ 俺、浮かれて行くなんて言っちゃったけど いいんかなあ
明日は愛里と久しぶりにゆっくり過ごせるのにさ
「電話終わったの？」
「ん・・・俺ととうちゃん、行っていいんかな」
「あんたとカズオがいたらお寿司食べに行けないもの」
「なんで？ 俺、寿司好きじゃん」
「わんこそばみたいに食べるでしょ！ 破産しちゃう！」
「え・・・」
「カズオはかっぱ巻きと卵しか食べないし」
とうちゃんがオドオドしてる とうちゃんはおあいう寿司屋は怖えんだよな
「愛里は？」
「私？ お寿司好きです」
「や、そうじゃなくて、夕方から俺いねえけど」
「おかあさんとお寿司が食べられますから」
「マジで？」
「マジ・・・とは？」
「俺、夕方からいねえけど」

「バーベキューに行くんですよね？」
「愛里がイヤなら」
「私は・・・知らない人とは・・・」
「や、じゃなくてさ」
「愛里さん、ダイチは愛里さんに淋しいって言って欲しいんじゃない？」
「ち、ちげえよ、そういうんじゃないよ」
「私はおかあさんとお寿司を食べに行けるから楽しみです」
寿司？　寿司食いたかったんか？
「俺作ろっか？」
「え？　握り？」
「や、握り寿司は・・・」
「あんたやカズオの五目寿司や太巻きも美味しいけど、たまにはねえ」
「はい」
「そっか」
握りは・・・　さすがに弟子入りしねえとムリだな

キッチンで　とうちゃんと片付けてて
「とうちゃん、明日さ、焼きそば作ることにしたからさ」
「そっか、そんじゃ用意しねえとな」
「野菜は切ってた方がいいよな」
「だな、ほれ、文化祭るときみてえによ」
「とうちゃん焼いてくれる？」
「俺？　いいけどよ、ダイチのを食いてえんじゃないか？」
「俺がとうちゃんの焼きそば食いてえ」
「そっか？　そんじゃ俺が焼くか」
「俺が野菜切るからさ」
「いいよ、俺がやっどくから、アイリちゃんと一緒にいてえだろ」
「え、まあ、そうだけどさ」
「俺がやっどくからよ」
「マジ？　そんじゃ俺は」
「愛里さんと私は明日ショッピングに行くから」
「えっ？」
あれ？
「かあちゃん今日行ったんじゃないの？」
「ジャマが入ったのよ」
「ジャマ？」
「ランチして、さあショッピングと思ったら、大学時代の友だちとバッタリ」
なんでそれがジャマなんだよ？
「カフェに連れていかれて、たーっぶり姑の愚痴を聞かされて」

なんでかあちゃんに言おうと思ったかな、カンペキ人選ミスだろ
「私に言わないで本人に言ったら？ って言ったら黙っちゃったけど」
ほれ、そうなるだろ
「だから、明日は愛里さんとゆっくりショッピングしてお寿司屋さんに行きます」
なんかさあ かあちゃんが愛里のこと独占つかさ
「なによ、その顔？」
「や、べつに」
「愛里さんのこと送ってあげなさい」
「おう」
愛里もニコニコしてっけど、イヤならイヤつつっていいんだよ
あれか？ 姑には言えねえつつうやつ？ まだ姑じゃねえけど

愛里の部屋の玄関

「愛里、本当は？」
「本当は・・・とは？」
「明日、かあちゃんと買い物と寿司食うって」
「すごい楽しみです」
「マジで？」
「はい」
「それでもさ、あの、なんつうか、やっとなんも休みになってさ」
「おとうさんと一緒にバーベキュー楽しんでください」
「え、あ、まあ、うん」
「私はバーベキューとか苦手で」
「そんじゃ俺断っから」
「え？ なんで？」
「愛里と一緒にいれねえじゃん」
愛里が俺の顔見て そんで今度は斜め下見てなんか考えて
「明日のあなたの時間は・・・ おとうさんにあげてください」
「とうちゃん？」
「おとうさん、今日、先生のところに一緒に行くときに・・・」
え・・・ 愛里の目が潤んできて
「ダイチがお弁当を作ってくれたって」
「あ、うん、んな大した弁当じゃねえけど」
「お弁当を作ってもらうなんて初めてで、それがあなたに作ってもらって」
愛里が指で涙ぬぐって
「帰りも・・・ ダイチのお弁当は美味しかったって、嬉しそうに・・・」
俺まで・・・ 泣きそうになんじゃん
「私・・・ 感動しちゃって」
愛里のこと抱きしめて

「私は・・・毎日あたりまえみたいにあなたにお弁当を作ってもらって」
「あたりまえでいいじゃん」
「毎日美味しくて毎日しあわせで」
俺の腕の中で 愛里が 泣くのこらえてて
「おとうさんもあなたと一緒にいたいと思う」
「え？ 愛里、だからかあちゃんと？」
「ううん、おかあさんと出かけるのは本当に楽しみで」
「マジ？」
「はい、それに」
愛里が顔あげて 涙で濡れた目で俺を見て微笑んだ
「おとうさんというあなたも好き」
えっ す、好き？
「文化祭のときもだし、キッチンで二人でおしゃべりしてたり、
　　そういうの見てると、すごくしあわせな気持ちになるから」
愛里・・・
「私も明日はゆっくり寝ていたいし」
「昼の卵サンドは作っから」
「おかあさんと出かける途中でカフェで軽く食べましょうって約束して」
んなことまで決めてたんかよ
「私があなたのおとうさんとおかあさんを独占してるけど」
「あ？ なに？」
「今日は日中おとうさんと一緒でおとうさんの神技を見れたし、
　　明日はおかあさんとショピングとお寿司」
ニコニコしてさ
「おとうさんやおかあさんというと、どうやってモリシタダイチが形成されたのか」
「俺が形成？」
「なんかわかるっていうか」
「なにがわかんの？」
「それじゃ、また」
「え、ちょ、愛里、なにがわかんの？」
「モリシタダイチ」
「だからさあ」
「私・・・ フェ・・・」
えっ？ 泣き出した なんで？
「愛里」
抱きしめて
「感動ばっかりしてるううう」
「感動？ なに？」
「なんかわかんないけどおお」
「そ、そっか、うん、そっか」

不入りが俺の T シャツで涙拭いて
「あっ つい」
「いいよ、俺の T シャツは愛里のティッシュだからさ」
「ごめんなさい」
「いいって」
「それじゃ、また」
「愛里・・・ キスしてえんすけど」
「え・・・ なんて言えば」
「なんも言わなくていい」
愛里のくちびる ちょっと涙の味がして
そっと 離れたら 愛里が俺のこと見て 俺も愛里のこと見て
「好きだよ、マジで、すげえ好き」
「はい、あの、それじゃ」
「そんじゃ、あとで」
「はい」
ドアが閉まって 鍵が閉まった
愛里 俺はメッチャしあわせだよ
愛里がとうちゃんのこと大切に思ってくれて
かあちゃんのこと大切にしてくれてさ
将来 かあちゃんが鬼みてえな姑になったら俺がぜってえ守っから
守れんのか？ いや、命賭けて守る！
とにかく 帰ろう

バーベキュー

焼きそばの材料、保冷バッグに入れて

とうちゃんとバス乗って電車乗って乗り継いでまた電車

「とうちゃん、着いたよ」

「そっか」

こっから歩いて15分 こっちか そんでここを曲がって

「とうちゃん、ここだよ」

「そっか」

ん・・と、どっから入れればいいかな

ヤッさんに電話すっか

「だいづ？」

「ヤッさん、玄関に着いたんすけど」

「だいづとカズさん着いたってえ、あ、そっかあ？ ショーさん迎えに行くってえ」

「おいっす」

あ ショーさん来た

「ダイチャーーン」

ござっぱりした普段着着てっと、あの浮浪者だったときがウソみてえだな

「ショーさん、俺のとうちゃん」

「いやあ、ダイちゃんそっくりだな」

「よく言われる」

「とうちゃん、ショーさんだよ」

「あ、浮浪者の？」

ショーさんが笑って

「そうだよ」

「浮浪者には見えねえな」

「カズさんだって浮浪者だったなんて思えないよ」

「俺は、んな変わんねえんだけどよ、年くっただけだよ」

「声もダイちゃんそっくりだね、あ、逆か」

「あのよ、あの・・ よかったな」

「カズさん、ダイちゃんのおかげだよ」

なんか・・ 通じ合ってるな

「あ、そうだよ、呼びに来たんだ、こっち、みんな待ってるよ」

ショーさんの後ろついて建物の横通って

「俺もとうちゃんもバーベキューやんの初めてだよ」
「俺は工場の若い連中とたまにやってたんだけどさ」
「やっぱいい社長だったんだな バーベキューやるなんてさ」
「ダイちゃんとカズさんだよ」
「だいづ!」「カズさん!」
「ヒェーーーー!」「わい・・・は!」
え? あ、ヤッさんとスギさんの・・・奥さんたち?
「こーったイケメン見たことねしたあ」「ワダシも」
「写真見せたっぺ」
「若っけえ人だからあ加工してんのかと思ってたんだあ」
へ?
「パートんこのお若っけえ子たちい、み～んな加工してんだよ」
「加工してたらあ、俺の顔も加工されっぺ」
「あんたの顔はあ、加工アプリもお手上げだっぺ」
漫才みてえだな
「だいづ、カズさん、これが俺のおっかあ」
「エミコおばちゃんだよお」
「はじめまして、ヤッさんにはいつもお世話になってます」
「やんだあ、声までステキでしたあ」「ねえ」
「こっちはあ、茂田さんの奥さんのトモエさんよお」
「茂田です」
奥さんはちゃんとシゲタって言えるんだな
「いっつもお、このスットコドッコイがお世話になってねえ」
「スットコドッコイってなんだあ」
「あんたのことだっぺ」
「うちのおっかあ、気い強えのよ」
「あ～んたにだけだっぺ」
間合いがなんつうか 息ピッタリだな
「んっと、俺のとうちゃんっす」
とうちゃんがペコッて頭さげた
「やんだあ、イケメン二人ってえ」「コンサートさ行ったみてえだね」
「たよねえ、アイドルのお」「行ったごどねえけどさ ハハハハ」
奥さんたちも仲いいんだなあ
「だいづさんはあ」
「あ、はい」
「本名なのお?」
「へ?」
「だいづってえ」
「森下大一です」
「ダイチ! だっぺ? トモエさん、や～っぱりだいづでねえよお」

「んだべ、ワタシもおかしいと思ったのさ」
「うちの人があ、だいづだいづってえ、変わった名前だなあって思ってたのお」
「あ、大一っす」
「うちの人訛ってっからあ」
「おめだって訛ってっぺ」
「ワタシは訛ってねした、ねえトモエさん」「エミコさんは東京の人みてえだよ」
おもしれえな メッチャおもしれえ
「ほれ、だいづとカズさん来たんだからあ、早く肉焼かねえとお」
「あ、んだしたあ」「いっぱい買って来たはんで、いっぱい食べてね」
「ありがとうございます」
つか
「俺、焼きますよ」
「はあああ、ゼントルマン」
ん？
「うちの人なんてえ、酒、飲むだけ、な～んもしねえんだあ」
「俺のことはいいからあ、早く焼けて」
「ワタシとトモエさんでやっからあ、座ってゆっくりしてえ」
「あ、はい、とうちゃん、あれ？」
とうちゃんどこ行った？
「こっちが鶏肉、トモエさん、こっちい塩と胡椒だっけえ？」
「んだ、あとレモンかけんのよ」
「んだした、ほんでえ、こっちが豚肉でこっちが牛肉」
すっげえ メッチャいっぱい肉だ
「うちの人とお茂田さんがあ、だいづ、じゃねわ、ダイチさんとカズさんにい」
「ダイチでいいっすよ、さんいらねえっす」
「そんなあ、ほんじゃ、ダイチちゃん」
「あ、はい」
「ダイチちゃんとカズさんにい、肉いっぺえ食わせてえってはあ」
俺ととうちゃんに？
あ そっか 俺のこと ど貧乏の息子だって思い込んでて・・・
そんでこんなに肉を・・・ だからバーベキューに呼んでくれたんか
「ダイチちゃん、目えこすってっけどお煙い？ そっちゃ煙行ってんの？」
「や、なんか、ありがとうございます」
「お盆にいいことしてえ地獄さ行かねえようにしてえんだっぺ」
「ハハハ、エミコさん、んだね」
地獄なんか行かねえよ、行くわけねえじゃん こんないい人たちさ
つか、とうちゃんどこだ？ あ、隅っこでショーさんと地べた座ってしゃべってる
笑ってるよ ショーさんと息合ってたんだな
「だいづ、お母ちゃんとあいらちゃんは寿司行ったんたっぺ？」
「おいっす、俺が行くとわんこそばみてえに食うから破産するつつって」

「ワッハハハ、だなあ、だいづ連れてったら黒い皿のは食べねえなあ」
「黒い皿？」
「ほれ、黒い皿さあ、金の模様ついてえ」
「見たことねえっす」
ヤッサんとスギさんが顔見合わせた 黒い皿がなんか意味があんのか？
前にかあちゃんに連れてってもらったときは・・・
赤い手吹きのガラスの皿に大将が握ったの載っけてくれたけど
「赤い皿なら見たことあるんすけど」
「赤でもお、なあ」「黄さ勝つべ」
木に勝つ？ そういえば大将んところで寿司下駄にも載せてたな
「木ならよく見るんすけど」
「そっかあ、黄・・・」「すすは皿の色でね」
すす、あ、寿司か
あれか？ 東北の方では盛り付ける皿でなんかあんのかな
「俺、まだまだ知らねえことばっかで」
「いいんだよお、だいづはよくやっでっからあ」「んだよ」
「そうすか？ そんなでも」
「ほれ、肉、いっぺあっからあ、全部食ってけや」「ほれ、皿っこ」
ふつうの皿だ 紙皿じゃねえんだな
「俺、バーベキュー初めてで」
「そっかあ」「んだが」
「バーベキューって紙皿使うのかと思ってました」
「こんだけっきゃいねえからあ、なあ」
「ヤッサんとわんとごの皿でいんでねがっで」
「そんじゃ、いただきます」
あ、この鶏肉、炭火で焼くと塩胡椒だけですげえ美味えな
「メッチャ美味えっす」
「そっかあ」「んだが」
炭ってすげえな 味つけになるんだな
「炭で焼くと美味いっすね」
「ガスよかあ美味えっぺ」「さがなもな」
「炭ってすげえっすね」
「だいづは炭さ感動してっぺ ハハハ」「若げもんな、知らねんだべ」
「愛里が、バイトした金で、俺のゴム長に入れる炭買ってきてくれたんすよ」
「ゴム長に・・・炭？」「ゴム長さ炭入れるっでが」
「炭っつうか、炭が入った袋みてえなのがあって」
「炭袋？」「ゴム長さ炭袋？」
「なんか脱臭効果があるっつって」
「だっしゅうこうか？」
「俺のゴム長臭っせえから、臭っせえの取るっつうか」

「それをあいりちゃんを買ってきたのけ？」
「そうなんすよ、かあちゃんは焼け石に水だっつうんすけど」
「焼け石に水？」
「あんたの臭っせえのはそんなんじゃムリだっつって」
「ワハハハ、だなあ」
え？　だな？
「ダイチちゃん、なんか飲みてっぺ？　ビール？」
「だいつは未成年でした」
「やんだあ、んだったあ」
「俺は水で」
「な～んも遠慮しなくていいのよお、コーラもあんだよ」
「炭酸はあんま飲まねえから」
「ほんじゃ、茂田さんとこのリンゴジュースは？　美味えのよお」
「や、俺は水で」
「だいつ、遠慮しねえでいんだしたあ」「んだよ、わんごのジュース飲め」
これは・・・　飲んだ方がいいんかな
「そんじゃ、ジュース・・・　もらいます」
「ほんじゃ持ってくっからねえ」
どうちゃんは・・・　まだショーさんとしゃべってるよ
スギさんの奥さんがショーさんとどうちゃんに肉持ってってくれてる
「はい、ダイチちゃん」
「ありがとうございます」
ジュースもあんま飲まねえんだけど・・・　あ、これは
「美味え」
「茂田さんとこのリンゴジュースは美味えのよお」
「マジ美味えっす」
「茂田さんの実家がぁ百姓で、リンゴ作ってんだってよ」
リンゴ作るって　すげえな
「カズさんは酒飲めないんだってねえ」
「そうっすね」
「ワダシがぁ遠慮しねえでつつたらあ、若っけえときにい」
あの話か
「おっちゃんに飲まされてえ、腰立たなくなったってはあ」
あれは逆にかあちゃんから聞いたんだけど
かあちゃんがワイン飲んで、あんたも飲む？　って聞いたらそう言ってたって
「おっちゃんて親戚の人お？」
「浮浪者仲間の」
このワード言うど歴代の同級生たちはみんな引いたけど
「おっちゃんらしいっす」
「ああ、そんだのお、浮浪者のお」

全然引かねえでくれんだな
「カズさんとショーさん」
笑ってるし
「浮浪者時代の話で盛り上がってんのよお」
そっか、仲間みてえな気分なんだな
とうちゃん、よかったな 話通じる友だちできてさ
二人で笑ってる とうちゃんとショーさん よかったな

そろそろ焼きそば作った方がいいかもしんねえな
「とうちゃん！ 焼きそば！」
「おう！」
とうちゃんとショーさんがこっちに来た
とうちゃんが焼きそば作ってんのを みんなが見てる
かけえよ、とうちゃん
「わいわいわい」「いんやいんやいんや」
「わいは!」「いんやまあ！」
マジでラップ大合唱みてえだな
「美味え!」「めな!」
「肉入れねえからあ、どうなのかなあと思ったのよお、ねえトモエさん」
「こったに美味しい焼きそば食ったことないね、エミコさん」
「イケメンが作る メン、だわ」「エミコさん、うまい! ハハハ」
陽気でマジおもしろえ
「カズ、美味しいよ」
カズ? メッチャ距離感なくなってっけど
「俺のは貧乏焼きそばだけだよ」
「貧乏焼きそば?」
「働いてっときもよ、金ねえから肉なんて買えねえからよ、そんで」
とうちゃんが俺以外の人にこんなカンジでしゃべってるなんて初めて見た
「ハハハハ、貧乏焼きそば美味しいよ」
なんつうの? 友情? そういうの感じんだけど

ヤッさんとスギさんはけっこうお酒が入って歌い出してさ
奥さんたちもなんかしゃべって笑っててさ
あれ? とうちゃんが皿集めてて
「とうちゃん、どした?」
「洗おうと思ってよ」
「そんじゃ俺もやる」
「やんだあ、ダイチちゃん、カズさん、そったことしなくていいのよお」

「こんくれえっきゃできねえからよ」
「皿洗いは俺もとうちゃんも慣れてるんで」
「いいのお？」
「やらせてください」
「トモエさん、夢みてえだした」「んだねえ、皿洗ってくれるなんてさ」
「これはどこで洗えばいいんすか？」
「えっとね、これとこれとこれがうちの」「こっちは全部うちの」
「そんじゃ、とうちゃん、俺はヤッさんとのやっから」
「俺はスギさんここで洗うからよ」
ヤッさん家は 101 号室、スギさんとは 102 号室
隣り同士だから余計に仲いいんだな

かあちゃんたち

「ダイチちゃんは手際いいんだねえ」

「俺、家政夫のバイトしてたんで」

「あんれえ、家政婦もやってんのお？」

「家でも、かあちゃん働いてっから、とうちゃんと俺でやってんすけど」

皿は終わった

「ちょっと流しの掃除していいっすか？」

「そ～んなことしなくていいのよお」

「すぐ終わるんで」

「夢みてえだしたあ」

「いっぱい肉食わせてもらったんで」

「うちの人とお茂田さんがあ、だいつ、じゃね、ダイチちゃんに肉食わせてえって」

「メッチャ、ありがてえっす」

「こったことっきゃできねえけんちょ」

「昼メシんときのおかずも、いつもありがとうございます」

「ただの田舎料理だよお」

「メッチャ美味えっす、マジで、食ったことねえのばっかで」

「ダイチちゃんのお嫁さん、じゃねわ、カノジョ？」

「愛里っすか？」

「前にいロールケーキ作ってくれてえ、美味かったあ」

「マジっすか」

「わざわざ作ってくれんなんてはあ」

「がんばってました」

メッチャがんばってたよ愛里はさ

「こ～んな優しい子とつきあってんだねえって、トモエさんとさ」

そうなんすよ 優しいんすよ愛里は

「結婚すんだっぺ？」

「えっ、まあ、いつかはしてえなって」

「だからあ金稼いでんだもんねえ」

「おいっす」

「はああああ、えらいねえ」

「惚れてっから」 あっ 言っちまった

「あんれえ、お婆ちゃんがキュンキュンしちまうっぺ」

「ハハハ」って笑いながら顔真っ赤になってるのが自分でもわかる
顔見えねえように排水口に顔近づけて・・・
ここ取って・・・ 汚れてんな 忙しいんだな
「ダイチちゃんは背え高けえんだねえ」
「今はとうちゃんとおんなしっすね」
「うちのバカ息子もお、おっとうよか背え高くなっただけんちょ」
あ・・・ 家出したっつう
「ダイチちゃんよか全然低いもんねえ」
「かあちゃんは、これ以上デカくなったら買う服がねえっつって」
「アハハハ、だねえ、外人さんみてえだもんねえ」
おっし きれいになった
「終わりました」
え？ なんか俺のことジッと見てっけど
「うちの田舎ではあ、流れだ子はあ、また戻ってくるってんだけんちょ」
「流れた子？」
「流産したり、ほれ、いろいろ事情あって、あれしたりさあ」
「あれって？」
「墮したりさあ、ダイチちゃんにはこった話はねえ」
「戻ってくるって、何がっすか？」
「そういう子の魂ってのかなあ」
「魂？ それに戻ってくるんすか？」
「だのよお、おんなしお母ちゃんどこにい、また戻ってきて生まれんだって」
流産したり・・・ 墮した子が・・・ また戻って・・・ 墮した子・・・
「うちのバカ息子はちゃんと生まれてえ、で～っかくなっただのにはあ、
戻ってこねえよ、んつとにバカだした ハハハ」
笑ってっけど 目に涙溜まってる
「どうしてんのかなあ、あのバカ息子」
声も涙声になって
「もう一生・・・ 会えねえのかなあ」
エプロンで顔隠して 身体震えてて
俺は・・・
「戻ってくる」
「どったもんだかあ」
「流れた子が戻ってくるっつうんなら」
もしも俺なら 俺ならぜってえ
「ぜってえ戻ってくる」
「ダイチちゃん・・・」
ヤッさんの奥さんが座り込んで 声出して泣いて
俺は 背中さすって それっきゃできなくて
「きっと戻ってくる、ただいまっつって」

「そっかなあ？」
「どうちゃんとかあちゃんのは、ぜってえ忘れらんねえから」
「そっかなあ？」
「戻ってくる、信じてほしい」
「信じる？」
「信じて待っててほしい」
「そうだね、そうだあ、おっかあのワダシが信じてやんねえとねえ」
ヤッさんの奥さんがエプロンで涙拭いて フーッと息吐いて
「ダイチちゃん、あんがとね」
「え、俺は・・・」
ドアがバンと開いて
「エミコさーん」
スギさんの奥さん えっ 泣いてる
「トモエさん、どしたのお？」
「カズさんが」
えっ どうちゃん？
「うちの仏壇とこの娘の写真見て」
あ、そうだよな スギさんとこの子どもは2歳で・・・
「この子は？ って・・・ うちの娘で2歳で死んだのよっつたら」
スギさんの奥さんはエプロンで涙拭きながら
「かわいそうになあってさ、もう昔のことなんだよって笑ったらさ」
エプロンで顔隠して
「かあちゃんも辛れえな・・・って」
どうちゃんはわかるよな 俺とねえちゃんのこと赤ちゃんときから育ててっから
「ワダシ、泣かさってまって」
「そ〜ったこと言ってもらったらねえ」
「子どもが死ぬなんて辛れよなって・・・ 泣いでるワダシの背中さすってくれで」
「トモエさん、やんだあ、ワダシまで泣いちゃうっぺ」
「とっちゃんの前では泣けねべ？」
「だよねえ、シゲさんも泣き疲れたってんだっぺ」
「何十年ぶりで泣いで・・・ なんか・・・ 楽になっでさ」
「ワダシもなんだあ」
俺は・・・
ヤッさんもスギさんも そんで奥さんたちも
明るくておもしろくて温ったけえ人たちだっって思ってたけど
そんでもやっぱ 辛れえ思いしてて そんなん全然見せねえで
なのに・・・ 俺にいっぺえ肉食わせてえって呼んでくれて
なんだよ なんでそんな温ったけえんだよ たまんねえよ
「あんれ、ダイチちゃん！」「わい、泣いでら！」
「なんか、みんな・・・ 温っけえから」

「ダイチちゃん、ほれ泣かねえのお」「いい子だべ」
奥さんたちが俺の背中撫でて
「いい子でしたあ、ほれ」「ヨチヨチ、ほれほれ」
二人が・・・俺のこと赤ちゃんみてえに 小さい子どもみてえにあやす声が
優しくて その声聞くと もっと涙出てきて
「ほ～れ、おっかあ抱いてやっからあ」「かっちゃ抱っこ抱っこすっぺ」
きつと 今 俺は 二人の子どもの代わりみてえに そんなでも
「かあちゃんたち・・・ありがとう」
「かあちゃんたちってえ」「呼ばれだがつたあ・・・呼ばれ・・・」
俺のこと二人で抱っこしながら 二人ともまた泣いちゃってた

奥さん二人は目を真っ赤に腫らして鼻も赤くて
多分 つか 確実に俺もそうで
みんながいるところに行く
ヤッさんスギさんととうちゃんとショーさんが火の後始末してて
顔上げて ビックリした顔になって
「いんやいんや」「わい」
「泣いでらんだが?」「泣いでたんだっぺ?」
泣いてました
「あ～んまし遅せえからあ、テレビでも見でんのかなってのはあ」
「全米が泣いだったでの見でらったのが?」
全米は泣いてねえけど 俺と奥さんたちは泣いてました
「ダイチちゃんがあ、んーっとイケメンでえ感動してたんだしたあ」
「んだね、こったイケメン拝めるなんてありがたぐで」
え・・・
「だいづはイケメンだけんちょ、そんで泣くってはあ」
「あんたの顔、毎日見てっからあ、目え腐ってたんだした」
「目え腐るっではあ」
「スカッと爽やかでえ、老眼も治ったよねえ、トモエさん」「んだよね」
「イケ・メングスリ」「目薬どメングスリって、エミコさんうまい!」
奥さんたちは・・・
「ほんだらあ、だいづはなんで泣いてたんだあ?」
「俺は・・・」
「ダイチちゃんは目に洗剤入ってまっではあ」
え?
「皿洗ってっときい入っちゃまったのよお、ねえトモエさん」「んだのよ」
「ワダシらのエプロンであわててこすっちゃまっではあ」「赤ぐなっではあ」
そのエプロンは・・・奥さんたちの涙で そんで俺の涙で ちょっと濡れてて
「だいづに、そったことやらせっがらだっぺ」

「ダイチちゃん、ありがとねえ」
「あ、や、それは全然」
なんで泣いてたのか 言わねえんだ ヤッさんやスギさんが心配すっから
ヤッさんやスギさんも辛れえのわかってっから
すげえ 女の人はずげえ メッチャすげえ
とうちゃんは・・・ 俺のこと見てる メッチャ優しい目えして
とうちゃんはわかってんだもんな スギさんの奥さん泣いたの見てんだからさ
「だいつ、皿なんかあ洗わせちまってえ、堪忍なあ」
「や、俺が張り切っちゃまって、ピュッと、あの、ピュッと」
「流しまで掃除してくれたんだあ」「うちんともカズさんやっでくれたのよ」
「いんやいんやいんや」「わいわいわい」
奥さんたちが、俺の背中ポンポンで これでよかったっつうことだな
「だいつもカズさんもそったことまでえ」「めわぐだな」
「肉いっぱい食わせてもらって嬉しかったんで」
「そっかあ、よがったあ」「いがったなあ」
嬉しそうなヤッさんとスギさん見てっと ヤベ また泣きそうになる

俺ととうちゃんが帰り支度して
みんなで玄関のところまで来てくれた
「ヤッさん、スギさん、そんで・・・ かあちゃんたち」
奥さんたちがくちびるギュッ噛んだ
「かあちゃんてはあ、こ～った気い強えかあちゃんはいらねっぺ」
ヤッさん このかあちゃんたちは・・・ 温っけえよ ヤッさんたちみてえにさ
「今日は、本当にありがとうございました」
「俺たちもお楽しかったよお」「んだよ」
「肉、いっぱい食わせてもらいました」
「よがったあ」「いがった」
「ダイチちゃん、急に呼び出してごめんねえ」
「嬉しかったっす」
「明日っからあ、ワダシとトモエさんパートあっからさあ」
「お盆休みにつすか？」
「盆休みに出るとお、時給ちょっと高くしてくれんのよ」「んだのよ」
そうなんだ
奥さんたちがグイッと俺のことつかんで 隅っこに
「ワダシとトモエさん」
メッチャ小せえ声で
「へそくりしてっからあ」
へそくり？
「ダイチちゃんにいつでもご馳走してあげっからあ」「んだよ」

「ありがとうございます」
「腹へったらあ、おばちゃんたちとこさ来るんだよ?」「来いへ」
ヤベ また泣きそうになんじゃん
「たいづになにしゃべってんだあ?」
「あんたの悪口!」
「ま〜ったぐはあ」
どうちゃんは? あ、ショーさんとしゃべってる
「それじゃ、カズ、またな」
「たっちゃんも元気でな」
たっちゃん? なんで? あ、ただしだから?
「カズと話していると楽しいよ」
「俺のはバカみてえな話ばっかだけどよ」
友情だな もうカンペキ友だちになってんな
「ほんじゃ、だいつ、カズさん、こったとこだけんちょ、また来てくんちえ」
「いづでも来いへ」
「はい、あの、俺、メッチャしあわせです」
「しあわせっではあ、なあ」「そっだごど・・・」
ヤベ ヤッさんとスギさんが泣きそうになってる
「んと、あの、また、肉食わせてくれってねだるんで」
「おう、いっつでもお、なあ」「なんぼでも」
「ダイチちゃん、おばちゃんたちもお、しあわせだったよお」
奥さんたちが涙浮かべてて 俺まで・・・
「おめえはあ、なに泣いてんだした」
「イケメンさ感動してんだっぺ!」
「100年に一人のイケメンだはんで」
「トモエさん、100年に二人だっぺ」
「あ、んだ、イケメン親子だもんねえ」
「ま〜た、くっだらねえこと語っではあ」
よかった 笑ってる 俺も
「そんじゃ、また」
「ほんじゃ現場でなあ」
「おいっす」
「カズさんもまたなあ」
どうちゃんが頭掻いてコクンて
俺とどうちゃんが見えなくなるまで みんなで手え振ってくれてた

あんどときから

電車の中　とうちゃんと二人で座ってる
保冷バッグには、愛里とかあちゃんに飲ませてって、
スギさんとこのリンゴジュース
焼いて残った肉も全部タッパーに詰めて持たせてくれた
おまけに、奥さんたちそれぞれの手料理が入ったタッパーに、
ニシンのみりん干しや干し大根とかいうのまで持たせてくれて
保冷バッグがパンパンになってる
「とうちゃん、明日の晩メシ作らなくてもいいな」
「だなあ、こんなによ、ありがてえなあ」
「とうちゃんさ、ショーさんと何話してたの？」
「バカみてえな話ばっかしててよ」
「聞きてえよ」
「んっと、あそこの炊き出しは服がもらえんとかよ」
情報交換？
「俺が行ってたところでは、もうやってねえんだってよ」
「だいぶ前だもんな」
「たっちゃんも靴には困ったつってた」
「とうちゃんさ、なんでショーさんのことたっちゃんて呼んでんの？」
「んっとよ、ショーさんてのは仕事仲間とかが呼んでたんだってよ」
そうなんか
「幼なじみの友だちはたっちゃんて呼んでたつってよ、
　　そんで、俺にもたっちゃんて呼んでくんねえかつってよ」
「マジ？」
「んで、奥さんもたっちゃんて呼んでたんだってよ」
「奥さん？」
離婚したんだよな
「そんじゃ俺のことはカズでいいよつったんだよ、
　　浮浪者仲間はカズって呼んでたからよって」
だからショーさん、とうちゃんのことカズつってたんか
「たっちゃんとしゃべってつと懐かしくてよ」
「浮浪者んとき？」
「なんかよ、俺が今いんのは夢ん中みてえだよ」

「今？ 今ここ？」
「ずーっと夢ん中にいるみてえだよ」
それは・・・ どうちゃんはよくそう言ってっけど
「たっちゃんとしゃべってっど、あ、俺がいたとこだなっつうか」
どうちゃんがいた・・・とこ・・・
「つうことはよ、俺は今、なんつうんだ？ 夢ん中にいんじゃねえんだなって」
「え？」
「これは夢じゃねえんだって、たっちゃんと二人だよ、夢じゃねえんだなって」
「夢じゃねえよ」
「夢じゃねえんだな」
「どうちゃんとかあちゃんと結婚して、俺とねえちゃん生まれてさ」
俺は
「どうちゃん、俺は生きてるよ」
「生きてんな、ちゃんと生きてんな」
「どうちゃんが育ててくれて、こんなにでっかくなっただんじゃん」
「だよなあ」
「そうだよ、俺のことまで夢にすんなよ」
「ダイチといるときはよ、夢ん中みてえな気いしねえんだよ」
「え？」
「ダイチといるときはよ、おんなしとこにいてよ」
おんなしとこ？
「ダイチは、なんつうか、俺がいるとこみてえなよ」
「え・・・ どうちゃんがいるとこ？」
「ダイチといると、俺はここにいていいんだなっつうか」
え・・・？
「俺は・・・ ここにいんだなっつうか」
俺は・・・ なんか・・・ やっと・・・
「俺はバカだから、うまく言えねえけどよ」
やっと・・・ どうちゃんと・・・
「ダイチ、どした？ なんで泣いてんだ？」
「なんか・・・ どうちゃんとショーさんが楽しそうにしゃべってて」
高二にもなって
「よかったなあって思って、マジで思ってて、そんでも」
バカみてえだけど
「なんか・・・ 俺が入れねえっつうか・・・ そんな・・・気・・・」
「バカだなあ」
「わかってっけどさ」
「ダイチは俺の大切な息子で、たった一人の大切な親友だよ」
どうちゃんが自分の着てる T シャツの袖んとこ引っ張って
「ダイチは小せえころから変わんねえな」

つって俺の顔拭いてくれて
「泣き虫だっつうんだろ？」
「いっちゃん・・・俺のそばにいてくれんだよ」
「どうちゃんやめてくれよ、俺、声出して泣きそうになっちまってっから」
「俺、なんかヘンなこと言ったんか？」
「ヘンなこと言ってねえよおお」
「なんか、ごめんな」
「なんで謝るんだよおお」
「また泣いてっからよ」
「泣き虫だからだよ」
「ダイチは」
どうちゃん笑ってっけど
「今度はどうちゃんのこと怒ってんのか」
「怒ってねえよ、怒ってねえ・・・嬉しくて泣いちゃった」
「そっか」
「うん」
「そっか」
「そうだよ」
俺は思ってることがあって それは
「どうちゃん、俺、わかった」
「ん？」
「俺は戻ってきたんだよ」
「へ？ どっから？」
「ヤッさんの奥さんが教えてくれたんだけどさ」
あの話を聞いたとき 俺の頭の中に浮かんだのは
「ヤッさんの奥さんの田舎では、流れた子どもは戻ってくるんだってさ」
「流れた？ ど、どこに？」
「流産したり、墮した子どもは」
「え・・・」
「おんなしお母さんのところにまた戻ってきて、生まれるんだってさ」
どうちゃんが俺の顔見て
「だからさ、あれはさ、俺だったんだよ」
そんで、ちょっと下向いて
「どうちゃんが名前書いたあれはさ」
できるだけ 明るく言いたくて
「俺はどうちゃんの息子になりたくてなりたくてさ、そんで・・・
そんで、かあちゃん中に入ってさ、入ったらさ、間違えてんの気づいてさ、
ヤッペ、この身体じゃ 100パーのどうちゃんの息子になれねえじゃんてさ」
どうちゃんは 下向いたまま 黙って聞いてて
「そんでもさ、どうちゃんは父親のところに名前書いてくれただろ？」

それってさ、やっぱ、あれは俺だったからなんだよ、そうなってたんだよ」
俺は必死に笑いながら
「そんな次！ と思ったらさ、ねえちゃんいんじゃない、私が先！ ってさ、
メッチャ怒られてさ、俺、シュンてしてさ、へへ、そんで、やっと俺の番でさ、
やーっつ戻ってこれたって、今度は100パーとうちゃんの息子でさ」
とうちゃんは下向いたままで
「だから、とうちゃんもかあちゃんも、ぜーんぜん悪くねえんだよ、
俺は、ほら、ちゃんと戻ってこれたんだからさ」
とうちゃんのももの上に置いたこぶしが震えてて
「とうちゃんは、あんときも俺のとうちゃんになってくれて、
そんで、今は100パー俺のとうちゃんです、だから、なんつうか」
俺は とうちゃんのこぶしに手え置いて
「とうちゃん、ただいま」
笑ってんのは・・・ もう・・・ 限界で・・・
「そっか・・・」
とうちゃんの声はかすれてて
「戻ってきたんか」
「うん」
「そっか」
「戻ってきたよ」
「ダイチ」
とうちゃんが真っ赤になった目で俺を見て
「おかえり」
そう言って優しい顔で笑ってくれた
「ただ・・・いま・・・」
俺は・・・ もう・・・ 声出ねえくれえ・・・
「そっか・・・ ダイチは・・・ 戻ってきてくれたんか」
「う・・・ん」
「そっか」
「とうちゃんは」
俺は本当にそう思ってて
「俺が生まれる前からずっと前から、俺のとうちゃんだよ」
「そっか・・・ ダイチは・・・ あんときから・・・ 俺の・・・」
「そうだよ、あんときから二人は俺のとうちゃんとかあちゃんなんだよ」
「あんときから」
「俺、マジでそう思ってっから」
「そっか、そうだな、ダイチは俺の息子だな、ずっとな」
「とうちゃん」
俺は なんか ふざけて
「待たせてごめんな」

とうちゃんがいつもの優しい目で俺の顔見てて
「へへ、ちっと入るとこ間違えちまってさ」
とうちゃんは笑って　それで
「ダイチ・・・　ありがとな」
「マジでそう思ってっから」
「そうだな、ダイチが言うんなら・・・　そうだな」
「ぜってえそうだよ」
「そうだな」
ヤッさんの奥さん、ありがとうございます
俺は　ずっととうちゃんの息子でした　わかりました
メッチャ嬉しいです　メッチャです

家に帰ったら
リビングから　かあちゃんが出てきて
「おかえり、遅かったわね」
かあちゃん　俺は　かあちゃんのこと抱きしめて
「ちょ、なに？　なにやってるの？」
「かあちゃん、戻ってきたよ」
「わかってるわよ、ちょっとなに？」
「俺は戻ってきたんだよ」
俺のかあちゃんは　身長高くて　やせてて　いっつもいい匂いがして
かあちゃんにあんま抱っこしてもらったことねえけど　それでも
「焼肉臭い！」
こういうかあちゃんだよ

未知の世界

かあちゃんが 保冷バッグの中見て
「買い出しに行ったみたいにいっぱい入ってるわね」
とうちゃんがタッパーのフタ開けてかあちゃんに見せて
俺は・・・ 愛里がいるの忘れて愛里の前でかあちゃんのこと抱きしめちまって
メッチャ メッチャ 恥ずかしいいいいい
かあちゃんから腕離したらつつうか突き放されたらすぐ後ろに愛里がいてさ
目が合ってさ 優しい目が逆に辛れえつつうかさ
「ダイチ、この肉は明日の晩メシにすんだよな」
「え、あ、うん、適当にアレンジすっから」
「適当にアレンジって、どうアレンジするのよ？」
「え、豚は・・・ キムチと炒めっかな」
「豚キムチですか？」
「え、あ、おう」
「楽しみ」
「え、あ、そっか」
「牛肉はどうするの？」
なんで詰問されなきゃなんねえんだよ
「逆にさ、かあちゃんはどうやって食いてえんだよ？」
「知らないわよ、料理の仕方なんて」
「ダイチ、野菜入れてよ、野菜炒めみてえのは？」
「あ、だな、うん」
「鶏肉はどうするの？」
「んっと、これはこのまんまで美味かったんだよな、どうすっかな」
「あの」
愛里？
「あ、ごめんなさい、私が言うことじゃ」
「愛里、なに？ 言ってくれよ」
「え・・・ 中学のときにパパが焼き鳥屋さんに連れていってくれて」
焼き鳥屋？ 屋台の？
「お塩のに、柚子胡椒が載せてあって」
柚子胡椒！ 合うな、うん、合う
「あら、それって、あの有名な？」

「有名かどうかはわかりませんが、焼き鳥屋さんじゃないみたいところで」

「あそこだわ」

「つうことは・・・高級なところか だよな 愛里が新橋の焼き鳥屋って似合わねえよな
俺も新橋の焼き鳥屋は行ったことねえけどさ」

「そんな、炙って小さく切って柚子胡椒ってことで」

「こっちもいっぱい入ってるわね」

「そっちは奥さんたちが作った郷土料理」

「こういうのいいわね、お店じゃ絶対に食べられないもの」

「美味えんだよ、昼休憩んときにいつももらってる」

「あら、あんた豪勢なランチしてるのね」

「まあ、うん」

「アイリちゃん、リンゴジュース飲まねえか？」

「とうちゃんが、小せえグラスに注いで愛里とかあちゃんに渡した」

「あ、リンゴ！」「リンゴそのままね」

「なんかさ、スギさんとここでリンゴ作ってんだってさ」

「あんたもカズオも隠れた名店に行ったみたいね」

「隠れた名店？ かもしんねえ、かあちゃんいいこと言うな」

「明日が楽しみですわね」

「そうよね」

「かあちゃんと愛里が顔見合わせてニッコリしてて」

「なんか二人の距離がますます縮まったっつうカンジすんな」

「それじゃ、今度はこっちの番よ」

「こっちの番？」

「とうちゃんと俺は、かあちゃんに呼ばれて愛里も一緒にリビングに来た」

「これよ」「これです」

「愛里とかあちゃんがおんなし袋持って、俺ととうちゃんの前に差し出したけど」

「なに？」

「あんたたちの普段着」

「いっぺえあんじゃん」

「私を買ってきてもほとんど着ないでしょ！」

「着てるよ、愛里と出かけるときとかシンシンおじちゃんとか行くときとかさ」

「他には？」

「え・・・んっと・・・」

「他にないくせにあるようなふりして考えてるふりしないの」

「んな・・・さ」

「いつも私が行くようなお店のじゃ、あんたたち着ないから」

「かあちゃんを買ってくんのは普段着にはなんねえよ」

「愛里さんに相談したら、もっとカジュアルブランドで、しかもセール中で、」

すっごく安かったのよ、ねえ、愛里さん」

「はい」

愛里もニコニコしてっけど

「とにかく安かったのよ」

「500円とか？」

かあちゃんが俺の顔ジューッと見た なに？ 聞いただけじゃん

「私はカズオのを選んで、愛里さんがダイチのを選んだの」

愛里が？ 俺の？ メッチャ嬉しいんですけど

「ほら、早く開けなさいよ」

俺とどうちゃんは顔見合わせて そんで、袋ん中から

あれ？ どうちゃんが出したのと・・・俺が今手に持ってんの・・・

「おんなし？」

「それがね、私と愛里さんはそれぞれで選んで、そのセットアップが一緒にビックリ！」

「ビックリしました」

またどうちゃんとお揃いかよ

「そのサックスブルーのTシャツと」

サックスブルー？ くすんだ水色はサックスブルーっつうの？

「デニムボトムスがセットですけど、トップスを変えても着れるかなって」

専門用語が多すぎてわけわかんねえ

「そのボトムスはウエストがゴムだから履きやすいと思います」

確かに これならかあちゃんが買ってくんのよかは気楽に履けっかもしんねえ

「そのTシャツの左裾のシルエットがあるでしょ」

何のこと言ってるのか全然わかんねえよ

どうちゃんのこと見たら、どうちゃんも俺の方見てた メッチャおどおどした目で

「ほら、白い模様よ」

白い？ ここ？ あれ、なんかに似てんな なんだ？

「カズオのはネコ」

あ、そういえば、どうちゃんのはネコが伸びしてるみてえに見える

「ダイチのは犬っていうか、ゴールデンレトリバーみたいなカンジね」

俺のが犬？ そう言われれば・・・犬か

「笑っちゃいましたよね」

「そうよねえ」

笑うポイントはどこなんだ？

「あっ みーちゃんか」

どうちゃん みーちゃん・・・って、ああ！ どうちゃんが世話してたネコか

「やっとわかったのね」

「どうちゃんがみーちゃんなら、俺のは？」

「え、なんかイメージっていうか」

「なんの？」

「なんか・・・あなたの」

「俺？ 俺のイメージが犬？」
「犬っていうか、ゴールデンレトリバーみたいな」
「どういうイメージだ？」
「あとはそれぞれTシャツとちょっとしたジャケット」
「全部値札取ってある 俺や、特にとうちゃんには知られたくねえっつうことか」
「以上よ」
「え？ 俺たちのだけ買いに行ったの？」
「そんなわけないでしょ、私と愛里さんも買いました」
「おかあさんにコーディネートしてもらったら、すごくステキで」
「愛里さんの若い感性で私の思い込みを取ってもらったわ」
「まあ・・・ 仲良く買い物してくれてよかった」
「愛里、あの、ありがとな」
「お金はおかあさんです」
「あ、かあちゃん、ありがとう」
「美里、ありがとな」
「いつもは一人で行くでしょ、なんかね、ただの支給品調達って気分だけど、今日は愛里さんと一緒に、Shopping!ってカンジで楽しかったわ」
「私も楽しかったです」
「メッチャ仲良くなってよかった」
「寿司は？」
「あそこはいつも安定の美味しさよ」
「本当に美味しかったです」
「かあちゃん、あのさ、黒い皿あった？」
「黒い皿？ あそこの大将は季節で変えるからねえ」
「あ、おかあさん、アナゴの塩が、これくらいの小さいのに、黒にサッと金が入って」
「ああ！ そういえばそうね、愛里さんよく憶えてたわね」
「黒いお皿に白いアナゴが映えてきれいだなと思って」
「そうね、あそこの大将そういうところにこだわるから」
「そっか、やっぱ黒い皿はあったんか しかも金つつたら、それだな」
「かあちゃん、アナゴの塩は高けえの？」
「あそこのはどれもそれなりにするわよ、ネタにこだわってるもの」
「高けえんだ だからヤッさんとスギさんが黒い皿がどうのつつってたんか」
「なによ？ あんたは連れていかないわよ」
「ハア？ たまにはいいじゃん」
「先に回転寿司でお腹いっぱいにしてからならいいわよ」
「回転寿司？」
「回転寿司って連れてってもらったことねえよな」
「ないわよ、私は学生のときは友だちと行ったことあるけど」
「美味えの？」
「私と愛里さんが行ったお店のものは別物と思って食べたら、それなりかな」

そっか、なんかよくわかんねえけど、別に寿司食いに行きてえわけじゃねえもんな
「あんた、友だちと行ったりしないの？」
「行ったことねえな」
「愛里さんは？」
「一年のときに友だちに連れていってもらったんですけど・・・」
「どうだった？」
「私にはムリでした」
「ああいうのは口に合わない？」
「ていうより、あそこに食べてみたいのがあるけど、その前に取られちゃいそう」
「取られちゃいそう？」
「なんかそういうこと考えるとドキドキしちゃって、もういいって」
「ハハハ、もういいって」
「結局ずっと回ってたケーキだけ食べて帰ってきました」
「ハハハ、愛里さん、おもしろいわ」
愛里　メッチャ可愛いな　寿司屋でケーキってさ　え？　ケーキもあんの？
「愛里さんは通なのよ、メに鉄砲巻き」
「鉄砲巻き？　なんだそれ？」
「私がいつもメに頼んでるでしょ」
「かあちゃんが何食ってっか知らねえよ」
「これだから」
「これだからってなんだよ」
「あんたは最後まで中トロ！　あわび！　ウニ！」
「好きなもん食ったっていいじゃん」
「鉄砲巻きはね、江戸っ子のメなのよ」
「だからどうなのだよ？」
「かんぴょう巻きにワサビを入れるの」
「愛里がそんなん頼むの？」
「パパがいつもそうだったので、私もそのまま・・・なだけで」
「大将も喜んでたわよね、若いお嬢さんが鉄砲巻き頼むなんてさって」
「あれ美味しいですよ」
「メには最高よね」
なんか俺が入る隙間が全然ねえつつうか
とうちゃんは・・・　気配消して座ってるよ　いつもだけどさ
とうちゃん、ここは夢ん中つつうよりさ、俺たちにはわかんねえ未知の世界だよ

ゴールデンレトリバー

愛里の部屋の玄関

「愛里」

「はい」

「ちょっと聞いてえことがあんだけどさ」

「はい、なんですか？」

「俺のイメージがゴールデンレトリバーって、どういう意味？」

「意味？ ただなんとなくそんなカンジかなって」

「どんなカンジ？」

「ゴールデンレトリバーみたいなカンジ」

質問の仕方間違えたかな んっと

「愛里の中の、ゴールデンレトリバーはどういうイメージ？」

「どういうって、ああいうカンジ」

「ああいうって？」

「ゴールデンレトリバー見たことないですか？」

「動画とかではあっけどさ」

「それです」

それってさ 漠然とし過ぎててさ ん・・・っと

「愛里はゴールデンレトリバー好き？」

「好きか嫌いかで言ったら・・・好きかな」

好きか好きなんか

「どういうところが？」

「どういうって、飼ったことないから詳しくは」

「飼ったことねえのに俺のイメージがゴールデンレトリバーってどういう」

「そんなにイヤ？」

「あ？ なにが？」

「あのTシャツのシルエット」

「え？ や」

「おとうさんのと同じネコにすればよかった？」

「じゃねえよ、イヤじゃねえよ、ただ愛里の中のゴールデンレトリバーって」

愛里が俺のこと上目遣いで見て そんで携帯出して なんか 検索？

「これがゴールデンレトリバーの特徴だそうです」

「え？」

「読みますよ」
「あ、おう」
「性格はとても穏やかで」
性格は穏やか いいじゃんいいよな
「人に懐きやすいため番犬には向きません」
番犬には向かぬえ？
「え、ちょ、番犬には向かぬえってさ」
「人懐こいから泥棒にも懐いちゃうそうです」
「や、俺は泥棒には懐かぬえよ」
「ゴールデンレトリバーの特徴ですけど」
「あ、そ、そっか」
「続けていいですか？」
「あ、おう」
「頭が良く、訓練性能が高いため」
マジ？
「盲導犬、介助犬、警察犬などのサービスドッグにも適しています」
すげえじゃん
「また、水鳥の猟犬として活躍していたため、水遊びを好みやすいです」
泳ぐのは好きだな 当たってんな
「体を動かすことが大好きなので」
好きだな大好きだな
「飼育の際は運動不足にならないように、十分に散歩の時間を設けましょう」
「飼育？」
「ゴールデンを飼うときは運動不足にならないようにって書いてます」
「んっとさ、んっと、愛里は、飼いてえと思う？」
「ゴールデンレトリバー？」
「え、あ、うん」
「小さいとき、おとなりの家で飼ってて」
「マジ？」
「はい、本当にすっごく人懐っこくて、呼ぶとシッポをブンブン振って」
シッポ？ ブンブン？
「私、見たところあるんですけど」
「なに？」
「庭でおばさまがつまづいて痛ったーいってしゃがみ込んだら」
愛里がいつものビックリした顔で
「すぐに走ってきて、気がついたらおばさまのそばにいて、ビックリしちゃった」
「へえ」
「おばさまが言うには、もう大きいのに、自分のこと子犬だと思ってるって」
え？ 大きいのに子犬だと思ってる？
「だから、ソファに寝てるとドーンって身体の上に乗ってきて」

う、上に？ 身体の上に？
「重たくて苦しくて、でも子犬だと思ってるからどかなくて」
重たくて・・・ 苦しい？
「顔をベロッベロ舐めて、もういいって言ってもベロッベロ舐めて」
顔をベロッベロ？
「もう大変なのよって」
「大変？」
「まあそういうところも可愛いって」
「そ、そっか」
「大型犬でおおらかなんだそうです」
「おおらか、そっか、おおらか」
「でも、自分の家で飼うには大きく過ぎるかな」
「え？ 大き過ぎる？」
「はい」
「あのさ、愛里にとって、俺は大き過ぎんのかな？」
「あなた？」
「俺」
「え、今ゴールデンの話を」
「あの、俺さ、身長高めじゃん」
「そうですね」
「大き過ぎっかな」
「過ぎるってことはないと思うけど・・・ おかあさんが言っていました」
「かあちゃん？」
「あれ以上伸びたらサイズがないって」
「あ、それ、あ、そっか、や、じゃなくてさ、愛里的には？」
「私的？」
「俺は愛里にとって大きく過ぎんのかな」
「え・・・ 私も女子の中では身長高い方だから」
だよな かあちゃんとおんなしくれえだもんな
「わあ身長高すぎ！ って思ったことはないです」
「そっか、おう、そっか」
「あの、それじゃ」
「あのさ」
「まだあ？」
「あとちょっとだけ」
「なんですか？」
「愛里は、ゴールデンレトリバーのどこが好き？」
愛里が目え見開いて なんか言おうとして口動かしてっけど
「愛里？」
「あなたって」

「俺？」
「すっごく頭がいいのに、こういうときって超絶バカになる」
「へ？」
「それじゃまた」
「え、愛里」
「もうゴールデンレトリバーの話はお終い」
「えええ、愛里いい」
「お終いですっ」
「愛里いいい」
愛里が俺の顔見て　そんで
「フッ　ハハハハ」
「え？　なんで笑うの？」
「今・・・ハハハ　キュウウンて」
「キュウウン？」
「そんな顔してた」
「キュウウンて顔ってどんな顔だよ？」
「そんなお顔でちゅよお、ゴーちゃん」
なんで赤ちゃん言葉？　そんで
「ゴウちゃんて誰だよ？」
ゴウちゃんてさ名前呼んでさ
「おとなりで飼ってたゴールデンレトリバー」
「ハ？」
「ステキな名前をつけようと思ってたそうです」
「そう・・・なんか」
「決まるまで仮で、ゴールデンのゴーでゴーちゃんて、仮に呼んでて、
そしたら、ゴーて言うて来ようになっちゃってゴーだそうです」
「へえ」
ゴウちゃんなんつうから　一瞬　なんだよ　犬じゃん
「それじゃ」
「愛里」
抱き寄せて　愛里の柔らけえくち・・・
「グフッ」
「え？　なんで？　なんで笑うの？」
「なんでも・・・ないです」
「まだ笑ってんじゃん、なに？　言ってくれよ」
「え・・・怒らないって」
「約束する」
「なんか・・・　ゴールデンレトリバーが・・・　飼い主さんの顔をベロッベロ」
ベロッベロ？　んなことしてねえだろ？
「その映像が浮かんできちゃってええ　ハハハ」

「愛里」
「は・・・いい ハハハ」
「ゴールデンレトリバーは忘れてくんねえかな」
「は・・・い・・・グフッ フッ」
忘れてねえじゃん 全然忘れてねえじゃん 笑ってんじゃん
「それじゃ・・・グフッ」
まだ笑ってんじゃん
「シャワー浴びてください」
「おう、浴びっけど」
「すごく焼肉の匂いがします」
「マジ？」
「はい、あなたとおとうさん、焼肉食べたって知らなくてもすぐわかかるくらい」
「マジ？ そんな？」
「はい」
「え、そんなじゃさ、俺ととうちゃんが乗ってた電車ん中のさ」
「おそらくまわりの人たちはみんな、焼肉食べたんだなってわかったと思う」
「愛里は？」
「私は電車の中にいませんでしたけど」
「じゃなくてさ、俺、焼き肉臭せえのに抱きしめちまって」
「楽しかったんだなって思いました」
「え？ あ、そっか、うん楽しかった」
「私もおかあさんと一緒に買い物してお寿司食べてチョー楽しかった」
「かあちゃんもすげえ嬉しそうだったもんな」
「あなたのおかあさんを一人占めしちゃった」
「してくれよ」
俺は 愛里のこと抱きしめて
愛里も俺の背中に腕まわして
「おとなりのおばさまが」
俺の腕ん中で
「ゴーちゃんが寝転がってるところに顔をうずめるとホッとするって」
ゴウちゃん？ あ、ゴールデンレトリバーか
「どういうカンジなのかなあって思ってたけど」
愛里が顔あげて
「こういうカンジなのかなあって」
「こういうカンジ？」
「それじゃ」
愛里が身体離して
「またあとで」
「あ、おう、そんなじゃまたあとで」
ドアが閉まって 速攻で鍵が閉まった

こういうカンジ・・・ え？ ゴールデンレトリバーに顔うずめてホッとするって
こういうカンジって ハァアアアア？
俺はゴールデンレトリバーじゃねえよ 愛里
まあ なんつうか いっか
帰ろう 速攻シャワー浴びねえと
Tシャツの胸んとこつかんで匂い嗅いで
だな 焼肉の匂い そんなでも 微かに愛里のいい香りも
こんなとこでTシャツの匂い嗅いでねえで 帰ろう

がんばって

シャワー浴びた

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『シャワー浴びたよ w』送信

ピコン

『私も浴びました』

俺の焼肉の匂いが移ったからだな

『ごめんな 俺の焼肉の匂いが移ったんだよな』送信

ピコン

『そうじゃなくて w ただの日課です w』

そっか よかった

『愛里』送信

俺は 愛里に聞いて欲しい あの話

『聞いてほしいことがあんだけど』送信

ピコン

『はい』

『ちょっと重たい話にもなんだけど』送信

『いいかな?』送信

ピコン

『あなたが私に話したいと思ってくれてるなら』

ピコン

『聞きたいです』

愛里

『ありがとう』送信

どっから・・・ かあちゃんのことか

『これはねえちゃん経由で聞いたんだけど』送信

ピコン

『あなたのお姉さんの話ですか?』

『じゃなくて』送信

『かあちゃんはそういうのは俺にはしねえでねえちゃんにすっから』送信

ピコン

『そういうの？』

なんつうか

『過去の真面目な話とかさ』送信

ピコン

『はい』

『愛里には言ったことなかったけど』送信

『そういうの言わねえ方がいいんかなって思ってたけど』送信

『どうしても聞いて欲しいから』送信

ピコン

『言ってください』

ピコン

『私は誰にも言わないし 言う相手もいませんから』

愛里のことは信じてるよ そういうんじゃないでさ

『かあちゃんが若い頃独身のとき』送信

『つき合ってる人がいて』送信

ピコン

『おとうさんとは別の人ですか？』

『別の人』送信

ピコン

『はい』

『それで 妊娠して』送信

愛里 ドン引きして欲しくねえんだけど

『その人とは結婚できなくて 不倫じゃねえよ w』送信

ピコン

『w つけなくていいです 聞いてます 大丈夫だから』

そっか ありがとう愛里

『墮してくれって言われて』送信

『中絶同意書が必要で その父親の欄には』送信

『その人は事情があって名前書けねえって言われて』送信

『かあちゃん困って』送信

『浮浪者だったとうちゃんに名前書いてもらった』送信

ピコン

『質問してもいいですか？』

『いいよ』送信

ピコン

『おかあさんは 浮浪者だったおとうさんと お友だちだったってこと？』

お友だちって ハハ

『側溝に落とした指輪拾ってもらったんだってさ』送信

ピコン

『それだけ？』

『それだけw』送信

ピコン

『わかりました 続けてください』

愛里がメッチャ真剣に聞いてくれてるのが伝わって・・・

『そんで中絶したんだけど』送信

『俺はかあちゃんのことどう思ってるのか知らねえんだけど』送信

『とうちゃんは少年院にいたとき習ってたから』送信

『中絶がどんだけ女の人にとって危険かとか』送信

『そういうの知ってたから』送信

『それでもそのときは』送信

『浮浪者の自分に頼むほど かあちゃん困ってんだなって』送信

『父親の名前書く欄に名前書いて』送信

『もしなんかあったら』送信

『俺のせいなんだって』送信

『あのクズのせいだって思えば気も楽だろって』送信

書いちゃったけど

『愛里 こんな話大丈夫か?』送信

ピコン

『大丈夫 私のことは心配しないで 聞いているから』

そっか ありがとう

『とうちゃんはずっと』送信

『かあちゃんを辛い目に遭わせたのは自分だって』送信

『かあちゃんの中の赤ちゃん殺したのは自分だって』送信

『そう思ってた』送信

『自分が名前書いたからって』送信

『そんで今日ヤッさんの奥さんが話してくれたことがあって』送信

『奥さんの田舎では』送信

『流れた子どもはまた戻ってくるって』送信

ピコン

『質問いいですか?』

『いいよ』送信

『流れた子どもって?』

『流産したり事情があって堕した子どもだってさ』送信

あれ? 既読ついてっけど返信がねえ

『愛里? どした?』送信

ピコン

『続けて』

そっか

『その子はおんなしお母さんここに帰ってきて生まれるんだって』送信

ピコン

『同じお母さんのところ？』
『同じお母さんのところに戻ってきて生まれるんだって』送信
『それ聞いて 俺は』送信
『俺は戻ってきたんじゃねえかなって』送信
『とうちゃんの本当の息子になりたくて』送信
『戻ってきて生まれたんじゃねえかなって』送信
『なんかマジでそう思ってさ』送信
『そんだけの話なんだけどさ w』送信
『くだらねえかもしんねえけど』送信
『俺はマジでそう信じてる』送信
ピコン
『それじゃ』
ピコン
『私は』
愛里？
ピコン
『ママは何回も流産したって』
あっ 俺 メッチャ
『愛里ごめん 俺なんも考えねえで ごめん』送信
ピコン
『それは全部』
ピコン
『私なのかな』
え？
ピコン
『私が何回も』
愛里 それは
『愛里 マジごめん そういうつもりじゃなかった』送信
『俺が』愛里のお母さんのこと考えもしねえで んな
愛里に謝りてえ 直接 文字じゃなくて
『愛里 電話していい？』送信
既読ついたけど 返信がねえ
『愛里 電話させてください』送信
『お願いします』送信
『電話するから』送信
電話して・・・も 取らねえ
一回切って そんで また電話して あ 出た
え？ 電話の中から聞こえてくのは 愛里の泣き声で
「愛里、愛里、ごめんな、ごめん」
「そう・・・じゃ・・・」

「愛里、俺が悪りいんだよ、愛里泣かせちまって、ごめんな」
「ちが・・・う・・・そうじゃなくて・・・」
「愛里、俺、行くから今行くからさ」
「え・・・でも・・・」
「行くから、入らせてくれよ、鍵開けていっか？」
「は・・・い」
愛里が電話切った
俺は鍵持って 愛里の部屋に エレベーター一階か 階段だ
駆け下りて ドア開けて
愛里は？
「愛里！」
ベッドルームのドアが開いた
「愛里」
愛里が泣きながら出てきて
「愛里、ごめん、マジごめん」
俺は抱きしめて
「ごめんな、ごめん」
「ちがうの・・・ そうじゃ・・・ないの」
「ん？ そんな、どうして？」
「ママが・・・ 何回も流産したって聞いてから」
「愛里、ごめんな、俺」
「ちがうの、聞いて」
「あ、うん、聞く、ごめん」
「たまに、たまにだけど、その子たちが生まれてたら、私は生まれてないかもとか」
え・・・
「でも、あなたの話を聞いて・・・ だったら、ママが流産したのは全部私で」
愛里にあの話・・・したから
「私は・・・ 何回も何回も、ママの子どもに生まれたくて戻ってきて」
え？
「やっと生まれてこれたのかなって」
愛里が涙で濡れた顔で俺を見て
「あれは、全部私で・・・ 私、がんばったなって」
「愛里・・・」
俺も 涙が・・・
「私、けっこう粘り強いんだなって」
愛里が泣きながら笑顔になって
「なんか・・・ すっごくがんばって生まれてきたんだなって、思えて」
「愛里は・・・ メッチャがんばったな」
「はい」
「愛里も、愛里のお母さんも・・・ すげえよ」

「ママも？」
「ママもだよ、二人ともメッチャがんばってさ、愛里生んでくれてさ」
愛里が俺の胸に顔つけて
「あり・・・がとう」
「それはママに言わねえとさ」
「ママに？」
「二人でがんばったよなっつってさ、ママもがんばってくれてありがとうってさ」
愛里が泣きながらコクンて
「愛里、よく・・・がんばって、生まれてくれたな」
俺は マジでそう思ってたよ
「ありがとな、愛里」
「あなたも・・・がんばりましたね」
え？
「おとうさんの本当の息子になりましたね」
愛里は・・・顔見られねえように 愛里のこと抱きしめて
「よかったですね」
「お・・・う」
「私たち、戻ってきたんですね」
「おう、戻ってきたな」
「生まれましたね」
「生まれたな」
「おめでとう」
愛里は 可愛いなあ
「愛里もおめでとう」
愛里がフフッと笑った やっと笑った
「ママに・・・言ってもいいですか？」
「ん？」
「あなたがしてくれた話」
「言ってあげてくれよ、そんで、二人で頑張っつってさ」
「あなたは？」
「俺？ 俺はどうちゃんに話した」
「おかあさんには？」
「かあちゃんには・・・俺が知らねえと思ってっから」
「そうですか」
言ったらぜってえ笑われて終わりだよ
「来てくれてありがとう」
来るに決まってるじゃん だって俺はさ
「ワンッ」
「なにそれえ ハハハハ」
「ご主人様が泣いてたら飛んでくるんだよ」

「ご主人様って ハハハハ」
飛んでくるよ いつでもさ
メッチャ大切だからさ
「それじゃ・・・ ハウス！」
「あ？ なに？」
「あなたの家に帰って寝てください」
「今ハウスつつたよな」
「あなたがワンッて言うから」
「クウウン」
「犬の真似してもダメです」
「おいしいっす」
「ハハハハ その顔、マジでゴールデンレトリバーみたい」
いいよ そんでも なんでも
「そんじゃ、ハウスするよ」
「はい、あの・・・ ありがとう」
「ワンッ」
「もういいから！」
「おいっす」
俺は 嬉しいよ 愛里
愛里が ヤッさんの奥さんの話信じてくれてさ
そんで、がんばって生まれたつつってくれてさ
「愛里」
「顔舐めないで」
「舐めたんじゃねえじゃん、これはだから」
「おやすみなさい」
「おう、おやすみ」
ドアが閉まって 鍵止まって 俺は マジでクウウン状態っすよ
ハウスしよう

辛子マヨネーズ

朝 顔洗って

キッチン覗くと とうちゃんはいない

ベランダか

「とうちゃん、おはよう」

「ダイチ、おはよう」

「手伝うよ」

とうちゃんは天気がいい日は洗濯物をベランダで干す

乾燥機も浴室乾燥もあんだけど つい外に干しちゃうらしい

俺が生まれるずっとずっと前、雨んときに、かあちゃんが帰ってきたら、

カーテンレールのところに紐張ってタオル干してて

基本家事に関してはどうでもいいかあちゃんが、

「乾燥機使いなさい！」つたって、前にとうちゃんが笑って言った

そういうときは使ってっけど

「電気代もったいねえからよ、ついな」って

タオルはバサッバサッって何回も振って干す

そうやるとゴワゴワになんねえからって

布団も布団乾燥機があんだけど、天気がいいとベランダに干してる

「ダイチ、こっちはもういいからよ」

「うん、そんじゃ俺、愛里んとこやってくる」

俺は乾燥機と浴室乾燥と布団乾燥機使うけどさ

ドアホン鳴らすと ドアが開いて

「おはようございます」

「愛里、おはよう」

「ゆうべ、あのあと、ママと話したんです」

「え？ あ、戻ってくるって話？」

「はい」

「そっか」

「ママ、泣いちゃって」

泣くよ そりゃ泣くよ 愛里のお母さんはずっと辛れえ思いしてたんだからさ

「でも、その泣き方がすごくて」

「すごく・・・て？」

「なんかもうギャーンギャンみたいなの」

そんだけ嬉しかったんだろな

「しかも、ちょっと携帯を離すとかしてくれればいいのに」

ん？

「多分にぎりしめてギャーンギャン泣くから耳がおかしくなりそうで」

愛里の話し方がメッチャおもしろくて そんでも笑っちゃいけねえ

愛里のお母さんはそんだけ

「私、どうしてこのママのところに何回も入ったのかなって」

「へ？」

「なんか自分の感覚がわからないっていうか、どういう心境だったのかなって」

「愛里、それは・・・ママがかわいそうだよ」

「わかってます、一瞬だけ、ちょっと思っただけ」

そういうこと思うのが愛里で愛里らしくてさ

そんで 愛里はあの話を本当に信じてくれてさ

「俺さ、掃除機かけて、あ、ベッドルーム入っていい？」

「聞かなくていいです、お願いします」

「そっか、そんでベランダ掃除して風呂掃除して」

「あの」

「ん？ なに？ どっかやってほしいところある？」

「いえ、そうじゃなくて、私、おかあさんとお話したいので」

かあちゃんど？

「行っててもいいですか？」

「全然いいよ、俺も終わったら行くからさ」

「行くって ハハハ」

「え？」

「あなたの家なのに」

「あ、そっか、うん」

「それじゃ、行ってきます」

「おう、行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃいって ハハハ」

「行ってきますつつうからさ」

「はい、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

愛里が部屋から出ていった

クウクウウ たまんねえ

行ってきますって、そんで俺がいたら じゃねえよ 掃除だよ

愛里の部屋の掃除終わって 俺ん家戻って

「ただいま」

ベランダと風呂掃除でメッチャ汗かいたからシャワー浴びねえと

「ダイチ、おかえり」

「とうちゃん、ただいま、愛里は？」

「美里の部屋で二人でずっとしゃべってる」

「美里の部屋って、とうちゃんの部屋でもあんだろ」

「え、あ、まあ、うん」

照れてるよ　なんで照れんだよ

とうちゃんにとって、ベッドルームはかあちゃんの部屋つつう認識なんだよな

「俺、シャワー浴びてくっから」

「そっか、昼メシ、アイリちゃんもこっちで食うってよ」

「そんじゃシャワー終わったら作るよ」

「そっか？　俺が作っとくか？」

「愛里のは俺が作る」

「そっか、そんじゃ俺は美里の作っからよ」

「おう」

愛里はかあちゃんとメッチャ仲良くなってんな

ベッドルームで二人でおしゃべりってさ

ねえちゃんと秘密の話すときはやってたけどさ

俺はぜってえ入れてもらえねえんだよな

俺は入れてもらえねえのに愛里は入れるって

かあちゃん、メッチャ愛里のこと気に入ってんじゃん

え？　そんじゃ俺は？

まあいいや　シャワーだ

シャワー終わって

愛里が選んでくれた例のゴールデンレトリバーのTシャツ着て

ジーパンみてえなズボン履いて　このズボン、メッチャ楽だな

伸びるしさ　これならとうちゃんも楽だな

キッチンに行ったら

「ダイチ、耳は切っといたからよ」

「とうちゃん、こんだけ耳あんならさ、揚げてさ」

「砂糖まぶして食うか」

「食おうよ、愛里にも食わせてえしさ」

「そんじゃそうすっか」

パンの耳揚げたのは、とうちゃんにとっては、かあちゃんの味なんだよな

卵サンドとハムサンドできた

「とうちゃん、俺持ってくよ」
「そんじゃ、俺は耳揚げっからよ」
「うん」
俺は、とうちゃんが耳揚げたやつだけでもいいくれえだよ
んっと、こっちがかあちゃんてこっちが愛里で
とうちゃんと俺の分と おっし
「とうちゃん、手伝うよ」
「ダイチ」
とうちゃんが目えキラッキラさせて
「揚がってきてっぞ」
俺が小せえ頃もこんな目えしてそう言ってたよなあ
「メッチャいい色になってきてんじゃん」
やっぱとうちゃんはなんでもうめえな
「これ、揚がったからよ」
とうちゃんに砂糖入れたバット差し出して
「ここに入れていいよ」
とうちゃんがいい色に上がった耳を置いた
「食ってみろ」
「うん、アチッ」
「気をつけろよ」
「うええ」
「そっか」
「とうちゃんも食ってよ」
「そんじゃ、アチッ」
「とうちゃんも気をつけろよ」
「だな、美味えな」
「美味えよな」
「何を食べてるの？」
かあちゃん
「あらこれ、久しぶりね」
「とうちゃんが揚げた」
「ひとつもらってもいい？」
「サンドイッチあるからさ」
「揚げたてを食べたいのよ、愛里さーん」
「はい」
愛里も来た
「私の小さい頃のおやつ、食べてみる？」
「食べたい！」
「どうぞ」
かあちゃんが作ったみてえにバット愛里の前にさ いいけどさ

「美味しい！」

だろ？

「これは、なんか、ヤバイやつですね」

ヤバイ？

「ひとつ食べると、つい次、次って食べちゃいそう」

そういうことか 可愛いなあ

「そうなのよ、止まらなくなっちゃうの」

「ですよ」

「あら、ダイチ」

「あ？ なに？」

「似合ってるわよ」

あ、これか

「ゴールデンレトリバー」

「へ？」

んっと 愛里 かあちゃんには言ってねえよな 俺がゴールデンレトリバーに

あ、目えそらした 言ったんか？ 顔ベロベロ舐めるとか？

顔ベロベロ舐めてはねえだろ？

「いただきます」「いただきます」

かあちゃんはハムサンドから、愛里は卵サンドから

「美味しい」

愛里のために心こめて作りました

「けど・・・」

けど？

「あれ？」

あれ？

「やだなに？ マスタード？」

え？ かあちゃん、マスタードは愛里の あーーーっ！

「ごめん、逆に置いちゃった」

「まったくあんたは」

「ごめん」

「逆ってなんですか？」

「私は、ハムサンドは辛子マヨネーズなの」

「からしマヨネーズ？」

「和辛子を入れたマヨネーズ」

「え、辛くないですか？」

「ピリッとして私は好きなの」

「え、それじゃ、こっちは・・・」

「カズオが作った私のサンドイッチ」

「ああ！ だから、卵サンドが、美味しいけどいつもとちょっと違うなって」
愛里は 俺ととうちゃんの味の違いを卵サンドでわかったんか
「お皿、交換しましょう」
「はい」
「かあちゃん、愛里、マジごめん」
「あんたはいつもおっちょこちょいなのよ」
いっつもってわけじゃねえじゃん
「これだ！ と思うとバーッと走っちゃって」
ハ？ 何の話だ？
「それで転んで、ひざ擦りむいて」
俺は・・・何を叱られてんだ？
「とうちゃ〜んて泣いてカズオのところに戻ってきて」
「そりゃ、ひざ擦りむいたら、とうちゃんどこに戻んだろ」
「ずっとそうだったとはね」
だからなんの話だよ？
「ああ、これ！ カズオのサンドイッチ」
そうっすよ
「よく戻ってきてくれました」
ハムサンドに語りかけてっけどさ
「やだ！ これ、辛い！」
へ？
「すごい辛い、やだ涙出てきちゃった」
そんなに？ とうちゃんのこと見たら とうちゃんもビックリした顔して
「やっだあ、マスカラ取れちゃう」
ガタンて立ち上がって ベッドルームに入っちゃった
「とうちゃん、そんな辛子入れてねえよな？」
え？ とうちゃんも立ち上がってベッドルームに走ってった
そんで ドアが閉まった
な？ ん？ だ？
愛里を見たら 愛里もビックリした顔してベッドルームの方見てて
そんで その顔のまま 俺を見た
俺は なにが起きたんかわかんねえから 首ひねって見せた
愛里が かあちゃんのサンドイッチの皿を見て
そんで かあちゃんが口つけたハムサンドをそっとつまんで
俺に差し出した
「ん？ なに？」
くちびるに指あててシーッて そんで、メッチャ小せえ声で
「食べてみてください」
「へ？」
「私はいつものがわからないから」

「あ、おう」

ん？ え？

「いつもどおり、かあちゃん好み」

「それじゃ、なんで？」

「わっかんねえ」

「あ！」

「なにどした？」

愛里がベッドルームの方を見て

「ここだと、ずーっと小さい声でしか話せない」

「え、んと、そんじゃ、俺の部屋？」

「あ、はい」

愛里と俺の部屋に入ってドア閉めた

かあちゃんの嘘

愛里がドアに耳あてて

「もっと奥で」

つって、窓際に移動して

「おかあさん、マスカラ取れちゃうって」

「辛くて涙出たからじゃね？」

「おかあさん、メイクしてなかったですよね」

「ハ？」

「メイクしてないのにマスカラ取れちゃうって」

「してたんじゃないの？」

「スッピンだったでしょ」

「そうだっけ？」

「そうだっけって」

「かあちゃんがメイクしてるかしてねえかなんてどうでもいいっつうか」

「どうでもいい？」

「かあちゃんのかあちゃんじゃん」

「女にとってメイクは、なんつていうか、勝負服みたいな」

「勝負服？」

「時間かけてメイクしても気がついてもらえないなんて」

「や、んと、愛里がメイクしたら速攻気がつくよ」

「私はメイクしませんけど」

「愛里はメイクなんかしねえでいいよ」

「そのうちするかも」

「え、いつ？」

「わかんないけど、社会人になったらとか」

「メイクなんかすんなよ」

「今は私のメイクの話じゃなくて」

「あ、うん」

「なんでそんなウソをついたんでしょう」

「わっかんねえ」

「あのとき・・・ あなたがおっちょこちょいで」

「いつもじゃねえよ、今日はさ」

愛里が手で、黙ってみてえに俺のこと止めて

「こうだと思ったらバーッと・・・」

愛里がなんか考えてて

「辛いって言う前に・・・よく戻ってきてくれました」

ハムサンドに言ってたよ

「あ！」

「どした？」

「あれは・・・あなたじゃないんですか？」

「ハムサンドが俺？」

「じゃなくて・・・」

愛里が両手で口押さえて 俺のこと見て

「どした？ なに？」

愛里がメッチャ困った顔して

「あの・・・」

「なに？」

愛里がくちびる嚙んで またメッチャ困った顔してて

「どした？」

「私、おかあさんに、まあ、ママからの伝言もあったんですけど」

「伝言？」

「今度ニューヨークにいらっしゃるときは一緒にお食事でもって」

「愛里のお母さんもかあちゃんに愛里のこといろいろ聞いてえんだろうな」

「それはどうでもよくて」

「どうでもいいなんつったら、ママかわいそうだろ」

「ママのことは今どうでもいいの！」

「あ・・・ はい」

「私・・・ あの・・・ 怒らないって」

「約束する、ぜってえ怒んねえ、なに？」

「おかあさんに、ゆうべのあなたとのLINEを見せたんです」

「かあちゃんに？ 俺との？ かあちゃんに見せたの？」

「怒らないって言ったじゃない」

「や、怒ってねえよ、マジ怒ってねえから」

「スクショです、その部分をスクショしたのを見せただけです」

「えっと・・・ なんで？」

「あなたはおかあさんには言わないって」

「え？ ん？」

「でも、私もママもそれで」

「愛里、なんの話？」

「これです」

愛里が画像ファイルを開いて

「ここを見せたんです」

『かあちゃんが若い頃独身のとき』

『つき合ってる人がいて』
これか、かあちゃん俺は知らねえと思ってたんだよな
「ここも」

『とうちゃんは少年院にいたとき習ってたから』
『中絶がどんだけ女の人にとって危険かとか』
『そういうの知ってたから』
『それでもそのときは』
『浮浪者の自分に頼むほど かあちゃん困ってんだなって』
『父親の名前書く欄に名前書いて』
『もしなんかあったら』
『俺のせいなんだって』
『あのクズのせいだって思えば気も楽だろって』

ここは、俺がとうちゃんから聞いたことで
おそらく、とうちゃんはかあちゃんには言ってなくて

『とうちゃんはずっと』
『かあちゃんを辛い目に遭わせたのは自分だって』
『かあちゃんの中の赤ちゃん殺したのは自分だって』
『そう思ってた』
『自分が名前書いたからって』

こんなん 息子が知ってて自分は知らねえと思ったら・・・

「そして、ここもです」

『そんで今日ヤッさんの奥さんが話してくれたことがあって』
『奥さんの田舎では』
『流れた子どもはまた戻ってくるって』
『流れた子どもって？』
『流産したり事情があって堕した子どもだってさ』
『その子はおんなしお母さんここに帰ってきて生まれるんだって』
『それ聞いて 俺は』
『俺は戻ってきたんじゃねえかなって』
『とうちゃんの本当の息子になりたくて』
『戻ってきて生まれたんじゃねえかなって』
『なんかマジでそう思ってさ』
『そんだけの話なんだけどさ w』
『くだらねえかもしんねえけど』
『俺はマジでそう信じてる』

「おかあさんは、これを、黙って読んで」

かあちゃんは どう思ったのかな 俺がこんなこと信じてるって

「私が、それでママに電話してこういう話をしたって言ったら」

バカみてえだと思ったのかな

「お母様もしあわせねって」

「そっか」
「愛里さんにそう思ってもらったらしあわせよって」
「そっか」
「そのときは、あれ？ って思っただけですけど」
あれ？ なにが？
「おかしくないですか？ おかしいですよね」
「え？ どこ？ なに？」
「あなたは、おとうさんとおかあさんのことしか書いてないのに、
おかあさんは、私とママのことだけ言って、あなたのことは一言も」
「どうでもいいとかくだらねえと思ったんじゃないね」
「どうでもいいなら、そのスクショ送ってって言わないと思う」
「へ？ かあちゃんに送ったんか？」
「はい、見せちゃったから送ってもいいかなって」
「愛里いい」
「どうでもいいと思ってたら、スクショ送ってなんて言わないでしょ」
「わかんねえけどさ」
「だからハムサンドに、よく戻ってきましたなんですよ」
ハムサンドがよくわかんねえんだけど
「おかあさん・・・」
俺の顔見て
「泣いたんじゃないですか？」
「かあちゃんが？ なんで？」
「おとうさんの気持ちとか、あなたが戻ってきたって思ってるとか」
「かあちゃんはさ、泣けねえんだよ、全米が泣いたっつう映画でも泣かなくてさ」
「それは私も同じですけど」
「あ、んと、たまにジワッとくれえでさ、ねえちゃんが言うには、
泣くときは、とうちゃんの腕ん中でっきゃ・・・」
え？
とうちゃんが かあちゃんのあと追って ベッドルームに・・・
「愛里」
「はい」
「泣いてっかもしんねえ」
「ですよね」
「とうちゃん、かあちゃんが泣きてえときって反射的に」
「やっぱり、そうですよね」
「俺が悪りいんかな」
「どうしてですか？」
「かあちゃんが黙ってたこと俺が知ってて、そんで怒ったんじゃないかね」
「そんなことであなたのおかあさん泣きますか？」
「泣かねえ・・・か」

「あなたのおかあさんて、怒ったときは理論的に相手にガンガンンッて」
「それ、マジそれ、メッチャそれ」
「なんか、こう、溢れちゃって」
「溢れた？　なにが？」
「なんかいろんな思いが、だから辛くて涙が出ちゃったとか言って」
「あれは、泣いたっつうこと？」
「それしかないですよ」
「それで、とうちゃんが」
「ですね」
「えええええ、俺、どんな顔してかあちゃんに」
あれ？　なんか　玄関のドアの音
「もしかして、おかあさんとおとうさん？」
「俺、ちょっと見てくる」
そーっとドア開けて　ベッドルーム
「あ、ベッドルームのドア開いてる」
「二人でどこかに行ったんでしょうか」
とうちゃんのギョサンがねえな
「どこ行ったんかな」
「デート？」
「デートォオ？　今？」
「私に聞かれても」
「あ、そっか、ごめん」
ダイニングテーブルの上のサンドイッチはあのまんまで
愛里が、かあちゃんのサンドイッチの皿見てて
「おかあさんのハムサンド、食べてみてもいいですか？」
「いいよ、どうせ食わねえんじゃね？」
「それじゃ」
愛里が一口食べて
「こっ　これは　コホッ」
「愛里、大丈夫か？」
「私、辛子がチョー苦手で　コホッゴホッ」
「なんで食おうと思ったんだよ？」
「どんな味なのかなってゴホッケホッ　辛っら〜い」
「んっど、あ、持ってくっから」
キッチンからパンの耳の揚げたの持ってきて
「愛里、これ」
「え？　お水とかじゃないの？」
「炭水化物はカブ、いいから食べ」
「え、はい」
愛里がポリポリ

「あれ？ ちょっと楽になったかも」
「そっか」
「なんでこれ？」
「牛乳が手っ取り早えんだけどさ、愛里は牛乳飲まねえじゃん」
「そうですけど」
「炭水化物はカプサイシンを取り除いて、砂糖は辛さを和らげる効果があんだよ」
「なんか、よくわからないけど、楽になりました」
「そっか、大丈夫か？」
「はい、もう大丈夫」
目えシバシバさせて 可愛いな
「あなたに食べてもらって正解でした、私だったら辛いで終わっちゃってた」
「そっか、だよな」
「あのおとうさんがおかあさんの口に合わないものを作るはずがないから」
「だから俺もおかしいなと思ってさ」
「おかあさんて・・・ ウソがヘタですね」
「へ？」
「私でもおかしいって思っちゃうんだから」
ウソがクソヘタな愛里に言われるって かあちゃん
「なんで笑ってるの？」
「や、マジでヘタだなと思ってさ」
「ですよ、可愛いですね」
可愛いのは愛里だよ
「サンドイッチ食べましょう」
「おう」
愛里と二人だけでメシ食うなんて久しぶりだな
ピコン
愛里の携帯？
「おかあさんからです」
かあちゃんから？
「あ、やっぱり、フフ」
「え、なに？ どした？」
「ほら」
携帯見せて
写真 かあちゃんととうちゃん ここは・・・
「これって、この近くのカフェですよ」
「うん、かあちゃんととうちゃんの思い出の場所っつうか」
ピコン
「フフ」
「なに？ どした？」
「おかあさんから、デート中って」

「デート中？」

んなさあ、心配させといてさあ

愛里がなんか打ってる

「愛里、なんて送ったの？」

「言わない」

「え、なんで？ おしえてくれよお」

ピコン

「フフ」

「愛里いい、俺にもさあ」

「ほら」

「ありがとうございます」

んっと？

愛里が・・・ “So sweet!”

アイスクリームとかけてんのか、さっすが愛里はすげえな

そんで、かあちゃんが・・・ “I needed it!”

必要だった・・・か そっか まあいいけどさ

「おかあさんは辛くて涙が出て、辛かったからアイスを食べに行った」

「え？」

「そういうことですね」

「そういうこと？」

「ごちそうさま」

「え？ あ、おう」

んなさあ 泣きてえなら泣けばいいじゃん

辛れえだのなんなのって ヘッタなウソついてさ

かあちゃんウソつけねえじゃん

言いてえこと言えねえとウワーッてストレス溜まるじゃん

「あの、ノート見せてもらってもいいですか？」

「いいよ、どれ？」

「課題の」

「そんじゃ、ここ片付けたら、愛里の部屋で勉強すっか」

「あなたが片付けてる間に私のノートとか持ってきます」

「そっか」

「あれ、どっちがいいんだろう」

どっち？

「おとうさんとおかあさんが帰ってきたとき、私はここにいない方がいいのかな」

「逆に不自然じゃね？ かあちゃん泣いたの知ってっからいなくなったみてえなさ」

「そうですよね、それじゃ持ってきます」

かあちゃん、泣くならそのまんま泣いてくれよ

愛里まで気い使ってんじゃん

進路の話

愛里は俺のノート見ながらやってて
俺はその先をやってる 課題はもう終わってっから
課題以外の実力テストの範囲とその先の予習
盆休みが終わったら、また現場だからさ、現場出てっときも勉強してっけど
やれるときにでっきるだけやっときてえからさ
愛里も俺がいねえときにノート見て勉強できるし
そんだけじゃなくてさ、将来のためにも・・・ 将来・・・
俺は どっかの会社でデスクワークとかやれんのかな
全然想像できねえ ムリじゃね？
少なくともかあちゃんみてえに仕事してたら愛里のことでできねえよ
俺は 今 現場の仕事がメッチャ楽しくて 肌に合ってるっつか
それでも、給料的にはかあちゃんみてえには稼げねえだろうし
ユンボ動かせたりクレーンやれたら
「ノートありがとうございます」
「あ、おう、どっかわかんねえとこねえ？」
「あなたのノートでわかりました」
「そっか」
「モリシタダイチのノートを見て勉強できるなんて」
なんでそこはフルネームなんかな？ たまにフルネームになるよな？
「去年の夏休みは友だちと勉強したんですけど」
去年の夏休みは俺は単発のバイトしながら愛里のことと思ってたんすけど
「三人ともレベルがほぼ同じだから、わかんないで終わっちゃって」
「レベル？」
「成績が庶民レベル」
「庶民レベルってなに？」
「うちの高校、成績上位 50 名まで張り出すじゃないですか」
「ああ、うん」
「あれには永遠に載らないレベル」
俺は科目別の英語のトップ 10 の「上原愛里」の名前見ただけでときめいてた
「それで結局わかんないままカフェに行ったり雑貨買ったりして」
夏休みは愛里のこと見れねえから辛かったっすよ
「夏休み明けの実力テストがひどくて、ママが焦っちゃって」

「どんくれえだったの？」
「言わない、絶対に言わない」
「愛里が何点でも何位でも、俺は全然気になんねえからさ」
「そうですよね、あなたには関係ないですよね」
「そういう意味じゃねえよ」
「でも私は・・・ 入れる大学あるのかな」
「愛里は推薦狙ってんの？」
「ムリです、入学したときからそれは考えてません」
「なんで？」
「うちの高校で推薦もらえるのは、トップ 50 に入ってる人だけです」
「そうなんか」
「あなたはどこでのでももらえますよね」
「それでもあれってさ、行きてえ学部がねえとき」
「行きたい・・・学部？」
「ねえちゃんは医学部だったから推薦なくて受験した」
「国立の・・・ あそこですよ」
あそこって おもしれえな
「うん、あそこ」
「あなたはどこの大学に行くか決まったんですか？」
「まだ」
大学行くかどうかも 揺らいでて
「ゆうべ、ママが」
愛里のママ、俺がついてるんで心配しねえで大丈夫っすよ
「アメリカの大学にしたら？ って」
「えっ」
「日本の大学よりは入りやすいわよって」
え、ちょ
「愛里は、アメリカの大学に、行きてえの？」
「行きたいとか行きたくないとかじゃなくて」
「ぜってえ行かなきゃなんねえのかよ？」
「私は条件付きですから」
「条件？ どんな？ どんな条件？」
「たとえばもし、私が入れそうな大学が北海道にあるとして」
「ほっ北海道？」
「たとえばです」
んな 北海道ってさ
「その大学に寮がなければムリ」
「寮？ なんで？」
「私は自分のことできないから」
「あ・・・ そういう・・・ 条件・・・か」

「そのまま附属の高校に入ってたら」
え、附属？
「愛里、附属の中学だったんか？」
「小・中、ママの母校で、中学のときの成績は、まあ、あそこではトップクラスで」
だよな 愛里は頭いいもんな
「附属の高校の内部進学も内定してて」
えっ？
「でも、パパが、高校はパパの母校に行っておいてほしいって」
愛里のお父さん、感謝しますメッチャ感謝します
「でも、よかったのかどうなのかなあって」
「え、なんで？」
「そのまま附属の高校に行ったら、内部推薦で附属の大学に入れて」
え・・・
「附属じゃなくても、あそこはけっこういい大学の推薦もあって」
「愛里は・・・」
んな・・・さ
「今の高校入ったの、後悔してんの？」
「後悔はしてないけど・・・先が見えなくて」
「俺もまだどの大学に入りてえかわかんねえしさ」
愛里が俺のことジッと見て
「愛里、俺たちまだ高二だから、今決めなくても大丈夫だよ」
「あなたはね」
え・・・ 愛里が怒ったみてえな顔になってる
「愛里、どした？」
「ママがこう言ったんです、どうしようもない大学に入るくらいなら」
どうしようもねえ大学？
「アメリカの大学に入った方が社会に出たときに、就職するにしても何にしても」
愛里の呼吸が荒くなってきて
「だったら、なんで受験させたの？ あのまま附属の高校に入ってたら」
俺には言ってねえな
「どうしようもない大学じゃない大学に入れたのに」
愛里が怒った顔のまま俺のこと見て
「ママは私がどうしようもない大学にしか入れないって思ってて、
そうだけど、だからってアメリカの大学って、なんかすごい勝手に、
私が今の高校に合格したときは私より大泣きして喜んだくせに、
私の成績が悪いのは私のせい？ 私のせいだけど、分不相応な高校に入れって」
分不相応？ 愛里、ちげえだろ、それはちげえよ
「ごめんなさい、私・・・ ちょっと」
愛里が立ち上がって
「部屋に帰ります」

俺も立ちあがって愛里の前に

「愛里、ちょっと、ちょっと待って」

「今、ちょっと、ダメ」

「愛里」

「なんか全部、私の全部、パパとママが決めて」

愛里の目を見ようとしても下向いてっから

「でも、イヤだって言っても、それじゃどうしたいっていうのもなくて」

「愛里、あのさ、ちょっと聞いてくんねえかな」

愛里が黙って

「大学はさ、名前じゃねえんだよ」

「あなたはどこの大学でも入れるからそういうことが言えるんでしょ」

「じゃねえよ、そういうんじゃねえよ」

愛里が 俺の顔見上げて そんでまた下向いた

「すげえ有名大学でも、自分が学んでえこと学べなかったらさ」

「私は何を学びたいのかもわからないから」

「うん、それはまだいいんだよ、んっとさ」

なんて言えば わかってもらえっかな あ！

「愛里が行った花の教室、ふたつ行ったじゃん」

「行きましたけど」

「最初のはあれだろ？ 有名だけどつまんなかったんだろ？」

「そうですけど」

「二回目の先生は？ あの先生は有名なんか？」

「あの派では新進気鋭って注目されてるけど・・・ 一般的には知られてないです」

「それだよ」

「どれ？」

「有名だからって愛里に合うとは限らねえじゃん」

「そう・・・ですけど」

「俺のねえちゃんもはさ、たしかにあの国立に行ったけど、

どうしてもあの先生のところで学んでえつつう先生がいて、

そんでアメリカ行ってんだよ」

「それは・・・あなたのお姉さんは私とはレベルが」

「レベルとか関係ねえ、そういうことじゃねえよ、中身が合うかどうかだよ」

「中身？」

「たとえばさ」

俺は 愛里の肩をそっとつかんで ソファに座らせて

「愛里は英語得意じゃん」

「そうですけど」

「メッチャ有名大学に入ったとして、そこの英語の教授がつまんなかったらさ、

四年間ずーっとつまなくてさ、なんも頭に入ってこねえじゃん」

愛里が戸惑ったような顔で俺を見てっけど

「大学は、んな有名じゃねえけど、そこの教授がメチャおもしれえ教材使ったり、
メッチャ斬新な解釈する人だったらさ、楽しいじゃん」
「楽しい・・・？」
「そういうとこ見っけよう、な、俺も探すからさ」
「あなた・・・も？」
「愛里が楽しいっつって通えるような大学」
「なんで・・・あな・・・たが」
愛里が涙 俺は反射的に抱きしめて
「俺は、愛里に楽しいっつうことして欲しいから」
「え・・・」
「愛里には楽しいことしてて欲しい」
俺の胸に顔つけて泣き出して
「そういう大学見つけんのもさ、楽しいじゃん」
「そんな・・・大学・・・あるのかな」
「なかったら、大学行かなきゃいいじゃん」
「え？ ムリ、私は大学出っという肩書でもないと就職もできないし」
「んな肩書で取るような会社に入って楽しいか？」
「楽しいとか楽しくないとかじゃ、入れるか入れないかで」
「かあちゃんはさ、言ってみりゃ、どうでもいいような短大」
「え？」
「愛里が聞いても名前わかんねえような短大出た人を抜擢した」
「それは・・・あなたのおかあさんだから」
「そういう上司がいるようなとこに入れていいじゃん」
「入ればって、入れてくれるかどうか」
「愛里の花の先生はさ、愛里にバイトしてくんねえかって頼んだんだよな」
「それは・・・バイトだから」
「愛里の良さを見抜いたからだろ、それで愛里も楽しかったんだろ？」
「楽しかったけど」
「自分が楽しいって思えなきゃさ、どんな有名な大学も会社も意味ねえよ」
「そんなこと・・・言ってもらえないっというか」
「愛里」
愛里の目を 覗き込んで
「愛里」
わかってほしくて
「やってみなきゃわかんねえだろ」
「え？」
「花の教室のバイトだって、やってみなきゃわかんなかっただろ？」
「そう・・・ですけど」
「とりあえず、やってみよう」
「なに・・・を？」

「愛里が、この教授の授業受けてえって思えるような大学、探そう」
「見つかる・・・のかな」
「やってみなきゃわかんねえだろ」
「でも・・・ どうやって」
「まずは、目の前の実力テスト、がんばろう」
「あ・・・ そうですね」
「目の前のことちゃんとやってけばさ、ちょっとずつ見えてくっからさ」
「はい」
「でもさ・・・ 俺の頼み、聞いてくんねえかな」
「あなたの・・・ 頼み？ なんですか？」
「アメリカ行かねえでくれよ」
「え・・・」
「そばにいてくれよ、俺がぜってえなんとかすっからさ」
愛里の目から ポロポロって涙がこぼれて
「アメリカなんか・・・ 行きたくない」
俺は 愛里を抱きしめて
「行くなよ」
「なんか・・・ 前にもこんな会話しましたよね」
「した、夏休み前、アメリカ行くって聞いて、俺、知恵熱出した」
「そうでしたね」
「今度は知恵熱じゃすまねえよ」
「え？」
「心臓爆発する」
「爆発って」
「バーンて、愛里の目の前で爆発して粉々になっちまう」
「粉々にならないでください」
「そんじゃアメリカ行くな」
「行きません」
「そっか」
「あれ？」
「どした？」
「考えてみれば、あのときも今も、ママですよ」
「え、あ、まあ」
「いっつもママが突然言い出して、それで私いっつも」
愛里が顔あげて
「私、なんであのママのところは何度も入ろうと思ったんだろう」
涙で濡れた目で真剣に考えてっから可愛くて
「どういう心境だったのか自分でもわからない」
俺は愛里をギュウッて いちおう加減してっけど
「まあ今さら言ってもな話ですけど」

「俺は愛里のお母さん好きだよ」
「え？ 本当に？ あのママを？」
「うん、あのお母さんだから愛里が生まれてきたんだなって」
「あのお母さんて？」
「ん・・・ ちょっと天然っつうか」
「ちょっとじゃないです、メッチャ天然なの、イヤになるくらい天然なの」
「フワツとした柔らかい空気です」
「まあフワフワはしてますね」
「きっと俺が愛里に頼んだんかしんねえ」
「あなたが？ いつ？」
「ぜってえ会いてえから、なんとか生まれてくださいっつって」
「え、なにそれ？」
「そんで、あのお母さんどこになんとかお願いしますっつってさ」
「え、笑う」
愛里が笑ってる
正直 俺は アメリカの大学って聞いたとき
心臓爆発しそうになった
なんかアメリカ恐怖症になりそうだな
「ただいま！」
あ かあちゃんととうちゃん 帰ってきた
「おかえりなさい」「おかえり」
かあちゃん 俺は 今 かあちゃんの涙どころの騒ぎじゃなかったんだよ
「アイスクリーム美味しかったですか？」
「カズオがご馳走してくれたの」
えっ？ とうちゃんが？
「愛里さんのお花の先生のところで稼いだからって」
とうちゃん、かっけえな 泣いたかあちゃんにアイス奢るってさ
「ほら」
かあちゃんが 俺と愛里の前で手え広げてっけど
「なに？」
「抱っこ」
「抱っこおおお？」
愛里のこと見たら 愛里がニッコニコして 俺に目で
「や、かあちゃん、高二にもなって抱っこってさ」
「いいじゃない、たまには」
「え・・・」
愛里のこと見たら 目だけ動かして 行け？ マジ？ 行くの？ うんうん？
「え、そんじゃ」
立ち上がって、かあちゃんところに
「愛里さん、抱っこ」

ハ

「え、私ですか？」

「愛里さんのおかげだから」

愛里がちょっとすまなそうな顔で 俺を 見ないでくれ

メッチャ恥ずかしい状況だろこれはさ

「あの、それじゃ」

愛里がかあちゃんどこ行って

俺は・・・

「んっと、便所行きてえな」

あたかも便所行くために立ち上がった的に言ってみたけど

かあちゃん、ぜってえ俺のことおちよくったよな

なんだよ、あのわかりづれえ まあ いっか

マジでシッコしたかったから いっか

光合成

便所から出てきたら

「愛里は？」

「ちょっと休みたいって部屋に戻ったわよ」

そっか

俺は なんか なんとなく

「かあちゃん、アメリカの大学ってさ、どうなんかな」

「ヒトミに聞けば？」

「や、一般的にさ」

「あんた、アメリカに行きたい大学があるの？」

「俺じゃなくて、愛里の」

「愛里さん、アメリカの大学に行きたいの？」

「愛里のお母さんが、アメリカの大学に行ったらどうかだったんだって」

「ああ、そうなの」

「こっちのどうしようもねえ大学入るくれえなら、アメリカの大学の方が将来的に？」

「そうね、一理あるわね」

え

「アメリカの大学を卒業したら就職に有利なことは確かね、特に外資系」

就職に有利

「英語もバイリンガルのレベルで、あっちでネイティブとやり合ってきたから、

話の構築の仕方が理論的で自主性もある、積極性もあるわね、受け身じゃないの」

いいこと・・・ばっかで そんなでも

「愛里は行きたくねえつつてる」

「突然言われたからじゃない？ メリットを知っていけばどうかしらね」

メリット・・・

「俺は行って欲しくねえよ」

「なぜ？」

なぜ？ んな決まってんじゃん

「あんたが愛里さんにそばにいて欲しいから？」

いて欲しいよ

「あんたに愛里さんの人生を決める権利はないわよ」

人生決めるとか そういうことじゃ

「アメリカの大学に行ったら、愛里さんの可能性が開花するかもしれないわよ」

可能性・・・ 愛里の可能性・・・

「その芽を摘んでまでそばにいて欲しいっていうのは、あんたのエゴよね」

「エゴ？ そんなでも愛里も行きたくねえつつってさ」

「選択肢が広がるんだから、愛里さんにとってもいいことでしょ」

「かあちゃんは・・・ 愛里がアメリカの大学に行った方がいいと思ってんの？」

「私は何も思っていないわよ」

「何も？ 何も思っていないってどういうことだよ？」

「愛里さんのことは愛里さんが決めることでしょ」

「そうだけどさ、そうだけど」

「あんたはどうなの？」

「だから、俺は愛里には」

「愛里さんのことじゃなくて、あんたは行きたい大学はあるの？」

「まだ決めてねえ」

「もし愛里さんが、アメリカと一緒に来て欲しいって言ったら？」

「え？」

「アメリカの大学に行く？」

それは・・・

「考えたことねえよ」

「愛里さんに言われたら考える？」

「そんなでも、俺までアメリカの大学行ったら、メッチャ金かかるじゃん」

「教育は親が残してあげられる唯一の財産、聞いたことあるわよね」

「あるけど」

「あんたが真剣にここで学びたいっていう大学がアメリカにあるとしたら？」

「んな、んなこと言ったらさ、アメリカじゃなくてヨーロッパとか中国とか、全然ちげえ国にあるかもしれねえじゃん、キリねえよ」

「私が聞いているのは、愛里さんがあんたにもアメリカに来て欲しいって言って、あんたが行きたい大学がアメリカにあるとしたらどうなのって話」

「俺は・・・ 将来どんな仕事してえとかもまだ決めてねえし、大学もどんなところに行きてえとかも、まだなんも」

「あんたが何も決めてないのに、愛里さんの進路には口出すの？」

言い返す言葉が 一個も見つかんねえ

「あんたが真剣に愛里さんのことを思ってるのなら」

「思ってるよ、それはぜってえに」

「聞きなさい、愛里さんがしあわせになることを願ってあげるべきでしょ」

「そんじゃかあちゃんは愛里がアメリカの大学行ったらしあわせだと思ってんの？」

かあちゃんが 俺の顔見て 鼻で大きく息を吐いた

「私は、愛里さんがここで学びたいっていう大学を見つけたら、応援するわよ」

「応援って、なんだよその他人行儀なさ」

「他人だもの」

「ハ？ 愛里のこと娘みてえに可愛いって」

「本当の娘ではないもの」
「なん・・だよ、それ」
「愛里さんのお母様にとって、愛里さんは大切な一人娘」
「そんなんわかってるよ」
「だから心配して、いろいろ考えてらっしゃるのよ」
「それは・・ そうだけどさ」
「私たちが口出しすることじゃないわね」
けど 俺は そうかもしんねえけど 俺は
「あんた、光合成を英語でなんていうか知ってる？」
「ハ？ 光合成？ なんで今光合成なんだよ」
「知ってる？」
「フォトシンセシス」
「スペルは？」
「P・H・O・T・O・S・Y・N・T・H・E・S・I・S」
「へえ、知ってるのね」
「光合成がなんなんだよ？」
「聞いてみただけ」
「かあちゃん、話そらさねえでくれよ」
「光合成を英語で説明せよ」
「なんのことだよ？」
「言えないの？」
「え、んったく、Conversion of light energy into chemical energy by plants」
「よく知ってるわね」
「ねえちゃんが留学の勉強してるとき、関係ねえのに覚えさせられた」
「それじゃ、愛里さんが留学するときにあんたが教えてあげられるじゃない」
「ハ？」
「私も少し休むわ」
立ち上がってベッドルームに入っちゃった
なんだよ 俺のことからかっておもしろがって なんだよ
それでも・・ かあちゃんの言うことも たしかにそうで
それでも 俺は・・
「ダイチ」
とうちゃん
「買い出し行かねえか」
「晩メシはヤッさんとスギさんの奥さんたちからもらってのじゃねえの？」
「それがよ、アイス屋から帰ってくる时候によ、昔パートで一緒だった人がよ、
今日スーパーでお盆特別セールやってて、激安だつてよ」
「そう・・なんか」
「それでも4時までの時間限定だつうからよ」
「そっか、そんじゃ、行くか」

なんか 俺の胃袋が中途半端に浮いてて 落ち着かなくて なんか

とうちゃんとスーパーに行って

「ダイチ、そうめんメッチャ安くなってんぞ」

とうちゃんが嬉しそうに売り場まわってる後ついて歩いて

「肉が半額の半額だってよ」

「そっか」

「これ買っというて冷凍しとけばよ」

「だな」

いつもなら とうちゃんと一緒になって安いの見つけて一緒に喜んで

「ダイチ、イチゴも 1000 円のが 600 円だってよ」

「だな」

なんか 正直 マジで吐きそうな気分で

パンパンのスーパーの袋ぶら下げて

いつもなら こんな安く買えたっつって とうちゃんと喜んでなのに 俺は

「ダイチ、野っ原行かねえか」

「野っ原？」

とうちゃん 俺 今 そういう

「ダイチに見せてえもんがあんだよ」

俺に見せてえもの？

「あ、おう」

野っ原に着いて

とうちゃんは奥の方に入ってって 俺もついてって 見せてえものってなんだ？

「ホントはよ、やっちゃいけねえんだけどよ」

「え、なに？」

とうちゃんが指さしたのは 青々と茂ってる葉っぱの あれ？ この葉っぱ・・・

「とうちゃん、これって・・・ サツマイモ？」

とうちゃんがイタズラした子どもみてえな顔でコクンて

「なんでここにサツマイモあんの？」

「春だったけかなあ、八百屋に芽が出てんのがあってもらってきてよ」

「植えたんか？」

「一本だけな」

「それがこんなになったんか」

「放っぼっといたのによ、こんななってよ」

「すげえな」

「愛里ちゃんの花の先生んところに最初に行った日だったかな、

どうなってっかなあって見に来たら、こんななっててよ」

「とうちゃんがこんなところに植えてんの知らなかったよ」
「ほんとはいけねえしな、どうなっかわかんなかったからよ」
「そっか」
「すげえなあ、なんもしねえで放っぼっとしたのによ」
「サツマイモは、あんま肥料とかやんねえ方がいいらしい」
「そっか、お日様だけでなあ、すげえなあ」
光合成・・・か
「10月くれえには芋掘りできっかもしんねえな」
「芋掘り？」
「幼稚園ときやったろ」
「やった、俺すげえ張り切って引っ張って尻餅ついて泣いてさ」
「だったなあ」
「そんで、とうちゃんが一緒に掘ってくれてさ」
「今度はアイリちゃんと芋掘りすりゃいんじゃねえか？」
「え？」
「アイリちゃん喜ぶんじゃねえか？」
「そんでもこれはとうちゃんが植えたやつじゃん」
「そんなん、ただ土ん中にこそっと入れといただけだよ」
「三人でやろうよ」
「三人でやるほどはねえけどよ」
「芋掘りつつたらとうちゃんいねえとさ」
「そっか？」
「そうだよ」
とうちゃんがさつまいもの葉っぱそっと撫でて
「ダイチ、ごめんな」
「え？ なにが？」
「俺に稼ぎがねえからよ」
「ハ？ え？ なに？」
「俺に稼ぎがあったら、ダイチもアメリカ行けんのによ」
とうちゃん・・・ かあちゃんとの話 聞いてたんだ
「とうちゃん、俺はアメリカ行きてえと思ってねえよ」
「そんでも、アイリちゃんのそばにいてえだろ」
「それは・・・ そうだけど」
「アイリちゃんがアメリカ行ったら、ダイチも行ければいいな」
「や・・・それは」
「俺に稼ぎがあったら、ダイチもアイリちゃんのそばにいれんのかな」
「とうちゃんに・・・ 稼ぎがあったら、俺をアメリカに行かせんの？」
「そりゃ・・・ ダイチはアイリちゃんのそばにいてえんだからよ」
んなこと とうちゃんは、んなこと考えてて
「とうちゃん・・・ 俺は愛里のそばにいてえけど、そんでも」

まだ大学も仕事もなんも決めてねえけど　それでも
「俺は」
ひとつだけハッキリわかってることがある
「とうちゃんのそばにもいてえんだよ」
「え・・・」
「だから、俺はアメリカの大学には行きたくねえんだよ」
「それでも、アイリちゃんがアメリカ行ったら・・・」
「もし、愛里が、アメリカの大学に行きてえって、アメリカ行ったら」
そうだよ　俺の愛里への思いは　そんなことでさ
「俺、金稼いで会いに行く、卒業するまで何度も会いに行く」
とうちゃんが　わけわかんねえって顔して俺を見てっけど
「とうちゃん、俺はとうちゃんのそばにいてえんだよ、とうちゃんから・・・」
ヤベ　涙出てきちまって
「教わりてえこと、まだまだいっぺえあんだよ」
「俺がダイチに教えることなんて、なんも」
「俺は、とうちゃんのそばにいねえと俺じゃねえんだよ」
とうちゃん　俺
「言っただろ？　とうちゃんの息子になりたくて戻ってきたって」
とうちゃんが　顔を向こうっ側に向けた
「だから、とうちゃんのそばにいねえと意味ねえんだよ」
俺　今　わかった　自分がどうしてえのか　少なくとも　ひとつだけ
「俺、ぜってえあきらめねえ、愛里がアメリカの大学行っても、
　　アメリカで就職しても、俺は愛里のこと連れて帰ってくっから」
「そっか」
「それでも、俺、きっと、泣きそうになることもあって」
俺・・・　弱えからさ
「そんなときは・・・　とうちゃんの胸で泣かせてくれよ」
もう泣いてっけど
「ダイチ」
とうちゃんが俺のこと抱きしめてくれて
「とうちゃんの胸で泣いたら、俺・・・　またがんばれっからさ」
「そっか」
「がんばっからさ」
「そっか」
「だから・・・　だから・・・」
もうなんつっていいか　わかんなくて
「芋掘りは、とうちゃんと愛里と俺と三人でやんだよ」
「そっか、三人でやっか」
「そうだよ・・・　とうちゃんいねえと・・・　意味ねえよ」
「そんじゃ」

とうちゃんの声も 少しかすれてて
「ダイチとアイリちゃんと、俺と、三人で芋掘りすっか」
「三人がいいよ」
「そっか」
「俺・・・」
わかったよ かあちゃんの言ったこと
俺は駄々っ子みてえに自分のことっきゃ考えてなくて
愛里のこと好きなのに 好きだから
もっと愛里のために考えなきゃいけねえんだって
そんで 俺は やっぱ とうちゃんのそばにいたくて
それはぜってえで そんで こっちでちゃんと仕事して
愛里が安心してなんも不安になんねえように稼いでさ
「俺はとうちゃんの息子だからさ、浮浪者の息子だからさ」
とうちゃんが情けねえ顔で笑って見てる
「なにやったって生きてけんだよ、残飯漁ったってさ」
「えっダイチ、残飯漁んのはよ」
「残飯は漁らねえけどさ、どんなことしてもさ、なにやってもさ、
愛里のこと、ぜってえ離さねえし、愛里がしあわせになることなら、
俺はどんなに離れてたってやらせてあげてえしさ」
「そうだな」
「そんで、俺は、愛里と一緒に帰ってきてえって思えるような」
俺が目指すべきは
「そういう男になる」
「ダイチなら大丈夫だよ」
「そっかな」
「ダイチならぜってえ大丈夫だよ」
「そんじゃ、とうちゃん、俺のこと助けてくれよな」
「俺はたいしたことできねえけどよ」
「幼稚園の芋掘りんときみてえにさ」
「そんくれえなら、できっかな」
「頼むよ、俺が尻餅ついて泣いたらさ」
「だな、そんくれえならな」
「頼むよ、とうちゃん、マジ・・・」
「わかった、とうちゃんダイチのそばにいつからよ」
「いてくれよ、ぜってえいてくれよ」
「いつからよ」
とうちゃんが俺の背中さすって
「ダイチは、なんつうか、このサツマイモみてえだな」
「へ？ サツマイモ？」
「なんもしねえでも、お日様だけでこんなにリッパになってよ」

「そんじゃ、俺のお日様はどうちゃんだよ」
「俺は、んな」
「どうちゃんからエネルギーもらって育ってんだよ」
「それは・・・かあちゃんじゃねえか？」
「かあちゃんは、なんつうか、んっと、あ、この土だよ」
「つ・・・ち？」
「どうちゃん、こそっと種イモ入れといたんだろ」
「夕、タネ、や、んっと・・・」
「どうちゃんが入れた種イモ、かあちゃん中で、どうちゃんお日様で、
　　そんで、俺ができたんじゃん」
「かあちゃんが土つつうのはよ」
「大地じゃん、地球じゃん、スケールハンパねえよ」
「あ、そっか、だな、美里は、だなあ」
「種イモだけじゃさ、サツマイモ育たねえもん」
どうちゃん笑ってる
「そんでも、土だけでも育たねえよ、お日様ねえとさ」
「そっか・・・」
「だから、俺は、どうちゃんとかあちゃんいねえと俺にならなくて、
　　そんで、俺は、もっともっとリッパなサツマイモになっからさ」
「そっか、ダイチはサツマイモになんのか」
「サツマイモみてえな、どんなとこでもやってける男になる」
「そっか、だな」
「おう」
「そんじゃ、帰っか」
「おう」
俺は　腹が決まった
愛里がしあわせになんなら　愛里がどこに行ってもいい
俺はぜってえあきらめねえし　愛里がそばにいてえって思ってくれるような
どうちゃんみてえな男目指してっから
あのかあちゃんがそばにいてえって思う男なんだからさ

本音は

家に戻って

とうちゃんと肉を小分けにして冷凍して

「とうちゃん、そうめん、秋までもう買わなくていいな」

「俺はそうめん安いといっぺえ買っちまうからよ」

「いろいろ使えっからさ」

「だな」

「とうちゃん、1000円のイチゴが600円ってさ」

「行ってよかったな」

「うん」

なんかすげえ気持ちが軽くなってて

そんで、俺もひとつ道が見えたつつうか

愛里に話さねえと

アメリカ行くななんて言ったこと 謝んねえと

俺が愛里の選択肢狭めてどうすんだよ

『愛里』送信

『寝てたらごめん』送信

既読ついた

ピコン

『起きてます』

そっか

ピコン

『ていうかバスの中 w』

バス？

『どっか出かけてたんか？』送信

ピコン

『はい、ちょっと買い物』

そっか

『バス停まで迎えに行く』送信

ピコン

『大丈夫です』

ピコン

『もうすぐ着くし』

『迎えに行く』送信

「どうちゃん、俺、愛里のこと迎えに行ってくる」

「おう」

玄関出て バス停に向かって走った

走ってったら ちょうどバスが着いて

愛里が下りてきて

「過保護」

「じゃねえよ、愛里に話してえことがあんだよ」

「なんですか？」

「んっと、野っ原行こう」

愛里と手をつないで歩いた

野っ原に着いた

「話って、なんですか？」

「愛里、俺がガキだった、ごめん」

「え、なにが？」

「アメリカ行くなっつって」

「でも、それは、私も行きたくないですから」

「アメリカにさ、もしアメリカに愛里にすげえ合う大学があったらさ」

「え？」

「通ってても楽しくてさ、いろんなこと楽しく勉強できてさ」

「どういう・・・こと？」

「もしアメリカに愛里にピッタリの大学があったとして、

それなのに俺が、行くななんつったらさ、俺は愛里の・・・」

なんつったらいいんか 浮かんだのは・・・

「愛里の・・・ しあわせになれる可能性をつぶすことになる」

「そんなの・・・」

「愛里、選択肢は多いほどいいだろ」

「選択肢・・・」

「アメリカでもこっちの大学でもさ、愛里にピッタリで、

愛里が楽しく過ごせて愛里の可能性が広がるところがあるならさ」

愛里は 黙って俺の顔見てる

「俺は、愛里にしあわせでいて欲しい、楽しくいて欲しい」

「なんで？」

「なんでって？」

「そんな急に、突然、アメリカの大学とか」

「アメリカの大学に行けっつってんじゃないでさ、

それでも行くなっつうのは・・・ かあちゃんに言われたんだよ」
「おかあさん？」
「愛里にそばにいて欲しくてアメリカ行くなっつうのは、俺のエゴだって」
「エゴ・・・」
「一言も返せなかった、返せねえよ、そのとおりだから」
「私のそばにいたいって言うことが・・・ エゴなんですか？」
「じゃねえよ、そばにいてえからって愛里の可能性潰すことがエゴなんだよ」
「すごく・・・ きれいなこと言ってるみたいなカンジだけど」
え？
「つまりこういうことですか、私のそばにいるのは高校卒業までで」
「ちげえよ」
「だって、私がもしアメリカの大学に行ったら離れ離れですよ」
「物理的にはそうだけどさ」
「心だって離れますよね、そんな遠距離」
「離れねえよ」
「今はそんなこと言っても」
「俺は、んなハンパな気持ちじゃねえから」
「だったら・・・ あのと看、ママと一緒にアメリカに行けばよかった」
「え、あんど看って？」
「ママと一緒にアメリカに行ってアメリカの高校に行ってアメリカの大学に行って」
「愛里、俺はんなこと言ってるじゃねえよ」
「あのと看あなたは、行くなって言ってくれたじゃない！」
愛里の目から涙が・・・
「俺がいるだろって、なのに、今度はアメリカの大学って、なにそれ？」
「愛里、アメリカの大学に行けっつうことじゃねえよ」
「あなたなんか好きにならなきゃよかった！」
愛里が駆け出して
「愛里！」
俺は愛里のことつかまえて そんで思い切り抱きしめて
「あっ・・・くっ・・・」
腕を放したら 愛里はハアハア息してて
「苦しい！」
「俺がやろうとしたのは、それだよ」
「え？」
「愛里が息できねえようにしちまうとこだったんだよ」
愛里が大きな目で俺のこと見てて
「愛里言ってくれたろ？ 俺は愛里の空気だって」
愛里の目からポロポロ涙こぼれて
「俺の腕の中では楽に呼吸できるってさ」
愛里は涙流しながら 下向いて

「それなのに俺はガキみてえにさ、そばにいてくんなきゃやだっつってさ、
ギュウッて愛里が息できねえようにしちまうってさ、そういうことじゃねえよな」
俺は かがんで 愛里に目え合わせてもらえるように
「俺がやんなきゃいけねえことは、俺が本当にやりてえことはさ」
「やりたい・・・こと？」
「愛里がどこにいても、俺の、愛里の空気の中に入れること」
「どこに・・・いても？」
「愛里が好きなどこで好きなことしてさ、楽しいっつってさ、
そっか楽しかったか、そっか、よかったなって、そんで・・・」
愛里のこと そっと抱きしめて
「そんじゃ帰ろっかって」
「帰る？」
「俺は、愛里が帰る場所になりてえ」
「え・・・」
「そういう男になって、ずっと愛里と一緒にいられる男になりてえ」
愛里が 俺の胸に顔つけて 泣いて
「やっぱここがいっちゃん楽に呼吸できんなあって、そういう場所になりてえ」
愛里が俺の T シャツ ギュウッてつかんで
「だからさ・・・ 愛里がどこにいても」
俺は 必死に涙こらえてて
「本音は？」
「え、本音？」
「あなたの・・・ 本当の気持ちは？ 行って欲しいの？」
愛里・・・ やめてくれ・・・ 俺もう・・・
「行って・・・ 欲しいわけねえじゃん」
泣いちまって
「それでも・・・さ、それでも、愛里には好きなどこで、好きなことして欲しいって」
それは・・・
「それは、ほんとにそう思ってたさ」
「私がいないと淋しい？」
愛里・・・ たのむから・・・
「淋しいに・・・ 決まって・・・ 淋しいよ」
「そう言ってよ」
「え・・・」
「行って欲しくないし・・・ すごく淋しいって」
「それでもさ」
「あなたがそう思ってくれてるって、そしたら私・・・ がんばれるから」
「え？」
「アメリカの大学に行っても、あなたは今も淋しいって思ってくれてるって、
私のそばにいたいって思ってくれてるって・・・ そしたら・・・ 私・・・」

愛里が顔をあげて

「淋しいのに我慢して待ってくれてるあなたがいるから・・・ がんばろうって」

「愛・・・里・・・」

ヤッベエ 俺の方が泣いちゃってて

「待っててくれますか？」

「待てるのか・・・んな・・・軽い気持ちじゃねえよ」

俺は・・・

「愛里がどこにいても、俺は愛里のこときゃ考えらんねえよ、愛里でいっぱいだよ」

「私が、もし、今来て欲しいって言ったら？」

「行く」

「あなただって大学・・・か、仕事かあるのに？」

「俺が大学行くとしたら、愛里と俺の、ずっとずっと先のためで、

仕事してるとしたら、やっぱ愛里と俺の、ずっとずっと先のためでさ」

「ずっと・・・先」

「愛里が俺に来て欲しいっつうときは、マジで俺のこと必要としてるときでさ」

「え・・・」

愛里の目からまた涙があふれて 俺はそれをTシャツで拭きながら

「だから、ぜってえ行く、13時間くれえかかっけど、ぜってえ行く」

「あなたが着いたときには、もう大丈夫になったって言ったら？」

「よかったあつつつてさ、ヤッタ愛里に会えたつつつてさ、そんでまた戻っから」

「本当に？」

「マジ」

「私が、もし、あなたのこと、冷めちゃったら？」

「あきらめねえ」

「私か冷めても？」

「また好きになってくれるまであきらめねえ、ぜってえあきらめねえ」

「え、本気で？」

「ビンタされてもあきらめねえ」

「今・・・ビンタの話、出す？」

「あんときも、ちっと落ち込んだけど、そんでもぜってえあきらめねえ」

「そう・・・でしたね」

「俺は、高校入って愛里見つけたときから、ずっと愛里だから」

「あ・・・はい」

「愛里が俺のことなんか1ミクロンも知らねえときから愛里だから」

「はい、あの、もし・・・ 私が、えっと、たとえば、不慮の事故とかで」

「んなこと言うなよ！」

「でも、そういうことも」

「え・・・ そしたら坊主になる」

「丸刈りにするってこと？」

「ちげえよ、仏門に入って修行僧になって一生暮らす」

「え・・・ なんか・・・ 怖い」
「だったら事故なんかに遭うなよ」
「え、あ、はい」
「だからさ、愛里は俺から離れらんねえんだよ」
「え、それって少女マ・・・」
「ちげえよ、俺はメッチャしつけえつつうことだよ」
「あ、そうですか」
「それに」
愛里の左手にぎって
「予約したじゃん」
愛里が薬指の指輪見て
「予約されました」
「そういうことだよ」
「そうですか」
「おう」
「それじゃ・・・ 私は、アメリカの大学のことも考えてみます」
「そっか」
「はい、あの、でも、どうやって調べれば」
「まずは・・・ かあちゃんに聞いてみたらいいんじゃない？」
「あ、そうですね、そうします」
「そんじゃ、帰ろう」
「はい」
「帰ろう、俺んところ」
「はい」
あ、そうだ
「愛里、ちょっと、こっち」
愛里をとうちゃんのサツマイモんところに連れてって
「これ、とうちゃんが植えたサツマイモ」
「え、サツマイモ？　なんでここに？」
「とうちゃんが芽が出たサツマイモもらってきて、ここにこそっと植えたんだってさ」
「ちゃんと葉っぱが出てる、すごい」
「10月くれえになったら、愛里ととうちゃんと俺と三人で芋掘りしよう」
「三人で掘るにはちょっと少ない気が・・・」
「そんでもさ、三人でさ」
「そうですね、あ、でも虫が出てきたら私は逃げますから」
「あ、おう、愛里は見てるだけでいいから」
「そうですか、わかりました」
「とうちゃんが、俺はサツマイモみてえだなってさ」
「サツマイモ？　あ、そういえば・・・ 泥だらけ」
や、そういう意味じゃなくてさ

「お盆休みが終わったら、またサツマイモになるんですね」
「や、愛里、そういう意味じゃねえっつうか」
「サツマイモ大好き」
「あ、そ、そっか」
「スーパーとかで石焼きいも売ってるでしょ？」
「ああ、うん」
「つい買っちゃうの、甘くて美味しいですよ」
「石焼きはできねえけど、蒸してさ」
「わあ、楽しみ」
「そっか」
掘る方じゃなくて食う方か そっか、いいよ愛里が喜ぶならさ
「いっぱいできるといいですね」
「だな」
全部愛里に食わせてあげてえよ
「愛里、帰ろう」
「はい」
愛里と手をつないで マンションまで歩いた

アメリカの大学事情

とうちゃんと二人で晩メシのしたく
ヤッサさんとスギさんの奥さんたちにもらった肉
とうちゃんは牛肉に豆腐とネギと三つ葉入れて醤油で味整えてる
これ白飯にかけて食ったら美味えだろうな
俺は豚肉とキムチ炒めてる
「とうちゃん、キムチ、かあちゃんの好きな無添加の高けえやつ安かったな」
「だな、キムチも俺が作れりゃいいんだけどよ」
「それでもキムチそんなに食わねえじゃん、たまにじゃん」
「キムチの作り方は習わなかったもんな」
「どうせ作るなら、俺は・・・梅干漬けてえな、愛里が好きだからさ」
「梅はもう季節過ぎちまったから、来年やってみりゃいいんじゃないか？」
来年・・・梅干って漬けてすぐも食えるけど一年は置いた方がいいんだよな
「来年はイチゴも植えんだろ？」
「今年の10月くれえに種から・・・」
来年・・・イチゴ植えて　それで・・・愛里が食えるのは来年だけかな
しばらくは・・・最低4年は・・・
「愛里さんは？」
かあちゃん　ベッドルームから出てきたんか
「着替えてから来るってさ」
「そう」
あ、そうだ　かあちゃんに言っとくか
「かあちゃん、愛里にアメリカの大学のこと教えてあげてくんねえかな」
「アメリカの大学？」
「愛里が知りてえって」
「へえ」
なに？　なんで俺のことジーッと見るんだよ？
「わかったわ」
「うん」
俺は愛里のしあわせをいっちゃんに考えてっから

晩メシの時間

ヤッサんとスギさんの奥さん、愛里とかあちゃんが美味えつつってます

「愛里さん」

「はい」

「ダイチから聞いたんだけど、アメリカの大学のこと知りたいの？」

愛里がチラッと俺を見て

「はい、私、何もわからなくて」

「私は留学はしていないけど、うちの会社、特に海外事業部には、

アメリカの大学を卒業した人がけっこういるのよ」

「そうですか」

「その人たちからそれぞれが経験したことを聞くとおもしろいの」

「おもしろい？」

「アメリカの大学には、ほとんどの大学ね、寮があるのよ」

「寮が？」

愛里、よかったな 寮があるって必要だったもんな

「しかもひとつやふたつじゃないの、キャンパスが広いからあちこちに」

「そんなに？」

「学食があるから食事の心配もないの、朝昼晩と食べられるのよ」

「朝も？」

「ある大学ではね、朝に出来立てのドーナツが、しかもいろいろな種類出て」

「ドーナツが、学食で？」

「ヘタなドーナツ屋のより数倍も美味しいんですって」

愛里が目えキラキラさせて聞いている

「ただね、気をつけなきゃいけないのはね」

「はい」

「美味しいから食べ過ぎちゃうことだって ハハハ」

愛里も笑ってる

「授業もね、先生によっては、今日は天気がいいから外でやろうって」

「え、外？」

「キャンパス内の芝生の上であぐらかいて授業」

「なんか・・・ 授業じゃないみたい」

「そうね、逆にリラックスして聞けて頭に入ってたきんですって」

そんな授業なら俺も受けてえな

「それにね、どんな質問をしてもいいの」

「質問？」

「日本だと、ある程度理解してないと質問できない雰囲気でしょ？」

「ああ・・・ はい、そうですね」

「あっちは、どんなバカみたいな質問もしていいの」

「バカみたいな？」

「たとえば、a b cの次は何ですか？ みたいな」

「え？」

「先生はちゃんと答えてくれるんですって」

「でも、それじゃ・・・ 授業が進みませんか？」

「日本だとそう考えるけど、あっちはね、質問するということは、
授業に意欲的に参加していることだっけとらえてもらえるそうよ」

「それじゃ・・・ もし、先生の言ってる英語がわからないとき・・・」

「私の部下でね、留学したてで、最初の授業が終わったあとに先生のところに行って、
私は日本人です、英語よくわかりません、授業録音していいですかって」

「録音？」

「そうしたら先生が、毎回授業が終わったら、私の授業ノートを見せてあげるって」

「え？」

「本当に毎回授業ノートを見せてくれて写させてくれたんですって」

「すごい」

「先生のところに行って訴えるということは、理解したいという気持ちがある、
そういうとらえ方をしてくれて、いくらでも手を差し伸べてくれるんですって」

かあちゃんが話すアメリカの大学は・・・ メッチャ愛里にピッタリで

俺までワクワクするような、なんつうかキラキラしてて

愛里には、アメリカの大学が合ってるのかもしねえ

顔が穏やかになってさ かあちゃんの話子どもみてえに聞いててさ

かあちゃんと愛里はリビングでアメリカの大学の話をしてる・・・らしい

俺ととうちゃんは片付けてて

「ダイチ」

「なに？」

「ドーナツってよ」

「ドーナツが、どした？」

「昔な、仲間のにいちゃんが、ドーナツ屋の裏に捨ててあったっつって」

とうちゃんが泡ついたままの手で

「こんくれえの袋にいっぺえドーナツ入ってるの拾ってきてよ」

「食ったんか」

「食ったな、メッチャ美味えってみんなで食ってよ、メッチャ食ってよ」

とうちゃんが俺のこと見て

「そしたらよ、なんか知んねえけど、みんな笑ったり跳ねまわってよ」

シュガーハイか？

「俺、怖くなってよ」

「とうちゃんは大丈夫だったんか？」

「腹くだした」

「ドーナツ食って下痢したんかよ」

「あんまいっぺえ食うもんじゃねえなんだって思った」

とうちゃんの話はおもしれえな

「それでもよ、腹へってたからありがたかったなあ」

「下痢したら食ったの出ちまうじゃん」

「もったいねえよな」

「なんだよそれ ハハハ」

「あの」

愛里？

「どした？」

「私、部屋に戻ります」

「そんじゃ送ってく」

「あ、いいです、一人で」

「送ってく」

「そう・・・ですか」

なんか・・・ 愛里の顔が 固まってねえか？

エレベーター中でも廊下歩いてても 黙ったままで

なんつうか、話しかけづれえ空気メッチャ出してて

愛里の部屋の玄関

「愛里、かあちゃんの話聞いてアメ」

「ムリです」

「え？ なにが？」

「私はアメリカの大学は行きません」

「へ？ や、それでも」

あんなにキラッキラした目で話聞いてたじゃん

「光合成を英語でなんて言うか知ってますか？」

光合成？ なんでもた突然光合成？

「フォトシンセシス・・・だけど？」

「知ってるの？」

「ねえちゃんが勉強してたときに」

「だったらあなたがアメリカの大学に行けば？」

「愛里、どした？ 何があった？」

「光合成を英語でとかムリ、日本語の方が一億倍マシ」

「え？ 愛里、どした？」

「光合成がフォトなんとかって、光合成の光がない！」

どうしたんだ？？？

「光は？ ライトは？ フォトなんとかって写真かと思う」

「愛里、なんの話してんの？」

「私は・・・ ちょっと待っててください」

なんだ？ 愛里に何が起こった？

リビングから戻ってきて

「これ！」

んって？ 雑誌？ 全国大学案内号・・・ 全国学部・学科案内号

「これって？」

「私は、日本の、どうしようもなくない大学を目指します！」

「え？ なんで？ どした？ なに？」

「帰って」

「へ？」

「ちょっと・・・ 一人で落ち着きたいから」

「あ、そ、そっか、わかった、そんじゃ、あとで」

「はい」

ドア閉まって速攻で鍵閉まった

な ん だ ? ? ? ? ?

かあちゃんか？ かあちゃんだ なにがあった？

走って家戻って

「ダイチ、おかえり」

「どうちゃん、うん、ただいま、かあちゃんは？」

「リビングにいっけど」

リビングに行ったら ソファに座ってなんか読んでる

「かあちゃん、愛里に何言ったんだよ？」

「何って、アメリカの大学について話ただけよ」

「光合成ってなんだよ？」

「光合成は光合成でしょ」

「じゃねえよ、愛里が、光合成がなとんかっつって、ムリっつって」

「ああ！ あの話」

「どの話？」

「うちの社員の一人に理数系が苦手な子がいてね、中学高校はなんとかやり過ごして、

アメリカの大学に入って、大学って一般教養科目があるでしょ」

「あるけど」

「いろいろ選べるけど、一年のときは数学か生物を選択しなくちゃいけなくて、

数学は絶対無理だから生物を選択したんですって」

その人の話と愛里がなんかあんなカンジになったとどう関係あんだよ？

「英語で光合成について勉強しなきゃいけなくて、青くなったって、

日本から参考書送ってもらったけど、日本語でもザックリとしか憶えてなかったし、

英語のどれが日本語のどれになるのかもわからなくて」

そうかしんねえけど

「光合成が photosynthesis だっていうのがショックだったって、

つまりは、光合成という単語から憶えないといけないの？ って、

仕組みに入る以前にそこ？ って泣いたっていうのよ」

それを・・・ 愛里に言ったんか

「ノートは真っ白、先生が何を言ってるのかまったくわからない、

彼女、英語は得意なんだけどね、生物の専門用語は英訳では習わないものね」

「かあちゃん、愛里になんでんなこと言ったんだよ？」

「アメリカの大学について知りたいんでしょ？」

「それでも、んな話、せっかく愛里もアメリカの大学のことも考えてみるって」

「どこに行ってもいいことも悪いこともあるでしょ」

「そうだけどさ、んなショッパナにさ」

「アメリカの大学は夢の国じゃないもの」

「それは、どこだってそうだけどさ」

「そういうことも知っておいた方がいいでしょ」

「かあちゃんが何考えてんのかわかんねえよ」

「私は何も考えてないわよ、知ってる情報を話しただけ」

「それでもさ、具体的に探してもねえ段階でんな話されてさ」

「ああ、もうひとつ言ったわ」

「なに？」

「留学生は一学期で12単位取れないと即退学」

「んなことまで言ったんかよ」

「まあ次の学期で落とした授業を取り直す手はあるけどね、

負債はどんどん貯まっていくわよね、追試なんてないし」

「んなこと言ったら、愛里が怖がるに決まってるだろ」

「それでも留学したいって強い意志がないと続かないわよ」

なんだよ なんなんだよ 何考えてんのかわかんねえよ

「かあちゃんは、愛里にアメリカの大学に行ってほしいの行ってほしくねえの？」

「私は何も考えてないって言ったでしょ」

「それでも、俺には、愛里の可能性の芽をつぶすのはどうのつつってたじゃん」

「あんたが、愛里さんにそばにいて欲しいってだけで行くなっていうのは違うって」

「俺は愛里に、アメリカの大学に愛里に合うところがあったら考えた方がいいって、

俺はかあちゃんに言われて、たしかにそうだと思ったからそう言ったよ」

「だったらそれでいいじゃない」

「それでってなんだよ？」

「愛里さんは、お母様やあなたの言葉に振り回されて」

俺の・・・ 振り回されてた？

「愛里さん自身の意志が見えなかったんじゃない？」

愛里の意志・・・ 愛里は

「愛里は・・・ 全国大学なんかかつう雑誌買ってきてて」

「あら、そう」

「私は・・・ 日本の、どうしようもなくねえ大学目指すって」

「それが愛里さんの意志なのね」

「え？」

「愛里さんに必要だったのは、事実？ 現実？ を見ることに、
それを見て自分がどうしたいのか考えることが必要だったのよ」
かあちゃんは・・・それがわかって
「それが愛里さんの決めたことなら、私たちは応援するだけね」
「応援・・・ あ、うん」
「それで？ あんたはどうするの？」
「俺？ 俺はまだなんも決まってねえけど」
「まったく、愛里さんの方が、決めたらスパンと肝が据わるっていうか」
「ハ？」
「まあ就職しても大学進学してもどっちでもいいけどね」
「どっちでもいいってさ」
「あんたが決めることでしょ、あんたの人生なんだから」
「あ、うん」
「土木作業員になりたいならそれでもいいのよ」
「えっ？」
「ただね、バイトと生活背負って家族背負って働くのとでは全然違うわよ」
生活・・・家族・・・背負う
「お風呂に入ってくるわ」
「あ、おう」
なんか なんつうか なんつうんだ？
なんかかあちゃんの思うがままってカンジじゃね？
アメリカの大学行ったら愛里の可能性が開花するかもしねえとか
それを摘んでまでそばにいて欲しいっつうのは俺のエゴだとか
そうだけど そうだなんて気づいたけどさ
そんでメシ食ってるときは、あんなおとぎ話みてえなこと言ってさ
俺の知らねえとこでドンッとつき落としてさ
そんでも・・・ たしかにそれが現実で
それ知らねえで 愛里がもしアメリカの大学行ったら・・・
なんか クッソーー かあちゃんには敵わねえ
そんでも・・・
愛里は 日本の大学に どうでもよくねえ大学目指すって
あんなにハッキリ言った あんな雑誌まで買ってきてた
なんだよ 俺がいっちゃんメソメソしてフラフラしんでじゃん
なんだよ 梅干漬けたら 来年漬けたら 再来年食わせられんじゃん
イチゴ 来年からずっと 愛里に ずっと
やっば俺はさ やっば 愛里のそばにいてえよ
もしアメリカ行ってもって それは本気でそう思ってっけど そんでも
やっば 俺の人生の時間でっきるだけ 愛里のそばにいてえよ
本音はそれだよ 愛里
あ・・・れ？

かあちゃん・・

夕方に・・

愛里のお母さんがアメリカの大学の・・

あんとき・・ 俺に・・

光合成は英語でなんていうか知ってるかって

え？ あんとき エーーーーッ あんときから？

あんときから仕組んでたっつうこと？ 仕組んでたっつうのはあれだけどさ

怖え かあちゃん

二重三重にワナ仕掛けられてた気分だ

マジ怖え

んっと 勉強すっか

立ち返る場所

シャワー浴びて 部屋に戻って
え 愛里から LINE すげえいっぺえ送られてきてた
『さっきはごめんなさい』
しゃあねえよ、あんな話聞かされたらさ
『あなたのおかあさんに生物を英語でやらなきゃいけないって』
『光合成を英語でとか生物のテストを英語で受けるなんて』
『地獄でしかない』
そっか だからあんな顔してたんか
『今ママと話しました』
『英語で生物勉強するのはムリって言ったら』
『日本人だから免除してもらえないかしらって』
『できるわけないじゃん!』
メッチャおもしれえ
『ママはアメリカの大学のことなんて何も知りませんでした』
『知らないのにアメリカの大学に入ったら? とか』
『二度と言わないでって言うておきました』
『あなたのおかあさんに話を聞いて本当によかったです』
『ありがとう』
そっか 愛里はそう決めたんか
『それじゃ おやすみなさい』
寝たかな
『愛里』 送信
『おやすみ』 送信
あ、既読ついた
ピコン
『あなたが淋しいって言うから』
え?
ピコン
『私はアメリカに行きません』
愛里
ピコン
『ウソ w』

なんだよ ウソってさ 可愛すぎんだよ
ピコン
『英語で生物の授業受けるくらいなら』
ピコン
『日本の大学受験するのなんて』
ピコン
『どうってことないくらいに思えちゃって』
かあちゃんが、愛里はスパッと肝据えるつつってたけど
ピコン
『これからは』
ピコン
『英語で生物勉強することにくらべればって』
ピコン
『なんでもがんばれる気がする w』
そっか がんばるんか そっか
ピコン
『ありがとう』
ありがとうってさ
『俺はなんもしてねえよ』送信
『泣いてただけっすよ w』送信
ピコン
『泣いてましたね w』
『泣いてましたよ w』送信
ピコン
『私 男の人って泣かないんだと思ってて』
や だから それはさ
ピコン
『パパが泣いたのなんて見たことなくて』
ピコン
『でもあなたはすごく泣くから』
ピコン
『男の人もこんなに泣くんだって』
や、愛里
『俺の話はもういいから』送信
ピコン
『学食のドーナツは食べられないけど』
ピコン
『英語で生物やらなきゃいけないなら』
ピコン
『一生ドーナツ食べなくてもいい』

一生って ハハハ

『いつかねえちゃんの大学遊びに行って』送信

『ねえちゃんの大学の学食でドーナツ食おう』送信

ピコン

『ドーナツ食べるためだけに？ w』

『ドーナツ食べるためだけに w』送信

ピコン

『それくらいがいいです』

ピコン

『私にはそれくらいがいいです』

『そっか』送信

ピコン

『あなたのおかあさんからお姉さんのことも聞きました』

ねえちゃんのこと？

ピコン

『お姉さんも揺らいだり落ち込んで泣いて電話かけてきたことがあるって』

マジ？

ピコン

『それでも続けているのは』

ピコン

『この大学のこの教授から学びたいって強い意志があって』

ピコン

『それは揺らいだとき立ち返る場所だって』

立ち返る場所？

ピコン

『それがあれば辛いこともなんとか乗り切れるって』

ねえちゃんでもそういうことあったんか

ピコン

『私にはあなたのお姉さんのような立ち返る場所はアメリカにはないから』

ピコン

『それでも私には立ち返る場所がひとつだけあって』

愛里の立ち返る場所？

ピコン

『あなたは私の帰る場所だから』

え？

ピコン

『あなたがそう言ってくれたから』

愛里・・・俺・・・また・・・泣いちゃってんだけど

ピコン

『あなたのそばにいればがんばれる』

ヤッベ 鼻水止まんねえ
なんて返せばいい? 思いつかねえ
ピコン
『寝ちゃいましたか?』
『泣いてましたよ w』 送信
ピコン
『なんで???』
なんでってさ なんつっていいかわかんねえよ
『愛里が好きだから』 送信
ピコン
『なにそれ www』
笑ってけどさ
『愛里 好きです』 送信
ピコン
『あなたが好きです』
愛里・・・ 俺 泣いてばっかじゃん
ピコン
『あなたに相談したいことがあって』
相談?
『いいよ どした?』 送信
ピコン
『私の勉強方法について』
勉強方法?
ピコン
『あなたがヒマなときに相談に乗ってください』
『俺ヒマずっとヒマ』 送信
ピコン
『ずっとヒマって w』
ピコン
『それじゃ明日でもいいですか?』
『いいに決まってんじゃない』 送信
ピコン
『ありがとう』
『俺ができることあったらなんでもすっからさ』 送信
ピコン
『モリシタダイチに勉強方法相談できるなんて最高!』
『なんでそこだけフルネームなんだよ? w』 送信
ピコン
『モリシタダイチは学年トップで自覚あるモテ男だから w』
ハア?

『なんだそれ?』送信

ピコン

『www』

笑ってっけど

『俺は愛里の森下大一です』送信

ピコン

『はいそれじゃ』

軽く流されちまってっけど

ピコン

『おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

なんか 今日一日がメーッチャ長く感じる

いろいろあったけど 結局愛里は日本の大学目指すことになって

振出しに戻ったんか ちげえな いろんなこと考えて聞いて

そんで勉強方法のことまで考えるようになってさ

よかった なんかいろいろよかった

寝よう

朝起きて 爆睡だった 枕に頭ついた記憶すらねえよ

顔洗って とうちゃんは・・・ベランダか

「とうちゃん、おはよう」

「ダイチ、おはよう」

「手伝うよ」

「あとこんだけだからよ」

とうちゃんと二人で タオル、バサッバサッバサッ

「とうちゃん、愛里、日本の大学に行くことにしたってさ」

「そっか」

「うん」

「ダイチ、よかったな」

んな直球で言われっとさ

「うん」

俺も直球で返しちまうよ

やっぱさ やっぱ よかったよ

にしても・・・英語で生物やんなきゃいけなくて泣いたっつう人は・・・

「乾燥機使えばいいのに」

かあちゃん

「美里おはよう」「かあちゃんおはよう」

「おはよう」

「美里、コーヒー？」

「お願い」
とうちゃんがキッチンに走ってった
「かあちゃん」
「なに？」
「かあちゃんの会社の人で、英語で生物やんなきゃなんなくて泣いたって」
「そうよ、そう言ってたわよ」
「その人、途中で帰ってきしまったの？」
「ちゃんと卒業したから、うちの会社に入れたのよ」
「そんじゃ、生物はどうしたんだよ？」
「同じ寮のアメリカ人の友だちがノートを見せてくれて」
え？
「同じ寮の先輩が前年度のテスト問題を見せてくれたりでみんなが助けてくれて、
これは苦手意識を取り去ってゼロから覚えようって気持ちになれて、
光合成のことが、高校の授業より理解できるようになったんですって」
「え・・・ そんじゃ」
「無事テストも合格点取って卒業しましたとき」
「そのこと、愛里には」
「言っていないわよ」
「なんで？」
「聞かれなかったもの」
「かあちゃん、愛里はメチャ怖えつつう気持ちばっかになってさ」
「愛里さんは日本でゆっくり自分の基礎を築いた方が愛里さんらしい花が咲く」
「ハ？」
「あくまで私の考えだけどね」
「かあちゃん、そう思ってたんなら最初っから言えばいいじゃん」
「だから、あくまで私の考えであって、それが正解かどうかはわからないもの」
「それでも、なんか、そういうふう持ってってんじゃん」
「あら、そう？」
「あらそうじゃねえよ、光合成のワナつつうかさ」
「ワナ？ なによそれ？」
「すっとぼけねえでくれよ」
「どこがいいのかしらね」
「日本の大学にするつつったじゃん」
「愛里さん、あんたのどこがいいのかしら」
「ハ？」
「私にはサッパリわからないけどね」
「ハァァァ？」
「よかったわね」
「なにがだよ？」
「愛里さんが日本の大学選んでくれて」

え？

「ずっと一緒にいられるわね」

「え、かあちゃん、それって」

「コーヒー飲もう、頭ポーツとしてるわ」

かあちゃんがキッチンに行って・・・

よかった？　ずっと一緒にいられる？

まさか・・・　それって・・・　かあちゃんが・・・

わかんねえ　かあちゃんの手は読めねえ

永久に読める気がしねえ

俺は　かあちゃんの手の上で転がされてるってだけは　確かだ

IQ ダダ下がり

愛里の部屋の玄関

ドアが開いて

「おはようございます」

「愛里」

抱き寄せて

「おはよう」

「昨日は、なんか、ごめんなさい」

「なにが？」

「英語で光合成で、なんかピリッピリになっちゃって」

「んなこといいよ」

「でも、あれで、迷いなく日本の大学に行こうって思えました」

迷いなく

「そっか、うん、そっか」

「あの・・・掃除・・・ですよね」

「おう、掃除、掃除すっから」

これからもずっと掃除は俺がすっから

まずは愛里の部屋を掃除機かけて

机の上に ゆうべ見せてくれた大学案内の雑誌が置いてある

なんか付箋ついてっけど 愛里マジで前向きに調べ始めたんだな

俺も協力すっから ぜってえ愛里に合う大学見つけような

次は リビングだな

ローテーブルの上に え なんかおんなしモデル？ 俳優？ の写真が二冊も

なんでだ？ なんでこいつのを二冊も買ったんだ？

愛里は・・・ こういうのがタイプなんか？ えっ マジ？

「どうしたんですか？」

「え、や、この雑誌・・・買ったんか」

「はい、昨日、ファッション雑誌も買っちゃいました」

なんか嬉しそうにニコニコしててさ

「二冊も・・・買ったんか」
「好きなので」
好き？ この、こいつが、好き？
「この、載ってるこの、男」
「KENTO？」
名前呼び捨てかよ 俺の名前はほぼ呼んでくれねえのにさ
呼ぶとしたらフルネームでさ
「KENTO がどうしたんですか？」
どうしたって
「や、どうもしねえけど」
「KENTO のヘアーカット、La Moda Shin が担当してるんじゃないかって」
「シンシンおじちゃん？」
「噂ですけどね、そういうの絶対表に出ないから」
俺だってシンシンおじちゃんが髪切ってくれてっけど？
「この適当に手でかきあげてます的なカンジなのに流れがすべて計算されてて」
計算？ 髪に計算てさ
「ステキですよ」
ステキって・・・
「彼が付けてる香水が」
「香水？ 男が香水つけんのかよ」
「今はたいていの男性がつけてますよね」
「俺つけてねえけど」
「そうですね」
「つけてねえけど？」
「まあ、あなたはあなたですから」
俺は俺って どういうことだよ？
「愛里は・・・香水つけてる男がいいんか？」
「その人に似合う香りならいいと思います」
「俺つけてねえけど？」
「知ってます」
なんか スパンと切り捨てられたみてえなさ
「それでも、なんか、こんな、なんか、女みてえな服着てさ」
「女みたい？」
「なんか、中の透けててさ」
「サンローランがユニセックスラインを発表して」
何ノ話ヲシテルンダ？？
「サンローランを着こなすっていうか、もう自分の色にできちゃうって」
自分の色にできちゃう？ なんのことだよ？
「ステキ」
またステキだった

「そんじゃ、愛里は、なんか、こういう、香水つけたスケスケの服着た男が」
「そんな言い方」
「こういうのが好きなんか、こういう、なんつうか、こういう、男」
「ハ？」
「だから二冊も買って来たんか」
愛里が 口開けて俺の顔ジューッと見てっけど
なんだよ ただ聞いただけじゃん
「そうですねえ、かっこいいですよねえ」
え・・・ マジ・・・
「KENTO とつき合いたいっていう女の子は世界中にいるから」
「世界中って、日本人じゃねえの」
「主演映画やドラマが世界中に配信されていますから」
そんな・・・なんか
「バカみたい」
「誰？ こいつ？」
「あなた」
「え、俺？ なんでだよ？」
「あなたって、何度も言ってますけど、すっごく頭がいいのに」
なんで俺 怒られてるカンジになってんだよ？
「こういうことになると、IQ ダダ下がりしますよね」
「IQ は急に下がったり上がったりしねえだろ」
「あなたはするの！」
愛里が背えむけて
「え、ちょ、愛里」
振り向いた メッチャ俺のこと睨んでる
「あなたの、その」
「俺の、その？」
「この世でいちばんダサくて」
こ・・・ この世でいちばん・・・ ダセえ？
「いちばんブサイクで」
ブ・・・サイク・・・
「最底辺の男みたいな」
最底辺 マジ・・・
「自己イメージ、払拭したらどうですか？」
ふっしょく なに え
「こんなことで嫉妬して」
「や、嫉妬なんてしてねえよ、聞いただけじゃん」
「嫉妬でしょ、しかも俳優、私なんて一生、すれ違うこともないような」
「え、そんじゃもしすれ違ったら」
「あああああっ もーっ」

「え？」
「あなたは鏡を見たことないんですか？」
「鏡は見んだろ、ヒゲ剃るときとかさ」
「ヒゲ？」
「え、朝、剃ってっけど」
「ヒゲ・・・」
「え、なに？ ヒゲがなに？」
「え・・・ なんか、男の人なんだなって」
「え、愛里、ヒゲ、イヤなんか？」
「こ～んなにボワッと生やされたら・・・ イヤですけど」
「生やさねえよ、俺、似合わねえもん」
「あっ そういえば」
「え、なに？」
「あなたが知恵熱出したとき」
え？
「あのとき、なんかうっすら」
「あっ！ や、あんときは熱出して、んで、愛里来るとか思わなくてさ」
「まあ・・・ 私もあのときは、それどころじゃなかったっていうか」
「愛里、俺、毎朝、ちゃんと剃ってくっからさ」
「熱を出したときは、しょうがないですから」
「熱出しても剃るからさ」
「そこまでなくていいです」
「それでもさ、イヤなんだろ？」
「だから、意図的にボワッと生やすのはイヤだけど」
「生やさねえ、ぜってえ生やさねえ」
「無精ひげはべつに、慣れましたから」
「え？ 慣れた？ 慣れたつつうのは？」
「夕方になると、たまに少し伸びてるかなって」
「えっ あっ ごめん、今度から夕方も」
「いいんです、それくらい」
「それでもさ」
「それがあなただから」
「え、無精ひげ生やしてんのが俺？」
「じゃなくて、そういうのも含めてあなただから、それでいいんです」
「それで・・・ いい？」
「はい、全部、私は」
愛里が下向いて
「好きです」
「えっ マジ？」
「マジって、今さら」

「俺、さりげなく計算された髪じゃねえけど？」
「Shin にカットしてもらってますよね」
あ・・・ シンシンおじちゃん 感謝
「俺、香水つけてねえけど？」
「つけなくていいです」
「牛乳拭いた雑巾みてえに臭っせえときもあんだろ？」
「プッ グフッ だから ハハハハ」
笑ってる
「あれはあなたが汗をいっぱい流して働いてきた匂いだからいいんです」
「マジ？」
「はい」
「それでも、俺、こういうスケスケのは」
「KENTO だって普段はこういうの着てないと思う」
また名前
「なんでさ、この、名前は呼ぶの？」
「他になんて呼べばいいの？ この人 KENTO なのに」
「俺の名前は呼んでくんねえじゃん」
俺はそれでもいいと思ってっけど、それでもさ
「だから・・・それは・・・ 最初に、あなたって言っちゃったから」
わかってっけどさ
「切り替えどきを逸しちゃったっていうか」
「そんじゃさ、もし、もし、もしな、もし」
「もしがすごく多いですけど」
「だから、もしつつう話でさ」
「もし・・・ なんですか？」
「もし、もしな、もし俺と結婚、もしな、そのときは？」
「もし・・・ ん・・・」
愛里が考えてる なんて呼ぶ？ なんて呼んでくれる？
「パパ？」
「ばばあああ？」
「ママは私が生まれる前から、パパのことパパって呼んでたって」
「マジ？」
「今考えると、多分、最初の妊娠のときに嬉しくて・・・かもだけど」
「そっか」
「あなたのおかあさんは、おとうさんのこと一男って呼んでますよね」
「うん」
「おとうさんはおかあさんのこと美里って、いいですね、いつまでも恋人みたい」
「俺は、ずっと愛里って呼ぶ」
「はい、でも私は・・・」
「いいよ」

愛里のこと 抱きしめて
「名前呼んでくんなくてもさ」
愛里が俺の胸にコツンて頭つけて
「私から見たあなたは」
愛里から見た俺？
「おとうさんそっくりの顔で、目はかあさんかな」
「そっか」
「なんか、なんていうか、なんだろう、お日様？」
「お日様？」
「イメージだけど、お日様みたいな匂いがして」
お日様みてえな・・・ 匂い？
「制服着てたり、おかあさんが選んだ服を着てるあなたは」
愛里が顔あげて
「THE・モリシタダイチだけど」
ザ森下大一？ なんだザって？
「こういう煤けてデロ〜んとしたTシャツ着てるあなたは」
あ、ヤベ 赤いTシャツ着てきちゃった
「なんか・・・ ホツとする」
「え、マジ？」
「なんか・・・ 私の家政夫モリシタダイチで」
「え、俺もう家政夫としてやってるわけじゃねえけど」
「じゃなくて、そこから始まって」
「あ、そっか、だよな」
「今は、私の・・・ ダ ダ ダ」
だっだっだ？
「ダメだあ」
「え、なに？ なにがダメ？」
「名前呼ぼうとしたけど、恥ずかしくて」
なんだそれかよ
「いいよ、呼ばなくて」
「でも」
「いいよ、こうやって」
愛里のことギュウツと
「愛里のこと抱きしめられんのは、俺だけだから」
「なにそれ」
「この、スケスケ着てる、この・・・だって愛里のことは抱きしめらんねえから」
「えええ、KENTOに抱きしめられたらしあわせで失神しちゃうかもお」
「え、ちょ、愛里」
「ウソです」
「なんだよお、愛里いい」

「私がこの雑誌を買ったのは、秋のファッション特集を見たかったから」
「え、あ、そ、そっか」
「今どこの雑誌も KENTO 推しっただけです」
「そっか、愛里」
「はい？」
「他の男の名前呼ぶな」
「バカなの？ バカでしょ」
「バカです」
愛里の くちびる 俺だけの
くちびる離したら 愛里が目を開けて俺を見て
「愛里、俺、愛里のことが好きでさ、すげえ好きでさ」
愛里が下向いて
「どうしたらいいんかわかんねえくれえ好きでさ」
それで
「バカみてえになっちまう」
愛里が俺の顔見上げて
「困る」
「え？」
「あなたに勉強教えてもらわなきゃなのに、バカにならないで」
「おいっす」
そういう意味じゃねえって わかってるくせにさ
あ そういえば
「愛里、俺に勉強方法を相談してえつつってたよな」
「それが、朝起きて考えたら、まだ今は早いかなって」
「え？ あ？ 早い？」
「今はとにかく実力テストかなって」
「そっか」
「はい」
「そんじゃ俺は、バスルーム掃除しやす」
「お願いします」
雑誌の、その、なんとかさん
俺があんたに勝てることあるとしたら それは
愛里のそばにいれるつつうことっすよ
「まだ見てるんですか？ それはだから秋のファッション特集が見たくて」
「わかってるよ、かけえなあとと思ってさ」
「かっこいいですけど、私はファンではありません」
「え、マジ？」
「嫌いではないですけどすごいファンってわけじゃないです」
「そんじゃ誰のファンなの？」
「そうですね・・・ん・・・」

俺？ 俺っすか？
「あなたのおとうさん」
「へ？ とうちゃん？」
「ファンていうか尊敬、男性部門第一位で尊敬してます」
マジか とうちゃん やっぱ愛里はわかってんなあ
「女性部門ダントツ一位はあなたのおかあさん」
「かあちゃん？」
「はい」
え、今んとこ尊敬部門は森下家独占してっけど
「そんじゃ俺は？」
「あなた？」
「俺は何部門の何位？」
「ほら」
「ほら？」
「そういうところがバカみたい」
いいじゃん 聞いてもさあ
「口がタコになってます」
「タコとか犬とかさあ」
「早く人間になってください」
「愛里、なんか厳しくね？」
「しつけは厳しくした方がいいそうです」
「しつけ？」
「ゴールデンレトリバー」
笑ってるよ
風呂掃除すっか

ヤッベ メッチャ汗かいた
愛里は・・・ ベッドルームか
あとは・・・ ベランダの窓拭いて
おっし ピッカピカっすよ
ローテーブルの上の・・・ 雑誌
これはさ、なんつうの、片付けてるだけでさ
雑誌ひっくり返して裏にして二冊重ねて端っこに置いた らっ 愛里が出てきた
「さあてと、あとは、ねえかなあ、ねえな」
愛里の視線を感じる
「そんじゃ、もういっかなあ」
チラッと愛里を見たら 俺をジーッと見ながら
雑誌を 表っ側にして バンッバンッてテーブルに置いた
なんだよ ただ片付けただけじゃん

え 一冊手にとって 俺をジーッと見ながら 俺の前に来た なに？
え ゆーっくり表紙に顔近づけて
「えっ ええええええっ」
キ キス したああああ
「バッカミたい」
「あ？ え？」
「ただの紙！」
「そうだけどさあ、なんでキ・・すんだよお」
「なんかメッチャ意識してるから」
「して、してねえよ、片付けただけじゃん」
「そうですか」
え 愛里が雑誌持って ベッドルーム入っちゃった
「愛里」
怒らせちゃった
「愛里。ごめん、愛里」
愛里 マジでごめん 俺がバカでした ごめんなさい
「やだあ！ なんで土下座してるの？」
愛里 出てきてくれた
「プッ」
え なんで笑ってるの？
「お座りしてるみたい」
お座り？ これは土下座でさ
「お手」
手？ 手え出せばいいんか？ ほい
「やだあ、お手しないでえ ハハハハハ」
笑ってる 笑ってくれてる よかった マジよかった
「もう立って」
「あ、おう」
「シャワー浴びてください」
「汗臭せえ？」
「じゃなくて、Tシャツ汗で濡れてるから」
「あ、そっか、おう」
「私も、もう少ししたらあなたのお家に行きます」
「そっか」
俺は 今 すげえ愛里にキス したくて
「愛・・」
あ、ダメだ、今の俺は100パー汗臭え
「んっと、そんじゃ、あとで」
「はい」
愛里の部屋から出て

んっと けんとつつったよな

けんと 香水 検索

あるよ この人たち どうやって調べたんだよ 逆に怖えよ

ん・・・と えっ ウッフ 高っけ 2万以上もすんの？

俺は・・・ 何やってんだ？

帰ろう シャワー浴びよう

香水

シャワー終わって
キッチンでとうちゃんが換気扇の掃除してる
「とうちゃん、俺も手伝うよ」
「せっかくシャワー浴びたんだからよ」
「換気扇の掃除くれえ大丈夫だよ」
「そっか？ そんな」
とうちゃんが俺の耳元で
「ちょっとゴミ捨て場行って・・・新聞紙持ってくっからよ」
「あ、おう」
かあちゃんに知られたら怒られるもんな
俺ととうちゃんしょっちゅうやってっけど
リビングに行ったら
かあちゃんはソファに寝っ転んでなんか読んでる
書類じゃねえから仕事ではねえんだな
かあちゃんに聞いてみっか さりげねえカンジで？
「かあちゃん」
「なによ」
こっち見もしねえ
「お、男が香水つけるって、どう思う？」
「あんた」
こっち見た
「香水つける気？」
「や、ただ、どうなんかなって」
「そうねえ、つけてるって感じないくらいがいいわね」
「つけてるって感じねえって、そしたらどうやってつけんだよ？」
あ 起きて座った
「前にね、昔の映画の切り抜きを見たことがあるの」
昔の映画？
「誰だったっけ・・・ ああ！ アンディ・ガルシア」
だれだ？
「香水の瓶を上向きにして、シュッと一吹きしてね」
瓶を上向きにして・・・ シュッと

「それを手でこうやってつかんで首筋につけるの」
「手を・・・ こうやって？」
「そうそう、そういうカンジ」
「あ、握りっ屁みてえな？」
「あああ！ もーイヤ！ もうイヤ！」
「なにが？ 手で、こうだろ？」
「香水のつけ方の話をしてるのに、握りっ屁って言う？」
「だってこうやってこうすんならさ、握りっ屁みてえじゃん」
「あんたは一生香水つけなくていい！」
「なんでだよ、聞いただけじゃん」
「もうね、あれを握りっ屁っていう段階で香水つける資格はない」
「だって似てっからさあ」
「なによ、愛里さんにつけてって言われたの？」
「愛里は言ってねえよ」
「臭いって言われたから香水？」
「愛里は、お日様の匂いがするっつってくれたよ」
「愛里さんも気を使ってお日様の匂いなんて」
「ハ？」
「言えないわよね、10代の男子特有のモワツとした臭いなんて」
「え、俺、モワツとした臭いすんの？」
「さあね」
「さあねって、かあちゃんが言ったんじゃない」
「鼻が麻痺しちゃって」
「麻痺ってさあっ」
「あんたが・・・ 中学生になったくらいだったかなあ」
なに？
「あ・・・れ？ って、ヒトミが中学生になったときは感じなかったのに」
中学んとき？ なに？
「ああ、そういえば私が中学や高校のときに男子がこういう臭いだったなって」
「え、俺、臭えつつうこと？」
「あんたは・・・ それほどではないけど」
マジか よかった
「でも部屋に入ったりするとモワツと」
部屋？ 俺の部屋？ 愛里のこと何回も入れてっけど
「しょうがないんじゃない？ 高校生なんだから」
「とうちゃんはとうだったんだよ？」
「カズオが10代の頃なんて知らないわよ」
「それでも、出会ったときは20歳だったんだろ？」
「出会ったときはっ ホームレスでっ 臭覚がヤラレるくらい臭くてっ」
「あ、そ、そっか、んと、それでも一緒に暮らすようになってからは？」

「臭いがどうのとか思ってる場合じゃなかったのっ」
「そう・・・かもしんねえけど」
「でも・・・ そうねえ・・・ なんか、ホッとするカンジはあったわね」
ホッとする？
「愛里も、愛里も俺の匂いホッとするっつってた」
「へえ、だったらいいじゃない」
なんだよ、そのまーったく興味ねえ的な言い方
「ダイチ、間違っても香水つけようなんて思わないでよ」
「思ってねえよ」
「アンディ・ガルシアの、これを」
かあちゃんの手つきは やっぱ握りっ屁なんだけど
「握りっ屁なんていうヤツが香水なんて」
「つけねえよ」
「それに、高校生で香水の匂いプンプンさせてるなんて気持ち悪い」
「マジ？」
「おっさんでも気持ち悪いけどね」
「そんじゃ何歳のときにつけりゃいいんだよ？」
「だからアンディ・ガルシアのようにスツとこう」
どう見ても握りっ屁にしか見えねえよ
「あれくらいかっこよくつけられる人限定ね」
握りっ屁ならやったことあるっつうの
「あら？ カズオは？」
「あ、今しん・・・ や、俺ととうちゃんて換気扇掃除すっから」
「そう」
「うん」
「ゴミ捨て場から新聞紙持ってくるのね」
「えっ」
「やめてって言っても持ってくるのよ」
「そんでもさ、すぐ捨てっからさ」
「いっそ新聞取ればいいの？」
「んなことしねえでいいよ、ゴミ捨て場にいくらでも」
「あああああ、もーっ」
か、かあちゃん？
「あっち行って」
「あ、はい」
リビングから出たら あ、とうちゃん戻ってきた
後ろに新聞紙隠してっけど
「ダイチ」
小せえ声出して
「持ってきたからよ」

とうちゃん、バレてんだよ、かあちゃん知ってんだよ

「あ、おう」

なんなんだ かあちゃんのこの、犯人を泳がせておく的なさ

ま、いっか 掃除だ掃除

換気扇きれいになった

「昼メシは握りメシにしようと思ってよ、米炊いといた」

「そんじゃ卵焼きも作っか」

「だな、美里もアイリちゃんも卵焼き好きだもんな」

「うん」

とうちゃんと二人で握りメシ、小せえやつ作って

「とうちゃん、これ何に見える？」

「握りメシ？」

「じゃなくてさ、こうやって、こうすんのさ」

「握りっ屁か？」

「だよな、やっぱ、だよな」

「ダイチが小せえ頃よくやって遊んだな」

「とうちゃんがさ、ダイチって呼ぶからそばに行くとき」

「ダイチが臭っせえつつってな」

「俺もとうちゃんにやってさ、それでもとうちゃん、ダイチのは臭くねえなって」

「臭くねえんだよ」

「それでもさ、臭くねえって言いながらコホッコホッてさ」

「臭せえけど臭くねえんだよ」

「臭せえんだろ？」

「ヒトミのもダイチのも、赤ちゃんときオムツ換えっだろ」

「うん、俺もねえちゃんもとうちゃんがオムツ換えてくれたんだろ？」

「ウンコしてもよ、臭くねえんだよ、んな可愛い匂いって世の中にあんだなって」

「とうちゃん、それはカンベキ親バカじゃん」

「ダイチとヒトミのは臭くねえよ」

真面目な顔してさ

そういえば・・・とうちゃんの匂いって どんなんだった？

「とうちゃん、ちょっと匂い嗅いでいっかな」

「なんだ？ 臭せえか？」

とうちゃんの匂いは・・・とうちゃんの匂いだ

ここにいと絶対的に安全で安心な なんつうか頼れる男の匂いだ

俺はとうちゃんみてえな匂いになれてんのかな

「とうちゃん、俺は？ 嗅いでみてくれよ」

とうちゃんが俺の胸んところに顔近づけて

「石鹸のいい匂いすんなあ」

「シャワー浴びたばっかだからじゃね？」
「俺はダイチの匂いが大好きだよ」
「マジ？」
「赤ちゃんときに抱っこしてっだろ？　そのとき頭のここんとこの匂い」
「頭のとっぺん？」
「たまんねえな、ずっと嗅いでてえなっつう匂いでよ」
「今はもう違えんじゃね？」
「ちっとかがんでみろよ」
「こう？」
とうちゃんが俺の頭の
「何を匂い嗅ぎ合ってるのよ！」
かあちゃん！　ガツツ
「あっ　とうちゃん、ごめん」
とうちゃんが片方の手で鼻と口押さえて片方の手で大丈夫だっつって
「愛里さんが来たわよ」
「えっ」
かあちゃんの後ろに・・・いる
「んっと、今、昼メシにすっからさ」
見られた　愛里に　とうちゃんと匂い嗅ぎ合ってるって
変態だと思われたかな　ちげえんだよ　そういうことじゃねえんだよ

愛里とかあちゃんが握りメシを美味えっつって食ってる
かあちゃんのはとうちゃんの塩むすびで、愛里のは俺が握った梅干とおかか
「愛里さん、アンディ・ガルシアが香水をつける場面知ってる？」
「アンディ・ガルシア？」
「こうやって上にシュッと一吹きして、手でこうやって」
「ああ！　切り抜き動画で見たことがあります」
「かっこいいでしょ？」
「おとなの男ってカンジでかっこよかったです」
マジか・・・
「それをね、ダイチは」
かあちゃんっ　ヤ・メ・テ・ク・レッ
「握りっ屁みたいって言うのよ」
「え・・・」
かあちゃん・・・　恨む　メツチャ恨む
「グフッ」
愛里が笑ってんじゃーーん
「あの・・・　その切り抜き動画のコメント欄に、同じこと書いてる人たちがいて」
え？

「そうなの？ 女の人じゃないわよね」
「多分男の人たちだと思うんですけど」
俺だけじゃねえんだ ほれ、かあちゃん、俺だけじゃねえよ
「あれを握りっ屁なんていうヤツは香水つけなくていいわよ」
「私は、正直、男の人が香水つけてるのは好きじゃなくて」
えっマジ？
「パパはけっこうガッツリつける人で」
「そうなの」
「だから、その香水イコールパイイコールおじさんみたいなイメージで」
「わかる、イヤな上司がつけてたりすると、電車で同じのをつけてる人と遭遇すると、
その人は何も悪くないのに、なんだかイヤ～な気分になるのよ」
「ですよ」
そうなんか
「おかあさんはおとうさんの匂いが好きですよ」
「え、まあ、嫌いなら、一緒にはいないわね」
好きだってハッキリ言ってあげればいいじゃん
とうちゃんが俺の横で小っちゃ～くなって固まってんだよ
「さっき調べたんですけど」
調べた？
「なんとかっていう免疫にかかわる遺伝子が」
生物か？ んな課題あったか？
「なんだっけ、自分と違う配偶相手を選ぶことで・・・
より感染症に強い子どもを持つことが期待できるとかで」
何を調べたんだ？
かあちゃんもちょっとわけわかんねえって顔してっけど
「えっと、とにかく、本能でいい匂いと感じる異性は、なんかうろ覚えで・・・
とにかく、いい匂いだと思うのは遺伝子レベルで相性がいいらしいです」
「そうなの」
「まあ、はい、そう書いてありました」
マジか 俺は愛里の匂いメッチャ好きっす
「それじゃ香水なんてつけちゃわからなくなるわね」
「そうですね」
つけねえ 俺一生つけねえ
愛里は俺の匂いはお日様みてえでホッとするとさ
「ダイチ」
「え？ あ？ はい？」
「炭酸ミネラルウォーター持ってきて」
「おう、愛里は？」
愛里が俺の顔見た
「グフッ」

「え、なに？　なんで笑うの？　俺なんかした？」
「さっきの・・・　グフッおかあさんが言った」
「ああ、握りっ屁？」
「思い出しちゃって」
「ねえ、そんなこと言うヤツは香水つけるなって話よね」
「つけねえよ、俺は俺の匂いで勝負すっから」
「勝負ってなによ？」
「え？　だから・・・」
愛里のこと見たら　サッと目えふせたけど
「早く持ってきてよ」
「美里、俺が持ってくっから」
「あら、そう？　お願い」
どうちゃん、どうちゃんの匂いの遺伝子レベルの・・・　なんだっけ？
「愛里」
「はい」
「なんつうワードで調べたの？」
「何がですか？」
「今言ってた匂いのやつ」
「言わない」
「なんでだよ、俺も知りてえよ」
「ダイチ、あんたは」
「え？　なに？」
「男子高校生臭いで調べたら？」
ハァアアアア？
愛里も笑ってっけど　いいよ　笑ってもさ
俺の匂い　ホッとするっつってくれたからさ

ファーストカット

とうちゃんと昼メシの後片付けして

「とうちゃん、晩メシどうする？」

「そうめんがっぺえあっからよ」

「だな、んじゃ・・・ ジャーチャー麵風にすっか」

「ひき肉も冷凍してあるしな」

「そんじゃ今日は買い出しはしねえでいいな」

「だな」

「きゅうり切っとく？ まだ早えかな」

「ダイチ、ここはいからよ、アイリちゃんところ行ってやれよ」

「え、そんじゃ、うん」

リビングに行ったら

え？ 愛里が一人でソファ座ってて かあちゃんは？

「愛里、かあちゃんは？」

「電話するってベッドルームに」

なんだよ、愛里のことひとりぼっちにしてさ

いいけどさ かあちゃんいねえ方が

「愛里、これからさ、どっか行きてえとかやりてえことある？」

「ないです」

「俺、休みじゃん」

「はい」

「どっかさ、カフェとか？ どこでも愛里が行きてえところあったらさ」

「正直言っているんですか？」

「いいよ」

「昨日はなんかいろいろあり過ぎて」

ああ たしかにな

「今日はボーッとしたいです」

「ボーッと？」

「こうやって、みんなといてボーッと」

「そっか、そんじゃ明日さ」

バンッと ベッドルームのドアが開いた

「明日はシンシンのところに行くわよ」

いっつも急に決めんだよなあ そんなでも なんつったっけ、計算された髪？

「わかった」
「どうしたの？」
「どうしたのって、明日シンシンおじちゃんどこだろ？ わかったって」
「いつもは、まだ早いとか近くの床屋でいいとか言うくせに」
「え、や、盆休み終わったら日曜しか休めねえからさ」
「へえ」
なんだよその疑うような目でさ
「La Moda Shin に行くんですか？」
「そうよ」
「楽しみです」
「そうよね、愛里さんは初めてだものね」
「え？」
「シンシンも愛里さんに会えるって楽しみにしてたわよ」
「え？ え？ えーっーっーっ ワ、ワ、ワタシモデスカ？」
愛里が日本語ヘタな外人みてえな言い方になってる
「そうよ、愛里さんもいれて四人、予約したの」
「えっ・・ で、でも私はまだ」
「毛先をそろえるくらいはした方がいいんじゃない？」
「そ、そういうことではなくて、Shin にカットしてもらうなんて」
「イヤ？」
「イヤじゃなくて、恐れ多くて」
「ただのおカマの美容師よ」
俺も言ったじゃん、ただのおカマのおっちゃんだって
「え、あの、い、いつ、よ、予約して下さってたんですか？」
「今、ほら、ベッドルームで」
「いまーっーっーっ？」
「そうよ」
「Shin の予約って、今、明日の予約、できるものなんですか？」
「私はいつもそうよ」
「ええええええ」
あ・・ 愛里が傾きながら 俺の手 にぎった
手汗かいてっけど 大丈夫か？
「愛里、シンシンおじちゃんさ、んな愛里が思ってるような人じゃねえから」
キッてカンジで俺を睨んで
「あなたはそうかもしれないけど」
え？ なんか俺が無理やり手えにぎったみてえに振りほどいたんだけど
「愛里さん、ダイチのファーストカットもシンシンなのよ」
「ファーストカットって・・ なんですか？」
「赤ちゃんの初めての髪を切るとき」
「赤ちゃんのときから？」

両手で口押さえて俺を見たけど

「俺は憶えてねえよ」

「レベルが・・・違う」

「俺は憶えてねえって」

「愛里さん、それがね、ヒトミのときにね」

「お姉さん・・・ですか？」

「女の子だし、伸ばしたままでもいいかなと思ってたの」

「はあ・・・」

「でも、こう、目にかかっちゃうし毛先はバラバラだから、

カズオに切ってって言ったのよ」

「おとう・・・さん？」

「あんなに上手に野菜切れるから、髪の毛も切れるんじゃないかなと思って」

その発想がいまだにわかんねえよ

「そしたらね、こ～んな大きいキッチンバサミ持ってきて」

「え・・・」

「手が、こ～んなに震えちゃって」

「です・・・よね」

「これはダメだと思って、シンシンに電話したの」

「そう・・・ですか」

愛里がまた傾いて いちおう手え横に出しといたけど 握らねえな

「シンシンなんて、一本ずつ切ってんじゃない？ くらい時間かけて、

しかも、涙浮かべながらカットするのよ、気持ち悪い」

「なぜ・・・涙を・・・」

「ヒトミッチのファーストカットをアタシができる日がきたのねえって」

かあちゃんのシンシンおじちゃんの真似、メッチャ上手えんだよな

「それでね、カットした髪を丁寧にまとめてね、筆を作ってもらってシンシンが」

「ふで？」

「赤ちゃんのファーストカットの髪を記念に筆にするとかいうのがあるって」

愛里はもう声で出ねえカンジで聞いているよ

「筆なんか使わないわよって言ったら、母親にとっての大切な記念でしょ！ って」

愛里が俺を見た

「ん？ 愛里、なに？」

「あなたも・・・筆を・・・」

「俺のもあんだよな、かあちゃん」

「あるわよ、どこかのクローゼットの、どこかに」

ねえかもしんねえな かあちゃん捨てちまったかもな

「あの・・・ やっぱり私は」

「どうして？ 行きましようよ」

「私なんか行って・・・」

「ダイチが行ってるくらいなんだから」

かあちゃんの安心のさせ方がさ
「ダイチよ、このダイチ」
このダイチって まあいいけどさ
「だってそれは鬼に金棒イケメンに Shin のカットだから」
「え？」 えっ？
「え？ あの、私・・・ あ！」
「そう、愛里さんはダイチをイケメンだと思ってくれてるの」
「え・・・ あの、おとうさんに似てる・・・から」
俺は・・・ 今・・・ ドッキドキしてて
「よかったわね、ダイチ、イケメン、ですって」
愛里のこと 横目でチラッと見たら
愛里は無表情になって斜め下をジーッと見てて
「それでね」
かあちゃんが え、俺と愛里の間にグイッと 座んの？
そんじゃ俺立つしかねえじゃん
「シンシンがね」
なんか 俺がいてもしゃあねえカンジになってんな
「んっと、とうちゃん手伝ってくっかなあ」
チラッと見ると 全然こっち見てねえ
とうちゃん手伝ってこよう

キッチンで とうちゃんがきゅうり千切りにしてた
「とうちゃん、俺もやるよ」
「もうこれで終わっからよ」
「明日シンシンおじちゃんとかだってさ」
「そっか」
とうちゃんはもう無我の境地だよな
「ねえちゃんの髪、とうちゃんに切らせようとした話してたよ」
「あれなあ、おっかなくてよ」
とうちゃんがきゅうり切る手え止めて
「俺、あんまビックリして、言っちゃったんだよな」
「なんて？」
「ねーちゃんバカじゃねえの？ って」
「かあちゃんに？」
「そしたらよ、キャベツあんだけ細く切れんだから髪くれえ切れんだろって」
無茶ぶり過ぎんだろ、かあちゃん
「そんでハサミ持って切ろうと思ったんだけどよ」
キッチンバサミだろ？
「ヘンにしちまったらどうしようとかよ、ヒトミに傷つけちまったら」

どうちゃんがメッチャ怯えた顔になってる　トラウマになってんじゃない
「手が、こんななちまって止まんなくてよ」
マジでメッチャ震えたんだな
「それで、シンシンさんどこで切るって・・・　ホッとした」
どうちゃんかわいそうにな
そういえば
「どうちゃんさ、かあちゃんに会うまでどこで髪切ってたの？」
「施設んときは、何か月にいっぺんくれえで、なんか来てくれてよ」
「何か月に一辺つつたら、けっこう伸びちまうんしゃね？」
「そういうもんだと思ってたからよ」
「そっか、それで？」
「院ときは丸坊主だよ」
「どうちゃんの丸坊主見たかったな」
「そっか？　楽だったなあ」
「それで働いてからは？」
「しばらくは坊主頭が伸びるくれえだったからよ、そんでもどうにもなんなくなって、
床屋なんて行ったことねえし、金もねえからよ、ハサミで切ってた」
「自分で？」
「現場の工具箱中のハサミで」
マジか　だからキッチンバサミになんの疑問も感じなかったんか
「それでよ、入院してたときによ、おばちゃん看護師さんがよ」
「それって、どうちゃんの、アレおっ立ったときの？」
「それ、その看護師さん」
「メッチャ怖え人だったんだよな」
「そんでもよ、あんたひでえ髪してんなつつって切ってくれてよ」
「今度は何で？　メス？」
「小せえハサミだったな」
「それで？」
「あとは、伸びっ放しで、ねーちゃんに会って」
「え、ちょ、そんじゃ、どうちゃんが生まれて初めてちゃんとした店で髪切ったのは」
「シンシンさんとかか」
「え・・・」
つことは・・・
「あんなすげえとこ、初めて行くからよ、おっかなくてよ」
どうちゃんのファーストカットもシンシンおじちゃんつつうこと？
ファーストカットじゃねえか、そんでも初めて行ったまともな店だよな
「俺なんてな、あんなすげえとこでやってもらうようなんじゃねえんだけどな」
「そんでも、それからはずっとシンシンおじちゃんどこで切ってたろ？」
「ん・・・　床屋も行ったことねえからよ、なんつつて頼めばいいんかわかんねえよ」
「そんでもさ、俺やどうちゃんは、この近くの床屋でいいよな」

「ダイチと一緒になら心強えな」
「ショーさんが行ったとこなんて 1000 円だっさ」
「それは・・・ 安いんか？」
「シンシンおじちゃんとかなんて」
あ それ言ったら どうちゃん怖がる
「シンシンおじちゃんとかよりは安いかな」
「そんぐれえでいいんだけどな」
「かあちゃんはどうちゃんにかっこよくいて欲しいんじゃないの？」
「んな、俺なんて大して変わんねえよ」
「変わるわよ！」
か、かあちゃん
「私と愛里さんは下の部屋に行くから」
「なんで？」
「愛里さんが、明日着ていく服を選んで欲しいって」
「んな、なんでもいいじゃん」
「なんでもよくはないです」
あ、愛里
「あの Shin にカットしてもらうんですから」
「え、あ、そっか、うん」
行く気になれたんか よかった 明日は一緒に行けるんだなあ
「愛里さんののが終わったら、次はあんたたちのだからね」
「え？ また？」
「またじゃない！ あんたたちに任せたらとんでもない服を」
「はい、わかりました、お願いします」
「あ、そう」
かあちゃんと愛里が玄関出ていった
俺とどうちゃんは カンベキかあちゃんの着せ替え人形だな
「どうちゃん」
「ん？」
どうちゃん、もう玉ねぎのみじん切りやり始めた
「俺も手伝うよ」
「そっか、そんじゃこっち頼むよ」
明日は四人で出かけんのか
なんかさ なんか 家族じゃん もはやさ
「ダイチはみじん切り上手えな」
「どうちゃんの真似してっただけだよ」
そうなんだよな 俺はなんもかもどうちゃんの真似してっただけでさ
俺なりのってのは・・・ なんだ？
生活背負って 家族背負って かあちゃんに言われたな
俺にしかできねえことって なんだ？

「とうちゃん、俺にしかできねえことってなんなんかな」
「ダイチはなんでもできっだろ」
なんでもできるつつうのは・・・ これつつう秀でたもんがねえつつう
「俺は・・・ どんな仕事すればいいんかな」
「仕事？」
「将来」
「働けるつつうのはよ」
とうちゃんが包丁の手え止めて
「ありがてえよ」
ありがてえ・・・ そっか だよな
「ダイチは大丈夫だよ」
「とうちゃん」
すげえ優しい顔で 俺のこと見てて
「ダイチはぜってえ大丈夫だよ」
「そっか」
「大丈夫だ」
「うん」
とうちゃんがそう言うなら 大丈夫だ

シンシンおじちゃんどこ

俺ん家には車がねえ

生まれたときからねえから不便だと思ったこともねえ

かあちゃんは大学時代に免許取ったけど一回も運転しことねえって

「ここに住んでると必要性がまったくない」つって

そんじゃなんで免許取ったんだって、ねえちゃんが聞いたら、

「大学時代仲良かった友だちと一緒に、ノリで」

ノリで免許取るって、その頃のかあちゃんはけっこう軽かったんだな

・って思いながらねえちゃんの話聞いてたけど

ねえちゃんが生まれて、まわりから、子どもがいたら車あった方がいいって

かあちゃんも一瞬は考えはしたらしい

それでも、車持つメリットとデメリットを考えたら、

かあちゃんの中では車を持つメリットがなかったんだってさ

月々の駐車代・維持費・出かけたときの駐車場探しと料金

「もしものときはタクシー使った方がよっぽど経済的」って結論になった

それに、かあちゃんの親、俺のじいちゃんばあちゃんが事故で死んで、

そういうのもあるらしいって、ねえちゃんは言ってた

ねえちゃんがアメリカ行く前に免許取ろうかなって相談したら、

「人をひき殺して一生をダメにする覚悟があるならどうぞ」って言われて

あのねえちゃんがビビってやめた

ねえちゃんの大学がある地域は公共交通機関が発達してっから不自由はねえしな

とうちゃんの移動手段は・・・ 徒歩

放っとけばどこまでも歩いてく

右脚が曲がねえときもずっと歩いてた

それでも家政夫やるようになってからは電車は使うようになった

「やっぱな、時間どおり行かねえとなんねえもんな」つつって

とうちゃんにとっては、電車に乗るのは贅沢で、そんで楽しいってさ

今も俺の隣りに座って楽しそうに向かいっ側の窓の外の景色見てる

「ん？ ダイチ、どした？」

俺の視線感じて とうちゃんが俺の方見た

「なんか楽しいそうだなと思ってさ」

「ダイチとアイリちゃんと美里とよ、なんか旅行みてえだな」

シンシンおじちゃんどこ行くだけなのにな

向かい側の席には愛里とかあちゃんが並んで座って
楽しそうにずっとしゃべってるよ
愛里は、なんつうの、薄紫？ の服で白い上着着てさ なんつったっけ バレロ？
メッチャきれいでさ
「とうちゃん、愛里、きれいだよな」
「可愛いな、美里とおんなしみてえな服着てよ、母娘みてえだな」
あれってこの前買ったっつってたけど、なんで似たような色買ったんだ？
なんかさ、まわりの男たち、愛里のことチラチラ見てる
そうっすよ、そのきれいな人は俺のカノジョっすよ
声を大にして言いてえよ 言わねえけど
まあ、おっさんたちはかあちゃんのこと見てっけど
愛里もかあちゃんも全然気についてねえな
あ 愛里がこっち見た なんか見渡してる
そんでかあちゃんになんか言ってる なに言ってんだ？
かあちゃんもこっち見て そんで見渡して 愛里としゃべって笑ってる
なに？ ちゃんと選んでくれたの着てんじゃん
俺ととうちゃんのは、愛里とかあちゃんがそれぞれ選んでくれたんだけど
なんでおんなしなんだよ？ 打ち合わせしてねえっつってたけどさ
「あら、愛里さんもそれ選んだの？」
「同じですね、ビックリ！」
とか言って笑ってたけどさ
靴は好きにしていっつったからさ
暑いしギョサン履いたら、とうちゃんもギョサン履いてさ
そしたら
「カズオ、それはやめて」「え、ウソですよ」
てことで、結局おんなしスニーカー履かされた
俺ととうちゃんに自由はねえ 着るものに関してはまったくねえ
いいけどさ 愛里が選んでくれたから
できれば一生俺のを選んでください 俺の着るものは愛里に託してえと思ってっから
あ、そろそろだな
「とうちゃん、次だよ」
「そっか」
俺ととうちゃんが立ちあがったら、愛里とかあちゃんも立ち上がって
俺ととうちゃんは、愛里とかあちゃんのそばに行って
俺は愛里がよろけねえように腰に腕まわして
チラッと見たら、とうちゃんもかあちゃんの腰に腕まわしてた
そんで、愛里もかあちゃんもてんで気についてねえ
二人で夢中になってしゃべってる
電車止まるときちょっとよろめきそうに・・なるから俺がいます
とうちゃんもかあちゃんをがっつりガードしてるよ

シンシンおじちゃんフロアに着いて ドア開けたら
「いらっしゃ〜い森下家の一族、怖っわ〜い」
相変わらずだな
「あらあダイチ！ 日に焼けてイケメン度アップ、なに？ サーフィン？」
「現場のバイト」
「ガテン系？ ワタシそういうの萌えちゃう、やっだあ、腕の筋肉」
え、ちょ、メツチャ触ってくんだけど
「胸の筋肉も、たまんな〜い」
握力すげえから痛てえよ
「あら、こちらがアイリン？」
アイリン？ いつからアイリン？
愛里が固まってんじゃん
「愛里さん、ほらね、ただのオカマの美容師でしょ」
「やっだあミサトッチ、そういう紹介の仕方ってなに〜？」
「あ、あの・・・上原・・・愛里・・・です、今日はよろ」
「アイリ〜ン」
おいおいおい 抱きつくなよシンシンおじちゃんっ
「会いたかったわあ、ダイチに写真見せてもらってからずーっと」
「写真・・・？」
待ち受けにしてる水族館の写真っす ごめん愛里
「ちょっといい？」
愛里の髪触ってる シンシンおじちゃんがオカマでよかったけどさ
「髪質、最高よ」
そうだよ、愛里の髪はスルッとしててさ手触り最高でさ
「でも、このサイドのレイヤーが」
「シンシン、いつまで入口に立たせておくのよ」
「やだあ、そうだったわあ、入って」
シンシンおじちゃんて、いっつも入口トークが長えんだよな
「あっ！」
愛里？ どした？
「あ・・・れは」
あれ？ ああ、とうちゃんとかあちゃんの写真か
「あれね、ワタシの代表作よ」
「生で・・・見れるなんて」
「アイリン知ってるの？」
「ピースラの、Shin が大ブレイクしたきっかけの、あ！ Shin て・・・ごめんなさい」
「アイリン最高！ ワタシのことをこんなに知ってくれてるなんてカンゲキ！」
「あの、憧れで・・・」

「憧れなんて、もう可愛い！」
だからっ抱きつかねえでくれよシンシンおじちゃんっ
「で？ どれからやっつければいいの？」
「シンシンにまかせるわよ」
「それじゃ・・・ メンズからね」
メンズ、あ、俺とどうちゃんか
「ミサトッチとアイリンはそこに座っててね」
「コーヒー飲みたい」
「もうっ、ミサトッチ、うちはカフェじゃないのよ、ホット？ アイス？」
「私はホット」
「アイリンは？ 紅茶もあるしハーブティーもあるわよ」
「え・・・」
愛里がかあちゃんのこと見て かあちゃんが笑顔でコクンて
「それじゃ・・・ 紅茶をいただきます」
「ホット？ アイス？」
「え、あ、アイスで」
「わかったわ、用意させるわね」
シンシンおじちゃんがタブレットに打ち込んで
「アイリン、このフロアはワタシ専用だから好きに見てってね」
「いいんですか？」
「もちろんよ」
「あの・・・ カットする・・・ところは」
「あらあ、ワタシがカットするところ見たい？」
「でき・・・れば」
「嬉しい！ 森下ファミリーは誰も見てくれないの、ワタシのことカットマシンだと」
「シンシン！ 早くして！」
「んもうっ、まずはシャンプーね」
俺とどうちゃんがシャンプー台んここに連れてかれて
「こっちがカズオッチで、こっちがダイチ」
言われるまま寝て
「ダイチからね」
「おいっす」
「えっ」
え、なに？
「ミサトッチー！」
「なによー？」
「ダイチの、いちばん高いトリートメント使っていい？」
「そんななの？」
「日焼けしてて悲惨なのよー！」
え、マジ？

「好きにして！」

「それじゃ好きにしちゃおっかなあ、フッフッフッ」

シンシンおじちゃんのシャンプーって気持ちいいんだよな

手がデカくてゴツイから・・・なんてシンシンおじちゃんには言えねえけどさ

とうちゃんと俺は隣同士の椅子に座らされて

「まずはカズオッチからね」

とうちゃんがペコッて頭下げて

ここにいるときのとうちゃんは、いつも無我の境地に達した禅僧みてえな顔なんだよ

俺は・・・頭にタオル巻いてでっけえエプロンしてる・・・地藏みてえだな

シンシンおじちゃんが、とうちゃんの髪をカットし始めた

カットしてるときのシンシンおじちゃんは男らしい顔になってさ

「きれい」

愛里

「あら、ワタシ？」

「あの、手つきってというか、ハサミの動きとかそういうのが」

「アイリン、そうなのよ、そうなの！ わかる子ねえ」

なにがそうなのなんだ？

「それっぽく見せてハサミ動かしててもね、美しくないの」

なんの話だ？

「繊細なカットかどうかは動きでわかるのよ」

「こんなに近くで見れて、しあわせです」

「もうアイリンたらあ、養女にしちゃおうかしら」

「え？」

「アイリンはワタシの中のスペシャルリスト永住権獲得よ」

なんだよ永住権てさ

「えっ 光栄過ぎて」

愛里はわかんの？

「アイリンの感性って怖いくらいよ」

かあちゃんもそう言ってたな

あ、愛里がこっち見た

見ねえでくれ この地藏みてえな俺は

とうちゃんが終わった

「夏だからね、ちょっと短くしてみたの」

とうちゃん、かけえ

「あんまり短くするとミサトッチが怒るからちょっとだけね」

とうちゃんはペコッて頭下げて椅子から立ち上がった

「ダイチ、おまたせ～」
どうせまたとうちゃんとおんなし髪型になんだろうな
「ダイチ～、たのむから外に出るときは帽子被ってちょうだい」
「仕事してるときはヘルメットしてるよ」
「ずーっと？」
「や、取るときもあるけど」
「日傘さして！」
現場で日傘はおかしいだろ
「カズオッチもだけど、ダイチも髪の毛が伸びるの早いわよねえ」
「そっかな」
「頭皮の血行が異常なほどいいのね、憎いっ」
愛里は こっち来ねえのかな
「前向いて！」
「イデッ、シンシンおじちゃん、首おかしくなんだろ」
「おじちゃんて誰よ」
て言いながら俺の髪カットしていくシンシンおじちゃんは男前でさ
「シンシンおじちゃんはさ」
「だからおじちゃんて誰よっ」
「いつから美容師になろうって思ったの？」
「無視？ スルー？ おじちゃん呼びに関してのワタシの抗議はスルー？
そうねえ、高校生するときには決めてたわよ」
高校生か
「ワタシがネクタイ締めてスーツ着て銀行に勤めるなんて想像できる？」
想像したことねえけど
「小さい頃からこうだったからね、普通の仕事はできないなあと思ってたの」
「そうなんだ」
「それに美へのこだわり？ 美容はワタシのための道だわってね」
おじちゃんのための道・・・か
「ああ、な～に？ ダイチもヘアスタイリスになりたいの？」
「や、全然興味ねえ」
「全然？ 全否定？ ヒッドーイ」
よくこんなしゃべりながら手え止めねえでできんなあ
「ダイチはいっそ弁護士になってくれないかしら」
「弁護士？ なんで？」
「こういう商売してるとねえ、いろいろあるのよ」
「顧問弁護士いるんじゃないかねえの？」
「いるけどねえ、今の人、硬った～い人でね、僕はLGBTには反対ですって、
そんなものどーでもいから早く問題を解決して！ ってカンジ」
たしかに だよな
「ワタシだってあんなヘンなムーブメントやめて欲しいわよ」

俺に言われても・・・さ

「ワタシたちはマイノリティ、それは個性だと思ってるから」

マイノリティ・・・

「個性を認めようと認めまいと、それも個人の自由でしょ」

そっか だよな そんなも・・・

「偏見とかでさ、辛れえこととかねえの？」

「偏見なんて世の中に溢れかえってるわよ、偏見がなくなるときは人類滅亡したときね」

「そっか」

「森下ファミリーは偏見は皆無よね、やたらとドライで合理的な女は一人いるけど」

かあちゃんか

「ミサトッチが初めてカズオッチを連れてきたときの話、したかしら？」

「うん」

死ぬほど聞かされてる

「髪はね、もうどうすればいいの？ くらい悲惨だったけどね」

これ話すと止まんなくなんだよな

「可愛い顔した男の子でね、今のダイチくらい？ もうちょっと上？」

今のダイチにそっくり！ ミサトッチはチョーメンクイなのねって、

カットしたらワタシのカットが映えるのよ、もう最高の気分だったわ、

あとから聞いたら、ホームレス連れてきちゃったって！ ビックリ！ はしなかつたわ、

ミサトッチならそうよねって納得？ そのへんに転がってる男じゃねえ、

自分好みの男ならホームレスでも連れてきちゃうってミサトッチよね」

小せえ頃からずーっとおんなし話聞かされてんだよな

「しかも、そのときはヒトミッチを妊娠してたの、ワタシはすぐわかったわよ、

女の勘？ 女じゃないけどね、オカマの勘は・・・」

愛里はどうしてっかなあ

「ダイチ、前見て！」

「イデッ！」

「ダイチったら、アイリン気にしちゃって」

「や、そういうんじゃ」

「あの小さくて可愛かったダイチが色気づいちゃって」

「そういうんじゃねえよ」

「男のフェロモンの匂いがする」

「フェ、フェロモン？」

「ムンムンする」

「ムンムン？」

「可愛い！ 真面目な顔しちゃって」

「な、なんだよ、シンシンおじちゃんからかわねえでくれよ」

「おじちゃんて誰？」

「まだ？」

「またスルー？ もうすぐ終わるわよ」

そんで・・・

「日焼けした顔にすごく似合うわ、ワタシって天才！」

とうちゃんとおんなし髪型

「それじゃ、次はお姫様たちね」

お姫様・・・たち？

「ミサトッチー！ アイリーン！」

かあちゃんと愛里が歩いてきて

すれ違うとき 愛里がチラッと俺を見て えっ？ て顔してちょっと離れた

え？ なんかヘンなんか？ 愛里、どっかヘンかな？

「ダイチ、さっさとあっちに行って」

「ん、でもさ」

「お姫様の変身はワタシのマジックなんだから見ちゃダメ」

「あ、うん」

ソファんところ行ったら とうちゃんが端っこにちんまり座ってて

ポーッとしてる顔は もう解脱したお釈迦様レベルだな

とうちゃんの隣りに座って いつもとおんしに・・・

写真撮影と吸い殻

ん・・・ なの・・・ おと・・・

カシャッ

え？ 携帯 シンシンおじちゃん

「ツイン父子の寝顔」

あ？

「ほら」

とうちゃんの頭が後ろにのけぞって 俺はとうちゃんの肩にもたれて

「寄り添っちゃって」

「シンシンおじちゃん、こんなん撮るなよ」

メッチャまぬけな顔してんじちゃん

「お姫様たちが変身したわよ」

かあちゃんが来て 後ろから

愛里 メッチャきれい すげえきれい

「ねえねえ、写真撮らせて」

「イヤよ、シンシンが写真ってロクなことがないんだから」

「いいじゃな〜い、ただの家族写真なんだから」

家族 愛里も

「ほら、ミサトッチとアイリンが真ん中に座って」

え、あ、立つか

「カズオッチとダイチが両脇ね」

愛里の隣りに座った・・・けど、愛里、俺のこと全然見てくんねえ

「もっと寄って、入らないわよ」

かあちゃんと愛里がギュッと寄って 俺ととうちゃんも

「なにこれえ、硬くなっちゃって、証明写真じゃないのよ」

え、どうすれば・・・

「カズオッチとダイチ、お姫様たちの肩抱いてよ」

マジ？ 腕を伸ばした・・・ら 愛里が身体スッと前に え？

どうするこの腕？ ん・・・っと あれ？ 手？ あ、とうちゃんと手をつないじまった

とうちゃんもどうしたらいいんかわかんねえんだな

「次はお姫様たちオンリーね」

俺ととうちゃんは立ち上がってシンシンおじちゃんの横に

愛里 メッチャきれいだよ

「はい、次はメンズ」
「俺ととうちゃんも？」
「ワタシの作品よ」
え・・・とうちゃんと顔見合わせて ソファに座った
「やったあ、なにその捕まった犯人写真みたいな顔？」
んなこと言ってもさあ
「次は・・・ミサトッチとカズオッチ、こっちのパネルの前に来てよ」
「イヤよ」
「いいじゃない、若かりし二人がこうなりましたみたいな」
「余計にイヤよ」
「あの」
愛里？
「見たい・・・です」
「愛里さんが言うなら、まあ、しかたないわね」
かあちゃんまんざらでもねえんじゃん
みんなで移動して
とうちゃんとかあちゃんのウェディング写真の前
「アイリン、これね、ヘアも衣装もコンセプトも全部ワタシなのよ」
「夢の世界みたいで、きれいです」
そう言いながら見上げてる愛里の方がずっとずっときれいだよ
「シンシンに騙し討ちされたのよ、ただ写真撮ってもらっただけだったのに」
「騙し討ちはないでしょ」
「騙し討ちでしょ」
とうちゃんは 写真の中のかあちゃんを見てる
写真の中のとうちゃんもかけえよな
これのほんのちょい前まで浮浪者だったなんて思えねえよ
「はい、いいわよ」
俺と愛里のツーショも撮ってくんねえかな
「あの・・・」
愛里が携帯出して シンシンおじちゃんに
「写真撮ってもらえませんか？」
俺と？ 俺とのツーショ？
「いいわよ、アイリンだけ？ それとも」
「いえ、あの・・・ Shin・・・様と」
シン さまあぁっ？
「あらあ、ワタシと？」
「できれば」
なんだよその なんか ファンが好きなタレントと・・・みてえな
「まあ！ 嬉しい！」
嬉しくねえよ

「ダイチ、撮って」
「俺が？」
「ワタシとアイリンのツーショット」
愛里が俺の目も見ねえで携帯渡してきて
「撮りま・・す」
なんだよ愛里 メッチャニコニコしちゃってさ
「撮ったよ」
「ダイチ、見せて」
ちゃんと撮ったよ
「やだあ、ワタシがブス！ もう一回」
んな変わんねえじゃん
「アイリン抱きしめちゃおっかなあ」
なんで俺、オカマのおじちゃんと愛里のツーショ撮らされてんだよ？
しかも、愛里もニコニコでシンシンおじちゃんと抱きしめ合ってた
「撮った」
「あらあ、いい写真！ アイリン見て」
「本当」
嬉しそうにさ
「ありがとうございます」
って、シンシンおじちゃんにかよ
「はい、撮影会終了よ」
え、ちょ
「俺と愛里のは？」
「あ、大丈夫です」
大丈夫？ どういう意味の大丈夫？ 愛里、俺と愛里はつき合ってるよな？
「この写真、大切にします」
「アイリン！ 大切にするだなんて可愛いっ」
また抱きつくしさ
そんで 俺はなんでシンシンおじちゃんに嫉妬してんだよ？

シンシンおじちゃんの店を出て
「とうちゃん」
とうちゃんの耳元で
「せっかくだからさ、かあちゃんと一緒に歩いたらいいんじゃないか？」
「美里はアイリちゃんと歩いてえんじゃないか？」
「んなさ、せっかく来たんだからさ、デート気分つつうかさ」
俺も愛里と手をつないで歩いてえしさ
「ダイチ」
え とうちゃんが情けねえ顔して

「俺はダイチといるとホッとすんだけどよ」
そっか だよな 表参道でかあちゃんにとってのはな
「そんじゃ、とうちゃんと俺がデート気分で歩くか」
「んなデートってよ」
とうちゃんがやっと笑った 表参道来てから一回も笑顔なかったもんな いつもだけど

俺とうちゃんの前を歩く愛里とかあちゃん
すれ違う男たちがみんな愛里のこと見てく
まあ、おっさんたちはかあちゃんのこと見てっけど
「とうちゃ・・・」
とうちゃんが夢見てるみてえな顔になってて どした？
視線が テンテンテン かあちゃんか
だよな 俺も愛里のことずっと見ててえもんな
え？ 愛里とかあちゃんがこっち振り返って笑ってる なに？ どした？
あっ そこ信号あんのに 危ねえ
走って愛里のことつかまえて とうちゃんもかあちゃんのことつかまえてた
「信号、赤だよ」
「あ・・・」「あら」
これは離れてらんねえな

今からどうすんのかな 帰んのかな いつもは帰るよな
とうちゃんとかあちゃんが帰ったら、俺は愛里とどっか行くか？
「あ、そうよ、私、リップがなくなりそうなのよ」
リップ？
「愛里さん、私が使ってるブランドはここだから、つき合ってくれる？」
「はい」
そんじゃ俺も
「ダイチとカズオは外で待ってて」
「いいよ、一緒に行くよ」
「ジャマ」
「ジャ、ジャマ？」
いっつもどこでもつき合わせんじゃん
「男がコスメの店をウロチョロしたってジャマなだけ」
そうっすか
かあちゃんと愛里は店ん中入ってっちまって
俺とうちゃんは向かいっ側の道路っ端の柵みてえなのに腰かけて
「お・・・」
とうちゃんがかがんで 何してんだ？ 吸い殻？ 珍しいな

「昔はよくこういうの拾ってよ」
とうちゃんがペタンコになってる吸い殻、指で持って
「こうやってよ、んで、こうやって火つけてよ」
とうちゃんが手にすると、なんでもすげえ大切なものに見える
「とうちゃん、いつ煙草やめたんだっけ？」
「俺はいつも吸ってたっつうんじゃないかあ」
「かあちゃんも吸ってたんだよな」
「吸ってたな」
かあちゃんなら葉巻でも似合いそうだよ
「ヒトミのこと妊娠してるときは」
妊娠したからやめたんか
「タバコの煙の匂いすっと気持ち悪りいっつってよ」
え、自分の意志じゃねえの？
「その喫煙所みてえな、そば通るとよ、気持ち悪りいって吐いてよ」
マジか、そんなだったんか
「ヒトミときはツワリひどくてよ、かわいそうだよ」
それは聞いてっけど
「んな辛れえ思いしてよ、生んでくれんだなあって」
とうちゃんは、かあちゃんがねえちゃんと俺のこと生んでくれたのを
「ありがてえなあ、ありがてえじゃすまねえけどよ」
いっつも、こう言うんだよな
「ダイチは吸ってんのか？」
「俺は吸ってねえよ」
とうちゃんの耳元に
「あんときだけだよ」
「そっか」
あんとき・・・
俺が中三のとき・・・

一年のときから仲良くしてた友だちに
とうちゃんが浮浪者だったっつうことや少年院に入ってたっつたら
「えっ」つって なんか汚ねえもんでも見るみてえに俺のこと見てさ
そんでスッと離れてちまってさ
次の日から「おはよう」つっても無視されてさ
小学校の高学年ときもそういうことあって
それでも、こいつだけはわかってくれるって思ったから
けっこうショックでき そんで帰り道
俺の隣の席で、成績はまあいいんだけどちっとワルみてえな同級生が
「森下、やる」つって煙草の箱渡されて 一本っきゃ入ってなかったけど

それでも、俺は、ええええって震えちまって
返そうと思ったらもう走ってっちまって
追いかけると目立つかなと思っちゃって あわてて制服のポケットに隠してさ
そんで 夜になって なんつうか 好奇心？ ちっと反抗期？ 親にじゃねえけど
煙草の箱とチャッカマン持って あの野っ原行ってさ
なんかメッチャ怖くて そんでもチャッカマンで炙って火いつけて
どうやって吸うんかわかんねえから思いっきり吸ったらゲッホゲホしちまって
目にも沁みっから涙出ちまってゲッホゲホしてたら
目の前にとうちゃんが立っててさ
俺 ぜってえ叱られんだろうなと思ったら
「俺にもちっと吸わしてくれよ」つって 俺の横にしゃがんでさ
俺はなんか悪いこと見つかった気分で そのまんまとうちゃんに渡して
そんで、とうちゃんが人差し指と親指でつまんで フーッて煙吐いて
それがメッチャかっこよくてさ
「俺もダイチくれえんときにはもう吸ってたな」
えっ？
「友だちつつうか、まあ友だちが吸ってんの、俺にくれてよ」
「え・・・ 中学生んとき？」
「俺は中学行ってねえからよ」
わかってんのに、ドッキドキしてっからそんなこと聞いちゃまって
「13、14 くれえんときかな」
「そっ・・・か」
「なんかよ、俺にも分けてくれんだって、嬉しくってよ」
「そっか」
「うめえと思ったことねえんだけどよ、吸ったのもらうと嬉しくってよ」
とうちゃんが指でつかんでる煙草見ながら
「友だちだって思ってくれてんだなって」
友だち・・・
「働いてっときもよ、たま～に、たまにな、先輩がくれてよ」
俺は いつのまにか とうちゃんの話に引き込まれてって
「ありがてえなって、俺はタバコ買う金なんかねえしよ」
「その頃は煙草、好きになってたの？」
「好きつつうか、もらうと嬉しかったな、仲間だって思ってくれてんのかなってよ」
仲間・・・
「浮浪者んときは、仲間のおっちゃんがシケモク拾ってきてよ」
「しけもくってなに？」
「落っこちてっだろ、吸ったやつ」
「吸い殻？」
「ん、これはまだまだ吸えんなっつってよ」
とうちゃんが笑いながら話してて

「なんもすることねえしよ、腹へってっから、シケモク吸ってっど気いまぎれてよ」
「気が紛れる？」
「こうやってよ」
とうちゃんが煙草に口つけて吸って フーッて煙吐いて
「なんかポケーッとできるつつうか、最初っからポケーとしてんだけどよ」
そう言って笑って
「あんがとな」 つって俺に煙草渡そうとしたから
「とうちゃん、ごめん」
「どした？」
「煙草・・・ 吸って」
「一人で吸うなよ」
え？
「とうちゃんにも分けてくれよ」
俺は・・・ なんか・・・ 涙出て
「とうちゃん・・・ ごめんな」
「とうちゃんにも吸わしてくれたじゃねえかよ」
こんなとうちゃんを とうちゃんがどんだけかけえか
わかんねえヤツは 俺の友だちじゃねえ
「とうちゃん・・・ 大好きだよ」
「とうちゃんもダイチが大好きだよ」
とうちゃんが
「ほれ」
俺に煙草を渡そうとすっから
「とうちゃん、俺は煙草、辛れえし苦げえつつうか、吸えねえ」
「そっか？ そんなじゃ、とうちゃんがもらってもいいんか」
「うん」
「あんがとな」
とうちゃんはニッコリして 俺の隣りで 最後まで煙草吸って
俺はそれをずっと見てて
とうちゃんは吸い終わったの地面で消して、残った吸い口んとこ持って
そんで、俺と一緒に家に帰った
玄関とこで二人でシュッシュってハッカ水かけあってさ 笑ってさ
あれからは 吸ってねえ もう二度と吸わねえ
とうちゃんみてえにカッコよく吸えねえよ 永遠にさ
次の日 隣りの席のやつが
「森下」
つって耳元で
「吸った？」
「咳ばっか出てムリだった」
「カッコ悪るっ」

「なんで俺にあんなん渡したんだよ？」
「森下なんか珍しく落ち込んでたじゃん」
友だちとのやり取り 見られてたんか
「気分転換に？ なんちって」
笑ってっけど
「まあ、とうちゃんといろいろ話せたかな」
「ヤッパ 見つかりった？ メッチャ怒られたんじゃね？」
「怒んねえよ、俺にも吸わせてくれよっつった」
「それだけ？」
「そんだけ」
「逆に効くやつじゃん」
「効いた、メッチャ効いた」
とうちゃんは全然そういうつもりじゃねえんだろうけどさ
そいつとは、高校は別になったけど、卒業まで仲良くしてたな

「ダイチ、どした？」
「え？ ああ、あんときのこと思い出してた」
「一緒にな」
とうちゃんがイタズラっ子みてえな顔してさ
「とうちゃんさ、あんときどうして俺があそこにいるってわかったの？」
「夜にこそっと出てくからよ、心配になってついてってよ」
そうだったんか
「そしたらよ、タバコ吸ってっからよ」
そっか
「そんなら俺もちっと吸わしてもらうかなってな」
「マジでそれ？」
「ダイチに分けてもらえんなんてな、嬉しかったな」
とうちゃんは、なんつうか 自由だな
「若けえ頃な、ねーちゃんが吸ったシケモク吸おうとしたらよ、
シケモクなんか吸うなっつって新しいの一本くれてよ」
「へえ」
「新しいのもらうのも嬉しかったけどよ、やっぱ、なんつうか、
ねーちゃんが吸ったの分けてもらいてえっつうか、な？」
「間接キス？」
「や、んな、んなんじゃねえけどよ」
とうちゃんが照れ照れになって
「それでもよ、ねーちゃん寝たあと、灰皿洗おうと思ってよ、
まだこんなに残っててよ、もったいねえなって、んでゴミ箱開けたら、
小せえスーパーの袋捨ててあってよ、それに入れてな」

「持って帰ろうとしたの？」

「帰るっつうか、出てくときに持ってこうと思ってゴミ箱の横のすみっこにな」

「持ってったの？」

「次の日はなんかバツバタして、それで、戻ってきちまったから」

「あ、そっか」

「ねーちゃんは、いっつも新しいの吸わしてくれてよ」

「え、なんかごめん、俺、吸いかけで」

「ダイチに分けてもらうのが嬉しいんだからよ」

「俺はもう吸わねえよ」

「そっか」

「うん、メッチャ辛くて苦くてさ」

「何が苦くて辛いの？」

かっ かあちゃんっ

「やだ、カズオ、なんでそんなもの持ってるの？」

「あ、ご、ごめん」

とうちゃんがあわてて喫煙所の吸い殻入れの上にそ〜っと置いて

とうちゃん、表参道にはシケモク拾いに来る人はいねえよ 中に落とさねえと

とうちゃんのかあちゃんには言わないでくれてた

だから あんときのごめんは 俺ととうちゃんの

辛くて苦くて そんな大切な思い出だよ

お祝いとお礼

俺は今オープンの中を覗いてる
甘めえいい匂いがしてる
なんでこういうことしてるかっつうと
まあいろいろあってさ いろいろあったから長くなんだけどさ

表参道でかあちゃんと愛里が店から出てきて
とうちゃんが吸い殻入れんところに行ったとき
俺の携帯が鳴った
ヤッさん？
「ヤッさん、久しぶりっすね」
「だいづ、生まれた！」
「え？ あ？ なにが？」
「赤ん坊」
「え、だれの？」
「監督のだっぺ」
「監督の赤ちゃん生まれたんすか？」
「生まれんのがあ盆休みのあたりだっつってではあ」
そういえば・・・んなこと言ってたな
「俺とスギさんでえ、どしてんだっぺなって電話したんだした」
「いつ生まれたんすか？ 今日っすか？」
「月曜、13日の明け方っつってではあ」
「13日に生まれてたんすか」
「男の子だっではあ」
「よかったっすね」
「おっかあたちがあ、盆明けの、あさってか、赤飯炊くから持ってげっては」
「赤飯？ そんな俺も・・・なんか持ってった方がいいっすよね？」
「だいづはいっからあ、だいづのことは、監督もわがってっぺ」
わかってるって？ なに？
「おっかあたちがあ、めでてえ話だからあ、だいづにも知らせてやれっては」
「ありがとうございます」
「そんな盆明けになあ」

「おいっす」
そっか、監督に赤ちゃん生まれたんか
「監督さんの赤ちゃんが生まれたの？」
「ん、めでてえ話だからっつって電話くれた」
「13日って言ってなかった？」
「月曜、13日に生まれたって」
かあちゃんと愛里が顔見合わせる
「なに？」
「13日の誕生日仲間にようこそってカンジ」
顔笑ってねえけど
「金曜日じゃなくてよかったですね、私は金曜日で」
「あら、そうなの？」
「はい」
そっか、この二人は誕生日が13日、あ、とうちゃんもだよ
え、俺以外全員13日生まれじゃん
「お祝い買わないとね」
「ヤッさんは、俺はいいつつってた」
「あんたはいいわよ、私からよ」
「なんでかあちゃん？」
「あんたがお世話になって、カズオもお世話になって、おかげで」
かあちゃんが左手、俺の前に立てて
「指輪もらったから」
「それでもかあちゃんからつつうのは監督さん逆に」
「行きましょう」
「どこに？」
「お祝いを買うのよ」
「え、今？」
「ついでなもの」
かあちゃんが愛里と一緒に目の前のビルに入ってた
とうちゃんと顔見合わせて、あとついてったけどさ

ここは・・・ なんか見たことあんだよな あのロゴがさ
かあちゃんの部屋着だ そんで 愛里のもだ
洗濯してっから見てんだよ ここに赤ちゃんの服なんてあんの？
あった こっちに あれ？ かあちゃん？
「かあちゃん、赤ちゃんのはこっちにあるよ」
かあちゃんは俺の方見てフンッて鼻で笑ってっけど
「かあちゃん、赤ちゃんのはこっちだって」
「憶えておきなさい」

「なにを？」
「出産祝いでいちばん困るのはベビー服」
「え？」
「いちばん喜ばれるのは現金」
「現金はちょっと・・・」
「そうね、あんたと監督さんの立場のバランスを考えるとね」
「そんじゃどうすりゃいいんだよ？」
つか、かあちゃんからなんだろ？
「赤ちゃんを産んだのは誰？」
「え？ 監督の奥さん」
「出産祝って、たいてい赤ちゃんのものなのよ」
いちばん困るつつったじゃん
「でもね、大変な思いをして生んだのはお母さん」
「うん、それはわかってる」
「そのお母さんに、よく頑張りましたねっていうねぎらいはないの？」
ないのって俺に聞かれてもさ
「出産直後や、まあ1ヵ月は寝たり起きたりだから」
かあちゃんがつるしてある・・・ カーディガン？
「こういうネグリジェの上にちょっと羽織れるものが便利なのよ」
「へえ、そうなんか」
「愛里さん、このショートカーディガンどう？」
「ショートって楽ですよ、丈が長いとズーっと着てるときはいいけど」
「そうよね、そうなのよ、どっちの色がいいかしら？」
「白の方が、中がどんな色でもいいかなって」
「愛里さん、そうなの」
真ん中にある俺は ジャマっすよね
とうちゃんは？ 入口ところでポーッとしてる 俺もとうちゃんとか行こう
かあちゃんは・・・ さっきの白いのに決めたんか 即決の人だもんな
店員さんに渡してる え ああ 自分も見んのか
楽しそうだな 愛里もニッコニコしてさ
「あっ」
とうちゃん？ どした？ なんかすげえ怖えもん見たみてえな顔してっけど？
「ダイチ・・・ あれは・・・ ヤベエ」
「ヤベエ？ なにが？」
「美里がアイリちゃんにあててみてんの」
かあちゃんが愛里に？ 短パンと上がフワツとした メッチャ可愛い
「昔、ねーちゃんが、ああいう短けえの履いててよ」
かあちゃんが？ あんま見たくねえな
「俺、鼻血出しちまってよ」
「えっ 鼻血？」

「あれは、ヤベエぞ」
「そんじゃ、とうちゃん、かあちゃんに言ってよ」
「俺は・・・」
困った顔で俺のこと見て 弱々しく首振って
「え、そんじゃ俺？」
「ダイチが鼻血出したらよ、アイリちゃんが・・・なあ」
俺が・・・ 鼻血・・・ あの短パン履いてる愛里 あっヤベエ
「言うてくる」
かあちゃんと愛里が「こっちの色もいいかも」とかノンキに言うてるそばに行って
「かあちゃん、ちょっと」
「なによ？」
「ちょい、こっち」
かあちゃんの腕引っ張って
「なんなのよ？」
俺は小せえ声で
「とうちゃんが」
「カズオ？」
「短パンはヤベエって」
「ヤベエ？ どういうこと？」
「とうちゃん、昔、かあちゃんが短パン履いたの見て鼻血出したって」
「ハ？」
ポカんとされてもさ 俺はまだ生まれてねえから知らねえよ
「エーーーーッ」
か、かあちゃん？
「あれって・・・ そういうこと？」
んな、口開けてビックリした顔で俺のこと見てもさ
「あ、そう、わかったわ」
「以上っす」
「愛里さん、このセットアップより・・・ あ、これがいいわ」
「わあ、可愛い」
「白地に小さなイチゴのワンピ、愛里さんにピッタリじゃない？」
メッチャ可愛い
「でもキャミだと、そんなに長く着れませんよね」
「この赤いショートカーデと合わせたら？」
「すごい可愛い」
「でしょ」
マジ可愛い メッチャ可愛い ちょ・・・ ヤベエ
いっそ体操着みてえなストンとしたやつにしてくんねえかな
「ちょっと！」
え？

「ジャマ」

ジャマってさ わかったよ どうちゃんどこ戻るよ

「どうちゃん、短パンはなしになった」

「そっか、よかったな」

「うん」

あのイチゴのやつもけっこうヤベエけどさ

かあちゃんと愛里が袋ぶら下げて店から出てきた

「愛里、持つよ」

チラッと俺を上目遣いで見て

「ありがとうございます」

どうちゃんもかあちゃんの袋持って

「ちょっと待って」

「かあちゃん、忘れもん？」

「あんたの現場のおじさんたちの奥さんへのお礼」

「お礼？ なんの？」

「あんなにいっぱいお肉やおかずをいただいたでしょ」

「んな、お礼とか、そういうの求めてねえっつかさ」

「ちょっとしたプレゼントって嬉しいものよ」

「え、マジ？」

「何がいいかしら、あまり気を張るようなものじゃなくて」

お礼っつう段階で気い張んじゃね？

「何かないの？」

「え、俺？」

「あんたは会ったでしょ、普段気楽に使えるような使ってるようなもの」

あんどき使ってたのは・・・

「ラップとかホイル？」

「そういうものをもらって嬉しい女はいない！」

「え、そんじゃ・・・んっと・・・」

なんだ？ ふだん使ってる・・・気楽に・・・あ！

「エプロン」

「エプロン？」「え？」

「なんかこう小せえ花柄のさ、スギさんの奥さんは水玉だったかな」

「あの・・・」

「愛里、なに？」

「エプロンはやめた方がいいと思います」

「なんで？」

「私が小学生のとき、母の日に」

エプロンあげたんか

「パパがエプロンをプレゼントして」
「えっ、母の日に愛里のお父さんがお母さんに？」
「ママはそういう行事ごとが好きなので、父の日にはママがパパに」
「そっか」
「ママがエプロンを見て、パパは私にもっと働けていうの？ って」
「や、んなつもりじゃねえだろ」
「そうですけど、エプロンでラップやアルミホイルと同じカンジなのかなって」
「えっ マジで？」
「うちの社員でもね、共働きで、ご主人が」
「いいよ、かあちゃん、わかったよ、エプロンは却下だろ」
「お菓子でも買う？ マカロン好きかしら？」
「マカロン・・・ さあ」
「あの、ママがとにかくどこかに行くときお菓子を買って持っていくんですけど」
「ああ、言いたいことがわかる気がするわ」
なに？ 俺はわかんねえよ
「ですよ、THE・手土産みたいなカンジで」
「そうなのよね、さりげなさがねえ」
さりげなさ・・・ 菓子にさりげなさって・・・ あ！
「あのさ、奥さんたち、愛里のロールケーキが美味かったっつってさ」
「え・・・」
「愛里のロールケーキなら喜ぶんじゃない？」
「イヤです！ もう二度と作りたくないです！」
二度とって・・・
「ダイチ、あんたが作れば？」
「俺がなに作んの？」
「ロールケーキよ」
「俺はそういうのダメなんだって、こんくれえかなってやっちまうからさ」
「私、レシピ持ってますから、そのとーりに作ればできます」
「や、つい、こんくれえでいっかって」
「コンクレーにならないように監視しましょうか？」
愛里、なんでそんなに攻撃的な目で攻撃的な口調で言うんだよ？
「それがいいわね、愛里さんが監視してダイチが作る」
「え？ あ？」
「奥さんたち、手作りのロールケーキを喜んでくれたんでしょ？」
「え、ああ、うん、まあ」
「だったら、ダイチが作ったロールケーキなら最高のお礼になるじゃない」
「え・・・ まあ、そうだけど・・・さ」
「それじゃ決まり、帰りましょう」
なんだよそれ？ お礼とか言い出したのはかあちゃんでさ そんで俺がって
「え？ 今夜作んの？」

「明日です、一日置かないとなので」

「そっ・・・か」

明日・・・ 明日は愛里と二人きりでどっか行きてえと思ってたのにな
愛里と二人っきりでロールケーキ作る・・・のも悪くねえか

そんでもさ

「かあちゃん、俺の盆休み、明日で終わりなんだけど」

「そうね、私もよ」

そうだけどさ

「久しぶりに楽しいお盆休みになったわ、愛里さんのおかげよ」

「私も楽しいです」

愛里はすーっかりかあちゃんに懐いちまってさ

それはそれで嬉しいんだけどさ

「帰りましょう」

かあちゃん的一声で 地下鉄の入り口に向かって歩いた

ラッピングとカード

家帰って

ロールケーキの材料は？ って愛里に聞いたら レシピ見せてくれて

薄力粉 ある 卵 ある

「グラニュー糖がねえな」

「私死ぬほど持ってます」

「マジ？」

「この前作ったとき、失敗したら怖いから二袋買っちゃって」

「そっか、あとは・・・ 無塩バターがねえな」

「あります、この前作ったとき、20g でいいのに一本買うしかなくて」

「そっか、あとは・・・ ジャム買えばいいんか」

「ジャムはあなたが作ればいいんじゃないですか？」

「奥さんたちはとうちゃんのイチゴじゃねえとつつうわけじゃねえからさ」

「私は作ったのに」

「うん、メチャ美味かった」

「だったらやっぱりあなたも作ったら？」

「市販のでよくね？」

「そんなのズルイ」

ズルイ？

「わ、わかった、んじゃ作り方教えてくれよ」

「レシピどーり作ればいいだけです」

「愛里、なんか怒ってね？」

「え？ 怒ってないですけど」

「そんでもさ、今日、なんか俺のこと全然見てくんねえしさ」

「それは・・・ 慣れないっていうか」

「慣れねえ？ 俺に？」

「あなたにっていうか・・・」

「なんで、んな距離できちまうの？」

「距離とかじゃなくて」

「そんじゃ、なに？」

愛里がチラッと俺の顔見て 目線そらして

「今は、そのデロ〜ンとしたTシャツ着てるから」

「あっ、これ？ ベつのに着替えっか？」

「じゃなくて、なんていうか・・・」

「なに？」

「自分でコーディネートして、こんなこと言うのもあれなんですけど」

「どっかへんだった？」

「じゃなくて、すごく似合ってた」

「あ、そっか、え？ そんじやなにがいけねえの？」

「いけないんじゃないかって、自分的にも完璧なコーディネートだなんて」

「そっか、んで？」

「いいでしょう」

「よくねえよ、なんか避けられてるっつうかさ」

「だから！ THE・モリシタダイチにはなかなか、まだどうしても慣れてないから」

「意味わかんねえんだけど」

「わからなくていいです、私の問題なので」

「愛里の問題ってなに？」

愛里が メッチャ睨んで なに？

「それじゃ言いますけど」

「あ、おう、なに？」

「あなたとおとうさんが」

とうちゃん？

「電車の中や通りを歩いているときやあの柵に座ってたとき」

「え？ なに？」

「女の子たちがこんな顔してあなたを見てて」

なんだその目えパチパチ？

「おとなの女の人たちはおとうさんを見てこんな顔してて」

なんだその胸んところで手えにぎって？

「おかあさんと言ってたんです、ゼーンぜん気がついてないですねって」

「何に？」

「視線」

「気いついてたよ」

「気がついてたの？」

「男たちが愛里のことこんな顔して見ててさ」

「え？ なにその顔？」

「おっちゃんたちはかあちゃんのことこんな顔で見てたけどさ」

「ヘン顔？」

「ヘン顔じゃねえよ」

「なんかわかんないからもういいです」

「なんでそうバツツとさ」

「ロールケーキに意識を戻してください」

「え、あ、おう」

「あの、ラッピングした方がいいんじゃないですか？」

「ラッピング？ ホイルで包むんだろ？」
「じゃなくて、この前はそこまで頭がまわらなかったんですけど」
「ホイップクリームとか乗っけるつつうこと？」
「黙って」
「あ、はい」
「女の人は、ちょっとしたものをもらうのでも、きれいな包装紙とか袋とかに」
「俺は・・・ そういうの、できねえよ」
「わかってます、私が明日買いに行きます」
「そんじゃ俺も一緒に行く」
「あなたは選べないでしょ」
「そうだけどさ、そんでもさ」
「あと、カードもつけたらいいかも」
「カード？ なんの？」
「一言お礼か何か書いて」
「俺が？」
「あなた以外の誰が書くんですか？」
「なに書けばいいんだよ？」
「ありがとうございますとか」
「んなことわざわざ書かなくてもよくね？」
「私なら」
愛里なら？
「むしろカードだけでも嬉しい」
「マジ？」
「この前はロールケーキを作るという重圧でそこまで考えられなかったけど」
「そんじゃさ、愛里はさ、俺からカードもらったら嬉しい？」
「え・・・ あなたからって考えたことないですけど」
「愛里が嬉しいなら俺書くからさ」
「今は私にじゃなくて奥さんたちへのカードの話ですけど」
「あ、おう」
「明日、私がカードとラッピング用の何かを買ってきます」
「俺も行く」
「あなたが来ても」
「俺も一緒に行く」
愛里が 無表情で俺の顔ジーッと見てっけど
「愛里、俺も行く」
「そうですか、わかりました」
「おう」
そんくれえはさ、ちっとデート気分つつうかさ いいじゃん

つうことで・・・

愛里と俺は今、駅近くの雑貨の店にいる

「これがいいかも」

「え、どれ？」

「これはキュッと縛るとリボンになって、同じ柄の手提げ袋もついてて」

「あ、そう・・・なんだ」

「えっと、花柄のエプロンしてたのは？」

「んと、ヤッさんの奥さん」

「そちらには、この小さなハート模様ので」

ハート？ 俺からのでハート？

「花柄が好きということは、こういう可愛い系が好きだと思います」

「へえ」

愛里が横目でチラッと俺を見上げて

「興味ないなら先に帰っていいですよ」

「や、興味なくねえよ、わかんねえだけでさ」

「だったらなんで来たの？」

「愛里と一緒に買い物してえじゃん」

俺の顔また見上げてジーッと見てっけど

「なに？」

「そうですね」

だろ？ だろ？

「あなたからのプレゼントだし」

「おう、愛里がいてくれて嬉しい」

いろんな意味でさ 今だけじゃなくてさ

「もう一人の奥さんは・・・水玉って」

よく憶えてんな、チラッと申っただけなのにさ

「このピンクの水玉模様ののが可愛いと思う」

「そっか、うん」

「ママが言ってたことがあって」

「愛里のママ？ なんて？」

「若い頃はラッピングも可愛いのをもらえたのに、年を取ると途端にババくさい」

「ババくせえってさ」

「ママが言ったんです、女は永遠に可愛いものが好きなのにねえって」

「え、そんじゃさ、たとえば、かあちゃんに何か贈るときも可愛いのがいいんかな」

「あなたのおかあさんは可愛いではなくてセンス」

「センス・・・」

ムリだ 俺にはムリだな

「あとはカードですね、どこ？ あそこにある」

愛里が歩いてくから俺もあとついてって

「どれがいいかなあ」

え？　そこって
「愛里、そこは出産祝って書いてっけど」
「あなたのおかあさんに頼まれたんです、監督さんの奥さんにとって」
かあちゃんも、んなこと愛里に頼むなよ
「私のセンスを信頼してくれてるってカンジで嬉しかった」
「え、あ、そっか」
「あ、これ！」
花束の絵？　赤ちゃんひとつもかすってねえけど
「ほら、花束を包んでる紙に Congratulations on your new baby って」
言われてみればつつうくれえ目立たねえけど
「お母さんにですから、こういうステキなお花の方がいいと思うんです」
「そっか、愛里が言うんなら、うん」
「次は・・・」
奥さんたちのか　それともまたなんかかあちゃんから頼まれてんのか？
「この白地に水彩画のお花が一本ってステキ」
そうなんか　俺はよくわかねえけど
「いっぱいある、どのお花が・・・カーネーションじゃなくて・・・」
カーネーションは母の日か　母？　ヤッさんの奥さんとスギさんの奥さん・・・
「愛里」
「なんですか？」
「カーネーションじゃダメかな」
「母の日じゃないですよね」
「あのさ」
俺は　愛里に　あの日　ヤッさんの奥さんとスギさんの奥さんが泣いたときの話を
スギさんの奥さんは、俺がかあちゃんたちつつたら呼ばれたかったって
「だから・・・カーネーション？」
「母の日じゃねえんだけどさ」
愛里が下向いて　え？　泣いてる？
「あ、愛里？」
「あの・・・　お願いがあるんですけど」
「いいよ、なに？」
「その、女の子を亡くした奥さんに・・・　私が書いたらダメですか」
「愛里が？」
「その女の子の代わりになんかなれないけど、でも、おかあさんて呼ばれたかったって」
愛里は
「頼むよ、愛里、俺はそういうのうまく書けねえからさ」
「いいですか？」
俺は・・・　愛里に感動して・・・
「頼む」
「それじゃ・・・　カーネーションのを二枚、赤より・・・ピンクがいいですね」

「おう」

愛里に贈るなら どのカードがいいのかな

「愛里は、どれが好き？」

「え？」

愛里が俺の顔見て

「私は・・・」

そんで カード置いてあるとこ見て

「あなたが拾ってきてくれる小石が好きです」

愛里 やめてくれ 俺 店ん中で泣いちゃうから

「そっか」

「はい」

「そんじゃ、買ってくっから」

「あの、袋代は私が払います」

「いいよ、俺のだから」

「カード二枚はちょっと高いので、でも袋は二枚で 980 円だから」

「いいよ、俺が払うからさ」

「私が言い出したことだから」

「いいって」

「払わせてください」

愛里がバッグから 封筒 それって

「愛里、それ、愛里のバイト代だろ」

「はい、まだ 1000 円残してました」

「マジダメだって、んな大切な金さ」

「大切だから、あなたの大切な人たちのために使いたいんです」

「愛里、んな、そこまでしねえでも」

「あなたのおかげでできたバイトだから」

愛里・・・

「いろいろ考えたんです、一緒にお茶？ とか、でもカフェのって高いから」

俺は・・・

「この袋なら買えるって」

「そっか」

「はい」

「愛里、ありがとう」

「よかったです、1000 円以内で買えるものが見つかって」

ニッコリしてる愛里が たまんねえよ 俺 泣きそうになんの必死で我慢してんだよ

俺がカード買って 愛里が袋買って

愛里が

「はい」

って、俺の手の中に 10 円玉？

「愛里、これは？」

「おつりが 20 円だから半分こ」

「愛里・・・」

「10 円で何が買えるのかな？」

「使えねえよ、これは」

「使えないですよ、10 円のものって思いつかない」

「じゃねえよ、もったいなくて使えねえよ」

「もったいない？」

「これは、愛里がバイトした記念に一生とっておく」

「一生って」

笑ってっけど 俺には すげえ 10 円以上のもっともって価値があんだよ

「そんじゃ帰っか」

「はい」

愛里と手をつないで 家まで歩いた

ロールケーキ作り

つうことで 俺は今オープンの中を覗いてる

「愛里、もう焼けてんじゃないね？」

「オープンのタイマーはあと5秒です」

「おいっす」

「3・2・1」

ピピッピピッ

「出してください」

つうような、愛里のメッチャ正確な指示で、ロールケーキは出来上がった

「冷めたら両端をカットして、半分にカットしてホイルに包めば大丈夫です」

「そんであの袋に入れて持ってけばいいんだな？」

「はい」

「ジャム少し残っちゃったな」

「ちょっと食べたい」

俺がスプーンでちょっとすくって愛里の口元に差し出すと

俺のことチラッと上目遣いで見て そんでスプーンのジャム舐めた

「美味しい」

愛里が舐めたやつの残りを

「あ、美味え」

「この前作ったときは、ジャムが美味しいとか、そういう心の余裕がなくて」

「この前のも美味かったよ」

「そうですか」

「小せえタッパーかなんかに入れとくか」

「これって、ヨーグルトにかけたら・・・美味しいと思う絶対美味しい」

「ああ、だな」

「イチゴのヨーグルトがけに手作りのイチゴジャムって最高」

「そっか、そんじゃまた作っか」

「本当？」

「そんでも愛里がそばにいてくんねえとき」

「私は見てただけですけど」

「アク取って！ つって指示してくんねえとき」

「あなたはアクを取るのが上手でしょ、ビックリしちゃった」

「俺はアク取りはしょっちゅうやってっからさ」

「だったら私がいなくてもできますよね」
「や、なんつうか、タイミング？ わかんねえじゃん」
「アクが出てきたら取ればいいだけですけど」
「そんでもさ」
「共立ても電動ミキサーみたいに早かったし」
「力あっからだけでさ」
「巻くのも上手でビックリしちゃった」
「マジ？ 愛里に言われたとおりにやっただけで」
「クルッて一気に巻かないとひび割れしちゃうからって言うただけです」
「だから一気に巻いた」
「私はこの前巻くときにすごく緊張したのに、あなたは簡単にクルッて」
「巻き寿司作るからじゃね？」
「巻き寿司？」
「たまにだけどさ」
「巻き寿司食べたい」
「晩メシ、ハンバーグなんだけど、巻き寿司にすっか？」
「今日じゃなくていいです」
「そっか、そんじゃ明日・・・は現場、金曜だから、しあさって、日曜は？」
「食べたい」
「そんじゃ日曜に巻き寿司な」
「はい」
明日っから現場って、なんかピンとこねえな 休みボケしちまったかな
「カード書かないと」
「あ、そっか」

ローテーブルで向かい合って
「俺こういうの書いたことねえからなあ」
「思ったことをそのまま書けばいいと思います」
「そのまま・・・ 短くてもいいんかな」
「手書きってところに価値があるから」
「そっか」
なんて書く？ ん・・・っと
ヤっさんの奥さんへ・・・か？
「愛里、ヤっさんの奥さんへでいいんかな？」
「名前を書いた方がいいと思う」
「そっか」
“エミコ
「愛里、エミコおばちゃんていつかな？」
「おばちゃん？」

「おばちゃんじゃん」

「ママが前に言ってたんですけど」

「え、なに？」

「女性はいくつになってもおばさんなんて呼ばれるのはイヤなのよ」

おお、愛里の、愛里のママ劇場が始まった

「ママのお友だちにはおば様でいいけど、お礼のお手紙書くときは様かさんでねって」

「そっか」

「ママがおばさんて呼ばれるのがイヤなだけだと思うけど」

「様かさんにすっから」

“エミコ様”

自分で自分のことおばちゃんて呼んでたけどな まあ、いっか

“この前はバーベキューに呼んでくれてありがとうございます。”

肉とおかずもいっぱい持たせてくれて、愛里やかあちゃんも喜んでました。

かあちゃんは、隠れた名店って言ってました”

ん・・・と あれか

“流れた子の話、俺にとってはすごく大切な話を聞かせてもらいました。

俺のかあちゃんは若い頃事情があって子どもを”

書いていいのかな そんなでもさ あれは俺にとってはメッチャ 書こう

“子どもを流していて、そのことはかあちゃんやとうちゃんにとって

ずっと心のどこかに引っかかっている、でもあの話を聞いたとき

その子は俺だと思ったんです。俺は戻ってきたんだなって。

とうちゃんとかあちゃんの子どもに生まれたくて戻ってきたって。

ありがとうございます。”

なんか・・・ 書き言葉にずっと硬てえな

“すげえ嬉しかったっす

腹減ったら、おばちゃんとか行くんで食わせてください”

あっ おばちゃんて書いちゃった ボールペンだから消えねえよ いっか

“この袋は愛里が選んで愛里のバイト代で買ってくれました

バイト代は、俺の大切な人のために使いたいわって言うてくれました。

ヤッサんとエミコさんは俺にとって大切な人だから。

ロールケーキは愛里と一緒に作ったんで、食べてください 森下大一”

こんなんでもいいかな 書いちゃったからいっか

愛里はまだ書いてる なんて書いてんのかな

「愛里、書き終わったら読ませてくれよ」

「えーっ やだあ」

「読みてえよ、俺のも読んでいいからさ」

「え・・・ それじゃ、もう少しで終わるから待ってください」

「おう」

真剣な顔して書いてる愛里 可愛いな

「できました」

「読ませて」

チロッと俺のこと睨んで

「はい」

カード渡してくれたから、俺も渡した

“ともえ様

私は大一さんとおつき合いさせていただいてる上原愛里です”

大一さんとおつき合いって書いてる 愛里が書いてる メッチャ嬉しい

“私のために唐揚げ用のお肉をくださったり、先日はバーベキューのお肉と、

おかずもありがとうございます。とても美味しかったです”

愛里はこういうの書くの慣れてんだらうな すげえきれいな文章だな

“こういうことを書いていいのか迷いましたが、

私を感じたことをそのままお伝えしたいので書かせていただきます。

お嬢ちゃまが二歳で星になったと、大一さんから伺いました”

星 ハヤトのとうちゃんみてえだな

“こんなに料理が上手で優しいともえさんですから、

お嬢ちゃまにとってはきっと自慢のお母様だと思います。

もしも、私が・・・ こういうことを書く失礼をお許しください、

もしも私がつともえさんの娘だったら、こう言いたいなって思ったんです。

お母さん、生きてくれてありがとう

お母さんの子どもに生まれてしあわせです”

愛里・・・ 俺が感動してんだけど

“きっとお嬢ちゃまの二年は、ずっとずっとしあわせな二年だったのでしょね

見ず知らずの私にでさえ、こんなに優しくしてくださるのですから。

大一さんがともえさんとえみこさんのためにロールケーキを焼きました。

もしよければ、お嬢ちゃまにもお供えしていただければ嬉しいです

たくさんの優しさと美味しい料理をありがとうございます 上原愛里”

「えっ なんで泣いてるの？」

「感動してんだよ、こんなさ」

「直接的過ぎましたか？ もっとオブラートにくるんだような」

「くるまなくていいよ、これがいいよ、メッチャいいよ」

「あなたがよくても・・・ まあ、いいです」

「ヤッさんの奥さんのも愛里に書いてもらえばよかった」

「あなたらしくてとってもいいと思います、流れた子どもの話も」

「マジ？」

「おばちゃんて書いてましたけど」

「それな、ついさ」

「まあ、それはそれであなたらしくていいと思います」

「マジ？」

「はい」

「そっか」

「もう冷めたから、カットしてラッピングしましょう」
「おう」
「カットはあなたがしてください」
「おう」
両端切り落として 半分に切って アルミで巻いたのを
愛里が袋に入れて、それぞれのカードも入れた
愛里が切り落としたとこ
「美味しい、スポンジがフワッフワしてる」
「愛里のも美味かったって」
「私のはこんなにフワフワになってなかった」
「んな変わんねえじゃん」
「やっぱりあの人間電動ミキサーみたいな共立てが」
「なんだよ、人間電動ミキサーってさ」
「だってもうガーーーって、ビックリしちゃった」
「力はあるんすよ」
愛里のこと 抱きよせて
「ギューーってやらなでよ、息できなくなっちゃうから」
「やんねえよ」
愛里のくちびる フワッフワで イチゴジャムのいい匂いがして
くちびる離すと 愛里がゆっくり目を開けて
「なんか・・・楽しかった」
「俺も」
「一人で作ったときは全然楽しくなかったのに」
「そんじゃ、今度からは二人で作ろう」
「あと10年くらいは作りたくないです」
「俺が肉体労働担当すっからさ」
「肉体労働って ハハハ」
「ずっと、俺がやっから」
「ずっと？」
「ずっと」
「10年先でも？」
「うん、やる」
愛里が俺のこと見て なんか言いたそうに
「愛里、なに？」
「ずっと・・・人間電動ミキサーやってください」
「おう」
愛里 ずっとつうのはさ 俺 マジでずっとだから
10年なんてもんじゃなくてさ もっともっとずっとだから
「すごいですね」
「ん？ なに？」

「キッチン、もう片付いてる」
「そりゃ片付けどろ」
「使い終わると速攻で洗うからビックリしちゃった」
「洗っちゃった方が場所取らねえじゃん」
「私は作ってるときはそんな余裕なかった」
「そういうのも俺がやったから」
「あの・・・」
「ん？」
「私、こんなに何もできないんですよ？」
「だから俺やるって」
「ふつうカノジョの手作りのケーキとか手料理とか」
「そんなんやって欲しいとか思ってねえから」
「でも、あまりに何もできなくて」
「愛里はいてくれればいいからさ」
「いてくれればって、置物みたいに」
「愛里がそばにいてくれとさ、俺、メッチャしあわせだから」
「あなたって」
「ん？ なに？」
「いっつもそうですけど」
「え、なに？」
「よくそういうことをストレートに言えますね」
「思ってること言っただけじゃん」
「そうですか、そうですね」
「そうじゃん」
「そろそろあなたの家に行った方がいいですね」
「あ、だな、晩メシ作らねえと」
「行きましょう」
「おう」
袋に入れたロールケーキ持って 愛里の部屋を出た

赤飯と名前

起きて 顔洗って 作業服着ると 今日からまたバイトなんだな
キッチンに行くと
とうちゃんがヤッさんたちの握りメシに肉味噌つけて焼いてて
「とうちゃん、おはよう」
「ダイチ、おはよう」
俺は愛里の弁当作って
「あれ？ かあちゃんの弁当は？」
「どうせ明日からまた休みだから有給取ったつってよ」
「そっか」
「それでも、チラッと顔出すつってた」
「休みんときは休めばいいのにさ」
「なんかよ、あっちの方でなんかあったつってよ」
「あっちの方？ あ、ニューヨーク支社？」
「ん、もしかすと来週からチロツと行かなきゃなんねえかもしんねえって」
「出張？」
「みてえだな」
「そっか」
とうちゃんまた淋しくなんだろうな そんな愛里がいるからさ
「とうちゃん、今日からまた愛里のことお願いします」
「お願いなんてよ、俺も愛里ちゃんといると楽しいからよ」
「うん、そっか」
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「おう、ありがとう」
美味え
「朝はやっぱとうちゃんの握りメシだな」
「そっか？ おっちゃんたちの握りメシと水入れといたからよ」
「ありがと」
「こっちは、おかず入れてもらったタッパー洗っといたからよ」
スーパーの袋にタッパーびっしり入ってる
今日はすげえ荷物だな
「そんじゃ、いってきます」
「いってらっしゃい」

家を出た

現場 5日くれえっきゃ経ってねえのに なんか懐かしいな

「だいづ！」

「ヤッさん！ スギさん！」

ヤッさんとスギさんも、なんか懐かしいよ

「あれ？ ショーさんは？」

「ショーさんはあ、今日、独身慮と家族寮の排水管と電気の検査があっからあ、
立ち会わねばなんねえんだした」

「そうなんすか」

「ショーさんは寮の管理人として雇われてっからなあ」

「そんじゃ今日は俺が便所掃除とゴミ箱まわりの掃除するんで」

「ショーさんもお、だいづさ頼みてえつつってたした」

「下っ端仕事は得意っすから」

「だいづはなんでもできっぺ」

「あ、これ、バーベキューんときおかず入れてもらったタッパーっす」

ヤッさんとスギさんが顔見合わせてっけど

「とうちゃんがちゃんと洗ったっつってたんで」

「これなあ、おっかあたちはあ、だいづにやったんだした」

「やった？」

「けだのさ」

「けだ？」

「あげたんだした」

「え、なんで？ これ、メッチャ新品っすよ」

「俺たちがあ、だいづが持ってくるタッパーがあ、ちょっと、なあ」

え、ちょっとなに？

「やばついはんで」

「ん？ え？」

「ちょっと古くなってんだよっつってだらあ、新しいの買って、は」

「え？ わ、わざわざ？」

「これはだいづが持って帰ってくんちえ」

「あ・・・ そんじゃ、あの、ありがとうございます」

「こ～ったことっきゃできねえけんちょ」

気い使わせちまってたんか そんな古りいかな まだちゃんと閉まるんだけどな

「あ、そうだ、これ」

ハートがヤッさんで水玉がスギさん・・・だよな

「ヤッさんとスギさんの奥さんたちに、俺と愛里からっす」

「いんやいんやいんや」「わいわいわい」

「ロールケーキ焼いたんで」

「おっかあ喜ぶっぺ」「たいしためわぐだ」
「この袋は、愛里が選んで、愛里のバイト代で買ったんすよ」
「あいりちゃんがぁ?」「あえるちゃんがけ?」
「自分のバイト代は俺の大切な人のために使いてえつつって」
「大切な人ってはぁ」「かっちゃ喜ぶべ」
「肉とかおかずとかいっぺえもらって、メッチャ美味かったから」
「あ〜ったのならぁ、まだいっつでもなぁ」「んだ、いづでも」
「ありがとうございます、あの、監督は来てるんすか?」
「監督室にい、俺たちもお赤飯渡してきたんだぁ」
「そんじゃ俺も行ってきます」
「新米とうちゃんの顔見てやればいっぺ」
新米とうちゃんか

監督室の扉開けて

「失礼します」
「森下、おはよう」
「監督、赤ちゃん、おめでとうございます」
「ありがとう、ヤッさんたちから聞いたの?」
「おととい電話で聞きました」
「赤飯もらったんだけどさ」
でっけえ箱 何合炊いたんだ?
「今朝炊いたんだってさ、まだ温かいんだよ、ほら」
おお 出来立てか
「今はまだ俺一人だから食べきれないよ、森下、少し持っていかない?」
「冷凍するといっすよ」
「冷凍? このまま?」
「できれば小分けにして」
「俺はそういうの全然ダメなんだよ」
え そんじゃ・・・
「俺やりますよ」
「持っていく?」
「や、近くのコンビニでラップ買ってきて、ここでやりますよ」
「ここで?」
「出来立ての方が小分けにしやすいで」
「そうなんだ」
「おいっす」
あ、そうだ
「あの、これ、俺のかあちゃんから、監督の奥さんにとって」
「森下のお母さんから?」

「俺が世話になって、とうちゃんも世話になったからっつて」

「なんだか悪いな、ありがとう」

「今ラップ買いに行っていっすか？」

「頼むよ」

監督室飛び出して 通り渡って コンビニで ラップと・・・ 割り箸か

割り箸は・・・ もらえんじゃね？

ラップとレジでもらった割り箸持って また監督室へ

おっし、小分けに包んだ

「監督、これ、この箱に入れておくんで、家帰ったら速攻冷凍室に入れてください」

「ありがとう、助かったよ」

「そんじゃ」

「森下」

「はい？」

「子どもの名前さ」

「名前？ 何にしたんすか？」

「優しいの優に大きいの大で優大」

「ゆうだいて、かけえ名前っすね」

「俺が考えておくことになってたんだけど、全然浮かばなくてさ」

「優大メッチャいいっすよ」

「優の字は奥さんの希望でさ、それは入れてくれてって言われてたんだよ」

「監督、名前つけんのうめえっすよ」

「それがさ、優太とか優介とか全部却下されてさ」

「却下？」

「いっそ優一文字でゆうでいいだろって言ったら怒られたよ」

監督 いつもと変わんねえ風にしてっけど やっぱ嬉しいんだな

こんな話を俺にするなんてさ

「それでね、森下の名前から一文字もらった」

「ん？ え？ なんすか？」

「大一の大をもらったんだよ」

大一の大・・・ えっ

「か、監督、俺の大一の大は、あの、大根の大で」

「いいんだよ、そんなの、俺は森下の名前いいなと思ってさ」

「あの・・・ 奥さんには・・・ 大根の大っつうのは」

「言ったよ」

「えっ」

「最初は、えーって言ってたけど」

言うよ そりゃ言うよ

「森下のことを話したら、あやかりたいってさ」

「あやかる？ 大根に？」
「大根にじゃないよ」
まあ いいならいいんだけど 俺は気に入ってんだけどさ 俺の名前の由来
「それで、優大」
あれ？ 監督いつもどおり出てきてっけど
「監督は産休取らねえんすか？」
「取らないよ」
「この会社って、男の産休とか育休ねえんすか？」
「あるけど、ほとんど取るヤツはいないな」
「そうなんすか」
「今は実家にいるし、来月には戻ってくるけど、俺がいても何もできないよ」
「そんじゃ、奥さん一人で子育てするんすか？」
「まあそうなるよね」
「監督、出産つつうのは全治一年の交通事故に遭ったくれえの一大事っすよ」
「交通事故？」
「そんぐれえ出産は女の人の身体にメッチャ負担かかってるつつうことっす」
「そんなことよく知ってるね」
「どうちゃんに教えてもらったんで」
「カズオさん？」
「俺とねえちゃんは、退院したときからどうちゃんが面倒見てくれたんすよ」
「退院してすぐ？」
「かあちゃんは生んでくれたんだからっつって」
「俺には無理だよ、家事もできないしさ」
「そんじゃ、奥さんのお母さんとか」
「お義母さんはお義父さんの面倒みなきゃならないから」
「え、そんじゃ・・・ 監督のお母さん？」
「俺の母親はおとし死んだ」
「えっ あ、すいません」
「いいんだよ、俺の母親は優子って名前でね、その優をつけたたってさ」
あ・・・ それで優の字
「嫁姑にしては仲良かったんだよ、実の母親より気が合うって、本当かな」
本当じゃなきゃ・・・ 子どもの名前に・・・
なんていい奥さんなんだよ んなこと言ってもらえんなんてさ
「どうしようかな、家政婦とかベビーシッター頼めばいいかな」
「あ、そうっすね」
「カズオさんてさ」
どうちゃん？
「家政夫やってるんだよね」
「単発の仕事だけっすけど」
「単発って？」

「一日だけとか数日とか、長期契約以外のチョロツとしたやつす」
「そういうのってどこに頼めばいいのかな」
「どうちゃんが登録してる紹介所なら」
「紹介所？」
「サイト見せた方がいいな 携帯出して んっと」
「ここっす」
「人材派遣のポピンズか」
「そこなら短期から長期、登録してる人の紹介も載ってるんで」
「ありがとう、奥さんと相談してみるよ」
「おいっす」
「それじゃ、今日もよろしく」
「ショーさんいねえから、俺は便所掃除とかやるんで」
「あ、そうだよ、ショーさん、すごいよ」
「すごい？」
「独身寮、あちこち掃除して、嘘みたいにきれいになったっさ」
「ショーさん さすがだよ」
「玄関のところに積んであった来客用のスリッパもさ、
どこから見つけてきたのか、廃材で柵を作って入れてるっさ」
「廃材で柵？ すげえ」
「本社の人事部のヤツから聞いたんだよ、人事部も大喜びだよ」
「メッチャよかったっすね」
「森下がいい人材見つけてくれたおかげだよ」
「俺が見つけたっつうより、監督が見つけたんじゃないっすか」
「そうだな、俺のおかげだな」
「なんすかそれ」
「監督 ぜってえ浮かれてるよ やたら笑うしさ 俺まで嬉しくなっちゃうよ
そんじゃ 便所掃除すっか」

ベロンベロン

残暑つつうんかな
暑っちいな すっげえ汗かいてる
そろそろ昼休憩か
携帯に 愛里から LINE 入ってた
画像 イチゴのヨーグルトがけにイチゴジャム
『あなたが作ったイチゴジャム美味しい』
『イチゴとイチゴジャムのダブルで最高!』
マジか 可愛いなあ
『また一緒に作ろう』送信
あ 既読ついた
ピコン
『また作ってくださいね w』
『愛里先生がいねえと作れないっすよ w』送信
ピコン
『先生はやめて! 家庭科の先生思い出しちゃう』
ハハハ
ピコン
『おかあさんは午後から会社に行くそうです』
そっか やっぱ行くんか
『愛里は昼メシ食った?』送信
ピコン
『今からおとうさんの作ってくれたサンドイッチ食べます』
ピコン
『私のは辛子にはしないでくださいねってお願いしました w』
だよな メッチャ辛がってたもんな
ピコン
『あなたは?』
『今から昼休憩に入るよ』送信
ピコン
『それじゃまたあとで』
『帰ったら愛里のところに速攻行くから』送信
ピコン

『はい』
『愛里 好きだよ』送信
ピコン
『wwwwww』
なんで笑うんだよ？
ピコン
『今ちょうどおかあさんが覗いたんです wwww』
かっ かあちゃん 愛里の携帯覗くなよ
ピコン
『私もです』
え、マジ？ かあちゃん覗いてんの？
ピコン
『おかあさんはもう覗いていません w』
よかった かあちゃんやめてくれよ
『そんじゃあとでな』送信
ピコン
『はい』
ったくさ かあちゃん マジやめてくれ

おっちゃんたちとこうやって昼メシ食うのも久しぶり感あんな
今日もいっぺえおかず持ってきてくれててさ
「だいつは床屋行ったんけえ？」「さっぼとしてら」
「おととい、かあちゃんの友だちのオカマのおっちゃんに切ってもらって」
「あ・・・ なんだした」「なんだった・・・ オガマのな」
「え、俺の髪ヘンすか？」
「かっけえっぺ」「んだよ」
「髪切った後、愛里がしばらく目え合わせてくんなくて」
「だいつが散髪して男前になったからあ照れたんだっぺ」
「や、愛里の俺のイメージはダリ〜とした煤けたTシャツ着た男なんすよ」
「煤げだ・・・」「だりっと・・・」
「臭せえのにも慣れたっつってて」
「だいつ、男は着るもんでねっぺ」「んだんだ」
「そうっすか？」
「ボロは着てても心は錦っつっぺ？」
「え、なんすか？」
「大昔の歌、俺のおっとうが酔っぱらうといっつも歌っててよお、
昔の人はうめえごと言うっぺ、あいらちゃんはだいつの錦の心に惚れたんだあ」
「マジっすかあ」
「俺のおっかあもお、だいつはイケメンで惚れっちまうってはあ」

「わのかっちはカンズさんに惚れでまるっでや」
とうちゃんには惚れるよ 男でも惚れるよ
「惚れてるつつたらはあ、ショーさん」
「ショーさん？ なんかあったんすか？」
「盆休みときなあ、一緒に寮の草取りしだりしてよお」
ショーさん、草取りもしてんのか いい管理人だなあ
「そんなときなあ話の流れつつうのお？ 奥さんの話になってえ」
「ショーさんの奥さんっすか？」
「なんで別れっちまったんだって聞いたら、は」
「わがほんずねがらだっでや」
「ん？ え？ ほん？」
「俺のお甲斐性ねえがらつつたんだけんちょ」
俺にもそう言ってたな
「夜にい一緒に一杯やってたときなあ、俺のおっかあが聞いたんだした、
あれは聞き出すのがうめえんだあ、ウソつくとお、す〜ぐバレっから」
ハハハ
「ショーさんに酒つきながらあ、ショーさん、奥さんのこと嫌いになったの？ って」
ストレートに聞いたんだ
「そしたらあ、なあ」「んだ」
「え、なんすか？」
「惚れてるよって」
えっ 惚れてる
「ワダシだったらあ、惚れてんのに別れらんねえよつつたら、なあ」
ヤっさんの、ヤっさんの奥さんの真似も特徴とらえてんな
「かっちゃほいどにさせらんねっでや」
「え？ ん？ ほい？」
「奥さんを乞食にさせらんねえって」
あ・・・ そういう・・・
「商売があ、こりゃもうどうもなんねえなってとこまでなっちまってえ、
このまんまじゃ女房も大変な目に遭わせちまうからってえ、
足手まといだから出てけつつたってはあ」
「ウソ・・・ついたんすか」
「ほんでもお奥さん出てかねつつたって」
奥さんも ショーさんのことが好きで・・・
「俺もおスギさんも、もういっぺつつたんだあ、なあ」「わ、肝冷えだ」
「ほんでも俺のおっかあとスギさんとこのかあちゃんがあ」「んだのや」
「うんめえ具合に酒ついでえ聞き出すんだしたあ、ショーさんもうベロンベロン」
そ、そこまで？
「奥さん出てかねつつたのにい、なんで別れだのよって、怖えっぺ？」
「わ、震えでまっだ」

「好きな女できてえ一緒になりてえつつたんだって、
そごでやめてやりゃいいのにはあ、そ〜っだヘッタなウソついてえ、
奥さんわかってまっぺって、俺はもうショーさんがかわいそうでえ」
「ヤッさんのかっちゃ、すげもんな」
「有り金ぜ〜んぶ渡したらあ出てったっては」
有り金全部 工場が危ねえときに 奥さんに それって・・・
「ほんでまた俺のおっかあがぁ、いくら渡したんだしたって聞いてえ」
「ベロンベロンだがらしゃべったんだや」
「50万つつってえ、片手広げてえ」
50万 そんなときの有り金が 50万だったつうことか
「そのまんま寝ちまったっぺ」「ヤッさんどごさ泊めでや」
「そう・・・だったんすか」
「ほんでもなあ、俺たちもお他人ごとでねえからよお」「んだなあ」
「え？ 何がっすか？」
「俺たちの仕事はあ、病気したりい、ほれ、カズさんみてえに・・・なあ」
「あ・・・」
「どんな仕事でもお、んだけんちょ、こういう仕事はあ、いっちゃんなあ」
そっか だよな 家族背負って生活背負って・・・だもんな
「ショーさんの話聞いて、わのかっちゃ、ほいどでもいはんで別れねっでや」
「え？ ん？」
「スギさんの奥さんはあ、乞食でもいいからあ別れねって、優しいっぺ」
んな・・・
「俺のおっかあは、あんたなんか頼りにしてねした、ワダシが食わせてやっがらって」
ヤッさん 涙ぐんでる
「氣い強えのよ」
涙声で笑ってっけど
ヤッさんもスギさんも そういう不安抱えて仕事してて
奥さんたちも そんなときの覚悟 どっかでしてて
もしも 今 ヤッさんかスギさんが そういうことになったら
俺は なんもできねえ なんもできねえよ
いっばしと一緒に働いてるつもりになってたけど
俺は 言ってみりゃ夏休みのバイトで
かあちゃんの羽ん中で守られてて
俺がバイトしなくても 生活に困ることなんてなくて
そんで 俺はなんも・・・
「だいつ？ どすだ？」「元氣なぐなっでらよ」
「俺は・・・ 無力だなって」
「だいつはなんでもできっぺ、なあ」「んだよ、助かっでら」
「ヤッさんやスギさんに・・・ なんかあっても、なんもできねえなって」
「だいつ・・・」「そっだごど」

「大切だって思ってんのに、なんもできねえって」
「だいづ!」「だいづ!」
え ヤッさんスギさんが俺に抱きついてっけど
「俺たちのことお心配してくれんなんてえ」
「心配っきゃできなくて」
「や〜っばしい、だいづの心は錦だっぺ」「んだ」
「俺は生活背負ってるわけでも家族背負ってるわけでもなくて」
「だいづは一生懸命やってっぺ」「んだ、よぐやっでらよ」
「それでも、俺・・・」
俺は・・・ いつか
「今は、なんもできねえんすけど」
「そ〜ったことお、いんだよお」「苦うさねで」
「いつか、ちっとでも、力になれるような男になりてえ」
「だいづはなれる!」「んだ!」
「なりてえっす」
「だいづ、俺はだいづみてえな若けえもんは見たことねした」
「え?」
「泥っだらけになってえ汗かいてえビ〜クリするほど働いてえ」
「それは、それで金もらってっから」
「だいづは金の大切さあ知ってんだした」
金の大切さ それは・・・
「とうちゃんがそうだから」
「だっぺ? カズさんの息子ならあ、な〜んも心配すっことねっからあ」
とうちゃんの息子なら そっか とうちゃんの息子なら
「俺、とうちゃん目指してっから」
「そんだあ、カズさんそっくりだした」「カンスさんとおんなしだべ」
「とうちゃん目指してるんす」
「てえしたもんだあ、汚ったねえ恰好でえ臭っせえのも気にしねんでえ」
え?
「だいづはあ、ポロは着ててもお心は錦だした」「んだ」
んっと
「煤けだTシャツ着ててもお」「臭せぐでもや」
俺は 今 褒められてんのかな?
「あいりちゃん、惚れてまっぺ」「ベッタ惚れだべ」
「んな、ヤッさんスギさ〜ん、からかわねえでくだせえよ」
「あいりちゃんは男見る目えあっぺ」「だいづに惚れるっでな」
「マジっすかあ」
「あいりちゃんのことしゃべっとお、だいづがベロンベロンになっぺ」
「んだ、ベロンベロン」
「なんすかそれえ」

「な～んかあ暑つつくなってきたなあ」「んだな」
「え、そうっすか？」
「だいづにいアイスでも奢ってもらわねえとなあ」「んだな　ワハハハ」
「アイスっすね、三時休憩でいいっすか？」
「冗談だよお」「だいづさ金出ささんね」
「そんくれえさせてください」
「だいづ、いっからあ、冗談でしゃべったんだした」「んだよ」
「俺、アイス買うくれえの金は持ってきてんで」
「だいづ、気持ちだけでいっからあ」「んだ」
「ヤッさん、スギさん、たまには俺にもなんかさせてください」
ポカンと俺のこと見てっけど
「なんつうか、孝行っす」
「孝行?」「こうごう?」
「親孝行っつうか、アイスくれえでなんすけど」
「親孝行っでえ・・・」「だいづ・・・」
え?　泣いてる?
「そんじゃ、なあ」「んだなあ」
「だいづにいアイス奢ってもらっべ」「めわぐだな」
「おいっす」
「ほんじゃ、午後もがんぼっべ」「んだ」
「おいっす」
便所掃除すっか

三時休憩

サッパリしたのが食いてえっつうことで　ガリガリ君・・・っきゃ思いつかねえ
「はあああ生き返るっべ」「しゃっこくでうめな」
「仕事の合間のアイスって美味えっすよね」
「だいづに奢ってもらってえ 100 倍うめえした」「沁みでな」
こうやって道路っ端にしゃがんでアイス食うっていいなあ
「だいづはバンバヒンラアイス食ったごどあるが?」
「ん? え?」
「バンバヒンラアイス」
「どこの国のアイスっすか?」
「わのくに」
「倭の国?」
「スギさんのおふるさとに、ババヘラアイスっちゅうのがあんだした」
「秋田?　ババヘラ?」
「ぼっちゃんがヘンラでこうすで入れでけのや」
ん・・・っど?

「お婆ちゃんたちがあへらで入れっからあババへらなんだってあ」
「ああ！ 見たことねえっすね」
「俺もお食ったことねえんだけんちょ、スギさんがしょっちゅうしゃべってえ」
「ちっと待ってください」
んっと・・・ ババへらアイス 秋田 あ！ 出た
「スギさん、これっすか？」
「んだんだ、だいづさ食わせでな」
「食ってみてえっす」
花みてえにきれいだな 愛里好きそうだな
「もう長げごどけっでねがな」
「ん？ え？」
「スギさん、もう10年くれえ帰ってねんだよお」
「10年？ あの、スギさんのお父さんとお母さんは？」
「もうとーっぐにくたばった」
くたばった？
「スギさんとこのお親はあ、んーっつと前に死んだんだってあ」
「そう・・・なんすか」
「だいづ、孝行すでどきに親いね、はがにふどんきせられね」
「え？ ん？ あの」
「スギさん、休み明けになっとお訛りがひどくなんだした」
「訛ってらが？」
「だいづがニワトリみてえに首傾げてっぺ」
ニ、ニワトリ？
「ワハハハ、ヤッさんしゃべってげ」
「だいづ、スギさんがなあ、孝行してえときに親はなし、墓に布団は着せられずってえ」
孝行したいときに親はなし 墓に布団は着せられず
「とっちやとかっちや、だいづにすねど」
「お父ちゃんとお母ちゃんを大事に」
「わい、わ、ちゃんとしゃべってらべ」
「あの、わかりました」
「そっかあ」
「スギさんの教え、心にしっかり留めておきます」
「だいづはあ孝行息子だよお」「んだ」
「まだまだっす、俺、とうちゃんとかあちゃんに甘えてばっかで」
「甘えてもらうのもお、孝行なんだした」
「え？ そうなんすか？」
「俺たちにもお、いっぺ甘えてくんちえ」「んだよ」
ヤッさん・・・ スギさん・・・
「おいっす、いっぺえ甘えるんで」
「そっかあ」「んだか」

俺にとって 二人は もう かけがえのねえ人たちになってさ

「そんじゃ仕事すっぺ」

「おいっす」

俺は ヤッサんとスギさんがいるから こうやって現場でやってけてんだよ

女という武器

還りの電車の中

今日はちょっと混んでっから、ドア付近の手すりんとくに立ってて

愛里にババヘラアイスの画像を送信

『可愛くね?』送信

『ババヘラアイスっつうんだって』送信

ピコン

『お花みたいで可愛い』

だよなあ 愛里がこれ食ってたら可愛いだろうな

『おばちゃんがヘラでこうやって作るからババヘラアイスなんだってさ』送信

あ、ドア開いた ちょっと内側に寄って

ピコン

『こんなの見たことないです』

だよな

「なんでこんなとこ立ってんねん！」

『これはスギさんの

「乞食がいっちょ前に電車なんか乗るなや！」

出身地の秋田名物らしい』送信

「なにシカトしてねんねん！」

え? 肩ドンッて 俺? なに?

「乞食のくせに電車乗ってくんなっちゅうねん！」

ん・・・と?

ピコン

『どんな味なんですか?』

んっとさ 今さ ちょっと

「おまえみたいなんがおると臭っさいねん！」

どうすればいいのかな 移動して欲しいっつうこと?

「なにガン飛ばしてんねや！」

や、どうすればいいんかなって考えてるだけでさ

なんか言ったら言ったで

ピコン

『どうしたんですか?』

ピコン

『具合悪くなった？』

じゃねえんだよ

「なんや？ 文句あんのけ、ボケ！」

文句はねえんだけどさ どうすりゃいいんかなあ

ピコン

『既読着いてるのにあなたが返信しないって』

ピコン

『大丈夫ですか？』

大丈夫なんだけどさ

「なに睨んでんねん！」

睨んではいねえんだけどさ

「背え高いからって俺を見下してるつもりか乞食が！」

ピコン

『どうしたの？ 言って！』

『なんむめり』送信

あ、ヤベ あわてて打ってわけわかんねえの送信しちゃった

ピコン

『なに？ 大丈夫？』

ピコン

『やだなに？ 言って！』

んっとさ どうする？ これはもう・・・ 録音ボタン

「乞食が電車乗ってくんなちゅうねん」

「おまえみたいなんがいると臭いっちゅうてんねん！」

「さっきから黙りくさって！ バカにしとんのか！」

OFF

『です w』送信

『大丈夫だよ』送信

どうすっかな 隣の車両に移動すっか？ 次の駅までまだまだだしな

ピコン

『YES なら yNO なら n で答えて』

『愛里心配しなくていい』送信

「こっち見ろや！」

ピコン

『その人と何かあったんですか？』

『n』送信

ピコン

『口論になってます？』

『n』送信

ピコン

『あなたは何か言いましたか？』

『n』送信

ピコン

『あなたは黙ったままでいてください』

ん？ 黙ったまま？

ピコン

『FaceTime に切り替えて私にかけて』

ピコン

『つながったら』

ピコン

『画面をその人に向けて』

ん？ なに？ どういう

「さっきからピコンピコンうるさいわ！」

Face Time に切り替えた 愛里だ 愛里 あ、手え振っちゃまった

愛里が手でクルクルッて そっか、画面向けろつつったよな

携帯の画面を 俺に怒鳴ってる人に向け・・・たけど？

「なんやそれ？」

「あの」

愛里？

「な、なんや、このねえちゃん？」

俺はしゃべるなつつってたな

「弟が」

弟？

「何かご迷惑をおかけしましたか？」

「え、や、おまえの姉ちゃんけ？」

俺は黙ってろって言われてんすよ

「弟は、耳がちょっと」

えっ 愛里？ なに考えてんの？

「あ、そうなん？」

愛里と話してるよ

「あと、ここがちょっと」

ここ？ どこ？ 俺見えてねえんだけど

「アタマ弱いんか」

頭が 弱え？

「そりゃ、お姉ちゃんも大変やな」

「土木作業の仕事がもらえて」

「そうなん？ せやな、耳聞こえんでアタマ弱かったらなあ」

愛里 どういう物語なんだよ？

「こんな図体でかくてそれはなあ」

「図体は大きいですけど」

愛里？ 図体？

「さっきもアイスの写真を送ってきて、可愛いでしょって」
ウソではねえけどさ
「アイスの写真？　可愛い？」
俺のことチロッと見て
「それは、あれか、あの、子どもみたいやな」
「私のあとをついて歩いて」
愛里？　それはさ　子どもみてえだからじゃなくね？
「お姉ちゃんのとついで歩くんか、そりゃ世話も大変やな」
ちがうんすよ　ああああ　言いてえ　ちがうんすよ！
「あの、なにか失礼なことしましたか？」
俺なんもしてねえよ
「ちゃうねん、勘違いや、なんも気にせんとって」
「ありがとうございます」
「お姉ちゃん、弟の面倒、よう見てんな、大変やろ？」
「すぐ抱きついてきて」
愛里　それはさ
「お姉ちゃんに懐いてんねやな」
「人懐こくて」
愛里　ぜってえおもしろがってんだろ　声が生き生きしてるもんな
「こっちは俺が面倒見とくから」
いやいやいや　見なくていいから
「ありがとうございます」
「そんなんええねん、心配せんでええからな」
「はい、それじゃ、失礼します」
「ほななあ」
なんでこの人も優しい声出してんだよ？
俺の肩ポンポン　携帯指さして
「お・わっ・た・で」
メッチャ口大きく開けて
なんつうかさ　この人より　愛里がなに考えてんのかかさ
「にいちゃん、耳聞こえへんのやろ？」
ん・っ　これは・・・　笑うしかねえ
「せやなあ、子どもみたいに笑ろてるなあ」
え？
「悪かったなあ、ちょっとイライラしとったんや」
盆休み明けの仕事で疲れてたんか　なんの仕事なんかわかんねえけど
「あ、聞こえんのやったな」
聞こえてます
「これ、取っとき」
え　俺の手えつかんで　100円？　いやいやいや　いらねえから

「小遣いや、取っとき」
や、んな、ダメっすよ
「こ・づ・か・い」
や、口大きく開けてもさ 聞こえてるんすよ
「アイス買うたらええわ」
や、マジでこれは
「あ・い・す」
聞こえてますけど
「がんばりや」
俺の肩ポンポンで 隣の車両に行っちゃったけど
『愛里』送信
『今のなに?』送信
ピコン
『無事でしたか?』
『無事ですけどさ』送信
え? なんか俺の腰を誰かが トントン
振り向いたら 席に座ってるおばあちゃん?
優しい顔して俺を見てっけど? なんだ? 口動かしてる
お・え? なんで声出さ あ! 今の聞いてたんだ聞こえるよな
このあたりの人みんな聞いてたよな つうことは・・
あ・え・う? なんだ?
え? せんべい? 俺に? うんうん?
なんだどうすりゃいいんだ? いちおう・・ もらわねえとな
頭下げたら ニッコリして 優しいな さっきの人もなんだかんだで優しくったな
そんでもさ
『愛里』送信
『帰ったら』送信
『じっくり話がしてえっす』送信
なんか まわりの人が俺のこと見てて
すげえ温ったけえ目つつうか、なんつうの? 慈愛に満ちた?
逆に その視線が痛えんだけど

愛里の部屋の玄関ドア開いて
「おかえりなさい」
「ただいま」
いろいろ聞いてえことあるんすけど
「愛里、俺はいつから耳が聞こえなくなったんかな?」
「私は耳がちょっとって言っただけです」
「んなこと言ったら耳聞こえねえと思うじゃん」

「そうですか？」
そうですかじゃねえよな？
「そんじゃ、ここがちょっとはなんだよ？」
「ここがちょっと寝ぐせが付きやすいなって」
「んなこと言ってねえじゃん」
「解釈はおまかせてことで」
「メッチャちげえ解釈してたけど？」
「ですよ、ビックリしちゃった」
「なんで否定しねえの？」
「それはその人の自由ですから」
いやいやいや
「んでさ、弟ってなんだよ？」
「一美さんの弟」
「そうだけどさ、あの状況じゃ俺が愛里の弟だと思っちゃうじゃん」
「それじゃなんて言えばよかったの？」
え？
「私のカレシをいじめないで？」
「や、そうじゃねえけど」
「ちょうどお昼におかあさんと話をしてたんです」
「かあちゃん？」
「仕事の話なんですけど」
愛里とかあちゃんが仕事の話？
「女には女という武器があるって」
おいおいおい かあちゃん、愛里になんてこと言ってくれてんだよ
「愛里、あのさ、そういうのはさ」
「おかあさんが言ってたんです」
「うん、でもさ、それはさ」
「おかあさん、若い頃は女っていうことで理不尽な目に遭ったこともあるって」
ねえちゃんから聞いたことあんな 企画取られたとかなんとか
「でも、実績を重ねていくうちに認められるようになったけどねって」
そこは俺も尊敬するところで
「あ、なんでこんな話になったかっていうと、あ、入りますか？」
「俺汚れてっからここでいいよ」
「いいです、入ってください」
「マジ？」
「はい」
愛里と一緒にリビングに 俺が床に座ったら愛里も俺の隣りに座った
愛里はソファに座っていいのにさ 可愛いな
「私が、お休みなのに仕事に行くって大変ですって言ったら、
矛の収めどきがわからなくなった男どもの、これはおかあさんが言ったんです」

「うん、わかってる」

「矛を収めてあげに行くだけよって」

矛を収めてあげる？

「男同士だと、特にくだらないうい争いをしてるときは、

お互いもういい加減やめたいと思ってるのに、そこも意地を張り合ってて、

うんざりしてるのにやめられなくなっちゃってるときがあるって」

どういうことだ？

「男のプライドというくだらない見栄だけどねって」

かあちゃんがしゃべってんのか見えるみてえだよ 愛里

「そういう人って、自分で自分を引くに引けない状態に持ってっちゃってるのよ」

愛里は かあちゃんの真似もうまくなってきてんな

「裏を返せば、そういう人は劣等感の塊で、それをプライドという鎧で隠してるの」

かあちゃんから話聞いてるみてえな気分になるよ

「だから相手を罵倒したり見下したりするのよって」

「お、おう、そっか、はい」

「そういう人に矛を収めさせるにはね、女が言うから収めてやるかっていう、

あれ、なんだっけ、口実？ 言い訳？ それを作ってあげられるのは女だけって」

え？

「あなたが送ってくれた音声を聞いたとき、これは私の出番かなって」

「愛里、それで Face Time？」

「はい、あと、証拠も残しておきたかったのよ」

「証拠？」

「私、録画してたんです」

「えっ？」

「もしもあなたに何かしたら、この人が犯人ですって警察に出せますから」

「愛里・・・」

んなことまで考えてくれてて

「でも、そんなに悪い人じゃなかったから」

「愛里」

たまんなくなつて 抱きしめて

「ありがとな」

「女という武器を使いました」

「メッチャ最強だったよ、俺、戦利品までもらっちゃったよ」

「戦利品？」

俺はケツポケットから 100円玉とせんべい出して 愛里に見せた

「こっちは関西弁の人がアイス買えってくれた」

「アイス？ ハハハ」

「こっちはすぐそばに座ってたおばあちゃんがくれた」

「なんで？」

「耳がちょっとで頭がちょっとだからじゃね？」

「ああ！ ハハハ」
「愛里」
俺はまた愛里のこと抱きしめて
「愛里がいねえと、俺はどうもなんねえよ」
「私は、ちょっとだけ矛を取める手伝いをしただけです」
「それでもさ、愛里は人見知りなのにさ」
「携帯越しだったからライブ配信見てるみたいで気は楽でした」
「ライブ配信だな、マジでさ」
え 愛里が俺の腰に腕をまわして
「あなたに・・・ なにもなくてよかった」
「愛里のおかげだよ」
「あなたならなんとかするとは思ってたんですけど」
「や、愛里が出てくんなきゃ殴られてたかもしんねえ」
「えっ？」
「ウソ、もし殴られそうになったら逃げっから」
「そうですね、電車の中を グフッ」
「今想像したろ」
「はい、ハハハ」
「愛里さ、ちっとおもしろがってなかった？」
「おもしろかったです」
やっぱ そっか
「おかあさんの法則ってすごいんだなって」
え、それ？
「画面の中の表情も声もどんどん変わって行って」
「うん、変わったた」
「おかあさんてすごいですね」
ちげえよ これはさ
「愛里がすげえんだよ」
愛里のことギュウッて
「コホッゲホッ」
「あ、ごめん、強すぎた？」
「じゃなくて・・・ ゴホッ 深く息を吸っちゃって」
「息吸った？」
「久しぶりだったから、ちょっと」
「久しぶり？ なにが？」
「え・・・ あなたの汗の匂い」
「えっ、あ、俺、シャワー浴びてくっから」
「あ、大丈夫です」
「大丈夫じゃねえだろ、咳き込むってさ」
「今日は暑かったから」

「愛里、いいから、俺は臭せえんだよ、わかんねえけど」

「臭くないって言ってるのに」

「咳き込んだじゃん」

「それは・・・」

「愛里」

愛里のくちびるに そっと

愛里が ゆっくり目を開けて え？ 睨む？

「あなたって」

え？ なに？

「私を黙らせたいから、あの、してませんか？」

「ちげえよ」

もう一回 愛里の 柔らけえくちびる

「好きだから」

「コホッ」

「俺シャワー浴びてくっから、あの、そんじゃあとで」

「あ、はい」

愛里の部屋出て

愛里が咳き込むほどってさ あの関西弁の人 マジで臭かったんかもしんねえな

アタマくるほどさ 俺はわかんねえけど

シャワー浴びよう

プチ疑似体験

玄関のドア開けて

「ただいま」

キッチンからとうちゃんが出てきた

「ダイチ、おかえり」

「とうちゃん、このタッパー、ヤッさんたちの奥さんたちがくれたんだって」

「くれたっつうのは、なんだ？」

「うちのタッパーが古りいから、あげるってさ」

「そっか、そりゃ、ありがてえな」

「俺、シャワー浴びたら晩メシ作んの手伝うよ」

「もうできてんだよ」

「マジ？」

この匂いは・・・

「もしかして牛丼？」

「ダイチが腹空かせて帰ってくんじゃねえかと思ってよ」

「メッチャ嬉しい、すっげえ腹減ってっからさ」

「そっか」

「そんじゃシャワーしてくる」

とうちゃん わかってくれてんなあ

晩メシ終わって

愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってて

とうちゃんと俺は片付けしてて

「とうちゃんさ、浮浪者んとき、なんもしてねえのに怒鳴られたりしたことある？」

「そりゃ、しゃあねえよな」

「どんなとき？」

「どんなとき・・・ん・・・ボーッと座ってっから蹴られたりよ」

「座ってるだけで？」

「俺みてえなクズはしゃあねえよ」

笑ってっけど

「そんで、とうちゃんどうしたの？」

「逃げた」

「追っかけてきたりしなかったんか？」
「一回だけあったな、ねーちゃんからもらった万札使おうと思ったらよ」
「ああ！ 盗んだと思われたっつうやつ？」
「脚悪りいのによ、必死こいて逃げた」
どうちゃんが話すど どんなことでもおもしれえ話になってさ
「そんじゃさ、たとえば電車に乗っててさ」
「電車乗ったんは・・ ねーちゃんに乗せてもらったのが初めてだったな」
あ、そっか
「あんどきなあ、駅の人が入ってくんなっつってよ、そしたら、ねーちゃんが」
どうちゃんの顔が嬉しそうになって
「切符持ってんだから出せてよ、そんで俺の腕引っ張ってよ」
この話するたびに どうちゃんはメチャ嬉しそうな顔すんだよ
「俺みてえな浮浪者が電車になあ、それでも、ねーちゃんが座れて」
「隣りに座ったんだろ？」
「座らしてくれた、俺、このまんま売り飛ばされてもいいなって」
「売り飛ばすって、ハハハ、どこにだよ？」
「電車乗れてよ、ねーちゃんの隣りに座れてよ、夢みてえだなって、
そんで駆着いたらよ、タクシーってよ、俺、タクシーなんて一生乗れねえっつうか、
なんか夢みてえなことばっかで、フワッフワしちまってよ」
どうちゃんの話聞いてっと ホットする 俺のいる場所はここなんだなって
「どうちゃん、俺さ、今日帰りの電車途中で怒鳴られてさ」
「な、なんかあったんか？」
「なんもねえけど」
俺は・・ 自分で思ってた以上に 傷ついてた
俺がっつうより なんか どうちゃん浮浪者だったときにどんな扱いされてたかって
「俺が・・」
乞食とか臭せえとか、俺は正直なんとも思わなかったけど それでも
「ダイチ、逃げれたんか？」
どうちゃんは 俺なんかよかもっと それでも しゃあねえって笑ってて
「逃げなかった」
俺は どうちゃんの
「なんかさ、その人イライラしてたみてえでさ」
チビッとだけどうちゃんの疑似体験できたんだな
「蹴られたんか？」
「蹴られてねえよ」
「そっか、そっか」
そうだな なんか そうだ
「それがさ、愛里が助けてくれた」
「アイリちゃんが？」
「携帯で顔見てしゃべれるやつあんじゃん」

「あ、うん」
「あれでその人のことなだめてくれてさ」
「アイリちゃんが」
「うん、そんで、その人、アイス買えって100円くれたよ」
「そっかあ、よかったなあ」
「うん、ついでにすぐそばに座ってたおばあちゃんがせんべいくれた」
「優しいなあ」
とうちゃん、とうちゃんがいる世界は
「うん、みんな優しいよ」
そんな中だと
「俺、しあわせだよ」
俺は 泡だらけの手で とうちゃんの手にぎって
「とうちゃん、俺、とうちゃんの子で、マジよかった」
「そっかあ？」
とうちゃんが笑ってっから
「俺、とうちゃんの息子でよかったよ」
「あんたは私の息子でもあるんだけどね」
かっ かあちゃん
「愛里さんのこと送ってあげて」
「あ、おう、今」
「あとはやっつくからよ」
「うん、ありがとう」
愛里と一緒に部屋を出た

愛里の部屋の玄関

「愛里、今日はありがとな」
愛里が俺の顔見て
「あの、本当のこと言っていていいですか？」
「いいよ、なに？」
「あれは、あなたのためにやったんじゃないんです」
「あ？ ん？」
「私がイヤだったんです」
「なにが？」
「アタマにきちゃって」
アタマにきた？
「なにに？」
「一生懸命働いて、帰ってきてるあなたを乞食とか臭いとか」
「へ？」
「すっごく悔しくて、だから、つい、あんなことしちゃって」

愛里

「おかあさんの話にかこつけて、なんか、ごめんなさい」

「愛里」

たまんなくて 抱きしめて

「ありがとな」

「だからそれは」

「愛里がそういうふうになってくれて、メッチャ嬉しい」

「でも、あなたのためみたいなことじゃなくて」

「愛里、俺は愛里がそう思ってくれてるだけで嬉しい」

「だって、あなたは本当に汗をいっぱい流して一生懸命働いてるのに」

「愛里、俺はなんとも思ってねえんだよ」

「でも、あんなこと言われて」

「俺はなに言われてもなんも思わねえよ」

「それじゃ、私、余計なことしちゃって」

「余計なことじゃねえよ、愛里は俺とどうちゃんを救ってくれた」

「おとうさん？」

「どうちゃんさ、浮浪者るとき、座ってるだけで蹴られたりさ」

「えっ」

「切符持ってんのに、駅員に入ってくんなって言われたりしたんだってさ」

「そんな・・・」

「だから、今日愛里がしてくれたことは、俺だけじゃなくて」

腕緩めて 愛里の顔見て

「浮浪者だったときのどうちゃんも救われた気いすんだよ」

「私は・・・ そんなことまでは考えてなくて」

「俺はマジでそんな気いしてっから、だから」

愛里が 戸惑ったような顔で俺を見てて

「ありがとう」

「私は、だから、そういうことじゃなくて」

「うん、それでもさ、そういうことなんだよ、俺にとってはさ」

「そう・・・ですか」

「それでもさ、もう無茶すんなよ」

「はい」

「俺がいっちゃん傷つくのは、傷つくなってもんじゃなくてさ」

顔見られねえように愛里のこと抱きしめて

「愛里が俺のそばからいなくなることだから」

マジでさ

「もし愛里がいなくなったら、俺の世界は壊滅する」

「壊滅とか」

「マジで」

「私は・・・ ここにいるでしょ」

「いるな」
「いますよ」
「うん、いる」
「でも、私」
「ん？」
「もし私の目の前であなたにあんなこと言われたら」
愛里の声が 怖えカンジになってっけど
「ひっぱたいちゃうかも」
「あ、愛里、それはやめろ、それはダメだ」
「やらないけど」
「愛里のビンタはメッチャ痛てえんだからさ」
「あっ そうですよね、私、二回もあなたのことひっぱたいちゃって」
「あれはいいんだよ」
「よくないです、真っ赤に跡がついちゃって、もう私って」
「愛里のビンタは痛くねえ」
「今痛いって言ったじゃない」
「痛てえけど痛くねえ」
「なにそれ」
「それでもビンタよか」
愛里のくちびるに
「こっちがいい」
「子どもみたいな言い方」
「アイス買って 100円もらってせんべいももらったかな」
「ですよ、ハハハ」
「明日も俺、汚ったねえ恰好で臭いっせえ臭いになって帰ってくっけど」
「そうですね」
「からまれたら、またやっつけてくれっかな？」
「放っておきます」
「なんだよお、蹴られたりしても？」
「逃げればいいでしょ、電車の中 ハハハ」
「だな」
「それじゃ、またあとで」
「おう、またあとでな」
玄関のドアが閉まって 速攻で鍵閉まって
俺は今日 あの経験してよかった
とうちゃんが どういう扱いされてたんか とうちゃんほどじゃねえけど
チビッと体験できたし 愛里の思いもさ
俺は しあわせだ！
あれ？ 鍵が開いた音 ドアが開いて
「え？ まだいたの？」

「愛里はどした？」
「え、なんとなく」
「なんとなくでドア開けんなよ、危ねえだろ」
「わかりました、あなたにキスしようと思ったけどやめます」
「えっ 愛里、マ、マジ？」
「ウソ」
ドアが閉まって速攻で鍵閉まった
おあずけっすか
あ、また開いた
愛里が飛び出してきて
俺のくちびるに 軽く え・・・
そんでまた部屋に入って鍵閉めた
ヤラレた メッチャ ヤラレタ
「しあわせだーっ！」
「うるさい！」
ドアの向こうから愛里の声
「愛里、好きだよーっ！」
「いいから早く帰って！」
「おいーっす」
よーっしゃ 明日っからもガンガン働く
汚くても臭くても 愛里はいいつつってくれたんだから
「早く帰って」
「え、なんでわかんのか？」
「覗き穴から見てたの」
俺も覗き穴に目え近づけて
「バカなことしないで帰って」
「わっかりやした」
たまんねえ しあわせだ
帰ろう このまんまいたら 愛里マジ怒る

真夜中の電話

勉強終わって

そろそろ寝るか 久しぶりの現場だったから眠むフワァァァ

その前に

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『おやすみ』送信

ピコン

『今考えてて』

え？

『なにを？』送信

ピコン

『あさってのこと』

あさって？

『忘れてないですよ？』

え？

『なに？』送信

ピコン

『巻き寿司』

巻き寿司楽しみにしてんのかよ 可愛いなあ

『忘れてるわけねえじゃん』送信

ピコン

『早くあさってになって欲しいw』

『明日作ろうか？』送信

ピコン

『楽しみはとっておきたいw』

そっか

ピコン

『それじゃ おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

巻き寿司のこと考えてたなんてさ 可愛すぎんだろ

いつものやつと 愛里は他に何入れて欲しいのかな

かんぴょうと わ・・・さ・・・

ん な おと でん 電話？

愛里だ

「愛里、どした？」

え 泣いてねえか

「愛里、どした？ なにがあった？」

切れた

かけて・・・も 出ねえ

『愛里どした？』送信

『なにがあった？』送信

既読つかねえ

愛里の部屋に行こう 鍵持ってくか

エレベーター一階か 階段だ

階段駆け下りながら電話しても出ねえ

『愛里、今そっちに向かっている』送信

既読つかねえ

愛里の部屋の前

ドアホン鳴らしたけど ドアに耳使づけても 音がしねえ

『愛里 鍵開けるからな』送信

既読つかねえけど 鍵開けて 中に入ると真っ暗で

ベッドルームのドアの隙間から少しだけ灯りが漏れてて

近づくと 中から愛里の泣き声がする

「愛里、入るぞ」

ドア開けたら 愛里がベッドに座って 泣いている

「愛里」

抱きしめて

「どした？ なにがあった？」

愛里は 俺の腕の中で 泣いてるばかりで

とにかく 少し泣き止むまで こうしてっから

愛里の背中さすって 頭撫でて

「愛里 電話ありがとな」

俺は

「一人で泣かねえでくれて ありがとな」

それっきゃ言えなくて

「ば・・・」

ば？

「パパ・・・が・・・」

そう言うとまた泣いて

「愛里のお父さんが？ どした？」
俺は胸んところ ザワザワして
「しゅっ・しゅっけつっ・」
「出血？」
できるだけ がんばって 落ち着いた声で聞いて
それでも 頭ん中では たのむたのむたのむ
「しゅっ・しゅじゅっ・つ」
「手術？」
たのむたのむたのむ
「どうしよう」
愛里がまた声出して泣いて
「愛里」
俺の腕ん中で泣いてる愛里の頭に頬くっつけて
「お母さんから電話あったんか？」
愛里がうなずいた
出血 事故？ それとも吐血？ かあちゃんみてえな大量っ・
「すぐにっ・来てって」
「え？ なに？」
「ママがっ・私にっ・ すぐに来てっ・」
そんななんか 愛里が行かねえとなんねえような状態
心臓がダクダクして 俺がこんなじゃ愛里はもっと
「愛里、お父さんはっ・ 事故か？ それとも、病気で？」
愛里が首振って
「ママもっ・ 泣いちゃっててっ・」
だよな んな出血して手術っつたら お母さんだっ
「どうしよう」
「愛里」
「パパがっ・しっ・死んじやったら」
「大丈夫だよ、愛里、大丈夫だ」
「でもっ・」
「手術するっつうことはっ・ 手術できる状態だっつうことでさ」
「できっ・るっ・？」
「手術もできねえってことじゃねえんだからさ」
「はっ・あああっ・」
愛里がまた声あげて泣いて
「愛里、大丈夫だよ、お父さんは大丈夫だよ」
俺は愛里の頭なでることっきやできなくて
大丈夫ってなにが大丈夫なんか俺もわかんねえけど 大丈夫であってほしくて
「ママがっ・ 明日来ってって」
「あ、明日？」

「明日の・・・飛行機で、すぐに来てって」
そんなに？ 明日 そんなでも明日の飛行機のチケットって取れんのか？
どうなんだ？ んっと・・・ あ！
「愛里、かあちゃんに相談しよう」
「え？」
「かあちゃんなら飛行機のチケットとか詳しいからさ」
「でも・・・」
「今から俺ん家行こう」
「こんな・・・夜遅く」
「そんなんいいから、な？」
愛里が やっと顔あげた
「行こう、俺ん家」
コクンてうなずいて
俺は愛里のこと抱きかかえるようにして 部屋を出た

俺ん家着いて
愛里のこと リビングのソファに座らせて
ベッドルームの前で
「かあちゃん」
たのむたのむたのむ
「かあちゃん、力貸してください」
ドアが開いた
「どうしたの？」
「愛里のお父さんが」
「愛里さんのお父様？」
かあちゃんがソファの方見て
「愛里さん、お父様がどうかなさったの？」
愛里が また泣き出して
「あのさ、愛里のお父さん」
俺は できるだけ落ち着いた声で
「出血して手術するみてえで」
かあちゃんがメッチャ真剣な顔で俺を見た
「手術」
「うん、それで、愛里のお母さんが明日来ってって」
「明日？」
「うん、すぐ来てって」
かあちゃんが俺の顔見ながら なんか考えてて
「愛里さん」
愛里のそばに行つて

「お母様とお話していいかしら」
愛里は泣きながらコクンて頷いた
「愛里さんも一緒に話す？」
「わ・・・私は・・・怖くて」
「そう、わかったわ、私がお話を聞くから待っててね」
「はい」
ベッドルームのドアが閉まって
俺は愛里の隣りに座って 愛里の肩抱いて
愛里の身体が震えてて
「愛里、かあちゃんが話してくれっから大丈夫だよ」
愛里がコクンて
「なんか飲みてえか？」
首振った
「そっか」
愛里の肩抱いてる手で 愛里の腕さすって
たのむたのむたのむ 愛里のお父さん お願いしますお願いします
愛里が 俺に抱きついてきて
俺は愛里を抱きしめて
「大丈夫だよ 大丈夫」
それっきゃ言えなくて
「大丈夫だ」
愛里を抱きしめながら 身体ゆすって それっきゃできなくて

ベッドルームのドアが開いて かあちゃんが出てきた
え どうちゃんも？ ねえちゃんの部屋に入ってっただけど
「お母様とお話したわよ」
かあちゃんの声が落ち着いてて ホットする
「お母様はまだ少し・・・ ショック状態みたいだけど」
ショック・・・だよな
「でも、少し落ち着いて、お話はできるようになってたわ」
そっか よかった
「事故ではないんですって」
そっか よかった
「お父様は、前から何度か病院には行ってらしたんですって」
前から？
「今度出血したら手術ですって言われてたそうよ」
なんだ？ 胃潰瘍？ それとも・・・ 癌・・・ いや、んなことねえよ、んな
「病名をお聞きしてみたんだけど、お母様、泣いてしまっただけ」
病名聞かれて 泣いた それって・・・ いや、んな ちげえよ・・・な

「お父様が手術ということで動揺なさってるんだと思うわ」
だよな アメリカで手術ってさ 日本でだって 手術なんてさ
「手術は向こうの月曜日ですって」
「月曜・・・日」
「つまりは、今すぐ手術しなければならない状態ではないということね」
「あ・・・」
愛里の身体から力が抜けて
「あさっての飛行機で行くと、お母様には伝えたから」
「あさって・・・ですか？ 明日って」
「国内ではないから明日っていうのはね」
「そう・・・ですか」
「私も一緒に行くから」
「え、おかあさんも？」
「お母様にはもう伝えてあるから」
「俺も、俺も行く」
「あんたが行ったってなんの役にも立たないでしょ」
「そんでもさ」
「ここは私にまかせなさい」
「そんでも愛里のそばに」
「ニューヨーク近辺の地の利も状況もわかってる私が行った方がいいでしょ」
「え・・・ そうだけどさ」
愛里の顔見たら
「おかあさんが・・・ 一緒に来てくれるなら」
「そっ・・・か」
「今夜はここに泊ってね」
そんで とうちゃんがねえちゃんの部屋に行ったんか
「今は一人じゃない方がいいでしょ」
「ありがとうございます」
とうちゃんが ねえちゃんの部屋から出てきた
「できたよ」
「そう、それじゃ、愛里さん」
「はい」
「飛行機のチケットの手配は私にまかせてね」
「ありがとうございます」
「いいのよ、うちの会社で取ると速攻で取れるから」
かあちゃん マジありがとう
「それじゃ、おやすみなさい」
「おやすみなさい」「かあちゃん、おやすみなさい」
かあちゃんととうちゃんがベッドルームに入ってた
「愛里、寝よっか」

「は・・・い」

ねえちゃんの部屋に愛里を入れて

「愛里、おやすみ」

愛里が俺に抱きついてきた

「ありがとう」

「俺はなんもしてねえよ、かあちゃんだよ」

「あなたが・・・部屋に来てくれて」

「そりゃ行くだろ、泣いてたんだからさ」

「私、どうしていいのかわかんなくなって、つい電話しちゃって」

「してくれて嬉しかった」

「でも、なにも話せなくて」

「んなこといいよ、話してくれたじゃん」

「パパ・・・大丈夫ですよね？」

「大丈夫だよ、かあちゃんも言ってたろ、緊急手術するようなことじゃねえって」

「そうですよね？」

「そうだよ、大丈夫だよ」

俺は 根拠もねえのに 大丈夫っきゃ言えなくて

「寝れっか？」

「なんか・・・眠くなくて」

「横になってさ目えつぶるだけでも疲れ採れんだってさ」

「眠れなくても？」

「うん、ねえちゃんが言ってた、あんたには必要ねえ知識だけどねって」

「あ・・・」

愛里の表情が少し緩んだ よかった

「ほれ」

俺はタオルケットめくって

「横になれよ」

「はい」

愛里がベッドによこたわって 俺は そっとタオルケットかけた

「俺、明日バイト休むから」

「え？」

「愛里のそばにいてえからさ」

「仕事・・・行ってください」

「いいんだよ、バイトだしさ」

「あなたまでいたら、なんかすごい大ごとなんだって思っちゃいそうだから」

「愛里、俺、そばにいてえんだけど」

「あなたは仕事に行ってください、行って欲しい」

「マジで？」

「はい」

本当は 明日はずっと愛里のそばにいてえよ

それでも 愛里がそう言うなら

「わかった、俺は明日バイトして、泥だらけで臭っさくなって帰ってくっから」

「それが・・・ ホットする」

「そっか、ほら、もう寝ねえとさ」

「はい」

愛里が 枕に頭つけて

立ち上がろうとした俺の手を引っ張った

「もうちょっとだけ・・・いてくれませんか?」

「いいよ」

俺は愛里のベッドの横に座って

愛里は俺の手をにぎったまま

「なんか・・・ ホットする」

「そっか」

「疲れがドッと出ちゃって」

そりゃそうだよな

「なんか・・・ 疲れちゃって」

「そうだな」

「なんか・・・」

愛里の目がトロンとしてきて まぶたが ゆっくり閉じて

俺はずっと愛里の頭を撫でていむて ずっと

そんで・・・ 俺のまぶたも 重たくなってきて・・・

目が覚めたら そのまんま寝てた

代打

愛里を起こさねえように そ〜っとねえちゃんの部屋から出て
顔洗って あれ？ 俺の作業服がねえ どこだ？

「ダイチ」

とうちゃん えっ

「とうちゃん、それ、俺の作業服」

「今日は俺が現場行くからよ」

え・・・

「ダイチはアイリちゃんのそばにいてえだろ」

「それでも愛里は俺に現場行って欲しいっつってさ」

「ダイチに心配かけたくなえんだろ」

「俺がいたら、すげえ大ごとみてえに感じっからって」

「それでもダイチはアイリちゃんのそばにいてえだろ」

「そうだけどさ」

「俺がいてもなんもできねえからよ」

「んなことねえよ」

「ダイチ、ほっとんど寝てねえだろ」

「こんくれえ大丈夫だよ」

「そんなんでも現場行ったらよ、ケガしちゃうよ」

とうちゃん・・・ 俺のことまで心配してくれて

「な、俺が行くからよ」

「うん、ありがとう、監督に連絡する」

監督に電話

「森下、どうした？」

「今日、俺休ませてもらいてえんすけど」

「えええ、今日は人手足りないんだよな」

「代わりにとうちゃんが行くんで」

「カズオさん？ それはありがたいな」

「すみません」

「森下は大丈夫なのか？」

んっと

「腹くだしちまって」

「そうか、お大事に」

「おいっす」
「代打用意してくれて助かるよ」
「とうちゃんが行くつつつてくれて」
「代打という四番バッターだな」
だよな
「おいっす」
「わかった、それじゃ」
「失礼します」
キッチン行ったら とうちゃんはおっちゃんたちの握りメシ保冷バッグに詰めてる
「監督、とうちゃん来るって喜んでたよ」
「そっか？ まあいねえよかな」
「代打という四番バッターつつつてた」
「ん？」
とうちゃん野球のことあんまわかんねえんだった
「美里にはもうしゃべってっからよ」
「え？」
「美里もダイチがいた方がいいつつつてたよ」
マジ？
「ダイチ、握りメシ、食べるか」
「食べるよ」
とうちゃんのは俺が握って
「とうちゃん、俺の握りメシ食ってってよ」
「ダイチの握りメシ食ったらいっぺえ働けんな」
「とうちゃん・・・」
俺は とうちゃんに抱きついて
「ありがとう」
「俺はなんもできねえからよ」
「俺だって・・・ 愛里になんもしてあげらんねえよ」
「そばにいてあげられんだろ」
そばに・・・
「うん、わかった」
とうちゃんが保冷バッグ持って玄関へ
靴の棚から古いゴム長出そうとしてっから
「とうちゃん、俺のゴム長履いてってよ」
「ダイチがもらったんだからよ」
「俺の代わりに行ってくれんだからさ、俺のゴム長履いてってくれよ」
「そっか？ そんじゃ履かしてもらうかな」
「とうちゃん、いってらっしゃい」
「ダイチ」
とうちゃんが俺の頭クシャクシャって撫でて

「いってきます」
とうちゃん ありがとう
そんじゃ 愛里の部屋掃除してくっか

戻ったら
アイリもかあちゃんも起きてた
「え？ あの、仕事は」
「とうちゃんが代わりに行った」
「そんな・・・」
「私がカズオに頼んだの、ダイチの方が私がこき使いやすいからって」
「こき使ってくださいえ」
アイリが俺の顔見て
え 俺に抱きついて
「ありがとう」
やっぱ ゆうべのは俺に気い使ってたんだな
「ダイチ、チケット取れたわよ」
アイリがパッと俺から離れた
「マジ？ 早やっ」
「出発が午前 11 時、向こうには午前中には着くからそのまま病院に行くわ」
「そっか」
つうことは こっちの夜 9 時か 10 時に着いて・・・ 病院には夜中か
「愛里、着いたら」
や、俺に連絡する余裕なんてねえよな
「病院直行できっからよかったな」
「はい」
「握りメシ作っといたんだけど食う？」
「今はまだ・・・」
「そっか、そんじゃ昼にな」
「はい」
「かあちゃんは？ 握りメシ食う？」
「あんたが握ったの？」
「とうちゃんが握っといた」
「それじゃお昼に食べるわ」
「あいよ」

愛里とかあちゃんはパッキングして
俺は俺ん家の掃除と洗濯して
昼に 握りメシと俺が作った卵焼き食いながら

かあちゃんは愛里に、愛里のお父さんが入院してる病院は、
ニューヨークに滞在してる日本人がよく行く病院で、
日本人の医師や看護師さんもいて、設備もしっかりしていて評判がいいって
それを聞いている愛里は 少しホッとした顔になって
かあちゃんは 愛里に安心させようとしてくれてんだな
昼メシ食い終わって
俺は後片付けしてて かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってる
晩メシ 何にすっかな
巻き寿司？ 本当は明日巻き寿司作る約束してて そんでも明日は・・・
アイリに聞いてみっか
リビング行って
「愛里、晩メシさ、巻き寿司にすっか？」
「え？」
「明日つってたけど、今日は俺休んでるしさ」
え 愛里が俺のこと睨んだ
「今日ならさ、作れっから」
「イヤです」
「え、イヤ？ 食いてえつつってたじゃん」
「なんか、そんな、なんか・・・」
「食いたくなくなった？」
「お別れ会みたいなことしないで！」
「え？」
「あ・・・ ごめんなさい」
「や、あの、俺は」
「ごめんなさい、私、ちょっと・・・ 休んできます」
俺の横すり抜けようとする愛里の腕つかんで
「愛里」
「ごめんなさい、ちょっと」
「愛里」
アイリのこと抱きしめて
「離して」
「愛里」
「なんか、ちょっと・・・」
「お別れ会なんてぜってえやらねえよ、お別れなんてぜってえねえから」
「え・・・」
「ごめんな、俺が単純に考えちまったからさ」
「あなたは・・・」
「愛里に俺の巻き寿司食ってもらいてえなって、そんで美味えつつって欲しいってさ」
愛里が俺を見上げて 目にいっぱい涙 一粒ホロって
「ごめん・・・なさい」

「謝んなよ、だよな、巻き寿司は、そうだなあ、愛里が帰ってくる日に作っか」
「私が・・・」
「お父さんも無事で、愛里も帰ってきてよかったなって、巻き寿司パーティ」
「え・・・あ・・・」
愛里が俺の腕の中で 声出して泣いて
「な、やっぱ巻き寿司はお祝いときつつうかさ」
「パパ・・・ 大丈夫だよな？」
「大丈夫に決まってんじゃない、かあちゃんも言ってたじゃん」
「ほん・・・と・・・に？」
「マジでさ、愛里のお母さん、きっとさ、心細せえんだよ」
「え？」
「俺もとうちゃん入院したとき心細くてさ、アメリカのねえちゃんに LINE してさ」
「おねえさんに？」
「心細えつつたら、キッモって言われた」
「きつも？」
「すね毛生えた男が心細えとかキッモってさ」
「あ・・・フ・・・」
愛里が少しだけ笑って
「やっぱさ、手術とか入院なんて言われたらさ、心細えじゃん」
「そう・・・ですね」
「それでもさ、さっきかあちゃん言ってたけどさ、すげえいい病院だつてさ」
「はい」
「逆にさ、早く手術してよかったあつて」
「よかった？」
「とうちゃんだつてさ、脚曲がるようになってさ」
「そう・・・ですよ」
「お母さんと二人でさ、よかったあつて、ぜってえそうなるつて」
「そう・・・なると・・・ いいけど」
「愛里が信じてやんなきゃ、愛里のお父さんかわいそうじゃん」
「え？」
「愛里のためにぜってえ元気になんぞつて手術すんだよ」
「え・・・あ・・・」
あ ヤベ また泣いちゃった
「んっと、愛里、少し寝た方がいいよ、あんま寝てねえじゃん」
「は・・・い」
「部屋行くか」
「愛里さん」
かあちゃん？
「ヒトミの部屋でお昼寝したら？」
「え、でも・・・」

「私もダイチもいるから、その方が安心でしょ」

愛里がコクンて

「そんじゃ、ねえちゃんの部屋でな」

俺は ねえちゃんの部屋のドア開けて 愛里を中に入れて

「なんかあったらすぐ呼べよ」

愛里が俺の顔見て そんで 抱きついてきて

俺は 愛里に腕まわして

だよな 不安だよな 俺がいくら言葉ならべてもさ 俺だって状況わかんねえしさ

「パパ・・・大丈夫ですよね？」

俺が言えんのは

「あのかあちゃんがさ、落ち着いてんじゃん」

「え？」

「かあちゃんはさ、電話でしゃべるだけで、緊急かどうかわかんだよ」

「そうなの？」

「うん、そんなときは、あんなして握りメシなんか食ってねえよ」

「ほんと？」

「速攻で動く」

「それじゃ」

「かあちゃんは大丈夫だって判断した」

「あ・・・」

愛里の身体から力抜けて

「だから、愛里は昼寝して、休まねえと」

「はい」

「フラフラになって会いに行ったら、お父さん心配すんだろ」

「そうですね」

「ほら」

タオルケットめくって

「寝ろよ」

「寝ろよって」

「寝ろ」

「えらそう」

んなこと言えるようになったんか

「おう、俺は愛里のカレシだかんな」

「えらそうなカレシってイヤ」

「俺が愛里にえらそうにできるわけねえじゃん」

「なにそれ」

「俺はゴールデンレトリバーなんだから？ ヘッヘッヘッヘッ」

「やだ舌出さないで」

「ワン」

「あなたは犬じゃないです、あなたは・・・」

「俺はなにになに？ 愛里のなに？」
どうせ言わねえのはわかってっけど ふざけてみせたら少しはさ
「大切な人」
え 大切な 人
「そっか、だよな」
「だよなって」
「愛里、ほれ、横になってさ」
「はい」
愛里がベッドに横になって 俺はタオルケットかけて
「なんかあったらすぐ呼べよ」
「はい」
「そんじゃな」
「ありがとう」
「愛里 おやすみ」
「おやすみなさい」
ねえちゃんの部屋のドア そっと閉めた
リビングに行ったら かあちゃんPCでなんかしてる
「愛里さん寝たの？」
「うん」
「あんたが今日仕事休んでよかったわ」
「うん」
「愛里さん、あんたが支えなのね」
「え？」
「たっよりない支えだけどね」
「かあちゃん、いろいろありがとう」
「私は愛里をお預かりしたからね」
「それでもさ、ニューヨークまで一緒に行ってくれっからさ」
「ついでにニューヨーク支社にも顔出せるからちょうどよかつただけよ」
「かあちゃん」
「だから土下座はやめなさいってば」
「愛里のこと、よろしくお願いします」
「わかったから立ちなさい」
「俺は・・・なんもできねえからさ」
「あんたはあんたにしかできないことをすればいいのよ」
「俺にしかできねえこと？」
「そうねえ・・・次は、夕食？」
「なんだよ、それかよ」
「それかよとはなによ？ 私も愛里さんも作れないわよ」
「まあそうだけどさ」
晩メシか 何がいいんかな 唐揚げ？ こんなときに揚げ物は食べっかな

「かあちゃん、こういうときってさ、何食べてえもんなのかな」

「こういうとき？」

「愛里、なんかあんま食欲ねえし」

「そうねえ、スルッと食べられるものかな」

「スルッと・・・ そうめん？」

「そうめんいいわね、でもジャージゅー面風は今日の愛里さんにはどうかしら」

「そんじゃサッパリ系で作るよ」

「私も少し寝るわ」

「うん」

「あんたも少しだけでも寝たら？ ゆうべもほとんど寝てないでしょ」

「俺は大丈夫だよ」

「そう、それじゃ」

ベッドルームのドアが閉まった

俺ができること そうだ ノート

俺は夏休みの課題ノート持ってコンビニに走った

ズボンのケツの穴

俺のノートをコピーしたのをまとめて教科ごとにクリップして
ファイルに入れて おっし
アメリカで勉強する余裕・・・ある、あるんだよ ある

ん・・・ あ・・・ ねて・・・ なんじ・・・ え 16:27
ヤッベ メッチャ寝てた 買い出し行かねえと
部屋から出ると ねえちゃんの部屋のドアは閉まったまま
愛里はまだ寝てるんだな
リビング覗くと かあちゃんがソファに座ってタブレット見てる
「かあちゃん、俺、買い出し行ってくっから」
「そう、いってらっしゃい」
「いってきます」
家を出て スーパーに走った

晩メシの支度してたら 愛里が起きてきて
「何を作ってるんですか？」
まだちょっとボーッとした声でさ
「今日の晩メシは茄子の揚げびたしのつけそうめんだよ」
「だから茄子を揚げてるの？」
「こうやって揚げたのを、愛里、油ハネッから気いつけるよ」
愛里が 俺の背中に抱きついてきた
sonだけで 愛里が メッチャ心細せえのがわかる
俺は左手を愛里の背中にまわして
「この出しじょうゆん中にそのまんま入れんだよ」
右手で揚げた茄子を出しじょうゆに入れて
「これに生姜とシソ乗っけて食うんだよ」
「美味しそう」
「美味えぞ」
俺は 愛里の方向いて
俺を見上げる愛里の目は すぎるような 俺は どうしていいんか

愛里のくちびるに 軽く キスして
「こっちの方が美味え」
「なっ もう！」
愛里が俺の胸叩いて 俺 笑ってっけどさ どうしていいんかわかんなくてさ
あれ？ 玄関のドアが開く音
「どうちゃん、おかえり」
「ダイチ、ただいま」
どうちゃん、メッチャ働いてきたんだな
「おとうさん、おかえりなさい」
「アイリちゃん、ただいま」
「フッ」
愛里が 笑った 笑った
「なんか、現場から帰ってきたカンジが、そっくり」
「俺、こんなカンジ？」
「はい」
つことは、俺もどうちゃんみてえに働けてるつつうことかな
「ダイチ、ごめんな」
「なにが？」
「ケツに穴開いた」
「ケツに穴？」
どうちゃんが後ろ向きになって あ ケツんところにガムテ
「どうちゃん、ガムテ貼ったんか」
「監督さんが貼ってくれてよ」
「そっか」
「俺、全然気いつかねえでよ、そしたら監督さんがケツに穴開いてるって」
「そっか、そんじゃ洗って乾いたら、俺繕うからさ」
「生地持ってきます」
愛里？
「生地？」
「お尻用に染めた生地」
愛里がそう言って玄関飛び出して んっと
「と、どうちゃん、シャワー入ってきなよ」
「え、あ、そんでも」
「晩メシはできてっから、あとはそうめん茹でるだけだからさ」
「そっか？ ありがとな」
「俺こそありがとう、現場行ってきてさ」
「これ」
どうちゃんがケツポケットから
「日給」
封筒出して 俺に差し出した

「それはとうちゃんのだよ」
「俺はダイチの代わりに行ったんだからよ」
「とうちゃんが働いたんだから、とうちゃんのだよ」
「これはダイチなんだよ」
「とうちゃんが働いた金なんだからさ」
「半分ずつ分けたらどうなのっ」
かあちゃん？
とうちゃんの手から封筒受け取って中から札出して
「一万五千円、 カズオが一万、ダイチが五千円」
俺ととうちゃんに札渡して
「かあちゃん、それでも俺は今日はなんも」
「家事は立派な仕事です」
「あ・・・ はい」
「カズオ、お風呂入ってきて」
「あ、う、うん」
とうちゃんがあわててバスルームに入ってた

晩メシ終わって
愛里が全部食べた メッチャホッとした
リビングで かあちゃんは愛里にタブレットでなんか見せてて
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「ヤッさんとスギさんの奥さんがよ」
ん？
「泣いてたってよ」
「泣いてた？」
「ダイチとアイリちゃんから、なんか、手紙か？ 泣いてたってよ」
「そっか」
愛里と一緒にロールケーキ焼いて 一緒にカード書いたのが 遠い昔みてえで
「あの」
「愛里、どした？」
「作業ズボンは乾きましたか？」
「もう乾いてんじゃねえかな」
「かがり縫いしておくので」
「愛里が？」
「かがり縫いだけです、補強の布はあなたがミシンで縫ってください」
「あ、おう」
バスルームに行って 洗濯機の中から おっし乾いてるな
「愛里、乾いてるよ」
愛里が受け取って 俺はまたキッチンに戻った

愛里は・・・なんで今 俺の作業ズボンの穴気にしてんのかな
気い紛らわせてえのかな

「このページュをここに、この濃い目の細いのを斜めに二本つけたら」

愛里が俺の作業ズボンの上に布置いて

「この縫い目の補強にもなるかなって」

「おう」

愛里に言われたとおりに縫って

「あ、いいカンジ」

愛里 ちげえよな

「あとは、前みたいはこの黄色の糸とこっちの糸でガーッと縫って」

これが・・・最後の・・・とか 思ってねえよな

そんなんイヤだよ

「聞いてます？」

「え、あ、んっと」

「だから、この黄色とこっちの糸でガーッとジグザグに、ここかな」

「おう」

このズボンがさ 愛里が染めた生地で継ぎだらけになるまでさ

「いいカンジ」

「なんかメッチャかけえズボンになってんじゃん」

「いっそ全部やりたいですね」

「え・・・今？」

心臓が ダクンダクンて

「また破れたらでいいです」

「そっか」

そっか よかった そっか

「愛里さん、今夜もここで寝ていいのよ」

「今夜は・・・私の部屋で寝ます」

「大丈夫？」

「はい」

「ダイチ、愛里さんを部屋に送ってあげたら？ 明日早いから」

「おう」

玄関で あ、あれ渡さねえと

「愛里、ちょっと待ってて」

俺の部屋からノートのコピー持ってきて

「これ、俺のノートのコピー」

「コピー」

「あっちでさ、ヒマになったら勉強してくだせえ」

「ひま・・・」

「あ、久しぶりにお父さんとしゃべったりして、んなヒマねえかな」
「あなたの・・・ノートがいい」
「え？」
「あ、ごめんなさい、これで」
「俺のノートの方がいい？」
「あの、ちがうんです、コピーありがとうございます」
「俺のノート持ってけよ」
俺は部屋ん中に駆け込んでノートひつつかんで
「ほい」
「でも、あなたが困るから」
「愛里、俺を誰だと思ってんだよ」
「え？」
「あれだろ？ 学年トップの森下大一だろ？」
愛里が 泣きそうな目で俺のこと見て
「コピーもあるし、愛里が帰ってくるまでに、もっと先進んどくからさ」
「私が・・・」
「帰ってきたら、また一緒に勉強しよう、な？」
「は・・・い」
今は んなこと考えられねえよな そんなもさ
「そんじゃ部屋行こう」
俺は 愛里が帰ってきたときのこと 考えててえんだよ 帰ってきたときの

愛里の部屋の玄関

「愛里、心細くなったらさ、俺に電話しろよ」
「はい、でも、今夜は・・・大丈夫です」
「そんなもさ、なんかんときは必ず俺に電話してくれよ」
「はい」
「明日は俺も行くから」
「え？」
「あ、空港まで」
「でも、おかあさんがいるから、大丈夫です」
「送ってく」
「なんで？」
「送りてえから」
愛里が下向いて
「最後・・・だから？」
「え？」
「私と会うのは・・・最後だと思ってるから？」
「愛里」

「もう会えないから送りに来るの？」

「愛里、俺、マジで怒んぞ」

「え？」

愛里が俺のこと見た　すがるような目で

「最後じゃねえよ、愛里はすぐ帰ってくる、愛里のお父さん大丈夫だからさ」

「なんか・・・もう・・・なんか」

愛里が　泣き出した　俺は愛里のこと抱きしめて

「あなたが・・・来たら・・・　私・・・　行きたくないって言っちゃいそうで」

えっ

「行きたくない、行きたくないの・・・」

俺も　行って欲しくねえ　いっそ行かねえで欲しい　それでも

「愛里、怖えよな、そりゃ怖えよ、お父さんが手術なんてさ」

愛里が俺の胸に顔うずめて

「でもさ、言ったろ？　かあちゃんあわててねえって」

コクンて

「愛里の顔みたら・・・」

俺の言葉は　スカスカで　何言っても　スカスカで

「愛里、今からお母さんに電話しねえか」

「ママに？」

「俺もちゃんと聞いてえしさ」

「あなたも？」

「うん、お母さんもちっとは落ち着いてんじゃねえかな」

「そう・・・ですね」

「もっかい話聞いたらさ、少しは安心すっかもしんねえじゃん」

「そばにいてくれる？」

「いるいる、俺も聞いてえつつあったじゃん」

「それじゃ、中に入ってください」

リビングのソファに座って

愛里がスピーカーにして　呼び出し音が鳴って

「愛里ちゃん！」

お母さんの声

「ママ、パパの具合はどうなの？」

「よくないの」

「え？　あの、い、意識は？」

「意識はあるけど・・・　起き上がれないのよ」

起き上がれねえ・・・　それでも意識はある

「パパはどこが悪いの？」

「愛里ちゃん、早く来て、ママもう心細くて耐えられないわ」

「明日の飛行機だって聞いたでしょ」
「森下さんも今日の飛行機取ってくれたらよかったのに」
「これでもいちばん早い飛行機を取ってくれたって知ってるでしょ」
「そうね、ごめんなさいね、ママ心細くて、つい、申し訳なかったわ」
「ねえ、パパはどこが悪いの？」
「まだ血が止まらないのよ」
「え・・・」
「ママも更年期がひどくて、汗は止まらないし何度も吐いちゃうの」
愛里のお母さん お父さんのことで更年期症状ひどくなってんのかな
「愛里ちゃんの顔を見たら、パパも少しは・・・ね」
「す・・・少し？」
「愛里ちゃん、早く来てね、ママ待ってるからね」
「わかった、明日、行くから」
「愛里ちゃんがいてくれたら、ママ・・・」
お母さん 泣いてる
「ママ、行くから、泣かないでよ」
「そうね、愛里ちゃんが来てくれるものね」
「それじゃ切るから」
「愛里ちゃん、待ってるからね」
「うん」
プツツ
「あの、ママが、ごめんなさい」
「ん？ なに？」
「飛行機のチケットがどうのって」
「んなこと気にしなくていいよ、愛里のお母さん、そんだけ心細せえんだよ」
「なんか、よくわかんない、意識はあるけど血が止まらないって」
「意識あるつつうことはさ、危険な状態ではねえってことだろ」
「そうですか？」
「かあちゃんが、ねえちゃん生んだときは意識なくなったっつってたからさ」
「そうなの？」
「うん、出血多量でさ、意識あるつつうことはそこまでじゃねえつつうことだよ」
「あ・・・ ですよね」
「愛里のお母さんも更年期症状強くなってっから」
「ママの更年期のことなんか聞いてないのに」
「お父さんのことでひどくなってんのかもしんねえからさ」
「そうなんですか？」
「精神的なことも影響するんだってさ」
「あなたの方がずっと詳しいですね」
「愛里の顔見たら、お父さんもお母さんも落ち着くんじゃねえかな」
「だったらいいんですけど」

「お母さんも言ってたじゃん、心細えってさ」
「あなたの言ってたとおりでなと思って聞いてました」
「愛里の顔見たら、お父さんも安心して手術受けられるよ」
「ほんと？」
「もし俺だったら、愛里が手術前に来てくれたら」
マジでさ
「ぜってえ意地でも早く治ってやるって思う、そんで頑張れる」
俺のこと見る愛里の目が 少しホッとした目になってて
「愛里はお父さんのこと元気づけに行くんだよ」
「はい」
「かあちゃんも行くしさ」
「はい」
「不死身のかあちゃんが行くから縁起いいじゃん」
「あ、そうですよね」
「そうだよ」
「なんか、ちょっとホッとした」
「そっか」
「あなたの言うとおりで、ママに電話してよかった」
「だな」
「ありがとう」
「俺はなんもしてねえよ」
マジで なんもできなくてさ

愛里の部屋の玄関

「そんじゃ、明日の朝な」
「はい、おやすみなさい」
「愛里、おやすみ」
ドア閉めて 鍵は・・・ 鍵・・・
俺はドア開けて 愛里のこと抱きしめて
「愛里」
なんつっていいんか なんか俺 なんか
「おみやげな」
「なにそれ」
愛里が俺のことトンて突き放して
「おやすみなさい」
「愛里、おやすみ」
ドア閉めたら 鍵がかかった

空港へ

シャトルバスのある駅までの電車の中
かあちゃんと愛里は座って 俺はその前に立ってて
かあちゃんは愛里にビジネスクラスの話してて
今回かあちゃんと愛里はビジネスクラスに乗るっつうのは昨日言った
「おかあさんはいつもビジネスクラスなんですか？」
「一ヵ月程度の長い出張のときはね、帰りなんて疲れて爆睡だから」
俺は 俺の頭の中は なんもなくて なんもねえのかそれとも
シャトルバスの中は
かあちゃんが前に座って 俺と愛里が並んで座って
俺は愛里の手えにぎったまま なんも言えなくて
なんか言いてえけど なんも出てこなくて
「なんで黙ってるんですか？」
え・・・
「なんか、ずっと真面目な顔して黙ってて」
「おみやげ、何買ってきてもらおっかなって」
「ウソ」
だよな こんなペラッペラなウソ
「ごめんな」
「なにが？」
いろいろ なんかいいろいろ
「一緒に行ってあげらんなくてさ」
「そんなこと・・・」
「さすがに俺にはビジネスクラスはムリだもんな」
「ママはエコノミー分しか振り込んでないはずなんですけど」
「かあちゃん、マイルすっげえ貯まってっからさ」
「おかあさんもそう言ってたけど」
「かあちゃんとじゃねえとビジネスクラスなんて乗れねえからさ」
「そうですね、あ、ママはビジネスクラスに乗ったんだ」
「そうなんか」
「パパが・・・ あ・・・」
ヤベ 愛里が暗い顔になっちゃった
「俺もいつかさ、愛里をビジネスクラスにさせられるように稼ぐからさ」

「いいですそんなの、私、アメリカって、なんか肌に合わなくて」
愛里 後ろ向きになるな 後ろ向かないでくれ
「愛里は、あれだろ？ イタリアのばあちゃんが指でパスタ丸めんの見てえんだもんな」
「それは動画でいいって言ったでしょ」
よかった
「しかも、動画には翻訳がつくからわかるけど、イタリア語なんてわかんない」
「そんじゃ俺がイタリア語勉強すっか？」
「なんのために？」
「愛里がばあちゃんが指でパスタ」
「だからあ、あれは動画だけでいいの」
よかった
「ママは英語全然ダメなんです」
「え？」
「この前私が行ったときも私が通訳するくらいで」
「愛里は英語得意だもんな」
「それでも、あんなに英語できないのにアメリカに住むとか」
「そんでも住んでるうちにできるようになるっつうじゃん」
「どうかなあ、フランス語だってダメで」
「フラ、フランス語？」
「ママが通ってた、私も通いましたけど、ママのときはフランス語が必修で」
「マジ？」
「でも全然できなくて、やっと単位取ったって」
「愛里はフランス語できんの？」
「私のときは選択でした」
「選択しなかったんか」
「ママが、愛里ちゃん、フランス語は大変だから英語に力を入れた方がいいわよって」
「そっか」
「今考えたら、ママは英語だってできないのに、よく言うよってカンジ」
「ハハハ」
よかった 愛里がいつもの愛里みてえになってる
「あなたは留学したいとか思ったことは一度もないんですか？」
「ねえな」
俺は・・・ なんつうか
「俺は、俺にとってこの世でいっちゃんしあわせな場所に生まれちゃったからさ」
「え？」
「他んどこ行く気しねえっつうかさ」
愛里が俺のことジッと見て えっ ヤベ 愛里の目に
「や、愛里、俺こんだからさ、グローバルみてえなのはさ」
「わかる・・・」
え？

「わかる気がします」

マジ？

「私でも・・・ すごく居心地がいいから」

「マジ？」

「はい」

「そっか」

俺は 愛里の肩抱いて

「そっかあ、居心地いっかあ」

「そんな大きい声出さないで」

「あ、ごめん」

かあちゃんもシートとシートの間からこっち振り向いて見てる

愛里の耳元で

「かあちゃんに睨まれた」

「睨みますよ、あんな大きい声で」

「ごめんなさい」

「フッ ククッ」

愛里が笑ってる よかった

シャトルバス下りて

俺は 愛里とかあちゃんのスーツケース引いて

「愛里さん、荷物持ちがいてよかったわね」

愛里が笑ってる よかった

カウンターで荷物預けて

かあちゃんが手続きして

「あなたのノートはこのバッグに入ってます」

「スーツケースに入ればよかったじゃん」

「貴重品は手荷物につて」

貴重品 俺のノートが貴重品

「そっか」

しか言えなくなってさ

「ダイチ、あんたはもう帰っていいわよ」

「まだ全然時間あんじゃん」

「私と愛里さんはラウンジに行くから」

「ラウンジ？」

「ビジネスクラス専用ラウンジ」

「俺は入れねえの？」

「チケット持ってるか会員じゃないとダメなの」

「そっか」

胸んところが ザワザワして

「食事も飲み物もいっぱいあって、すべて無料」
かあちゃんが 俺をわざと煽ってみせてんのが わかる
「ゆったりしたソファもあって、WiFi も使い放題」
「なんだよお、そんな俺も行ってえじゃん」
「残念でした」
「ったくさあ」
俺はスネたような顔してみせて
「愛里、俺の分も飲んで食ってくれよな」
「ダイチの分までなんて吐いちゃうわよ」
「かあちゃんに言ってねえよ、愛里にだよな」
愛里が あの すぎるような目で 俺を
「愛里、いってらっしゃい」
愛里の手が 俺の方に
俺は その手をつかんで 引き寄せて
「愛里」
抱きしめた
「次は愛里が帰ってくる時だな、そのときはギュウッてさ」
「淋しい？」
愛里 やめ・・・て・・・くれ
「淋しいに決まってんじゃん」
「ほんと？」
「俺、毎晩泣いちゃってっかもしんねえ、愛里い早く帰ってきてくれよおってさ」
愛里が 俺の胸んところに頭つけて なんかに考えてて
顔上げた
「いってきます」
「おう、いってらっしゃい」
「ダイチ、そろそろ行くから」
愛里が俺から離れた
「おう、かあちゃん、おみやげな」
「マカデミアナッツ？」
「ハワイかよ」
「それじゃ、あとはよろしくね」
「おう、いってらっしゃい」
かあちゃんと愛里はラウンジに向かって歩いて
俺は 帰ろう

シャトルバス待ってたら
ピコン
ショートメール？ かあちゃんから？

『よくやった』

かあちゃん・・・ やめてくれよ 俺 こんなところで泣きたくねえよ

かあちゃん 俺は 頑張れたかな よくやったって 俺は・・・

ギリギリでさ あれがギリギリでさ

かあちゃん 愛里のこと頼むよ かあちゃんなら かあちゃんなら・・・

俺は なんもできねえ なんも・・・

だから かあちゃん 愛里のこと 守ってあげてください

かあちゃん お願いします

空港の方に頭下げて

シャトルバスに乗った

愛里かからの手紙

俺ん家に戻ったら

とうちゃんは？ 愛里の部屋掃除してんのかな
着替えて手伝いに行くか

ドアが開いて

「ダイチ、帰ってたんか」

「とうちゃん、ただいま」

「おかえり、アイリちゃんと美里は行ったんか」

「もう少しで飛行機飛ぶじゃねえかな」

「あのよ、アイリちゃんの部屋掃除してたらよ」

とうちゃんが水色の封筒出して

「リビングのテーブルの上にあった」

“森下大一様”

俺への手紙？

「俺はベランダ掃除すっから、ゆっくり読めや」

「あ、うん」

「字い書けて読めるっていいな」

「え？」

「手紙なんてよ、俺には書けねえもんな」

「とうちゃん読み書きできんじゃん」

「読むのはなんとかできっけど、書くのは俺にはできねえな」

「とうちゃん俺に手紙くれたじゃん」

「あ？」

ポカンとした顔してっけどさ

「入院してっとき、看護師さんに渡してくれてさ、

大一ありがとうってさ」

「あれは、手紙つつうか、あれくれえっきゃな」

「俺は嬉しかったよ」

「そっか？ 俺のはいいからよ、アイリちゃんの読んであげねえとよ」

「うん」

部屋に入って

何書いてあるんだ？ なんかドキドキする 嬉しくてじゃなくて なんか・・・

封筒から出した便箋は白に小さな薄い青の花が右下に・・・

んなことじゃなくて中身読まねえと

“森下大一様

あなたに伝えたいけどうまく伝えられなくて手紙を書いています。

パパのことで、ずっと私のこと支えてくれてありがとう。

正直これを書いている今も気持ちは落ち着いてはいないけど

あなたが大丈夫って言うてくれると　なんかホッとして

でもまたすぐに息ができないようなカンジになって

そうするとあなたがまた大丈夫大丈夫って

まるで人工呼吸みたいに　あなたの大丈夫で息ができた”

愛里　俺の大丈夫は　スッカスカでさ

“いろいろ考えちゃって

もしもパパがいなくなっちゃったらとか

もしもパパがすごく悪い病気とか”

だよな　俺がいくら大丈夫つつつてもさ　愛里は考えちゃうよな

俺だって　そんなん考えちゃいけねえって思っても　やっぱ・・・

“こんなこと考えちゃいけないんだけど

もしもパパがいなくなったり悪い病気で働けなくなったりしたら

私とママはどうなるんだろう　どうしたらいいだろう

そのまま日本に帰れなくなるのかな

学校も辞めなきゃならなくなるのかな”

愛里　んなことまで考えてんだ

や・・・俺も　頭のどっかにそういうあって　必死でねえことにしようとして

“パパが手術しなきゃいけないときに　こんなこと考えてるって

身勝手に親不孝だなんてわかってるけど

正直な気持ちは　すごく不安で怖い”

だよな　そりゃそうだよ

“パパのことだから　私やママが困らないようにはしていてくれると思うけど”

そうだよ　お父さんはちゃんと愛里とお母さんのこと考えてるよ

“それでも今までどおりにはならなくなるのかな

私はママとアメリカで暮らすのかなって思うとすごくすごくイヤで

アメリカがイヤっていうより　ママと暮らすのはイヤっていうより

あなたのそばにいられなくなるのがイヤ”

愛里・・・　イヤだよ　俺も・・・　ぜってえイヤだよ

“だって私　見つけちゃったから

この世でいちばんしあわせな場所”

えっ

“あなたのそばが　私には　この世でいちばんしあわせな場所”

愛里・・・　だからバスン中で・・・　だから・・・

“そこから離れたら　どんなにお金があっても何も不自由しなくても

私　しあわせでいられない”

俺は・・・ もう・・・ 愛里・・・

“でも 離れなきゃいけないことになったら

あなたのそばにいられなくなったら

それでも生きていかなきゃいけなくて

そしたら 私は 私には この世でいちばんしあわせな場所があったって

それを見つけられたって その場所にいたこともあったって”

なんだよ・・・ なんだそれ・・・ 過去形にすんなよ

“もしも私がいなくなったら あなたは私のこと忘れちゃうのかな”

忘れるわけねえだろ 忘れられるわけねえだろ

“高二の恋の思い出になっちゃうのかな”

思い出なんかにしねえよ 思い出じゃねえよ

“それが悲しい”

愛里・・・ 俺はもう声出して 止まなくて

“もしもそうになったら そうなっても たまには 淋しいって思ってくれるのかな”

え・・・ 空港で 俺に抱きついて 淋しい？ って聞いた あれは・・・

そういうことか？ 愛里・・・ んなこと思って・・・

“もしもそういうことになったら 私はあなたにはもう二度と連絡しない

辛いだけで 辛すぎて 無理

だから手紙を書いておこうと思いました”

なんだよそれ なんだよ

“このレターセット、買ったときはお花がきれいだと思っただけですけど

裏に「忘れな草」って書いてあって”

この花が そうなんか

“Forget-me-not 私を忘れないでっていう花言葉

でも あなたもまだ高二でこれからまだまだ先があって

忘れないでなんて言えない 言っちゃいけない

もしかしたら私なんかよりずっとずっとあなたに似合う人が現れて

私なんかよりずっとずっと あなたはその人を大好きになって”

んなことぜってえねえよ 愛里以外俺にはねえよ

“でも言うだけは 言うだけだから 言いたいだけだから

私を忘れないで”

愛里・・・ バカじゃねえの・・・ 忘れるわけねえ・・・ んな・・・

“もしものとき あなたのノートは返しません”

ノート 俺の

“あなたの文字とあなたの頭の中が入ってるから”

愛里・・・愛里 愛里 それで・・・ コピーじゃなくてって んな んなこと

“森下大一さん

私のいちばんしあわせな場所をありがとう

森下大一さん あなたが好き

愛里”

なんだよこんな こんな遺書みてえなの
こんなん書くなよ こんなん
LINE 開いて
『愛里帰ってこい ぜってえ帰ってこい』送信
『帰ってこねえなら俺が迎えに行く』送信
『腕引っ張ってでも連れて帰る』送信
『俺には愛里しかいねえんだよ』送信
『愛里がいなきゃ俺は壊滅する』送信
『遺書みてえな手紙書くな』送信
『俺はこれからもずっと愛里のそばにいる』送信
『愛里がイヤつっても愛里のそばにいる』送信
悲しい気持ちと怒りの気持ちがゴッチャになってて
こんな送っても 愛里は今飛行機の中で
これ見るのは 13 時間以上先で
そんでもさ
『俺のノートは愛里と一緒に持って帰ってこい』送信
そんでも もしものときに 俺に何ができる？
俺はまだ高二で まだまだ愛里のこと養っていけなくて
俺は なんもできねえよ なんも
両手の平で ほっぺたパンパンで叩いて
今考えてもどっしょうもねえよ もしもなんて 考えたってさ
とうちゃんの手伝いしよう

部屋出て ベランダに行ったら もうきれいになってて
とうちゃんはかがんでて
「とうちゃん」
「ダイチのゴム長も干しといたからよ」
そう言って とうちゃんが振り向いた
「ダイチ、どした？」
だよな メッチャ泣いたのわかるよな
「とうちゃん・・・」
とうちゃんの顔見たら また 涙出て
「ダイチ」
とうちゃんが抱きしめてくれて
俺はとうちゃんの腕の中で 声あげて泣いた

ベランダの窓の枠んところに とうちゃんと二人で座って
とうちゃんは愛里からの手紙を読んでる

とうちゃんにも読んで欲しかったから
俺はうまく言えねえから 言っていると泣いちまいそうだったから
「これは」
とうちゃんが顔あげた
「ん・・・っと、アイリちゃんはダイチのそばにいてえつつってんだな？」
「うん」
「ダイチのことが好きってよ、よかったな」
「それでも・・・ もし愛里のお父さんになんかあったら」
「なんかつつうのは、なんだ？」
「愛里も書いてっけど、もし・・・ 死んだり、すげえ病気だったら」
「そんなんじゃなきゃいいな」
「俺もそう思ってけど」
こんなん口に出して言いたくねえけど
「それでも、もし、お父さんいなくなったら、愛里のこと養ってく人がいなくなって」
「そっか」
「愛里は帰ってこれねえかもしんねえ」
「アイリちゃんは・・・ どうやって食ってくんだ？」
「わかんねえ、お父さんが金には困らねえようにはしてっと思うけど」
「それでも、稼ぎ頭がいなくなったらよ」
「うん・・・」
とうちゃんが俺の顔見て そんなで
「俺が・・・」
そう言って なんか考えてて
「俺がパートの仕事もっと入れてよ」
「え？」
「俺じゃ・・・ ムリかなあ」
とうちゃん？
「俺一人でもカツカツだったかなあ」
「とうちゃん、なんの話？」
「俺じゃ、ムリかな」
「とうちゃん、なに？」
「俺が稼いでも、アイリちゃん・・・ 養ってけねえよなあ」
えっ とうちゃん んなこと考えてんのか？
「それでも、ぜんぜん金ねえよりは」
とうちゃんが 愛里のこと 養ってこうって考えてんのか
とうちゃんが そこまで パートもっと入れてって んなことまで
だったら だったら
「とうちゃん、もしものときは、俺、高校辞めて働く」
とうちゃんがそこまで考えてくれてんのにさ
「俺が働いて愛里のことなんとか養うからさ」

俺がやらねえでどうすんだよ

「そんでもさ」

俺一人じゃさ

「そんなときは、とうちゃんも力貸してくんねえかな」

「そっか、ダイチと俺と二人でならな」

「うん、とうちゃんと俺二人でならできよ」

「そうだな、ダイチと二人でならなんとかなっかもしんねえな」

「なんとかなる、ぜってえなんとかする、だから」

だから　とうちゃん

「二人でならさ、愛里のこと食わせていけるよ」

「そうだな、俺じゃなんとも、そんでも、ダイチと二人ならな」

「うん、とうちゃんと二人ならぜってえ大丈夫だよ」

「そうだな、うん、だな」

とうちゃんがいると　俺は強くなれる

だから

愛里　俺が守っから　ぜってえ守っから

部屋の掃除と洗濯　二人でして

換気扇も　便所のタンクもきれいにして　窓もピッカピカになって

やっぱ、とうちゃんと二人だと部屋中徹底的に掃除できんな

「ダイチ、晩メシなんだけどよ」

「買い出しにはまだちょっと早くね？」

「ラーメン食いに行かねえか？」

「ラーメン？」

「昨日、俺、金もらったろ？」

「あ、うん、とうちゃんが現場行ってくれたからさ」

「ダイチにラーメン食わしてやりてえと思ってよ」

「とうちゃんが？」

「たまには、俺の金で贅沢さしてやりてえからよ」

とうちゃんにとっては、かあちゃんが行く高級寿司屋みてえなカンジで

「とうちゃんが・・・　ご馳走してくれんの？」

「たまにはな」

とうちゃんが　ちっと照れたみてえに笑って

とうちゃん若けえ頃　働いてっときもラーメン屋は高くて行けなかったって

カップ麺も高けえから、たまに袋麺買ってきて半分にしてクズ野菜いっぺえ入れて、

それがとうちゃんのたまの贅沢っつっててさ

「食いてえ、ラーメン」

「そっか、そんじゃ行くか」

とうちゃんはきっと・・・　俺になんかしてやりてえって思って

愛里のことでしょげてる俺に

とうちゃんにとっては贅沢なラーメン屋に連れてこうって

「とうちゃん、俺、メッチャ嬉しい」

「そっか？」

とうちゃんが嬉しそうにニコニコして

ここなんだよ 俺がいっちゃんしあわせな場所はさ

なんかあっても ホットして安心してさ

だから・・・ 愛里

俺もさ 愛里のいっちゃんしあわせな場所に

ぜってえここに戻してみせっからな

ラーメン屋

駅の向こう側の小さなラーメン屋

「ラーメンふたつ」

とうちゃんが ちょっと緊張した声で注文して

「ダイチ、餃子食うか？」

「え？ いいの？」

「餃子もひとつ」

「とうちゃん、餃子もいいの？」

「今日はダイチに贅沢さしてやりてえからよ」

俺 なんか小せえ頃に戻った気分だ

とうちゃんにコロッケ買ってもらったときみてえなさ

ラーメンが来た 餃子も

「ほれ、ダイチ食え」

とうちゃんが餃子載った皿を俺のそばに置いて

「四個あるからさ、二人で二個ずつ食おうよ」

「ダイチにご馳走してやりてえからよ」

「それでもさ、とうちゃんと一緒に食いてえよ」

「そっか？ そんなじゃ一個もらうかな」

薄っすいチャーシュー一枚とシナチクとなるとネギのラーメン

「とうちゃん、メッチャ美味え」

「そっか」

マジ美味え

「ダイチ、なんで一本ずつ食ってんだ？ 熱っちいんか？」

「とうちゃんの金でご馳走してもらってっからもったいなくてさ」

「んなことしてたら伸びちまうからよ、ふつうに食えよ」

「うん」

ハァァァ 美味え

「とうちゃん、俺ととうちゃんて稼げばさ、愛里にもラーメン食わせられるよな」

「そうだな、餃子も食わしてやりてえな」

「餃子つけられるようにがんばる」

「俺もがんばっからよ」

「うん、とうちゃんと二人でなら、俺、ぜってえできる」

え なんだこの湯呑みてえな小せえ器に入った炒飯ふたつ

「あの、これ、頼んでないんですけど」
店主のおっちゃんが俺ととうちゃんの顔 チラッと見て
「サービス」
「え？」
背中向けちまった
「ありがとうございます！」
背中にお礼した
「とうちゃん、炒飯サービスしてくれたよ」
「サービスデーか？」
「スーパーじゃねえからさ、なんだろな」
「ありがてえな」
「うん、とうちゃんと一緒だとみんな優しくしてくれるよ」
「ダイチにだよ」
とうちゃんだよ
「とうちゃん、メッチャ豪華になったじゃん」
「だなあ、すげえ豪華だなあ」
「炒飯美味え」
「美味えなあ」
「愛里に、たまには炒飯もつけてやりてえよな」
「だな、炒飯もつけられるようにしてえな」
え ザーサイ？ ザーサイ出されたけど
「あの、頼んでないんですけど」
「サービス」
「あの、この店、今日、なんかの、何周年記念とかの日なんすか？」
「がんばれよ」
「え？ んと？」
店主のおっちゃんがうんうんて頷いて背中向けちまった
「ありがとうございます！」
がんばれって なんだ？
「とうちゃん、ザーサイまでサービスしてもらっちまったよ」
「ありがてえな」
「とうちゃん、ザーサイも美味えよ」
「美味えな」
「なんかメッチャ豪華な晩メシになったよ、とうちゃん」
「ありがてえな」
ラーメン 汁一滴残さねえで食った 汁一滴もさ とうちゃんが稼いだ金だからさ
「んっと」
とうちゃんがカウンターの上に下がってる値札見て
「ラーメン二杯と餃子で・・・ 2,100円」
とうちゃんの暗算は早えんだよな

「ダイチ、炒飯とザーサイの分はいいんかな？」
「サービスつつってくれたけど」
「そっか？ そんな」
とうちゃんが かあちゃんからもらった年季の入った財布から
千円札二枚と 100 円玉一個出して カウンターの皿に置いた
店主のおっちゃんが金をジッと見てて
え もしかして 炒飯とザーサイがサービスって 聞き違いか？
100 円玉 手に取って とうちゃんに渡した
「え、あ？ え？」
とうちゃんが戸惑った顔で俺を見たけど 2,100 円で合ってるよ
「サービス」
「え？」「え？」
「がんばれよ」
そう言って背中向けちまった
「あ・・・」
とうちゃんがペコペコ頭下げて
俺も
「ありがとうございます！」
頭下げて 店を出た
がんばれよって どういう意味だ？

帰り道

「とうちゃん、ごちそうさま」
「ラーメン屋のおっちゃんのおかげだな」
「なんかメッチャサービスしてくれたよな」
「ありがてえな」
「なんかあったんかな？」
「なんかあったんかもしんねえな」
「とうちゃん、100 円安くしてもらったな」
「ダイチといると、みんな優しくしてくれんな」
とうちゃんだよ とうちゃんというと みんな優しくしてくれんだよ
「とうちゃん、ありがとう」
「たまにはな」
「俺、いっちょまえになったら、とうちゃんに親孝行すっから」
とうちゃんが俺の顔見て
「ダイチは、生まれたときに俺のこと、なんつうんだ？ あ、救ってくれたよ」
「生まれたときはまだなんもできねえだろ」
とうちゃんがちっと情けねえ顔で笑って
「俺はよ、ヒトミが生まれたときのこと、憶えてなくてよ」

だよな かあちゃんが死にかけたショックで 数年間思い出せなかったって
「父親がよ、生まれたときのこと憶えてねえなんてよ」
「それは・・・ しかたねえよ、とうちゃんすげえショックだったんだからさ」
「それでもよ、ヒトミがかわいそうだろ」
「それは・・・」
しゃあねえよ だつてさ
「それがよ」
とうちゃんが驚いたつつう顔になって
「ダイチが生まれたとき」
「俺？」
「ダイチが生まれてきたの見てたらよ、思い出してよ」
「え、なに？」
「そうだ、俺、見た、ヒトミが生まれてきたとき、俺、見てた」
え？
「ダイチが生まれてきたの見て、思い出してよ」
「マジ？」
「あれは・・・ 嬉しかったな」
とうちゃんが泣きそうな顔で笑ってる
「とうちゃん、そのこと、かあちゃんに言った？」
「言った」
「かあちゃんは、なんつった？」
とうちゃんが俺の顔見て
「私はどっちも見れてねえ！ ってよ」
笑った
「ハハハ、だよな、かあちゃんは見れねえよな」
「ダイチが生まれてくれて、俺は・・・ んっとにありがてえよ」
とうちゃん 俺 とうちゃんの子どもに生まれてよかったよ
「とうちゃん、俺、今日愛里に、留学してえと思ったことねえんかって聞かれてさ」
あんとき
「俺は、俺にとって、この世でいっちゃんしあわせな場所に生まれたから」
自然に口から出て
「他んどこ行く気しねえつつったんだよ」
とうちゃんが 優しい目えして 俺の顔見て
「愛里が、手紙に、俺が愛里にとって・・・いっちゃん・・・」
ヤベ また泣く
「だから、俺、愛里が俺んところに戻ってこれるようにする」
「そうだな、そうしてあげてえな」
「うん、俺がんばる」
あれ？
ラーメン屋のおっちゃんが がんばれよって あれ？

あんどき・・・ 俺とどうちゃん 何話してたっけ？
美味えつつって 贅沢だつつって 豪華だつて そんで 愛里にも
「ダイチ、どした？」
「あの・・・さ」
あれ？ えっ？ もしかして？
どうちゃんはいつものTシャツとヒザんとこ繕ってるスエットで
俺はいつもの赤Tと中学んときの緑のジャージ
普段着だよな 泥だらけでもねえし汗かいてねえしさ
ヤッさんやスギさんの勘違いバージョンとは違えよな
あ！ 若造の俺ががんばるつつってたから 応援してくれた？
「どうちゃん、あのラーメン屋のおっちゃん、がんばれよつつってくれた」
そうかもしんねえし、そうじゃねえかもしんねえけど
「ありがてえな」
どうちゃんが優しい顔で 俺のこと見てて
「どうちゃん、ありがとう、ラーメンと餃子」
どうちゃんにとっての最高の贅沢を 俺にさせてくれて
「俺には、こんくれえっきゃできねえけどよ」
俺が愛里のことで 愛里のお父さんのことで 不安になって怖くなって
だから どうちゃんは 俺にラーメンご馳走してくれたんだな
餃子までつけてさ
俺には・・・ どうちゃんがいる
俺のこと支えて守ってくれる最強のどうちゃんがいる
だから・・・
「どうちゃん、俺、明日っからまた頑張って働くからさ」
「だな、アイリちゃんのために稼がねえとな」
「おう」
愛里のお父さん 愛里のために生きてください 元気になってください
それでも・・・ それでも、もしも・・・ そのときは
俺が愛里のこと守ります どうちゃんと二人で守ります
でも できれば 愛里のために まだまだ生きて元気で ヤベ 涙・・・
「ダイチ、ほれ」
どうちゃんがTシャツの袖で俺の涙拭いて
「とう・・・ちゃん」
「大丈夫だよ、ダイチ、大丈夫だ」
「うん」
どうちゃんが大丈夫だつつって 大丈夫じゃなかったことねえよ
だから きっと ぜってえ
「大丈夫だよな、どうちゃん」
「大丈夫だよ」
どうちゃんの優しい顔見ると ホッとして もっと泣きたくなるから

「どうちゃん、駆けっこしねえ？」
「駆けっこ？」
「マンションの入り口まで」
「やっか」
二人で走って どうちゃんすげえ早くて 俺とおんなしくれえで
「どうちゃん早えよ」
俺もどうちゃんもハアハア言ってて
「俺は逃げんのは早えんだよ」
「え？」
「つかまったらいじめられっからよ」
「あ、そっか」
「万札盗んだんじゃねえかって追っかけられたときもよ」
「ハハハ、だよな」
「それでも、ダイチとこうやって駆けっこすんのが楽しいな」
「俺もどうちゃんと走んの楽しい」
「逃げて走んのはちげえからよ」
「ハハハ」
笑ってる 俺 さっき泣いてたのにさ
「どうちゃん、ありがとう」
「あ？」
「ラーメンと餃子と、駆けっこ」
「駆けっこもか」
どうちゃんも笑ってる

家帰って
明日は愛里の弁当もかあちゃんの弁当もいらねえから
米研いで おっちゃんたちの握りメシは明日の朝作ることにして
俺はシャワー浴びて 勉強して
いつもなら愛里に LINE してる時間だけど
俺が日中送ったのには 既読はまだついてねえ
まだ飛行機ん中かな もう少しで着くかな
「ダイチ」
どうちゃん？
「おやすみ」
「どうちゃん、おやすみ」
俺は一人じゃねえ
どうちゃんがいる
俺に最高の贅沢のラーメン食わせてくれるどうちゃんがいる
俺も 寝よう

かあちゃんからの電話

朝起きて

愛里とかあちゃんの飛行機は こっちの夜中に着いてるはずだけど

愛里からはなんの連絡も来なかった かあちゃんからも来ねえ

そりゃそうだよ それどころじゃねえよ

落ち着いたらさ そしたら きっと

顔洗おう

キッチン行って

「どうちゃん、おはよう」

「ダイチ、おはよう」

二人で握りメシにぎって

「どうちゃん、愛里から連絡来ねえ」

「そっか」

「かあちゃんからも来ねえ」

「美里は・・・ なんかときっきゃ連絡来ねえから」

「そっかな」

「美里が連絡してこねえっつうことは、大丈夫なんじゃねえか？」

「だよな、かあちゃん一ヶ月の出張るときも全然連絡寄こさねえもんな」

「美里がなんも言ってこねえから、大丈夫だよ」

「だよな？」

「大丈夫だよ」

「うん、うん、だよな」

それでも・・・ 今回は仕事じゃなくて・・・

「ダイチ」

「ん？ え？」

「握りメシ、食ってけや」

どうちゃんが俺の手の上に握りメシ置いてくれて

「ありがとう」

できたての どうちゃんの握りメシ ホットする

考えてたってしゃあねえよ 俺は今できることするっきゃねえよ

「どうちゃん、美味え」

「そっか？」

おっちゃんたちの握りメシ入れた保冷バッグ持って

「どうちゃん、いってきます」

「ダイチ、いってらっしゃい」

俺は 稼ぐっ

現場 久しぶり感だな おとといはとうちゃんが代わってくれたから

「だいづ！」「だいづ！」

「ヤッさん、スギさん」

「大丈夫なんかあ？」

「え？ なにがっすか？」

「監督があ、だいづが腹くだしたっつってなあ」

あ・・・そういうことになってた そう言ったよ俺

「ほんでえ、カズさんに聞いたらあ、だいづが寝てねっがらあ」

「へ？」

「そんなん現場来たらケガするっつってなあ」

とうちゃんと話合わせとくの忘れてた

「寝れねえほど下痢するっつってなあ、なんかさあたたんか？」

「や、んっと、食い過ぎっす」

「食い過ぎい？ そんならいがったなあ、よくねえけんちょ」

「もう大丈夫っす」

「そっかあ？ あ～んまムリしねえでな」「ムリさねほがいいほんでな」

「ありがとうございます、大丈夫なんで」

「ダイちゃん」

「ショーさん、なんか久しぶりっつうカンジだよな」

「大丈夫か？」

「あ、うん、もう」

なんか おっちゃんたちにメッチャ心配かけちまったな

「今日からまたがんばるんで」

「だいづはいっつもがんばってるよお」「んだよ」「ダイちゃん頑張ってるよ」

「もっとがんばねえと・・・なんで」

「あんましがんばっとお、ウンコ漏れてまっぺ」

へ？

「んだな、ワハハハ」「ヤッさん、それは アハハハ」

「漏らさねえようになんぼります」

「そいやあ、ケツの穴は？」

ケツの穴？

「カズさん、そのズボンのケツんところ破れちまっつってなあ」

「ああ！ もう大丈夫っす」

後ろ向いて

「こりゃシャレてっぺ」「んだな」「なんかかっこいいな」

「愛里が・・・愛里がデザインしてくれたんすよ」

「あいりちゃんがあ」「あえるちゃん・・・優すぐでや」

「俺も読ませてもらったんだよ、愛里ちゃんからの手紙」

手紙？ あ・・・カードか

「み～んなでえ泣いちまってえ」「わもや」

俺も感動した そんでも・・・俺への手紙は・・・

「だいつはしあわせもんだったべ」「んだな」「そうだな」

「そうっすよ、俺はしあわせ者っす」

「はあああ、ノロケてっぺ」「熱っちな」

「そんじゃ、今日もがんばりますっ」

「そんじゃなあ」「やんべ」「俺はトイレ掃除してくるよ」

ヤッさんとスギさんは奥さんとの生活背負って

ショーさんは浮浪者から生活立て直して

俺も見習ってがんばろう そしたらぜってえ なにかあっても・・・

「だいつ！ こっちの方手伝ってくんちえ！」

「おいっす！」

いつの間にか なんも考えねえで働いてた

「ヤッさん、これ、廃棄んどこに持ってっていいんすよね」

「持ってってくんちえ」

かかんで あれ？ ケツポケットに入れてる携帯 鳴ってる？

ポケットから出したら かあちゃん！

なんか ドキドキする かあちゃんから電話って

「ヤッさん、かあちゃんから電話で、緊急かもしんねえんで」

「出てあげねっとお」

「すみません」

ドキドキしながら 通話ボタン押して

「か、かあちゃん」

「今いいの？」

「あ、うん」

「ちょっと長くなるけど？」

「あ、うん、あ、ちょ、ちょっと待ってて」

監督室飛び込んで

「監督」

「森下、どうした？」

「あの、かあちゃんから、緊急の電話で」

「帰るのか」

「や、あの、話を、してもいいですか？」
「ああ、いいよ」
「すいません」
携帯持って 裏にまわって
「か、かあちゃん」
「上司に一言ことわって電話するのはなかなかよらしい」
んなことどうでもいいからさ
「あの、か、かあちゃん、ど、どう？」
「どこから言えばいいのかしら」
「ど、どこでもいいから」
「空港に着きました」
そこから？
「病院に直行しました、玄関でお母様が待っていました」
そこは いらなくね？
「愛里ちゃん！ って抱きつきました」
かあちゃん？ なんでそんなこと 俺がショック受けねえように？
「病室の前に来ました、ドアを開けました」
ドアを・・・開けた
「こちら側のカーテンは閉まっていたから、さすがの私もドキドキしました」
「そ・・・そっか」
「お母様に誘導されて窓側の方に行きました」
なんかもう・・・心臓ヤベエ・・・
「愛里さんのお父様がうつ伏せで寝ていました」
うつ伏せ？ なんでだ？ 脊髄やられた？ わかんねえ
「アメリカの病院のパジャマって背中のところが開いていてリボンみたいに」
かあちゃん、パジャマのことはいいからさ
「腰から下にブランケットはかかっていたけどね」
なんで かあちゃんの声は・・・こんなに感情ねえんだ？ 何が・・・
「お父様は寝ていらして、お母様が、パパ、愛里ちゃんと森下さんよって」
意識は・・・あるんだよな
「そうしたら、お父様が目を開けて、愛里さんを見て、え？ って」
え？ えって？
「すっとんきょうな声で、え？ って」
すっとんきょう？
「お母様がもう一度、愛里ちゃんとお世話になってる森下さんよって」
え・・・まさか・・・認知症に？
「そうしたら、また、え？ って」
その、えっつうのは なんだ？
「愛里さんが、パパどこが悪いの？ 何の病気？ って、聞きました」
や、ヤベエ、息 苦しい

「そうしたら、じ」
「じ？ G？ なんかの略？」
「痔！ いぼ痔や切れ痔の痔」
「へ？ あ、あの、痔？ ケ、ケツの穴の、痔？」
「お父様はいぼ痔だそうよ」
「いぼ、いぼ痔？」
「愛里さんは状況が飲み込めなくて、それはそうよね、
私がお父様に、お母様からこうこうこういう電話があったので、
愛里さんと、私は付き添いで参りましたって言ったら、エーーーー？ って」
なん・・・か 立ってらんなく・・・
「すぐに来てって泣いてお電話いただいたのでって言ったら、エーーーー？ って」
座り込みまして 俺・・・
「そうしたら、愛里さんが貧血起こしちゃって、その場に倒れて」
「えっ あ、愛里は、愛里は大丈夫なんか？」
「ソファに横になったわよ」
「え、あの、そ、そんじゃ、愛里のお父さんは」
「明日手術して、あさってには退院」
「え？」
「出血はいぼ痔からで、手術は痔の手術」
「え、あの、痔の手術って、い、命に」
「心肺停止になりかかっている人じゃなきゃ大丈夫じゃないの？」
「え・・・ だい・・・じょう・・・ぶ」
「愛里さんと私は、いぼ痔の手術をするお父様のお見舞いに行った形になったけど」
「んっと、愛里のお父さんは、大丈夫つつうこと？」
「お尻の穴以外はね」
「あ・・・」
「ここからよ」
「え？ こ、ここから？」
「愛里さんがブチ切れたの」
「愛里・・・か？」
「ソファからスックと立ち上がって、いいかげんにして！ って、
出血だとか手術だとか、たかだか痔の手術のためにわざわざアメリカに来させるって」
かあちゃんの声が生き生きしてきて
「何の病気って聞いても言わないで言わないわよね言ったら来ないからねっ
早く来て来て言う余裕があったら、痔の一言くらい言えたでしょ！
痔！ 一文字！ 早く来てより短いつ！ それも言えないなんてバカじゃない！
愛里さんすごかったわ、なんか私までスカッとしちゃった」
かあちゃん
「そこにお母様が、愛里ちゃん、せっかく帰ってきたんだからって言っちゃったの、
帰ってきた？ 私の家はここじゃない！ パパとママの家でしょ！

私は帰ってきたわけじゃないの！ いい加減にして！ って、まあね、
心配し過ぎて怒りに変わっちゃったのね、それで極めつけがね、
もしパパが死んでも私に電話してこないで！ って、
パパが死のうが事故でグッチャグチャになろうが、ぜったい私に電話してこない
で！ って、

お父様、私の横にいるんだけどね、ポカンとして聞いてらしたけどね、
愛里さん、帰る！ 日本に帰る！ って病室出ていこうとして、なんとか私が止めたけ
どね」

「あの・・・ そんじゃ・・・ 愛里のお父さんは」

「だから、痔の手術するだけ、局部麻酔だそうだし、あさってには退院よ」

あ・・・ なんか・・・ 涙出てきて・・・

「かあちゃん・・・ よかった」

「やだ、あんた泣いてるの？」

「よかった・・・ なんも・・・ いぼ痔で・・・ よかった」

「そうね、ビジネスクラスでいぼ痔のお見舞いに行ったわけだけどね」

「かあちゃんには・・・ いろいろ、世話になって、あの、ありがとう」

「それはいいわよ、まあね、大ごとじゃなくてよかったわよ」

「うん」

「よかったと思わなきゃやってられないけどね」

「愛里は？ 愛里はどうしてんの？」

「もうね、お母様といっさい口きかないの、無視、

お母様が、愛里ちゃん帰りましょって言っても無視、

私が、明日お父様の手術が終わって、退院なさったら、私もお伺いするからって、

そう言ったら、私のことを見て、おかあさんごめんなさいって泣くのよ」

愛里・・・

「いいのよ、お父様が無事でよかったわね、私もホッとしたわって言って、

私のホテルの場所と、部屋番号はあとで知らせるからって言ったら、

やっとな、お母様とね、お母様が腕に触ろうとしたらスッて払いのけたけどね」

「そっか」

「私は明日はこっちの支社に行くから、帰国はいつになるか、まだわからないわ」

「うん」

「愛里さんと一緒なのか、私だけ先かはまだわからない」

「そっか」

「そういうことよ」

「かあちゃん、ありがとう、マジありがとう」

「いいわよ、一緒に行ってよかったわ、愛里さん一人じゃ、この状況はね」

「うん、かあちゃん・・・ ありがとう」

「やだ、まだ泣いてるの？ 泣くようなことじゃなかったから」

「うん、うん」

「それじゃ、帰国のことが決まったらまた知らせるわ」

「うん、ありがとう」

電話が切れて

俺は・・

「よかった」

声に出しちまって

愛里 よかったな 愛里 お父さん なんもなくてさ いぼ痔でさ

愛里 すごい心配してたもんな よかったな

涙拭いて 表に戻ろ・・って え？

ヤッさんとスギさん・・と、ショーさん？

「だいつ、お母ちゃん、いぼ痔なんかぁ？」「いんぼずが？」

「や、かあちゃんじゃねえっす、愛里のお父さんっす」

「ああ！ あいりちゃんのお父ちゃん」「わい、へんずねな」

「明日手術してあさってには退院できるって」

「いがったなあ」「いがった」

「よかったっす」

「ほんでもお、な～んでだいつのお母ちゃんか？」

「遠いんで、愛里一人だと心細せえだろうっつって」

「んだしたあ、あいりちゃん家は遠いんだした」「ずうさんずがん」「13時間もかかるの？」

「なんかすごい不安がってたんで」

「だいつのお母ちゃんついてってくれんならあ安心だっぺ」「んだ」

「かあちゃんには感謝っす」

「ダイちゃん泣いてるからさ、ヤッさんもスギさんも心配してたんだよ」

「あ、なんか、ホッとして」

「だいつは優しいなあ、あいりちゃんのお父ちゃんのことまでなあ」

「愛里がすごい不安がってたんで」

愛里だけじゃねえ 俺もすごい不安だったから

「痔ではあ死なねっからあ」「ずだばすなね」

「痔の話で盛り上がってるどころ悪いんだけどさ」

かっ 監督

「森下、ちょっと監督室に来てくれる？」

「あ、はい」

なんだ？ ヤッさんたちの方見たら 早く行けって手で

監督室に入って

「あのさ、カズオさん、明日から入れないかな」

「へ？ 入るって、仕事つつうことっすか？」

「できれば今週いっぱい、2～3日、明日だけでもいいんだけど」

「あ、んっと」

「森下のお母さんに連絡した方がいいのかな」

「や、かあちゃんは今いねえんで」
「森下のカノジョのお父さんのところ？」
だよな 聞こえるよな このすぐ裏でさ
「はい」
「13時間で、どこ？」
「ニューヨークっす」
「ああ！ それは時間かかるよね」
「かあちゃんは明日は支社に行くって」
「支社？ だよな、電話で話ただけだけど、日本だけじゃ狭いよな」
「狭い？」
「森下のお母さん」
「そう・・・っすか」
「そうだ、うちの奥さん、森下のお母さんからのお祝い、すごく喜んでたよ」
「マジっすか」
「なんだっけな、お産の主役は赤ちゃんではなくて貴女ですねって」
「へ？ なんすかそれ？」
「カードに書いてあったんだってさ」
そうなんだ かあちゃん んなこと書いたんか
「もらったカーディガン、さっそく着てるよ」
「よかったっす」
「それじゃ、カズオさんに聞いてみてくれるかな」
「おいっす」
「頼むよ、一日だけでもいいからさ、休み明けからガクッと人減っただろ？」
「そうっすよね」
「苦しいときのカズオ頼みだな」
「なんすかそれ ハハハ」
笑えてる 俺 やっと なんも考えねえで
「それじゃ、昼休憩まで一時間よろしく」
「おいっす」
とうちゃん また仕事の依頼だよ
とうちゃんやってくんねえかな また一緒に働きてえよ
現場戻んねえと

いぼ痔

帰りの電車の中

昼休憩るときも三時休憩るときも携帯見たけど

愛里からは何もねえ つか 俺が送ったやつに既読もついてねえ

いいよ 全然いいよ お父さん大丈夫でホッとしてんだよな

ブチ切れたのもホッとしたからだよな

俺もホッとしてるよ 俺がホッとしてもしゃあねえんだけどさ

そんでもさ

「にいちゃん」

ん？ 肩トントン？

「元気やったか？」

あっ あの 関西弁の人

「あ、せや、聞こえへんのやな」

聞こえてます

「げ・ん・き？」

俺は どうしたら いいんだ？

「憶えてへんのかな？ そんでもおとついは逃げたよな」

おとついで？ おと・・・とい？

「俺が声かけたらペコペコ頭下げて隣の車両に逃げたやんか」

なんの 話だ？

「こりゃ怖がらせてしもたなって、悪いことしたと思って」

ん・・・と？

「あ、わかんらんよな、ご・め・ん・な」

なんで謝ってんだ？

「首かしげて、わからんのか、かわいそやなあ」

んっと、俺のキャラ設定は・・・耳がちょっとで 頭が・・・ちょっと え？

「にいちゃん、今日も働いてきたんやな、えらいな」

え・・・俺の隣りに立ったけど

「あの日はな、ほんまに、ごめんな」

そんなに謝らなくても 100円までくれてさ

「おかんが」

おかん？ お母さん？

「あと3~4ヵ月や言われてな」

えっ

「頭おかしなってもうて」

それは・・・だよな

「俺んところは俺とおかんだだけで、母子家庭っちゅうやつや」

そうなんか

「おかんはブッサイクやから、ホステスもでけへんで、

朝っから働いて俺を育ててな、せやからうちはずーっと貧乏で」

笑ってっけど そんでも

「学校では乞食、汚い、あっち行け臭っさいってな」

え・・・

「あんとき、にいちゃんに言うた言葉はぜ～んぶ俺が言われてたことや」

そう・・・だったんか

「なんや自分に腹立っててな、ほんまにすまんことしたな」

自分に・・・

「俺もな、中学入ってから、にいちゃんみたいに土木のバイトしててん」

マジ？

「それもまた同級生に見られて、土方、臭っさい、汚い言われてな、

ほいでも俺が稼がんとノートだって買えへんからな」

この人は・・・なんで俺にこんな話してんんだ？

耳が聞こえねえと思ってる俺に

「中学出たら就職しよ思たらな、クッソ貧乏なのにやで、

おかんが、あんたはブッサイクやから、学歴つけんと就職でけへんで、

就職とブサイク関係ないっちゅうの、だいたいブサイクに生んだんは自分やろ」

なんでも笑いにすんのが関西風なんかな

「ほいで高校卒業してな、工業高校やったからけっこう資格は持ってんねん、

ほいで地元の土建会社に就職したら、そっかがひっどいところな、

今で言うブラックや、中抜きされて手取り10万」

中抜きされて10万は とうちゃんよりはマシだな

「こんなんやってられん、こりゃ東京行くっきゃないなあって、ほいでもな、

これがなっかなか職が見つからん、やーっと見つかったんが今の仕事や、

そこな、本社が大阪の焼き鳥屋、東京まで来て何やってんねんて話や」

ところどころに笑いを入れんだな

「最初はバイト扱いや、ほいでも、俺は頑張って正社員になれてな」

おお すごいな

「10年目には店長や、3年前やな」

え 俺の顔見たけど

「聞こえんちゅうのはええな」

え？

「こんなアホな話しても聞いてもらえる、ちゃうわ、聞こえてへんっちゅうねん」

一人ボケとツッコミか 関西人てすごいな

つまり・・・俺は聞こえてねえことにしといた方がいいんだな
「おかんも呼び寄せてな、これてやっと思わせられると思てな、
それが、病気で、なんやねん、アホちゃうか、なに病気になってんねん」
それは たまんねえよな
「あの日は、医者におかんがあと3~4ヵ月やって言われて、なんや・・・な」
そりゃ・・・辛れえよ
「なんやにいちゃんとしゃべってるとホッとすわ」
マジっすか
「聞かれてへんからかな？」
あ・・・全部聞こえてます すいません
「おかんが・・・死ぬて・・・そんなん・・・」
え 涙声 だよな お母さんが・・・
「にいちゃん？」
あっ つい 背中さすっちゃった
「や・さ・し・い・な」
俺は どうすれば そんでも 俺が聞こえねえと思てっから
でもさ お母さんが・・・って それは辛れえよ 辛すぎるよ
俺は つい つい 関西弁の人を 抱きしめちまって
「にい・・・ちゃん？」
抱きしめて 背中さすって
「そんなん・・・されたら・・・」
俺の腕の中で 声殺して 泣いてる
俺は これっきゃできねえけど
そんで なんか 騙してるみてえなカンジで
「ごめんなさい」
「あ？ 口はきけるんか？」
あっ
「ああ！ 耳がちょっとで、口はきけるんやな」
や、じゃなくて
「あ・り・が・と・な」
俺の胸ポンポンて
俺は 腕離して なんか
「ごめんなさい」
「にいちゃん謝らんとって、あ、聞こえへんか」
聞こえてるんすよ 俺 全部聞いちゃったんすよ
「そんな愛らしい目えで見つめられたら惚れまうやんけ」
え？
「ハハハ、ウツソや、冗談や、東京の人は冗談通じん・・・聞こえへんちゅうねん」
こんなときでも 一人ボケとツッコミって すげえよ
愛里 愛里のキャラ設定のせいで 俺はすげえ複雑な状況の中にいてさ

それでも この人が なんかホッとしたっつうから よかったのかな
あ、乗り換えの駅に着く どうすればいい？
ドア指さして
「下りるんか」
頭下げて
電車から下りて
「にいちゃん」
え？
「聞こえてんのやろ」
「えっ」
ドアが閉まった
あの人が あ・い・あ・お・あ ありがとな？
あの人 俺が聞こえてんのわかってて それでも
ありがとなって 俺 騙したみてえなのに
なんか すごえ 胸んところがキュウッて
どこの誰なのかわかんねえけど あの人も苦労しててさ
それでも頑張ってるさ それなのに・・・ お母さんが・・・
俺は この夏休み 学校だけじゃぜってえわかんなかったこと
いっぺえ 見てる気がする
あ、ヤベ 乗り換えの電車
走って 次の電車に飛び乗った

家の玄関のドア開けて
「ただいま」
「ダイチ、おかえり」
「どうちゃん、俺、さっき・・・」
「ど、どした？」
「お母さんが病気っつう」
「お母さん？ お父さんじゃなかったんか？」
「え？ あ！」
さっきの電車の人のこと引きずってたよ
「かあちゃんから電話あった」
「美里・・・から」
「愛里のお父さん、痔だってさ」
「じ？ じっつうのは、なんだ？」
「いぼ痔」
「いぼじ・・・ いぼ痔？」
「うん、明日手術してあさってには退院できるってさ」
「いぼ痔・・・」

どうちゃん？　なんで、んな怖えもん見たような顔してんだ？
「どうちゃん、心配ねえよ、ただのいぼ痔だってよ」
「いぼ痔・・・」
どうちゃん　なんで、んな、なんつうか、余命宣告されてみてえな顔
「浮浪者るときよ」
「あ？　え？」
「いぼ痔のおっちゃんがいるよ」
「いぼ痔のおっちゃん？」
「浮浪者仲間の」
「ああ、んで？」
「いっつも痛え痛えつつってよ」
「え、あ、そっか」
「そんでよ、ウンコするつつってよ」
ウンコ？
「上のな、改札のこっち側に便所あったから、階段、こんなんで上って」
ケツ押さえてガニ股つつうことか
「そんで、ちょっとして」
どうちゃん　すげえ恐怖におののいてる顔してっけど
「ギィ　ヤー――ッ！　ってよ」
どうちゃんが、んな大声出すの　初めて聞いた
「地下道んとこまで響いてよ、俺、ビックリしてよ」
俺はどうちゃんの声でビックリしてるよ
「誰か刺されたんじゃねえかって」
「さ、刺された？」
「他の仲間は誰か電車でひかれたんじゃねえかってよ」
「えっ？」
「そんで、警察来るし、救急車まで来てよ」
「そ、そんな？」
「地下道通ってる人たちもみんな大騒ぎだよ」
「何があったの？」
「一人、仲間のな、見に行ったってよ」
どうちゃんはその顔見てっだけでドキドキすんだけど
「あのいぼ痔のおっちゃんが、ケツ丸出しで便所の床に倒れてて」
「へ？」
「ケツも血だらけで」
「血・・・だらけ」
「殺人現場みてえだつつってよ」
「さ、殺人？」
「おっちゃんが、俺が世話になったおっちゃんな」
「あ、おう」

「おっちゃんと言うには、ウンコすつとき、ウツて力入れて、ケツの穴・・・」
「や・・・ぶれた？」
「みてえでよ」
「ええええ」
「俺、いぼ痔ってメッチャ怖えなって」
「そ、その、いぼ痔のおっちゃんは？ 戻ってきたんか？」
「戻ってこねえ」
「えっ、し・・・ 死んだ？」
「おっちゃんと言うには、救急車で病院運ばれて、入院したんじゃねえかって」
「死んでは・・・ いねえんだよな？」
「おっちゃんと言うには、どっかの施設に入れてもらったんかもしんねえって」
「あ・・・ そっか、だったら」
「俺、いぼ痔って怖えなって、ぜってえなりたくねえなってよ」
「そ、それでも、愛里のお父さんは」
「痛かったろうなあ」
「え、あ、た、多分」
「ウンコすっだけで、あんな声、痛かっただろうな」
「あ・・・ だよな、ウンコするとき・・・な」
「そりゃアイリちゃんのお母さん、怖かったよなあ」
かあちゃんの状況説明だと とうちゃんが思ってるみてえなのではねえと思うけど
「アイリちゃん、行ってあげてよかったな」
「え？ あ・・・ うん」
ブチ切れたっつってたけど
「いぼ痔は・・・ いぼ痔はよ」
おそらく とうちゃんが いちばん 愛里のお父さんに同情してっかもしんねえ
「だよな、ウンコするだけで、血・・・だもんな」
「俺は見てねえんだけどよ」
「あ、うん、そっか」
「それでも、美里から電話あって、よかったな」
「あ、うん、いつ帰ってくるかはまた電話するって」
「そっか」
「俺、シャワー浴びてくる」
まさか とうちゃんがいぼ痔で あんな恐怖にかられた顔になるとは思わなかった
つか、とうちゃんの説明がメッチャ臨場感あって 俺も怖かったよ
シャワー浴びよう

ねこまんま

シャワー終わって 部屋に戻ったら
愛里から LINE 来てた
あっちはまだ明け方じゃね？ ちゃんと寝れたのかな
『ごめんなさい』
『あなたから LINE 来てるのはわかってたけど』
『何からどう言えばいいのかわからなくて』
『それと』
『気持ち的に余裕なくて』
『見れなかった』
いいよ 愛里 んなことさ
『パパは深刻な状態ではありません』
『まったくありません』
『hemorrhoid です』
いぼ痔だろ？
『日本語で書く気になれないので調べてください』
笑っちゃいけねえけどさ 愛里らしくて可愛いよ
『今日の午後手術で明日には退院です』
『あなたやあなたのおとうさんに心配かけるだけかけて』
『おかあさんにはわざわざ一緒に来てもらって』
『申し訳なさ過ぎて』
『詳しく書く気力は今はないから』
『また落ち着いたら LINE します』
そっかそっか
『愛里』 送信
『かあちゃんから電話あって全部聞いた』 送信
『よかった』 送信
『申し訳ないなんて思うなよ』 送信
『俺はホッとしたしよかったと思ってる』 送信
『それでもいぼ痔はメッチャ痛てえらしいから』 送信
『早く治るといいな』 送信
『連絡してくれてありがとう』 送信
『嬉しいっす w』 送信

よかった 俺に LINE するくれえには落ち着いてさ

晩メシは丼に入った豚汁と握りメシ

中学んときから、かあちゃんが出張のときはとうちゃんと俺二人きりだから
冷蔵庫や冷凍室にあるもので、かあちゃんが言うところの「冷蔵庫掃除ごはん」になる
「とうちゃん、この握りメシ、とうちゃんが入院する前に冷凍したやつだよな」

「忘れちまってよ」

「あんときは、泊るかもしんねえつつって作っといってくれてたんだよな」

「病院に泊っちまったけどな」

とうちゃん 情けねえ顔でさ

「それでも治ってよかったよな」

「ありがてえな」

頭の中に あの関西の人のことが浮かんで

「とうちゃん、俺、帰りの電車で関西の人に」

「関西の人？」

「うん、前にちょっとさ」

「あの電車は関西の人が多いんかな」

「なんで？」

「この前、ダイチの代わりに現場入った日、帰りの電車だよ、
関西弁の人に、にいちゃん元気かつつって肩ポンポンてよ」

え？

「俺、ついクセで逃げちまってよ」

あ・・れ？ あの人なんか言ってたな おととい声かけたら逃げたって
え、とうちゃんのこと？

「関西の人がどうしたんだ？」

「その人のお母さん、あと3~4ヵ月だって聞かされてさ」

「3~4ヵ月って、なんだ？」

「え、だから、あとそんくれえで、死・・ぬ・・らしい」

「そっか」

「その人とお母さんて母子家庭でさ、すげえ貧乏で、それでも高校行かせてくれて、
就職できて、焼き鳥屋の店長になれてさ、それで、お母さんのこと呼び寄せて」

「よびよせたっつうのは？」

「一緒に住むようにしたっつうこと」

「そっか」

「そしたら、お母さん病気になって、あと3~4ヵ月だって医者に言われたっつって」
とうちゃんが食いかけの握りメシ持ったまま なんか考えてる

「その人泣いててさ」

「嬉しいだろうな」

「え？ あ？」

とうちゃん 俺の話わかんねえ？
「息子と一緒に暮らせるようになってよ」
「え・・・」
「そんな尻っぱになってよ、一緒に暮らしてもらえるなんてよ」
とうちゃんは・・・カンベキお母さん目線で考えてんのか
「ダイチ、ねこまんますっか」
「だよな、かあちゃんいねえときっきゃできねえもんな」
握りメシを豚汁ん中に入れてほぐしてかっ込む
「美味え」
「美味えな」
かあちゃん お茶漬けは食うくせにさ ねこまんまは行儀悪りいってさ
「俺、こうやって食うの大好きだよ、米粒に汁が染みてさ」
「若けえときによ、メシ炊いて少しだけ残してよ、こうやって」
とうちゃんが両手合わせて
「平たくして干しといてよ」
「え、マジ？」
「そうっすつと日持ちすっからよ」
リアル干し飯じゃん
「もうなんも食うものねえつうとき、それに湯かけて塩かけて食ってたな」
マジでリアル干し飯だ
「腹へってっからよ、メシが湯吸ってふくれるまで待って食ってよ」
「美味えの？」
「食えるだけありがてえつうかよ」
「そっか、だよな」
中抜きされて月三万だったんだもんな
「給料日前は、それもなくなっちまって腹すかしてたけどな」
「そんじゃ、この豚汁のねこまんまはご馳走つうことだよな」
「豚汁なんてよ、冬に給料出たときっきゃな、肉買えねえからよ」
「俺、とうちゃんの豚汁大好きだよ、生姜効いててすげえ美味えよ」
「生姜は美里が入れろっつってよ」
「かあちゃんが？」
「美里ん家では豚汁にチョコッと生姜入ってたってよ」
「そんじゃ、これは北川家伝統の味か」
「俺は食ったことねえけどな」
「俺、豚汁には生姜入れるのあたりめえだと思ってて入れてるよ」
「ダイチの豚汁は美味えな」
「俺はとうちゃんのが好きだ」
「そっか？」
なんか しあわせだ
とうちゃんとうちやうって豚汁の話して 愛里のお父さんは・・・

「ダイチ？ どした？　なんで泣いてんだ？」
「なんか・・・　よかったなって・・・　愛里のお父さん、深刻な病気じゃなくて」
「それでも・・・　いぼ痔はなあ」
とうちゃんが眉間にシワ寄せてる
「俺は・・・　いぼ痔にだけはなりたくねえな」
マジで　とうちゃんにとっては　メッチャトラウマなんだな
「とうちゃんは大丈夫だよ」
「そっか？」
「俺、調べたんだけどさ、痔って、ずっと座りっぱなしの仕事とかさ、
あと、便秘とかさ、とうちゃん便秘しねえだろ？」
「ウンコはいっぺえ出っけどな」
「そんじゃ大丈夫だよ」
「そっか、やっぱウンコ出るつつうのは大事なんだな」
「やっぱ？」
「浮浪者るときよ、おっちゃんが、犬はウンコ出なくなると危ねえってよ」
ねえちゃんに聞いたことあるよ、みーちゃんのことだよな
「みーちゃんがな、ウンコ出ねえから心配だよ、そんで出たときは嬉しくてよ」
「寝起きのかあちゃんにウンコ出たつつったんだろ？」
「ねーちゃんがよ、俺のウンコのことだと思ってよ」
ねえちゃんに聞いたときは　俺メッチャ笑ったよ
「あんたのウンコの話なんて聞きたくねえってよ」
「そんでビンタされたんだよな？」
「されたな」
とうちゃん、メッチャ嬉しそうにさ
「ごちそうさま、美味かったあ」
「ダイチ、明日の晩メシはカレーでいっかな」
「豚汁と握りメシまだ残ってんだよな、それでいいよ」
「そっか？　そんじゃ、カレーはあさってにすっか」
「そのカレーってさ、もしかして、ちくわカレー？」
「ちくわ、冷凍庫に二本残ってたからよ」
「俺、とうちゃんのちくわカレー大好きだよ」
「そっか？」
「かあちゃんいるときは食べねえスペシャルカレーつつうかさ」
「んな、大したもんじゃねえけどよ」
「明日も豚汁ねこまんま食えて、あさってはちくわカレ・・・じゃねえよ！」
「あ？　カレーじゃねえ方がいいんか？」
「じゃなくてさ」
忘れてた　あっぶねえ
「とうちゃん、監督がさ、明日、とうちゃんに現場入って欲しいつつてさ」
「俺？」

「できれば今週いっぱい、ダメなら2~3日、せめて明日は入って欲しいって」
「美里いつ帰ってくっかわかんねえかな」
「明日はぜってえ帰ってこねえからさ」
「そっか、そんじゃ、働かしてもらうかな」
「監督喜ぶよ」
「ありがてえな、仕事もらえんなんてよ」
「明日またとうちゃんと一緒に働けるよ」
「だな、ダイチと一緒に」
しあわせだ またとうちゃんと一緒に働けるなんてさ

片付け終わって 勉強して
俺は二学期の授業まで進んでる
愛里が帰ってきたときのために あのノートの先はもう終わってる
俺のためでもあってさ
あの関西の人のお母さんは女手ひとつで高校まで行かせてくれたって
俺も 言ってみりゃ かあちゃんが高校行かせてくれてさ
その金を無駄にはできねえよ
「ダイチ」
とうちゃん？
「これ」
作業服 新しい方のやつ
「明日、ダイチはこっち着てけや」
「俺はいつものでいいよ、とうちゃんがそれ着てよ」
「これはアイリちゃんが買ってくれたんだからよ」
「俺は愛里がケツのとこのデザインしてくれたやつ履きてえからさ」
「そんじゃ、ズボン俺がこっち履いて、上はダイチがこっち着ればいんじゃないか？」
「とうちゃんが両方新しいの着なよ」
「俺は日雇いだからよ」
「俺だって日雇いだよ」
「それでも俺が新しいのつつうのはよ」
「そんじゃ上だけ取っ換えてさ」
「そっか、そんじゃ、これな」
とうちゃんが新しい方の上を俺に渡した
「ダイチ、おやすみ」
「とうちゃん、おやすみ」
とうちゃんが俺の部屋のドア閉めて
とうちゃんは かあちゃんがいねえとき ベッドルームのドア開けて寝る
小学生んときとうちゃんに なんでドア開けっぱなしで寝んのか聞いたたら
一人であの部屋の中にいると落ち着かねえつつってた

あのベッドルームにはセミダブルとシングルベッドがある
かあちゃんがセミダブルでとうちゃんがシングル
この部屋に引っ越すとき、かあちゃんはキングサイズのベッドにしようと思ったって
これもねえちゃんから聞いたんだけどさ
かあちゃんがとうちゃんをショールームに連れてったら
とうちゃんが怯えて　こんなでけえの怖えつつって
そんじゃセミダブルふたつにしようかって見せたら
こんなでけえの、どこに寝ていいんかわかんねえって怖がったってさ
それ聞いて　俺　笑ったけど
そんで　かあちゃんは仕方なくとうちゃんのはシングルにしたって
ねえちゃんが言うには　かあちゃんがいるときは　ほとんど二人でセミダブル
ベッドルームでかあちゃんが仕事してたりなんかするときは
とうちゃんはシングルの方に寝てて　かあちゃんが寝ると・・・って
かあちゃんもねえちゃんにどんだけ細かくしゃべってんだよ
とうちゃん丸裸状態じゃん
もしも　俺が　あの部屋で愛里と一緒に住むことになったら・・・
あのセミダブルに　愛里と二人で・・・あ　ヤベ　ヤベヤベ
愛里・・・俺・・・メッチャ煩惱だらけで・・・ごめん
そんでもさ・・・ぜってえ　ぜってえ　愛里のことは・・・
こうやって　守ります
寝よう

現場での事故

とうちゃんと現場行ったら

「だいつとカズさん二人いっとお、こりゃまたどっちがどっちかわかんなくなっぺ」

「んだな」

「仕事できる方がとうちゃんすよ」

「だいつも仕事できっからあ」「んだよ」

「カズ、トイレ掃除は俺がするから、こっちに入れればいいよ」

「便所掃除は俺がすっからよ、たっちゃんこっちだよ」

「カズオさんはこっち入ってくれるかな」

監督

「今日は向こう側に碎石敷き詰めるから、人手はそっちに回したいんだよ」

「あ、そんじゃ」

とうちゃんがペコッてして

向こう側は建物のエントランス部分になるつつってたな

とうちゃんがシャベルでネコに碎石積んで

俺がネコ押して ユンボではできねえとこに持っていく

「だいつ！ あっち側足りねえつつてっからあ」

「あっちの方っすね」

とうちゃんの積み方上手えからネコ動かしやすいな

「おい！ そっちじゃねえぞ！」「逆だ！ 逆！」

なに？ どした？

え？ 俺の上の方に 碎石積んだユンボの 一瞬 時間が止まった

気がついたら 突き飛ばされてて 地面に 俺の上に なんか重てえ

「ダイチ」

とうちゃん？

「だいつ！」「だいつ！」

ヤッさんとスギさんが走ってきて

え なに？ なにが起こった？

「森下！ カズオさん！」

監督まで なに？ なにが

「怪我は？」

ケガ？

「ダイチ、ケガはねえか？」

「え、とうちゃん、なにが・・・」

「カズオさん、脚、大丈夫か？」

脚？

「なんともねえよ」

とうちゃんが俺から離れたら 碎石がバラバラバラって音立てて落ちてった

「カズオさん、めくるよ」

監督はとうちゃんのズボンの裾をたくし上げて

「血が滲んでるな」

えっ

「こんくれえなんともねえよ」

「森下は？」

「俺は・・・」

「肘のところ、血が滲んでる」

「これは転っただけで」

「二人とも、病院に行ってきてくれ」

病院？

「監督さん、俺はこんなんしょっちゅうだったからよ」

「カズオさん、これはしょっちゅうあつてはいけないことなんだよ」

監督の顔が 今まで見たことねえくれえ険しくて

「申し訳ない、本当に申し訳ない」

「や、監督、俺はなんともねえっすから」

「血が滲んでるだろ」

「こんくれえなんともねえっすよ」

「ここの駅から二駅先に病院があるから」

「こんなんで、病院、行くんすか？」

「俺から電話しておくから、受付で名前を言えば診てもらえるようにしておく」

なんか・・・ すげえ大ごとみてえになって

現場は静まり返ってるし

「診断書をもらってきてください」

診断書？

「労災として手続きします」

え・・・

「労災って、監督、んな、大げさっすよ」

「作業中の怪我は労災だよ」

「それでも」

「すぐに病院に行ってきてください」

「え・・・ あ、はい」

監督はユニボの方に行っちゃって

「だいつ」「だいつ」「ダイちゃん、カズ」
ヤッさん スギさん ショーさんも
「早く病院に行ってくんちえ」「行げ」
「それでも、マジで、んな大したケガしてねえし」
「あの監督はあ、安全第一ではあ、俺たち作業員に気配ってくれんだした」
「わがついだ前の監督だば、こっだぐれだばほっどがれでや」
「え？ あ？」
「俺も監督の立場だったら病院に行かせるよ」
ショーさん
「従業員は宝なんだよ」
宝・・・
「監督のためにも行った方がいいよ」
「そ・・・っか、そんじゃ」
とうちゃん まだ下向いたままで
「とうちゃん、行こう」
「俺が・・・」
すげえ小せえ声
「ん？ とうちゃん、なに？」
「俺が来たから・・・んなことになっちまって」
「とうちゃんのせいじゃねえよ」
「カズさん、だいつのこと守ったっぺ」「んだよ」
「カズがダイちゃんを助けたんだよ」
とうちゃんが 俺を
「カズさんいねがったらあ、だいつ、碎石の下敷きになってたっぺ」
とうちゃんが 俺を守ってくれた
「とうちゃん、ありがとう」
とうちゃんがやっとな顔上げて 俺を見て
「ダイチ・・・よかっ・・・」
とうちゃんの身体が震えて
「とうちゃん、とにかく、病院行こう、そんで監督を安心させよう」
とうちゃんが申し訳なさそうな顔で 頷いた
「そんじゃ、行ってきます」
とうちゃんと二人で駅に向かった

診断は 俺は擦過傷と軽い打撲 とうちゃんは切創に近い擦過傷・打撲
とうちゃんは俺をかばって俺に飛び乗ったときにヒザを打ったみてえで
とうちゃんの右ヒザが赤紫に腫れてる
腫れは内出血で数日で引くって言われたけど
俺はとうちゃんが突き飛ばしてくれたときにヒジ擦りむいたっつうことで

「ダイチ、よかった・・・よかった」
とうちゃんの方が傷は多いのに　とうちゃんは泣きそうな顔でよかったっつって
「とうちゃんが守ってくれたからだよ」
「それでもヒジんところがよ」
「こんくれえなら」
俺は　とうちゃんの耳元で
「とうちゃんのツバの方が治るよ」
とうちゃんがマジで泣きそうな顔で必死に笑おうとしてさ
会計混んでんな
「とうちゃん、俺、監督に電話してくる」
「そっか、呼ばれたら、行きゃいいんだな？」
「まだまだだと思うけどさ」
「そっか」
外に出て
「森下、どうだった？」
「俺もとうちゃんも大したことなかったっす」
「頭部は？」
「それも異常なしでした」
「そうか」
携帯から監督の安心したみたてえな息が聞こえた
「骨もなんもどっこも大丈夫で、いわゆる擦り傷っすから」
「そうか、明日、診断書持ってきてくれるかな」
「会計終わったら現場戻るんで、そんとき持っていきます」
「作業は中断してるよ」
「え・・・ それって、俺ととうちゃんのせいで・・・ですか？」
「二人のせいじゃないよ、俺の責任だよ」
「監督はなんもしてねえっすよ」
「現場で起こったことはすべて監督の責任だよ」
「俺ととうちゃんは監督のせいだと思ってねえっすから」
「森下、現場っていうのは感情論で動かしてはいけないんだよ」
「それでも」
「今日そのまま帰っていいよ」
「え・・・ あの、俺ととうちゃん・・・ クビっすか？」
「クビになるとしたら俺だよ」
「えっ」
「この程度ならクビにはならないけどさ」
あ・・・ よかっ・・・た
「始末書は出さないといけないだろうな」
始末書・・・
「俺ととうちゃん戻ります」

「森下、今は作業中断してるって言っただろ」
「午後は？ 午後もっすか？」
「まあ、午後からは再開しないとな」
「そんじゃ、午後から働かせてください」
「今日は帰った方がいい」
帰った方が・・・ それって・・・ もし・・・
「監督、俺とどうちゃんが、この仕事で食ってるとしたら？」
「え？」
「午後働いて賃金もらわねえと食えねえとしたら」
本当は食えていけんだけど
「それでも帰っていいって言うんすか？」
電話の向こうの監督は黙ってっけど
「監督は、俺とどうちゃんが遊び半分で仕事してると思ってるんすか？」
あの会社の取締役のかあちゃんがいるから働かなくてもいいだろって、
そう思ってるんすか？ 俺は、どうちゃんも、んな気持ちで現場に行ってるんじゃ」
「午後から再開、遅れるなよ」
「え？」
「保冷バッグのおむすびはヤッさんたちに配っておけばいいんだろ」
「え、あ、はい」
「それじゃ、あとで」
「あ、はい！」
これは・・・
「あの、俺とどうちゃん、働いていいんすよね？」
「人が足りないって言っただろ」
「あ、はい」
「来てもらわないと困るよ」
「はい！」
よかった よかった
病院の中に戻ったら
え？ どうちゃんが誰かに話しかけられてる
どうちゃん メッチャ困った顔してる
「あ、ダ、ダイチ」
どうちゃんに話しかけてた人が振り向いた
えっ？ あの関西の人？
「ドッペルゲンガー！」
あ？ なに？
どうちゃんと俺のこと交互に見てっけど
「なんやこれ？」
「あの」
「え？ 昨日俺と話したんは・・・ そっちか？」

「ごめんなさい、あんとき、俺・・・」
「あ、そっちや、ほんなら、こっちは・・・」
「どうちゃんっす」
「どうちゃん？ ウツソや」
「これは本当っす」
「これはて、ハハハ、えっ、ほんまに、おとん？」
「はい」
「エーッ、俺より若いのに、こんな大きい息子て」
この人何歳なんかな んっと 昨日の話だと・・・
「小学生んときに息子できたんかい」
「俺はどうちゃんが24歳んときの子で」
「冗談やがな、えっ、24て、にいちゃん、歳なんぼ？」
「16っす、高校二年っす」
「コーコーセーッ？」
んな驚かなくても
「はい」
「20歳くらいかと思てたわ、高校生て」
「本当に高校生っす」
「いやあ、にいちゃん背え高いから、こっちも高いなあ」
「おんなし身長っす」
「なんやこう二人といると、俺の背え縮んだんかな」
「縮んではないっす」
「そこは笑うとこや」
「あ、すいません」
「謝るとこともちゃうわ」
笑いに厳しいな
「で？ にいちゃん、こっちのにいちゃんも、なんでここにおんの？」
それは俺が聞いてえ なんでここにこの人が？
「誰かの見舞いに来たんか？」
「俺とどうちゃん、現場でちっとケガしちまって」
「現場で？ 大丈夫なん？」
「擦り傷っす」
「そりゃよかったなあ、ほいでも現場でケガっちゅうんはな」
どうちゃんがもうどうしていいんかわかんねえって顔になってる
「どうちゃん、昨日話した関西の人」
「あ？ あっ」
「うん」
「なんや、俺の噂話してたんか、どおりでくしゃみ止まらんかったわ」
ん・・・っと、どう返せば正解なんだ？
「今のはつまらんかったな」

自己評価もするんだ　すげえな
「俺のおかん、ここに入院してんのや」
「えっ」
「ほいでもな、明日退院すんねん」
「退院・・・」
「もうどうもでけへんいうし、おかんもこんなところのイヤやっちゅうてな」
「そうすか」
「にいちゃんたちはもう帰んの？」
「午後からまた現場戻ります」
「ほんならまだ時間あんな」
「そうっすね」
とうちゃんと俺の握りメシ持ってきてりゃよかったな
「頼みがあんねんけど」
「頼み？　なんすか？」
「俺のおかん、見舞ってやってくれへんか」
「へ？」
「おかん退屈してんねん」
退屈って　まあそうかもしんねえけど
「おかんのツレはこっちにおらへんやろ」
「ツ・・・レ？」
「あ、せや、東京の人はわからんか」
関西の人が　俺の顔の前で
「お・と・も・だ・ち」
大きく口開けて　それは電車途中で・・・
「すみません、あれは、なんつうか」
「なんも気にしてへん、おもろかったわ」
「すい・・・ません」
「悪い思てんなら見舞ってやってえや」
これは・・・
「はい」
そう言うしかねえよな
「頼むわ、俺とおかんだけやと、なんや辛気くさあなってもうてな」
「そんじゃ、はい」
「来てくれるか？」
「あ、はい、とうちゃん、この・・・」
えっと
「あの、名前は・・・」
「岩田や」
「イワタさん」
「にいちゃんたちは？」

「森下っす」

「森下ブラザーズか」

ブラザーズじゃねえんだけど

「ほな、こっちや」

「とうちゃん、行くよ」

「あ・・・おう」

俺ととうちゃんは なぜか この関西の、イワタさんか、一緒にエレベーター乗った

おかん

病室のドア開けて

「おかん、俺のツレが見舞いに来てくれたで」

ここは四人部屋か 他の患者さんはいねえけど

「こっちこっち」

俺とどうちゃんを手招きして

「どうちゃん、行くよ」

「あ、うん」

ゆっくりベッドの方に

「おじゃま・・します」

ベッドの上には 帽子かぶったおばちゃんが

「イヤやわあ！」

えっ やっぱ突然 俺とどうちゃんが

「こんなイケメン来るんやったら言うといてえな、お化粧しといたらよかったわ」

「ブッサイクな顔に化粧しても変わらんやんけ」

「ブッサイクにブッサイク言われたないわ」

「そのブッサイクを生んだんは、どこのどなたさんでっか」

「せや、ウチやったわ、とんでもないもん生んでもうた」

「とんでもないってなんやねん」

す・・げえ 病室の中でもプロ並みの漫才

「これが俺のおかんや」

「は、はじめまして」

俺の隣りでどうちゃんは頭下げて

「おかん、森下ブラザーズや」

ブラザーズじゃねえんだけど

「イケメンブラザーズやねえ」

ブラザーズじゃねえんす

「森下大一です」

「ダイチ？ ダイちゃんてええ？」

「え？ あ、はい、こっちが俺のどうちゃんで」

「どうちゃん？ おにいちゃんやないの？」

「どうちゃんっす」

「いやあ、若くてイケメン！ おばちゃん惚れてまうわ」

「おかんに惚れられたら迷惑や」
「惚れるだけやったらタダやろ」
どこに入っているかな 入ってけねえくれえの掛け合いだな
「ほんで、おにいちゃんの、ちゃうわ、おとうちゃんの名前は」
「俺は森下一男」
「カズちゃんやね」
「ねえちゃんの名前は？」
とうちゃん なんか すげえフツツーに話しかけてる
「ねえちゃん？ こんなおばちゃんに、ハルくん、ねえちゃんやて」
「ハルくん言うなや、恥ずかしい」
「ハルオやからハルくんやないの」
「人前でくんつけんなっちゅうてるやろ」
「ウチが生んだ子をどう呼ぼうとウチの勝手や」
すげえな 名前のことひとつで んな漫才できんなんて
「この子な、春に生まれたから春男、春の男の子や」
「単純やのう」
「ほんじゃ夏男がええんか？ 春に生まれたのに夏男、おもしろいな」
「そういうこっちゃないやろ、ほれ、おかんの名前聞いてんで」
「ウチは花恵、花みたいにきれいで恵まれた子になりますようにてな」
「名前負けやの、完敗や」
「あんたにしゃべってへんわ」
「ハナちゃんか」
とうちゃん なんか この会話にスッと入り込めるって すげえよ
「ハナちゃん？ 可愛らしい！ おばちゃんおばちゃん言われてばかりやったのに」
「おばちゃんやからおばちゃんやろ、おばあちゃんやないだけ感謝せな」
「ほんまにあんたは頭はカラッポなくせに口だけは達者やな」
「おかんの子やからな」
「せや、ウチの子やった、って、ウチはあんたに比べたら無口やわ」
「どこがやねん」
なんか タダで漫才見せてもらってる気になってんだけど
「ダイちゃんの名前は、おとうちゃんがつけてくれはったん？」
「かあちゃんっす」
「おかあちゃんが、うちとこと一緒やね」
「うちは母子家庭やからおかんしかおらんやろ」
「名前つけんかったらよかったんか？」
「つけんかったら俺は名無しや」
「名無しの権兵衛の方がよかったかもしれんな」
イワ・・・ 春男さん？ が俺たちの方見て
「な？ ようしゃべるやろ」
「ウチは骨になってもしゃべってみせるわ」

「キッショ！」
きっしょ？ キモッみてえなことか？
「ダイちゃんのダイチ？ どんな字い書くん？」
「大根の大に漢数字の一つす」
「大根の大て！ おもしろい例えやなあ」
「マジで大根の大なんす」
「なんでやの？」
「俺が生まれたとき、とうちゃんひらがなとカタカナしか読み書きできなくて」
「なんで？」
「俺は小学校も行ってねえからよ」
「小学校も？ どないしたん？」
「いじめられて怖くなっちまってよ」
「イジメ！ ひっどいことされたんやなあ」
「しゃあねえよ」
とうちゃんが スルッとフツツに会話してるよ
「学校も行けんようにて、おとうちゃんとおかあちゃんはどうないしはったん？」
「いねえから」
「死んだん？」
「わかんねえけど、俺は駅の便所に捨てられてたって」
「えっ？ 駅の？」
「森下駅の便所だから森下で、一男は役所の人がテキト～につけたみてえだよ」
「そうやったの、ほんでもその役所の人、なかなかセンスあったんやなあ、
一人の男て、男らしいてかっこええわ」
「ねーちゃんも、あ、んと、美里、あ、んと」
「俺のかあちゃんもそう言ったって、だよな、とうちゃん」
とうちゃんが照れくさそうにうなずいた
「せや、男は男らしい名前がいちばんやわ、うちの近所にな、
ハルくん、あれは坂田さんとかやな？ 坂田さんのお孫ちゃん」
「坂田さんいうても二人はわからんちゅうの」
「坂田さんはどうでもええねん、孫の名前が飛ぶ馬って書いてペガサスやて」
ペガサス？
「飛ぶ馬いうたらウチらの世代やったら星ひゅうまや」
「おかん、それは間に雄の字い入ってるがな」
「そんなんどうでもええわ、どうせ巨人の星やし、巨人は好かん」
やっぱ関西の人にとっては阪神なんか
とうちゃんは何の話か全然わかんねえって顔してっけど
「小学校も行けんと、就職大変やったやろ？」
「院に紹介してもらってよ」
「いんてなに？」
「少年院」

「カズちゃん、なにやったん？」
「え・・・あの・・・」
「とうちゃんは見張りだったんすけど、主犯にされちまって、そんで」
「せやったの、ほんでも、もう悪い子たちとつき合おうたらあかんで」
「おかん、もうおとなや、息子もいてんのや」
「あ、せやった、若っかいから、自分の息子みたいな気いになってたわ」
「おかんの息子はどうやってもブッサイクしか出てけえへんわ」
「ブッサイクなあんたが言うなら間違いないなあ」
「せやな、俺の保証付きやな」
「確かな保証、安心安全やわ」
「くっだらんことベラベラしゃべるのう」
「ウチは骨になっても」
「わ〜かった！ 骨になってもしゃべるとき」
「そうさせてもらうわ」
骨になったらって 考えてみたら・・・ それは・・・
「ほんで？ どっか紹介してもらったん？」
「土建屋」
「ああ、それでずっと土建屋に？」
俺ととうちゃんの恰好見たらそう思うよな
「ケガしちまってクビになってよ」
「クビ？ ほんでどうしたん？」
「浮浪者んなってよ」
「浮浪者？」「浮浪者？」
親子で驚いてる タイミングも言い方もそっくりだ
「浮浪者て、ほんでも息子はできたんやろ？ なんで？」
「ん・・・っと、なんつうか」
話せば長すぎて、とうちゃんうまく言えねえんだな
「俺のかあちゃんが、酔っぱらった勢いで連れてきちまったんす」
「酔っぱらった勢い？ アハハハ おもしろおかあちゃんやねえ」
とうちゃんが照れくさそうに笑って頭かいてる
「おかん、俺、店に連絡せなあかんことあるから、ちょっと出るわ」
「帰ってこんでもええよ」
「電話するだけや」
「あんたがいなかったら、ウチはイケメンパラダイスや」
「そりゃ極楽浄土やな」
「生きてるうちに極楽て、ウチの行いがよかったんやな」
「閻魔さんもこんなしゃべりのおばちゃんイヤや言うて断られるだけや」
すげえ際どい話をこんなして話せるって すげえ
「ダイちゃん、カズちゃん」
え 春男さん もうそういうカンジっすか

「ちょっと出てくるわ」
「そんじゃ俺たちも」
「いてやってえな、パラダイスにいさせてやって」
「あ・・・ はい」
いつ帰ればいいんだ？　なんか楽しいからいいけどさ
「ハナちゃん」
どうちゃん？　話しかけてっけど？
「よかったなあ」
「せやな、カズちゃんとダイちゃんに囲まれてパラダイスやわ」
「息子があんなりっパになってよ」
「え？」
「そんで、一緒にいられるようになってよ」
花恵さんが　どうちゃんの顔　すげえ優しい表情になって　見てて
「息子と一緒にいられんなんてよ、しあわせだな」
花恵さんが微笑んで
「せやね、ほんまにしあわせやと思てる」
春男さんとしゃべってるときと全然違う
「ウチは、死ぬ前にこんなしあわせになれて、もうなんの悔いもないねん」
死ぬ前・・・
「み～んな、ウチがもうすぐ死ぬからて憐れむだけやねん、ちゃうねん、
　　ウチは女手ひとつであの子育てて、今のあの子見てたらな、
　　ああ、ウチが頑張ってきたことは無駄やなかった、よかったあって」
花恵さんの目がツーって涙が
あの涙の一粒には　花恵さんの人生の時間と経験が詰まってて
それは　地球より重てえもんかもしなくて
それでも
「春男さん泣いてたんすよ」
「え？」
「電車の中で、声殺して泣いてたんす、お母さんが・・・って」
「あの子が？」
「やっばイヤっすよ、そんな・・・」
「ダイちゃん、人にはな寿命があんのよ、ウチはもう寿命がきたんや」
「それでも、俺なら、俺が息子なら、一日でも一分でも一秒でも、もっと・・・」
花恵さんのあの涙の前で
「そばにいて欲しい、そばにいるって言って欲しい、ウソでも・・・いいから」
俺のペラペラな涙は流しちゃいけねえけど
「寿命とかさ、しあわせとかさ、そうかもしねえけど、それでも、そんなん・・・
　　俺は・・・　ずっとそばにいるって言って欲しいよ、ギリギリまでさ、
　　死なねえって、そばにいるって・・・　聞いてえよ・・・」
なんか・・・　俺・・・　むきになって

「すみません、俺・・・」
「せやね」
「え？」
「この花恵さんが、しゃべりの花恵が本領発揮せなね」
「本領・・・発揮？」
「死ぬギリギリまで言うたるわ、ウチは死なんで！ ウチは死なん！ て、
うっさいからもう死ねや言われても言うたるわ」
俺は・・・ もう・・・
「カズちゃん、ダイちゃんええ子やな」
「俺はダイチが大好きだよ」
とうちゃん
「せやな、ウチにまでこんなん言うてくれて、ちょっとごめんね」
花恵さんがベッド脇のティッシュ取って鼻かんだ
「もう！ 泣かされてもうた、女泣かせやわあ」
病室のドアが開いた
「戻ったで」
春男さん
「なんや、おかん、泣いとんのかいな」
「イケメンパラダイスに感動しとったんよ、目の保養やわあ」
「老眼の保養やな」
「口がへらんな、誰に似たんや、あ、ウチか」
なんか すげえいい匂い ヤベッ 腹鳴った
「また焼き鳥？ もう見んのもイヤやわ」
「おかんにとちゃうわ、森下ブラザーズにや」
「えっ、俺ととうちゃんに？」
「こっから二駅先にな、あさひ町て駅があるやろ」
「俺ととうちゃんが入ってる現場もあさひ町っす」
「ほんまか！ そこにうちのチェーン店があつてな、その店長が俺の後輩やねん」
「そうなんすか」
「ちょうどランチの時間やから持ってきてもろてん」
「マジっすか」
「これ」
うわあ レジ袋ふたつも
「現場に差し入れや」
「ありがとうございます！」
「あんたもたまには粋なことするんやね」
「おぼちゃんの相手させた慰謝料や」
「せやね、慰謝料請求案件やわ」
「すげえ、なんか、楽しかったっす」
「ほんま？ 嬉しいわあ」

「お世辞やっちゅうねん」
「お世辞でもなんでもタダでもらえるもんは嬉しいわ」
さっき泣いてた花恵さんとは全然違う
「ちょっと待ってな、ハルくん、ウチのバッグ取って」
「これか」
「東京の人は、大阪のおばちゃんいうたら、飴ちゃん飴ちゃん言う思てるやろ」
「あ、なんかそういうイメージは・・・」
「けどな」
花恵さんがバッグに手え突っ込んで
「飴ちゃんやねん」
「え？ ハハハ」
「ダイちゃん、や〜っと笑ってくれたわあ」
「あ・・・ なんか、さっきは」
「はい、飴ちゃん」
俺の方に差し出して
「ありがとうございます」
「カズちゃんも、はい、飴ちゃん」
「あんがとな」
「ほな、おかん、俺も店行くで」
「とっとと行って、やーっとゆっくり眠れるわ」
「死ぬまで眠っとれや」
「目え開けてあんた見ててやるわ」
「怖っわ」
「ダイちゃん」
「はい？」
「ウチは死なんで」
え・・・
「ぜーったい死なんで、死んでも死なんで」
「おかん、怖いっちゅうねん」
花恵さんが 俺の方見て ニッコリ笑った
「ぜってえ、生きててください、俺、また会いに来ますっ」
「明日退院やけどね」
「あ・・・そっか」
「アハハ、ダイちゃんは可愛いねえ」
「ほんなら、おかん、明日な」
「カズちゃん、ダイちゃん、ありがとう」
「そんじゃ、また、あの、どこかで」
「ハナちゃん、そんじゃな」
花恵さんがニッコリしながら手を振って
春男さんがドア閉めた

春男さんが 病院の玄関まで送ってきてくれた
「ダイちゃん、カズちゃん、ほんまに、ありがとう」
「楽しかったっす」
「そうか？」
「春男さんと花恵さんの掛け合いが、タダで漫才見せてもらってるみてえで」
「ほんなら金取ろか？ って、あんな漫才言うたら怒られんで」
「誰にっすか？」
「大阪ではふつつうの会話や」
「そうなんすか」
「ほんでもな、おかんがあんなしゃべったんは久しぶりや」
「え？」
「俺と二人きりやと、何言うても、せやな、わかった・・くらいでな」
「マジっすか」
「嬉しかったんやろな」
「見ず知らずの俺やとうちゃんできよかったんかなって」
「見ず知らずが逆によかってん」
「へ？」
「おんかの知り合いが来ると、花恵さんえらいことになったなあ、辛いやろってなあ」
みんなが憐れむ・・つってたな
「ダイちゃんたちが入ってったとき、おかんがかましたやろ」
「かました？」
「イヤやわあ！ 言うて」
「あ？ ああ、はい」
「俺はあれで、これはいける、おかと俺のいつもの話ができるって飛ばしたんや」
「すげえ飛んでました」
「どこにやねん ハハハ」
「焼き鳥まで、こんないっぺえありがとうございます」
「ダイちゃん、俺、聞いてもうてん」
「何をっすか？」
「ダイちゃんが、俺が電車途中で泣いたっちゅうて」
「あっ、す、すいません、つい」
「ダイちゃんは、俺が言いたいこと、ぜーんぶ言うてくれた」
「え・・」
「涙声で言うてくれて、俺。入ってけへんかったわ」
「あ、すいません」
「おかん、死なん言うてたな」
「言っていました」
春男さんの目が真っ赤になってて

「俺が聞きたかった言葉や」
そうっすよね 春男さん わかります メッチャわかります
「ありがとな」
「あ、や、んな」
「もうダイちゃんとは電車で会われへんな」
「え？」
「俺の店と住んでるとこは、この路線とちゃうねん」
「そんじゃ、もう・・・」
「ダイちゃんと、ほんでカズちゃんとも、出会えてよかったわ」
「これで・・・ 終わりっすか？」
「なんや、男と女の別れ話みたいやな」
「春男さんとは、二回、三回？ だけっすけど、なんか急接近つか」
「せやな、男と女やったら恋に落ちる展開や」
必ず笑いを挿入してくんだな
「俺の名刺、渡してええか？」
「くれるんすか？」
春男さんがケツポケットから名刺入れ出して
「焼き鳥食いたなったら来てや」
「はい」
「そんときは金取るで」
「もちろんっす」
「ウッソや、ダイちゃんとカズちゃんなら初回限定お二人様無料や」
「や、ちゃんと金払います」
春男さんが笑って そんで
「ほな・・・」
なんか言いたそうな顔になって
「あ・り・が・と・な」
「あっ」
春男さんは へへって笑って 中に入っていった

なんかパラダイス

現場に戻ったのは ギリ昼休憩の終わり時間

「だいつ!」「だいつ!」「カズ!」

ヤッさんたちが走ってきた

「どんだったんだあ?」

「ただのかすり傷っす」

「そっかあ、そりゃよがったあ」「肝冷えてだんだ」「よかったよ」

「これ、もうメシは食っちゃったと思うんで、一バックずつ持って帰ってください」

おっちゃんたちに一バックずつ渡して

「焼き鳥屋に行っただのけ?」「わいわいわい」「こんなに?」

「もらったんす、知り合いの焼き鳥屋の店長に病院で会って」

「病院に焼き鳥屋入ってんお?」

「わざわざ届けてもらって、現場に差し入れつつって、くれたんす」

「ありがてしたあ」「わい、めわぐだ」「焼き鳥なんて久しぶりだよ」

「監督は監督室っすよね?」

「だいつとカズさんのことお待ってんだよ」

「そんじゃ、いってきます」

とうちゃんと二人で 監督室に行った

扉開けて

「監督、戻りました」

「電話ありがとう」

「早く知らせた方がいっかなと思ったんで」

「重機リーダーと操縦していたヤツに知らせたら少しホッとしてたよ」

「ただのかすり傷っすよ」

「本当に申し訳ない」

「監督、頭下げるようなことじゃねえっすから」

「ユンボの操作ミスだ」

「そうすか」

「今朝乗ってたのは初めて現場で動かした若手なんだよ」

初めてだったんか

「重機のリーダーがそろそろ実地でやらせてやりたいって言ってきて、

許可したのは俺だ、だから、その怪我は俺の責任なんだよ」
それでも・・・
「真面目なヤツでね、かなり緊張して、それで逆方向に向けてしまった」
「俺も悪いんす、俺がもっと上の方にも注意してれば」
「森下、現場で起こったことは監督の責任だ」
「それでも、俺のこのヒジは、とうちゃんが俺をかばって突き飛ばしてくれたからで、
とうちゃんのヒザは、俺をかばって俺の上に乗ったときにぶつけて、
俺もとうちゃんも碎石の下敷きになったわけじゃないんすよ」
「あのにいちゃん、うめえよ」
とうちゃん？
「ショベルんところ」
手をショベルみてえにして見せて
「クッて止めてよ、あのまんまだったら碎石全部落っこちてたからよ」
「カズオさん、あの瞬間でそんなところまで？」
「俺が若けえ頃いた現場は、んなことしょっちゅうだよ、
監督さんが、んなことしょっちゅうあっちゃいけねえつつて、
俺、そうなんかってビックリしてよ」
「ビックリした？」
「そんなくええしょっちゅうだよ、どっから何飛んでくっかわかんねえから」
とうちゃん ニッコニコしてしゃべってっけど
「俺、いっつも、こうやってよけながらネコ動かしててよ」
かあちゃんから聞いた以上にひでえ現場だったんだな
監督も口開けてポカンとしてるよ
「ここは、なんつうか、あれだ、ダイチ、なんつったかな、ハナちゃん」
「ハナちゃん？ 花恵さん？」
「イケメンなんちゃらつつて」
「え？ あっ パラダイス？」
「それだ、なんかパラダイス」
「なんかパラダイス？」
「なんかニコニコできるつつうかよ」
「カズオさんがいた現場は・・・ 壊滅してるよ」
「かいめつ？」
「極端な言葉を使わせてもらえらなら、よく生きてたよ」
「俺はしぶてえんかもしんねえ」
「しぶとい？」
「駅の便所に古新聞にくるまれて捨てられても生きててよ」
「えっ・・・」
「足場から落っこちても生きててよ」
とうちゃんはニコニコして言ってっけど 監督はフリーズしてるよ
「監督さん、ユニボ動かしてたにいちゃん、どうしてんのかな？」

「え？ あ、ああ」
やっと解凍された
「向こうの端で重機リーダーというよ、さすがに落ち込んでるけどさ」
「俺、大丈夫だっつってくっからよ」
とうちゃんが出ていこうとしたから
「とうちゃん、焼き鳥持ってってあげなよ」
「だな、焼き鳥な」
二パックとうちゃんに渡すと、とうちゃんは監督室から出ていった
「なんかパラダイスって」
「あ、とうちゃんザックリ雰囲気で言葉言うんで」
「それでもなんか・・・きたよ」
監督が胸さすって
「監督も焼き鳥食いませんか？」
「焼き鳥屋に行ったの？」
「焼き鳥屋は行ってねえんですけど、焼き鳥屋の店長と病院で会って」
「知り合い？」
「知り合いっつうか、電車途中で二回くれえ会って、そんで」
「今日が三回目で焼き鳥？」
「お母さんが入院してっから見舞ってくれって」
「お母さんとも知り合い？」
「今日初めて会ったんすけど」
「へえ」
監督の全然理解できてねえカンジのへえっつうの初めて聞いたな
「そんで、お礼にっつって、現場に差し入れってくれたんすよ」
「森下ってさ」
「はい？」
「人たらしだよな」
「へ？」
「まあ、いい意味で」
「え？ あの？」
「焼き鳥もらっていいかな」
「あ、もちろんっす」
監督にも一パック渡した
「これって、この駅の近くにあるチェーンの焼き鳥屋だよな」
「そうみてえっす」
「前に森下が一週間でやめると思ったヤっさんたちに、ここで奢らされたんだよ」
「そうなんすか？」
「安くて美味いんだよ」
「これからもよろしくお願いします！」
「宣伝したら森下にマージン入るの？」

「入んねえっすけど」
監督がフツて笑って
「診断書」
手を出した
俺は・・・ 封筒の中から 俺の診断書だけ出して 残りを渡した
「なにしてるんだ？」
「俺のはいいっす」
「そうはいかないよ」
「こんくれえのかすり傷、現場にいたらいくらでもありますよ」
「今回はふつうのとは違うんだよ」
「ヤッさんたちだって、指に切り傷作ったり腕すっちまったり、
　　そういうことありで、みんな現場で身体張って働いてるんすよね」
「うん、そうだね、いいからそっちも渡してくれ」
俺は・・・
「森下！　なにやってるんだ！」
ビリビリに破いて
「俺のこのかすり傷は、とうちゃんが押してくれて地面で擦っただけっすよ」
「森下、現場で感情論は」
「感情論じゃなくて事実です」
監督が目だけ天井向けてため息ついた
「それでも、とうちゃんのは労災扱いにしてあげてください」
「それはもちろん、労災だからね」
「とうちゃん、ケガしても労災もらえなかったから」
「えっ」
「現場でケガしたら労災もらえるんだって、なんつうか、体験させてえっつうか」
「そんなこと体験しない方がいいんだよ」
「わかってます、それでも・・・」
「わかった、カズオさんは労災として申請する」
「お願いします！」
「お願いされなくてもするよ」
「おいっす」
「午後は二時からだから、森下とカズオは昼食取ってくれ」
「おいっす」
「なんかパラダイスカ」
「え？」
「なんかじゃなくて、ちゃんとパラダイスになるように俺も頑張るよ」
「ちゃんとパラダイスっすよ」
「こういうところに完璧はないけどね」
「すでにパラダイスっすよ」
「いいから早く昼食取ってきて」

「おいっす」
監督室出て とうちゃん探したら 右端のユンボのところで
おっちゃんと若けえ人と一緒になんかしゃべってる
「とうちゃん」
「ダイチ」
「なにしゃべってんの？」
「ダイチ、このユンボ、ご・ご・ご」
「ごごご？」
「500万だってよ」
「そうなんか」
やっぱこういうのって高けえんだな
「にいちゃんがよ」
「宇野です、今朝は」
「俺はスッ転んだだけっすよ」
「すみませんでした」
「にいちゃん、俺もダイチもなんともねえからよ」
「焼き鳥までもらって」
「知り合いが現場に差し入れってくれたんすよ」
「なんか、いろいろ、ありがとうございます」
「や、全然、あ、とうちゃんが、えっと、宇野さんのユンボの運転？ 上手えて」
「さっきも、そう言ってもらって」
「宇野は腕はあるんだよ」
重機リーダーか？
「クソ真面目なところがあってさ、緊張しちまって、ほんとに申し訳ない」
「あ、全然大丈夫っす」
「カズさんにもさ」
もうカズさんになってんのか
「励ましてもらって、なあ」
とうちゃんが 励ました？
「はい、俺、もっと上手くなるように頑張ります」
「あ、俺もバイトっすけど、がんばります」
「にいちゃんとタケさんもよ」
タケさん？ あ、重機リーダー？ もうそんなカンジなんか
「臨時の日雇いの俺をよ、仲間だっつってくれてよ」
「マジっすか」
「そうだよ、カズさんも、んっと？」
えっと・・・ タケさんだよな 俺のこと見てんな 名前？
「俺、大一って言います」
「だよな、カズさんはダイチって、でもヤッさんたちはだいづってさ」
あ・・・ ヤッさんたち 俺の話 重機リーダーにもしてたんか

「みんなで頑張ろうな」

「おいっす」

「監督さんの現場は、なんかパラダイスだな」

「カズさん、さっきからそればかり言って アハハハ」

とうちゃんがいるところは 確実に パラダイスだよ

「俺ととうちゃん、昼メシ食ってくるんで」

「そうか、それじゃ午後もよろしくな」

「おいっす」

「よろしくお願いします」

「にいちゃん、タケさん、またな」

とうちゃんが何言ったんかわかんねえけど

なんか パラダイスになってよかった

今日は4時休憩

午後は宇野さんがメッチャ正確にそんで慎重にユンボ動かしてた

ヤッさんたちも感心してたよ

「宇野くんは来年独身寮を出て結婚するから、張り切ってるんだな」

って ショーさんが言った

「とうちゃん、宇野さんになんて言って励ましたの？」

「励ます？ 俺はなんも言ってねえよ」

「それでも、宇野さんがとうちゃんに励まされたっつってたじゃん」

「俺はすげえなっつただけだよ」

「すげえ？」

「俺は若けえ頃、ユンボやクレーン動かしてる人見ててよ、

こういうの動かせたらもうちょっと賃金上がんのかなって」

そっか 中抜きされて手取り三万だったんだもんな

「それでも俺は読み書きできねえから、免許なんて取れねえしよ」

そう・・・だよな

「だから、あのにいちゃんはすげえなって」

あ それか とうちゃんは本気でただそう思ったから言ったんだけど

宇野さんは励まされたと思ったんか つか、嬉しかったんかな すげえって言われて

「それでもな、ユンボはあぶねえかな」

「うん、いろいろ事故起きるもんな」

「俺がいた現場でよ、ユンボとクレーンがぶつかってよ」

「えっ」

「救急車で運ばれた人がいたな」

そんな事故？

「とうちゃん、ユンボ動かせなくてよかったよ」

「あ？」

「監督が生きててよかったっつうくれえの現場でさ、しかも救急車ってさ」

「俺も乗ったみてえだけどな」

「みてえって、憶えてねえの？」

「憶えてねえんだよ」

「氣い失ってたんだな」

「とうちゃん、下っ端仕事しててくれてよかったよ」

「それっきゃできねえんだけどな」

「それでいいよ、生きててくれてんだからさ」

「しぶてえよな」

「しぶとく生きててくれよ」

「だな」

とうちゃんが笑って

「ダイチ、そろそろ仕事戻っか」

「おう」

とうちゃんがいてくれてよかった

マジの極楽浄土にはまだまだまだぜってえ行かないでくれよな

瓶貯金

帰りの電車ん中

もう春男さんとは電車で会えねえんだな

なんか淋しいな

って 今朝メッチャ会ってたけどさ

今日かあちゃんからはなんも連絡なかったな

帰りがいつになるか決まったときだろうな

愛里からも・・・ あっ 携帯 OFF ってた

監督に電話した後 病院だからまた OFF って そのまんまだった

電源入れた・・・らっ

あーーーーーっ 愛里から LINE 来てた！

時間は 12 時ちょい過ぎ ああああああ

『今日パパの手術が終わりました』

『大成功でした』

『ただの hemorrhoid の手術ですけど』

『手術室に運ばれてママがベッドをきれいにしてて』

『私が下のカフェでサンドイッチと飲み物買って戻ったら』

『もうパパが戻ってきました』

そんぐれえ軽い手術だったっつうことか よかったあ

『夕方あなたのおかあさんが来てくれて』

かあちゃん行ったんか

『パパのお見舞いにじゃなくてママが心細いだろうからって』

かあちゃんはそういうとこすげえよな

『ママは優しくされるのが大好きだから』

『すっごく喜んじゃって』

『下のカフェでお茶でもなんて言っちゃって』

『手術したばかりのパパ放ってお茶していいの？ ってカンジですけど』

いつもの愛里っぽくなってて よかった

『ごめんなさい』

なに？

『長くなっちゃって』

いいよ 全然いいよ 愛里の様子知りてえからさ

『ちょっと吐き出したくなっちゃって』

全然いいよ なんでも言ってくれよ
『明日おかあさんは夕方にご家の方に来てくれるそうです』
そっか
『ママに会わせたい人がいるそうです』
愛里のお母さんに会わせてえ人？ 誰だ？
『それじゃ おやすみなさい』
『違いました そっちはお昼くらいですね』
いいよ んなことさ
「とうちゃん」
隣りに立ってるととうちゃんに LINE の画面見せて
「愛里のお父さんの手術、大成功だっさ」
「よかったなあ、いぼ痔はよお、よかったな」
「かあちゃんも行ったんだっさ」
「そっか、美里が」
とうちゃんはかあちゃんのこと聞いただけで嬉しそうな顔になるよな
「アイリちゃんは元気なんか？」
「元気みてえだよ、少しいつもみてえに戻ってる」
「よかったなあ」
「うん」
愛里に返信しとこう
『愛里 ごめんな』送信
『電源 OFF っっててすぐ返信できなくてごめん』送信
『お父さんの手術成功してよかったな』送信
『愛里もちょっと元気になったみてえでよかった』送信
『愛里とリアタイで LINE できなくて淋しいっす w』送信
『明日からは仕事中でも電源 ON にしとくからな』送信
『だからいつでも俺に LINE してくだせえ w』送信
『なんでも俺に吐き出して欲しい』送信
『愛里 おやすみ』送信
『って もう寝てるよな w』送信
お、乗り換えの駅だ

家帰って

シャワー浴びて とうちゃんも浴びて
ゆうべの豚汁と握りメシと春男さんにもらった焼き鳥食って
後片付けして キッチン掃除して 俺はリビングの掃除して・・・つっても
俺ととうちゃんはリビングは使わねえから掃除機とフローリングだけで
その間とうちゃんは作業服と他の洗濯して
二人で洗って乾いた洗濯物たたんで

「あ・・・」って、とうちゃんが立ちあがってベッドルームから何か持ってきた
「ダイチ、これ」
とうちゃんの日給入った封筒
「どした？ 明細と中身違ってた？」
「ダイチと約束したろ？」
「約束？」
「アイリちゃんのために金稼ごうってよ」
「え？ あ！」
「これは、俺の分」
「それでも愛里のお父さん大丈夫だったからさ」
「それでもよ、なんかのときのために金貯めとけばよ」
「なんかとき？」
「俺の稼ぎじゃな、どうもなんねえけど、それでも、ねえよかな」
「けど、これは、かあちゃんのイチゴ買わねえと」
「美里のイチゴ買うくれえはまだあっからよ」
「それでも袋ごとつつうのはさ」
「ダイチ、俺、金貯めてんだよ」
かあちゃんが管理してるやつだろ？ 実はメッチャ貯まってるってやつ
「見てえか？」
通帳？ や、ちょっと怖えな
「見してやっからよ」
とうちゃんがベッドルームに入ってって なんか・・・瓶？ みてえなの持って戻ってきた
「ほれ」
これって・・・ かあちゃんがもらった牛肉の佃煮入ってた瓶だよな
中に・・・ 一円玉に五円玉そんで 10 円玉がいっぱい入ってる
「これが俺の、なんつうんだ？ あ、ビン貯金」
とうちゃんが金貯めてるって これのことか
かあちゃんが言ったことあったな
とうちゃんは預金通帳の預金額が自分の金だっつう感覚がねえって
預金通帳を持ったことがないからだと思っつうってた
とうちゃんにとって「金」は現金で親しみがあるのは小銭、札は千円札でさ
「これはな、ダイチの誕生プレゼントとか買うのに貯めてんだけどよ」
こうやって貯めた金で 毎年買ってくれてたんか
瓶の中の小銭は 俺には金貨や銀貨や銅貨に見えて 宝物に見えて
「とうちゃん、俺、こっちが欲しい」
「あ？ これ？」
「なんかさ、金はこうやって貯めるっていう、原点みてえでさ」
「げんてん？」
「金はこうやって一枚一枚貯めてくんだよな？」
丁寧に 大切に

「俺は小銭っきゃ貯めらんねえんだけどよ」
とうちゃん笑ってっけど
「とうちゃん、これ、もらっていっかな？」
「そんじゃ、それは、なんつうか」
とうちゃんがニコニコしながら
「とうちゃんからダイチに小遣いだ」
とうちゃんからの・・・小遣い　とうちゃんから　初めてもらった小遣い
「とうちゃん、ありがとう」
「ダイチが喜んでくれんならよ」
あれ？
「とうちゃん、俺がこれもらっちまったら、とうちゃん困るんじゃね？」
「なんとかなっからよ、また稼いで貯めっから」
とうちゃんと俺の間にある今日の日給入った袋のことは　忘れてるな
「空瓶だけはあんだよ」
あるよ　キッチンの棚のいちばん下にいっぺえ　かあちゃんに見つかったら捨てられっ
けど
あ！　そうだ
「とうちゃん、ちょっと待ってて」
キッチン行って　下の棚の・・・奥　これは何入ってたんだ？　ま、いっか
そんで　俺の部屋に　俺の財布　ん・・・っと　あった　五円玉
「とうちゃん」
五円入れた瓶持ってとうちゃんここに
「これ、とうちゃん用」
「あ？」
「愛里が俺の財布作ってくれたときに、五円玉入れてくれてて、
　　お金にご縁がありますようにつつうことみてえでさ」
とうちゃんが瓶の中の五円玉を見てる
「その五円玉は俺が稼いだ金だから、なんつうか、俺からとうちゃんへの小遣い」
とうちゃんがちょっとビックリした顔で俺のこと見てっから
「なんつって」
「ダイチからの・・・小遣い」
とうちゃん・・・俺　愛里のことばっかか考えてて　つか　自分のことばっかで
「もったいなくて使えねえな」
嬉しそうな顔で　瓶の中の五円玉見てっけど
とうちゃんは　いっつも俺のこと助けてくれてさ　なのに俺・・・
「とうちゃん・・・ごめ・・・」
「ダイチ？　なんで泣いてんだ？」
「俺・・・とうちゃんに・・・なんもできてねえ」
「小遣いくれたろ」
「それでも・・・」

「ダイチから小遣いもらえんなんてよ、俺はしあわせだな」
「五円・・・だけ・・・じゃん」
「だけじゃねえよ、ダイチ」
「え・・・？」
「五円ねえから米買えねえこともあんだよ」
あ・・・
「ダイチがあんな一生懸命働いて稼いだ五円なんだからよ、俺には、んっと」
とうちゃんが上の方向いて　なんか考えてて
「あ！　あれよか、ユンボ」
「500万のユンボ？」
「俺には、あのユンボよかずっと・・・」
とうちゃんが下向いちまった　とうちゃんが下向くときって　俺はどうしていいんか
「とうちゃん」
とうちゃんが真っ赤な目えして顔あげた
「また貯めねえとな、ダイチの誕生プレゼント買わねえとよ」
「そうだよ」
よかった
「とうちゃんの消しゴムねえと、俺、勉強できねえよ」
「そっか？　そんじゃとうちゃんがんばって貯めっからよ」
「うん」
「ヒトミは2月だしな、アイリちゃんの誕生日はいつだ？」
「9月13日、とうちゃんとかあちゃんとおんなし日だよ」
「そんじゃがんばって貯めねえとな」
愛里にも　誕生日プレゼント買ってくれんの？
「アイリちゃんは・・・消しゴムでいいんかな？」
「とうちゃんが買ってくれたら、愛里ぜってえ喜ぶよ」
「そっか？　そんじゃ、まずはアイリちゃんのだな」
「うん」
とうちゃん　俺は今回のことで
愛里に何かあったとき　俺はまだまだ無力だって思い知らされて
それでも　今　とうちゃんのおかげで　一枚一枚なんだったよ
「とうちゃん、ありがとう」
「あ？」
「とうちゃんのビン貯金」
本当はもっといろいろ　ありがとう
「ダイチに使ってもらえんならな」
とうちゃんがニコニコして
「とうちゃん、これは使えねえよ」
「あ？　足んねえか？」
「もったいなくて使えねえんだよ」

とうちゃんが優しい目で俺を見て
「とうちゃんが一生懸命働いて稼いだ金だからさ、俺の宝物にする」
とうちゃんが 腕伸ばして
「ダイチはよ」
俺の頭なでて
とうちゃん それやられると 俺泣いちゃうから
「とうちゃん、俺、勉強するよ」
「そっか、そんじゃ、おやすみ」
「とうちゃん、おやすみ」
とうちゃんの瓶持って 部屋に入った

机の上に置いた とうちゃんの瓶貯金
写真撮って 愛里にも見せてえ
俺が夕方送った LINE には まだ既読ついてねえけど
『愛里』送信
画像も送信
『これは とうちゃんが貯めてた瓶貯金』送信
『俺がもらった』送信
『とうちゃんからの小遣い w』送信
『とうちゃんは また貯めて』送信
『愛里の誕生プレゼントの消しゴム買うって言ってるよ』送信
『俺とおそろの消しゴム w』送信
『俺的には嬉しいっす』送信
『今日お父さんが退院するんだよな』送信
『本当にさ 本当に お父さんが深刻な病気じゃなくてよかった』送信
『そんでもいぼ痔はメツチャ痛いから辛かったと思う』送信
『あのとうちゃんが いぼ痔にだけはなりたくねえつつうくらいだから』送信
『とうちゃんの浮浪者仲間のおっちゃんが』送信
『ウンコするときギャーっつってケツ血だらけで救急車で運ばれたって』送信
愛里は いつ帰ってくんのかな
そんでも んなことさ
『俺は勉強してます』送信
『愛里がそっちで勉強するヒマなくても心配しなくていいよ』送信
『帰ってきたら』
帰ってきたら・・・ そんくれえは 書いてもいいよな 送信
『俺がきっちり教えるんで』送信
『愛里 おやすみ』送信
向こうは まだ昼くれえか
そんでも・・・

「愛里 おやすみ」
言いてえな 愛里に
寝よう

駐妻あるある

アラームで目え覚まして
着信も LINE も来てねえな
トーク画面開けて あっ 既読ついてる
既読スルー・・・じゃねえよな 愛里は忙しいだんよ
お父さん退院してきたんだしな おーっし 顔洗おう

現場に向かう電車ん中
愛里はいつ帰ってくるのかな まだだよな お父さん退院したばっかでさ
ピコン えっ？ 愛里？ 愛里だ
『あなたから LINE もらってたのに』
ピコン
『すぐに返信しなかったのは』
ピコン
『既読？ 今いる？』
いるよ 愛里
『います w』送信
ピコン
『なんかホッとする』
愛里
『俺も』送信
ピコン
『あなたの LINE にすぐに返信しなかったのは』
ピコン
『見たのが日本の夜中の 2 時とか 3 時で』
ピコン
『返信したら あなたはムリしてでも起きちゃうなって』
んなこと気にしてくれたのかよおお
『んなこと気にしないで返信いつでもしてくだせえ』送信
ピコン
『長くなりそうだったから』
『長くなってもいいよ』送信

ピコン

『ママにずーっと愚痴を聞かされて』

ピコン

『パンパンになって爆発寸前みたいなカンジだったから』

ピコン

『でも おとうさんの瓶貯金の写真やあなたの LINE で』

ピコン

『フウッって緩みました』

そっか よかった

ピコン

『パパが退院してきました』

『翌日退院できるくれえで』

ピコン 早やっ 削除

『ママが』

ピコン

『夕食はパパが好きな中華料理のお店から取りましょって』

ピコン

『麻婆豆腐や牛肉とセロリの炒め物や春巻が美味しいのよって』

ピコン

『先生がスパイシーなものやオイリーなものやお肉はダメって言ってたのに』

ピコン

『英語だったからよくわからなかったみたいで』

そっか 愛里がいてよかったな

ピコン

『それを言ったら ママ キレちゃって』

キレた？

ピコン

『近くのスーパーには日本食の食材が売ってないのよ！ って』

ピコン

『近くのスーパーだって車じゃなきゃ行けない距離なの！ って』

ピコン

『ママは車運転できるでしょって言ったら右車線は慣れてないから怖いよって』

バスで行けばって言ったらバスの乗り方なんてわからないって

地下鉄もあるでしょって言ったら地下鉄なんて怖くて乗れないわよって

もっと続いたんですけど 不毛な会話なのでここでやめます』

これは・・・ けっこう・・・ なんつうか

ピコン

『土日や休日はパパがいるけど平日はママはひとりぼっちなのよって叫ぶの』

マジ・・・か

『あたりまえじゃん！』

愛里もそうとうキテるな

『日本にいたときだって平日はパパは会社に行ってたし

アメリカに来たらパパがずっと家にいると思ったの？ バカなの？』

かなり・・・だな

ピコン

『って言いそうになって部屋にこもりました』

ピコン

『そしたらあなたから LINE が届いてて』

ピコン

『なんかホッとして』

ピコン

『私には戻る場所があるって』

愛里 そうだよ 愛里には戻る場所があるよ

ピコン

『夕方おかあさんが大山さんという方と一緒に来てくれて』

大山のおばちゃん？

ピコン

『大山さんには私と同年の娘さんがいて』

だよな 小せえ頃に会ったような気はすんだけど

ピコン

『ママ友がいるので紹介しますねって言ってくれて』

ピコン

『ママは大喜びしちゃって』

ピコン

『ママ友の集まり的なこと大好きだから』

ピコン

『大山さんが 日本食専門のスーパーの場所とか』

ピコン

『ケータリングサービスのある和食のお店とか』

ピコン

『全部ファイルにして持ってきてくれました』

さすが大山のおばちゃん かあちゃんが相棒っつうだけあるよな

ピコン

『おかあさんはパパとママと私の夕食にどうぞって和食のお弁当持ってきてくれて』

かあちゃん さすがだよ いぼ痔に麻婆豆腐はやべエらしいからさ

ピコン

『ママは大喜び』

ピコン

『明日は大山さんが有給を取ってママをママ友さんとのランチに連れていくって』

そっか

ピコン

『ママは大喜び』

ピコン

『大山さんがわざわざ有給を取ってくれたお礼も言い忘れてはしゃいでました』

大山のお婆ちゃんはそういうの気にしねえからさ

ピコン

『パパのお昼はどうするの？ って聞いたら』

ピコン

『自分で何か取るでしょって』

ピコン

『私 思わず言っちゃったんです』

ピコン

『泣きながら私に電話してわざわざ日本から来させて なにそれ？ って』

ピコン

『そしたら あなたのおかあさんが 愛里さんは私とランチに行きましょう

お父様の昼食は迎えに来るときに和食お弁当を買ってくるから安心してって』

かあちゃん ありがとう

ピコン

『こんなこと思っちゃダメだけど』

ピコン

『正直な気持ち 言ってもいいですか』

『いいよ なに？』送信

ピコン

『私 ママよりあなたのおかあさんがいい』

え？

ピコン

『ママといると』

ピコン

『止まらなくなりそうなのでやめます』

いいよ 止まんなくなってもさ

ピコン

『あなたのおかあさんといると全神経がノビノビしてすごく楽になる』

かあちゃん喜ぶよ 俺はメッチャ嬉しいよ

ピコン

『森下家がいてくれてよかった』

マジか 愛里 俺メッチャ

ピコン

『あなたに会いたい』

愛里・・・ 俺だって 俺だってさ

『俺も愛里にすげえ会いてえ』送信

ピコン

『帰りたい』

愛里

『帰ってこいよ』送信

『待ってっから』送信

ピコン

『待ってて』

ピコン

『ぜったい待ってて』

愛里 ったりめえだろ

『待ってるに決まってんじゃん』送信

『愛里がいなくてメッチャ淋しい』送信

本音 言えた

ピコン

『ママがこんなだから 私はほとんど部屋にこもってて』

ピコン

『あなたのノートはフル活用して勉強できてます』

そっか

『よかったっす w』送信

ピコン

『それじゃ』

ピコン

『今仕事中でしたか?』

『現場に向かう電車ん中』送信

ピコン

『いってらっしゃい』

愛里の いってらっしゃい 泣きそうになってんだけど俺

『愛里 いってきます』送信

俺の隣りに立ってるとうちゃんに

「とうちゃん、かあちゃんが大山さんと愛里んどこに行ったんだってさ」

「そっか、大山さん元気なんか?」

「元気っぽいよ」

「そっか」

ピコン え? また愛里

『肝心なこと言い忘れました』

肝心なこと?

ピコン

『あなたのおとうさんが私の誕生日に消しゴムを買ってくれるって』

ピコン

『すごく嬉しくて』

ピコン

『すごく温かくて 泣いちゃった』

愛里・・・

ピコン

『おとうさんに伝えてください』

『今年の誕生日の消しゴム楽しみにしてます』

愛里・・・ 泣くだろ んなことさ

「とうちゃん・・・」

「ダ、ダイチ、どした？」

「愛里が・・・」

「アイリちゃんがなんかあったんか？」

「今年のとうちゃんからの誕生プレゼント・・・」

「え？ あ？」

「とうちゃんからの消しゴム・・・ 楽しみにしてる・・・って」

「そっか」

とうちゃんが嬉しそうな顔してるよ 愛里

「そんじゃがんばって稼がねえとな」

「うん」

愛里 俺は 朝から愛里にヤラれてます

午前中

とうちゃんは俺とすれ違うたんびに

「アイリちゃんの消しゴム買わねえとな」 ってさ

よっぽど嬉しかったんだろうな 愛里に楽しみにしてるって言われてさ

そろそろ昼休憩だな

え？ 電話？ かあちゃん！

「かあちゃん、どした？」

「なにその出方」

「へ？」

「カズオにそっくり」

「かあちゃんから電話つつったら緊急事項っきゃねえからさ」

んっと

「かあちゃん、ちょっとだけ待ってて」

保冷バッグの握りメシ配ってるとうちゃんに

「とうちゃん、かあちゃんから電話きたから、俺、ちっと」

指で裏指して

「そっか、そんじゃ先食ってっからよ」

「おう」

裏まわって

「かあちゃん、どしたの？」
「怪我ってなに？」
「ハ？」
「あんたとカズオが仕事途中で怪我したって、どういうこと？」
「え・・・んっと」
愛里には言っただけでいいし　とうちゃんがかあちゃんに電話して言うわけねえし
「あんたが働いてる現場の監督さんからお詫びのメールが来たんですけど？」
「監督から？」
「近々正式にお詫びに伺いたいって」
「エーーーーッ」
「そんなにひどいケガなの？」
「かすり傷だよ、とうちゃんはヒザの打撲だけど骨に異常なしでさ」
「診断書も PDF で添付してきたけどね」
わかってんなら聞かなくてもいいじゃん
「んなお詫びとか、そんなんじゃねえからさ」
「お心遣いに感謝だけしておいたわ」
「そっか」
監督、かあちゃんにわざわざメールするってさあ　保護者かよ　保護者だけどさ
「その程度の怪我で済んでよかったわね」
「とうちゃんが俺のこと助けてくれたから」
「カズオが？」
「碎石落ちてきそうになって、とうちゃんが俺のこと突き飛ばしてくれて」
「カズオの瞬発力って昔からすごいよね」
「昔？」
「私が赤信号で渡ろうとしたらサッと、気がついたら抱きしめられてた」
「とうちゃんが浮浪者るときだろ？」
「ホームレスに抱きしめられてる私、どう思う？」
「どう思うって、それはとうちゃんなんだからいいじゃん」
「あのときはただのホームレスだったわよ」
「んなこと言うために電話かけてきたんかよ？」
「怪我したっていうから確認の電話ただけよ」
「それは大丈夫だから」
「あ、そう、それじゃ」
「あ、ちょ、ちょ、かあちゃん、ちょっと待って」
「なによ？」
「愛里から LINE あってさ、なんか、愛里のお母さん、なんつうか」
「駐妻あるある」
「ちゅうづま？」
「駐在員の奥さんが夫の赴任先に一緒に来て、まあだいたい一度は陥る状態」
そう・・・なんか

「言葉が話せない、通じない、まわりに知り合いがない、環境も違う、
頼りの夫は平日は仕事でいない、人によっては軽い抑うつ状態になるわね」
「抑うつ？」
「大丈夫よ、大山を紹介したから」
「うん、大山のおばちゃん came たった」
「大山も通った道、まあ大山は駐妻ではないけど、子どももいたから大変だったわね」
そうなんか
「今ではうちの支社に転勤してくる社員の奥さんたちをサポートしてるわよ」
「大山のおばちゃんすげえな」
「もともと好きなのよ、よく言えば社交的、悪く言えばつるむのが好き」
「つるむってさ」
「昔は他の同僚とトイレで私の悪口言ってたんだから ハハハハ」
「それでも、なんか、ありがとう」
「愛里さんのお母様も社交的な方だから、そのうち慣れてお友だちができるわよ」
「うん」
「愛里さんはちょっと大変みたいだけどね」
かなり大変みてえだよ
「他に質問は？」
なんだよその面接みてえなさ
「かあちゃんと・・・ 愛里は、いつ帰ってくるの？」
「明日の様子を見てからね」
「様子？」
「愛里さんのお母様、大山にまかせておけば大丈夫だけどね」
「そっか」
「どっちの脚？」
「なにが？」
「カズオが怪我した脚」
「右のヒザ」
「また右？」
「またって言われてもさ」
「これ以上無茶したら本気で怒るからねって伝えておいて」
「あ、はい」
「それじゃ」
ピッ
電話終わって どうちゃんたちとこへ
「ダイチ、美里、元気か？」
「どうちゃんにかあちゃんから伝言」
「お、俺に？」
「これ以上無茶したら本気で怒るからね」
「あ？」

「だってさ」

「今のは・・・ 美里の真似か？」

「え、まあ、いちおう」

「あんま似てねえな」

ハァアアア？

「アイリちゃんの方がうめえな」

笑ってっけど

とうちゃん 確実に照れてて かあちゃんからの伝言がメチャ嬉しいんだよな

俺のことイジるくれえ浮かれてさ

メシ食おう

ちくわカレー

晩メシはちくわカレー

「美味え」

ちくわに玉ねぎとニンジンとジャガイモだけなんだけどさ

ちくわがいい仕事してんだよな

「明日の晩メシは、これに出汁入れてカレーそうめんていっか？」

「メッチャいいよ、俺、とうちゃんのカレーうどん大好きだよ」

「そうめんだけだよ」

「そうめんて全然いいよ」

「ダイチと俺と二人だもんな」

「なんならジャガイモ蒸して塩かけて食うだけでもいいよ」

「ジャガイモはあんだよ、ニンジンと玉ねぎと、豚肉もあっからよ」

「そんじゃ余裕じゃん」

「ありがてえな、毎日メシ食えるなんてよ」

とうちゃんにとっては 毎日メシ食えるのはあたりめえじゃなくて

「とうちゃん、俺も毎日メシ食わせてあげられるように頑張る」

「ダイチなら大丈夫だよ」

「うん、とうちゃんが助けてくれっからさ」

「だな、そんときは俺もがんばっからよ」

「うん、とうちゃんと二人ならぜってえできる」

とうちゃんが嬉しそうな顔してさ

一枚一枚・・・だよな

勉強 だいぶ進んだ

愛里も俺のノート使って勉強してるっつってたな

向こうは・・・今日の午前中か かあちゃんと昼メシ食うっつってたな

ピコン 愛里！

『おはようございます』

ピコン

『違いました そっちは夜ですね』

どっちでもいいよ 愛里がLINEしてくれんならさ

『愛里 おはよう』送信

ピコン

『ママは昨日あなたのおかあさんと大山さんが来てくれたおかげで』

ピコン

『ちょっと落ち着きました』

そっか よかったな

ピコン

『ゆうべパパと二人きりで話しました』

『お父さんの具合は？』送信

ピコン

『手術前よりはいいそうです まだ痛いらしいけど』

そっか 手術してもまだ痛てえんか

ピコン

『手術の痛みが治まるのは2~3週間だそうです』

そんなにかかんのか 大変だな

ピコン

『パパが出血したときは やっぱりトイレで』

ウンコか

ピコン

『これはママが言ってたんですけど バスルームからうめき声がして』

やっぱそうなんのか

ピコン

『どうしたの？ どうしたの？ ってドアを叩いてもなかなか出てこなくて』

倒れてたんか？

ピコン

『やっと出てきたときにはかすれた声でびょう・・・いん・・・って言ったそうです』

ピコン

『ママは病院の場所もわからないし道もわからないから』

ピコン

『タクシーをどうやって呼べばいいのかもわからないから』

ピコン

『パパが運転して』

マジ？

ピコン

『途中何回も止まってウウウウって言って』

ピコン

『ママ怖くて泣いちゃったのよって』

そりゃ泣くよな いぼ痔で出血してうめいて運転てさ

ピコン

『ごめんなさい』

ピコン

『パパの話ばかりしちゃって』

なに言ってんだよ

『俺もどんなだったか知りてえしさ』送信

『愛里の描写がメッチャ臨場感あって引き込まれてた』送信

ピコン

『臨場感で www』

wつけられるくれえにはなったんか よかった

ピコン

『パパはママが私に来てって電話したこと知らなかったって』

ピコン

『だろうなとは思ってたけど』

ピコン

『え？ って言ったもんね 私とおかあさんの顔見たとき え？ って』

かあちゃんとおんなしとこで引っかかったんだな

ピコン

『パパがあなたのおかあさんには申し訳ないことをしたって』

『んなこといいよ』送信

ピコン

『よくないです』

ピコン

『こんな大騒ぎになっちゃって』

ピコン

『本当にごめんなさい』

『愛里 謝ることじゃねえから』送信

『かあちゃんが 駐在員の妻あるあるだっつってた』送信

ピコン

『駐在員の妻あるある？』

『言葉が通じない まわりに知ってる人がいない 孤独みてえな』送信

『誰もが通る道なんだってさ 大山のおばちゃんもだって』送信

ピコン

『大山さんも？』

ピコン

『今では会社の駐在員の奥さんたちのサポートしてるんだってさ』送信

ピコン

『パパは違う会社なのに』

ピコン

『なんかますます申し訳なさすぎる』

『大山のおばちゃんそういうの好きだからってさ w』送信

ピコン

『なんか なんて言ったらいいのか』

『なんも言わなくていいよ』送信
『今日かあちゃんと昼メシ食うんだろ?』送信
ピコン
『はい もう少しで迎えにきてくれます』
『そっか いってらっしゃい』送信
ピコン
『私のこんな話を聞いてくれてありがとう』
『俺は分かち合ってくれて嬉しい マジで』送信
ピコン
『』
ハート! 久しぶりのハート!
『ハート メッチャ嬉しいっす』
ピコン
『言葉が見つからなくて』
ピコン
『それじゃ おやすみなさい』
『愛里 好きだよ』送信
ピコン
『私も好きです』
うおおおお 離れてっけどさ 淋しいけどさ そんでもさ
『愛里 俺の心はいつも愛里と繋がってるから』送信
ピコン
『あなたって』
ピコン
『ときどき少女マンガ www』
こういうこと言えるようになったんか
『ときどき少女マンガっす w』送信
『そんでもマジでそう思ってるから』送信
ピコン
『はい』
ピコン
『いってきます あなたは おやすみなさい』
ピコン
『愛里 いってらっしゃい』送信
なんか 少しずつ様子わかってきて ホットする
寝よう

朝 起きて
とうちゃんと一緒に握りメシ作りながら

「とうちゃん、ゆうべ愛里から LINE あってさ」
「アイリちゃん元気か？」
「少し元気になってた」
「そっか、よかったな」
「愛里のお父さんも、便所で出血だってさ」
「やっぱウンコか？」
「うん、それでも自分で運転して病院行ったって」
「救急車じゃねえのか？」
「途中何回も止まって、ウウウウって」
「そりゃ・・・」
とうちゃんの顔がメッチャ恐怖になってる
「そ、そんでもさ、あと2~3週間したら痛みは治まるってさ」
「そんじゃ、アイリちゃんも、それまであっちにいんのか？」
「え？ や・・・来週の土曜日には始業式だからさ」
それまでには・・・
「それまでには、帰ってくんじゃ・・・ねえかな」
帰ってくるよな？ ずっと・・・とか や、帰りてえつつあったから
「ダイチ」
「ん？」
「握りメシ食ってけ」
あ とうちゃん 俺が不安になっての わかったんだな
「おう」
俺も握りメシにぎって
「とうちゃんの分」
二人で握りメシ交換して食って
保冷バッグ持って 家を出た

現場に向かう電車人中
もう少しであさひ町の駅に着く
ピコン え？ 愛里
『今から』
ピコン
『けっこう長くなるので』
ピコン
『あなたの仕事をジャマしたくないから』
ピコン
『電源 OFF にしておいてください』
なんかあったんか？
『愛里 なんかあったんか？』送信

ピコン
『何かあったわけじゃなくて』
ピコン
『でも あなたに聞いて欲しくて』
ピコン
『おそらくすごく長くなるから』
ピコン
『仕事中は見ないでください』
『なんで?』送信
ピコン
『おかあさんから聞きました』
ピコン
『あなたとおとうさんがケガをしたって』
かあちゃん 余計なこと
『かすり傷だから 心配しねえでいいよ』送信
ピコン
『私が心配になるから』
ピコン
『他に用がないなら電源 OFF してほしい』
『まだ電車の中だから』送信
『それまでは ON でいいですか?』送信
ピコン
『はい』
ピコン
『あなたのおかあさんから駐在員の妻あるあるを詳しく聞きました』
そっか
ピコン
『愛里さんのお母様は更年期の症状もあるから』
ピコン
『余計に辛いと思うって』
そっか 更年期症状って辛れえんだよな とうちゃんから聞いたんだけどさ
ピコン
『あなたのおかあさんからいろいろと教えてもらって』
ピコン
『ママの状態が少し理解できました』
よかった よかったよ愛里
「ダイチ、下りねえとよ」
「あ、うん」
『愛里 今電車下りるから』送信
ピコン

『ここからは電源 OFF にしてください』

『わかった』送信

OFF らねえよ

読めなくてもさ 愛里のことは ぜってえ OFF らねえ

ただのシソ

愛里がアメリカ行ってから
LINE 来て気づかぬえのはイヤだから仕事でも電源 ON にしてて
着信音も大きめに設定してた
今日は電源 OFF ってくれって言われたけど バイブにして仕事してる
ケツポケットの中の携帯のバイブ感じるたびに
愛里がそばにいるような気がして
俺はそれに元気もらってて メッチャ仕事も頑張れてて

10 時休憩るとき 携帯みたら メッチャ LINE 入ってる
『あなたのおかあさんが言うには』
『ママが泣きながら電話をかけてきて私にすぐに来てって言ったのは』
『大げさじゃなくて ママはそれほど不安で怖くて』
『まわりに頼れる人がなくて私に SOS を送ってきたんじゃないかって』
『遠く離れた私に SOS を送るほどママは孤独だったんじゃないかって』
そっか 俺がそばにいて電話したときもふつうのカンジじゃなかったもんな
『おかあさんとランチしてる時に大山さんから連絡があって』
『ランチの後ママを日本食材のスーパーに連れて行きますって』
『だから私とおかあさんはランチの後ショッピングしました』
かあちゃんとショッピングか 愛里も気晴らしになったかな
『私とおかあさんが戻って少ししてからママと大山さんが戻ってきて』
『おかあさんと大山さんは一緒に帰りました』
『おかあさんは 大山会社に行くわよって』
『大山さんがエーッ私は有給取ったからイヤですって』
『おかあさん笑ってて大山さんも笑って いい関係だなんて』
かあちゃんと大山のおばちゃんはずっとそんなもんな
『私とママが二人きりになって』
『パパはベッドルームにいますけど w』
『ママがスーパーの袋の中から』
『アメリカの大きなスーパーの袋ふたつ分買ってきててビックリですけど』
『シソがあったのよって』
『アメリカでシソなんて絶対に食べられないと思ってたのにシソがあったのって』

『嬉しそうにしあわせそうな顔でニコニコしてシソを私に見せて』
『ただのシソなのに』
『ただのシソが嬉しいほど ママは辛かったのかなって』
『ただのシソがママの喜びになるくらいママは』
『私 泣いちゃって』
『そしたらママが愛里ちゃんどうしたの? って』
『ママ シソがあってよかったねって言ったら』
『大山さんと森下さんのおかげねって ママも涙流してて』
『私 ママごめんねママがひとりぼっちで淋しかったのにわかってあげられなくて
こっちに来てから怒ったり無視してばかりで本当にごめんなさいって』
愛里は・・・ 俺まで涙出てきて
『ママこそごめんなさいね愛里ちゃんや森下さんに心配させてしまってた』
『ママは大山さんから駐在員妻あるあるを教えてもらったみたいです』
『大山さんは駐在員妻あるあるとは言ってないみたいで』
『大山さんがアメリカに住み始めて体験したことや』
『会社の社員の奥さんたちの体験を世間話的に言ってくれたみたいで』
『大山さんのママ友さんたちもそういう話をしてくれて』
『それを聞いてママは自分一人じゃないんだって』
『そういうものなんだって』
『大山さんがママが言わないことまでわかってくれて』
『自分の気持ちをそのままわかってくれる人がいるって』
『それですごく気持ちが楽になったって言ってました』
大山のおばちゃん ありがとう マジありがとう
『ママはお豆腐も買ってきていて 今夜はシソと生姜がのった冷ややっこでした』
『アメリカで冷ややっこが食べられるなんてねえってママが喜んで』
『パパも喜んでました ベッドの上で食べたんですけど』
『アメリカには薄切りのお肉が売ってないって』
『でも日本食材のスーパーには売ってたっていっぱい買って冷凍してました』
『これくらいならどうかしらって豚汁を作りました』
『パパのにはお肉全然入れないでw ただのお野菜汁www』
『お味噌もなかったから久しぶりよって喜んで』
『明日の夕食はサーモンにするわって』
『ママはアメリカに来てからお魚はサーモンしか買ってないって』
『英語で書いてるからどれが何なのかわからないのよって言うから』
『写真をかざしただけで翻訳できるアプリを入れてあげたら大喜び』
『ママがサーモンを見せてくれたんだけど』
『アメリカのスーパーのサーモンで輪切りでビックリしちゃった』
輪切り? ああ だよな 見たことある
『サーモンもソテーしか作ってないって』
『パパはソテーは飽きたっていうけどフライじゃダメでしょって言うから』

『あなたが作ってくれるホイル焼きの話をして』
『どうやって作るの？ って私に聞くんです ムリ』
『サーモンとかいろいろホイルに包んでるって言うけど』
そっか 材料と作り方書いて送ればいいな 読み終わったら送ろう
『パパが蒲焼きが食べたいってずっと言うらしくて』
『鰻なんか売ってないし売っててもさばけないでしょ？ って』
俺もできねえな
『今日行ったスーパーに冷凍の蒲焼きがあったけど美味しそうじゃなかったって』
『あなたやおとうさんが作ってくれるイワシの蒲焼きもどきの話をしたら』
『イワシやサンマは売ってないのよって』
『だいたいいぼ痔のくせに蒲焼き食べたいって』
いぼ痔のくせになって ハハハ 笑っちゃいけねえな
できんだよ 蒲焼きもどき 茄子でできんだよ
とうちゃんと俺だけのときに作るんだよ これも作り方送ろう
そろそろ 10 時休憩終わるな 続きは昼だな

昼休憩

メシ食い終わって 愛里の LINE の続きを読んでる
『これは前に聞かされた話なんですけど』
『ママは昔ガーデニングをやってたそうです』
『主にバラで庭中バラが咲いてたらしいです』
俺が行ってたときは 木はあったけど あとはレンガと白い石だけだったな
『犬を飼おうかってパパが言ったけど』
『子どもができないから犬を飼ってるのねって言われるからイヤって』
んなこと言われんのか ひでえな
『それでガーデニングを始めたって』
『私が生まれてからやめたって』
『バラはすごく手がかかるからって』
『そのことを思い出してママに言ったんです』
『シソを植えたら？ って』
『あなたの家のベランダの話をして』
『プランターだったら楽ねえって』
『検索したらアメリカでも Amazon でシソの種が売ってました』
『Shiso って書いてました w』
『ママすっかり乗り気になっちゃって』
『来年の春にはやるそうです w』
『あなたの家のベランダには三つ葉も小口ネギもいろいろあったって話したら』
『またまた乗り気になっちゃって』
『日本にいたときはスーパーに行けば買えたから』

『家で育てるなんて発想はなかったけど』
『プランターで育てたら欲しいときにすぐ使えるわねって』
『季節じゃないときは日本食材のスーパーで買えばいいして』
『ママが生き生きしてきて嬉しい』
よかったな 愛里 マジよかった
『これをあなたに聞いて欲しかった』
『あなたのおかあさんや大山さんのおかげで』
『ママが楽になって私もママの気持ちをわかってあげられるようになって』
『あなたの家で食べたり見たりしてるのが』
『ママにとって新鮮でやる気が出ることになって』
『本当にありがとう』
『それじゃ私は勉強してシャワーして寝ます』
『お仕事ががんばってね』
がんばるよ 愛里のためにがんばるよ
『でも ケガはしないようにしてください』
気をつけます
愛里 よかったな お母さんとも仲直りつつうか できてさ
ホイル焼きと茄子の蒲焼きもどきの作り方送ろう
『愛里 俺はメッチャ嬉しい』 送信
『メッチャ感動してる』 送信
『やっぱ愛里が行ってよかったと思ってる』 送信
『ホイル焼きの材料と作り方送る』 送信
『魚（サーモンの他にタラでも白身の魚ならなんでもいい）
玉ねぎ（薄切り） トマト（薄切り二枚） ベーコン・キノコ入れてもいいよ
ホイルに玉ねぎ敷いて魚載せて魚の上にベーコンとトマト乗っけて
塩胡椒して白ワイン少し入れてバター少し入れてトースターで 20 分くらい』 送信
『蒲焼きもどき、茄子でもできるよ』 送信
『茄子の皮向いて 1cm くらいの厚さに切る
フライパンに油敷いて焼き色つけながら火を通す
タレにからめる』 送信
『タレは砂糖・酒・みりん・しょうゆ←とろみが出るまで鍋で煮詰める』 送信
『他にも俺にできることがあったら言って欲しい』 送信
よかった なんか すげえ よかった
愛里とお母さんがいいカンジになれて
俺は愛里のお母さん好きなんだよ なんかホワッとして温ったけえ雰囲気でき
それに 愛里のこと生んで育ててくれたつつうことに なんつつうか
愛里のことを愛里に生んで育ててくれてありがとうつつうか
ピコン
え？ 愛里
『レシビありがとう』

『起こしちゃってごめん』送信
ピコン
『大丈夫です』
ピコン
『明日ママにレシピ教えます』
ピコン
『私があなただからレシピもらう日が来るなんて思わなかった w』
『愛里のお母さんにだよ w』送信
ピコン
『そうですよね wwwww』
ピコン
『私にはあなたが作ってください w』
『愛里のメシは俺が作ります ずーーっと』送信
ピコン
『ずーーっとって wwwww はい』
『愛里 よかったな』送信
ピコン
『はい』
ピコン
『ありがとう』
『俺こそありがとう』送信
ピコン
『何に？ w』
『生まれてきてくれて』送信
ピコン
『なにそれ？ wwwww』
『愛里のお母さんに感謝っす』送信
ピコン
『ママに伝えておきます w』
『愛里 もう寝ろ』送信
ピコン
『えらそう wwwww』
えらそうって
『心配してるだけっす w』送信
ピコン
『はい 寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里 おやすみ』送信
なんか 俺 ホッとして 全身から力抜けてんだけど

「ダイチ、どした？」
「あ？ なに？」
「アイリちゃんになんかあったんか？」
「愛里のお母さん、かあちゃんと大山のおばちゃんのおかげで落ち着いたってさ」
「よかったなあ」
「愛里とお母さんもいいカンジになってさ」
「アイリちゃん、すげえ心配してたもんなあ」
「あっちのふつうのスーパーにはシソ売ってねえんだってさ」
「植えりゃいいんじゃないか？」
だよな とうちゃんの発想は ねえなら作るだもんな
「とうちゃんは、いつからシソ植え始めたの？」
「ん・・・っと、ヒトミが生まれてからだったな」
「苗買ってきたんか？」
「スーパーに種売ってっだろ？ 美里に、シソの種買ってもしっかって聞いてよ」
「かあちゃん、なんつった？」
「好きにすればって」
かあちゃん そういうの全然興味ねえもんな
「芽が出たときは嬉しかったな、ヒトミに見せたらよ、抜いちまってよ」
ねえちゃん・・・ 小せえ頃からそんなんだったんか
「間引きしなきゃなんねえから、よかったんだけどな」
せっかく出た芽を抜かれちゃったのに ニッコニコしてさ
「ヒトミはどうしてっかな」
とうちゃん
「ねえちゃんに会いてえ？」
とうちゃんが 一瞬 黙った
「ヒトミはがんばってからよ」
とうちゃんの気持ちが 俺にはちょっとわかる
なんだかんだで 俺もねえちゃんに会いてえよ
そっか 愛里のお父さんとお母さんも 愛里に会いてえのに
なのに 愛里のこと こっちに残してくれてんだよな
「とうちゃん、俺もがんばる」
「ダイチと俺と二人でな」
「うん」
だから今は 愛里と一緒にいて しあわせで マジでよかったと思ってる
それでも それでも愛里を 俺のそばに
「ダイチ、俺は便所掃除してくっからよ」
「あ、そんじゃ俺も仕事戻るよ」
愛里のこと 戻してくれませんか
お願いします

Face Time

晩メシは昨日のちくわカレーに出汁入れて醤油入れたカレーそうめん
これはかあちゃんには言えねえけど 言ったことねえけど
とうちゃんと俺の二人きりるときは キッチンのカウンターでメシ食ってる
わざわざテーブルで食うほどじゃねえしさ 片付けも楽だからさ
とうちゃんに、愛里から来た LINE の内容を話したら
「よかったなあ」って、しみじみ言って
「アイリちゃんのお母さんもすげえな」ってさ
「俺は、外国に住むなんてよ、どうすりゃいいんかわかんねえよ」
とうちゃんは かあちゃんがニューヨークに初出張するって聞いたとき、
アメリカって本当にあるんだなって思ったっつってたもんな
今でも、かあちゃんが出張るときは、とうちゃんにとっては
「美里がいねえ日」ってだけでさ 国内だろうと海外だろうとそんだけなんだよな
もしも かあちゃんがアメリカに住むなんつったら・・・
とうちゃんはどうなんのかな
想像つかねえな あ 俺が中学んとき かあちゃんととうちゃん旅行行って
そのときのことはチラッと愛里に話したことあるけど
愛里には一週間つったけど 予定では二週間だったんだよ
かあちゃん的には 俺も中学生になったし
とうちゃんと二人きりになりたかったっつうか ちょっと遅い新婚旅行的な？
メッチャ高級な温泉旅館でスパもついててさ
部屋に露天風呂ついてるってさ
それが一週間目に突然帰ってきて 俺もねえちゃんも驚いてさ
かあちゃんは「やっぱりカズオが作ったごはん食べたくなっちゃった」って
とうちゃんは帰ってきてすぐに張り切ってメシ作ってさ
俺はとうちゃんが早く帰ってきてくれて嬉しかったけど
あとからねえちゃん経由で聞いたのは・・・
旅館着いて部屋に入って とうちゃんが「俺は何すればいいの？」って聞いたって
「何もなくていいのよ、温泉に入って食事してゆっくりするだけ」つったら
「そんじゃ、俺、なんでここにいんの？」ってさ
とうちゃんは旅行っつう観念が欠如してるっつうか しゃあねえんだけど
かあちゃんが部屋についてる露天風呂に「一緒に入らない？」って言ったら
とうちゃんが口開けてかあちゃんのこと見て そんで

「お、俺は銭湯でいい」つったって これはねえちゃんと俺も笑ったけどさ
食事もさ 写真見ただけでもすげえ凝ってて メシつつうより絵みてえなさ
かあちゃんが「美味しい」って食ってたら どうちゃんがしょんぼりして
「ねーちゃん、ごめんな」つったって 「なにが？」って聞いたら
「俺、んなシャレたの、作れねえ」つったってさ
「こんなものを毎日食べたいと思わないわよ、私が毎日食べたいのはあんたのごはん」
かあちゃんがそう言ったら どうちゃんがやっとホッとした顔したって
俺が最高に好きな話が かあちゃんが昼寝して起きて あれ？ って窓の外見たら
露店風呂の欄干にかあちゃんのブラとパンティとどうちゃんのパンツが干してあっ
たって
メッチャどうちゃんだよなって思った
そんなカンジで一週間 かあちゃんがスパつつうの？ 受けて部屋戻ったら
どうちゃんが窓際の柱に寄りかかってポーッと空を見てて
かあちゃんが 「カズオ」って呼んだら ポーッとした顔でかあちゃんの方向いて
これはマジでヤベエと思って「カズオ、帰るわよ」って
「カズオのごはんが食べたくなかったから帰るわよ」つつたら
ポーッと顔が明るくなって サッと荷造りしたってさ
「あまりに非日常的な空間にいてわけがわからなくなっちゃったみたい」
かあちゃんがねえちゃんにそう言ってたんだってさ
どうちゃんの日常は やっぱここなんだよな
「ダイチ、どした？」
「え？ あ？ なに？」
「なんかポーッとしてっからよ」
「どうちゃんとかあちゃんが旅行行ったときのこと思い出してた」
「旅行？」
「俺が中学んとき温泉行ったじゃん」
「あんときは、ダイチが家ん中のことやってくれててよ」
「俺はいいけどさ」
ねえちゃんにこき使われたけど
「美里が俺のメシ食いてえから帰るっつってよ」
どうちゃん嬉しそうな顔してる
「それでも、どうちゃん、旅館で食ったメシ作れるようになったじゃん」
「カニカマステーキか」
本当は本物の蟹の脚のステーキだったらしいけど
「これならできっかもしんねえと思ってよ」
どうちゃんはカニカマをバターで焼いて大根おろしとポン酢のを作るようになってさ
「俺、好きだよ、かあちゃんも美味えつつってたじゃん」
かあちゃんが味の再現度にビックリしたっつってたもんな
「そんじゃ、美里とアイリちゃんが帰ってきたら作っか」
「だな、旅館の味だもんな」

「旅館の味ってよ」

とうちゃんがポリポリ頭かいてる

キッチン掃除して 明日のおっちゃんたちの握りメシの米研いで

今日はフローリングと玄関のたたき掃除して

とうちゃんと洗濯物たたんで・・・たら

「とうちゃん、とうちゃんの靴下、メッチャデケえ穴空いてっけど」

「そんくれえなんともねえよ」

「俺、繕おっか？」

「ダイチが？」

「かあちゃんじゃなくて悪りいけど」

「ダイチが繕ってくれんなんてよ」

「マジ？ 俺でいいの？」

「ありがとな」

「俺はいいんだけどさ、かあちゃんじゃなくていいんかなって」

「ダイチに繕ってもらえんなんてよ、嬉しいよ」

「そっか、そんじゃ」

あ 電話 かあちゃんだ

「とうちゃん、かあちゃんから電話」

「なんかあったんか？」

「わかんねえ、話聞いてみる」

通話押して

「かあちゃん」

「Face Time でかけ直すから」 つって切れた

Face Time？ かかってきた

「かあちゃん、なんで Face Time？」

「さて、私は今、誰といるのでしょうか」

誰と？ あ！

「愛里？」

「ちがうよ！」

「ねえちゃん！」

「ヒトミ？」

とうちゃんが携帯覗いてきた

「とうちゃ～ん」

ねえちゃんが手え振ってるよ

「ヒトミ・・・ ヒトミか」

とうちゃんが夢見てるみてえな顔になって

「とうちゃん元気？」

「元気だよ」

「ケガしたんでしょ？」

かあちゃんっ 余計なこと言わなくてもさあ

「こんなケガに入んねえよ」

「ダイチがいるのに とうちゃんにケガさせてさ」

「え・・・ ごめん」

「ダイチは悪くねえんだよ、心配かけちゃったな、ごめんな」

「とうちゃん、ずっと連絡しなくてごめんね」

「んなこといいよ、ヒトミはがんばってんだからよ」

「とうちゃんとかあちゃんのおかげ」

「俺はなんもしてねえけどよ」

そっか かあちゃんはとうちゃんとねえちゃんに話させてあげたかったんか

とうちゃん嬉しそう顔してさ

なんか二人で楽しそうに話してっから 俺はションベンしてこよう

「ダイチ」

え かあちゃん？

「なに？」

ションベンしてえんだけど

「今日はヒトミと二人で愛里さんのところに行くから」

「えっ？ な、な、なんでねえちゃんも？」

「あんたが女を見る目があるかどうか私が見極めてきてやるよ」

「え、あ、な、ね、ねえちゃん、やめてくれよ」

「なんでよ」

「え、あの、んっと、あ、愛里は人見知りだからさ」

「ふ～ん、私に知られたら困るようなことしてるのか」

「してねえよ！」

「どうだか」

「してねえって！」

「ムキになっちゃって、笑える」

ハァァァ？

「とうちゃん、それじゃまたね」

「ヒトミ、元気でな」

「ダイチ、とうちゃんの面倒ちゃんとみろよ」

なんだよえらそうに

「わかってるよ」

「あ、ちがうか、とうちゃんに面倒みてもらってるのか」

メッチャ大口開けて笑ってるねえちゃんに なんも言い返せねえ

「それじゃ、今からヒトミとランチするから」

「あ、ちょ、かあちゃん、いつ帰ってくるの？」

つか 愛里は？

「空席待ち」

「いつの？」

「明日かあさってかしあさって」

「どっち？」

「わからないわよ、空席待ちなんだから」

「あ・・・ そっか」

「唯一わかってるのは、帰りはエコノミー」

「あ・・・ はい」

「それじゃ」

切れた

「ヒトミ、元気そうだったな」

「え？ あ、うん、とうちゃん、俺、シヨンベン」

便所に走った

ねえちゃんが愛里んどこ行くつつったとき マジでチビリそうになった

ちっとチビったかもしんねえ 大丈夫だよな？ 大丈夫だ

勉強終わった

今年の夏休みは なんかいろいろあったな まだ終わってねえけどさ

去年は休み中は愛里のこと見れねえから 早く終わんねえかなって思いながら

家政夫の単発のバイトしてたもんな

ピコン 愛里！

『あなたが送ってくれたレシピをママに見せました』

そっか

ピコン

『茄子で蒲焼風ができるなんてねえって感心してました w』

できるんすよ お母さん

ピコン

『今夜はさっそくサーモンのホイル焼きにするそうです』

そっかそっか

ピコン

『あと少ししたら』

ピコン

『あなたのおかあさんとお姉さんが来てくれるそうです』

愛里 なんかさ なんか

『ごめんな』送信

ピコン

『なにが？』

『ねえちゃんが図々しくさ』

ピコン

『あなたのお姉さんに会ってみたかったから』

愛里 んな悠長なさ 強烈なんだよ ねえちゃんはさ
『愛里 ねえちゃん口悪いけど 根は悪くはねえんだよ』送信
『けっこうな毒舌だけど あんま気にしねえでいいから』送信
ピコン
『www』
笑ってる場合じゃねえよ 愛里
ピコン
『おとうさんとおかあさんの娘だから』
ピコン
『あなたのお姉さんだから』
え
ピコン
『そこは全然心配してません』
マジ？
ピコン
『問題は 私の人見知りですけど』
だよな
『愛里 あんまムリしねえでいいからな』送信
ピコン
『はい』
ピコン
『ママはお茶の先生が送ってくれた京都のおかきを用意して』
京都のおかき？
ピコン
『こっちのお菓子は甘すぎるからってw』
『んなシャレたんじゃなくていいよ』送信
『ねえちゃん 100 円の袋菓子でもバリバリ食うから』送信
ピコン
『声出して笑っちゃった』
声出して笑った？ よかった そこはよかった
『愛里 ねえちゃんになんか言われたら俺に言ってくれ』送信
ピコン
『なんかって？』
なんかって・・・ んっと
『性格キツイからさ』送信
ピコン
『私は』
ピコン
『森下家の血に絶対的信頼を置いていますから』
森下家の血に 絶対的信頼 愛里・・・ マジで

『愛里 ありがとう』送信

俺はねえちゃんは何言い出すか怖いけど

ピコン

『それじゃ あなたは おやすみなさい』

『愛里』送信

次の言葉は 言えねえよ

『またな』送信

淋しいなんてさ 前向きになってる愛里にさ

寝よう

じゃねえよ とうちゃんの靴下繕ってからだよ

ねえちゃん

現場に向かう電車中

とうちゃんの靴下 俺が繕った靴下嬉しそうに履いてさ

ほんとは俺もあんま気にしねえんだけど

かあちゃんがいたら あんぐれえの穴空いてたら繕うよなって思ってさ

それでも次に穴空いたら かあちゃん捨てろっつうだろうな

そういうのは俺もとうちゃんも掃除に使ってっけど

今朝 握りメシ作りながら とうちゃん ねえちゃんの話ばっかしてたな

ヒトミが元気そうでよかったとかさ ますます美里に似てきたなとかさ

ねえちゃんはとうちゃんにソックリなんだけどな

ピコン 愛里だ

『夕食のホイル焼き』

ピコン

『ママ的には大成功でした』

ピコン

『正直私はやっぱりあなたのホイル焼きの方が美味しいけど』

愛里 嬉しいよ

ピコン

『パパも美味しいって喜んで食べてたから』

ピコン

『あなたのおかげです』

『愛里 役に立てて嬉しいっす』 送信

ピコン

『ママが』

ピコン

『次に愛里ちゃんが遊びに来るときには』

ピコン

『遊びに来るときにはって言ったんです』

ピコン

『帰ってくるときじゃなくて』

愛里のお母さん・・・

ピコン

『ママが そう言えたのは』

ピコン

『森下家のおかげです』

森下家のおかげ？

ピコン

『ママはニコニコしながらそう言って』

ピコン

『次に愛里ちゃんが遊びに来るときには大一さんも一緒に来て欲しいわって』

え？ マジ？

ピコン

『いろいろ料理を教えてもらいたいわって』

『そのときは 俺がメシ作るし掃除や洗濯もする』送信

ピコン

『家政夫じゃないんだから www』

『愛里のお母さんとお父さんにはなんでもしてえから』送信

ピコン

『ありがとう』

ピコン

『もう仕事ですか？』

『まだ電車の中だよ』送信

ピコン

『また長くなるので』

ピコン

『電車が着いたら電源 OFF にしてください』

『それまでは読ませてくだせえ』送信

ピコン

『はい』

ピコン

『午後あなたのおかあさんとお姉さんが来て』

なんか ドキドキすんだけど

ピコン

『あなたのお姉さんが入ってきたとき』

なんだ？ なんかしたんか？

ピコン

『顔があなたにそっくりで』

へ？

ピコン

『ていうか』

ピコン

『おとうさんが女の子だったらこういう顔になるのかなって』

ねえちゃんはどうちゃんにそっくりだもんな

ピコン

『私　なんか　あなたに会ったような　おとうさんに会ったような』

え？

ピコン

『そんな感覚になっちゃって』

ピコン

『勝手に涙がポロポロ出てきちゃって』

え？　ねえちゃん見て？

ピコン

『そしたら　お姉さんが　愛里って抱きしめてくれて』

マジか

ピコン

『私がすみませんよくわからないけど勝手に涙が出てって言ったら』

ピコン

『そっかって』

ピコン

『その言い方もあなたやあなたのお父さんに似てて』

ピコン

『私　すごくホッとしちゃって』

ホッとしたんか　そっか　ねえちゃんですごく　そっか

あ　電車着く

『愛里　電車着くから』送信

ピコン

『電源 OFF にしてください』

ピコン

『私は勝手に書いてますから w』

『10 時休憩に読むからな』送信

ピコン

『行ってらっしゃい』

『愛里　行ってきます』送信

電源は OFF らねえで　電車下りた

10 時休憩になって　携帯見た

『あなたのお姉さんが来てくれたのは』

『ママの更年期症状のためでした』

え？

『最初はそういう話はしてなくて』

『ママが　大一さんにそっくりできれいなお姉さまねえなんて言ってて』

『そしたらお姉さんが　今ホットフラッシュがきてませんか？　って』

『私は何のこと？ だったんですけど』
『ママが 汗が止まらなくて ごめんなさいねって』
『私はママは汗っかきになったなと思ってただけで』
『お姉さんがソファに横になりましょうって』
『ママは大丈夫よって言ったんですけど』
『お姉さんは少しでも楽になった方がいいじゃないですかって』
『ママのことソファに横にならせて』
『愛里アイスノンある？ って』
『ママが気になさらないで大丈夫ですからって言ったら』
『女同士なんだから楽な恰好でおしゃべりしたいじゃないですかって』
『私めもかしこまって話すの苦手だからってママの横にあぐらかいて座って』
『私がアイスノン持ってきたら Thank you って受け取って』
『ママの頭の下に敷いて 美智子ママって』
美智子ママ？
『ママがビックリした顔してたら ママの手を握って』
『我慢しないでいいよ 辛いんだからって』
『そしたら ママが泣いちゃって』
『頭が痛くなったりしない？ 肩こりは？ って 本当の娘みたいなカンジで』
『本当の娘の私がこんなこと言うのもヘンだけど』
『ママも 痛くなったりするの、なんかいつも疲れちゃうのよって』
『お姉さんはそんなカンジでママに聞いてママも甘えるみたいにいろいろ話して』
『ママが 更年期ごときで、こんなねえ、みっともないわねって言ったら』
『お姉さんが』
『みっともないよ、辛いものは辛いんだからって』
『美智子ママ 一人で我慢してきたんでしょ さっきもそうだったよねって』
『そしたら ママがお姉さんに抱きついて泣いちゃって』
『お姉さんはママのこと抱きしめながら背中をさすってくれてて』
俺は・・・ なんか その場にいるみてえな気になってて 鼻水手で拭いて
『私 やっぱお姉さんも森下家の人だなんて』
え？
『お姉さんがママに おかあさんに話してみたいなカンジで』
『美智子ママ 私にはね尊敬する教授で医学博士がいてねって』
『その先生は 女性の身体に優しい医療を提唱してるそうです』
『できるだけ化学的な薬や人工的なものを使わずに』
『生理痛や妊娠出産や更年期症状をケアして優しく身体に負担のないような医療』
『お姉さんはそういう産婦人科医になりたくてアメリカで学ぶことにしたって』
そこまで詳しくは知らなかったな
『お姉さんは自分は学生だけど その先生のところに行って聞いてきたって』
『先生はとて親身になって医師じゃなくてもできることをおしえてくれて』
『もしも辛いときは診てあげるって言ってくれたって』

マジ？

『お姉さんは私に連絡してくれたら教授にアポを取るからねって言うてくれて』

『ニューヨークからボストンまではバスや電車で約4時間かかるけど』

『そういう場所があると思うだけで気持ちが楽になると思うよって』

『ママが そうなのよ どこに行ったらいいのかわからなかったのって』

『ママはそれだけでもホッとしたみたいです』

『お姉さんが言うには女性の身体のケアの基本は食事だそうです』

俺は生理のときのことは知ってっけど 更年期のは知らねえな

『ママにどんなものを意識して摂ればいいのか説明してくれて』

『大豆食品もいいそうで』

生理んときと一緒に イソフラボンか

『お豆腐や納豆や豆乳とか』

『ママが だったらシチューとかグラタンのときに豆乳を使えばいいのかしらって』

『お姉さんが一瞬黙って』

『そのまま飲んじゃってもいいんじゃない？ って』

ねえちゃん料理できねえからさ

『ママが そうねその方が手っ取り早いわねって笑って』

『他にもサプリをいくつか持ってきてくれて』

『亜鉛で英語で Zinc っていうんですね だから元素記号が Zn なんだって』

愛里 元素記号が憶えらんねえっつってたもんな

『亜鉛の元素記号は憶えました w』

『お姉さんが何か不安になったり話をしたくなったらいつでも連絡してねって』

『授業中とトイレに入ってる時は出られないけどって w』

『ママは そう言ってもらえるだけでも安心するわって』

『ママったら いつの間にかヒトミちゃんヒトミちゃんて』

『ヒトミちゃん京都のおかきもってあるのよ持って行ってねなんて』

『そしたらお姉さんが www』

ねえちゃんが www ってなんだ？

『連休とかに泊りに来てもいい？ 家庭料理食べたいなあって』

ねえちゃん なんだよそれ 確実に本気だろ

『ママはもう大喜び』

『いつでも泊まりにきてちょうだいねって』

なんか俺より急接近してねえか？

『帰るときにも 美智子ママ約束して 辛いときは我慢しないで休んでねって』

『ママが そんなこと言ってもらえるなんてねえって』

『掃除や洗濯しなくても死なないからって』

『それって おかあさんが前に私に言ったことと同じで』

『ママも笑って そうね多少手抜きしたってね どうせパパと私だけだものって』

『そしたらお姉さんが』

『美智子ママ 私は美智子ママのアメリカでの娘になるって』

『ママはヒトミちゃんってお姉さんに抱きついてまた泣いちゃって』
『美智子ママ 愛里の代わりにはなれないけど私でガマンしてねって』
『ガマンだなんて ヒトミちゃんがいてくれたらママ心強いわって』
『ママはすっかりお姉さんのママ気分になっちゃいました』
ねえちゃん 俺は・・・ ねえちゃんの 俺の知らねえねえちゃんを見た気いして
『ありがとう 本当にありがとう』
『あなたやおとうさんやおかあさんやお姉さん』
『森下家のみんなで私のことやママのこと』
『森下家に包まれて』
『なんて言っているのか言葉が出ないけど』
『ありがとう』
『それじゃ 私は寝ます』
『あなたに会って』
『森下家に会って』
『私は本当にしあわせです』
『しあわせばかりもらっています』
『おやすみなさい』
俺は・・・ なんか 圧倒されて なんて返していいんかわかんなくて
『愛里』送信
『お母さんが少しでも楽になってよかった』送信
『俺は愛里よりもっと』送信
『愛里に会えてしあわせです』送信
『愛里 おやすみ』送信
なんかいろいろ溢れちまってさ
愛里 ありがとう
ねえちゃんもだ
『ねえちゃん』送信
『愛里のお母さんのことありがとう』送信
ねえちゃんはやっぱねえちゃんだよ
とうちゃんとかあちゃんに育てられた俺のねえちゃんだ
すげえよ ねえちゃん
言いたくねえけど 俺は ずっと尊敬してんだよ
今はもっと尊敬してるよ ねえちゃん

母性愛

その夜 俺は熱を出した
夜つつうか真夜中
愛里と LINE してる時 なんか首のリンパがゴリゴリすんなどは思った
それでも愛里がすげえ明るくなって 俺はすげえ嬉しくて
だからそんな気になんなくて
それでも なんかダリいなと思って早めに寝た・・・ら 真夜中
なんかヤベえなって リビングのボード下にある体温計探したら
「ダイチ、どした？」
「どうちゃん、起こしちまった？」
「どした？」
「ちっと熱ある気いしてさ」
「えっ」
「大丈夫だよ、大したことねえよ」
どうちゃんが俺のおでこに手えあてて
「ダイチ、すげえ熱っちいよ」
「寝れば治るよ」
「冷やさねえとよ」
「俺自分でやっからさ」
「ダイチは布団入ってるよ」
どうちゃんがキッチンに行っちゃった
ベッドに戻って体温計脇に挟んで
どうちゃんがアイスノン持ってきてくれた
「熱どんくれえだ？」
「今測ってる」
ピピピ 9度2分 なんか前にも
「高けえよ、ダイチ」
「寝てれば下がるよ」
「どっか痛てえか？」
「熱だけ」
「明日は仕事休んで寝てねえとよ」
「朝になったら下がってっからさ」
「こんなん現場行ったらあぶねえよ」

「それでも」

「俺も休むからよ」

「どうちゃん、それは監督が困るよ、人足りねえのにさ」

「ダイチが熱出してんのによ」

「どうちゃん、稼げるときに稼いでくれんだろ？」

「え・・・」

「俺は明日休む、どうちゃんは現場行ってくれよ」

どうちゃんが心配そうな顔で俺を見てっけど

「ちゃんと寝てっからさ、どうちゃんが・・・稼いで・・・帰ってきてくれんの・・・」

「ダイチ、わかった、もう寝ろ、な？」

「う・・・ん」

アイスノンで頭冷やしてたら フウウウって 寝てた

アラームかけてたんだった

熱測って 8度7分 微妙だぁ

夜中に どうちゃんが何度もこそっと俺の部屋入ってきて

俺のオデコに手えあてて アイスノン換えてくれて

どうちゃん寝てねえんじゃねえか？

水飲みてえな

キッチン行ったら どうちゃんが握りメシ作ってて

「ダイチ、どした？ なんか欲しいんか」

「水飲みにきた」

「熱は？」

「8度7分」

「やっぱ俺、休んだ方がいいんじゃねえか？」

「おっちゃんたちの握りメシ作っちゃまってんじゃん」

「そんじゃ、握りメシ届けて帰ってくっからよ」

「そこまですんなら働いてきてくれよ」

「それでもよ」

「ちゃんと寝てっから、どうちゃんは俺の分稼いできてくれよ」

「そっか・・・ だよな、ダイチの分、稼がねえとな」

「そうだよ」

「ダイチ、握りメシ食べるか？」

「今は・・・」

「そんじゃ、作っとくからよ、食べるようになったらな」

「うん、ありがとう」

部屋に戻って ベッドに横になって

どうちゃんは 俺が小せえ頃熱出すとつきっきりで世話してくれてたよな

俺のベッドの下で寝てさ

「とうちゃん」って呼ぶとパッと起きて「とうちゃんここにいつからな」って
そんでなんか安心して眠れてさ

「ダイチ」

「とうちゃん」

「なんかあったらよ、ぜってえ、ぜってえ俺によ」

「うん、電話すっから」

「そんじゃ、いってくるよ」

「いってらっしゃい」

とうちゃんが心配そうな顔で俺のこと見てて

「とうちゃん、遅れるよ」

「あ、そんじゃな」

「いってらっしゃい」

とうちゃんがゆっくりドア閉めた

汗びっしょりかいて目が覚めた

何時だ？ 13:20

熱は・・・ 7度2分

着替えよう

楽になったな 楽になったら また眠く・・・な・・・

な・・・んか・・・ 玄関のドアが・・・開く音

今 何時だ？ 15:40

えっ とうちゃん 帰ってきちまったのかな

ドア開けて

「とうちゃ」

「あんた、いたの？」

「かっ かあちゃん！」

「バイトじゃないの？」

「かあちゃん、な、なんで？」

「帰ってきただけよ」

「今日帰ってくるって言ってなかったじゃん」

「空席待ちのいちばん早いのが取れたから」

「知らせてくれよ」

「私の家に帰ってくるのになんでいちいち知らせなきゃならないのよ」

「それでも、とうちゃん現場行っちまってさ」

「いいわよ、べつに」

「いいわよって」

「あんたはなぜいるのよ」

「え・・・ 熱出て」
「夜中？」
「え・・・ うん」
「知恵熱」
「なんだよそれ、夏風邪とかそういうんでさ」
「喉は痛い？」
「痛くねえよ」
「鼻水や咳は？」
「出てねえよ」
「知恵熱」
「だからさあ」
「愛里さんのところが落ち着いてホッとしてドッと出たのね」
「え、まあ、それは」
あ そうだ
「かあちゃん」
「だからっ 土下座って、もういいわ、なによ？」
「愛里のこと、愛里のお母さんのこと、いろいろ、本当にありがとうございます」
「結果的には行ってよかったわ」
「マジで本当に、ありがとうございます」
「熱は？」
かあちゃんが俺のおでこに手えあてて
「もう平熱ね」
そう言ってキッチンに入ってっただから 俺も入って
冷蔵庫から炭酸ミネラルウォーター出して
「レモン切ってよ」
「えっ か、かあちゃん、妊娠？」
「バカじゃない？ サッパリしたいだけよ」
「あ、そ、そっか」
冷蔵庫開けて レモン・・・はあるけど 他はなんもねえ
買い出し とうちゃんが帰ってきてからっつうと 俺が行っついて
「かあちゃん、晩メシ何食べてえ？」
「帰ってきたばかりでそんなこと聞かれてもわからないわよ」
「それでも冷蔵ん中なんもねえからさ」
「これは？」
カウンターの上の ラップかかった俺用の握りメシが二個
「とうちゃんが握った」
「ひとつ食べていい？」
「いいよ」
「バカみたいに大きい」
「俺用だからさ」

「フッ 懐かしいけど」
懐かしい？
「あんたは？ 食べないの？」
「あ、そんじゃ一個」
かあちゃんが握りメシ一口食って
「はああああ ホットする」
「かあちゃん、ねえちゃんまで手え貸してくれてさ」
「着いた夜だったかな、電話してね、愛里さんのお母様が更年期症状があるみたいって、
そうしたらいろいろ調べて用意して、私のホテルまで来てくれたのよ」
「そっか」
「来てくれてよかったわ、愛里さんのお母様もすごく落ち着いたみたいだから」
「ねえちゃんすげえな」
「そういうことを目指して勉強してるからね」
「つかさ、愛里のお母さんにパッと心開かせたっつうか」
「ヒトミが言うには、愛里さんのお母様の母性が溢れかえってて」
母性が溢れかえってて？
「思わずその中に飛び込んじゃったら、抱っこするみたいに包んでくれたって」
「え？ あ？ なに？」
「とうちゃんの母性愛に飛び込み慣れてて、つい・・・だって ハハハハ」
とうちゃんの 母性愛？
「カズオって、どっちかっていうと父性愛より母性愛でしょ？」
「え、んなカンジで考えたことねえけど」
「ヒトミが言うには、かあちゃんは父性愛だって ハハハ そうかも」
なんかよくわかんねえけど
メシだけ炊いとくか？ そんでもやっぱ
「かあちゃん、俺、買い出し行ってくっから」
「あんたは熱下がったばかりでしょ」
「そんでも、とうちゃん帰ってきてから買い出しじゃ晩メシ遅くなっからさ」
「いいわよ、遅くなったって」
「そんでも、とうちゃん帰ってきてからだと、とうちゃんバタバタして」
「熱下がったばかりのあんたを買い出し行かせたら、私がカズオに恨まれる」
「恨まねえよ、とうちゃんはかあちゃんのことぜってえ恨んだりしねえよ」
「まあね、そうだけど」
かあちゃんがフツて笑って
「カズオは、あんたのことが心配でたまらないのよ」
「うん、すげえ心配してくれてた」
「小さいときにあんたが熱を出すともう付きっ切りで看病して」
「あ、うん」
「カズオは母性愛が溢れかえってるから」
「え？」

「着替えてくる」

「あ、はい」

どうしよう　とうちゃんに　かあちゃん帰ってきたって電話すっか？

もう三時休憩は終わってるしな　それに俺から電話きたら

とうちゃん　俺になんかあったと思ってあわてて　それでケガとか・・・

やめとこう　米だけ砥いで　炊いとくか

「ダイチ」

「あ？　なに？」

「これは？」

封筒4枚

「とうちゃんの日給」

「それはわかるけど、全然手をつけてないわよ」

「かあちゃんのイチゴ買うくれえはまだあっからって」

「渡しておいた生活費も全然使ってないけど」

「電車はsuicaだし、とうちゃんと俺の晩メシは冷蔵庫の中の」

「あんたとカズオはサバイバルゲームでもしてるの？」

「ゲーム？」

「私がいないと究極の極貧生活みたいなことして」

「や、それでもさ、かあちゃんと愛里がアメリカに行った日」

メッチャ昔に感じんな

「とうちゃん、ラーメン奢ってくれてさ」

「あら、カズオのご馳走じゃない」

「うん、餃子もつけてくれてさ」

「豪勢ね」

かあちゃんは　とうちゃんのラーメンの価値がわかるもんな

「それで、とうちゃんと誓ったっつうか」

「誓った？　何を？」

「愛里のお父さんに、もしものことがあったら」

「愛里さんのお父様に」

「最初とうちゃんがさ、俺の稼ぎじゃ愛里ちゃんのこと養えねえもんなっつうからさ」

「養う」

「そんなときは、俺が高校辞めて働くから、とうちゃん力貸してくれっつってさ」

「高校を辞めて」

「二人でなら愛里のこと養ってけんじゃねえかって」

かあちゃん　なにその無表情な顔？

「それで、いつか、愛里にも、ラーメン食わせてえ・・・　かあちゃん？」

「バカなの？」

「ハ？」

「愛里さんのお父様は、もしものときに愛里さんとお母様が路頭に迷うようなことは」

「それは、そう思うけどさ」

「だいたいね、愛里さんのお父様に何かあったら、高校を卒業するまでは、
私が責任を持ってバックアップします、私は日本での後見人ですから」

「え？ かあちゃん・・・が？」

「私はけっこう稼げると思いますが？」

「それは・・・わかってっけど」

「そんなこと考えてたから、知恵熱なんか出したのよ」

んな言い方しなくても・・・さ

「愛里さんの経済的なことは、今はあんたは心配しなくていいから」

「は・・・い」

「だいたい、愛里さんのお父様は」

顔メッチャ近づけてきた

「いぼ痔だったしね」

かあちゃん 愛里のお父さんのいぼ痔を 話のオチに使わないであげてくれよ

いぼ痔だってけっこう辛れえみてえなんだからさ

生姜焼きの肉

かあちゃんは 少し休むってベッドルームに入って
俺もベッドに横になってたら 眠っ・・・
玄関の・・・ トアが・・・ 開いた音・・・ 足音が・・・
「ダイチ」

とうちゃんが部屋に入ってきて
「熱はどうだ？」

俺のおでこに手えあてて
「もう下がったよ」

「そっか、よかった」
とうちゃんホッとした顔してっけどさ

「とうちゃん、あのさ、かあ」
「なんか食いてえか？ うどんにすっか？」

「生姜焼きが食べたいわ」
「生姜焼きか？ 生姜焼き食いてえのか？」

とうちゃん、今のは俺が言ったんじゃないくてさ
「カズオ」

とうちゃんが声の方に振り向いて
「ただいま」

フリーズ そんでまたゆ〜っくり俺の方見たけど
「とうちゃん、かあちゃん帰ってきたよ」

今度はサッと振り向いて
「ねーちゃん！」

「ただいま」
「あ、え、あの、あ、お、おかえり、なさい」

そりゃビックリするよな 俺だってビックリだったもんな
「とうちゃん、かあちゃん生姜焼き食いてえってさ」

「生姜焼き、そ、そっか、そんじゃ、あの」
とうちゃんが俺の部屋飛び出して そんで 玄関のドアが開いて閉まる音

「ほらあ、とうちゃんビックリしちゃってたじゃん」
「カズオ、お金持ってるの？」

「金？」
「生活費が入った袋、ベッドルームなんだけど」

んっと・・・ とうちゃんは 現場には suica と・・・ 千円札一枚

「あっ 俺、金持ってくよ」

「戻ってくるんじゃない？」

「そんでもさ」

「あんたは今日は外に出ちゃダメよ」

「え、あ、うん」

とうちゃん どの段階で気つくかな レジで気いついたら 戻ってくるか
かあちゃん晩メシ遅くなってもいいつつたしな

とうちゃんは 食材買って帰ってきた

「とうちゃん、金持ってたの？」

「日給」

あ！ それ使ったんか とうちゃんの今日の日給

とうちゃんがレジ袋からイチゴ出して大切そうに冷蔵庫の中に入れた

うちの冷蔵庫にイチゴあるの 久しぶりだな

「とうちゃん、シャワーしてきなよ」

「そんでも遅くなっちゃうからよ」

「俺が生姜すってキャベツ切っとくからさ」

「ダイチはまだ休んでた方がいいからよ」

「そんくれえは大丈夫だって」

「そっか？ そんじゃ急いで入ってくっから」

「うん」

味つけはとうちゃんがやった方がいいよな

俺は・・・ ポテサラ作ろう

「美味しい」

かあちゃんは ホットした～みてえな言い方でそう言って

「カズオのごはん食べると帰ってきたって気分になるわ」

とうちゃんは照れたみてえな顔でかあちゃん見せて

「かあちゃん、この食材、とうちゃんの日給」

「ダ、ダイチ」

とうちゃんが声ひそめて

「え？ なに？」

情けねえ目で俺を見て すげえ微妙に首振った

言っちゃいけねえの？ なんで？

「ねえ、今日のお肉って高級なお肉使ったの？」

なわけねえじゃん かあちゃんなに言ってんの？

「あ・・・ ごめんな、70パー引きのやつ」

「そうなの？　なんかすごく美味しい」

「マ、マジ？」

とうちゃん　メッチャ嬉しそうでさ

「ポテサラは・・・　ダイチね」

「そうだけど」

「でも美味しいわよ」

でもってなんだよ

とうちゃんと一緒に後片付けしてる

とうちゃんは「ダイチは寝てろよ」つつたけど

「もう大丈夫だよ」

「それでもよ、あんな熱出したばっかだよ」

「マジでもう大丈夫だからさ」

「あんまムリすんなよ」

「ムリしようがねえだろ、こんだけなんだからさ」

「そっか？」

とうちゃんが心配そうな顔で俺を見るけど

「小せえ頃もそうだったじゃん、熱出した夜には元気になってさ」

「それでも俺の腰にペタッとくっついてきてよ、まだ具合悪りいんかなって」

「そうやってっと、とうちゃんがいつもおんぶしてくれっからさ」

「今はもうできねえな」

とうちゃんがやっと笑った

「ダイチ」

「ん？」

「俺・・・　肉、買った」

「かあちゃんが生姜焼き食いてえつつったもんな」

「70　パーオフになっててよ」

「いつものスーパーだよな？」

「うん、あんくれえの時間は安くなってっからよ」

「とうちゃん金持っつかねえからさ、俺が持ってこうとしたらさ、

　かあちゃんが戻ってくんじゃねえのって」

戻ってこなかったけど

「レジんところでよ、ケツポケットに手え突っ込んだら日給の袋があってよ」

「それで買ったんだろ？」

「ピッてやるやつあんだろ？」

「うん、会計のやつだろ」

「肉をピッて、そんなときよ、俺、今・・・　俺が日雇いで稼いだ金で」

とうちゃん　顔こわばってっけど

「ねーちゃんに、肉買ってんだって思ったらよ、震えちまってよ」

「なんで？」
「肉なんてよ、俺が稼いだ金で、ねーちゃんに肉って」
それか それでとうちゃん
「夢なんじゃねえかなって」
「夢じゃねえよ、とうちゃん」
「それでもよ、俺が土方やって稼いだ金で、ねーちゃんに肉ってどうなんかなって」
「かあちゃん美味えつつってたじゃん」
「そっか？ そんなじゃ、よかったんかな」
「よかったっつうより、かあちゃんにとっては最高のご馳走なんじゃね？」
「え？」
「とうちゃんが稼いだ金で買った肉でとうちゃんが生姜焼き作ってさ」
「そ・・・ そっかな」
「なんつうか、おかえりなさいパーティみてえじゃん」
「そっか、おかえりなさい、そっか」
「俺までご馳走になっちまってさ」
「ダイチには食わせるにきまってんだろ」
「とうちゃん、ごちそうさま」
「んなよ」
とうちゃんが照れ照れになってフライパン拭いてさ
「とうちゃん、今日が現場の最終日だったんだよな」
「監督さんにちゃんとお礼言っといたからよ」
「そっか」
なんか 淋しいな
「あんない現場でよ、ダイチと一緒に働けてよ、夢みてえだったな」
「とうちゃん、また、いつか、またさ」
「カズオ」
かあちゃん
「お風呂入れて」
「あ、おう」
とうちゃんがバスルームに走ってった
「かあちゃん、愛里はいつ帰ってくるの？」
「愛里さんに聞けばいいでしょ」
「や、んなさ、俺がせつつくみてえなさ」
「私に聞いたくせに」
「かあちゃんなら知ってっかなあとって」
「今ね、夏休み終わりで飛行機のチケット取るの大変なのよ」
「マジ？ そんなじゃ、愛里は、帰ってこれねえっつう・・・こと？」
「始業式までには帰ってくるんじゃない？」
始業式 来週の土曜日か
「それに今帰ってきたって、どうせあんたは月曜日からバイトでしょ」

「あ、そんじゃ辞めた方がいいのかな」
「急に辞められたら現場に迷惑よ」
「あ・・・ うん」
「カズオにいてもらわないとね」
「え？」
「この家はカズオがまわしてるのよ」
「とうちゃんが？」
「私は家事なんてできないもの」
「それはわかってるよ」
「この家の本当の大黒柱はカズオ」
「えっ・・・」
「私は経済担当ってだけ」
「だけじゃねえよ、かあちゃん、なんかあったらサッと問題解決してくれてさ」
マジでさ マジで俺
「愛里のことだって、大山のおばちゃんやねえちゃんまで総動員してくれてさ」
「大山もヒトミもあんたが可愛くてしかたないのよ」
「そんでもさ」
「大山は愛里さんのお母様と気が合っちゃって、来週もランチするみたいよ」
「マジ？」
よかった ママ友だっけ？ 愛里のお母さんそういうの好きだったもんな
「ヒトミがね、愛里さんは感性の塊って」
感性の塊 マジそれ ねえちゃんすげえよ マジそうなんだよ
「ヒトミと会った途端、愛里さんが涙を流したの」
「あ、うん、愛里から聞いた」
「ヒトミが言うには、おそらく私の顔がダイチやとうちゃんに似てるからじゃないかって」
「うん、ホッとしたっつってた」
「森下家をすごく好きでいてくれてるんだなって嬉しかったって」
「森下家には絶対的信頼があるっつってた」
「そう、そんなことを言ってたの」
「うん」
かあちゃんがフツて笑って
「ヒトミが愛里さんに、ダイチのどこが好きなの？ って聞いたの」
「ハ？ ちょ、な、なんで、んなこと」
「愛里さんから聞いてなかった？」
「聞いてねえよ、ねえちゃん、んなことさあっ」
「愛里さん、すごく真面目な顔をして考えてね」
愛里 んなことに真面目に答えなくていいよ
「空気だからって」
それは・・・
「ヒトミが、空気？ 存在薄すって笑ったらね、空気がないと呼吸できなくて」

愛里が俺に言った言葉で
「死にますよねって」
ねえちゃんにも言ったんだ 本気で
「ヒトミ、私に言ってたわよ、ヤラレた感ハンパなかったって」
マジで ずっと そう思ってくれてて
「それで、愛里は感性の塊だねって、私にね」
「そっか」
俺は なんかメチャ感動してて
「美里、風呂入ったよ」
「ありがとう」
かあちゃんが キッチン出てった
「ダイチ、どした？ また熱出てんのか？」
「や、そうじゃなくて」
「アイリちゃんになんかあったんか？」
「なんもねえよ、かあちゃんとしゃべってただけだよ」
「そっか？ なんか涙目になってっからよ」
「これは・・・」
あ そうだ
「とうちゃん」
「どした？」
「かあちゃんがさ、森下家の本当の大黒柱はとうちゃんだっつってた」
「あ？」
ポカンとした顔してっけどさ
「とうちゃんが、この家をまわしてるって」
「ねーちゃん、俺のことからかってんだろ」
「や、マジでそう言ってたよ」
「ねーちゃん、ぜってえ俺のことからかってんだよ」
とうちゃんが かあちゃんを ねーちゃんって呼ぶときは
感覚が若けえ頃に戻っちまってるときで
「とうちゃん、かあちゃん、本気で言ってたよ」
「ねーちゃん俺のことからかうの好きだからよ」
ニッコニコしてっけど かあちゃんは本当にそう言ったんだけどな
「そんで・・・ ダイチはなんで涙目になってたんだ？」
俺の涙目よか かあちゃんが本気で言ったっつうことをさ
「やっぱなんかあったんか？」
「え、や、あ、ねえちゃんが愛里のこと気に入ったみてえでさ」
「ヒトミがアイリちゃんを、だよな、アイリちゃんは可愛いもんな」
「うん」
「ヒトミとアイリちゃん、姉ちゃんと妹みてえだな」
「おおおお とうちゃん、いつか、いつかマジでそうならさ」

「あんたは、子どもみたいに空想の世界ばかり！」

かあちゃん

「美里、どした？」

「スーツケースの中の下着、洗っておいてくれる？」

「あ、うん」

とうちゃんがベッドルームに走ってって

愛里が 俺に あったりめえみてえに下着洗わせてくれる日は 来るのかな？

や、いやらしい意味じゃなくてさ そういう心の垣根つつうかさ

まだ 俺がダメだな 心の垣根とかの問題じゃなくてさ

かあちゃんが出たら 俺もシャワー浴びよう

それまで 勉強すっか

ドーナツのクッション

勉強終わったら

ピコン 愛里だ

『これを見てください』

ピコン 画像

ドーナツのクッション？ ピンクの、なんつうの？ アイシングか
こんなクッション売ってんのか

『愛里が買ったの？』送信

ピコン

『ちがいます』

ピコン

『ママがパパ用に NET で買いました』

お父さん用？

ピコン

『ドーナツ型だと楽なんだそうです』

いぼ痔用か そっか ケツの穴が当たらねえようにか

ピコン

『パパがやっと椅子に座れるって箱を開けたらこれで wwwww』

ピコン

『会社用にもって二個』

ピコン

『パパは会社にこれはどうかなあって w』

ピコン

『ママはどうせなら可愛い方がいいでしょって w』

愛里から伝わってくる空気が 穏やかで楽しそうになってて
よかったなあ

ピコン

『今日は大山さんが』

大山のお婆ちゃん？

ピコン

『ママと私をショッピングに連れていってくれるそうです』

そっか 大山のお婆ちゃんありがとう

ピコン

『大山さんが うちの娘は』

ピコン

『土日はカレシのところにお泊りだからって』

カレシの ところに お泊りー？ 俺や愛里と同年だよな
アメリカって そういうことフツツーなんかな

ピコン

『大山さんが 愛里ちゃんは大一くんのところにお泊りするの？ っ』

大山のおばちゃんっ

ピコン

『何度か泊まりましたって言ったら』

へ？ 愛里？

ピコン

『ママがエー——ッ？ っ』

ピコン

『ママから大泣きで電話があった夜』

ピコン

『私が不安定だったから』

ピコン

『おかあさんがヒトミさんの部屋に泊めてくれたのって言ったら』

愛里 愛里の中のお泊りは・・・ マジの宿泊なんだな

ピコン

『ああそうなのそうよねえよかったわって』

愛里のお母さん 俺はそこはキッチリわきまえてるんで 信じてくださいっ

ピコン

『ママのせいでって言いそうになってやめましたけど』

マジで俺 がんばってますからっ

ピコン

『寝ちゃった？』

『起きてるよw』送信

ピコン

『あなたへのおみやげは何がいいのかなって』

んなこといいよ 愛里が帰ってきてくれるだけでさ

『せっかくお母さんと買い物なんだからさ』送信

『俺のはいいから愛里の物買えよ』送信

ピコン

『私がこっちに来るとき』

ピコン

『おみやげなって言ってたでしょ』

あれは・・・

ピコン

『難問はおとうさんで』

とうちゃんか

ピコン

『物欲ゼロの人に何をあげたら喜ぶのかな』

とうちゃんも愛里が帰ってきてくれればそれでさ

ピコン

『あなたとおとうさんにおみやげを買うのは』

ピコン

『超難問の挑戦だから』

挑戦？

ピコン

『それはそれで燃えます』

『んなことで燃えんなよ www』 送信

ピコン

『おかあさんは もう帰りましたか？』

え？

『帰ってきた』 送信

ピコン

『昨日の朝 空港から電話があって』

なんだよ 愛里には言ってたんかよ

ピコン

『私も一緒に帰りたかったって言ったら』

一緒に帰ってきてほしかったよ 愛里

ピコン

『今はお父様とお母様との時間を大切にねって』

だよ・・・な いろいろあって そんで今やっといいカンジになってんだからさ

『かあちゃんの言うとおりだよ』 送信

『せっかくお父さんとお母さんといるんだからさ』 送信

『三人でゆっくり過ごした方がいいよ』 送信

ピコン

『本気で言ってる？』

え・・・

『本気で言ってるよ』 送信

ピコン

『そうですか』 送信

ピコン

『なんか』

ピコン

『もういいです』

もういいって？

『愛里 もういいって なに?』送信

ピコン

『それじゃ』

それじゃ?

『愛里 なんか怒ってる?』送信

『俺 なんか言った?』送信

『そうなら言ってくれよ』送信

既読つくけど 返信来ねえ

『愛里』送信

ピコン

『私はあなたがケガをしたことを知りませんでした』

え?

ピコン

『おかあさんから聞いて初めて知りました』

それはさ

『マジでかすり傷だったからさ』送信

ピコン

『現場監督からメールがあったって』

ピコン

『かすり傷なのに?』

それはさ

『とうちゃんが軽いヒザの打撲で労災扱いになったからでさ』送信

ピコン

『おかあさんから あなたがケガをしたって聞いたときの』

ピコン

『私の気持ちわかる?』

それは

『愛里に心配かけたくなかっただけだよ』送信

ピコン

『心配しちゃいけないの?』

それは

ピコン

『他に私が知らないことはどれくらいあるんですか?』

え?

ピコン

『私に心配かけちゃいけないって言ってないこと』

愛里?

ピコン

『あなたが言ってくれないと私は何もわからないのに』

ピコン

『心配かけちゃいけないって私に言わないって』

ピコン

『私はあなたの何?』

何って

『愛里は俺の大切な人だよ』送信

ピコン

『三人でゆっくり過ごした方がいいって言ったのに?』

それは

『愛里のお父さんとお母さんもさ』送信

『愛里と一緒にいれなくて淋しかったらさ』送信

ピコン

『あなたは私の保護者?』

じゃねえよ じゃなくてさ

ピコン

『私はあなたが心配してるだろうから』

ピコン

『できるだけ全部あなたに伝えようと思って』

ピコン

『でも あなたは』

ピコン

『私を心配させたくないって』

ピコン

『なんにも言ってくれない』

ピコン

『もういいです』

愛里 もういいってさ よくねえよな

『愛里』送信

『ケガのこと愛里に隠してるつもりは

つもりは・・・ あった 削除

『ケガのこと愛里に言わないでごめん』送信

『心配させたくねえとか勝手に思ってさ』送信

『ごめんな』送信

既読 つかねえ

『愛里?』送信

つかねえ

“私はあなたが心配してるだろうから”

“できるだけ全部あなたに伝えようと思って”

だよな 愛里が一生懸命いっぱい伝えてくれたから

俺は少しずつホッとして どんどんホッとしてってさ

愛里が向こうに行って最初の頃

俺が送った LINE に既読はつくけど返信がなくて
それは愛里は今大変なときだからだって
それでも 本音は 淋しくてさ 淋しいって思っちゃいけないって
淋しいって言っちゃいけないって
ケガのことだって
本当は「ケガしちゃったよ w」って言いたかった
なのに 俺は 本当は 俺は
“他に私が知らないことはどれくらいあるんですか？”
“私に心配かけちゃいけないって言ってないこと”
メッチャある
愛里に言いてえこといっぱいあってさ
関西の人春男さんのお母さんに会ったよとかさ
そのお母さんはあと 3~4 ヶ月って言われたんだってさとか
それでも明るくて 俺に絶対死なねえつつってくれたんだよとかさ
そういうこと 今の愛里には言っちゃいけないって どっかで思ってた
いつ帰ってくんのかさえ聞けなくてさ
お父さんとお母さんと三人でゆっくり過ごした方がいいって
それはそれで そう思っているけど それでも 本当は
早く帰ってきて欲しくて
愛里に言いてえことメッチャあるよ 言ってねえことメッチャあるよ
『愛里 ごめんな』送信
『愛里に言いたくて言えなかったこと』送信
『メッチャある』送信
『いつもいつも愛里に聞きたかった』送信
『いつ帰ってくんの？ って』送信
『いつもいつも愛里に言いたかった』送信
『早く帰ってきて欲しいって』送信
『愛里がいなくて淋しいって』送信
『本当は愛里にアメリカ行って欲しくなかった』送信
『それでもそれはしかたねえことだから』送信
『だったら俺も愛里と一緒に起きたかった』送信
『俺はかあちゃんみてえなこと なんもできねえけど』送信
『ずっとずっと愛里のそばにいたかった』送信
『愛里が送ってくれるのを読んでるんじゃないって』送信
『そのとき愛里のそばと一緒にいたかった』送信
『俺はなんもできねえのにさ』送信
『俺 夜中に熱出した』送信
『かあちゃんから知恵熱って言われた w』送信
『愛里のお母さんのことが落ち着いてホッとして熱出したんだって w』送信
『俺 愛里がアメリカ行くとかアメリカ行ってるって熱出す w』送信

『ガキだな w』送信
『ガキだけどさ 愛里のこと すげえ好きでさ』送信
『ガキのくせにさ』送信
『かっこつけてた』送信
『ほんとは 愛里に会いたくて淋しくて死にそうです』送信
『んなこと言われても愛里が困っちゃうよなって』送信
『ガマンしてたら 熱出した w』送信
『メッチャ器小せえ w』送信
『イチゴ一粒しか入んねえ w』送信
『それでも』送信
『愛里に 俺が買ったイチゴ食わせてえから』送信
『早く帰ってきてくれよ』送信
『俺のイチゴ食ってくれよ』送信
『上原愛里さん』送信
『あなたがいないと俺は』送信
『泣いてばっかです』送信
マジで泣いてばっかだよ 愛里
あっ 既読ついた
今 愛里 読んでるんだよな
返信くれるかな
既読スルーしたら 淋しいから既読スルーしないでくれって 100 回送る
ピコン
来た
『ごめんなさい』
ピコン
『私 淋しいがいっぱいになっちゃって』
ピコン
『怒っちゃって』
ピコン
『あなたは悪くないのに』
俺が悪りいんだよ 本音言わなくてさ
ピコン
『でも あなたが淋しいって言ってくれて』
ピコン
『早く帰ってきてって言ってくれて』
ピコン
『私も今』
ピコン
『泣いてます』
愛里 俺も泣いてるよ

ピコン
『森下大一さん』
ピコン
『あなたがいないと私は』
ピコン
『呼吸ができません』
愛里 愛里・・・
『早く帰ってこいよ』送信
『俺 淋しくて死んじゃうよ』送信
ピコン
『死んじゃうって wwwww』
『愛里 好きだよ』送信
ピコン
『私も』
ピコン
『飛行機のチケットは空席待ちで』
やっぱそうなんか
ピコン
『大山さんがいろいろ手配してくれています』
大山のおばちゃん お願いします
ピコン
『それじゃ そろそろ大山さんが来るから』
ピコン
『あなたのおみやげ ちゃんと買いますから w』
『メッチャ楽しみにしてます w』送信
ピコン
『ドーナツのクッションでも？』
『可愛い俺の部屋にピッタリじゃん』送信
ピコン
『笑う www』
ピコン
『知恵熱 お大事に』
『そうっすよ 愛里のせいでまた知恵熱っすよ w』送信
ピコン
『知恵熱出したって』
ピコン
『おしえてくれてありがとう』
ピコン
『私にも 心配させてください』
愛里

『心配してもら う これからは』送信

ピコン

『はい』

ピコン

『いってきます』

『愛里 いってらっしゃい』送信

愛里

俺は もっともっと愛里のことが好きになってってさ

怖えくれえ 好きになってってさ

愛里 本音言わせてくれて ありがとう

フライト便決定

朝 目え覚めて 携帯見たら 愛里から LINE 入ってた
ヤベ 爆睡してたよ 03:20 つうことは向こうの午後2時くれえか
『大山さんがチケットが取れたって』
マジ？
『こっちを発つのが月曜日の 14:25 で日本には火曜日の 15:59 着』
火曜日の夜9時か マジか マジだ メッチャ嬉しい
『ビジネスクラスを取ってくれたそうです』
マジ？
『あなたのおかあさんがそうするようになって』
かあちゃん ありがとう
『愛里 迎えに行くからな』送信
『メッチャメッチャメッチャ嬉しい！』送信
火曜日は バイト休むっきゃねえな
一回家に帰ってシャワー浴びねえとき
顔洗おう

キッチン入ってたら
「ダイチ、おはよう」
「どうちゃんおはよう、愛里がさ」
「アイリちゃんがどした？」
「火曜日に帰ってくるって」
「そっかあ、よかったな」
「火曜日バイト休んで迎えに行く」
「俺行こっか？」
「空港？」
「現場」
「なんで？」
「今よ人足んねえだろ、ダイチに休まれたら困んじゃねえか？」
「あ、だよな」
「俺が現場行くからよ、ダイチはアイリちゃん迎えによ」
「どうちゃん、ありが」

「あんたは！」
かあちゃん？
「バイトを親に任せるくらいなら辞めてしまいなさい」
「んな、あと5日だからさ」
「だったら行きなさい」
「それでも愛里の迎え」
「私が行きます」
「かあちゃんが？」
「火曜日ならミーティングもないし、午後からなら早退できるから」
「俺、愛里に迎えに行くって言ったんだけど」
「あら、愛里さんは私ではイヤだと言ったの？」
「言ってねえけど」
「立つ鳥跡を濁さず」
「ハ？」
「あと5日なら、余計にしっかりと働いてきなさい」
「あ・・・ はい」
仕事ってなると かあちゃん厳しいんだよな
「とうちゃん、俺、愛里の部屋掃除してくる」
「そっか、うん」
とうちゃんが目で俺にごめんなって
ちげえよ とうちゃんのせいじゃねえよ
「なにを二人で見つめ合ってるの！」
なんだよ んな鬼軍曹みてえにさ

愛里の部屋

全然使ってねえからきれいなんだけど 薄っすら埃は溜まっから
掃除機かけて フローリング拭いて たたきも水拭きして ベランダも
あさって 愛里がここに帰ってくる 帰ってくるー！
あ 巻き寿司 あさって 仕事終わってから 巻き寿司か
それでも作りてえじゃん 約束したんだからさ
おーっし 掃除終わった
ピコン 愛里だ
『フライト便が変更になりました』
え？ どういうこと？
ピコン
『明日の こっちの明日の 16:55 発で日本の月曜日の 20:10 着』
えっ 明日？ あさってじゃなくて明日？ マジ？ マジっすか？
ピコン
『大山さんが』

ピコン

『後輩が日本に行くチケットと交換してもらったって』

大山のお婆ちゃん！ メッチャ感謝です！

ピコン

『成田からはシャトルバスで帰るので迎えに来なくても大丈夫です』

行くよ 行くに決まってんじゃん

『迎えに行く』送信

あれ？ なんで返信ねえんだ？

『愛里？』送信

え？ なんで？

『愛里どした？』送信

なんかあったのかな 急だからお母さんが不安定になっちゃったとか？

ピコン

『ごめんなさい』

ピコン

『今あなたのおかあさんから電話があって』

かあちゃん？

ピコン

『明日迎えに来てくれるそうです』

かあちゃんが？ つか、かあちゃん なんで知って・・・ 大山のお婆ちゃんか

ピコン

『夜だからって』

そうだよ 夜一人でシャトルバスは乗せらんねえよ

ピコン

『あなたはバイト最後の5日だし』

ピコン

『現場は人手不足で迷惑をかけられないからって』

かあちゃんさあ

ピコン

『私もあなたにはちゃんと仕事して欲しいから』

え？

ピコン

『おかあさんに甘えます w』

『わかった』送信

『ちゃんと仕事します』送信

『頑張って仕事して』送信

『愛里が帰ってくんの待ってっから』送信

ピコン

『待っててください』

ピコン

『それじゃ おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

ヤッ ター—————！

明日帰ってくる 愛里が明日帰ってくる！

掃除してよかったあ

家帰ろう

玄関ドア開けたら

「愛里さんから聞いた？」

「聞いた」

「そういうことだから」

「うん」

「そりゃね、エコノミーをビジネスクラスと取り換えてくれって言ったら」

え？

「しかも一日は特別休暇にしてあげるって言ったら」

マジで？

「大喜びで取り換えるわよね」

「かあちゃん、そこまでしてくれたの？」

「大山がね、事後報告だけどね」

「かあちゃん、ありがとう」

「大山も気が利くっていうか、利きすぎるっていうか、まあいいけど」

大山のお婆ちゃん！ ありがとう

「空港まで大山が送ってくれるそうよ」

「マジ？」

「お父様は運転はまだ無理だし、お母様もまだ道がね」

そっか

「愛里さんが大山に、早く帰りたいんですって何回も言ってたんですって」

愛里 そこまで・・・ 愛里 俺も早く帰ってきて欲しかったよ なのにさ

「迎えは私が行くから」

「愛里から聞いた」

「私の会社からなら、シャトルバスがある駅まで近いしね」

だよな

「あの時間じゃ一人ではね」

「うん」

「あんたの現場からだど・・・ ギリでしょ」

ん・・・と

「直で行ってギリ間に合うくれえかな」

「あの恰好で迎えに来られてもね」

「ハ？」

「あんな泥だらけで臭っさいのが立っててもねえ」
「俺はちゃんとシャワー浴びて着替えていくつもりだったし」
「バイト、ちゃんとやるんでしょ」
「あ、はい、かあちゃんお願いします」
愛里が帰ってきてくれんならさ
こんだけ待ったんだからさ 数時間くれえどうってことねえよ

とうちゃんと買い出しに来てる
「キャベツとか野菜はよ、明日商店街の八百屋でもらってくっから」
「そっか、そんじゃ、肉とか・・・」
「アイリちゃんのイチゴ買わねえとよ」
「だよな、あとは・・・ ヨーグルトも」
ヨーグルト売り場に あれ？ 豆乳ヨーグルト
愛里も生理痛ひでえから ふだんからイソフラボン摂ってた方がいいんじゃないかね？
なんで今まで気いつかなかったかな 生理んときのことばっか考えてたからだ
「とう・・・にゅう・・・つつうのは、あれか、大豆か」
「女の人の身体にいいじゃん」
「アイリちゃん生理なんか？」
「じゃねえけど、愛里のお母さんが更年期症状あってさ」
「更年期も大変みてえだなあ」
「ねえちゃんが大豆食品摂るといっつつったんだってさ」
「ヒトミが」
「ふだんから摂ってたならもっといんじゃないかねえかなと思ってさ」
「そんじゃ晩メシは・・・ 麻婆豆腐にすっか」
「俺はとうちゃんの好きだけど、なんで？」
「美里」
かあちゃんはまだ更年期じゃ・・・ あ、それでも今からやっつけば
「だよな、とうちゃん、今からさ」
「納豆もか」
「かあちゃん好きだもんな」
愛里は・・・ どうなんだ？ 納豆出したことなかったな
好きだよな 日本人だもんな
「ダイチ、アジが安くなってんぞ」
「おおお メチャ安い」
「アジの塩焼きにすっか」
「だな」
あとはすり身にしておいて 愛里が好きだもんな
「とうちゃん、やっばさ、食ってくれる人がいると作る気になるよな」
「だな」

久しぶりに保冷バッグパンパンにして 家に帰った

晩メシできた

「かあちゃん、晩メシできたよ」

かあちゃんがベッドルームから出てきて

「え？ なに？ なんか・・・」

顔しかめてっけど どした？

「ダイチの足の臭いがする」

「俺の足の匂い？」

「なんか・・・ 臭い」

「臭せえ？ なわけねえよ、俺ずっと裸足だったし出かけるときはギョサンでさ」

「ああああ！ 納豆！」

ハ？

「これだ」

「かあちゃん納豆好きじゃん」

「好きだけど、玄関開けるとあんたのゴム長の臭いがして」

「ハァァァ？」

「美里、卵と混ぜるとよ」

「あ、そうね」

とうちゃんが納豆に卵混ぜてっけどさ

俺の足の匂いってさ

「はあああ、青のりと卵で緩和されたわ」

緩和って

「もう少しで納豆が食べられなくなるころだった」

「かあちゃん、俺の足の匂いって」

「言わないで！」

かあちゃんが言い出したんじゃん

「アジの塩焼きも美味しい」

とうちゃん 嬉しそうな顔してっけど

「愛里さんも早く食べたいでしょうね」

「それでもあれだろ？ 日本食の弁当届けたんだろ？」

「まあね、あれはあれで美味しいんだけど、家庭の味とは違うからね」

「そっか、だよな」

だよな 早く愛里にメシ作って食って欲しい

「明日は愛里さんに何を食べさせるの？」

「んっとはさ、巻き寿司にしてえんだけど」

「巻き寿司いいわねえ、カズオの巻き寿司食べたいわ」

とうちゃんのじゃねえよ とうちゃんの美味えけどさ

「でも帰ってすぐはフツツの方がいいわよ」

「フツツ？」

「おにぎりとか、生姜焼きとか」

「生姜焼きは昨日食ったじゃん」

「たとえばよ」

「他には？」

「ヒトミはどうちゃんのオムライスが食べたいって言ってたわ」

「オムライス？」「俺の？」

「でもねえ、飛行機下りてすぐにオムライスはキツイかな」

なんの役にも立たねえ情報だった

「はあああ、麻婆豆腐も美味しい、辛すぎず甘すぎず」

「美里は中辛」

「そうね」

なんか 俺がいたらジャマみてえな空気になってっけど

明日 愛里が帰ってくる

あさってからはまた弁当作ってさ

なんかメッチャやる気出てきた

小遣い

月曜日の朝

シャキッと目が覚めた

顔洗って 作業服着て

キッチンに行って

「どうちゃん、おはよう」

「ダイチ、おはよう」

どうちゃんはおっちゃんたちの握りメシとかあちゃんの弁当作ってる

そっか そうだった 今日からどうちゃんと一緒に現場行かねえんだった

「ダイチ？ どした？」

「ん、今日からどうちゃんと現場行かねえんだなって」

「ダイチと一緒に働けてよ、楽しかったな」

「俺も、どうちゃんと・・・」

愛里がアメリカに行ってから 俺のそばには いつもどうちゃんがいてくれて

メソメソしてる俺のこと慰めてくれて ボキボキに折れそうな心を支えてくれて

どうちゃんがいなかったら俺・・・

「ダ、ダイチ？ なんで泣いてんだ？ また具合悪くなったんか？」

「どうちゃん・・・ 愛里がいねえ間・・・ 俺のこと支えてくれて・・・」

「俺はなんもしてねえよ」

「どうちゃんいてくんなかったら俺・・・」

「ダイチ」

どうちゃんが俺の手えにぎって

「どうちゃんここにいっからよ」

ニッコリ笑ってさ

「うん」

俺は鼻水袖で拭いて どうちゃんが握った握りメシホイルに包んで

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

どうちゃんが俺の手の上に握りメシ置いてくれて

俺はそれ食って

「やっばどうちゃんの握りメシ美味え」

「そっか？」

「どうちゃん、俺、これ食って頑張って働いてくっからさ」

「ダイチは大丈夫だよ」

「おう、俺はどうちゃんの息子だからさ」
どうちゃんが優しい顔で俺のこと見て 俺の頭クシャクシャッて撫でて
「あっ ダイチ、メシ粒ついちまった」
「え? どこ?」
「ちょ、ちょっと頭」
頭をどうちゃんの方に向けて
「サルのシラミ取り?」
えっ かあちゃん?
「美里おはよう」「かあちゃんおはよう」
「おはよう」
「美里、コーヒー?」
「自分でやるから大丈夫よ」
「かあちゃん、今日早くね?」
「今日は定例取締役会議と事業部のミーティングがあるの」
「そうなんか」
「早めに行って、いーっばい溜まってる書類に目を通しておかないとね」
かあちゃんがカップにコーヒー注いで
「一週間も休んだからね、山ほど溜まってるんでしょうよ」
「あ・・・ かあちゃん、なんつうか、あの」
「向こうでも仕事はしてきたから丸々休んでたわけじゃないけどね」
「かあちゃん、あの、マジであります」
「あんたもしっかり働けよ」
「あ、はい」
「愛里さんの迎えも任せて」
「お願いしやす」
かあちゃんがキッチン出てった
「そんじゃ俺、いってくるよ」
保冷バッグ持って玄関へ
「ダイチ、行ってらっしゃい」
どうちゃんは玄関まで来てくれて
「どうちゃん、いってきます」
リビングの方にも
「かあちゃん! いってきまーす!」
「行ってらっしゃーい!」
玄関出た

一人で電車の中
先週は俺の横にはどうちゃんがいてさ
今日からは一人だ もともと俺だけのはずだったんだけどさ

電車のドアの窓から空見て
愛里はもう飛行機乗ってるよな 今夜帰ってくんだよな
愛里は俺にちゃんと仕事して欲しいって ちゃんと仕事するよ愛里
愛里のために いつか愛里を養っていける男になりてえから

現場着いたら

「だいづ!」「だいづ!」「ダイちゃん!」
おっちゃんたち
「熱出たってえ?」「もいんだが?」「もう大丈夫なの?」
「もう元気っす」
「そんだなあ、元気そうな顔してっぺ」
「今日からまた5日間がんばるんで」
「5日間?」「なすていづががん?」
「俺のバイト、31日までなんで」
「あ・・ ああ、そっかあ」「んだな」
「メッチャがんばるんで、よろしくお願いしやす」
「だいづはこれ以上どうがんばんだした ワハハハ」「がんばってらべ」
「森下、もう大丈夫なの?」
「監督、土曜日はすいませんでした」
「カズオさんが来てくれたから助かったよ」
「今日からあと5日、よろしくお願いしやす」
「そうか、あと5日か」
「おいっす」
「それじゃ、みんな、今日もよろしく」
「おいっす」「あいよ」「おう」「はい」
よーっしゃ がんばろう

昼休憩

「だいづ、おっかあのおかず」
「いただきます」
これ、卵焼きの中に納豆入ってる
「ヤッさん、これって納豆っすよね」
「納豆の賞味期限切れっちまって、もったいねえからって、おっかあがな」
納豆と長ネギか 醤油と出汁か
「美味えっす」
これは家でも作れるな 愛里が好きそうだな
「わのもけへ」
これは・・ 大豆とニンジンとレンコンとこんにゃくと昆布?

「あ、美味え」
「わのいながの」
「郷土料理っすか」
「そっだすげもんでねや、かっちゃんがチャチャッとや」
大豆はひじきに入れるだけだったもんな こうやって食えば根菜も食えるしな
「俺の女房が昔作ってたのはさ」
ショーさん んな話すんの初めてだよ
「油揚げの中に納豆とネギ混ぜたの入れてトースターで炙って大根おろしでね」
「やあ、そりゃ酒進みそうだったぺ」
「そうなんだよ、晩酌のときに作ってくれてさ」
すげえ 納豆と大豆の料理 メッチャ広がる
「だいつ、携帯見なくていいのけ？」
「え？」
「あえるちゃんがらきでんでねのが？」
「毎日愛里ちゃんから連絡来てるよね、愛里ちゃんもダイちゃんが恋しいんだね」
「だいつもお、ずーっと携帯見てはあ、今日もお来てんでねえのお？」
「それが、愛里、今日帰って来るんす」
「今日？」「わいわいわい」「そうなんだ、よかったね」
「そんじゃ、迎えにいった方がいんでねえのお？」「んだな」
「夜の8時くれえに着くんす」
「ああ、夜行でなあ」「んだば危ねべ」「バス停まで迎えに行っておけるんだろ？」
バス停？ シャトルバスのことか
「こっからだ直で行ってギリなんで、かあちゃんが行ってくれるんすよ」
「お母ちゃんがあ、そんならなあ」「いがった」
「愛里ちゃんのお父さんは落ち着いたの？」
「愛里のお父さんは手術成功して、お母さんも落ち着いたって」
「よかったな」
「愛里があ、早く帰りてえつつって」
「いんやいんや、ノロケ始まったした」「わい、熱っちじゃ」
「いや、ノロケじゃねえんすけどお」
「だいつの顔があにやけてっぺ」
「そうっすかあ？ んなことねえっすよお」
「あいりちゃんのことになっとお、だいつは日なたのアイスみてえになるした」
「日なたのアイス？」
「デロ〜んてはあ」「んだ ワハハハ」
「ダイちゃんは可愛いな」
「ショーさん、可愛いって、俺もう16なんだからさあ」
「まんだ16だっぺ」「まだわらすだ」「俺らから見たら可愛いんだよ」
「そうっすか？ まだ人生経験足りねえっすよね」
「これからだあ」「んだ」「ダイちゃん将来どうなるのかな、楽しみだな」

「いっちょ前の、とうちゃんみてえな男目指してがんばりやすっ」
なんか ヤッさんたちとこうやってしゃべるのも久しぶりだな
休憩ときは愛里からの LINE 見たり送ったりだったもんな

あと少しで今日の作業は終わり

帰ったらシャワー浴びて・・・ 愛里なに食いてえかな
え？ 電話？ かあちゃん

「かあちゃん、どした？」

「愛里さんの迎え、行けなくなっちゃったのよ」

「えっ？」

「いろいろ立て込んで、残業決定」

「そ、そんな、どうすんの？」

「あんた、そこから真っ直ぐ行って」

「え、あ、わ、わかった、俺が迎えに行く」

え・・・ あれ？ あっ

「かあちゃん、俺、金持ってねえ」

「ハア？」

「suica と三千円っきゃ持ってねえ」

suica もそろそろチャージしねえとってカンジでさ

どうすりゃいいんだ？ んっと・・・ パニックってなんも考えらんねえ

「あんたは今日一日何をしていたのよ」

「何って、仕事してたよ、ちゃんとやってたよ」

「その日給をもらえばいいでしょ」

「俺は週払いにしてもらってっからさ」

「今日の分だけ日給にしてもらえばいいでしょ！」

「あ・・・ そっか」

「それなら足りるでしょ」

「足りる、うん、足りる」

「それじゃ、頼んだわよ」

「わかった」

監督室に駆け込んで

「監督！」

「森下、どうした？」

「今日の分の日給もらえませんか」

「森下は週払いだったよね」

「愛里のこと迎えに行く金がねえんす」

「金がない？」

「suica と三千円っきゃ持ってねえんす」

「迎えって、成田まで？」

「そうっす、かあちゃんが行くはずが残業になっちまって」
「そうか、わかった」
監督が手提げ金庫開けて・・・
よかったあ ふつうの会社ならできねえよな 日雇いだからさ
「はい、今日の分」
「ありがとうございます！ マジ助かります！」
「俺の金じゃないけどね、森下の日給だけどさ」
「ここで働いててよかったっす」
「そう、早く行ったら？」
「おいっす」
「それじゃ明日もよろしく」
「はい！ 失礼します！」
監督室の扉閉めて よかったああああ
「だいづ」「だいづ」「ダイちゃん」
ヤッさんとスギさんショーさん
「だいづがあいりちゃんを迎えに行ぐのお？」
「かあちゃんが残業になっちまって」
「ほんでえ、金、ねえんだっぺ？」
「監督から今日の分もらったんで」
「ほんでもなあ」「んだな」「何かのときにな」
何かのとき？
「これなあ、少ねえけんちょ」「わんつかだぼって」
え？ クシャクシャの千円札三枚？
「これは・・・ なんすか？」
「俺たちからあ、なんつうんだあ」「餞別でねが？」「お祝いだよ」
「そんだあ、ショーさん、いいこと言うっぺ、お祝いだした」
「なんのっすか？」
「あいりちゃんがあ帰ってくるお祝いだっぺ」
「や、んな、いいっすよ」
「帰りにいあいりちゃんとお、なんだ？ あれ、コーヒー、コーヒーでも、なあ」
「菓子でもや」「少しだけどさ」
「ショーさんも？」
「千円、ダイちゃんにももらったお返しだよ」
「ショーさん、お返しなんていらねえよ」
「だいづ、俺たちはあ、だいづのこと息子みてえに思ってたんだあ」「んだ」
え・・・
「とうちゃんたちからのお小遣いだっぺ」
こ・・・づかい
「俺たちだってなあ、たまにはあ息子に小遣いやりてえんだあ」「んだ」
「ダイちゃん、もらってくれよ」

「んな・・・小遣いって・・・」
「だいつはあ、すんぐ泣いてはあ」「なぎつつでや」
「俺は・・・俺は、どん底のど貧乏じゃねえんだよ」
「だいつは違うした、ポロは着てても心は錦だったべ」「んだ」
「や、だから」
「せーっかくあいりちゃんと会えんだからあ、ちっとはなあ、かっこつけてなあ」
「奢ってやれば、惚れなおされんでねが」
「そんじゃ・・・これ・・・」
「とうちゃんたちからのお、小遣い」
俺はもう・・・立ってらんなくて
「なんで・・・こんなに・・・」
「たいづが可愛いからだっぺ」「めごぐでや」「それだけだよ」
「とうちゃんたち・・・」
見上げたら 三人が優しい顔で俺のこと見てて
「小遣い・・・ありがとう」
「だいつ、ほれ、早く行かねえとお」
「あ、はい」
立ち上がって そんで
「ありがとうございます！」
「いいがらあ」「なんもさ」「愛里ちゃんのところに行かないと」
「はい、いってきます」
クシャクシャの千円札三枚持って 日給入った封筒持って
愛里を迎えに 行く！

シャトルバス

シャトルバス乗り場

「空席ありますか？」

「あります・・・けど」

けど？

ん？　なんか横見て　どした？

「一枚」

「ちょっとよろしいですか」

え？　誰？　警備員？　なんかあったんかな

「どちらへ行かれるんですか」

どちら？

「ここって成田行きのバス乗り場っすよね？」

「成田へ行かれるんですか」

「はい」

「成田でなにを？」

なにを？

「カノジョが帰ってくるんで迎えに行くんす」

「迎えに」

「そうっす」

だからこのバスに乗らねえとき

「ちょっとこっちに」

え？　脇の方に

「俺、このバスに乗るんすけけど」

「カバンの中を見せていただくことができますか」

カバン？　保冷バッグ？

「いいっすよ」

やっぱなんかあったんかな　それでも聞かれてんの俺だけなんだけど

「なぜ空のペットボトルを持っているんですか」

なぜ？？？

「こん中に水入れて凍らせるとずっと冷てえのが飲めるんすよ」

「水」

「現場で」

「現場とは？」

「工事現場っす」

俺のこと上から下までジーッと見てっけど

「身分証明できるものは持ってますか？」

「身分証明？」

「免許証とか」

「俺、高校生なんで免許証は持ってねえっす」

「コーコーセー？」

なんでそんな驚くんだ？

「そうっすけど」

「では、学生証は？」

「持ってねえっす」

う～んみてえな顔されてもさ

バスの列できてんじゃん 空席なくなっちゃうよ

ん・っつ あ！ ケツポケットから日給の袋出して

「俺、ここでバイトしてるんすよ」

「菱谷建設・・・ですか」

「あさひ町で今やってるんすよ」

「そうですか、はい、わかりました」

「もういいっすか」

なんか目で案内の人と・・・ なんだ???

「いいですよ」

なんだったんだ？ ヤッペエ これに乗れなかったら間に合わねえよ

列に並んで 俺の前の人が ゆ～っくり振り向いて俺のこと見たんだけど？

なんだ？ 俺がテロとかやりそうに見えるのかな？ やんねえよ

ヤベエヤベエヤベエヤベーーーーーッ

途中で渋滞に巻き込まれて 乗客の人たちイラついてた

イラついてもしかあねえんだけど そんなもさ

ライナーなら渋滞とは無縁だけど ライナー出てる駅までが遠かったからさ

もう愛里が乗ってた便はとっくに着いちまっているよ

到着ゲートの中に入ろうとすると 次々キャリーケース持った人たちが出て来る

ゲートん中を走って あっちか？ あっちだ

あれ？ あ！ 愛里・・・だよな 愛里だ！ 全速力で走っ え？ 誰かに手え振って

誰に？ 俺にじゃねえよ えっ エーーーーッ かあちゃん？

愛里がかあちゃんのところに向かって なんかかあちゃん？

「かあちゃん！」

かあちゃんがこっち見て 愛里も 愛里メッチャきれいいだ

「愛里」

「遅かったわね」
「かあちゃん、なんでいるんだよ？」
「あんたの現場からだと本当にギリだなと思って、なんとか抜けてきたのよ」
「そんじゃ知らせてくれよ」
「どうせ来ると思ったから」
「来るよ、行けつつったのかあちゃんじゃん」
「フッ ハハハハハ」
愛里？
「なんか、帰ってきたってカンジです」
「愛里」
そばに行って
「おかえり」
「ただいま」
愛里のこと抱き・・・ かあちゃんがいる 目が合った
「私はチケットを買ってくるわ」
かあちゃんがチケットカウンターの方に歩いてった
「愛里」
抱きしめて
「コホッコホコホッ」
「愛里、どした？ 風邪？」
「あ、いえ、あの、久しぶりだったから」
久しぶりだったから？
「今日もすごく働いてきたんですね」
「現場から直行してきた、かあちゃんがさ、迎えに行けねえから俺に」
「チケット買ったわよ」
愛里がパッと離れて
「愛里、荷物これだけ？」
「はい、こっちは手荷物で」
「それも持つから」
「え・・・ はい」
片手で荷物持って 片手で愛里の手えにぎって 愛里の手だ 愛里の手！

シャトルバスの中

かあちゃんが前の席で その後ろに愛里と俺
愛里のことチラッと見ると 愛里も俺のことチラッと見て
なんかさ 久しぶりだから照れるつつうか
それでも 手え握ったら愛里も握り返してくれてさ
なんか・・・ 足 熱っちいな 蒸れて痒くなってきて
「愛里、ゴム長脱いでいっかな」

「どうしたんですか？」
「熱っちいつつか」
「やめなさい」
かあちゃん 座席の間からこっち覗いて
「あんたがそのゴム長を脱いだら事件になる」
「事件？　なんで？」
「異臭騒ぎが起こる」
「異臭？」
「履いてなさい」
「それでも朝から履いてっから、熱くて痒くなってきてっからさ」
「ますます履いてなさい！」
「ますますってなんだよ？」
「ハハハハハ」
愛里？
「楽しい」
楽しい？
「脱いじゃダメよ！」
「わかったよ」
愛里　まだ笑ってる　愛里が笑ってんなら脱がねえよ　痒いいけどさ

愛里が　俺のまくった袖から出てるヒジ触って
ヤベ・・・　なんか・・・　愛里の指の
「ここって・・・　ケガをしたところ？」
「う・・・ん」
声裏返っちゃまった
「イデッ」
「あっ　ごめんなさい」
「え？　今かさぶた剥いだ？」
「ごめんなさい、私、かさぶた見るとつい」
「あ、いいよ、まだあるから剥いでいいよ」
「剥いでいいって・・・　ハハハ」
「マジ」
「いいです、痕が残っちゃうし血が出るかもだから」
「いいよ、血い出ても」
「よくないでしょ　ハハハハ」
愛里　ずっと笑っててさ　メッチャ嬉しい
そうだ　ケツポケットから　おっちゃんたちにもらった千円札三枚
「愛里、これさ」
「千円札？」

「おっちゃんたちが、愛里が帰ってくるお祝いっつって、くれた」
「え？」
「これで愛里になんかご馳走してやれって」
「私に・・・」
「今日はもう遅せえからカフェとか行けねえけど、明日とか」
あ？
「俺、明日も仕事だ」
「週末にご馳走してください」
「マジ？ 俺、なんなら明日」
「休まないでください」
「あ、はい」
「どうせ明日は、私も日中は寝てるかも」
「そっか、うん」
あ、そうだ
「愛里、今夜、何食べてえ？」
「機内食を食べたから、そんなにお腹空いてなくて」
「そっか」
「プレエコだったんですけど」
「プレエコってなに？」
「プレミアムエコノミー、座席がふつうのエコノミーより広くて」
「よかったな」
「はい、大山さんが機内食をアップグレードしてくれてて」
さすが大山のお婆ちゃん
「せっかくなので、ちゃんと食べました」
「美味かった？」
「それなりに」
「そっか」
「あなたは現場からって、夕食まだってことですよ？」
「とうちゃんがなんか作っといてくれてっからさ」
「なんかごめんなさい、こんな遅くに」
「んなことねえよ、愛里が謝ることじゃねえしさ」
「大山さんに早く帰りたいて言ったら、すごく頑張ってくださいって」
「大山のお婆ちゃんに感謝っすよ」
「おかあさんにもお姉さんにもすごくいろいろしてもらって」
「よかったな」
「はい」
マジよかった 愛里が早く帰ってきてくれて

シャトルバスが駅の前に着いた

「タクシーに乗るわよ」
「まだ電車走ってんじゃない」
「電車に着いてまたバスより早いから」
「こっからだと金かかんじゃん」
「私が出します」
「あ、はい」
タクシー乗り場に行ったら タクシーいっぱい止まってる
「ダイチ、あんたは後ろに乗って」
「いいよ、俺、前に乗るよ」
「運転手さんに迷惑」
どういう意味だよ？ 愛里と一緒にいさせてくれようとしてんのかな
乗り込んで かあちゃんが住所言ってる タクシーが動いて
「愛里さん、窓を開けて」
「え？ はい」
「ダイチも」
「エアコンきいてんのに窓開けたらさ」
「運転手さん、いいですよね？」
「どうぞ」
「かあちゃん、もしかして車酔いしてんの？」
「あんたの臭いが充満しないようによ」
「ハ？」
「昔、ホームレスのカズオをタクシーに乗せたとき」
酔った勢いでとうちゃんを拉致ったときか
「死ぬほど臭っさい臭いが充満して吐きそうになっちゃったの」
「ハァアアアア？」
「ハハハハ」
愛里がまた笑ってる
帰ってからずっと笑っててさ なんかメッチャ嬉しいよ

マンションに着いて エレベーターに乗って
「私は今夜は部屋に帰ります」
「あら、疲れちゃった？」
「いえ、もう遅いから」
「よかったらカズオにも顔を見せてあげてよ」
そうだよ とうちゃんも愛里のこと心配してたからさ
「いいんですか？」
「カズオ、待ってるわよ」
「それじゃ」
愛里がニッコリしてさ

玄関のドア開けて

「とうちゃん、ただいま」

とうちゃんがキッチンから走ってきて

「ダイチおかえり、遅かったな」

「カズオ、ただいま」

「美里、おかえり」

「おじゃまします」

「アイリちゃん、おかえり」

「おとうさん・・・」

え？ 愛里が 泣きべそ

「ただ・・・いま」

とうちゃんに抱きついた

とうちゃんが愛里の頭撫でて

「みんなアイリちゃんのこと待ってたよ」

「は・・・い」

いいんだけどさ いいんだけど

なんで とうちゃんには泣いて抱きつくんだ？ いいんだけどさ

久しぶりだから

かあちゃんと愛里はメシ食ってる

俺は かあちゃんに速攻でシャワー浴びろって言われてシャワー浴びた
それで 前に愛里が選んでくれた、なんだっけ、あ、犬の模様ついた部屋着着て
「ダイチ、メシ食うだろ」

「おう」

愛里が俺のこと見て え？ なんか驚いた目えして顔背けたんだけど

「愛里」

「はい」

全然こっち見てくんねえ なにがあった？ 俺がシャワーしてる間になにが
「んっと、とうちゃんのそうめん、美味かった？」

「はい」

やっぱ見てくんねえ

「やっぱりカズオのそうめんはスッと入るわ」

かあちゃん、なにがあったんだよ？ かあちゃん

「ごちそうさま」「ごちそうさま」

「愛里さんもリビングでゆっくりしない？」

「はい」

俺の方ぜーんぜん見ねえでかあちゃんで行っちまった

「ダイチ、ほれ、大盛りにしといたからよ」

「ありがとう」

シャトルバスん中でもずっと笑ってたじゃん

疲れたんかな そうかもしんねえな

とうちゃんと片付けして

「ダイチ、アイリちゃん帰ってきてよかったな」

「うん、メッチャよかった」

「ダイチも迎えに行ったんだな」

「かあちゃんから電話あってさ、残業で間に合わねえからってさ」

「それでも美里と二人で迎えに行けてよかったな」

「まあ、うん」

「あの」

愛里

「なに？ どした？」

「私、そろそろ部屋に戻ります」

「そんじゃ送ってく」

「あ、いいです、遅いし」

「遅せえから余計にじゃん、荷物もあるしさ」

「あ、はい」

なんで俺の顔見てくんねえの？

エレベーター中でも

俺 愛里のことガン見してんだけど全然こっち見てくんねえ

部屋の鍵 愛里が開けて

「それじゃ、ここで」

「や、荷物、中に入れっから」

「あ、はい」

愛里 どした？ 俺なんかしたか？

玄関に入ると 愛里がハァァッてホッとしたみてえな声出して

「あ、えっと、それじゃ、おやすみなさい」

「え？ 愛里」

愛里の腕引っ張って 抱きしめて

「あの・・・ なんか」

「ん？ なに？」

「心臓が」

し、心臓？

「ダクダクダクッて」

「えっ？ 愛里、大丈夫か？ めまいとかは？」

「ないです」

「疲れたんかもしんねえな」

「え、あの、えっと、あ、そうだ」

愛里が俺から離れて 手荷物開けて

「あなたから借りた、ノート・・・です」

愛里が差し出した俺のノート全部に

「カバーつけてくれたんか」

「あ！ ごめんなさい、今取ります」

「取んなよ、つけといてくれよ」

「汚したらイヤだなと思って、ママが持ってた包装紙で作っただけなので」

「愛里が作ってくれたんか」

「作っただけというか、折っただけですけど」

「愛里、ありがとな」

「え、私こそ、貸してもらって、ありがとうございます」
「愛里」
抱きしめようとしたら 愛里がサッと後ろに
「愛里？」
「あの・・・正直に言っていいですか？」
「え、あ、うん、いいよ」
「私・・・人見知りしてるかも」
「人見知り？ 誰に？」
「あなたに」
「えっ 俺？」
「はい」
「なんで？ 空港でもシャトルバスん中でもフツツにしゃべってたじゃん」
「あのときは・・・作業服だったので」
「へ？」
「あなたがキメキメのときって」
「キメキメ？」
「そのルームウェアも似合ってるし」
「愛里が選んでくれたやつ」
「はい、髪も後ろに流して」
「洗って乾かして指でザザッて」
「久しぶりの、THE・モリシタダイチってカンジで」
「あ？ え？」
「慣れない」
慣れねえって
「愛里」
俺は愛里のこと抱きよせて
「慣れろ」
「慣れろって・・・」
「俺は、愛里のカレシで愛里のことメッチャ好きで愛里がいねえって泣いてる大一だよ」
「泣いてるって フツ」
「マジでさ」
愛里が俺の胸んところに顔うずめて
「こうやってると・・・そうですね、あなたです」
「愛里」
愛里が 顔あげて 俺を
「ああああ、やっぱりなんか、なんていうか」
首あっちこっちひねってっけど
「んなさあ、俺は愛里にすげえ会いたくて、やっと会えてさあ」
「あ・・・口が」
「口？」

「その口を見たら、なんか、あなただって」
「俺の口？」
「タコみたいな」
「タコって、愛里いい」
そのまんま 愛里のくちびるに チュッて
「タコっすから」
「なんか落ち着きました」
「マジ？」
「そういう子どもみたいところが、あなただなんて」
「子どもってさ」
愛里の方から 抱きついてきて
「あなたですね」
「お、おう、俺だよ」
俺の方が ドキドキしてて 愛里から抱きつくとか 久しぶりっつうか
「会えると思わなかったあ」
「え、愛里？」
「あ、そういう意味じゃなくて、なんかもういろいろあって」
「だよな」
「いろいろあって」
「うん」
俺は 愛里を抱きしめたまま 愛里の頭を撫でて
「あ、それ、ダメ」
「え？ あ？ どれ？」
「ホッとし過ぎて眠くなっちゃう」
「疲れたんだよ」
「じゃなくて」
愛里が俺の顔見上げて
「帰ってきたんだなあって」
「愛里」
俺は
「おかえり」
愛里のくちびるに 柔らかくて そんなで・・・ ヤベッ 俺がヤベエ
「どうしたの？」
「あ、や、は、早く寝た方がいいんじゃないかな」
「はい、シャワーして寝ます」
「そっか、うん」
「それじゃ、今日はここで、おやすみなさい」
「愛里 おやすみ」
俺は もう一回キスしたくて や、けどさ、それでも・・・
やっぱ・・・ 愛里の くちびる 俺はすげえことになってて それでも・・・さ

「え？　ねえ、お腹痛い？」
「や、な、なんともねえよ」
「だって前かがみになっちゃって・・・ あ！　ト・・・イレ？」
「え？　あ、お、おう、ちっと」
「私の部屋のに入りますか？」
「や、帰って、すっから」
「それじゃ、急いで」
「お、おう、そんじゃ」
ドア閉めたら　速攻で鍵がかかった
俺も久しぶりだから　なんつうか　俺のこれがメッチャ
帰ろう

明日の愛里の弁当は・・・　唐揚げか？
「ダイチ」
とうちゃん
「アイリちゃんの弁当か」
「うん、とうちゃん、鶏肉ある？」
「あっ　鶏肉買ってねえ」
「そっか、そんじゃ・・・」
「美里に肉団子作ろうと思ってよ、合い挽きならあっけど」
「そんじゃ、俺はミニハンバーグにするよ」
「そっか？　これならあんだけどよ」
「赤ウィンナー！」
「日本帰ってきたら、これなんじゃねえかなと思ってよ」
「これだよ、タコさんウィンナー」
あとは・・・　卵があるから卵焼きとブロッコリーとセロリのサラダか
「ダイチ、よかったな」
「とうちゃん、なんかすげえ長く感じた」
「そっか、だな」
「かあちゃんは？」
「風呂入ってる」
「とうちゃん、あのさ」
とうちゃんに顔近づけて　小声で
「愛里に、久しぶりに、キ・キス・・・したらさ」
「あ？　お、おう」
「すげえ、なんつうか、すげえ、ここが」
「それは・・・　抜くっきゃねえな」
「うん、前にとうちゃんに言われたからさ、フワッフワしてっどって」
「ダイチはがんばってっからよ」

「なにが？」
「ダイチの部屋のゴミ箱のゴミ捨てるときよ」
「え？」
あっ　とうちゃんに　バレてた
「ガマンしてんだろうなってよ」
「え・・・あ・・・まあ、うん」
「俺もダイチくれえんときはよ、しょっちゅうな」
「やっぱ・・・そんなカンジだったんか？」
「それでもな、アイリちゃんのことだよ」
「愛里のことは、ぜってえ、ぜってえ、そういうことはさ」
「なに？　何の話？」
「かあちゃん！」「ねーちゃん！」
「どうしたの？」
とうちゃんと顔見合わせちゃった
「や、なんも」「み、美里、炭酸ミネラルウォーター？」
「カズオ、お風呂に入ってきたら？」
「あ、おう」
とうちゃんがチラッと俺を見て　そんでキッチン出た
「かあちゃん、炭酸ミネラルウォーターだよな、レモンは？」
「レモンはいらない」
「ほんじゃ、はい」
「ありがとう」
「そんじゃ俺も勉強して寝っかな」
「そう、おやすみ」
「おやすみなさい」
「まったく男って」
え？
「中学一年生」
「な、なにが？」
「ひとり言よ」
「あ、そ、そっか」
聞かれてねえよな
「ダイチ」
「は、はい！」
「愛里さんが帰ってきてよかったわね」
「ありがとうございます！」
「なんなのそれ　ハハハハ」
かあちゃんが笑いながらリビングの方へ
かあちゃん　俺はさ高校生だからがんばってんだよ
分別はちゃんがあるんだよ　煩惱もあっけどさ

勉強しよう

ラーメン食べたい

現場に向かう電車中

愛里の弁当は作ってきた

作ってるとき 実感なくてさ マジで愛里がこれを食うんかなって

ゆうべ帰ってきたし話もしたし キスもしたのに

まだ夢なんじゃねえかなみてえな

ピコン 愛里

『おはようございます』

『愛里 おはよう』送信

ピコン

『ヨーグルトが豆乳 www』

ピコン

『私まだ更年期じゃないです w』

『大豆に含まれてるイソフラボンは生理痛のときもいいんだよ』送信

ピコン

『まだです』

ピコン

『実力テストのときになりそうで怖い』

マジ？ だったら余計にさ

『ねえちゃんの話聞いて』送信

『女の人の身体にはイソフラボンなんかなくて』送信

『普段から摂ってたなら生理痛軽くなんねえかなと思ってさ』送信

ピコン

『ありがとう』

ピコン

『そこまで考えてくれてたのに』

ピコン

『笑ってごめんなさい』

笑ってたんかよ ハハハ

『どうだった？ あんま好きじゃねえ？』送信

ピコン

『いつものより酸味が少なくてなめらかで美味しいです』

ピコン

『私はこっちの方が好き』
そっか よかった
『そんなじゃこれからは豆乳ヨーグルト買ってくる』送信
ピコン
『はい』
ピコン
『ありがとう』
『愛里が楽になるためならなんでもしやす』送信
ピコン
『豆乳頼みですね w』
『イソフラボン頼みっす』送信
ピコン
『今は電車の中？』
『えっ な な なんてわかった？ w』送信
ピコン
『www』
ピコン
『いってらっしゃい』
愛里が いってらっしゃいってさ
『愛里 いってきます』送信
リアルタイムだあ
やっぱ夢じゃねえ
あ もうすぐ着く

「だいづ！ それえ廃棄んどこさ持ってってくんちえ」
「おいっす」
だいづできてきたな 俺がバイトに入る前からやってんだもんな
「だいづ、どしたあ？」
「これ、何になるんすかね」
「な～んになんだっぺなあ、下の方に店入るってハあ」
多目的つつうのはそういうことか
「来月の半ばっからは内装工が入んだっぺ」
「そしたらヤッさんたちはどうするんすか？」
「俺たちはあ、解体の仕事入ってっからあ」
だよな ヤッさんたちには次の仕事があってさ
「だいづもいればなあ」
「え？」
「あ、や、だいづは金曜までだもんなあ」
「そう・・・っすね」

「だいづ、あと、そっちゃんにも廃棄に持ってくのがあっからな」

「おいっす」

感傷的になってる場合じゃねえよ

ヤッさんとスギさんがメッチャおかず持ってきてる

「今日はおかずいっぺえっすね」

「おっかあがぁ、だいづさ食わせてえって張り切ってはぁ」「わのかちゃもだ」

「マジっすか、ありがとうございます」

「だいづは食いっぷりがいいなあ」「んだな」「若いもんな」

「ヤッさんとスギさんの奥さんのおかず、マジで美味えんすよ」

「いんやいんや、おっかあに聞かせたらあ、鍋ごと持たされるした」

「鍋ごとって ハハハ」

ピコン

愛里だ

『あなたのお弁当美味しかったです』

そっか 愛里 そっか

ピコン

『やっと実感が湧いてきました』

実感？

ピコン

『帰ってきたんたなって』

ピコン

『あなたのお弁当 ずっと食べたかったから』

愛里 んなこと言われたら泣くんだけど

『これからもずーっと愛里に弁当作る』送信

ピコン

『ありがとう』

そうだ

「ヤッさんスギさん、ショーさんも、写真撮るんで寄ってください」

「写真？ なんのお？」

「愛里に送りてえんすよ」

「こ〜ったおじさん撮ってもはぁ」「わい」

「宴会みてえじゃねえっすか」

「宴会ってえ ワハハハ」

「撮りますよ」

おっちゃんたちとおかずと俺

「そんじゃ送ります」

『愛里 おっちゃんたちの奥さんが』送信

『俺にとって いっぺえおかず作ってくれた』送信

『宴会みてえだよ w』送信 画像も送信

ピコン

『楽しそう』

『現場からは以上です』送信

ピコン

『www』

ピコン

『お仕事ががんばってください』

『おう がんばる』送信

「愛里が楽しそうだった」

「楽しいなあ、だいづといるとお、なあ」「んだ」「楽しいね」

「俺も楽しいっす」

なんかこれがずっと続く気いしてさ

午後からメッチャ蒸してきて 汗ダラダラになっちゃった

三時休憩がありがてえ

ピコン 愛里？

『突然すごくラーメンが食べたくなっちゃって』

ラーメン？

ピコン

『おとうさんに』

ピコン

『ラーメン食べに行きますから夕食はいいですって言ったら』

ピコン

『すぐあなたに連絡してって言われて』

すぐに俺に連絡？ どうちゃんどうということ？

ピコン

『ということで 私はラーメンを食べに行きます』

ラーメン食いに行くって

『どこのラーメン屋？』送信

すげえ高級なとこかな

ピコン

『ふつうのラーメンが食べたいから』

ふつうのラーメン そっか

ピコン

『駅前ないかなって』

駅前 駅前っつか あそこに

あ！ どうちゃんが俺に言えっつったのは そうということか

ピコン

『なかったらカップ麺でいいです』
いやいやいや 愛里 カップ麺てさ
『愛里 俺が連れてく』送信
ピコン
『でも私が食べたいのは』
ピコン
『高級中華料理店のとかじゃなくて』
俺が んなとこ行くと思うか？
ピコン
『ふつうの町のラーメンみたいなものだから』
『メッチャふつうのラーメン屋知ってっから』送信
あそこだよあそこ
ピコン
『ほんと？』
『愛里のこと連れていきてえと思ってたから』送信
ピコン
『嬉しい！』
『俺が帰るまで待ってて』送信
ピコン
『まだ行きません w』
ピコン
『待ってます』
そっか よかった
『仕事終わったら速攻愛里んとこ行くから』送信
ピコン
『』
ハハハ わかったよ
『食わせるから w』送信
ピコン
『』
『踊るなよ www』送信
ピコン
『待ってます』
『待っててください』送信
ピコン
『楽しみ過ぎる』
楽しみ過ぎるって 可愛すぎんだろ
『そんじゃ楽しみにしててくだせえ』送信
ピコン
『はい』

あれ？ 金は？ ああああっ 昨日シャトルバスの金出して補充してねえ
あ！ ある あるよ
「ヤッさんスギさんショーさん」
「だいつ、どしたあ？」「なんだ？」「どうしたの？」
「愛里にラーメンご馳走することになりました」
おっちゃんたちが顔見合わせて
「ラーメン？」
「愛里がラーメン食いてえつつって」
「そっかあ、そりゃ食わせねえとおな」「んだな」
「昨日ヤッさとスギさんとショーさんからもらった金でご馳走します」
「おっ、あれで？」「んだのか」「そうか」
「三千円ももらったんで、餃子もつけられっかなって」
「そりゃあいりちゃん喜ぶっぺ」「うめもんな」「ラーメンと餃子はいいいね」
「お祝いの金、マジであります！」
「いんだよお、なあ」「わんつかだ」「よかったよ」
「そんじゃ、俺、終業までがんばるんでっ」
「デートだもんなあ」「けっばれ」「楽しみだね」
「おいっす」
愛里 帰国して早速のデートだよ
メッチャ嬉しい！ しかもラーメン！
とうちゃんと、いつか愛里に食わせてえつつったラーメン
まだ俺の金じゃねえけど そんでもさ
蒸すなんて言ってらんねえ 俺はがんばるっ

ラーメンデート

帰りの電車の中

『愛里 今 電車ん中』送信

『家帰ってシャワー浴びてから愛里んところ行くよ』送信

ピコン

『そのまま来てほしい』

そのまま？

ピコン

『あなたがキメキメになるとまだちょっと』

キメキメつつうのがわかんねえけど

『わかった』送信

『マンション着いたら直に愛里んところに行く』送信

ピコン

『待ってます！ 頭の中ラーメンでいっぱいですw』

可愛いなあ 直で来いって 早く食いてえんだな

ドアホン鳴らしたら

速攻でドアが開いて

「おかえりなさい」

うわあああ 可愛い 男物みてえな大きなTシャツ メッチャ・・・

「あの？」

「あ、た、ただいま」

大きめのTシャツにジーパンて なんか たまんねえな

「あ、これ？」

愛里が胸んとこつかんで

「え？ あ、な、なんか、そういうの珍しいなつつうか」

「ニューヨークで、おかあさんが選んでくれたんです」

「かあちゃん？」

「たまにこういうのもいいわよって」

「いい、メッチャいい、メッチャなんつつうか」

「ブランドなんですけど、セールで安いからって、おかあさんが買ってくれて」

「そっか、かあちゃんが、そっか」

「あの」
「ん？」
「ラーメン」
「あ、そ、そうだ、だよな、行くか」
「はい」
愛里と手をつないで 俺これだけでしあわせっす

店ん中入ったら ちと混んでんな
「愛里、カウンターでいい？」
「はい」
カウンターに並んで座って
「あああ、憧れのラーメン」
憧れってさ おもしれえな
「愛里、餃子食う？」
「食べたいけど、一皿何個ですか？」
「4個」
「全部は食べられないかも」
「そんじゃ、俺と二人でさ」
「はい」
「ラーメンふたつと餃子一皿」
「あいよ」
大將が振り返って 俺を見て あって顔したからペコッて
愛里の方も見て うんうんて なんだ？
「こういうラーメン屋さんに来たのはじめてです」
「マジ？」
「なんか昭和レトロでステキ」
愛里の目を通すと 煤けたラーメン屋がすげえとこみてえになってさ
「お待ち！」
ラーメンと餃子が来た
「これ！ こういうラーメン！ これが食べたかったの」
「そっか」
「いただきます」
愛里がラーメンすすって
愛里の麺の食べ方はスルスルスルーって食うんだよ
途中で切ったりしねえでさ 豪快で俺は大好きだ
「美味しい」
「餃子も食べよ」
「タレを作ってもらえますか」
「タレ？」

「私、こういうのうまく調合できないから」
調合って おもしろえな
「はい」
「ありがとう」
愛里が餃子1個箸でつまんでタレにつけてパクッて
俺の方をゆ〜っくり見て
「美味しい！」
「ここの美味えよな」
「あなたのタレも美味しい」
「醤油と酢とラー油入れただけだよ」
「私がやると酸っぱくなったり辛くなったりお醤油の味しかしなかったりで」
「そんな愛里のタレはこれからも俺が作る」
「お願いします」
愛里がまたラーメンすすって
「あああ、しあわせ、泣きそう」
「ラーメン食って泣くなよ」
「だって、ずーっと食べたかったから」
「そっか」
え？ 目の前に小せえ器の炒飯とザーサイ
「あの、これ」
「サービス」
「え？」
また？
「ありがとうございます！」
大将がうんうんて そんで背中向けた
「愛里、サービスで炒飯とザーサイもらったよ」
「すごいですね」
「ここの炒飯も美味えんだよ、ザーサイもさ」
「炒飯も食べたかったの、でもそんなには入らないなと思って」
「そんなじゃ食べよ、残ったら俺が食うから」
「なにここ、天国？」
「ハハハ、かもな」
愛里がレンゲでチャーハン一口入れて
「美味しい！」
「ザーサイも美味えよ」
「あ、本当に美味しい、止まらなくなっちゃう」
「全部食っていいよ」
「大きめのTシャツ着てきてよかった」
「ん？」
「お腹ポッコリしても見えないから」

「ハハハ、愛里は痩せてっからポッコリしねえよ」
「こんなに食べたらポッコリしちゃう、でも食べる」
「おう、食べ、いっぺえ食べ」
「はい」
フツターのラーメン屋でさ こんなに喜んでくれんなんてさ
俺は メッチャしあわせだ

会計は 2,100 円だな
おっちゃんたちからもらった 1000 円札二枚と 100 円玉はある
「会計お願いします」
大将がカウンターの上に置いた金を見て
「サービス」
100 円玉を俺に また？
「あの、いつも、ありがとうございます」
「よかったな」
「え？」
背中向けちまった
「ありがとうございます！」
大将の背中にお礼言うと 背中向けたまもうんうんて

店を出たら
「ごちそうさまでした」
「おっちゃんたちにお祝いの金もらったつつたろ、あれ使った」
「最高のお祝い」
「そっか」
「ありがとう」
「ん？」
「連れてきてくれて、餃子のタレも調合してくれて」
「そんなん、なんつうことねえよ」
「正直、私一人だったら、こういうお店には入れなかったかも」
「そんじゃどこに行くつもりだったの？」
「ん・・・ ファミレスとか？」
「ファミレス？」
「見つからなかったらもうカップ麺でいっかなって」
「カップ麺なんか食うなよ」
「私だってカップ麺はイヤだけど」
「ラーメン食いたくなったら俺が連れてくっから」
「はい、お願いします」

愛里と 手をつないで 帰り道

俺は

「愛里」

「あ、ダメ」

「な、なんで？」

「私、餃子食べたから」

「俺も餃子食った」

「え・・・」

だから 愛里のくちびるに

「もう」

俺の腕 ピシヤツて叩いた

「なんで？」

「なんか、なんとなく」

「なんとなく？」

「餃子臭かったから」

「マジ？」

「ウソ」

「なんだよお」

後ろから抱きしめて

「愛里いい」

「ほら」

「ほらってなんだよお」

「久しぶりにご主人様に会ったゴールデンレトリバーみたいに」

「久しぶりじゃ～ん」

愛里が 後ろに手えまわして

「よしよし」

俺の背中ポンポンて

「なんだよそれ」

「おんぶしてるみたいだから」

「そんじゃこのままおんぶして帰ってくれよ」

「ハァアア？ イヤです」

「そんじゃ俺が愛里のことおんぶしよっか」

「今おんぶされたら吐いちゃう、お腹いっぱいだから」

「そんじゃ抱っこ？」

「ふつうに歩いて」

「おいっす」

また愛里の手えにぎって

あああああ しあわせだーーーー！

「こういうふつうのカンジ、いいですね」

「ん？」

「ありがとう」
「なにが？」
「なんか、いろいろ」
「俺こそ、ありがとう」
「なにに？」
「なんか、全部」
「なにそれ ハハハ」
マジでさ 愛里がいてくれて ありがとう

愛里の部屋の玄関

「それじゃ、私は今日はこれで」
「え？ なんで？」
「だって夕食は食べたから」
「俺は愛里ともっと一緒にいてえよ」
「え、いいけど」
「マジ？」
「でも、シャワー浴びた方がいいんじゃないですか？」
「あ、そっか、そんじゃ、シャワーしたらまた来てもいっかな？」
「いいけど あっ！」
「え、どした？」
「おみやげ」
「おみやげ？」
「あなたとおとうさんへのおみやげ」
「マジで買ってきてくれたんか」
「だって、あなたがおみやげなおみやげなって言うから」
「や、そればさ」
「あなたは先にシャワーしに帰ってください」
「あ、おう」
「私はおみやげを持ってあなたの家に行きます」
「わかった」
「それじゃ、あとで」
「おう」
玄関のドア閉めて
シャワーしよう

革のギョ・・・ビーサン

玄関のドア開けて

「ただいま」

「ダイチ、おかえり」

「とうちゃん、行ってきたよ、ラーメン屋」

「アイリちゃんがよ、ラーメン食いに行くつつったからよ」

「俺に連絡しろつつってくれたんだろ」

「アイリちゃんにラーメン食わせてえつつったからよ」

「ありがとう、食わせられた」

「アイリちゃん喜んでたか」

「美味え美味えってさ」

「そっか、よかったな」

「あんた」

「あ、かあちゃん、ただいま」

「その恰好で愛里さんとラーメン屋に行ったの？」

「愛里が仕事終わったら直で来てくれつつったからさ」

「だからってその恰好で」

「だってきめきめだとまだなんとかつつて」

「きめきめ？ ああ」

「なに？」

「愛里さんもなんであんたなんか照れるのかしら」

「照れる？」

「いいから早くシャワー」

「わかってるよ」

頭痒いいな 汗いっぺえかいたもんな

「ここで頭を搔かない」

「ハ？」

「浴室へ GO!」

チラッととうちゃん見たら

情けねえ顔して目で風呂に行けて

わかったよ とうちゃん

バスルームから出ると リビングから愛里の音がする
来てたんか
「ダイチ、アイリちゃんがよ、俺とダイチにみやげくれてよ、ほれ」
「すげえかっけえじゃん、ギョサン？」
「ギョサンではないです、flip flops って、日本語で・・・ なんだっけ？」
「ビーチサンダルよ」
「あ、それです」
とうちゃんにはこげ茶で俺には黒
「これって・・・ 革？」
「そうです」
「とうちゃん、これは丸洗いできねえよ」
「そっか、そんじゃどうすりゃいいんだ？」
「革靴みてえに拭くっきゃねえんじゃね？」
「あんたたちの重要ポイントは洗えるかどうかなの？」
「だってギョサンならさ」
「ギョサンではないです！」
「あ、ビーサン」
「履いてみてください」
「あ、はい」
おっ おお これは
「メッチャ履きやすい」
「人間工学に基づいて作られたそうで」
人間工学？ ギョ、じゃねえ、ビーサンを？
「安定感があって長時間歩行の疲労を軽減するって」
「すげえな」
「おとうさんには、こういうのが歩きやすいのかなって」
とうちゃんのこと考えてくれたんか やっぱ愛里は優しいなあ
「愛里さん、よくこんなのを見つけたわね」
「大山さんがアウトレットモールに連れていってくれて」
「大山はそういうの詳しいのよ、昔からね」
「このメーカーのは向こうでは今ポピュラーだって」
「さすが大山」
「アイリちゃん、ありがとな」「愛里ありがと」
「正直・・・ 大変でした」
「そっか、俺ととうちゃんの足デケエもんな」
「それは向こうでは問題なかったですけど」
「けど？」
「おとうさんもあなたも物欲がないので、いっそ実用的なものかなって」
「こんなリッパなの、もったいねえな」
「だよな、ふだん履けねえよな」

「ふだん履いてください」
「そんでもさ」
「あの擦り切れたギョサンが二足、玄関にあるって」
「愛里さん、よく言ってくれたわ」
かあちゃん 拍手してる
「そうなのよ、いいかげん新しいの買いなさいって言ってもあれなの」
「おかあさんの美意識では耐えられないですよね」
「耐えられない」
思わず とうちゃんと顔見合わせた
とうちゃんの耳元で
「とうちゃん、靴箱の下の方に入れとくか」
「だな、こそっとな」
「聞こえてるわよ」
「え・・・」
「愛里さん、こんななのよ、私にはもうどうにもできない」
「私もなんとか改善できるよう頑張ります」
「愛里さん、ありがとう」
改善てさ んな・・・ 大問題かな
「愛里さんも似合ってるわよ」
「おかあさんに選んでもらってよかったです」
「愛里さんも私くらい身長があるから、そういうのが似合うのよ」
「ママと行くとパーティドレス？ みたいなのばかりだから」
「お母様はフェミニンなのがお好きですものね」
「私はそういうの好きじゃなくて、でもマニッシュにいく自信もなくて」
専門用語ばっかで何しゃべってんのかわかんねえ
「愛里さんはシンプルなワンピースとかが多いけど、たまにそういうのもね」
「なんか自分で作っていた限界を突破した気分です」
「そうね、いつものスタイルとちょっと違うと、今の言葉でなんだっけ」
「ギャップですか？」
「それ、ギャップ萌え」
「萌えて ハハハ」
「ダイチ」
「え？ あ？ なに？」
「愛里さんの今日のコーデいいわよね？」
「メッチャすげえなんつうか可愛い」
「愛里さん、ほらね？」
ほらねって なんだ？
「単純なのよ」
なにが？
「あの、私、そろそろ部屋に戻ります」

「愛里さん、カズオとダイチにおみやげありがとう」
「おみやげなって言われてたので」
それはさ
「そうよね、空港で私にまでおみやげおみやげってね」
だからそれはさあ
「ダイチ、愛里さんのこと送ってあげて」
「おいっす」
「あ、それ履いてください」
「おう」
玄関とこに愛里が買ってくれたギョ、じゃねえ、ビーサン置いて
横にとうちゃんと俺のギョサンと俺のゴム長
確かに場所取ってるけどさ　しゃあねえじゃん
「あなたの長靴」
「俺のゴム長が？ なに？」
「前に買った炭の、入れてますか？」
「入れてる、帰ってくると速攻入れてるよ」
「負けてますね」
「え？　なに？」
「なんでもない」
「愛里、なに？」
「あ！　ノート、続き貸してもらえたりしますか？」
「おう、ちょっと待って」
部屋に入ってノートひつつかんで
「これな」
愛里がパラパラめくって
「すごい・・・もうこんなとこまでやってる」
「愛里が帰ってきたら必要だろうなと思ってさ」
「ありがとう、明日はこれで勉強します」
「おう」
愛里からもらったギョ・・・ビーサン履いて
「これ、メッチャ履きやすいよ」
「よかった」
ニッコリした顔が可愛いくてさ
愛里がいると　家ん中パーッと明るくなってさ

愛里の部屋の玄関

「今日はラーメン、ごちそうさま」
「おう、また食いたくなったら俺に言ってくれよ、カップ麺じゃなくてさ」
「はい」

愛里 俺は まだ愛里といたくてさ

「どうしたの？」

「え？」

「なんか私の顔ジーンと見てるから」

「え、なんか、なんつうか」

「なに？」

俺ハ 今 メッチャ オスニナッテマス

「愛里」

「はい？」

愛里の腕引っ張ってて

「え、なに？ どうしたの？」

「や、なんつうか、あの・・・ キス・・・させてください」

「ハ？」

「キス」

「え？」

愛里を抱きしめて そんで くちびる もっと もっと

「あっ！」

愛里が俺からパッと離れた

「今」

あ 俺・・・

「私のこと」

俺、つい

「食べようとした？」

「へ？」

「あむって」

「え、や、それは、あの、ごめん」

「痛くなかったけど」

「愛里、マジごめん」

「ふざけたの？」

「ふざけてねえ、ふざけてねえよ」

愛里が上目遣いで俺のこと睨んでる

「愛里、ごめん、マジごめん」

俺は んっくに

「ごめんなさい」

頭下げて 愛里の部屋から飛び出した

なにやってんだよ 愛里はまだなんもわかってねえのにさ

俺も初めてだけどさ そんでもちっと気い緩めたら 気い緩めたっつうか

「ちょっと待って！」

え？ 愛里

「ごめんなさいじゃわかんない」

「あ・・・それは」

「今日はラーメン一緒に食べて、おみやげ渡せたり楽しかったのに」

だよな・・・俺が

「楽しかった一日の終わりがこんなカンジはイヤ」

え？

「ちゃんと話して欲しい」

ちゃんと？

「なんか・・・あなたが隠してるみたいいで」

え・・・

「そういうのイヤです」

「愛里」

「そういうのイヤ」

「愛里の部屋、戻ってもいっかな」

「はい」

廊下歩いて愛里の部屋に

俺は ちゅんと言わねえと 俺は愛里のこと本気で好きなんだから

好きが溢れたバージョン

愛里のリビングのソファに 二人で座って

「あのさ」

「はい」

「俺は・・・男でさ」

「わかってます」

「愛里のこと、真剣に本気でマジで好きでさ」

「あ、はい」

「さっきは、好きがいっぱえになり過ぎて」

「え？」

「溢れちゃって」

「は・・・い？」

「ああなった」

「え、全然わかんない」

「んっと、なんつうか、いつも、くちびるに、チュッて」

「あ、はい」

「その、なんつうか、好きが溢れたバージョン」

「え？ キスしているんなバージョンがあるの？」

「ある」

「あなたはどれくらい知ってるの？」

「や、俺もやったことはねえけど、ち、知識としては」

「私はドラマや映画でこうやってるのしか見たことないですけど」

「俺もリアルなんは見たことねえけどさ」

「本当に初めて？」

「あ？ なにが？」

「キスしたの、私が・・・」

「初めてだよ、愛里が俺のファーストキスだよ」

「私もですけど」

「うん、それは、うん」

「そう・・・ですか」

「愛里、俺、ハッキリ言うけどさ」

「はい、言ってください」

「キスは、もしかすと、好きが溢れたバージョン」

「さっきの？」
「またやっちゃうかもしんねえ」
「えっ？」
「あ、イヤなら」
「イヤではなかったです、ビックリしたけど」
「そ、そっか」
「ごめんなさい」
「えっ、な、なにがごめんなさい？」
「私が何も知らないから、あなたが困ってるんですよね」
「ちげえよ、それはちげえから」
「そうですか？」
「そうじゃねえよ、そうじゃなくてさ」
なんて言えばいいのかな なんて
「愛里」
「はい」
「もっかい、いっかな」
「いっかなって？」
「さっきの」
「好きが溢れたバー・・・」
俺は 愛里のくちびる 俺のくちびるで 好きが止まんなくて そんなでも
「あ・・・」
えっ？ 愛里の頭が後ろに
「愛里、どした？」
「な・・・なんか、頭がボーッとして」
「え？」
「クラクラしてドキドキして」
「ひ、貧血？」
「じゃなくて、初めてキスされたときもこうなったので大丈夫です」
へ？
「大丈夫でした、大丈夫です」
「あ、そ、そっか」
「好きが溢れたバージョンも大丈夫です」
「え、マジ？」
「あ、でも、すぐに勉強しなきゃいけないときとかはダメです」
「あ、うん」
「頭がボーッとして、今もちょっとヘンです、なんかやたらとしゃべってるし」
「愛里」
「大丈夫です大丈夫」
俺は 愛里を抱きしめて
「んな大丈夫大丈夫って言うなよ」

「だって大丈夫だから」
「愛里がイヤなら」
「そうじゃなくて、イヤとかじゃない、イヤじゃ・・ないです」
「マジ？」
「はい」
「愛里、ひとつ、わかって欲しいことがあってさ」
愛里から腕離して 愛里の顔を見て
「俺は、高校卒業するまでは、ぜってえ・・」
次の言葉 言ったら そんなでも 言わねえと
「セ・・セ・・ セックスはしねえから」
「えっ」
愛里が両手で口押さえてビツクリした目で俺のこと見てっけど
「愛里、しねえ、しねえから、ぜってえしねえから」
「えっと・・ しない？」
「ぜってえしねえ、そこだけは、安心して欲しい」
愛里が 俺のこと見て そんな えっ？ 涙ポロポロ出て
「あ、愛里？ しねえよ？ 怖がらせちゃった？ しねえから」
「そうじゃなくて」
愛里が泣きべそのまま
「あなたは・・ いつも・・ 私のこと安心させようとしてくれるって」
「え？」
「私・・ そっち系のことは・・ ボヤッとしかわかってなくて」
「あ、そ、そっか」
「中学のとき、保健体育でやったんですけど、なんかよくわかんなくて」
「あ、うん」
「生理のメカニズムだけはわかりましたけど」
「あ、うん」
「私もちゃんと勉強します」
「え？ あ、や、んなこと勉強しなくていいよ」
「だって高二なのに、あまりにわかってなくて」
「愛里」
「はい」
「俺は、愛里のこと、命賭けて守るって決めてっから」
「何から？」
「全部」
「全部？」
「俺の・・ 本能からも」
「本能？ あなたの本能って？」
「あ、それはあんま、考えなくていい」
「そうですか」

「だから、愛里が安心してくれるってことは、俺がちゃんと守れてるってことでさ」

「はい」

「なんつうか、だから、そこは、安心して欲しい」

「はい、でも・・・」

で、でも？

「あなたといて、不安になったり怖くなったことはないから」

え・・・

「そこは、あなたも安心してください」

「愛里」

「好きが溢れたバージョンも、最初はビックリしたけど」

「あ、それは、ごめん」

「怖くはなかったですから」

「そっか」

「はい」

愛里が 俺のこと真っ直ぐ見て

「ありがとう」

「ん？ なにが？」

「こういう話をちゃんとしてくれて」

「それは、やっぱ、ちゃんと話さねえとなって」

「こういう話をちゃんとできるのって、すごく大切だと思うから」

「うん、だよな」

「あなた、ごめんなさいって言って逃げようとしたけど」

「あ、それは、ごめん、マジごめん、あんときは、どうしたらいいいんか」

「子ども扱いはしないで」

え？

「私はわからないことがたくさんあるけど、子どもじゃないから」

「うん、ごめん、これからはちゃんと話す」

「はい」

「愛里」

愛里のことだきしめて そんで

「今のは・・・いつものでしたね」

「俺、家戻ったら勉強しねえとなんで」

「フッ そうですね」

よかった 愛里と ちゃんと話せて

なんか 気い楽になってる

家戻って 勉強して

ピコン

『わかりました』

わかりました？ 何がだ？

ピコン

『検索しました』

なにを？

ピコン

『検索語句は キス あむってする』

へ？

ピコン

『そしたら』

ピコン

『ハムハムキスって出てきて』

ハムハムキス？ なんだそれ？

ピコン

『でも私はあなたの好きが溢れたバージョンという名称の方が好き』

愛里はさ

『んなもん検索すんなよ w』送信

ピコン

『少しでも知りたくて』

『キスのこと？ w』送信

ピコン

『あなたのこと』

『俺のことは俺に聞けよ』送信

ピコン

『ごめんなさいって逃げるから』

あああああ

『ごめんなさい！』送信

ピコン

『ほら！ w』

『もう逃げねえよ』送信

ピコン

『はい』

ピコン

『それじゃ おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

なんか なんつうか 愛里と俺の関係がまた一步前進つうかさ

ハムハムキス？ 検索

マジでこんな言葉あるんか

ハムハムとか なんか 食ってるみてえでイヤだな

とうちゃん 俺 愛里とハムハムじゃねえ 好きが溢れるバージョンしたよ

愛里が許してくれたれよ とうちゃんもう寝てっかもしんねえけどさ

そんで こればっかは言えねえよ 言えるかな? どうちゃんなんつうかな?
まあいいや 寝よう

ショーさんの子育て

朝の現場

なんか今日は静かっつうか 静かではねえけど

「ダイちゃん、おはよう」

「ショーさんおはよう」

あれ？

「ヤッさんとスギさんは？」

「監督と次の現場に行くってさ」

「次の現場？」

「下準備と何か変更があったらしくてな、ヤッさん職長だしスギさん補佐だから」

「俺、握りメシ持ってきちまったけど」

「昼には戻るよ」

「そっか」

次・・・か

「今日は俺がダイちゃんを一人占めできるな」

「一人占め？」

「現場の父さん、ダイちゃんの方が先輩だけどさ」

「そんじゃ、今日は俺はショーさんの現場の息子になる」

「そうか」

「うん」

ショーさんは便所掃除しに 俺は道路の掃除

監督はこういうとこしっかりしててさ

公道を歩く人たちに迷惑かけねえように、いつもきれいにしてる

現場は深けえ いればいるほど深けえ

10時休憩

今日も暑っちいから コンビニに走って買ってきた

「ショーさん、アイス」

「俺に？」

「現場のとうちゃんに」

「嬉しいな、ありがとう」

二人でガリガリ君かじりながら

「ショーさん、昨日、愛里にラーメンご馳走したよ」
「そうか、喜んでたか？」
「うん、美味えつつてさ」
「よかったな」
「ショーさんたちに小遣いもらったおかげだよ」
「俺も息子に小遣いあげる体験させてもらったよ」
「ショーさんは、子どもいねえ・・んだよな」
「ん・・ 俺が殺しちゃった」
「えっ」
「あ、ごめんごめん」
「な、どういうこと？」
「ダイちゃんにはまだ早いかな」
「俺には言えねえこと？」
「言えないことじゃないけどさ」
「だったら言ってくれよ、俺、ショーさんのこと知りてえよ」
ショーさんが俺の顔見て そんでなんか考えて
「結婚してすぐにさ、女房が妊娠したんだよ」
「え？」
流産？ それとも・・
「この子は絶対に男の子で、たっちゃんの跡継ぎに育てるなんてさ、
まだ妊娠がわかったばかりなのに気が早くてな」
どう・・なったんだ
「妊娠6ヵ月くらいのときに出血してさ、病院に行ったら筋腫があるって」
子宮筋腫か
「ふつうはそれでもまあ生めなくはないみたいなんだけど・・
女房のは悪いことに卵管も炎症起こしてて卵巣も・・」
ショーさんが まるで今聞かされたみてえに頭押さえて
「このままだと胎児どころか母体も危ないって」
ショーさんが大きく息吐いて
「俺は、女房を助けてくれって言ったんだよ、赤ん坊より女房をってさ」
俺は ショーさんの背中にそっと手をあてるっきゃ・・できなくて
「結果、全摘、子宮も卵巣も全部取った」
んなことが・・ あるんだ
「女房は・・ しばらく、まあ鬱みたいになって寝込んで、
俺も親父から工場受け継いだばかりだったからバタバタで・・
ある日、帰ったら、女房が離婚してくれって」
「え・・」
「私はもうたっちゃんの子どもを生めないから、たっちゃんの跡継ぎを・・」
ショーさんがグッてこらえてて
「だからさ、俺、言ったんたよ、だったら跡継ぎを育てようって、

今は俺も親父の代からの職人さんたちに支えてもらってるけど、
そのうち若い子たちが入ってきて、その子たちを俺とおまえで育てて、
その中にきっと跡継ぎになってくれ子がいるって」

「ショーさん・・・」

すげえ ショーさん・・・

「俺一人じゃ無理だよって、料理もできないし細かいこととか、
そこは、お母さんがいないとダメだろうって」

俺が泣いちゃいけねえけど・・・ でも・・・

「そしたら、女房がワンワン泣いて・・・ 泣きながら怒るんだよ
たっちゃんはいっつもそう、ないなら作ればいい、ないならどこかから持ってくれば
いい、
小学校の校庭に大きな石持ってきて、どこかから板持ってきてシーソー作って」

シーソー？

「先生に怒られたこと憶えてないの？ ってさ、そんな昔のこと言われてもな、
しかも、シーソーに乗ってみたいって言ったのはカナちゃんさ」

「カナちゃん？」

「あ、女房の名前、俺とあいつは幼なじみなんだよ」

「そっか」

そういえば・・・ 前にヤッさんたちが言ってたな 幼なじみだって

「それでなんとか離婚は思いとどまってくれて」

奥さんもショーさんが好きなんだよな 離婚なんてしたくねえよな

「俺もまあへボだけど、なんとか一人前の社長になって、若い子たちが入ってきて、
地方から出てきた子たちもいるから、女房は本当にお母さんみたいに世話してな」

だから おやつ出したりバーベキューしたりしたんか

「俺が若い子叱るだろ？ そうすると、その子を裏に連れてって、
あんな言い方ないわよね、あんただって一生懸命やってるんだからね、
でもね・・・ 社長はあんたのこと真剣に育てたいと思ってんのよ、
あんたのこと本当の息子みたいに思ってるから、つい本気になっちゃうのって」

なんで・・・ んな・・・ いい奥さんと別れなきゃならなくなって・・・

「だからあんたも、たまには、うるせえなクソ親父くらい言ったら？ ってさ、
まったくさ、ヘンな知恵つけて・・・」

ショーさん 鼻水拭きながらしゃべってて

「女房にそう言われたらさ、そいつも明るくなってさ、はい！ ってさ、
はいじゃないよな、まったくさ」

俺は 涙止まんなくて ショーさんの顔見れねえ

「俺は会社潰しちゃうようなダメな社長だったけどさ、
従業員全員、受け入れ先見つけられたのだけはよかったよ」

「それは・・・」

鼻水出てうまくしゃべれねえ

「ショー・・・さんが、見つけ・・・たの？」

「自慢じゃないけどさ、まあ自慢だけどな、うちで育ったやつらは、
どこでも欲しがられてさ、正確で丁寧な仕事するから」
ショーさんが鼻水手でぬぐって
「大きいとこみたいに大量には作れないけど、小さい工場でしかできない、
正確で丁寧に繊細な作業っていうのが・・・ まあ潰れちまったけどな」
なんでそんないい工場が潰れなきゃならねえんだ
「みんなには、工場を畳むことにしたってだけ言ったんだけど、
薄々気づいてはいただろうな、それでも何も言わないで移ってくれたよ」
そのあと ショーさんは・・・ なんもかも失くして そんで・・・
「俺は子育てでできなかったな、親父失格だ、工場潰しちまうなんてさ」
「ちげえよ、ショーさん、失格なんかじゃねえよ」
「ダイちゃん」
「子育てってさ、親から離れて一人立ちできるようにすんだろ？
ショーさん、ちゃんと、やったじゃん、あちこちから欲しがってもらってえなさ、
ショーさんと奥さん、すげえいいお父さんとお母さんじゃん」
「ダ・・・イ・・・ちゃ」
「工場が潰れたのはショーさんのせいじゃねえよ、んないい工場が潰れるなんてさ、
そういうのおかしいよ、それでも、それでもさ、ショーさんは工場じゃなくて、
働いてる人たちのことちゃんと育てたじゃん、俺なら・・・」
俺が言っても・・・だけど
「俺なら、ありがてえしかねえよ、父さんありがとうだよ」
「ダイ・・・」
ショーさんが 俺に抱きついて 泣いた すげえ泣いた
俺も・・・ 泣きながら
「ショーさん、すげえいいお父さんだよ、俺みてえなガキでもそう思うんだからさ」
「そう・・・か？」
「そうだよ、人を育てるのがいっちゃん大切にいっちゃん難しいって、かあちゃん言っ
てる」
「ダイちゃんの・・・ お母さん？」
「会社にとっていちばん大切なのは人だって、人を大切にしねえ会社はクソだって」
「ハ・・・ハハ・・・ クソか」
「ショーさんはいい社長でいいお父さんだよ、今でもそうだよ」
「今・・・でも」
「そうだよ、ショーさん胸張っていいよ、立派に子育てしたんだからさ」
「そうか・・・ そうかな」
「そうだよ」
ショーさんが泣きながら一生懸命笑おうとしてて
「ダイちゃんには・・・ いっつも救われてるな」
「俺はショーさんが好きなだけだよ」
「ダイちゃん」

ショーさんが また俺に抱きついて 俺もショーさんに抱きついて
「ショーさん、俺、ショーさんに会えてよかったよ」
「それは・・・俺の台詞だろ」
「ショーさんは、とうちゃんのことよくわかってくれるしさ」
「まあ、元浮浪者仲間だからな」
「なんかかあちゃんと通じるもんもあってさ」
「ダイちゃんのお母さんはすごい人だな、人を大切にしてさ」
「うん、そういうとこ、すげえ尊敬してる」
「その二人の子どもだもんな、ダイちゃんになるよな」
「え？」
「ダイちゃんと話すといつも大泣きだよ、俺はあんまり泣かないんだけどな」
「俺はしょっちゅう泣いちゃうけどさ」
「ダイちゃんは感激屋だからな」
「小せえ頃から泣き虫って言われてさ」
「それだけ心が温ったかいんだよ」
俺の頭クシャクシャッて撫でて
「なんか、ダイちゃんに話したら、ここのつかえが取れた気がするよ」
「マジ？」
「ダイちゃんは不思議だな」
「え、なにが？」
「初めて会ったときもさ、ダイちゃんにはなんかスツと話せてさ」
「俺もショーさんと初めて会ったとき、なんか仲間みてえな気がした」
「浮浪者がか？」
「浮浪者がつつうか、なんかさ、友だちみてえなさ」
「友だちみたいに話しかけてくれたな」
「ショーさんがショーさんだから」
「え？」
「俺、今の話聞かせてもらって、ますますショーさんが好きになったよ」
「そうか」
ショーさんが大きく息吐いて
「そうか」
ニッコリした

昼前には 監督とヤッさんとスギさんが戻ってきて
一緒に昼メシ食って
「次はどんな仕事なんすか？」
「解体、古っるい体育館」
「体育館すか」
「ありゃなあ、解体しねえとお危ねえなあ」

「そんななんすか」
「木造ではあ、柱もなんもなあ」「釘も錆びつまっでボロボロ」
「それを解体して、なんか建てるんすか？」
「うちの会社が請け負ってっからあ、建てんだっぺなあ」
そこに 俺はいねえんだよな
「だいつ、ほれ、おっかあ作ったの食え」「わのかちゃのも」
「いただきます」
「ゆんべ、ショーさんがあ」
「ショーさんが？」
「俺のおっかあとおスギさんのおっかあにはあ」
「ヤッさん、その話はしなくていいよ」
「料理習っではあ」
「料理？」
「簡単なものだけだよ、なんにもできないからさ」
「ほんでもお、おっかあ、ショーさんは筋がいいってなあ」「んだ」
「教えっとお、正確にいてねええにやんだってなあ」
正確に丁寧に
「あんたも見習えって言われっちまって、なあ」「でぎねや」
「ショーさん、今度ショーさんが作ったの食わせてよ」
「ダイちゃんは料理うまいんだろ？ 俺のなんてさ」
あ・・・ 今度って 今日入れて三日しかねえんだ
「そんだあ、まただいつとおカズさん呼んでなあ」「んだんだ」
「あ、そんなときは俺も、なんか、作っていきます」
「そっかあ？ だいつの料理も食ってみてえなあ」「んだなあ」
「どうなのがいいんすか？ 唐揚げとかっすか？」
「や、肉でなくていいんだあ、なあ」「肉でねぐでいはんで」
「あ、そうすか、そんなじゃ、そんなとき考えて持っていきます」
「やあ、楽しみだしたあ、なあ」「んだなあ」
なんか みんな わかってんのに わかってねえみてえに
「俺、ひとつ自慢していいかな」
ショーさん？
「今日、10時休憩のとき、ダイちゃんにアイス奢ってもらったよ」
「いんやいんやいんや」「わいわいわい」
「ヤッさんたちがいない間に、ダイちゃんと二人っきりでさ」
「そりゃ羨ましいなあ、妬けてまっぺ」「やげでまるな」
「そんなじゃ、三時休憩のときに、ヤッさんとスギさんに買ってくるっすよ」
「いんだしたあ、ショーさんとだいつが楽しそうにしててえ、いがったのよ」
「楽しかったっす」
「俺とスギさんがいねえからあ、淋しいってえ泣いてんでねえかなあってなあ」
「ハハハハ、泣いてたっす、ショーさんと二人で」

「そうだよ、ダイちゃんと二人で大泣きしてたよ」
「ほれ！ やっぱし俺とスギさんいねえとお淋しいっぺ？」
「淋しいっす」「淋しいな」
「ま〜た二人ともお調子よくてはあ」「だいつはあえるちゃいねど泣ぐべ」
「え？」
「そんだあ、アイリちゃんいねえと泣いてばっかではあ」
「泣いてばっかじゃねえっすよ」
「アイリちゃん帰ってきてくれてえ、いがったあ」「んだな」
「からかわねえでくだせえよお」
「照れてはあ」「照れでらよ」「愛里ちゃんには弱いもんな」
「おいっす」
この時間が もっと もっと 続けばいいのに
続くようなふりして みんな 笑ってる

電車の中で

電車ん中

愛里は 自分の部屋にいんのかな それとも俺ん家かな

『愛里』送信

ピコン

『はい』

『今日は何してた?』送信

ピコン

『お花の先生におみやげを届けに行きました』

そっか お花の先生んところに行ってたんか

ピコン

『どうせだからレッスン見学して行かない? って言われて』

ピコン

『こんな時間になりました』

こんな時間?

『今帰ってきたっつうこと?』送信

ピコン

『今は電車の中です』

電車の中? え、もしかして これっきゃねえよな 家の近くの駅に行くの

『愛里 何両目に乗ってる?』送信

ピコン

『二両目か三両目』

そっか

『俺五両目』送信

ピコン

『同じ電車ってこと?』

『そっち行く』送信

ピコン

『どうせ駅は一緒だから』

『行く』送信

ピコン

『はい』

人かき分けて 四両目 いねえよな 三両目いねえな 二両目か

二両目に入ってって あ いた ドアの近くに立ってる

「愛里」

こっち見た

「すみません、ちょっとすみません」って言いながら愛里のそばにきた

「愛里」

「同じ電車にいたなんて」

「俺もビックリだよ、荷物持つよ」

「そんなに重たくないから」

「持つ」

「はい」

花が入ってる

「花もらってきたんか」

「先生が残ったお花をくれたんです」

「そっか、花の、授業？ 愛里は受けなかったの？」

「先生の流派の本格的な華道教室だったから」

「そっか」

「みんなすごくて、見てるだけで楽しかった」

「そっか、よかったな」

「はい」

俺を見上げて ニッコリしてる愛里

もし もし愛里に ショーさんの奥さんみてえなことが

んなことぜってえあって欲しくねえけど そんなも もし もしそうなくても

俺は愛里のそばにいれるだけでいい そばにいてえ それだけでさ

愛里がいなくなるとか 愛里と離れなきゃなんねえとか そんな・・

「えっ？ なんで泣いてるの？」

「や・・ ちょっと」

「ビックリしちゃう」

「あ、ごめん」

「ちょっと待って」

愛里が肩にかけてる小さなバッグから

「はい」

ティッシュ出して俺に渡してくれた

「あり・・がとな」

「ねえ、やだ、なんで泣いてるの？ しかも電車の中で」

「ちょっとさ・・ あとでゆっくり話すけどさ」

「いじめられたとかじゃないですよ？」

「いじめられてはねえよ」

「だったらいいですけど、私の顔見て突然泣くから」

「なんつうか・・ 好きが溢れちまって」

「電車の中で？」

「うん」

「バカなの？」

「バカっす」

「バカっすって ハハハ」

「笑うなよお」

「だっておかしいでしょ、電車の中で泣くとか」

「泣くつもりなかったんだけどさ」

「泣くつもりで来られたら怖いから」

「あ、うん」

「あと一駅ですね」

ドアの上の路線図見てる横顔がきれいで

「愛里」

「はい？」

「あ、んっと、弁当どうだった？」

「美味しかったあ、あなたの唐揚げ、やっぱり大好き」

「そっか」

「はい」

「それでもさ、前は弁当美味かったってLINE くれてたのにさ、今日はくれなくてさ」

「今は仕事に集中した方がいいんじゃないかなと思って」

「俺しっかり集中して仕事してっけど」

「そういうのじゃなくて」

「どういうの？」

「金曜日までは、おじさんたちとの時間を」

え？

「いっぱい過ごした方がいいんじゃないかなって」

愛里 んなこと考えてくれてて・・・

「やだ、泣かないでよ、やめてよ」

「泣いてねえ」

「鼻すすらないでかんでください、ほら」

「あ、うん、ありがと」

愛里がくれたティッシュで鼻かんで

「私、あなたに相談したいことがあって」

「なに？」

「あとで、夕食の後にでも」

「そっか、わかった」

愛里が窓の外に目を向けて

「もうすぐ夏休み終わりますね、まだだけど」

「うん」

「夏休みが終わっても・・・ 同じクラスだから」

「それ、マジそれ」

「土曜日に始業式で日月と休みって、火曜日から実力テストだから」
「だな」
「実質、日月は休みではないですね、テスト勉強しろっていうカンジ」
「一緒に勉強しよう」
「一緒になっていうか、教えてください」
「おう、まかせとけ」
「よかったあ、モリシタダイチのカノジョの醍醐味」
「なんだよそれ」
「醍醐味はそれじゃないけど」
「え？ なに？」
「もう着きますね」
「愛里、俺のカノジョの醍醐味ってなんだよ」
「なんでしょう」
「愛里いい」
「頼むからここで IQ ダダ下がりしないで」
「あ？ なに？」
「今日もいっぱい汗をかいて働いてきたんですね」
「すっげえ暑かった」
「まだ暑いですよ、私はクーラーの効いた部屋にいたけど」
「俺はガリガリ君食った」
「ガリガリ君食べたら涼しくなるの？」
「ちっとはサッパリすっかな」
「調べたんですけど」
「なに？」
「現場で働く人用の空調服ってあるんですね」
「着てる人いっぱいいるよ」
「なんであなたは着ないの？」
「日雇いだからさ」
「日雇いの人は着ちゃいけないの？」
「いけなくねえけど、ずっとは着ねえじゃん」
あと二日だし・・・
「熱中症は気をつけてくださいね、今さらだけど」
「おう、こまめに水分補給してっから」
「おススメ動画で見たんですけど」
おススメ動画？
「コンビニの飲み物入れてるコーナーありますよね」
「うん、あるけど」
「犬がそこに頭を突っ込んで涼んでるの、フツ 可愛かった」
「あ、そ、そっか」
「あんまり暑かったら、近くのコンビニに行ってそれやればいいのかも」

「んなことしたら叱られっだろ」
「そうですね フッ ハハ」
「愛里、なんか想像してっだろ」
「はい ハハハハ」
「俺が頭突っ込んで涼んでんの想像してっだろ」
「ハハハハ」
「やっぱかよ」
「でも、すごく具合が悪くなったら、本当にそうした方がいいかも」
「そんな具合悪くなってたら、コンビニ行く途中でぶっ倒れんじゃね？」
「そうですね、気をつけてくださいね」
「気をつけてっから、とうちゃんの握りメシも塩気多めだしさ、
おっちゃんたちがくれるおかずもしっかり味ついててさ」
「熱中症って本当に怖いから」
「だよな」
「生卵を」
生卵？
「グツグツのお湯に入れると白身が白くなりますよね」
「なる」
「脳みそがああいうカンジになっちゃって」
「へ？」
「二度と、二度と！ 生卵には戻れないそうです」
「そ、そっか、うん」
「最近やたらと私のおススメ動画にそういうのが出てきて」
「マジ？」
「前はファッションとかお花とかだけだったのに、今は現場のことばかり」
「え？ 俺のせい？」
「違うと思いますけど、それでいろいろ見ちゃって」
「そ、そっか」
「すごいことをやってるんだなって」
「すごいこと？」
「こんな過酷な暑さの中で、こんなことをやってるんだなって」
愛里 俺がやってること 知ろうとしてくれてんのか
「なんか尊敬しちゃって」
「そ、尊敬？」
「かっこいいなって」
「か、かっこいい？」
「動画ですけど」
「あ、動画、そっか、ああ」
「あなたも」
「えっ？」

「あ、着きます」

俺もかっこいいっすか 愛里

「行きましょう」

「あ、おう」

愛里と電車下りて 手をつないで歩いて

なんかさ なんか しあわせだ

愛里の部屋で

マンションのエレベーターの前

「愛里、俺に相談してえことってなに？」

「今？」

「今は言えねえつつうこと？」

「そうじゃないけど、あなたはシャワーして、おとうさんと買い物行って」

「できれば早く聞きてえんだけど」

「そうですか、それじゃ、私の部屋で」

「おう」

エレベーターが来て二階のホダン押した

愛里の部屋のリビングの床に座って

「なんで床？」

「スボン汚れてっから」

「ていうか・・・ 靴下の裏に大きな穴が開いてる」

「え？ あ、今朝履いたときはここまでじゃなかったんだけどな」

「足の保護になりませんよね」

「明日は、ちゃんとしたの履く、履きます」

あれ？ 俺の足

「ヤダ！ 足に鼻つけないで！」

「や、なんか・・・ 俺の足・・・ 臭せえ」

「いつもだから」

「えっ いつも？」

「そんな驚いた顔する？」

「なんで言ってくんねえんだよ？」

「働くなってそういうものなのかなって」

「やっぱ俺シャワー浴びて」

「いいから！ もうここまで来てるんだから」

「そんでもさ」

愛里の部屋にいと　なんか臭せえのが目立つつつうか

「慣れてますから」

「慣れて・・・る？」

「私は大丈夫です」

大丈夫って んな覚悟決めてますみてえな顔でさ

「話をしてもいいですか？」

「あ、おう」

「正座したって臭いが隠れるわけじゃないから」

「や、んなつもりじゃ」

「楽にしてください」

「あ、そんじゃ」

「どこから言えばいいのかな」

「愛里の好きなとっからでいいよ、俺が頭ん中でまとめっから」

「私の話はまとまりがないっていうこと？」

「や、ちげえ、ちげえよ愛里」

「わかってますけど」

俺はそういう愛里のしゃべり方が好きなんだよ 愛里

「えっと、今日お花の先生のところに行って・・・」

愛里が困ったみてえな顔で上の方見て

「今までは、月に一回、平日の日中に、私が受けたみたいなのレッスンをしていて」

「そっか」

「9月から、週に一度、土曜日にやることにしたそうなんです」

それに行きてえつつうこと？

「それは、午前中2時間午後2時間で、それで先生が・・・」

え？ 俺の顔見てっけど？ なに？

「助手をやってくれないかって」

「マジ？」

「はい、バイトで」

「すげえじゃん！」

「助手もバイトもやったから、それはいいんですけど」

「メッチャいいじゃん」

「今度は毎週ずっとなんです」

「愛里は、やりてえの？」

「助手はやりたいです、でも・・・」

でも？

「いちおう先生には、二学期は行事がいっぱいで」

「行事？」

「運動会とか修学旅行とか」

そうだよ 修学旅行あんじゃん

「あと、中間テストや期末の前はちょっとって」

「土曜日ならできんじゃね？ テストってだいたい月曜からじゃん」

「あなたはね」

「へ？」

「あなたならテスト前の土曜日にバイトしても」
愛里がメッチャ睨んでんだけど
「なんなら日曜日もバイトしても、トップの成績取れちゃうけどねっ」
俺は 今 怒られてんのかな？
「あ、ごめんなさい、やっぱりちょっと動揺してて」
「あ、そっか、うん」
「先生はそれでもいいって、できるときでいいからって」
「だったらいいじゃん、やりてえんならさ、やればいいじゃん」
「本気で言ってる？」
「え？」
「本気の本気で言ってる？」
「本気、これは本気の本気」
「でも、私、土曜日ほぼ一日いないですよ？」
「午前と午後だもんな」
「あなたは・・・ どうするの？」
「え？ 俺？」
「なんか、あなたを放ったらかしてしまう気がして」
んなこと気い使ってくれてたんかよ
「俺は愛里に好きなことして欲しい、マジで」
「でも、土曜日是一緒にはいられなくなっちゃいますけど」
「俺は愛里の部屋掃除したり、とうちゃんと一緒に掃除や買い出しすっからさ」
「それでいいんですか？」
「愛里がやりてえっつうこと、やって欲しい、マジで言ってっから」
愛里が 両手で口元押さえて 下向いてフーッて
「愛里？」
「ありがとう」
「んな、お礼は先生にだろ」
「あなたがイヤがるかなって、ちょっと、そう思っちゃって」
「イヤがるわけねえじゃん、俺は愛里に好きなことして欲しいっつってんじゃん」
「それじゃ・・・ やります」
「おおお！」
「なにそのガッツポーズ？」
「すげえ、愛里、すげえよ」
「そこまでじゃないけど」
「それでもさ、前はバイトっつうだけで怖がってたじゃん」
「今もあの先生のところ以外はムリ」
「だからよかったじゃん」
「はい」
愛里が携帯出して
「先生が私に助手をって言ってくれたのは・・・」

なんか探してる

「これなんです」

これ？ あ、これは

「愛里の、森の下っつう」

「はい、Under the forest の写真を先生が UP していて」

えっ 2,000 いいねって

「すげえ、メッチャいいねされてんじゃん」

「私は最初に UP されたのを見ただけで、あとは新しいのしか見てなくて」

「愛里、すげえよ、俺もいいね押してえ」

「アカウント持ってないでしょ」

「持ってねえとできねえの？」

「やらなくていいから」

「そんでもさ」

「なんていうか、助手をしながら、もっといろいろ教えたいって」

「愛里、それ、見込まれてんじゃん」

「それはわからないけど、私ももっといろいろ覚えたいなって」

「そっか、うん、メッチャいいよ」

「ほんと？」

「うん、マジ」

愛里が やっとホッとした顔でニコリした

「愛里、よかったな」

「はい、あなたのおかげです」

「俺はなんもしてねえじゃん」

「あなたに相談すると、なんかいつも、やってみようかなって思えるから」

「マジ？」

「はい」

「愛里」

立ち上がって 愛里のとなりに そんで 抱きしめて

「あの・・・ そうなると」

俺の腕の中で

「土曜日も・・・ お弁当・・・」

「作るにきまってんじゃん」

「いいですか？」

「愛里の弁当は俺が作る、ずっと」

「ありがとう」

「俺に相談してくれてありがとう」

「あなたには、いちばんに相談したかったから」

愛里 メッチャ嬉しいんだけど

「それじゃ、私、先生に電話してやらせてもらいますって言います」

「そっか、うん」

愛里から腕離して

「そんじゃ、俺はシャワーして、とうちゃんの手伝いすっから」

「はい」

愛里が玄関まで来てくれて

愛里 どんどんきれいになってるよ すげえきれいにさ

「どうしたの？」

「え、あ、んと、足臭くてごめんな」

「今さら ハハハ」

「あとで来るとき廊下とか床拭くからさ」

「大丈夫です」

「そんでもさ」

「私はあなたの足が臭いことより」

臭せえのは臭せえんだな

「あなたの脳みそがグツグツに茹でられちゃうのが心配」

グツグツ？ あ、熱中症か

「気をつけっから」

「生卵のままでいてください」

「わかったよ、生卵のままでいっから」

「はい」

「そんじゃ、あとでな」

「はい」

玄関のドア閉めて

愛里が 前はあんなに怖がってたのに 毎週バイトするって すげえ！

こうやってっと臭くねえよな ゴム長履いてっからかな

シャワーしよう

家の玄関開けて

「ただいま」

「ダイチ」

とうちゃんがキッチンから出てきて

「おかえり」

「とうちゃん、俺の足、臭せえ」

「そっか？」

「愛里の部屋にいたらさ、なんか臭せえなって、そんで嗅いだら臭くてさ」

「そっかな」

とうちゃんが俺の足の匂い嗅いで

「現場にいとこんなもんじゃねえか？」

「そんなに臭くねえっつうこと？」

「俺はわかんねえんだよな」

「とうちゃんのは？」
「わかんねえな」
「ちっと嗅がせてよ」
とうちゃんが右脚あげて
「臭くねえよ、とうちゃんの」
「そっか？」
「何を玄関で足の臭いを嗅いでるのよ！」
「あ、かあちゃん、おかえり」
「美里おかえり」
「ダイチ、あんたの足の臭い、頭が痛くなるほど臭い！」
「ハア？」
「愛里さんもよく我慢してくれてるわよ」
「愛里は俺の足が臭せえことより、熱中症を心配してくれてっけど？」
「愛里さんはね」
な、なんだよ でっけえため息ついて
「こっちの世界にきちゃったからね」
「こっちの世界？」
「もう戻れないわね」
「かあちゃん、なんの話だよ？」
「早くシャワー浴びてきなさい」
「わかったよ」
かあちゃん、愛里がバイトするんだよ
愛里は晩メシるとき かあちゃんととうちゃんに言うんかな
「なにしてるの、早く！」
「おいっす」
「あんた、塩ついてるわよ」
「塩？」
「このへん、首の」
「え？」
あ、なんかザラザラしてんな
「なんかもう、顔に塩つけて足は臭くて」
「シャワーしてきます」
シャワー流して 髪洗って身体洗って 足メツチャ洗って
明日は塩持ってて舐めた方がいっかな
いっつもヤッさんやスギさんがくれる塩分サプリ食ってんだけどさ
今さらか？ そんなでも 脳みそ生卵のままでもいいねえとな
空調服か 涼しそうなんだよな そんなでもあと二日
もしずっと現場で・・・なに考えてんだよ
早く上がってとうちゃん手伝わねえとき

森下家の血

晩メシのとき

愛里はかあちゃんにバイトするってことを報告してた

「もったいないと思ってたの」

「もったいない？」

「愛里さんは類稀なる感性を持ってる、それに技術がつけば」

「ぎ・・・じゅつ？」

「その感性をもっと自分の思い描いた形にできるでしょ」

「そう・・・なんですか？」

「そうよ、どんな世界でも知れば知るほど深いことがわかるでしょ？」

知れば知るほど 深い 現場もそうで・・・

「仕事でもそうよ、これはこういう仕事だと思ってやっているうちに、

もっと効率的なやり方、もっと広げることができる方法を知っていくのよ」

かあちゃんの言ってることが わかる気する

「もちろん壁にぶつかることもある、そのとき、いろいろな技術が身につけていたら、

そこから脱却できる方法を、より迅速に思いつくのよ」

「私は・・・ お花を仕事にするつもりはなくて」

「仕事にしなくていいのよ、たとえば・・・ そうね

お部屋にお花を飾るとき、同じ花材でもいろいろなやり方を知っていれば、

まったく違うデザインを楽しむことができるでしょ」

「あ、そうですよね」

「若いときは吸収力も早いし、好きなことを学びながらバイトって最高よ」

「はい」

かあちゃんは んっとにわかりやすく説明できるよな

俺なんて すげえじゃんしか言えなかったよ

「で・・・ ダイチ、あんたはどうするの？」

「え？ 俺？ なに？」

「二学期になったら、また家政夫のバイトするの？」

「まだなんも考えてねえ」

「一年のときは放課後ほぼ毎日バイトしてたわよね」

それは・・・ いつか愛里とつき合えたときになって

「毎日ですか？」

「そうなのよ、カズオのおこぼれの単発の仕事を拾いまくってね」

今はまだ マジでなんも考えらんねえよ
「あやうく扶養から外れそうになったわよ」
「扶養から外れるって・・・ なんですか？」
「扶養家族は年間収入は103万以下じゃないと扶養控除が適用されなくなるの」
「ひゃ、ひゃくさんっ？」
「カズオもね」
とうちゃんは なんの話かわかんねえ顔でキョトってっけど
自分がどんだけ稼いでっか知らねえんだもんな
「それじゃ、森下家全員がフルに働いたら、すごいことになりますね」
「私の出番がなくなっちゃうわ」
「おかあさんは、会社にとっても森下家にとってもいてもらわないとな存在です」
「まあ、愛里さん、ありがとう」
「私は・・・ 仕事をしてお給料をもらえるようになれるのかな」
「愛里さんは今はそんなこと考えなくていいのよ」
「そう・・・ですか？」
「今は目の前のお花の先生の助手を愛里さんなりにやればいいのよ」
「はい」
前るときと違って 愛里が明るい顔でさ
俺は愛里にずっと好きなことだけさせてあげてえずっと
そのためには 俺は何をすればいいんだ？ 俺に何ができるんだ？
バイトじゃなくてさ 将来の仕事 考えたことねえから
なんでもいいと思ってた 命賭けて惚れた人を守るためならなんでも
そんでも 今 俺は 現場の仕事に魅かれてて
知れば知るほど奥が深くて
「ダイチ、どうしたの？」
「ん？ なんもねえよ」
「愛里さんが毎週土曜日いないのが淋しいの？」
「ちげえよ、それはねえ、マジで」
「へえ」
「あの、私、最初に相談したんです、そしたら本気で応援してくれて」
「あら、そうなの」
「だから、私もやろうって思えたっていうか」
愛里いい ありがとう
「まあね、あんなのと24時間ベッタリいても飽きちゃうしね」
あんなの？
「飽きないです」
愛里いい メッチャ嬉しいっすうう
「予測不能っていうか」
予測不能？
「今日も電車の中で突然泣くし」

あ、愛里 それはさ
「電車の中で突然泣いたの？ やっだあ」
や、だからさ
「ちょっとビックリしたけど」
「ダイチ、あんた情緒不安定なんじゃないの？」
「ちげえよ、それはさ、なんつうか、現場のおっちゃんの話聞いてさ」
「思い出し泣き？」
「思い出し泣きつつうか、そのおっちゃんと奥さんの話聞いて、それで、
そういうことが、や・・ いいっす」
「その人がどうしたの？」
「それは、ショーさんのプライバシーつつうか」
とうちゃんが、えって顔で俺を見たから
「うん、ショーさんと奥さんのこと聞いたんだよ」
「そっか」
「そこまで言ったのなら言いなさいよ」
「それでも」
「ショーさんて、あんたが拾ったホームレスだった人よね」
「拾ったっうか、まあ、その人だよ」
「私も愛里さんも会ったこともないし会うこともないだろうし、
カズオはベラベラ言いふらすようなことはしないってわかるでしょ」
「え、そんじゃ言うけど・・」
俺は ショーさんに聞いた話をして
愛里はポロポロ涙こぼして かあちゃんが後ろからティッシュ出して愛里に渡して
「だから、なんつうか、そういうのって辛えなって」
「それは奥さんが一枚上手ね」
「え？」
「ご主人が別れないって言うなら、ご主人の言葉で切り替えたふりをしないと」
「ふり？」
「そうよ、そうじゃないと、ご主人が前に進めないもの」
「え？ ふりって、俺はショーさんすげえなって」
「もちろん、ご主人も懐が大きい温かい方よ、それでもね」
どういう・・ことだ？
「女にとって、子宮も卵巣も、全摘するっていうのは、男には想像できない辛さよ」
「それは・・ そうだろうなと思う」
「一生どこかで抱えてる、もしあのときって」
一生・・
「それでもまあ、若い従業員の人たちの世話をしているうちに、
子どものように可愛くなったのも事実だと思うわよ」
「うん」
愛里は ティッシュ口元に持ったまま下向いてて

「あんたが泣いたのもわかるわ」
「え？ マジ？」
「あんたなら泣くわよね、話を聞いているときも泣いてたんでしょ」
「えっ あ、まあ、それは」
「あんたはすぐ泣くから」
「それはさあ」
「はい、ごちそうさま」
「あ・・・ おう」
すぐ泣くってなんだよ 泣いたけどさ

愛里とかあちゃんはリビングでなんかしゃべってて
俺ととうちゃんは片付けして
「とうちゃん、ショーさんの話、どう思った？」
とうちゃんがフライパン洗う手え止めて なんか考えて
「たっちゃんが悪りいんだよ」
「えっ？」
とうちゃん そんなもさ
「そしたらよ、奥さんが、美里が言ったみてえに、もしあんときって・・・
そう思ったらよ、たっちゃんのこと恨めんだろ」
それは・・・ とうちゃんが かあちゃんが中絶したときに名前書いたときの
「たっちゃんはそうして欲しいんじゃないかな」
なんか すげえ
とうちゃんも ショーさんも 奥さんも それをわかったかあちゃんも
俺はただ泣いてばっかで
「ダイチは、アイリちゃんには、そういうことになって欲しくねえって思ったんだろ」
「うん」
「それで泣いちゃったんだな」
「なんか愛里の顔見たらさ」
「ダイチはアイリちゃんのが大好きだかな」
「うん」
「女の人、すげえな」
「うん」
「女の人・・・ すげえよ」
「とうちゃん、俺さ、ショーさんにはすげえ悪りいんだけどさ」
「どした？」
「かあちゃんが子宮あってよかった」
とうちゃんは うん うんって
「じゃねえと、俺生まれてこれなくてさ、戻ってこれなかったじゃん」
「そ・・・っか」

あれ？
「どうちゃん、ショーさんの、お腹ん中の赤ちゃんは・・・」
どこに
「戻ってこれねえってこと・・・だよな」
「俺にはわかんねえけどよ」
だよな
「たっちゃんは、いろんな人のどうちゃんになる人だったんじゃないか？」
「いろんな人？」
「その、工場の若けえ子たちとかよ」
「そっ・・・か」
「それでもよ、俺はたっちゃんの、そういうのはわかんねえよ」
「だよな、本人じゃねえとさ」
「俺は・・・ ヒトミやダイチ生んでもらってよ」
「どうちゃん」
「俺が、俺の子って、そんなん考えたこともなかったのによ」
どうちゃんが 俺の顔見て
「ありがてえよ」
「俺もどうちゃんとかあちゃんの子どもに生まれてしあわせだよ」
「またそんな話をしてるの？ 一億回はしてるわよね」
「かあちゃん、それでもマジでそう思ってっからさ」
「男は一瞬の快樂だけ」
かっ かあちゃん
「女はその後 10 ヶ月吐いて具合悪くてお腹は重たいし息は切れるし」
「かあちゃん、わかったよ、もうわかってっから」
「そして出産という」
「かあちゃん、なんか、ごめんなさい」
「ごめんなさいってなによ？」
「生まれてきて」
「太宰治？ やだ、暗っらい」
「や、なんか」
追い詰められて、つい
「あんたのこと、生んでよかったわよ」
「えっ マジ？」
「愛里さんの言うとおりの、見てて飽きないわ」
「ハ？」
「バッカみたいで」
「ハァアアア？」
「ほら、愛里さんのこと送ってあげなさい」
「あ、おう」
かあちゃんの後ろで 愛里がなんか困った顔してんじゃん

かあちゃんが、男は一瞬の快樂とか言うからさっ
そうかしんねえけど ストレート過ぎんだろ

愛里の部屋の玄関

「愛里、バイトの話、よかったな」

「はい」

なんか 嬉しそうじゃねえんだけど

「愛里、どした？」

「え・・・ あの、私は・・・ まだ実感もないし」

「バイト？」

「それじゃなくて」

それじゃねえ？

「そんなの考えたこともないし、正直ボヤッとしかわからないですけど」

なんのことだ？

「やっぱり、好きな人の子どもは生みたいって思うのかなって」

「えっ」

「だとしたら、その人の子どもを生めないって・・・ 悲しいし」

愛里・・・

「生めないから別れてって言うのも、なんかわかるっていうか、ボヤッとですけど」

「愛里、俺はさ、俺は、あ、つうか、男はさ、好きな人がそばにいてくれれば」

「あなたは、子どもを生める人と結婚しないとダメです」

「え？」

「おとうさんとおかあさんの血を絶やしてはダメです」

「え？ あ、そういうこと？」

「できれば息子を」

「息子？」

「おとうさん発祥のハンバーグを受け継ぐ息子」

愛里 それ

「なんて笑うの？」

「や、ハンバーグが出ると思わなかったからさ」

「私は真面目に言ってるんですけど」

「そ、そっか、うん、ハンバーグな」

「バカにしてるでしょ」

「や、してねえよ」

「私は」

愛里がツンとした顔して

「森下家の血は、この世の宝だと思ってますから」

え

「あなたのお姉さんに会って、ますますそう思いました」

「ねえ・・ちゃん」
「森下家の血は絶対に絶やしてはダメです」
愛里 そんな その血を 愛里が
「上原家の血は絶やしてもいいけど」
「それは愛里のお父さんとお母さんがかわいそうだろ」
「いいんです、由緒正しきとか、そういうのじゃないから」
「んなこと言うなら、とうちゃんなんて浮浪者でさ」
「そういうことではないの」
「愛里が先に言ったんじゃない」
「森下家の血は、人をしあわせにするから」
「え・・」
「絶やしてはダメだなんて」
「愛里」
抱きしめて んなこと言ってくれんなんてさ
「俺は？」
「あなた？」
「俺は・・ 愛里をしあわせにしてっかな」
「あなたの中には、おとうさんとおかあさんの血がドクドク流れてるから」
「ドクドクってなんだよ」
「だから、絶やしちゃダメ」
「そっか」
「はい」
「俺は・・」
それを愛里にやって欲しい
今はまだ言えねえけど いつか
だから 今は まだ今は これで 伝わって
くちびる離すと
「なんか・・ 進化してる」
「え？ 進化？」
「あなたの・・ ハムハム」
「ハムハム？ あっ えっ 進化って えっ？」
「練習したんですか？」
「し、してねえよ、どうやってすんだよ？」
「知らないけど」
「愛里、俺は練習とかしてねえから」
「そうですかそれじゃまた」
「え、あ、うん、そんじゃまた」
ドア閉めたら 速攻で鍵
愛里！ 俺は練習してねえから！ 信じてくれよ！
進化してるって・・ マジ？ あ、ヤベ

俺は一瞬の快樂じゃねえから 結果そうだとしても 一瞬とかじゃ
んなこと ここで考えてねえで 家に戻ろう

次の仕事

今日も暑くなりそうだな

それでも空の色が変わってきて 8月ももうすぐ終わりだもんな

「ダイちゃん、おはよう」

「ショーさん、おはよう」

「ヤッさんとスギさんは、次の現場で打ち合わせしてから来るってさ」

「そっか」

「次の現場は大掛かりだろ、体育館だからな」

「体育館壊すとか想像できねえよ」

「土木っていうのはすごいな、いろいろな職種の人が集まって、

ひとつの、なんていうのかな、町の一部を作るんだからな」

「うん」

俺も 本当にそう思う

「俺はトイレ掃除してくるよ」

「ショーさん、俺も手伝うよ」

「トイレ掃除は俺の仕事だからさ」

「ヤッさんたちいねえと、俺は何していいんかわかんねえからさ」

「そうか、監督もまだ来てないしな」

「うん」

ショーさんと二人で便所掃除して

「ダイちゃんとかうやって一緒にトイレ掃除するとかさ」

ショーさんが隣の便所から

「工場で若い子と一緒にトイレ掃除してた頃を思い出すな」

ショーさんの声は 感傷的じゃなくて楽しそうだし

俺は ショーさんに謝んねえといけねえことがあって

「ショーさん、俺、ショーさんに謝らねえとなんねえことがあってさ」

「なに？」

「ショーさんの奥さんの話、とうちゃんと」

「カズは知ってるよ」

「えっえっ？」

「バーベキューのとき、俺も酒が入ってたから、話の流れでな」

とうちゅんは 知ってたか
「カズは、俺もおんなしだよってさ」
とうちゃん・・
「俺が悪りいんだよって、たっちゃんも悪りいんだなってさ」
「ゆうべもそう言ってた」
「カズは俺の気持ちをわかったくれるんだって嬉しかったよ」
「そっか」
「それで？ お母さんにも言ったの？」
「うん、ごめん」
「いいんだよ、ダイちゃんのお母さんならさ」
「かあちゃんさ、奥さんが一枚上手だって」
「え？ 女房が一枚上手？」
「ショーさんの言葉で切り替えたふりしねえと、ショーさんが前に進めねえからって」
「ああああ、そうか、そうだよなあ、カナちゃんはなあ」
え？
「俺の女房はさ、小学生のときから俺より頭がよくて運動神経もよくてさ」
「そうなんか」
「中学のときなんて区の大会で優勝したくらい走るのが早くてさ」
ショーさん、すげえ嬉しそうにしゃべってる
「高校も大学も、カナちゃん短大だけど、俺よりずっといいところに入ってさ、
よく俺なんかと結婚してくれたよ」
「それはショーさんがメッチャ魅力のある人だからだろ」
「ダイちゃん、お世辞うまくなったねえ」
「お世辞じゃねえよ、俺マジでそう思ってたんだよ」
「ダイちゃんにそんなふうに思われてるなんて嬉しいな」
「マジでさ」
「でもな、結局不幸にしちまったからな」
「ショーさん、奥さんがどこにいるのかマジでわかんねえの？」
「わからないよ、わかったとしても、どのツラ下げて会うんだよ」
「そのツラ」
「アハハハ、このツラ？」
「いっぺえ苦労して辛れえ思いしてそんで今こうやって働いてるショーさん」
「ダイ・・ちゃん」
ショーさん 目えシバシバさせてっけどさ
「俺は浮浪者になる前のショーさんは見たことねえけどさ」
そんでも
「今のショーさんは、そんなときよりもっとずっといい顔してると思うからさ」
「ダイちゃんは・・」
ショーさんが ちょっと背伸びして俺の頭クシャクシャッて
「ショーさん、便所掃除したゴム手で俺の頭」

「あっ、ごめんな、ごめん」
「いいよ どうせ汗臭くなんだからさ」
「ダイちゃんは若いのに、汗臭くなっても汚れても気にしないよな」
「つかさ、昨日、愛里の部屋に入ったらさ、俺の足臭っせえんだよ」
「アハハハ」
「だいづー！」ショーさん！」
「ヤッさん！ スギさん！ おかえりなさい」
「いんやいんや、朝早くっからあ打ち合わせあってはあ」「んだのさ」
「新しい現場んときってそうなんすか？」
「んだなあ、いろんな業者も入っからなあ」
「そうなんすか」
「もう足場職人は入ってやってらんだした」「よんじょうも」
「よんじょう？」
「養生シート、他のところもまだ現場あっからあ、先にそっからなあ」
なんか 話聞いているだけでワクワクする
「ほんじゃ、こっちも始めねえとおなあ」
「おいっす」
ヤッさんやスギさんの話聞いてっと 俺もその現場に入るみてえな気になっちまう
けど 俺は明日までで ここの仕事を最後までしっかりやらねえとだよ

昼休憩

「だいづは汗びっしょりではあ」
「10時休憩んとき絞って乾かしたんすけど」
「だいづはいい身体すでらな」
「そうっすか？」
「筋トレすでらのが」
「やってねえっす、現場だけっす」
「はあああ、現場で働いてえ、あ〜んないい身体になるってはあ」
ヤッさんが腹ポンポン叩いて
「俺の腹なんてはあ、おっかあに万年臨月って言われちまってんだあ」
「おめの腹はビールっ腹だべや」
「そ〜れはやめらんねんだしたあ」
「ダイちゃんは、この現場終わったらどうするの？ 働く先は決まったのか？」
「俺、高校生だからさ」
「コーーコーーセー？」
俺が高校生っつうと みんなこんな反応すんだよな なんでだ？
「ショーさん知らねがったのお？」「監督しゃべっでらっだべ」
「おとなっぼいしさ、働き慣れてるっていうか」
「土曜日は始業式でさ」

「いんやいんや」「わいわい」「なんか途端に可愛く見えるね」
おっちゃんたち笑ってっけど マジで始業式なんだけどな
「だいづは工業高校かぁ?」「商業ではねべ」
「普通高校っす」
「そりゃ・・・就職大変だっぺ、募集来てんのぉ?」
「うちの高校は・・・」
ほとんど進学だから 就職の募集って見たことねえな 直に先生に相談らしいし
「あんまねえっすね」
「俺のバカ息子は工業だったっぺ? 工業高校は募集いっぺどこ来んだした」
「マジっすか?」
「工場とかあ、こういう建築とかはあ、即戦力だっぺ」
「そっか・・・俺、入るとこ、もっとちゃんと考えればよかったんかな」
「な〜んで普通高校にしたんだあ?」
「え・・・本当のこと言っても引かねえでくれますか」
「な〜んも本当のこと言ってくんちえ」「んだ」
「家からいちばん近かったから」
「あ?」「へ?」「本当?」
「うん、ギリまで寝てられっかなって」
「アハハハハ」「わい、そりゃアハハハ」「ダイちゃんらしいよ アハハハ」
「仕事は稼げればなんでもよかったんで、そこ考えてなかったっす」
「だいづならあ、どこでもやってけっからあ」「んだ」
「俺なら頭下げてでも来て欲しいと思うよ」
「マジ?」
「そんだよお、そんでもお、もしどこもねえってときはなあ」「んだな」
どこもねえのはやべえよ
「うちの会社にい入れっぺ」「んだ」「監督も本当は欲しいんじゃないかな」
「え?」
この会社に・・・
「若手の勧誘?」
あ、監督
「勧誘つつうかあ、だいづなら高校出たらあ、ここで働けっぺってはあ」
「森下ねえ、俺はもっと別なことをして欲しいんだけどな」
「別なことって、鳶とかっすか?」
「そういうことじゃないよ」
笑ってっけど 俺は・・・向いてねえってことなんかな
「話は変わるけどさ」
話 変えられた
「前に森下に紹介してもらった家政婦紹介所」
「ポピンズっすか」
「うちの奥さんに任せてたんだけどさ、来週から来てもらうことになったよ」

「よかったっすね、あそこ、みんな長期の仕事多くてなっかなか空いてねえんすよ」
「そうなんだってね、それで所長さん？ 社長さん？」
「丸山のおばちゃんすか？」
「その人が伝説の家政婦さんが今空いてるって」
伝説の家政婦？ あ・・れ？
「うちの奥さん飛びついてお願いしたって」
「そうっすか」
「俺じゃもう、ムリ」
「あそこに登録してる人たち、やり手ばっかだから大丈夫っすよ」
「そうか、それを聞いただけでもホッとするよ」
「あそこに来る苦情つつたら、もっかい頼みてえのに空いてねえつつうくれえで」
「そうなんだ、それはいいところを教えてもらったな」
「おいっす」
「例えばさ、一週間働いてもらって、もっと長くとかはできるのかな」
「あそこの人たちは長期の仕事大歓迎なんで大丈夫っすよ」
「そうか」
俺も二学期から放課後単発の仕事入れてもらうかな 愛里と相談だな
「それじゃ午後もよろしく」
「おいっす」
ヤッさんたちが俺の方に寄ってきて
「監督はあ女中さん雇うのお？」「今だば女中で言わねべ」
「奥さんが産後でまだ大変なんで、掃除とか洗濯とかのヘルプつつうか」
「そんだなあ、俺のおっかあもお、バカ息子生んでえ、片頭痛になっちまってえ」
「片頭痛っすか？」
「生んで一ヶ月は水さ手えつけんなって言われたんだけんちょ、
そ〜ったのムリだっぺ？ そんでなっちまってはあ」
「わんどごはばっちゃんいだはんでや」
ん？ え？
「だいづのお母ちゃんも苦労したっぺ？ 働いてえ子ども生んでってのはあ」
「とうちゃんがやったって」
「カズさんが？」「カズさん？」
「退院してからはとうちゃんが全部やったつってました」
「退院してすぐつつたらはあ、泣いてばっかではあ」
「とうちゃんは泣かせなかったって」
「手で口ふさいだあ？」
「それじゃ死んじゃいますよ ハハハ」
「ほんしゃ、どうやってえ？」
「最初はほとんど寝てなかったらしいっすけど」
「いんやいんや」「わいわい」
「だんだん、シッコするとかウンコだなんてわかって」

「予知能力け？」

「や、なんか世話してるうちにわかるようになったって」

「わっかんねっぺ、俺のおっかあなんてはあ、なんで泣いてんだあってえ、

おっかあまで泣いちゃってはあ、いんやいんや、困っちゃったんだよお」

「どうちゃんは、俺みてえな浮浪者の子生んでもらえるなんて夢みてえだって」

「そりゃ・・・」「んだのが・・・」

「かあちゃんは生んでくれたんだから、これからは俺の番だつったって」

「はああ、や～っばカズさんはすげえした」「すげな」

「俺もどうちゃんみてえになりてえっす」

「だいつならなれっぺ」「んだよ」

「愛里があ」

「ほ～れ、あいりちゃんのことになっとお、だいつの鼻の下ペロ～ンてはあ」

「んなことねえっすよお」

「ほんでえ？ あいりちゃんがなんだってえ？」

「俺は息子を持つべきだつって」

「だいつの息子ならあ、はああ可愛いっぺ」「めごいべ」

「愛里ちゃんは男の子が欲しいのか」

「や、つか、どうちゃん発祥のハンバーグを受け継がせんのは息子だつて」

「ハンバーグ？」「ハンバーグってえ、あのハンバーグ？」「なすて？」

「あの味は代々受け継ぐべき味だつって、息子に受け継がせねえとつって」

「あいりちゃんはおもしろした アハハハ」「んだ アハハハ」「それはいいね」

「そうなんすよ」

「ほんでもお、今はなあ、作っちゃなんねっぺ」「んだな」

「ハンバーグダメっすか？」

「ハンバーグでねした、あれ、ちゃんとあれしてんだつたべ？」

「あれ？ あれってなんすか？」

「だからあ、ほれ、なんつうんだあ、スギさん」「わにしゃべれっでが？」

なんなんだ？

「なんてしゃべ・・・ あれだ、ぼうすこつげでや」

「ぼーすこ？」

「帽子ってなあ、スギさん、それじゃわかんねっぺ」

「ダイちゃん、避妊はしてるんだよな」

「避妊？ あっ いやいやいや、そういうことしてねえんで」

「やんねえとお、高校生で子どもできちゃったらはあ」「めでてけどや」

「や、あの、高校卒業するまでは、そういうことはしねえって愛里と約束してるんで」

「いんやいんやいんや」「わいわいわい」

え？ なんだ？

「や、あの、愛里のことは大切にしてえつつうか、ぜってえ守りてえって」

「あいりちゃんはしあわせだあ」

「そうっすか？ マジっすか？」

「そ〜ったに大切にされてえ」「んだよ」
「そっすかね、へへ」
「高校生つつたらはあ、サルみてえになあ」「んだ、んだった」
サル???
「だいづ」
「え、あ、おいっす」
「いっぺえ身体動かしてえ、発散すればいっぺ」
発散?
「何をっすか？」
「何をってのはあ、なんつうんだあ？　あり余るエネルギーっつのお？」
「俺まだまだ全然いけるんで」
「そんだなあ、ほんじゃ、午後もなあ」
「おいっす、がんばりますっ」
ショーさん？　下向いてすげえ笑ってけど　どした？
「ショーさん？　昼休憩終わるよ」
ショーさんが　笑いながら俺の顔見たけど
「ダイちゃんといると楽しいよ」
「俺もショーさんやヤッさんやスギさんといると楽しい」
それでも　それも・・・
「それじゃ俺はトイレ掃除してくるよ」
「おう」
明日で終わり・・・か

証明証

三時休憩

ヤッさんは急遽必要になった道具取りに行ってて

スギさんは・・・ 便所かな

俺はショーさんと並んで路肩座って水飲んで

「ダイちゃんにさ、見せたいものがあるさ」

ショーさんがそう言いながらケツポケットに手突っ込んで

小せえビニール袋にくるんでる・・・ なんだ？ 免許？

「ショーさん、これって運転免許だよな」

「そうだよ」

「すげえ、ゴールドじゃん」

「運転は気をつけてたからな」

「正確に丁寧にだもんな」

「ハハハ、ダイちゃんよく憶えてるな」

「ショーさん、8月1日生まれなんか」

「またひとつ歳取ってたよ」

え？ ちょっと待て これ・・・

「ショーさん、これ、今年の9月1日まで有効って・・・ あさってまで？」

「そうだよ」

「更新しねえの？」

「もういいんだよ」

「いいってなにが？」

「この一枚にしがみついていたんだよ」

「しがみついていた？」

「俺はいるっていう、証明かな、この住所になんかもう住んでないし、

住むところだってなかったのにさ、捨てきれなかったんだな」

「ショーさんは、ちゃんというよ、ちゃんといたから、俺、ショーさんと会えたじゃん」

「そうだな、ダイちゃんは見つけてくれたな」

アッ ウッ アアアア

な なんだ今の？

「ショーさん、今のなんだ？」

「スギさんの声・・・ じゃないか？」

「えっ？ スギさんどこ？ 便所？」

ショーさんと便所に走ってって
「スギさん？ スギさんっすか？」
「あ・・・あ・・・」
まさか いぼ痔？
「スギさん！ いぼ痔から血い出た？」
「な・・・も・・・」
なも？ なもってなんだ？
「ダイちゃん、もしかしたら」
え？
「スギさん、腰やったのか？」
「ん・・・だ」
「ぎっくりか」
え？ ギっくり腰？ どうすりゃいいんだ？
「スギさん、鍵は開けられるか？」
「あ・・・ん」
「鍵を開けてくれよ」
鍵が 開いた
スギさんが へっぴり腰みてえな恰好で立ってる
あ！ ズボン半分下がってるよ
「ショーさん、スギさんのズボンが」
「あ、えっと、スギさん、ズボン上げるよ？」
「ちよすど・・・いで」
え？ ん？
「触ると痛いんだな」
「んだ」
んっと どうすっかな あ！ そうだ
「スギさん、俺の肩につかまっててよ、少しは楽じゃねえかな」
「めわぐだぁ」
「いいからさ」
スギさんが中腰になった俺の肩につかまって
「ショーさん、これならズボン上げられんじゃね？」
「そうだな、スギさん、ズボン上げるよ」
「めわぐだぁ」
「俺もぎっくり持ちだからわかるよ」
「んだが」
「スギさんは初めてか」
「んだ」
「俺は放っておいてクセになっちゃったからな、病院行った方がいいんだけど」
「こすだかっこで・・・行けねべ」
「どうした？」

監督！

「スギさんがぎっくり腰に」

「ぎっくり？ 病院行った方がいいな」

「ちょっと休んでればなおるはんで」

「クセになると厄介だからさ、車で・・・って、ああ！ ヤッさんいないんだ」

監督が頭抱えるって珍しいな

「終業まで俺の車で横になってもらうか」

「横になってたら治るんすか？」

「治らないけどさ、そうやって立ってるよりは楽だろ」

「早く病院行った方がいいんすよね？」

「そうだけどさ、職長のヤッさんがいないのに俺も抜けるわけにいかないよ」

ショーさんの顔見たら 下向いて すげえなんか・・・

「監督、ショーさん運転できるんすよ」

「え？」「ダイちゃん！」

「あさってまで有効だから運転できるんすよ」

「ショーさん、免許持ってたの？」

ショーさんが下向いたまま頷いて

「もっと前に言ってくれよお、そうだったらもっと手続き、まあ今はいいや」

「ショーさん、スギさん助けてあげてくれよ」

「でも・・・、二年以上乗ってないから」

「俺はチャリっきゃ乗れねえけどさ、そういうのって身体が憶えてんじゃん」

「チャリと車は・・・」

「ショーさんゴールドじゃん！ 正確に丁寧にだろ？」

「ダイちゃん・・・」

「今スギさんを助けられんのはショーさんだけなんだよ」

「え・・・」

「ショーさんがここにいつから、スギさんのこと助けられんだよ」

ショーさんが 俺の顔見て

「監督、車借りていいですか」

ショーさん！ かけえ！

「もちろん、ナビに病院の住所入れるから、二駅先だからすぐだよ」

「ダイちゃん、スギさんを車に乗せるの手伝ってくれ」

「おう！」

一步一步ゆっくりゆっくり歩いて 監督の車について 監督が後ろのドア開けて

「スギさん、ここに寝て」

「めわぐだぁ」

スギさんが這うみてえに座席に乗り込んで横になった

監督がショーさんに車の鍵とスギさんのカバン渡して

「病院には電話しておくから、救急で診てもらえるようにしておく」

「はい」

「診察終わったら、そのまま寮に直帰してくれ」

「はい」

ショーさんが運転席から俺を見た

「ショーさん、かけえ」

ショーさんがちょっと笑って

「ダイちゃん、いってくるよ」

「ショーさん、いってらっしゃい」

ショーさんが運転する車が現場の敷地を出た

「森下、ショーさんが免許持ってるって知ってたのか」

「ついさっき見せてもらったんす」

「あさってまで有効って、どういう意味？」

「免許証に今年の9月1日まで有効って書いてあったんで」

「ショーさんはなんで俺に見せなかったのかな」

「この一枚にしがみついていたって」

「どういうこと？」

「俺がいるっていう証明で、捨てきれなかったっつって」

「いるよ、いてくれてよかったよ」

「そうっすよね、ショーさんすげえっすよ」

「森下ってさ」

「え？ なんすか？」

「点と点を一瞬でつなげるよな」

「え？ あ？」

「あああ、やだねえ、進学高校のボンボンは」

「えっ、な、なんで俺、今ディスられてんすか？」

「驚いてるんだよ」

「ハ？」

「森下はもう少し休んでていいよ、あと10分くらい延長」

「おいっす」

「俺は病院に電話してくる」

「おいっす」

路肩に座って

ショーさんが運転してんの かっこよかったな

ショーさんいてくれてマジよかったよ

俺はぎっくり腰なんてわかんねえしさ 運転もできねえし つか、まだ取れねえ

俺は 免許取った方がいいのかな まだ取れねえから今考えてもじゃあねえよ

ショーさん 誕生日8月1日だったんか 俺と会う前か どうやって過ごしたんかな

一人で・・・だよな 誰も祝ってくんなくてさ なんか・・・できねえかな

誕生日会とかそういうんはムリだけどさ プレゼント？ 何がいいんだ？

下着？ 俺から下着？ キモイよな 作業服？ 会社から支給されたやつ着てるよ

俺なんかよりずっとりっぱなやつ着てるよ そんじゃ・・・ んっと・・・

あ！ 財布！ ショーさん財布持ってねえよ、いつもケツポケットに小銭入れててさ
それでも・・・ 渡せんのかって 明日っきゃねえじゃん そんなで俺が選んでってさ
あ！

『愛里』送信

『頼みがあんだけど』送信

ピコン よかった

『ビックリした』

ピコン

『何ですか？』

『ショーさんに誕生日プレゼントあげたいんだけどさ』送信

『ショーさん財布持ってねえから財布がいいと思うんだけどさ』送信

『明日っきゃ渡すときねえし』送信

『俺が選んだらダッセーんだろ？』送信

『悪いけど』送信

ピコン

『私に選んで買ってこいと』

や、んな使いっ走りみてえな気持ちじゃねえんだけどさ

ピコン

『予算は1,000円ですか？』

え？ やってくれんの？

『いくらでもいい』送信

ピコン

『10万円でも？』

『愛里がそれがいいと思ったらそれでいい』送信

マジでさ

ピコン

『あなたが10万円とか』

ピコン

『怖い』

怖いってさ

ピコン

『わかりました』

マジ？

『愛里 ありがとう！』送信

ピコン

『ショーさんて浮浪者だった人ですよ』

『うん』送信

ピコン

『工場をやっていた人ですよ』

『うん』送信

ピコン

『わかりました』

『愛里マジありがとう』

ピコン

『また新たな挑戦です』

挑戦？

ピコン

『燃えます』

燃える？

ピコン

『それじゃ買ってきます』

『愛里 よろしく願います』送信

ピコン

『はいはい』

はいはいって 可愛いなあもうっ

さてと 便所掃除すっか

スギさん入ってたところ あっ ウンコ流してねえ

あれ？ え？ トイレットペーパーに・・・ これって・・・ 血じゃね？

スギさん いぼ痔もか？

わかんねえけど、早く掃除しねえと他の人が入れねえよ

ショーさんの財布

帰りの電車中

あの後 つか 終業ギリでヤッさんが戻ってきて

監督はヤッさんの車 つか会社のだけど それに乗せてもらって帰った

「明日は電車出勤だよ」って笑ってた

ショーさん 車運転してたよ カッコよかったよ

やっぱ免許は取っといた方がいいのかな かあちゃん反対すっかな

そんでもさ、一家に一人は運転できるのがいたら なんかあったときに

なんかなくてもさ、ちょっと遠いホームセンターに行くとかさ

車ならいっぺえ買っても持って帰れるじゃん

それに・・・大型取るのも重機の免許取るのも普通免許ねえとさ

や、重機免許取るとかそういうことマジで考えてるわけじゃねえけど

ピコン 愛里だ

『あなたから依頼されたもの』

ピコン

『だいたい用意はできました』

だいたい？ 財布買ってそんで終わりじゃねえの？

ラッピングか そんでもショーさんにハートの袋はな

そこは愛里のことだからセンスいいの買ってくれたんだろうな

ピコン

『あなたもやらなければならないことがあります』

俺？

『何すればいい？』送信

ピコン

『帰ってきてから説明します』

なんだ？ あ、カード書けとかそういうやつ？

『愛里』送信

『突然頼んだのに』送信

『ありがとう』送信

ピコン

『お礼はまだ早いです』

え？

ピコン

『私はまだ取り込み中なので』

ピコン

『夕食までにはあなたの家に行きますけど』

ピコン

『それまでは』

ピコン

『Leave me alone』

なんだよ ハハハ 英語でさ 放っておいてくれか

『Okie Dokie』送信

ピコン

『気楽にしていられるのも』

ピコン

『今のうちです』

え？

なんだ？ 愛里はまたおもしろえこと考えてんのかな

どんな財布買って来たんかな メッチャ楽しみだな

家の玄関ドア開けて

「ただいま」

「ダイチ、おかえり」

「とうちゃん、スギさんがぎっくり腰やっちまった」

「えっ そりゃ・・・」

「ショーさんが監督の車で病院連れてったよ」

「カントクノクルマ？」

この言い方は とうちゃん事態を把握できてねえな

「ショーさん免許持ってたんだよ」

「免許つつたら・・・車のか？」

「あさって失効しちまうんだけどさ」

「そっか、スギさん・・・働けんのかな」

「え？」

「現場で腰やっちまって働けなくなったって、いっぺえ見てっからよ」

「だ・・・大丈夫じゃね？ 速攻で病院行ったからさ」

「だどいいな、働けなくなっちまったら・・・なあ」

「とうちゃん、スギさん働けなくなっちまったら、どうしよう」

「どうもできねえなあ、俺は・・・なんもできねえな」

こういうことか ケガしたら働けなくなって・・・

や、スギさんはまだそうと決まったわけじゃねえよ

「とうちゃん、俺シャワーしてくるよ」

「そっか、晩メシはハンバーグにすっからよ」

「ハンバーグか」

「アイリちゃんが食べてえつつあったからよ」

そっか 森下家のハンバーグ発祥のとうちゃんのハンバーグか

晩メシの準備は終わって

俺ととうちゃんは、愛里とかあちゃんの明日の弁当の下ごしらえして

「おじゃまします」

愛里だ！

「愛里」

あれ？ メッチャ顔がこわばってんだけど なんかこの顔 前にも見たことあんだけど

「愛里？」

「夕食が終わったら、あなたにはやらなければならないことがあります」

「おう、いいよ、なんでもする」

「なんでもって言いましたね」

「え？ あ、うん、なんでもする」

「わかりました」

なんだ？ どした？ そんで後ろに隠してんのは・・・ 花用の手提げだよな

晩メシするときも 愛里はボーッとなんか考えてて

「愛里さん、どうしたの？」

「え？ あ、いえ」

かあちゃんが心配するくれえで どうしたんだ？

ショーさんの財布選び そんなに大変だったんか？ 予算 1,000 円じゃねえのに？

「あの、食事が終わったら、おかあさんとおとうさんにもやってもらいたいことがあって」

「あら、私に？」

とうちゃんはキョトンとしてて

愛里が足元に置いてる手提げから カード？ やっぱカードも買ったんか

「これを見てください」

愛里がカード開いた・・・ら ハッピーバースデーの曲が流れて

うわっ すげえ バースデーケーキが立体になってんじゃん

「愛里さん、誰の誕生日？」

「現場のショーさんという方の誕生日が 8 月 1 日で」

「え？ 今日は 30 日よね」

「私も今日聞いたので」

えっ 愛里が俺のこと睨んだ や、俺も今日知ったばっかでき

「ケーキは持っていけないので気分だけでもって」

「それはいいアイデアね、しかもこのカード、可愛すぎなくてステキね」

「これで 580 円使ってしまった」

愛里が俺をジッと見たけどさ 全然いいよ 予算は好きにしてくれつつったじゃん

「このカードは、ここに寄せ書きができるようになっていて」

ケーキの下か

「おかあさんとおとうさん、私も書きますけど、一言書いたらどうかなって」

「私も？ 会ったことないわよ？」

「私も会ったことはないですけど、会ったことないのにどうなのかとは思ったんですけど、

ショーさんは浮浪者だったので、特に今年の8月1日はどっぷり浮浪者で」

どっぷりって おもしれえ

「今笑いましたか？」

「あ、や、笑ってねえ」

「だから、できるだけいっぱいの人たちにお祝いの言葉をもらったら嬉しいかなって」

愛里・・ んなこと考えてそのカード選んでくれたんか

「もちろん、あなたも書いてください」

「おう」

「これを開けて、この曲が終わったら、ショーさんにこのロウソクをフーッて」

「んなことすんの？」

「イヤならいいです」

「や、やる、うん、やる」

「まあそういう雰囲気だけでも味わってもらえたらなって」

「愛里さん、すごいわ、たった1枚のカードで誕生日の雰囲気をすべて表現するなんて」

マジ すげえよ 愛里

「書いてもらえますか？」

「書くわ、カズオも書くわよね？」

「あ？ あ、うん」

とうちゃんが俺に顔近づけて

「ダイチ」

メッチャ小せえ声で

「誕生日の誕がよ、読めんだけど、書けっかな」

「ひらがなでいんじゃない？」

「そっか？ そんなら、うん」

「モリシタダイチさん」

「え？ あ、はい」

「あなたには、すごくすごくすごく重要な使命があります」

「使命？ あ、うん、わかった」

「片付けが終わってからでいいですけど」

「片付けは俺がやっからよ」

「おとうさん、ありがとうございます」

「とうちゃん、ありがとう」

「いんだよ、ダイチにはやんなきゃなんねえことがあんだろ？」

「ありますっ」

愛里がピリッピリしてるときって　なんだ？　生理じゃねえし　前にもさ

リビングのカーペットの上に愛里が正座して

「愛里、ソファ座ったら？」

「そんなことは今はいいです」

「あ、はい」

「あなたに頼まれて、ショーさんのお財布を」

「あ、うん、あった？」

「話を聞いて！」

「あ、はい」

「いろいろ考えました」

愛里なら考えるよな

「おとなの男の人には、革か合成の革のお財布かなって」

「そっか、うん」

「上を見たらキリがないので見ませんでした」

「あ、おう」

「本革で3,000円台のもありました、もっと安いのは・・・むしろ買わない方がいいみたいな」

安くなくていいつつったじゃん

「でも、考えたんです」

「な、なに？」

「10代のあなたが、おとなの人にお財布を買ってあげるって、どうなんでしょう」

えっ　そっから？

「もらう側としても、10代のあなたから革のお財布って、心から喜べるかなって」

どう・・・すりゃ　いいんだ？

「これは・・・これは・・・」

え？　なんでそんな泣きそうな顔になってんの？

「作るしかないんじゃないかなって」

「えっ　つ、作る？」

「作ったものなら、ショーさんも喜んでくれるんじゃないかなって」

「俺が作ればいいんか？」

「だから！　最後まで聞いて」

「あ、はい」

「あなたはお財布を3個持ってますよね」

んっと・・・　愛里用のと小遣い用と現場用に愛里が作ってくれたやつ

「うん、3個持ってる」

「でも、ショーさんは1個もない」

「ねえんだよ、だからさ」

愛里が俺を睨んだ 黙れつつうことか
「ということは、今回のお財布がメインということなので」
たしかに だよな
「私が前にあなたに作ったようなのではダメだなんて」
そっかな ねえよか いや、黙っとかねえと
「なんで私はこんなこと思いついちゃったのかなって途中ですっごい後悔したんですけど」
愛里が両手で頭押さえてっけど
「これしかないなって」
「そ・・・そっか」
まだ全然わかんねえけど
「タイトルは、スリムでたっぷり容量長財布、私のオリジナルではありません」
「あ、そっか」
「現場でも使うとなると、生地はビニールコーティング素材がいいんだろうけど、
ちょっと革っぽくて縫いやすそうな生地があったので」
わざわざ生地買いに行ってくれたんか
「あとはジッパーで、合計・・・ 1,130 円」
「えっ？」
「130 円オーバーになっちゃって、そこがちょっと負けた感があるけど、
生地は安売りで、キャラメルブラウンのステキなのがあって、
ジッパーがちょっと、130 円オーバーの元凶はジッパーですけどステキだったから」
俺は・・・ 1,000 円でなんて言わなかったのに 愛里は・・・
「ここまでは作りました」
愛里が手提げ袋から・・・
「ここがカード入れで、このジッパーのところは小銭入れで」
すげえ なんか・・・ すげえ
「でも、作ってる途中で考えたんです」
「え？ な、なに？」
「あなたも作らなきゃって、あなたからのプレゼントだから」
「ほんでもこれ、ほとんど愛里がさ」
「材料費は請求します、レシートあるし」
「それは、うん、払う、ぜってえ、んな」
俺は・・・ 正直 ちっと 泣きそうになってて
「この動画を見てください」
愛里が携帯出して 財布を作ってる動画を再生した
「えっと・・・ ここまでは私がやったから、あなたはここからです」
「縫い代 3mm でぐるっと縫うつつうことか」
「そうです」
「そっか」
俺は泣きそうになってて ヘタすっともうチロッと涙が目の端に

かあちゃんのみシン出して
「糸はこのマスタードイエローにしたらアクセントになるから」
「おう」
泣いてらんねえ 愛里がこんなきれいに縫ってくれたんだから
最後の仕上げはピシッときめねえと
「早い」
「あ？ ダメ？」
「じゃなくて、なんの迷いもなく 3mm 幅をそんなに早く縫えるって」
「んっと、あの、いいんだよな？」
「完璧です、あとこっただけです」
「おう」
できた すげえ メッチャすげえ財布 できた
「あとは、それをこの袋に入れてください」
愛里が自分の手提げ袋から
「愛里、これって愛里の袋の生地？」
「そうです、まだ残ってたから」
「愛里が・・・ 作ったんか」
「これは楽でした、そのお財布にくらべたら一億倍楽」
こんなまで作ってくれて
「紙袋より、こういうのなら使えるかなって、現場にタオルとかティッシュとか？」
んなことまで考えてくれて
「えっ やだ、なんで泣くの？ なに？」
「や・・・ なんか・・・ すげえ・・・ 嬉しくて」
「あなたにじゃないですよ？」
「愛里さん」
あ、ヤベ かあちゃんいたんだった
「感動して泣いてるのよ」
「感動？ でも、これはショーさんので」
「愛里さんの細かい気配りが温かくて感動してるのよ」
「細かい？ 神経質過ぎましたか？」
「ここまで相手のことを考えるなんて、なかなかできないわよ」
「そう・・・ですか？」
「私も横で聞いてて感動しちゃったもの」
かあちゃんも？
「私とカズオは書いたわよ」
かあちゃんが愛里にカード手渡して
「ありがとうございます」
俺と愛里も書いて
“一男の妻で大一の母です
8月1日のお誕生日 遅ればせながらおめでとうございます 森下美里”

“たっちゃん たんじょう日おめでとう 森下一男”

“8月1日のお誕生日おめでとうございます 上原愛里”

“ショーさん 8月1日の誕生日おめでとう！ 森下大一”

「愛里、ありがとう」

「なんとか、できて、よかったです」

明日 ショーさんに渡す

明日で最後だけど その最後の日にさ

それぞれの予約

愛里の部屋の玄関

「愛里、ショーさんの財布とかいろいろ、本当にありがとう」

「あなたから何か頼まれるときって、いつも新たなる挑戦みたいで」

新たなる挑戦？

「最初は燃えるんですけど、どんどんいろんなこと考えちゃって、

それで自分で自分のこと追い詰めてパンパンになっちゃうみたいなの

「なんか、ごめんな」

「あなたは悪くないんです、私がつい・・・」

「俺、愛里がいねえとどうもなんねえよ」

「どうもならない・・・とは？」

「俺はなんも考えねえでショーさんに財布とかつつってさ、そんでもさ、

確かに愛里が言ったとおりでなあって、俺みてえな高校生がおとなのショーさんに、

財布とかって、やっぱなあ、俺なんも考えねえから、ザックリでさ」

「あなたは・・・なんていうか・・・なんて言えばいいのかな・・・」

なんだ？

「たとえば、こう・・・ポツポツポツって点があるとして」

点？ あれ？

「それを一瞬でつなげてひとつのものにしちゃえるっていうか」

え？ なんか 誰かにも言われたな 誰だっけ

「文化祭のときにもそう思いましたけど」

「文化祭？」

「焼きそばの」

「ああ、あれは、んなさ」

すっげえ大昔のことみてえに感じんな

「今回のお財布は130円オーバーっていうのが、なんか負けたみたいなの」

「あのかっけえ財布を1,130円だって、愛里はすげえよ」

「でもオーバーはオーバーですから」

「俺、1,000円以内でって言わなかったじゃん、いくらでもいいって」

「そうですよね、10万円でも私がいいと思うならとかバカなこと言って」

バカなこと？

「や、マジ、いくらでもさ」

「金に糸目はつけないみたいなの？」

「そこまでは・・・できねえけどさ」
「私にはできないです」
「え、なにが？」
「あなたが、あんなに汚れて汗をいっぱいかいて働いて稼いだお金を」
え
「何も考えずに使うとか、一円も無駄にできないって思っちゃって」
愛里
「あなたが働いてきた姿を見ちゃってるから、だから、130円がなんかもう」
「愛里」
俺 抱きしめて 愛里を
愛里 っきゃいねえ 愛里 っきゃ 結婚してえ今すぐ そんなでも
俺はまだ結婚できる歳じゃなくて 免許だって取れる歳じゃなくて
まだなんもなくて だから
「愛里、その予約の指輪」
「はい、ちゃんとはめてます、まだ一回も排水口には落としてません」
「落としたり拾うけどさ」
「落とすたくないです」
「そっか、それさ・・・ ぜってえ予約だから」
「はい、そう言ってましたよね」
「ぜってえキャンセル無しだから」
「はい、そう言ってました」
「俺は愛里を予約してっから」
今は これっきゃ言えねえけど
「愛里」
くちびる 好きが止まんねえ 溢れて溢れて
くちびる 離したら え 愛里がポーッと俺のこと見てんだけど
「愛里？」
「あなたの、ハムハムは」
「え？ あ、なんかした？」
「今、ちょっと、頭がポーッと、言葉が、出ないから、いいです」
「愛里、俺、あの？」
「なんか、新感覚で」
新感覚？
「ちょっと、あの、えっと、それじゃ、また」
「あ、うん、そんじゃまた」
玄関出て ドア閉めたら あれ？ 鍵は？
「愛里！ 鍵！」
中から小せえ「あっ」って声が出て 鍵が閉まった あれ？ また開いた？
ドアが開いて
「忘れるところでした」

「え、なに？」

「お財布に5円玉を入れてください」

「あ、そっか、うん、入れる」

「はい、それじゃ」

愛里がドア閉めて側溝で鍵がかかった

可愛いすぎる 5円玉って メッチャ可愛いいいっ

ここで悶えてねえで 家戻らねえと

家のドア開けたら

「ダイチ、おかえり」

「とうちゃんただいま、かあちゃんは風呂？」

「うん」

「そっか」

「ダイチ、ちこっといっか？」

「え？ なに？」

とうちゃんがキッチン指さして なに？ そんなカンジの話？

「あのよ」

「うん？」

「予約入ってよ」

「よ、予約？」

「月曜から仕事入ってよ」

「え、マジ？ スーパーのパート？」

「家政夫」

「すげえじゃん」

「月曜から日曜までだっよ」

「日曜までつつたら。土日かあちゃんいるけど、いいの？」

「美里が持ってきてくれてよ」

「かあちゃんが持ってきたんなら問題ねえじゃん」

「土日、頼めっかな」

「ったりめえじゃん、んなこと心配しねえでいいよ」

「ありがとな」

「家政夫の仕事って、掃除洗濯みてえな？」

「なんかよ、赤ちゃんがいんだっよ」

「赤ちゃんの世話？」

「世話つつうか、いつだっつったかな、あ、8月に生まれたっつったな」

「メッチャ赤ちゃんじゃん」

「うん、それで奥さんが寝不足でよ、フラフラだっよ、女の人は大変だなあ」

「だよな、生まれたばっかじゃな」

「午前10時から午後4時までで、掃除と洗濯と晩メシつつって」

「遠いの？」
「んな遠くねえんだよ、電車で・・・」
とうちゃんが上見て 指で数えて
「4? そんなくねえでよ」
四駅なら近けえな
「日曜日はダンナさんがいんだけどよ、ダンナさんに風呂の入れ方とか」
「赤ちゃんの？」
「うん、オムツの換え方とか、なんつかそういうの教えて欲しいってよ」
「そのダンナさん、両親教室行かなかったんか？」
「わかんねえ、そんでもな、覚えようと思ってんだろ？」
「だな、とうちゃん適任じゃん、俺は、んな小せえ赤ちゃんはムリだな」
「ダイチにもそのうち教えてやっからよ」
「なんだよお、とうちゃん、まだ早い早えよお」
「え、あ、や、家政夫の・・・」
「あ・・・ そっか、うん、あの、そんでも、やっぱ経験者じゃねえとき」
「この仕事な、丸山さんが取ってきてくれたんだってよ」
「丸山のおばちゃんこの仕事？」
「ありがてえな、あんな騒ぎ起こしちゃったのによ」
「あれはとうちゃんは悪くねえじゃん」
「そんでもよ、丸山さんにも迷惑かけちゃってよ」
「とうちゃん、とうちゃんはネコの命救ったんだよ」
「そうかもしんねえけど」
「飼い主さんだってメツチャお礼言ってるメツチャ悪がってさ」
「死なねえでよかったな」
「とうちゃんが危なかったじゃん、俺、メツチャ」
や、今 んなこと言ってもじゃあねえ
「とうちゃん、来週は俺、実力テストでわりと早めに帰ってくるからさ、
なんかあって遅くなっても俺が晩メシ作っから大丈夫だよ」
「そっか? なんか悪りいな」
「悪くねえよ、この夏休み、愛里のことやおっちゃんたちの握りメシや、
俺の代わりに行ってもらったりさ、一緒に行ってもらったりさ」
「ダイチと一緒に働けて楽しかったな」
「うん、すげえ楽しかった」
「もうダイチと一緒に現場で働けんなんてねえんだろうな」
できれば・・・ 俺・・・
「明日で最後か」
「うん、あの、俺さ」
「明日であの臭っさい長靴の臭いを嗅がないですむと思うとホッとするわ」
かあちゃん
「愛里は、俺が汗かいて働いてきた金、一円も無駄にできねえって」

「愛里さんね、すごいわね」
「だよな」
「私が感動したくらいよ」
「うん、だよな」
「カズオ、お風呂に入ってきたら？」
「あ、うん、そんじゃ」
とうちゃんがキッチンから出ていった
「かあちゃん、炭酸ミネラルウォーター？」
「お願い」
「レモンかミントは」
「無しでいいわ」
冷蔵庫から瓶出してフタ開けて
「ほい」
「ありがとう」
かあちゃんが立ったまま一口飲んで
「ハァァァ、サッパリする」
そんじゃ俺は勉強すっかな
「ダイチ」
「あ？ なに？」
「あんたにしかできないことがあるはずよ」
「俺にしかできねえこと？ なに？」
「それはあんたしかわからないわよ」
「なんだよその禅問答みてえなさ」
「取り換えのきく人材にはなるなって言ってるの」
「取り換え？」
「それじゃ、おやすみ」
「え、あ、かあちゃんおやすみ」
何の話だ？
まあいいや 勉強しよう

勉強終わって

机の上の とうちゃんの瓶貯金の中から 5円玉1個取って
ショーさんにあげる財布の中に入れた
ショーさん この5円は とうちゃんが一生懸命働いて貯めた5円なんだよ
だからさ きっといいことあるよ
愛里が作ってくれた手提げ袋
薄茶の生地に 財布のとおんなし色の糸使ってさ かけえな
これだったら 現場に持ってくタオルとか着替えのシャツとかペットボトルとかさ
愛里は んつとにすげえよ ここまで考えてくれんなんてさ

『愛里』送信

『財布に5円玉入れたよ』送信

『とうちゃんの瓶貯金の5円玉入れた』送信

ピコン

『おとうさんの5円玉なら』

ピコン

『ご利益ありますね』

ご利益って ハハハ

『愛里 マジであります』送信

ピコン

『明日が最後の現場ですね』

最後の 最後・・・

ピコン

『なんか私が淋しいです』

マジ？ 愛里が？

ピコン

『もう泥だらけで汗びっしょりのあなたを見れないのが』

ピコン

『淋しい』

かあちゃん 愛里はこんなこと言ってくれんだよ 臭せえゴム長とかじゃなくてさ

『愛里が見てえなら』送信

『俺一生土方やってもいいよw』送信

wつけけたけどさ ほんとは・・・

ピコン

『あなたならなんでもできると思う』

なんでも？

ピコン

『あなたが何をやっても』

ピコン

『あなたでいるなら』

俺でいるなら？

ピコン

『みんながしあわせになると思う』

みんな？

『俺は愛里をしあわせにしてえよ』送信

ピコン

『私だけじゃなく』

ピコン

『森下家の血は』

ピコン

『人をしあわせにするから』

愛里 俺にはわかんねえんだよ 正直

『俺は正直 愛里をしあわせにしてえんだよ』送信

ピコン

『私は もうしあわせです』

愛里いい ヤラれる メッチャ

『愛里 好きです』送信

それっきゃ言えねえくれえヤラれてる

ピコン

『私もあなたが好きです』

ああああ メッチャしあわせだあああ

『俺も もうしあわせです』送信

ピコン

『明日は おじさんたちをいっぱいしあわせにしてきてください』

おっちゃんたち？

『どうすりゃいいのかわかんねえけど』送信

『きっちり最後の仕事してくるよ』送信

ピコン

『それでいいと思います』

そっか それっきゃできねえしさ

ピコン

『それじゃ おやすみなさい』

『愛里 おやすみ』送信

なんか 明日が最後って あんま実感湧かねえな

寝よう 明日はメッチャがんばって働こう

最後の現場

朝 目え覚めて

顔洗って 作業服着て

キッチン行って

「どうちゃんおはよう」

「ダイチ、おはよう」

愛里の弁当作って

どうちゃんが握ったおっちゃんたちの握りメシをホイルに包んで

「今日はスギさんのはいらねえんだよな」

「うん、多分休むんじゃね？」

「てえしたことねえといいけどよ」

どうちゃんは 自分がケガしてクビになって浮浪者になっちまったから

自分のことみてえに、つか、自分のことよかずっと心配すんだな

「ダイチ、握りメシ食ってけ」

「ありがとう」

どうちゃんの握りメシは美味え マジ美味え

「どうちゃん、俺、どうちゃんの握りメシで今日もがんばれるよ」

「そっか？」

どうちゃんが嬉しそうな顔と なんかちっと淋しそう？ んな顔で俺を見て

「ダイチは・・・俺の夢だ」

「夢？」

や、ちゃんところにいっけど

「俺も、ダイチみてえな男だったらよかったなっつうかよ」

「ハ？」

「なんつうんだ？ んと・・・あ、理想っつうんか？」

「どうちゃんバカじゃねえの？」

「あ？」

「俺はどうちゃんみてえな男になりてえんだよ、どうちゃん目指してっから」

「俺みてえなんじゃよ、どうもなんねえよ」

「どうちゃんはわかってねえな」

「わかってねえんか？」

笑ってっけどさ

「わかってねえよ」

とうちゃんがどんだけすごくてかっこよくて惚れ惚れする男かってさ
「俺は、ダイチがいてくれて、んっとにありがてえと思ってんだよ」
「それは俺の方がさ」
「朝から男同士で愛を語り合っちゃって」
「かあちゃん？ おはよう」「美里、おはよう」
「おはよう」
「かあちゃん早くね？ また仕事？」
「ちょっと目が覚めちゃったから、また寝るけどね」
冷蔵庫から炭酸ミネラルウォーター出して
「それじゃ、ダイチ、行ってらっしゃい」
「あ、うん、いってきます」
かあちゃんが炭酸ミネラルウォーターの瓶持ってキッチンから出た
「かあちゃんが途中で目え覚めるって珍しいよな」
「美里もダイチのこと見送ってたんじゃねえか？」
「俺を？ いつものバイトに行くだけじゃん」
「ゆうべよ、寝る前に俺によ」
とうちゃんに なに？
「あんたもあんなんだったんかって」
「あんなん？」
「若けえ頃現場で働いてるとき、ダイチみてえだったんかってよ」
何で んなこと？
「俺はしょぼくれた院上がりのどうもなんねえ土方だったつたらよ」
とうちゃんの自己イメージ低すぎんだよ
「笑ってよ、きっとダイチにそっくりだったわよっつって」
かあちゃん・・・ ちっと涙 目の端にきたんだけど
「そんだけ言って電気消して寝た」
「そ・・・っか」
「ダイチ、そろそろ行かねえとよ」
「あ、うん」
保冷バッグ持って、ショーさんへのプレゼント持って
玄関でゴム長履いて
「そんじゃ、とうちゃん、いってきます」
「ダイチ、行ってらっしゃい」
今日が最後だけど そんでも今日もいつもの現場仕事だ

現場着いても
なんかまだ今日でここに来んのも最後だっつう気いしねえな
「だいづ」
「ヤッさん、おはようっす」

「おはようさん」
「スギさん、どうっすか？」
「今朝ぁチロツと顔見てきたんだけんちょ、昨日よかずっと楽になったってはぁ」
「よかったあ、とうちゃんもメツチャ心配してたんすよ」
「カズさんも優しっからなあ」
あれ？
「ヤッさん、ショーさんは？」
「ショーさん、免許の更新に行ってたんだした」
「更新？」
「明日で失効すっぺ？」
「あ、そうっすね」
「監督がぁ、もったいねえからぁ、更新してこいっつってはぁ」
監督が
「今日は現場にゃ来ねえなあ」
え？ あ、そんじゃ・・・ どうしよう
「ヤッさん、俺、ショーさんに渡してえもんがあって」
「ありゃりゃ」
「ヤッさんから渡してくれねえっすか？」
「それは・・・ 監督さ頼めばいんでねえのお？」
「監督に？ や、んな、わざわざ監督につつうような」
「だいづからのもんだったらぁ、俺よか監督から渡してもらった方がいいっぺ」
「そう・・・っすか？」
「そんだよ、ほれ、監督もういっからぁ、頼んでくればいいした」
「あ、そんじゃ行ってきます」

監督室の扉開けて

「失礼します」
「森下、おはよう」
「おはようっす」
「どうした？」
「今日ショーさん来ねえんすよね」
「免許の更新に行かせたよ」
「ヤッさんから聞きました」
「あぶないところだったよ、明日で失効するなんてさ」
「俺が、更新しねえのって聞いたら、もういいんだっつって」
「よくないよ、一人でも運転できるのが増えればさ、いろいろ助かるからさ」
「そうっすよね、昨日も、スギさんの、よかったす」
「森下が言ってくれて助かったよ」
「俺は、見せてもらっただけなんで」

「そういうとこ」
「そ、そういうとこ？」
「ショーさんの免許、スギさんのぎっくり、運転する人、一瞬でつなげたよ」
「や、ただ、思いついただけっつうか」
「ただ！ ああ、やだねえ、トップの進学高校のボンボンは」
「なんすかそれ？」
「ハハハ、それで、なにか用があるんじゃないのか」
「あ、そうっす」
愛里が作ってくれた手提げ袋 監督の前に差し出して
「これはなに？」
「ショーさん、誕生日が8月1日なんすよ」
「そうだね、だから明日で免許失効するところだったよ」
「これ、ショーさんへの、なんつうか、誕生日プレゼントなんす」
「へえ、粋なことするね」
「今日はショーさん来ねえっつうから」
「更新が終わったら、そのまま寮に戻ってくれてって言ったんだよ、
日曜日に中途採用の若手が寮に入るからさ」
中途採用の若手
「若手っていても経験年数三年だから底戦力になるけどさ」
即戦力・・・か
「部屋の準備しておいてやってって頼んだんだ」
「そう・・・なんすか」
「それで？ その誕生日プレゼント渡したいの？」
「俺、今日が最後なんて、監督から渡してもらえますか」
「イヤだよ」
「へ？」
「そういうのはさ、自分で直接渡すもんだろ」
「え、それでも、俺、今日で終わりなんで」
「明日は始業式だよ」
「おいっす」
「だったら、始業式終わったら来ればいいだろ」
「え？」
「ちょうど昼休憩くらいじゃないのかな」
「あの、そんじゃ、その後、俺、仕事すればいいんすか？」
「ハハハ、仕事はしなくていいよ」
「え？ あの」
「ショーさんも森下から直接もらった方が嬉しいだろ」
「そうかもしんねえっすけど」
「制服姿、見せてあげればいいよ」
「制服？」

「森下が本当に高校生だっていう証明？」
「んなこと証明しなきゃなんねえんすか？」
「しなくてもいいけどさ、直接渡してあげた方がいいよ」
「そう・・・っすよね、そんじゃ、明日、来ます」
「うん、それじゃ、今日もよろしく」
「おいっす」
明日も来る
愛里に言わねえと
『愛里』送信
『今日ショーさん免許の更新で来ねえから』送信
『明日始業式終わってから現場来てプレゼント渡してえんだけど』送信
『いいかな?』送信
ピコン
『なんで私に聞くの?』
『愛里と一緒に帰れねえからさ』送信
ピコン
『バカみたい』
バカみたい?
ピコン
『直接渡した方がいいに決まってるじゃない』
マジ?
ピコン
『私があなたへのプレゼントを』
ピコン
『川口くんに渡してって頼んだら?』
川口に?
『なんで川口なんだよ』送信
『俺に直接渡してくれよ』送信
ピコン
『そういうことです』
そういうこと? あ・・・ そういうことか
ピコン
『カードのケーキのロウソクをフーッてしてもらわないと』
あ、だよな
『わかった、直接渡してロウソクフーッてもらう』送信
ピコン
『はいwww』
ピコン
『それじゃ お仕事がんばってください』
がんばりまっすっ

『がんばって稼ぎやす』送信

ロウソクフーってさ メッチャ可愛い
よっしゃ！ 仕事する！

昼休憩

「だいづ、これ、おっかあがだいづにつて」

ホイルでくるんでる なんだ？

「うおっ、鶏もも肉骨付きで、でっけえっすね」

「俺の田舎ではあ、鶏もも焼きつつたらあご馳走なんだした」

「そうなんすか、メッチャ美味そうっす」

「ゆんべっからあ、だいづさ食わせるつつつて塩に漬けてはあ」

一晩塩に漬けるんか

「うわっ メッチャ美味え！」

「そっかあ？」

「塩が中まで効いてて美味えっす」

「おっかあ聞いたら喜ぶっぺ」

「エミコさんに、メチャ美味くてありがとうございますって伝えてください」

「それは・・・ なんだ、今度おっかあに会ったときにい、だいづが言えればいいした」

「あ・・・ そうっすよね」

今度・・・

「ほれ、他のおかずもあんだした、食え」

「おいっす、いただきます」

「だいづは食いっぷりがよくてはあ、見ててえ気持ちいいなあ」

「そうっすか？ あ！ 俺、ショーさんの握りメシ持ってきちまったんすけど」

「俺が渡しとくからあ、その保冷バッグさ入れといてくんちえ」

「おいっす」

「カズさんの握りメシは美味えからあ、ショーさん晩メシにして喜んで食うっぺ」

「そう言ってもらえっと、嬉しいっす」

ヤッさんが黙って握りメシ食ってて なんか なんだ この沈黙？

「ヤッさん、スギさんどうだったんすか？」

「あっ そんだったあ、だいづにしゃべってながったなあ」

「骨とかは・・・」

「それがよ、救急で行ったっぺ？ ほんだら、肛門科の先生っきゃいねえってあ」

「肛門科？」

「整形外科だら外科だら先生たちはあ、事故で運ばれてきた人の手術しててえ」

「それで・・・ 肛門科・・・っすか」

「ほんでよ、最初にい、ケツの穴見られたんだってあ」

「ケ、ケツの穴？」

「腰痛てえのにケツの穴ってえ、スギさん泣きそうになったってえ」

「そ、そうすよね・・・」

「したらあ、切れ痔になってたんだってよお」

あっ あの血

「ヤッさん、スギさん便所でぎっくりやっちまったんすけど、

その後、俺が便所掃除したらウンコ流れてなくて」

「ブッ ゲホッゲホッ」

「あ、すいません」

「いんだあ、ゲホッ、そんでえ？」

「トイレトペーパーに血いついてたんすよ」

「それだ、切れ痔」

「スギさん、痔の手術とかは」

「切れ痔の方は軽くってはあ、二週間くれえで治るって言われたってよ」

「そうすか、よかったっす」

「ほんでえ、その肛門科の先生があ、腹を触ったり押したりなあ」

「腹？ 腰じゃなくて？」

「スギさんもお、と〜んだヤブにあたっちゃったと思ったらしいんだけんちよ、

これが！ とんでもねえ名医だったんだした」

「名医？」

「スギさん、腸が弱ってたんだってなあ」

「腸が弱ってた？」

「スギさん、前っから腸が弱えのよ、すぐ下痢したりしてはあ」

「そうなんすか」

「ほんでもって、今年はずげえ暑っちいっぺ？ いっぺえ冷てえもの飲んでだっぺ」

「そうっすよね、飲まねえと熱中症になっちまうから」

「ほんでもスギさん腸弱えからあ、腸が冷えちまってえ硬くなってんだってよ」

「腸が・・・冷えて硬く？」

「ほんで、ほれ、この奥のなあ、硬くなっちゃってたからあ、それが原因だっちはあ」

「ぎっくりの原因が腸だったんすか」

「腰はな、炎症起こしてっからあ、今日はシップ貼ってえ、家帰ったら取れっちはあ、

ほんでえ、下っ腹んとこ温めて寝てろってえ、あとは・・・なんだした？

あ、風呂入ったりしてえ、冷てえもんはでっきるだけやめろっちはあ」

「そんでも、こんな暑っちいところだと・・・飲まねえってのは」

「飲んだり食ったりすんのは冷てえもんはやめて、首んところかあ脇とかなあ、

そったところ冷やしてればいって言われたっつっちはあ」

「そうなんすか・・・ そう言えば、スギさんは空調服着てねえっすよね」

「スギさん、去年の夏は着てたんだした」

「なんで今年は着てねえんすか？」

「あれってえ、外の空気吸ってえ、なんだ？ こう、回すんだっぺ？」

「あ、なんかそうみてえっすね」

「スギさんな、便所入ったときい、バッテリーつけたまま入っちゃったのよ」

「え？ あ？」

「そ～したら、便所の臭い吸いこんじまってえ、臭っせえ臭っせえってえ」

ヤベ・・・ 笑っちゃいけねえ 笑っちゃ

「そんで凝りちまったんだした」

「そう・・・すか」

笑っちゃいけねえ

「そんでよ、先生に言われたとおりにい、風呂入って下っ腹に腹巻してなあ、

そ～したら、楽になってくんのがわかったつつうんだした」

「その先生すげえっすね」

「腸とは思わねっぺ？ シップ貼って寝てるっきゃねえと思ってたけんちょ」

「そんじゃ、スギさんはいつ復帰できるんすか？」

「日曜までは安静にしてろって言われたってはあ」

そっか そんじゃ明日来ても会えねえんだな

「いんやいんやいんや」

「え？ どしたんすか？」

「もも焼き」

え？ これ？

「な～んも残ってねしたあ、骨だけになってえ」

「すげえ美味かったっす」

「これは」

ヤッさんが俺の手から骨取って

「おっかあに見せねえとお」

なんで？

「こ～ったにきれいに食ってもらったらあ、おっかあも喜ぶした」

「ご馳走様っした」

「いがったなあ」

「ありがてえっす」

ヤッさんが ニッコリして

このもも焼きは ヤッさんと奥さんが俺に そういうことだな

シャベル

三時休憩

汗ダラダラ

この時間がけっこういっちゃんキツイかもしねえ

西日がすげえ強くなってさ

ヤッさんと二人で日陰の路肩に座って水飲んで

「だいづ、ほれ、塩アメ」

「いただきやすっ」

「だいづはぁ空調服も着てねえのにい、人一倍動いてはぁ、人間と思えねした」

「人間すよ、こんな汗かいてんじゃねえすか」

「俺の若けえ頃はぁ、こ～ったのなかったからぁ、最初着たときはよ、

風船着てるみてえでなぁ、バッテリー入れっとブワッとなっぺ？」

「風船て ハハハ」

「ほんでもお、今はこれねえと動けねした」

「ヤッさんのかけえすよね」

「これは会社が支給してくれたんだあ」

「マジっすか」

「この会社はぁ、申し込むとタダで支給してくれんだした」

「すげえっすね、いい会社っすね」

「ほんでもお、ほれ、あっちゃさいる若けえ連中はぁ自分で買ってっぺ、

なんつうんだあ、オシャレっつうのお？ そういうのなんだっぺな」

「重機の宇野さんのなんて真っ白でかけえっすね、作業服と思えねえっすよ、

白のダウンみてえで、街歩いてもいいみてえなカンジっすよね」

「空調服着てえ街は歩けねっぺ」

「そうすかね、涼しくていいんじゃねえかな」

「ゴーッて音立てて歩くってか ハハハ」

「そっか、現場じゃ感じねえけどうるせえかな」

「だいづは・・・空調服、欲しいと思ったことねえのお？」

「俺は・・・」

バイトだし これで食ってるわけじゃなくて そんで今日で終わりで・・・

「だいづ」

「え、あ、おいっす」

「ちょっとお見してくんちえ」

ヤッさんが 指で道路の向こう側のビルを
「あすこもお、あすこもあすこもお」
ズラーッと指さして
「あん中で働いてる人たちはあ、クーラーきいたとこでえ、背広着てなあ」
「ああ、そう・・・すよね」
「あん中にいてえ、俺たちのこと見てっと、働きアリみてえに見えんだっぺなあ」
ヤッさん？
「あのガラス一枚でよお、あっちゃとこっちは別世界になってんだっぺなあ」
俺は なんか
「ヤッさん、あのビルもあのビルもあのビルも」
なんか 腹立って
「あれは、あん中にいる人たちが建てたんすか？」
「それは違うけんちょ」
「あの人たちは、ヤッさんやヤッさんみてえな現場作業員たちが、
汗びっしょりになって、泥だらけになって、メッチャ危険な目に遭って、
そんで建てたビルの中にいさせてもらってるんすよ」
「え？」
「あの人たちにあのビル建てろつつても建てれねえっすよ」
自分でも 声が怒ってるみてえに聞こえてんのはわかってっけど
「俺、夏休みに金稼ぎたくてこの現場にバイトしに来ただけっすけど、
ヤッさんやスギさんに出会って、すげえ優しくしてもらって、毎日楽しくて、
そんでもそれは、ヤッさんやスギさんに守られてっからで、ただのバイトだからで、
ヤッさんたちも他の人たちも、生活背負って家族背負って、そんでも、そうだから、
汗いっぺえかいて泥や埃だらけになって、こうやって建物作って、すげえなって」
なんか 止まんなくて
「この人たちは、マジで身体張って命賭けて、この町を、日本を作ったんで」
「に・・・ほん？」
「この日本は、ヤッさんたち現場作業員が作ってるんだよ！
働きアリなんかじゃねえよ！ 日本を作ってるすげえ人たちなんだよ！」
あ ヤベ メッチャ熱くなっちゃった
「だいづさかかっとお、俺みてえなしょぼくれた小汚ねおっさんもかっこよく思える
した」
「かけえっすよ、ヤッさんかけえっすよ」
「いんやいんや アハハ」
「俺、マジで、現場で働きたくて」
「えっ」
「そんでも、そう思うのは、やっぱヤッさんたちに守られてっからで、
これで自分で稼ぐことになったら、メッチャ厳しいことやキツイことあって、
そういうの知らねえからなんだっつうことも、どっかでわかってて・・・
かあちゃんには、俺にしかできねえことがあるはずだとか、

取り換えのきかなねえ人材になれとか、俺はまだ全然意味わかんねえけど、
俺に何ができんのかわかんねえけど、それでも」
ヤッさんの顔見たら 優しい目で俺のこと見てて
「ヤッさんは俺の憧れっすよ」
「そっかあ？」
「そうっす」
「そっかあ」
「そうっす」
「ほんじゃ、あともうちっと仕事すっかあ」
「あ、はい」
「日本、作んねえとなあ」
「あ・・・ なんか、すいません」
「だいつは・・・ んっとに、いい子だなあ」
「え？」
「ほれ、行くど」
「おいっす」
なんか俺 メッチャ恥ずいな 熱くなっちまってさ
便所掃除してこねえと

今日の仕事が終わった
俺の夏休みのバイトが終わった
「だいつ、お疲れさん」
「ヤッさん、お疲れっす」
「ほんじゃ・・・」
「ヤッさん、俺、明日もここに来るんすよ」
「え？」
「監督が、ショーさんに渡してえもんは自分で渡せつつったんで」
「俺は明日はあ、次の現場のお仮設事務所の設営とお打ち合わせでえ」
え？
「こっちゃん来ねえのよ」
「そう・・・すか」
「ほんでもなあ、ほれ、またバーベキューとかあ鍋とかなあ」
「そう・・・すよね」
「ほんじゃまたな」
「おいっす、また」
ヤッさんが いつも乗ってる車に乗り込んで 敷地を出てった
なんか実感ねえな 明日も来るけどさ 明日もここで現場仕事しそうな気いすんな
監督に挨拶しねえと

監督室の扉開けて

「失礼します」

「森下、お疲れ」

「お疲れっす」

「これ、今週分、火曜日のは先に渡したよな」

「はい、ありがとうございます」

「森下が来て、この現場、おもしろくなったよ」

「そうなんすか？」

「自覚ないんだ」

「自覚？」

「次の現場さ、俺の母校の体育館なんだよ」

「そうなんすか？　どこの」

「俺、剣道部だったからけっこう使ってたんだよな」

「うちの高校にも剣道部あるんすよ、昔は強かったみてえだけど、今は弱小で」

「弱小か、ハハハ」

「監督、一ヵ月」

「森下、待って、土下座はするなよ？」

「え？　あ、そんじゃ、一ヵ月、本当にお世話になりました」

「一ヵ月よく頑張ったな」

「や、それは、ヤッさんたちが・・・」

「俺たち建設作業員は日本を作ってるんだって？」

「へ？」

「森下の声はよく届くからさ、みんな聞いてたよ」

「え・・・ エーーーーーッ」

「みんな感動しちゃってさ」

「俺、なんか、あの、なんか、すいません！」

「おもしろいよね、森下の考え方ってさ」

「すいません、なんかえらそうに」

「ほんとだよ、えらそうにさ」

「すい・・・ま・・・せん」

監督笑ってっけど　聞こえてんだああああ

「明日も来るからまた会えるよな」

「え？　あ、おいっす、明日も来ます」

「うん、それじゃまた明日」

「はい、失礼します」

監督室出たら・・・

もう誰もいなくて

ヘルメット返さねえと

首に巻いてるタオルできれいに拭いて

用具置き場のヘルメット積んでるところに置いて
一ヵ月 ありがとうございます
頭下げて あ・れ？ これって ヤッさんのシャベルじゃね？
いっつも持って帰ってなのに 忘れたのかな
ヤッさん毎日きれいに磨いて持ってくるんだよ
このまんまじゃ 明日 明日ここに来ねえんだよな そしたらもっと困るじゃん
そうだ

仮設水道んところ

シャベルやスコップ洗う道具は置いてある
俺ができんのはこんくれえだけどさ 磨きてえんだよ ヤッさんのシャベル
こういうのは どうちゃんに教わってやってたから
「だいづ！」
え？
「あ、ヤッさん」
「なにやってんだあ？」
俺は 俺は
「職長！」
「え？」
「俺はヤッさんに息子みてえに可愛がられて、息子みてえだっつってもらって」
それでも
「それでも俺は、職長に憧れてるんす、だから・・・」
だから
「今だけ、俺を職長の小方にしてください！」
「小方ってえ」
「今だけ、このシャベル一本磨く間だけでも・・・俺は、職長の小方になりてえっす」
「ま〜たそった言葉、どっかで覚えたんだした、小方ってよ」
ヤッさんの声が怒ってるみてえで 顔見れねえ
「そっか、そんじゃ、おめえは俺の小方だした」
え？
「俺の小方ならあ、俺のシャベル、きっちり磨け！」
ヤッさん・・・
「おいっす！」
「道具はな、俺たち土方にとっちゃ、大切なもんなんだした」
「おいっす！」
俺は 磨きながら 鼻水袖で拭きながら
「俺たちはあ、それでおまんま食ってんだした、わかったか！」
「おいっす！」
「俺の小方がハンパなことやったら許さねえ！」

「おいっす！」

俺はもう 涙で見えなくなるから 何度も袖で拭いて
できた

「職長、できました」

「こっちや寄せ」

「おいっす」

ヤッさんがシャベルをゆっくりと細けえとこまで点検するみてえに見て

「おい」

「あ、はい」

「やるした」

「え？」

「ハァァアこ〜ったに丁寧に磨けるなんてはあ、さすが俺の小方だしたあ」

そう言って ヤッさんが・・・ 泣き出して 俺も・・・

「職長・・・」

「だいつを小方にできるなんてはあ、俺はしあわせもんだしたあ」

「ヤッさん・・・ 職長・・・」

「だいつ」

ヤッさんが俺を抱きしめて

「よくやっだなあ・・・よく・・・」

「ヤッさ・・・ 職長・・・」

「だいつは俺のりっぱな小方だあ、俺の自慢の・・・小方・・・」

俺は・・・ もう・・・ 声も出ねえ・・・ 涙っきゃ・・・

「だいつ、淋しいなあ」

「ヤッ・・・さん、俺も淋しいよ、ヤッさん、淋しいよお淋しいよお」

「だいつ、ほんでもお、ほんでもな、だいつにはだいつの道があんだした」

「俺の・・・？」

「きっとあんだした」

「かも・・・しんねえけど・・・ そんでも・・・」

「ほれ、涙拭いてえ」

ヤッさんがヤッさんのタオルで俺の顔拭いてくれて

「俺はなあ、思ったんだした」

「え・・・ なに？」

「だいつならあ、あのガラスを取ってくれんでねっぺかってよ」

「ガラス？」

「俺が別世界だと思ったらあっちゃとこっちやをなあ」

あっちとこっち

「だいつん中にはあ、あのガラスがねえのよ」

ガラスが・・・ ねえ？

「あんときい、俺はだいつにこう言われた気いしたんだあ、

ヤッさん、な〜に語ってんだあ？ ガラスなんてどっこにもねえっぺってよ」

ヤッさんが 目え真っ赤なままで
「俺みてえな土方がよ、日本作ってるってはあ」
「俺は・ ・ んっとにそう思ってた」
「嬉しかったなあ、だいづにはあそう見えてんだってはあ、
だいづにはあ、あっちゃもこっちゃもねえんだなああってよ」
ヤッさんが俺の手え強く握って
「だいづは、背広着てえクーラーかかったとこで働けるようになったとしてもお、
あの窓から手え振ってえ、ヤッさ～ん、とうちゃんの握りメシ食わねえかあってよ」
ヤッ・ ・ さん また俺 涙出て
「だいづがおとなんなったら、楽しい世界になんだっぺなあ」
「俺・ ・ まだなんもわかんねえけど」
「だいづはだいつのまんまでいればあ大丈夫でした」
俺が俺のまんま あれ？ あ！ 愛里にも言われた
「だいづにはあ、俺がついてっからあ」
「え？」
「俺はだいづの職長なんだっぺ？」
「うん、うん」
「スギさんもお、ショーさんもお、み～んなでだいづのこと守っから」
「みんな・ ・ で」
「ほれ、まだ泣いてはあ」
「ヤッさんだって泣いてたじゃん」
「あれは、汗でした」
「ウソだよ」
「そんだなあ、だいづにはウソつけねなあ、だいづには泣かされてばっかではあ・ ・
それでも、それは・ ・ いつも・ ・ しあわせで・ ・ 」
ヤッさんがタオルに顔うずめて泣いて
「ヤッさん・ ・ ヤッさん」
俺は ヤッさんのこと抱きしめて
ヤッさんが大きく息吐いて
「ハァァァ、また泣かされちまったっぺ」
そう言って笑った
「ヤッさん、俺まだどうなんのかわかんねえけど」
ヤッさんの顔を見て
「ヤッさんの自慢の小方になれるようにがんばるよ」
「そっかあ」
「ヤッさんやスギさんやショーさんが、俺にはついてっからさ」
「そんだなあ、そんだよお、俺たちがついてっからあ」
「うん」
「それにしても」
やっさんがシャベル手に取って

「こ～つたにきれいに磨かれちゃったらあ、俺が手え抜けなくなっちゃうっぺ」

「手え抜いちゃダメっすよ、職長」

「いんやいんやいんや、厳しい小方だしたあ アハハハ」

「ハハハハ」

ヤッさんが俺の頭クシャクシャッて撫でて

「ほんじゃまたな、だいづ」

「うん、また、俺、ぜってえまたヤッさんたちに会いに来るから」

「あたりめだした、そんでねえと、俺がおっかあに怒られっちゃう」

「奥さんに？」

「あんた！ ダイチちゃん放ったらかしたらダメだっぺってハア」

「ハハハ」

「おっかねえのよ」

「エミコさんやトモエさんにも、また会う」

「そうしてくんちえ、俺が殺されっちゃうからなあ」

「ハハハ、うん」

「ほんじゃな」

「ヤッさん、本当に」

「だいづ！ 土下座しねでくんちえ」

「ありがとうございました！」

「だいづ・・・」

「これからも、よろしくお願いします！」

「これからもお？ そんだあ、よろしくされっからあ」

「頼んます！」

ヤッさんがシャベル積み込んで 車で帰って行った

シャベル取りに戻ったんだな

俺も 帰ろう

現場の出口で 現場に向かって ありがとうございました！

一礼して 駅に向かった

戻る場所

俺は なんか 抜け殻みてえになってて なんも考えらんなくて
ポーッと電車に乗って ポーッと電車に揺られて 電車乗り換えて
駅に着いて バスに乗って ポーッとしたまま マンションの前
こんなんでも愛里んどこ行っても なに言ったらいいんか
家に帰ろう
エレベーター 五階のボタン押して 頭ん中空っぽのまま乗ってて
ポーッとしたまま 玄関の前
ドア開けて
「ただ・・・いま」
「ダイチ」
とうちゃんが キッチンから出てきて
「おかえり」
とうちゃんが 優しい顔で とうちゃんの顔 見たら 俺・・・
涙がボロボロこぼれて 止まんなくなって
「とう・・・ちゃん」
とうちゃんに抱きついて
「とうちゃん」
声出して泣いて
「とうちゃん・・・ とうちゃん」
子どもみてえに 声あげて泣いて
とうちゃんは 俺のこと抱きしめながら 黙って背中さすってくれてて
俺・・・今・・・ わかっちゃまった わかっちゃまったよ
なんで なんでこんなに淋しくて こんなに悲しいのかって
とうちゃんの腕ん中にいたら わかっちゃまった
俺は 現場で働いてっと 現場にいる毎日が
とうちゃんの世界にいる気いしてたんだ
だから 楽しくてしあわせで ずっとここにいてえって
とうちゃんのことわかってくれる人たちと とうちゃんみてえな人たちと
一緒にいたから 楽しくて嬉しくてしあわせで
そっから離れたくなくて ずっとずっといたくて
俺は とうちゃんの世界が大好きで とうちゃんの世界にいたくていたくて
現場から離れっと とうちゃんの世界から離れる気いして だから だからこんなに

「とうちゃん・・・ 俺、とうちゃんのそばにいてえ」
顔上げて とうちゃんの顔見ると また涙が
「とうちゃんと・・・ おんなしとこにいてえ 離れたくねえよ」
とうちゃんが優しく俺の頭撫でてくれて
俺はまた とうちゃんの胸に顔うずめて
だけど・・・ ヤッさんの言葉が頭のどっかにあって
“だいつにはだいつの道があんだした”
俺には俺の道
“だいつならあ、あのガラスを取ってくれんでねっぺか”
あっちとこっちを・・・
“だいつん中にはあ、あのガラスがねえのよ”
どっちの世界とか そういふんじゃねえのか
とうちゃんの世界にいるとかじゃなくて あっちとこっちじゃなくて
「とうちゃん、俺、とうちゃんが大好きでさ」
とうちゃんが優しい目で俺を見てて
「とうちゃんの世界が大好きでさ」
「そっか？」
「だから、俺・・・」
俺は
「大好きなとうちゃんと大好きなとうちゃんの世界を」
鼻水 手で拭いて
「守れる男になりてえ、しあわせにできる男になりてえ」
言葉にしたら また泣いちゃって とうちゃんの胸に顔つけて
「ダイチが守ってくれんならな」
とうちゃんが俺の頭撫でながら
「ダイチがしあわせにしてくれんなんてな」
とうちゃんの声も 少し震えてて
「そんなん・・・ 夢みてえだな」
「夢じゃなくてさ、夢みてえなのを、あつたりめえなことにしてえ」
「そっか」
「うん」
今は どうすればいいんか 何すればいいんか わかんねえけどさ
「ダイチ、おかえり」
あ、かあちゃんが奥から とうちゃんから身体離して
「かあちゃん、ただいま」
かあちゃんが 俺のこと 上から下までジューッと見てて
え？ なに？ 汚ったねえってこと？
「そんな泥だらけで汚ったない恰好で」
あ、やっぱそっか
「臭覚がヤラレそうなほど臭くなって」

最後の日にさ　そこまで言わなくてもいいじゃん
「そうやって働いてきたあんたは、私の誇りよ」
え？
「私とカズオの自慢の息子」
かあ・・・ちゃん　やめてくれ　俺また・・・
「よくやった」
俺は・・・
「かあちゃん、とうちゃん」
頭下げて
「ありがとうございます！」
たたきにボタボタ涙落ちて
「愛里さんのところには行ったの？」
「あ・・・　愛里んところには行ってねえ」
「見せてきなさいよ」
「なにを？」
「その汚ったなくて臭っさい恰好」
「ハ？」
「愛里さんも見納めでしょ」
「あ、そんじゃ顔洗う、ちっと鼻水とか」
「あんたが泣き虫なのは愛里さんは知ってるんだから」
「泣き虫ってさ」
「その涙と鼻水でグッチャクチャの顔を見せてきなさいよ」
「グッチャグチャってさ」
「ほら、早く」
「え、ん、わかったよ」
とうちゃんの顔見たら　ニッコリして　うんうんて
「そんじゃ、ちょっと行ってくる」
「晩メシはもうできてっからよ」
「わかった、一緒に連れてくるよ」
玄関ドア閉めて　愛里の部屋に向かった

ドアホン鳴らしたら　ドアが開いて
「愛里」
俺は中に入って
「ただいま」
え　愛里が俺に抱きついた
「おかえりなさい」
俺も愛里を抱きしめて
「ただいま、愛里」

「ありがとう」
「なにが？」
「なんか・・・ そう言いたくなっちゃって」
「そっか」
愛里が俺から離れて 俺のこと 上から下まで見て
「写真撮っていいですか？」
「写真？」
「あなたのその恰好、写真に撮っておきたいから」
「あ、それでもさ、俺、ちっと鼻水とか」
「それも含めて」
それも含めて？ そんな、いちおう首んこのタオルで顔拭いて
「撮ります」
「あ、おう」
「やだあ、突っ立ってる」
「どうすりゃいいんだよ？」
「いいですけど」
愛里がカシャッカシャッて撮って
携帯見て フツて笑って
「これが、いつも私の玄関に立ってるあなた」
こうやってさ 写真で見るとさ なんか汚ったねえな
「待ち受けにしようかな」
「これを？」
「ウソ」
「なんだよ」
なんか そっから先 なんか 俺も何言っているかわかんなくて
「んと、あ、とうちゃんが晩メシできてるってさ」
「それじゃ行きます」
「一緒に、あの、連れてくって言っといたからさ」
「あ、それじゃ、はい」
愛里がサンダル履いて 俺も外に出て 愛里が鍵閉めて
一緒にエレベーター乗った
エレベーターん中
俺も愛里も黙ったままで そんなでも手えつないで
俺が愛里のこと見たら 視線感じて 愛里が俺のこと見上げて
その顔がメッチャ可愛いから 愛里の肩抱きよせて
愛里の頭の上に俺の頭そっと乗せて
「フッ」
「え？ なんで笑った？」
「あなたの汗の匂い」
「あっ ごめん、臭せえんだよな」

「あなたの汗の匂いを嗅げるのは、私の特権かなって」

「特権？ 愛里、特権？」

「着きましたよ」

俺の汗の匂い嗅げんのが特権てさあ 愛里いいい

スタスタ歩いてく愛里を追っかけて

たまんねえなあ

今日の晩メシはビーフシチューだった

とうちゃんにとってのご馳走

俺のバイト最後の日だからご馳走作ってくれたんだな

今 愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってて

俺ととうちゃんは後片付けしてて

「あっ そっか」

「とうちゃん、どした？」

「明日っからは、おっちゃんたちの握りメシはいらねえんだったな」

「うん」

「ダイチとアイリちゃんも明日は午前中で帰ってくんだよな」

「俺は現場行ってくる」

「まだ仕事あったんか？」

「ショーさんに誕生日プレゼント渡してくるだけだよ」

「そんじゃダイチは昼メシはどうすんだ？」

「帰ってきてから食うよ」

「そっか」

「あっ！ 愛里の昼メシ」

「俺が作っからよ」

「や、明日の朝、弁当作るよ」

「そっか？ そんじゃ、美里のも弁当にすっかな」

「かあちゃん明日休みじゃね？」

「ここでアイリちゃんと二人で食えんだろ？」

「そっか、だよな」

「そんじゃ米といどくからよ」

俺は・・・ 冷蔵庫開けて 卵がある 赤ウインナーもあるからタコさんウインナーか

あとは・・・ 合い挽きがあるな ドライカレーだ

野菜みじん切りにして

「とうちゃん、俺さ、ヤッさんの小方にしてもらった」

「ヤッさんの小方？」

「ヤッさんのシャベル洗ってる間だけ」

「そっか、ヤッさんの小方になれたなんてよ、ありがてえな」

「なんかさ、もうそれで俺には十分すぎるくれえだなって」

「そっか」

とうちゃんが米研ぎながら聞いてくれてて

「明日からは高校生に戻るよ」

「だな、ダイチは高校生だ、俺の息子が高校生なんてな、すげえな」

「ちょ、とうちゃん、何合砥いでんの？」

「あ？ あっ！ いつものでやっちまった」

「ハハハハ、とうちゃん」

「握りメシにして冷凍するっきゃねえな」

「うん、俺ととうちゃんて食えっからさ」

なんか とうちゃんも俺も 一ヵ月だけなのに

その一ヵ月の手順が身につちまって

昨日までのキッチン大量に米研いで 愛里やかあちゃんの弁当の下ごしらえして

なんか今夜のキッチンは なんつうか 静かでさ

「ダイチ、愛里さんのことを送ってあげなさい」

「あ、おう、今フライパン洗って」

「俺が洗っとくからよ」

「とうちゃん、ありがとう」

愛里と一緒に家を出た

愛里の部屋の玄関

「愛里、そんじゃ明日の、え？ あ？ え？」

愛里が玄関の上がりんとこで正座して えっ 土下座？

「あ、愛里、なんで、土下座って、愛里」

「一ヵ月」

え？

「お疲れ様でした」

「愛里、頭下げんなよ、俺なんかにさ」

「私は、あなたに、働くことを教えてもらった気がします」

「んなさ、愛里、立ってくれよ」

「あなたのおかげで、私も初めてバイトができて」

「わかったから立ってくれよ」

「ありがとうございます」

ええええっ 深々とお辞儀ってさ

「愛里、いいから、んなこと、いいから」

俺もしゃがんで

「私は、あなたを一人の人間として尊敬します」

一人の人間て

「イヤだよ、んな一人の人間とかさ」

「イヤ・・・とは？」

「俺は、愛里には、一人の男として見てもらいてえからさ」
「ハ？」
「一人の人間じゃなくて一人の男がいい」
愛里が 俺の顔ジーッと見てっけど
「しかもさ、愛里に土下座されたらさ、俺の土下座なんてペラッペラになんじゃん」
「私がやっているのは土下座ではありません」
「へ？ 土下座じゃん」
「これは座礼です」
「ざれい？」
「茶道の正式なお辞儀」
「茶道？」
「せっかく私があなたの一ヵ月の働きにすごく感動しててありがとうが溢れて」
ありがとうが 溢れて？
「これしかないんじゃないかって」
これしかねえ？
「ママがやってたのの見様見真似ですけど、なんかこの溢れたありがとうを」
ん・・・と
「どう表現すればいいかって考えて座礼したのに」
俺は 怒られてんの・・・かな
「土下座するとか一人の人間はイヤだとか」
「や、それはさ」
「もういいです」
やっと愛里が立ち上がった
「あっあっあっ」
よろけたから
「愛里」
あわてて愛里の腕つかんだ
「大丈夫です、正座なんかあんまりしないからちょっと」
「俺には土下座なんかすんな」
「土下座じゃなくて座礼！」
「俺にヒザつくな」
「だって」
「俺は愛里にそんなことされるよかさ」
愛里のこと抱きしめて
「愛里に好きでいてもらいてえ」
「あなたの、なんか、そういう言い方が少女マンガっていうか」
「え？ あ、や、これは心からのさ」
俺のこと上目遣いで見て フツて ちょっとイジワルそうに笑うのが 好きだけどさ
「だったら、あなたも、もう二度と私に土下座しないでください」
「や、それは、なんつうか、考えるよか身体が」

「条件反射？」

「ごめんなさいが溢れちゃうっつうか、なんつうか」

「私にはやるなって言って自分はやるの？」

「それは・・・」

「いいですけど、あなたの土下座、ガマガエルみたいでおもしろいから」

「ガ、ガマガエル？」

「明日の準備はしましたか？」

「今から、やる」

「提出する課題忘れないでくださいね」

「あ、おう」

「ショーさんへのプレゼントも」

「忘れねえ、ぜってえ忘れねえで持ってくる」

「そうですか、それじゃ」

え？

愛里が俺のこと トーンで押し出して ドア閉めて鍵閉めた

「愛里？」

なんか怒ってんのかな

「愛里」

なんだ？ なんか俺悪りいことしたんかな わかんねえけど

あとでLINEで なんかわかんねえけど 謝ろう

エレベーターに向かって

ピコン え？

『私はこの夏休み中』

愛里？

ピコン

『あなたを』

ピコン

『現場のおじさんたちに』

ピコン

『貸しました』

え・・・

ピコン

『貸したって あなたは物じゃないけど』

ピコン

『私の所有物でもないけど』

ピコン

『だから』

ピコン

『おかえりなさい』

愛里・・・

愛里の部屋の前に走って戻って
「愛里！」
俺は・・・
「ただいま！」
鍵が開く音 ドアが開いて
愛里が飛び出してきて
「おかえりなさい」
俺に抱きついた
「愛里」
愛里のこと抱きしめて
「ただいま」
愛里が俺の腕の中でコクンて 身体が震えてて
何度もコクンて
「愛里・・・ ありがとう」
愛里が顔を上げて 俺を見て 涙で濡れた目で 俺を見て
「帰ってきてくれて・・・ 嬉しい」
「そっか、俺が帰る場所は・・・」
愛里のこともっと強く抱きしめて
「ここだよ」
愛里が 子どもみてえに声あげて泣いて
「なんか・・・エエェン現場で働いてるあな・・・たはヒックかっこよくて」
俺は愛里の頭撫でて
「それはヒックそれで、本当によかったしヒックでも・・・なんかヒック」
泣きべそかいたまま 俺の顔見上げて
「淋しかったああ」
「そっか、ごめんな」
「そうじゃなくて、あなたは悪くなくて」
「愛里、ありがとな」
愛里は大きく首振って
「待っていてくれて、ありがとう」
「帰ってきてくれて・・・ ありがとう」
「愛里」
俺は 今 やっと帰ってきた 俺が 帰る場所
俺の場所は ここで 愛里で とうちゃんで かあちゃんで
ここがあるから 俺は
「ただいま」
そう言えんだよ
「愛里が戻してくれた」
「え？」
「フワッフワしてた俺の、夢の中でフワッフワしてた俺を」

「フワッフワって」
愛里がやっと少し笑った
「愛里が連れ戻してくれた」
「戻ってきてくれないと困ります」
愛里が俺を見上げながら
「あなたがいないと、息ができないから」
「そっか」
「はい」
「そっか」
「はい」
やっと やっと 気持ちがスッキリして
やっと
俺の夏休みは 終わった

Under the forest ダイチの物語 第二章

著 神原 涼

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
